

---

**ぎぶ！あんど！！ていく！！！！**

かるびーえーる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ぎぶ！あんどー！！ていく！！！！

### 【Nコード】

N5070C

### 【作者名】

かるびーえーる

### 【あらすじ】

与える者と与えられる者、対価で成り立つ狂気の世界。そんな世界で日々生きていく主人公と重い過去を背負った3人のヒロインが紡いでいく物語。基本ラブコメですがシリアスも多めです。

第1話『4444号室の漢!!村上耕司!!参上!!』(前書き)

ネタがそうとうキツイのばっかなので苦手な方は無理をせずに・・・  
読んでください

第1話『4444号室の漢!!村上耕司!!参上!!』

「……ここか……」

めんどくさいが、最初に自己紹介をさせていただこう。俺は村上耕司(むらかみこ)だ。(17)だ。

一人暮らしに憧れて上京してきたごく平凡な一般ぴーぽーだ。

好きな食べ物はカレー(あ、超激辛ね。甘口なんて論外だヨ)とキムチ(蜂蜜なんて入れんなよ)

嫌いな食べ物は甘いもの全般とあとエノキ(なんで?だってえ!? 噛みにくいんだよ!!)

趣味は……ぎやるげー……嘘だヨ……ごらあ!ソコ! 変な目で見ないで!!おねがい(泣)

まあ、ホントのこと言うと読書と散歩だ(根暗とか言うなヨしまいに泣いちゃうゾ僕)

……とまあ、自己紹介はこれぐらいにしといて話を最初に戻すゾ。

「……ここか……ここが高宮学園たかみや学生寮か……(汗)」

高宮学園学生寮とは字の通り高宮学園の学生寮なんだがここは上京する前にあんの糞ババ・お母様が俺の

ために手配してくれた寮なのだ。つまり、高宮学園が俺の高校生活の拠点となるのだが……

「……ずいぶんぼろっちい寮だな……大丈夫か?この寮……(汗)」

まさかAさん(本名は控えさせていただく)が建てたんじゃねーだろっな?

「うっむ……着いたのはいいが、どこいきゃあいいんだ?」

この辺の土地はさっぱりだからな・・・言つとくが田舎モンじゃねーゾ・・・

「とりあえず、中に入れてみるか・・・」

「あら・・・？あなた・・・」

「えっ・・・？」

後ろから女の人の声が聞こえた。振り返ってみると俺より背が高く、腰まで伸びた黒のロングヘアーで

赤いリボンをつけた20代から30代くらいの女の人に変なものを見るような目で俺を見ていた。そして

女の人はこう言った。

「・・・なんでこんな所でうろろ徘徊しているんですか？」

「・・・徘徊って・・・おいおい(汗)

「いやこの寮に入るのどーすればいいかな〜っと思って・・・(笑)」

「・・・変態さんですか？新手的・・・」

「違います！！なんでそうなるかな!？」

「・・・え？窓にぶら下がっているブラジャーをくくんくんぺろぺろするのがお目当てですか？

パンティーをくくんくんぺろするのがお目当てですか？それとも靴下？マイナーですねえ」

変態さんは

「違つって言つてんでしょー！があああ！！何！？その変態思考！

！キモツ！！」

なんなんだっ！！この女の人は何！？めちやくちや失礼だな！！オイ！！

そして、その女の人にはっこりと意味深な笑顔となり・・・

「うふふ・・・意外と怒りっぽいんですねえ・・・ロリータ耕司さんは・・・」

「ええっ！？今なんと!？」

「ロリータおぶチキン耕司?」

「いやっ！？そこじゃなくてさ！！しかもなんか嫌な語増えてる！！」

俺が気になったのは・・・

「Why!?!なぜ!?!僕の名前知ってんですか!?!」

すると、女の人は困ったような顔をし、そして・・・

「この学生寮の管理人をやっておりますたちばなちさと橘千里(20)と申します。

話はあなたの糞ババ・・・いえお母様

から聞いておりますよ。ロリータおぶチキンおぶマザコン耕司さんですね?これからよろしくおねがいます

。なにか分からないことがあったら、遠慮なくどしどし聞いてくださいね」

「また増えた!?!」

なんか・・・泣きたくなってきたヨ・・・僕・・・

「あの～僕の名前は村上耕司って言ってますけど・・・(泣)」

「そうですねそろそろ寮の中へ行きましょうか。ロリータおぶチキンおぶマザコン耕司さん」

「コノヒト、人の話全然聞いてないよ!!(泣)」

・・・

寮に入り俺が暮らす部屋に行く廊下の途中にて・・・

「ところで橘さん・・・聞きたいことがあるんですけど・・・いいですか?」

「『千里様』でいいですよ」

「・・・(汗)」

「なんなら『女王様』でも・・・」

うむ。ここは、軽くスルーしよう

「え〜っと・・・タイヘンですね学生寮の管理人さんは・・・」

「はいヘンタイですよ」

「・・・(汗)」







そう・・・それがこの物語のヒロインのうちのひとり上野夏美とい  
う少女と

俺、村上耕司との出会いの瞬間だった・・・

第1話『4444号室の漢!!村上耕司!!参上!!』(後書き)

ここまで読んでくださった方

ありがとうございますっ!!

感想をいただけるとありがたいです!!

これからも頑張ります!!

ありがとうございましたっ!!

第2話『考えたってしょうがない。だって世界はひとつだもん』（前書き）

どんどん加速していきます・・・

第2話『考えたってしょうがない。だって世界はひとつだもん』

やあ!!みんな!!僕ドラ もん。

・・・

ごみなさい・・・冗談デス・・・

僕、村上耕司(17)デス。一応主人公らしいので覚えておいてネ。  
エへ。

さあ、今僕はどんな状況かというと・・・

「初めまして!僕、村上耕司(17)だヨ!好きな食べ物は超激辛  
カレーちゃんとキムチちゃん!嫌いな食べ物は甘ちゃん全般とエノ  
キの糞やろウ・・・んでもって、趣味は・・・シコシコ・・・  
・・・

あゝ引かないでね・・・冗談だから・・・ほんとダヨ・・・ほんと  
は読書と散歩・・・

根暗だとか思わないでネ。まあ、ヨロシクネ」

よ~~~~し!!!決まった!!!第一印象あんど好感度UP大  
成功!!!我ながらこのテンションの高さはウザ過ぎるほどハイッ  
てやつだああああ!!!さあ・・・みんな・・・俺を崇め・・・  
し~~~~ん~~~~

・・・って・・・あれれれれ~~~~?

みなさ~~~~ん?ちよつと(汗)おう~~~~い・・・暗い  
ヨ~~~~?

・・・ええええ~~~~?ちよつw・・・待ってヨ~~~~

ええええ~~~~?しかも~~~~ナニ?コノクウキノオモサ・・・  
・・・

ちよつ・・・せっかくテンション上げてこの場を明るくしよーとし  
たのに~~~~

・・・これじゃあ、僕・・・おバカさんみたいじゃん・・・  
・・・おじさん泣いちゃうぞ・・・ホロリ・・・  
あ・・・泣いちゃった・・・  
・・・  
・・・  
そのとき・・・救世主が現れた・・・  
・・・

「いえ～～～い！！ヨロシクネ！！コーちゃん！！」

おおおお～～～（泣）神様ありがとう！！もう、あの糞ババ・  
いえ、お母様のへそくりを盗んだり、  
かりんとうに犬の糞とか混ぜたりしません～～～・・・許  
してちゃんまげ・・・

さあ、僕ちゃんに栄光の扉（？）を与えてくださった女神ちゃんは  
・・・だ～～～れだ！！

・・・っっておまえかいいいいいいいいいいいいいいいいいい  
いいいいいいいい！！

そう・・・そいつは見知った奴だった・・・

といつても、別に昔からの幼馴染だとか生き別れの妹だとか社長の  
愛人だとかそういうラブコメ的な

存在ではない。第1話でなぜか俺の部屋になるはずだった4444  
号室に裸で寝そべっていた幼女だ。

・・・体・・・柔らかそうだったナ・・・ぐへへ・・・

って！！違う違う！！ナニ考えてんだ俺は！！俺は真性のロリコン  
じゃないんだぞ！！

「初めましてだね！！コーちゃん！！私、つえのなつみ上野夏美！！よろしくね  
！！」

うむ。元気があるのは良きことかな良きことかな。

・・・今思ってたんだが・・・コーちゃんっていきなり馴れ馴れしく

ね？

まあ、別に良いけどさ・・・

容姿は髪型がツインテールで・・・ん？さくらんぼか？さくらんぼの髪留めをつけていて髪の色は

黄色だ・・・あと・・・ちびだな・・・超ドちび・・・まあ、かわいいといえはかわいいのだが・・・

・・・しか見えない・・・どう見ても小学生に

「・・・コーちゃん・・・今ものすごく失礼なこと考えてたでしょ？・・・」

「ソナナコトナイズ」

「なんで片言になってるの？・・・」

「さあ！！皆さん！！いつまでもだんまりきめてないで村上君にあいさつしていきなさい！！」

千里さんが切り出してくれた。

すると、夏美のすぐ隣に座っていた女の子が口を開いた・・・

「あ・・・あの・・・その・・・わた・・・わた・・・」

・・・？腸？

「わ・・・わ・・・わん・・・っわ・・・わた・・・ああ・・・たし・・・その・・・あの・・・」

あああん・・・あん・・・あ・・・あん・・・む・・・村田むらた・・・百ひゃく合りです・・・よ・・・よろしく・・・」

かあああ！！モジモジ！！

あー赤くなつてモジモジしてる・・・うわ~~~~かわいい~~~~  
極度の恥ずかしがり屋さんなんだな・・・

・・・しかし・・・

ハアハア・・・なんかその・・・AVのあえぎ声・・・みたいだな・・・  
・・・はあはあ・・・

ああなんか・・・その・・・かたくなってきた・・・ぐふえふえ・・・  
・・・  
・・・って超サイテーだな・・・俺・・・  
そしてぼくは自己嫌悪に陥った・・・  
容姿はそうだな・・・背格好とかは夏美と同じくらいだけど・・・  
なんかその・・・  
抱きしめたいっていう男の欲望を強く引き出すような・・・って！  
！ナニ考えてんだ・・・俺は・・・  
シヨートの髪型で色は栗色だな

「あははは~~~~そんな硬くならんでええよ！！あたしは高宮麗奈たかみやれいな！！よろしくなあ~~~~！！」

そして次に関西弁ねーちゃんが話しかけてきた。

・・・ん？高宮って・・・？

「うるさいですよ。姉さん。はあ・・・そのバカ姉の弟、高宮条たかみやじょう一郎です。よろしくお願いします。

耕司さん」

そして弟君もいた。

容姿は姉の麗奈さんは・・・まあ、美人だな・・・日本の美人さんってこういう人だな・・・

背もそこそこあるし・・・髪型は腰まで伸びたロングのヘアで黒色。

弟君の条一郎君は・・・まあフツーだな・・・男だからべつにいいよな・・・？言わなくて・・・

・・・ん？なんか条一郎君がくねくねしながら幸せそうな顔で僕ちゃんを見ている・・・

・・・ゾクリ

「アリス・ブランドー」

今度はハーフの女の子が口を開いた・・・  
ギラン！！

うわおお！！なんか睨まれちゃったヨ！！僕！！ナンカしたっけ僕  
！？

容姿は・・・なんかツンツンしてるけど美人だ。髪型は腰まで伸び  
ていて銀色でウェーブがかかっている。

うほ・・・胸でかいな・・・

「何考えてんのよ！！あんた！！この・・・！！変態野郎！！」  
ギラン！！

うえー！！こいつ！！こりちゃんか！？なぜ考えていることが分か  
る！？

「あなたのその汚らしいツラ見てたら考えていることなんてすぐ分  
かるわよ！！

この・・・すけこまし！！」  
ギラン！！

・・・すけこましは言い過ぎじゃね？(汗)

しかし・・・その・・・刺激的な目で見つめられると・・・いひゃ  
ひゃ・・・

ギラン！！

あ・・・また睨まれた・・・

「・・・相田<sup>あいだ</sup>ミント・・・」

・・・しゅん・・・

え、それだけ？

・・・なんと・・・いうか・・・とっつきにくい女の子だな・・・  
背は夏美や百合ちゃんと同じくらい。髪型はショートのカット  
で色は緑色。メガネ着用。

メガネっこ属性の方はご賞味あれ。・・・ナニ言ってんだ俺は・・・



「そして改めてご紹介しますね。私はこの学生寮の管理人をやっている……」  
『ハタチ』で現役大学生の橘千里です。よろしくお願いしますね」  
……千里さん……  
……心なしかハタチを強調しているように見えるが……気のせい  
いか？……

「いよう！！少年！！食ってるかい！！」

「ぴぎゃあああああああああ！！」

いきなり俺の顔の目の前におっさんの顔がぬうつと現れた！！

「俺様はこの寮のお兄さん！！もとい萌える！！料理人！！はじだみ原田見  
えはる栄春だっ！！よろしく！！」

うるせー声でけーよおっさん。

つーか、顔近いんだヨ。つば飛んでるじゃねーか！！きつたねー！！

うわっ……！！しかも……なんか……

イカ臭そう……おげえ……！！

「おいおい……若い子も喰っちゃてんじゃねーだろうなーコノやる

う（笑）」

いきなりナニを言い出すんだ……コノヒトは……

「それともオールマイティってか！？俺は

千里たん一筋だがな！！うはうはうはは……！！」  
たんとかつけるなキモい。

こうして、俺、村上耕司の受難の生活がはじまった……



第2話『考えたってしょうがない。だって世界はひとつだもん』(後書き)

連日暑い日が続きますね。

おにぎりがおいしいです。

僕は鮭と昆布が好きなんですけど・・・

皆さんは何が好きですか？

第3話『嫌なことは忘れちまおう。だってっぴいよっ。きっ』(前書き)

テンションアゲアゲデス・・・

第3話『嫌なことは忘れちまおう。だってつらいよっ、まっ』

「……………」

「……あれ……？……俺の目の前に……誰か……いる？」

「……………」

「……おい……誰……だよ……お前……」

「……………」

「……おい……返事……くらい……しろよな……」

「……………」

「……聞こえねえ……でも……なんか……こいつ……」

「知っている……」

「コー……ん」

「……おい……もつと大きな声で言ってくれ……」

「……そして……そいつは……俺の……」

「コージくん……」

「……………」

チュンチュンチュンチュン

「……朝か……あゝ頭がぼくとする……」

「あ……そうか……俺……引越したんだっけ……」

「……うゝむ……どうも俺は朝に弱いらしい……」

「……………」

そう……あいつとは……俺の夢の中で俺の名前を呼んでいたやつ

のことだ……

「……………」

はつきりとした実像は分からなかった……けど……

「……………」

あれが俺に対しての悲痛な叫び……だということは……なんと



ああ~~~~~!!?

「……ん~~~~」

「ごそごそ……」

「……俺の叫び声できやつ(奴)が起きた……」

「ふああああ……ん……?……あつ……!!コーちゃん  
!!くつも~~~~ん!!」

ぺらり(布団がめくれた音)

ポロリ(ナニかがみえちゃった音)

「こつ……コラー……!!き……!!きさまあ……!!  
!!」

その姿で堂々と起き上がるんじゃない!!は……恥をしれええ  
ええええええええい!!」

そつ……そいつは初日と全く変わらぬ姿で……!!

おおおおお……俺の!!俺の!!俺の隣でゲーグースリーピン  
グかましていやがったのだ!!

……胸……かわいいな……うひひひ……

……ってちげーちげー!!ソナナコト考えてる場合じゃあないっ  
!!

「て……てめえ!!な……なんで貴様がここにいるっ!!た……  
確かおめえの部屋、

下の階の203号室だっただろうが!!」

そつ……コイツは確か俺の部屋の真下だったよーな気がする……  
……なんで俺の部屋、4444号室なんだよ……(泣)……

いじめだ……

「し……しかも!!は……はだかです!!えええええ!!?どう  
なんだっ!?

お……!!パパはゆるさんぞおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおお!!答えなさい!!つーか!  
!答えろおおお!!好子~~~~~!?

「は……は~~~~私……好子じゃないヨ~~~~夏美だヨ









！（泣）

「……………」

「……………」

「……………（汗）」

「……………」

「……………」

「……………（汗）」

「村上君……………」

「耕司さん……………」

「……………ナンデスカ（泣）」

「……………おねがいですから豚箱行きは勘弁してくださいネ」

「……………（泣）」

Oh～No～俺の青春を返してくれ～～い……………かみさまん……………  
汚れちまった俺のじんせ～～い……………～～～～

「……………は……………はげしい運動だったんですネ……………」（百合）

かあああ！！

う……………うわあああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああああん！！！！（泣）

第3話『嫌なことは忘れちまおう。だってっぴいよっ。まっ』(後書き)

次回は学園編です。

どんどん変態さんが増えてきます

・・・

でもラブコメです。

**第4話 『みちやったらそこで試合終了』 (前書き)**

今更ですが感想と評価の方よろしくお願いします。  
なにか指摘をしてくださると嬉しいデス。

#### 第4話『みちやつたらそこで試合終了』

「ほらー！！あそこに見える建物が今日からコージが通うところやでえー！！」

「ほーほーほーほけきよつきよつ」

そうあそこに見える・・・そうアソコに・・・むわむわ・・・  
つて違う！！ナニ想像してんだ俺は！！

ナンカ最近の俺おかしいぞ！？脳内がピンク色に染まっているじゃねーか！！

そっち形のこと敏感になつてきているゾー？

いかんいかん・・・ちよつと深呼吸しよう・・・

すーはー・・・すーはー・・・すーはー・・・すーはあ・・・すーはあはあ

すーはあはあはあ・・・ハアハアハアハアハアハアハアハア・・・

おくさん・・・はあはあ

いかんあ~~~~ん！！余計興奮してきたっ！！

途中から変な吐息にかわつとる！！

しかもなんだよ！？おくさんつて！？ナニ考えてんだ！？俺は！！

・・・(汗)

いかんいかん・・・話かなり脱線したナ・・・

そう・・・あそこに見える建物とは今日から俺が通う学園・・・

高宮学園のことだ・・・さて、コノ学園について少し説明しておこう

(麗奈サンに簡単に聞いた話だが)

高宮学園とは都内から少し離れた位置に存在する学園でマンモス学園だ・・・

はあはあ・・・げふんげふん・・・

んでもつて、その学園の理事長を勤めている人がなんでも

麗奈サンと条一郎君の祖母にあたるらしい・・・以上！！！！

「意外とメルヘンチックな学園だな・・・俺こんなのを想像してたのに・・・」

「こんなの……って……どんなんを想像してたんや？」  
麗奈サンがいかにも興味津々とした顔で俺に聞いてくる……  
もわんもわん……(回想音)

『ちいいいつすつ!!』(先輩A)

『ちやあああすつ!!』(先輩B)

『こ……こんにちは……』(汗)『(気の弱いがりがり一年坊)

『びゃきやにしつとかあ!?(怒)おみゃーは!!』(怒怒)『(

先輩A)

『きよえがちいちよああああいい!!』(怒怒怒)『(先輩B)

『ひいいいいいいいいい……!!日本語しゃべってえ!!』

(気の弱いがりが……)(以下略)

『しえーの!!……ちいいいつすつ!!』(先輩A)

『ちやあああああああああすつ!!』(先輩B)

『う……うきやああああああん!!』(以下略)

「……」

「……という風な……って……あり?(汗)」

「……」

「え……つと……(汗)麗奈さ……ん?」

「……」

「お……うい?(汗)」

「……」

にっごり……

「……(汗)……ゴミンナサイ(汗)」

みなで談笑しながら歩いていくとすぐに高宮学園に到着した……

「へ〜．．．けつこう中は広いんだな．．．」

「うん！おつきいよ！ん〜と．．．確か．．．」

ネバーランドぐらいの大きさだつてちーちゃんが言つてたよ！！」

「それ！！でかすぎだろ！！オイ！！こら！！」

．．．ちなみに『ちーちゃん』とは夏美が千里さんと呼ぶときの愛称だ．．．

．．．たしかあのおっさん（原田見栄春）も時々そう呼んでたよな．

．

．．．きもっ！！ぞわわ．．．

「俺のおつきいけれどナ．．．」

「え？なにか言つた？コーちゃん？」

「ナンニモイツテナイヨ」

．．．だめだな．．．俺．．．（汗）

そして前方に怪しげなメガネをかけたアホ毛の男とやまんばみていなコギャル系の女が

なにやら言い争つていた．．．あの連中もココの生徒か．．．

なんか．．．やだな．．．

「おねがい！！僕ちゃんを．．．はあはあ．．．ぶ．．．ぶつてく  
だしゃあああ〜〜〜い！！！！」

「ひい！！な．．．なんなの！？こいつ！？」

「はあはあ．．．もうがまんできんんん〜！！！！はあはあ．  
．．．ね、君わかる？．．．」

僕もうがまんできんのだよ．．．はあはあ．．．最近たまつてちゃつ  
てんだよね〜〜〜．．．

いひ．．．いひひひひ．．．イひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひ  
ゃひゃ〜〜！！！！」

「な．．．ななに言つてんの！？こいつ！？き．．．きもちわるい  
！！！！」

「なにい！！きもちわるい．．．だとおおお！？これからせつかく



僕ちゃんが気持ちよくなるうと

しているところなのに……!!なにいつてるのかね!?きみいいいいいいいいいい!!

さあ!どこでもぺんぺんぱんぱんしたまえええええええええええええええええええええええ!!

なああああ~~~~に!!いやなら愛撫でもよいぞおおおお~~~~!!ほーら!!まつたけ!!

ぺろん(ナニかがでちゃった音)

「い……いやあああああ~~~~!!くるなああああ!!変態!!」

どげすつ!!(なにかが砕けた音)

「おびやつ!!」

ばたんきゅ~~~~

……

……(汗)

なんだ……(汗)あれは……?

「……なあ……夏美……」

「見たら負けだヨ。コーちゃん」

「……(汗)」

……驚いたナ……

俺のさらに上をゆく変態さんがいたとは……(汗)

……あんまうれしくねーナ……アレと同類かヨ……

俺……やだな……

そんなどーでもいいことを考えながら俺たちは校舎内に入っていくのだった……

……今回なんかあんま話すすんでねーな……



第4話 『みちやったらそこで試合終了』 (後書き)

・  
・  
・

今回は少し飛ばしすぎました・・・

次からは少し自粛します・・・

第5話『君はいつしか僕のフラグを立てたんだ』(前書き)

……止められません……コノヒト……

## 第5話 『君はいつしか僕のフラグを立てたんだ』

「・・・ヨロシクネ」

俺、村上耕司は教壇の前で見ず知らずのクラスメイト諸君に自己紹介を終えた。

・・・ヨロシクネって別にびゅーていがーるにヨロシクされちゃったわけじゃあねーゾ。

そんなうらやましいシーンあったらとびこみたいよ！！俺も！！（泣）

僕ちゃんの華麗なる自己紹介を聞きたいのなら第1話が第2話あたりを見てくれたまえ我が愛すべき読者諸君よ。さて、俺の自己紹介を聞き終えたクラスメイトの反応は・・・やっぱりね！！（笑）

「・・・じゃあ、あのツインテールの子の隣の席に座りなさい」

波平みてーな髪型をした先生は俺に座席を指示した。・・・

・・・名前忘れたから今度から波平先生と呼ぼう。うん。

「はい、わかりました。波平先生」

「だ・・・誰が波平先生だっ！！君は私をバカにしとるのかね！？いからさっさと席につかんかっ！！」

・・・おこられちった・・・

・・・ふむできるだけ多くの奴と話しかけといたほうが友達がいっぱいできるだろう・・・

では手始めに俺の席のまわりの奴からRPGのごとく話しかけてみよう。よしまずは左隣の村人Aからだ。

「チャンピオンロードはどこにあるかおしえてください」

「・・・いきなり何を言ってるの？コーちゃん・・・」

村人Aには伝わらなかつたか・・・やれやれ・・・ん？『コーちゃん』？・・・

つて!!またお前かい!!最近出現率たけーな!!コイツ!!モン  
スーボールでゲットでちゅ〜かつ!?

「・・・コーちゃん?なんか私に向かつて投げようとしていない?  
」  
「捕まえてLvをあげる」

「・・・なんか今のでオチが見えちゃったよ・・・私・・・」  
「・・・む?それは面白くないな・・・そんなキャラだったか?夏美・  
・・・やめちゃおう。」

「あ、耕司さん。一緒のクラスだったんですね。僕うれしいです。  
ヨロシクお願いします」

前の席には条一郎君がいた。・・・ところで君・・・その・・・な  
んていうかな・・・

僕の目を見つめて幸せそうなフェイスするのやめてくれないかな?  
周りが変な目で見るから・・・(汗)

「ところで耕司さん。今、彼女いますか?」

「・・・イマセンヨ・・・なんでいきなりソナコトを聞くかな?  
君は?(汗)」

「・・・そうですか・・・  
ふふ・・・」にやあ〜

「・・・ぞ・・・ぞくり・・・(汗)  
そしてお次は右隣を見た・・・げえっ!!あ・・・アリス!?

「視姦するなっ!!この・・・けだものっ!!ゲテモノ!!(怒)」  
「な・・・なんだよ!!その言い草!!ひどすぎない!?なんかした  
かあ!?僕ちゃん!?

「・・・しまいに泣くぞお!!こらあああ!!(泣)  
「もう泣いてるじゃん。コーちゃん」

「う・・・うるさいっ!!(泣)人の心の中にまでツッコミいれる  
な!!エスパー伊 か!!おめーは!!」

「えへへ〜・・・それほどもお〜・・・」

「あの・・・夏美さん?・・・べつにほめてねーんですけど・・・  
ああ〜目がイツチャツてるよ・・・コイツ・・・」

とりあえず、ウザすぎるので放って置いておこう。放置プレイってやつ？

「やあ！柔らかそうな少年！！・・・はあはあはあ・・・」

・・・この声は俺の後ろから聞こえてくるものだ・・・つまり、真後ろの座席からだろう・・・

・・・なんでコイツ息荒いの？・・・っーか、その『柔らかそうな』部分はいらねーだろ！！

なんかきしょくわりーきしょくわりーって叫ぶんだヨ！！俺のハートがよお！！

「お前は誰ですか？」

「うふふふ・・・わたくしの名は三上英「お前は誰ですか？」・・・

「だから三上英「お前は誰ですか？」・・・」

「だから三「お前は誰ですか？」・・・」

「・・・」

・・・よしよし、コレでコイツは二度と喋りかけてこんだろう・・・そう・・・正確には俺はコイツを知っている。

今朝、学園の校舎前で化け物女となにやら言い争っていたあほ毛のメガネマンだ・・・

俺はその一部始終を見てしまった・・・だから！！わかる！！

こいつは・・・こいつは危険物だ！！・・・と・・・（詳しくは第4話を見てくれたまへ）

・・・あ・・・そーいえば夏美が見たら負けとかなんとか言ってたっけ・・・

・・・みちゃったよ一部始終・・・僕・・・ナニに負けるんだろう・・・俺・・・

まさか・・・コイツに押し負けるとか・・・？・・・い・・・いやあああああああ~~~~！！

ナニ考えてんだあああああ~~~~!?俺!?つ・・・ついに腐ってき  
たか!?俺の脳内!!

・・・まあ・・・今ので二度としゃべりかけてくることはないだろ  
う・・・

好感度だだ下がりがりだかな・・・あばよ!!メガネマン!!

「・・・」

ほくらね(^^)やったね!!

「・・・ぐふえふえふえふえ・・・」

・・・あり?(^^)

「いひひひひひ・・・うふふふ・・・」

・・・なんで君そんなにうれしそうなのかな?というか、う  
わーきもいよw?(^^)

「いいね〜いいね〜いいね〜君はよおおおく僕の好みを理解して  
いるよおお〜・・・」

・・・していないよ、そんなの。というか、理解したくないよそん  
な好み。(^^)

「はあはあ・・・きみい・・・はあはあ・・・これはナニプレイか  
な?

教えてくれると・・・その・・・ぐふふ・・・硬くなるというか・・・

・えへへ・・・(笑)

・・・(^^)

・・・(^^)

・・・(^^)

こいつ・・・これ・・・

逆効果だ~~~~~

~~~~~!!!!!!(泣)

「よつうし!!僕は決めたよ!!今日から君は僕の心の親友・・・  
いや、切っても切り離せない

粘着テープのような関係になることを決めたヨおおおおおおお  
おおおおおおお!!!!!!!!







第5話『君はいつしか僕のフラグを立てたんだ』（後書き）

・・・

ゴメンナサイです

第6話『若い頃は思いつきり遊んでおいた方がよい』(前書き)

僕は弁等派です・・・

## 第6話 『若い頃は思いつきり遊んでおいた方がよい』

「・・・ふい～～～～・・・ようやく解放された・・・」  
初日からいきなり勉強という名の拷問に耐えてようやく昼休みとなつた。

・・・まあ、耐えるも何も先公の授業なんざ聞かずにずうっと折り鶴作つてたがな・・・（ヒマだから）

おかげで一万羽もつくっちゃったヨ僕。すごくね？エッヘン。作っている途中で右隣のアリスさんから

「・・・ああ、きもいわ・・・」とか言われたけどね。さすがに傷ついただけ。

・・・ぐぎゆるるる～～～～・・・どうでもいいが腹へったな・・・

「さーメシメシ！！今日は学食だ～～～～い！！」

・・・と・・・

半笑いでメガネマンが俺に近づいてきやがりました。腰をクネらせるな。きもいわー（^^）

「AHA～～～N！！耕司きゅん！！喰いにいこうヨー！！」

・・・ナニを喰う気だ・・・オメーは・・・というか『きゅん』とかつけるな。きしよいわー（^^）

「・・・」

・・・シカトシカト・・・

「・・・もう～～～～き・・・い・・・て・・・る・・・の・・・？・・・う・・・じ・・・きゅ・・・ん？  
聞いてくれなきゃ、英男こまっちんぐ。てへ」

・・・英男とは俺の目の前に沸いて出てきたコノ、変態かつホモ野

郎こと

三上英男のことだ・・・『英男こまっちんぐ』とか言うな。恋する

乙女かオメーは。



この学園の学食はちょっと変わっている。まあ、食券がねーという  
のもそのひとつだが  
それよりももっとびっくらこんなのは・・・めにゅ〜が存在せん  
のだ!!ここには!!

じゃあ食堂でもなんでもねーじゃんソコ・・・だって?ち、ち、ち、  
甘いな!!

ちんすこうよりも甘ちゃんだぞぉ〜!!君たち!!・・・びみ  
よ〜とか思うなよ・・・

そう・・・自分が食べたいものを言えばすぐ作ってくれるのだ〜  
〜!!すごくない!?

そして、俺は結局あれから野郎2匹(H・M・君とZ・T・君)に  
捕まってしまい

昼食を共にすることになった・・・なんの因果でこんな目に・・・  
(泣)

食堂は人であふれ返っている・・・  
わいわいがやがやざわざわやんやんやはあはあもみもみびゅっび  
ゅっ

「・・・気になる擬音が多々あったが・・・さて・・・ナニ食うか  
な?」

「H A H A H A H A!!耕司きゅん!!めにゅ〜はよりどりみど  
りだゾ!!はあはあ・・・

あの子はうまさうだな〜はあはあ・・・あっちの子はおかずに  
なりそうだなあ〜くふえふえ・・・」

「ナニを言っているんだ・・・君は・・・」  
公の場でニヤニヤするな!!変質者みてーじゃねーか!!

「耕司さん。早く決めないと昼休み終わっちゃいますよ?」  
条一郎君が焦らす・・・うお!!もう15分しかねーじゃねーかっ

!!やばい!!やばい!!

「あの席とつときますから早く決めて来てくださいね」

・・・優しくいい子だな・・・糸一郎君・・・その性的嗜好に問題がなければなほよかったのに・・・

「・・・よし！！僕ちゃんの大好きな激辛カレー！！君に決めたい！！」

よし！！そうと決まればカウンターの前に立っている食堂のばあさんに言おう！！

・・・このばあさんさつきからぶるぶるびくびくシテイルゾ・・・だいじょーぶか？・・・(汗)

「激辛カレーひとつお願い」

「・・・」

・・・おいおい何の反応も示さねーゾ。このばあさん。もういつちよ言ってみるか・・・

「おおお~~~~い！！激辛カレーひとつお願い！！」

「・・・」

くそ~~~~なんかむかつくぜえ~~~~コノばあさん・・・もしかしてこっくり逝っちゃってンじゃ

ねーだろつなこのばあさん！！おいおい、勘弁してくれよお！！マジで！！

今度は絶対聞こえるようにはばあの耳元で叫んでやる！！ちくしょ

おおお！！

「おおおうつうつい！！激辛カレー！！ひとつ！！」

「・・・ぐ~~~~」

あ！！今まで寝てたな！？クソばあ！！そう考えると余計腹が立つてきた！！

「だから激辛カレーだつてさつきから言っただろうつがよおおおおおお！！」

「・・・あ？過激なカレー？ぐふえふえ・・・まだ、あんたにははやいじよ・・・そ・・・そんなに・・・」



わしゃの体をね・・・狙ってるんかいの・・・？・・・ぽ・・・な  
んじゃか・・・恥ずかしいのう・・・  
・・・でもあんた男前じゃけんねえ・・・ぽ・・・そ・・・そん  
なに言うなら・・・ぽ・・・  
や・・・優しくするんじゃ・・・ゾ？・・・ぽ・・・痛く・・・す  
る・・・んじゃやいぞ・・・ぽ・・・  
ああ・・・わしゃもあんたみてーな頃はよく遊んだのう・・・武の  
時は激しかったのう・・・ぽ・・・  
「な・・・何の話をしているっ！！激辛カレー！！だっ！！げきか  
ら！！誰がオメーみてなばあはあの体なんぞ狙うか！！いきなり食欲  
失せるようなこというなっ！！クソばあがあああ！！」  
「な・・・なんじゃとおおおお！？誰がばあじゃっ！！わしゃ  
あ、まだ  
きやぴきやぴちゅぴちゅぴの花の18じゃぞおおおお！！こんの  
クソがきやああああ~~~~！！！！」  
「そこだけはしっかり聞こえてんのかよ！！しかも一発ではれる嘘  
をつくんじゃあない！！くそばあ！！」  
こうして俺、村上耕司対食堂のばあはの決戦が始まった！！！！  
・・・あれ？・・・なんか忘れてるような気がするが・・・  
まあ、いつか・・・

・・・きんこんか〜んこん・・・  
・・・きんこんか〜んこん・・・  
・・・きんこんか〜んこん・・・  
・・・授業開始のベルが鳴っている・・・  
・・・こうして俺は初日から昼メシと先生の好感を失うのであった・・・



第6話『若い頃は思いつきり遊んでおいた方がよい』(後書き)

頑張ります

色々( ) ^ ^ ( )

第7話『寝る子はよく育つものだ』（前書き）

夏美の一人称を「私」から「ボク」に変えてみました・

## 第7話『寝る子はよく育つものだ』

PM11時 学生寮 4444号室

良い子ちゃんとはとくに夢の中でメラリンコックしている時間帯だ。ふう……今日は特に色々なことがあったな……もう、疲れちつたヨ僕……

朝からいきなり千里さんと百合ちゃんにロリコン変質者と勘違いされるわ、

初日の学園での自己紹介で見事にすべるわ、その学園で変質者とお友達……もといおホモ達にされるわ、

学食でババアと言いつ争いになって、昼メシとティーチャーの信頼失うわでロクなことがなかったな……

……その後にも色々あった……（もう詳しく語るつもりはないが……）

あその後、夏美の機嫌を直すため（なじえ夏美の機嫌が悪くなったかは第6話を見てくれたまえ……）

俺はどら焼き（10個）をえさにして謝った。案の定、俺の読みどおりあの単純バカは俺を許した……だがっ！！調子に乗ってあのバカは……あと、たこばふえ5個とカフェラッテ10杯で手を打つよ……」

とかほざきおった。殴りたくなつた。コイツが男だったら腹にストリート決めてたろうな俺。そのせいで

諭吉さんが数枚旅立って行くのだった……そして、夕食の時間。

この寮は一階のリビングで全員そろって夕食をとることになっている。（なんでも千里さんが決めたことらしい。コノヒトには逆らえない。というか逆らったらあとが怖い。笑顔が）その夕食はまだでうまかった！！ああ、そこまではなんの問題もなかった……

千里さんがこのメシ作ったのか……ちよーうめーなあ……  
とふと俺がそんな言葉を漏らすと……

「ナニを言ってるんだい!? コーちゃん!! このメシは僕ちゃんが  
君のために……いやみんなのために愛情

を込めて丹精に作ったのだヨ!!!」……まぢで? ……そーいえ  
ば、この原田のおっさんが前に自分のことを『萌える料理人』とか  
なんとか言ってたな……きもかったから聞き流していたが。ぱく  
りんこ。うめーな……このハンバーグ……「そうそう!!! 今、  
ちよーうどコーちゃんが食べているハンバーグなんか僕ちゃんのこの  
年季の入ったこの手でこー……にゅっ!!! にゅっ!!! ……とに  
ぎって汗水鼻水愛液たらしながら一生懸命作ったんだヨ……うふ  
ふ……」「げぼああ!!!」気分悪くなって内容物をついぶちまけ  
てしまいました……ちよーうど、僕の席の向かい側にいた人物とは  
……「……(怒)」「わーい、アリスさんでした」(泣)僕ちゃん  
の内容物をまともにかかったアリスさんはチワワのごとくふるふる  
びくびくされていました

……もちろんチワワのように怯えていたわけではなく……ポ  
っこぼこにされました(泣)……

そして、夜9時。僕はお風呂に向かいます。この寮の一階には風呂  
場があり、男女交代制で入っています(まあ民宿みたいなもんだ)  
僕は勘違いして時間帯を間違えました。「はじめてーのチユウ」  
と何も知らずに

キテ ツのソングを歌いながら陽気に風呂場に入りました……そこ  
にいたのは……わーい!!! アリスさんでした(泣) もちろんボコ  
ちゃんになりました。相手が悪かったようです……これが夏美ち  
やんだったら

「ちよーうどよかったヨ!!! コーちゃん一緒にいろっ!!!」とか言  
いそうなのに……げへへ……

アリスって脱いだらすごいんだな……うっ!!! 鼻血がっ!!!  
……どびゅっ!!!



「さーこれは、どういうことか説明してくれるかな？な・つ・み・  
ど・の？」  
にっこり

「こ・・・コーちゃん・・・な・・・なんか・・・こ・・・コワイ  
ヨ・・・？」

「やかましい！！公子お！！ナニ自然に俺と一緒にスリープしよう  
としてんだあああああああああ！！？」

「に・・・にゃあああ~~~~・・・ボク、公子じゃなくて夏美なん  
ですけど・・・？（汗）」

「うるさい！！うるさい！！質問を質問で返すな！！バカ！！今質  
問しているのはこっちだ！！バカ！！

なんでまた俺の布団で寝ようとしたんだ！？バカ！！バカ！！バカ  
！！！！」

「ひ・・・ひどい・・・バカバカ言いすぎだよ〜コーちゃん・・・  
ぐす・・・」

・・・（汗）ちょっと・・・言い過ぎたか・・・なんかいじめてる  
みたいで嫌だな・・・（汗）

・・・優しく言ってみるか・・・今は俺に非があつたな・・・  
「ゴメンネ。お嬢さん。ひとつ聞きたいことがあるんだけど、なん  
でボクのお布団に寝ようとしたんだい？」

うう！自分で言つてて寒気してきたヨ・・・。

「・・・うう（泣）・・・王子様みたいな言葉使うコーちゃんきも  
い・・・」

「てめー・・・しばくぞ？」

「ひい！！だ・・・だつてえ・・・なんか寝付けなかつたんだもん。  
・・・」

「で・・・？僕ちゃんの寝床に侵入してきたわけか」（笑）」

「うんっ！！！！（笑）」



「……」

そんな悪い子にはぐぐ 攻撃だ~~~~え~~~~い!!!

「じゃあああああ!?!?ゴメンナサイ!!!ごめんなさいいいい~~~~

~~~~~!!!」

ぐ~~~~ぐ~~~~ぐ~~~~ぐ~~~~ぐ~~~~ぐ~~~~ぐ~~~~ぐ~~~~ぐ~~~~

~~~~~

「コーちゃん!!!お願いっ!!!あのね~~~~!!!その~~~~!!!」  
うるうるうるうる

な~~~~なんだ~~~~?その~~~~小動物みてーな瞳は~~~~?

うう~~~~そ~~~~そんな瞳で見つめられるともうことわるにこと  
われねーじゃんかよおお~~~~

「な~~~~なんだよ~~~~(汗)」

「ボクが眠たくなるまで~~~~ご本~~~~読んで欲しいの~~~~」

「~~~~(汗)~~~~てめーはチャイルドか~~~~」

お前~~~~一応高校生なんだよな~~~~?

「あああ~~~~!!!コーちゃんが子供扱いしたああ~~~~!!!

!ひどい~~~~!!! (泣)」

「~~~~(汗)わーったよ~~~~どれ貸してみな~~~~本~~~~」

「えへへへ~~~~!!!」

つたく~~~~そんなにうれしいのか?~~~~こんな千里さんあた  
りに読んでもらったほうがいいんじゃないのか?~~~~あの人こう  
いうの慣れてそうだし~~~~しまった~~~~人妻じゃなかったな~~~~  
あの人~~~~

「んじゃあ~~~~まずはドストエフスキー作『罪と罰』からね!!!」

「待てコラ」

~~~~ナニ?コイツ?新手の嫌がらせか?これは?

「えー?何ー?コーちゃん?早く読んでよー」



「コーちゃん、コーちゃんって家族何人いるの？」

「・・・なんでそんなどーでもいい事を聞いてくるんだろっな・・・  
コイツは・・・」

「あゝ一番上の兄貴だろっ・・・んで次に姉貴だろっ・・・んでもって、  
義妹がいるゾ」

「え・・・？両親は・・・？」

「いるヨ。これでもかっ！！ていうくらいに元気だな」

「そう・・・いいいな・・・」

「・・・？じゃあ俺からもひとつ気になることがあるんだがいいか・・・？」

「・・・容姿のこと・・・？・・・訴えるよ・・・」

「待て待て！！まだ何も言っていないだろうがっ！！というか！！それ、こわいなっ！！」

「なんか、コイツ急に敏感になったな！！一瞬恐ろしさで寒気したよ！！」

「俺が聞きたいことは・・・ずっと気になってたんだが・・・その髪留め・・・さくらんぼだよ・・・？」

「どこでそんなん売ってるんだ？」

「このこと？んーんー。違うよ。これ、さくらんぼじゃないよ。

アメリカンチェリーだよ」

「ほとんどいつしょだろうがっ！！」

「・・・これね・・・お父さんから貰った・・・とっても大事なもののなの・・・」

「・・・」

「しまった・・・触れてはいけない話題だったか・・・形見とかそういうものだったのか・・・」

「・・・すまん・・・」

「まあお父さんがハワイ旅行で帰ってきたときに面白いもの見つけたから買って買ってきてくれたの！！」

「あははは。ホントセンス悪いよね」

「形見じゃねーのかよっ！ー！！」  
心配してソッしたっ！ー！！

「あのね．．．？コーちゃん．．．ひとつ．．．聞いて．．．いいかな．．．？」

「．．．なんだ？夏美の奴改まって．．．遠慮せずに聞きゃーいいのに．．．」

「．．．なんだ．．．？」

「．．．」

「．．．どうした．．．？」

「．．．」

「．．．なんだ？全然反応しなくなったぞ．．．どうしたんだ？一体．．．」

「．．．漏れちゃいそうなら早くトイレ行ってこいよ．．．」

「ち．．．違うよ！？別にトイレに行きたいわけじゃないよ！ー！コ

ーちゃんこれでもボク女の子だよ！！？」

「普通女の子にソッナコト聞く！？デリカシーなさすぎっ！ー！」

「．．．だったらなんなんだよ．．．黙ってちゃあわからんだろ．．．」

「．．．」

「．．．」

「．．．」

俺の部屋がまるで葬式のように静まりかえる．．．うわーやだよー

コノ空気．．．

「．．．」

「．．．」

すると夏美はなにか意を決したようにその重い口を開いた．．．

「あ．．．あのね！！あのね！！ボクはコーちゃんのこと．．．！！

「ローちゃんのことか・・・!!」

第7話『寝る子はよく育つものだ』（後書き）

コノ夏は昼間はクーラーがないと生きていけません……  
みなさん熱中症には十分注意しましょう。

第8話『ペリーペリーワンダフルキングダム』(前書き)

ロングナイト・・・

## 第8話『ベリーベリーワンダフルキングダム』

「あ．．．あのね！！あのね！！ボクはコーちゃんのこと．．．！  
！コーちゃんのこと．．．！！」  
「．．．コーちゃんのこと！！コーちゃんのことこれから『お兄ちゃん』って呼んでいいかなっ！？」  
「．．．．．ハイ？なにを言っているのかな？コノ子は．．．．．」

「やだ」

「即答っ！？」

「ノリで言っただけだ」

「．．．．．本気で怒るよ？コーちゃん．．．」

「．．．．．あいむそーりー．．．ひげそーりー．．．」

「．．．今までは本気で怒ってなかったのか．．．マジですか．．．」

「．．．．．なんでいきなりそんなことを？」

「．．．．．だって．．．ボク．．．さっきのコーちゃんの家族のお話聞いてうらやましいな．．．って思って．．．」

「？お前さん、さっき親父いるとか言っただけ？」

「．．．．．ボク一人っ子なの．．．それにパパはいるけど．．．ママ

は．．．．．いないの．．．」

「．．．．．」

「．．．．．」

「．．．．．そう．．．だったのか．．．」

「．．．．．とてもじゃないがない理由なんか聞けなかった．．．」

「．．．．．」

「．．．．．それに．．．パパはボクを親戚のおばあちゃんに預けてい

つもお仕事で海外に出かけてたし．．．」

「．．．．．おばあちゃんしかお話相手いなかったし．．．．．ボクね．．．」

「．．．この寮に来るまで違う学校に通ってたんだけどね．．．えへへ．．．」







・・・あれから夏美は一時間以上泣き続けた・・・まあ、これでコイツもちよつとは気が楽になったかな？

「・・・ほんとうにありがとね・・・コーちゃん・・・」

「まったく・・・ありがたく思いたまえよ？マドモアゼル？」

「・・・コーちゃんにお礼を言ったボクがバカだったよ・・・」

「・・・ばかやろう・・・めっちゃ嬉しいに決まってるだろーがおお・・・でもそれをここで口にすると

なんかコイツに負けたを認めためてーでなんかやだからあえて言わないことにする・・・」

「・・・ねえ・・・コーちゃん・・・」

「・・・んん？どーした？どら焼きならもーねーゾ・・・」

「違うよっ！！ほんとっ！！デリカシーの『デ』の字もないね！！

コーちゃんはっ！！」

「だったら・・・何なんだヨ・・・ふあああ・・・そろそろ眠たくなってきたゾ・・・俺・・・」

部屋の時計を見ると、時計の針は夜中の1時前を指していた・・・

「あのね・・・その・・・」

もじもじもじもじもじもじもじもじもじ

・・・めっちゃもじもじしてる・・・あいつ腰の振り、すげーはええな・・・はあはあ・・・

いや別に変な意味でイッタワケジャアナイヨ(汗)。そこんとこ、よろしゅうお願いします・・・(汗)

「・・・夏美・・・1回尻文字やってみてくれ・・・」

「・・・」

「ごみんなちゃい・・・冗談です・・・」

すごい目で見られた・・・おそろしやおそろしや・・・

「コーちゃん・・・さっきのこと・・・覚えてる？」

「さっきのことって・・・ああ、お前が泣いたことか・・・

ああ！！心配すんなヨ！！

撮っておいたヨ！！お前の泣き顔スナップ写真！！もち！！ビデオ

もなっ!! やったね!!」

「ウソ!! やだっ!! やめてっ!! 恥ずかしいヨ!! いやあ!!」  
かああああ~~~~~!!!!!!

おーおー慌ててる慌ててる・・・

・・・こうしてコノバカを見ているのも・・・ああ・・・快感・・・  
はあはあ・・・

って!! これじゃあ俺ただの変態じゃねえかつ!!!! いかんいかん  
!!!!

「・・・いちいち俺の冗談を真に受けるな・・・バカ・・・」

「・・・え?・・・そーなの?・・・よかつた・・・」

俺もそこまでやるほど悪魔じゃあない・・・

「もし、それが本当だったらボク警察署に飛び込んだヨ・・・

」

・・・やらなくてよかつた・・・

「それで?聞きたいことってなんだ?」

「えつとね・・・えーつと・・・」

「・・・長くなりそうなら明日でもいいか?おじさん今日は疲れて  
眠くて眠くてヨ・・・」

「だ・・・だめっ!!!すぐ終わるから今日言わせて!!!」

「・・・だつたらさつさと見えよ・・・」

は?なんなんだ?一体?頼むから早くしてくれよ・・・

「その・・・さつき言ってたんだけど・・・コーちゃんのことを『お兄  
ちゃん』って呼んでもいいかな?・・・」

「う・・・」

あ・・・そういえば・・・しかしなんというか・・・その・・・

「コーちゃん?」

「ううう・・・」

夏美が俺の顔に近づいてくる・・・ぐ・・・近い・・・なんかいい

においがするぞ・・・  
トリートメントのにおいか・・・？あ・・・このにおい・・・今朝  
かいだにおいだ・・・  
くんくん・・・女の子のにおり・・・って！！いかんいかん！  
！ナニ考えとんだ！！ミィは！！  
「コーちゃん・・・」  
「~~~~~！！！！！！」  
ああああ~~~~~！！！！！！もつどうにでもなれっ！！ちちん  
ぷ ぷ ~~~~~！！！！！！  
「・・・わかったよ・・・もう好きなように呼んでくれ」  
ああああ~~~~~！！！！！！言っちゃったよ！！俺！！チヨ  
はずかちい~~~~~！！！！  
「！！！！・・・こ・・・コーちゃん！！！！ありがとう！！！！」  
「・・・おい・・・変わってねーゾ・・・呼び方・・・」  
「あつ！！えつと・・・その・・・！！  
夏美は赤くなりながら上目づかいで俺に・・・  
「お・・・お兄ちゃん・・・」  
「・・・ぶっ！！」  
ばた〜んきゅ〜  
「お・・・お兄ちゃん！？どうしたのっ！？お兄ちゃん！？しっか  
りして！！お兄ちゃん！！  
・・・  
サイコーデス・・・  
・・・もういっぱいばいばいだよ・・・  
俺はそのまま夢の世界に旅立つのであった・・・

後日、寮のみんなに変な目で見られたのは言うまでもない・・・

・ ・ ・ 夏美には笑顔がよく似合う ・ ・ ・  
夏美の笑顔がもっと見たい ・ ・ ・ そう ・ ・ ・ これからも『お兄ちゃ  
ん』として ・ ・ ・  
夏美にはずっと笑顔でいてほしい ・ ・ ・ そう ・ ・ ・ ずっと ・ ・ ・ な ・  
・ ・

第8話『ペリーペリーワンダフルキングダム』（後書き）

・  
・  
・

次回も頑張ります（^^）

第9話『一部の年上のお姉さんには注意した方がよい』（前書き）

千里さんの大学が舞台デス・・・



## 第9話『一部の年上のお姉さんには注意した方がよい』

・・・休日の朝、俺が寮のリビングでどっしり居座っていると原田のおっさんが・・・

「コーちゃん！この僕ちゃんの愛妻弁当をちーちゃんに届けてくれないかな？」

とかなんとか言ってきた。ナニが愛妻弁当だ、気持ち悪い・・・

「いや、ちーちゃん朝、弁当持って行くの忘れちゃったみたいでさ。お・ね・が・い・ちゅっ（はあと）」

「なめんな、誰が届けるか。カマやろっ」

・・・というか、そのハートフルエプロンきもすぎ・・・おぞましいわっ！！わき毛出とるし・・・

「そう？それは、残念・・・疲れているのカナ？んじゃあ、僕ちゃんがコーちゃんの色んな所をマッサージしてあげるね。さあおいでおいで・・・」

わきわきわきわきわき・・・原田のおっさんは手でジェスチャーをしている・・・

「イッテキマス」

・・・

前にも言ったかもしれないが千里さんは寮の管理人でなおかつ某大学に通っている。

今俺は原田のおっさんにもらった大学への行き道を示した地図を見ながら千里さんの大学に向かっている

「・・・ここか・・・」

千里さんの通う大学は俺たちが通っている高校に比較的近い。・・・でかいな・・・

・・・変な想像してんじゃねーゾ・・・大学がでかい・・・つーことだかな・・・

しかし、肝心の千里さんはどこにいるか分からない・・・きよるきよるきよるきよるきよる・・・

「・・・ナニをしているんだね？・・・君は・・・」

俺が門の前できよるきよるきよるしていると警備員の人俺に声をかけてきた・・・

「いや〜その・・・」

「怪しいやつだな・・・もしかして最近この近辺で多発している変質者かね？君は」

「ち・・・違いますよ！！そ・・・そんなに不審な動きしていませんか！？僕！？」

「・・・そうか・・・いやなに最近この大学のセキュリティが厳しくなってるね。そうそう、この間なんか

変質者が出てね・・・高校生ぐらいだったかな？・・・女性用の下着を身につけながらあほ毛のメガネの男が『わたくしは神だっ！！

崇めよっ！！』とかなんとか大声で何度も叫びながらコノ門を通って中に入ろうとしてね・・・何人かで必死に取り押さえたんだ・・・

そのせいもあってますます大学のセキュリティが厳しくなったんだ・・・いや、疑って悪かったね・・・」

「・・・（汗）」

「・・・すみません・・・その男、僕の知り合いさんかもしれませんです。ハイ・・・

「だからいくら君が不審者でなくても簡単にはここは通せないなあ・・・」

「そ・・・そんなあ・・・じゃあこの・・・千里さんの弁当どうすれば・・・」

しゅん・・・しかたない・・・帰るしかない・・・

「キ・・・キミ・・・今『千里さん』と言ったね？・・・まさか・・・あの・・・」

キミが言っているのはあの『橘千里』っていう・・・学生の・・・  
ことかい？・・・」

「そ・・・そうですが・・・なにか？」

「お通りくださいおぼっちゃま」

「・・・（汗）」

こうして、ようやく俺は大学に入ることができた・・・

しかし・・・あの警備員・・・顔青ざめていたな・・・

この大学でナニをやらかしたんだ・・・千里さん・・・（汗）

「・・・」

あれから俺は学生さんに千里さんがどこにいるか手当たりしだいに  
聞いてまわった・・・

・・・千里さんの名前が出た途端、みんななんかビクついていたな・・・

中には『ひいひい〜おたすけ〜！！』とか『うひゃああ！！』  
ナンマイダ〜ブ！！ナンマイダ〜ブ！！』

とか『ああん（はあと）お姉さまあん！！もつと私をぶってください  
あい（はあと）』とか

『はあはあはあはあ・・・ねえ・・・千里様今日は何色が知っているか  
な？・・・キミ・・・はあはあはう』とか

言つてた奴もいたしな・・・後半の奴あぶねえな・・・

・・・（汗）本当にナニをしたんだろう？・・・千里さん・・・  
気になる・・・（汗）

・・・色々な意味で有名人であることはわかった・・・  
なんかかんやでとりあえず千里さんがいそうな場所は見つかったの  
だが・・・

「・・・『BLの会』？・・・『会員募集中！！』・・・」

その部屋のドアに貼り付いているポスターにはそう書いてあった・・・

・・・どうやら『BLの会』とはサークル名のようだ・・・

「千里さんがここに・・・入るしかないか・・・(汗)・・・」

もーヤダヨ！俺・・・なんで俺のまわりにはまともなヒューマンが  
イナインダヨ！(泣)

・・・俺もまともじゃないからか・・・？だあああああああ  
！！！！駄目ジャン！！！！

「・・・よし・・・入るゾ(汗)」

ドクンドクン・・・ドキュンドキュン

意を決して俺はドアを開いた・・・

「し・・・失礼しまーす・・・」

ガチャ・・・

「・・・」

「あらあん？あなた誰？」

「・・・(汗)」

・・・部屋の中には一人の女性がくつろいでおられました・・・  
・・・  
下着姿で・・・

「なになに？変態？やったあ！！いらっしやい！！変態さん！！よ  
うこそっ！！わがサークルへ！！」

変態はオメーだっ！！！！おみゃーさんだヨ！！！！おみゃーさん！！！！

「オジヤマシマシタ、ソシテサヨウナラ」

いかんいかん！！！！俺の危機リーダーがびんびんに反応しちゃって  
るヨ！

そして、俺が部屋から出て行こうとすると・・・

「お待ちっ！！！！！！」

がしっ！！！！(ヘッドを掴まれた音)

グイっ！！！！(引き寄せられる音)

むにゅ・・・(ナニか柔らかいものがあたって音・・・)

「せつかく来たんだからお茶でも飲んでいきなさい、ね（はあと）」  
むにゅむにゅ・・・

「・・・（汗）・・・」  
むにゅむにゅ・・・う・・・いい感触・・・いいかほりが・・・  
・・・  
・・・誰か助けてほしいにや・・・

「・・・で？チミのネームと感じがやすいところはどこかな？ぬ  
ふふふふふふふふ~~~~」

「・・・千里さんが管理人やっている寮に住んでいる高校生の村上  
耕司デス・・・

どうか、もう忘れてください。お願いします・・・」  
「むふふふ~~~~あたしは『BLの会』の副会長、八尾麻美よん  
っ！！

チミのことは一生忘れないわ！！ヨロシクねん！！」

ぎゃああああ~~~~！！！！！！おぼえられたああああ~~~~  
~~~~！！！！！！

「そっか~~~~つきり千里のこれだと思っていたのにやあ~~~~  
~~~~（はあと）」

そう言つて麻美さんは左手のひとさし指と親指で丸いわつかをつく  
つて上下に動かすジェスチャーをした・・・

「な・・・ナニ言つてんですか！！貴方は！！そんなわけないでし  
よう！？変な妄想抱かないでください！！

・・・つて！！いつまでそのジェスチャーやってんですか！！やめ  
てください！！なんかやだ！！それ！！」

「なにになに？右手でやるのがスキなの？耕次郎君は？」

「そんなこと一言もいってないっしょっ！？しかも人の名前、30  
秒で忘れないでください！！！！

・・・いや、やっぱ忘れてください！！！！」

ダミダよ〜俺〜コノヒト苦手だわあああ〜！！！！だ  
つて、コノヒトから千里さんと同じようなにおい出てるもんもん！  
！！！！別に実際かいだわけじゃあナイケドネ・・・

なんとなく俺は出された飲み物を口に含んだ・・・とりあえず、こ  
こを脱出せねば・・・！！

「・・・つて、げばおおおおお！！！！」

「あらあら困ったコね〜汚いわ（はあと）」

また、ぶちまけちまったよ・・・

「ちよつw・・・！！！！なんすか！？これ！？なんかぬるぬるして  
きもちわりーんですけどっ！！??」

「ナニつて・・・それは・・・」

ま・・・ましゃか！！愛液！？

「昨日作ったかす汁の残りよ（はあと）まあ、あたしは普通のお茶  
飲んでるけどね」

「なんでそんな不愉快な液飲ませるの！？もしかして嫌がらせ！？」

「そうよ（はあと）」

「カミングアウトしちゃったヨ！！コノヒト！！」

おげ〜・・・腐ってたんじゃねーのか・・・？あれ・・・？

「まあ・・・楽しかったからいいじゃない（はあと）」

「よくねーよ・・・楽しいのはあんただけです・・・とゆーか、早  
く服を着てください・・・」

いつまで下着姿でいるんですか・・・あんたは・・・」

なんなんだよ・・・コノヒトは・・・仮にも女だろ・・・

「・・・ところで気になっていたんですが・・・コノ部屋はなんな  
んですか？」

「・・・ナニつて・・・『BLの会』よ（はあと）」

「・・・だからその『BLの会』っーのがわかんねーんだヨ！！つ  
ーか早く服着ろつて言っただるーが

よおおおおお！！！！！！性悪女！！！！！！」

「う〜ん・・・『BLの会』ってというのはあ・・・略して！！！！『ぶ

らぶら遊ぶ会『よ!~!』」

「・・・そつち形じゃなかったのか・・・よかつたよかつた・・・  
・・・つてだめだめじゃん・・・この会・・・全然よくねーよ・・・  
「え?なにになに?その顔!~!今、卑猥なこと考えてたでしょでし  
よ~」

「か・・・考えてねーよ!~!」

「でも、そこだけは嘘をつけないんだにや~これが(はあと)  
じ~」

「ど・・・どこを見ているっ!~!」

・・・

それから30分後・・・

千里さんがやってきた・・・

うう・・・(泣)

また変なヒトに目をつけられました・・・(泣)

第9話『一部の年上のお姉さんには注意した方がよい』(後書き)

・  
・  
・

眠いデス・・・

でも暑いから眠れない・・・



第10話『三上英男の華麗なる世界』（前書き）

気付けばアクセス数が四桁台突破。

皆様ありがとうございます。ありがとうございます。

というわけで、記念として今回は英男視点のストーリーデス。耕司  
「なんでだ（汗）」



……  
……  
「いん」と「ちん」は言いすぎじゃない？  
泣いちゃうゾ〜僕……(泣)

ところでみなさんこういう言葉をご存知だろうか……？

『無知の知』……ギリシアの哲学者ソクラテスが残した言葉だ……

・  
そう、意味は……『自分自身が無知であることを知っている』……

……

いい響きじゃあないか……そう！！まさしく！！僕のことだっ！！

僕は『自分自身が変態であることを知っている』！！

自分のちびの位置！！ぼっちこの大きさまで知っているのだ

ああああああああ！！！！

どうだい！？すばらしいだろう！！H A H A H A H A

(アリス)「……まさしく、『お下劣英男』……ね(汗)きも  
きも」

(条一郎)「……ああ……心に染み渡るなあ……ね、耕司さ  
ん(はあと)」

(耕司)「『ね』じゃないよ(汗)……俺に聞くなよ……条一  
郎君……」

では！！僕の峠の伝説を見てくれたまえ！！！！

(耕司)「なんの話をしているっ！？」

ひでおちゃんえびそーど その1 『女子のスカートがたまたま風

で見たときの誤魔化し方』

(耕司)「タイトルきもっ!!!」

びゅっつうつうつ~~~~~!!!!!!

(女子A子)「きゃっ!!!」

バサッ!!! (風でスカートが舞い上がる音)

(ひでおちゃん)「むっ!!!らっきー、たいふーん!!!」

じ~~~~ (凝視!凝視!凝視!!!)

(女子A子)「~~~~~」

(ひでおちゃん)「~~~~~」

ふたりの目が合う~~~~~

(女子A子)「~~~~~見ましたね・・・」

ぷるぷる・・・がくがく・・・

(ひでおちゃん)「うむ・・・バッチリ見たよ(はあと)やったね」

(女子A子)「~~~~~」

(ひでおちゃん)「ピンクのレース上にパンダが描かれているパン  
ティだろう?しかし、僕はそれだけでは納得できないなあ・・・そ  
の奥にある『聖なる校門』と『花びら』もついでに見せてくれない  
かね?マドモアゼル」

(女子A子)「~~~~~!!!!!!さ・・・さいてー!!!

~~~~~!!!」

ばち~~~~~ん!!!!!!

(ひでおちゃん)「さいこ・・・ぶげばあああ~~~~~!!!

!!!」おわり

(耕司)「じえんじえん誤魔化せてねえ!!!むしろ、悪化してる!  
!サイテーだよ!!!コノエピソード!!!」

ひでおちゃんえびそーど その2 『さりげにクラスの女子とスキ



ん以外と黒かったことに僕ちゃんびつくらこんだよっ！……！！

ひでおちゃんえびそーど その4 『もう手段は選んでられない。  
げへあへ』

(耕司)「なげやりかよっ！……さいてーだっ！……このタイトル！  
！……」

(ひでおちゃん)「お……い、夏美た……ん！！」

(夏美)「おりよりよ？山本君どうしたの？」

(ひでおちゃん)「ボク、ミカミダヨ！？」

(夏美)「？」

(ひでおちゃん)「ふふふひっひひひっひひひ……さあ  
！……今から二人で生殖どっちんぐ……」

(アリス)「……」

ばっきばっき

(ひでおちゃん)「ばびぶっ！……な……ナニをす……！！」

ばっきばっき

(ひでおちゃん)「あぶぶっ！……ちよwやめっ……！！」

ばっきばっき

(ひでおちゃん)「あびばっ！……い……いたっ……！！」

ばっきばっき

(ひで……)「じゃえっ！……！！」……「めぐっ！……なっ！……」

「！

ばっきばっき

(略)「……」

ばっきばっき

以上。ひでおちゃん『再起不能』

耕司「終わりは意外とあっけなかった――――！！！！！！」

第10話『三上英男の華麗なる世界』（後書き）

英男君は某PCゲーでいうところの『ワカメ』的な扱いとなっております。これからもかわいがってあげてください。そして、感想と評価の方もよろしくお願いします。



第11話『男は色々溜まっているもんなのよ。ストレスが』（前書き）

百合ちゃんの性格が変わっている？そりゃあ、気のせいデス・・・





「ふにゃんっ！……！！！」

こ……このっ、やめっ！……！！！」

ぱしこー！……ん！……！！！」

「ぴぎゃんっ！……！！！」

や……やめっ！……！！！」

ぱしこー！……ん！……！！！」

「にゃうんっ！……！！！」

あ……あ……あ……

ぱしこー！……ん！……！！！」

「ひゃああんっ！……！！！」

……快感……はあはあ……

「きもちいいんっ！……！！！」

ガバアッ！……！！！」

……

ちゅんちゅんちゅんちゅん……

……(汗)……

……ハアハア……やっぱり……夢オチ……か……(汗)

汗)

……あ……悪夢だった……

そ……それにしても……あのおばはん……

夢の中で俺を気持ちよくさせるとは……(汗)なんて奴だ……

(汗)

……チラ(下を確認)

……よかった……いつちゃってない……(汗)

……チラ(時計を確認)

……まだ6時じゃねーか……学校が始まるのが8時だからギリギリもうちっとな寝れちゃう。

……よし……二度寝しちゃおう(はあと)てへ(はあと)



にっこり

「い・・・嫌だヨ!!か・・・勝手にヒトの人生ぶち壊しそうなえ  
びそーど淡々と語るのやめてくれる!？」

ぞ〜・・・つい最近知ったことだが・・・百合ちゃんは・・・  
・・・黒いデス・・・

「いいじゃないですかあ（はあと）私は楽しめますし（はあと）」

「ひ・・・ひどいつ!!ママ!!!!ひどいですわ!!コノヒト!!  
た・・・助けてえん!!!!」

「耕司さん。私そういうの本当にきもいと思うんです。やめてくれ  
ます?」

「急に真面目になった!!!!」

「で、なんでこんなところにいるか説明してくれるかな?百合ちゃ  
ん?（怒）いつとくけど、はぐらかすのなしだからね?（怒）ちゃ  
あんと真面目に答えてね?（怒）」

ちよつと、語調を強めて俺は言った・・・

「夜這いですよにゃん」

「いやいや!!そこまで真面目に答えなくてよろしいよっ!？むし  
ろちよつとは誤魔化していいからそういうのは!!・・・『にゃん』

!？百合ちゃんそんなキャラだったっけ!？語尾にそんなかわいら  
しいのつけててもゆるさないからねっ!？僕!？・・・じゃなく  
てえ!!！つつこむとこそこじゃないジャン!!！ジャン!!！

そーじゃないじゃ・・・つつ!!！いつてえ!!！今、舌噛んだっ!!！  
「!」

「楽しそうですね（はあと）耕司さん（はあと）」

「そんなわけないやろっ!!！楽しいわけないやん!!！どあほ!!！」

「関西弁です。耕司さん（はあと）」

「って!!！そんなことはどうでもよくてえ・・・!!！そーじゃな  
くてっ!!！夜這いつ!？ナニ!？ハイハイっ!？赤ちゃんっ!？ベ



第11話『男は色々溜まっているもんなのよ。ストレスが』(後書き)

続きます(^^)(



第12話『シンデレレもいいがシンシンもよい。YESーシンシンー』(前書き)

シンシンしているアリスさん視点デス・・・

第12話『ツンデレもいいがツンツンもよい。YES! ツンツン!』

「BEEEEEEEE.....!!!!!!バナナっ!!バナナっ!!  
!ばななあああああー!!!!!!」

「い.....いやん!!!!わ.....私はバナナじゃないですううう  
うううう~~~~~!!!!!!」

む.....剥かないでっ!!!!ん!!!!剥かないで下さい~~~~!!  
!いやああああ~~~~~!!!!!!」  
じたばたじたばた.....

.....なによ、これ?.....(汗).....コスプレイ?

私はアリス・ブランドー(17)。最近は本当にムラムラするわ.....  
。。つて!!作者あ!!なんつー事を言わせんのよっ!!(怒)ム  
ラムラじゃないわよっ!!イライラよっ!!イライラするのよっ!!  
このイライラの原因は、あの男.....そう『村上耕司』よっ!!あ  
の変態野郎のせいよっ!!

.....といっても別にあの男『個人』にはなんの恨みもないわ.....  
そう、.....なんで私があいつを嫌っているかというと.....『男』  
だからよっ.....!!私がこの世でもっとも嫌いなものはふたつあ  
る.....

それはピーマンと.....『男』よっ!!!!ピーマンは見るだけでも  
いやだし、『男』なんて.....『男』なんて.....所詮!!!!.....  
あ.....嫌な『過去』を思い出したわ.....  
.....



「BEEぶぎゅえっ!!」

私はこいつの顔面にかかと落としを決めてやった。．．．理性を失つても弱かったわね．．．コイツ．．．

「百合っ!!大丈夫!?挿入はされなかつたっ!？」

「．．．アリスちゃん〜．．．なんか表現がすぐくえっちいですうっつう〜」(泣)

よかった．．．何とか最後の砦は守れたみたいね．．．

「ところで．．．コラア!!あんた!!百合にこんなことしてタダですむと思っ．．．!!」

「BEEEEEBYAAAAA - - - - -  
!!!!!!!!!!!!!!!」

．．．あれ?コイツ復活早いわ．．．それに．．．なんか．．．さっきより興奮してるんだけど．．．(汗)

「こ．．．こーじさん?」

百合がおそろおそろ声をかける．．．

「BE - !!BE - - !!BE - - - !!BEHAAAAA  
AAAAA - - - - -!!」

ビリビリビリ．．．(服が破ける音)

．．．?．．．!!!!!!?????

「き．．．きゃああああ!!!!!!うそっ!?ナニよ!?これ〜!!!!!!」

私は自分の姿をみるといつの間にか下着姿になっていた!!な．．．なによこれっ!?

ま．．．まさか!!こいつ!!今の声の音波だけで私の制服をやぶったというの!?

こ．．．こんな奴、外に出したらとんでもないことになるじゃないっ!!もう危険物よっ!!危険物っ!!

「と．．．とりあえずっ!!に．．．逃げるわよっ!!百合っ!!」

「えっ?えっ?えっ?は．．．はいっ!!」

百合はおろおろしながら私の後についていった。





「B E E E」

今、ようやくコイツ・・・理性を失った村上を捕まえた・・・もちろん、私が捕まえたんじゃないやあなくて

千里さんが来て「えい（はあと）」とか言いながら村上の首筋に手刀を入れた・・・すさまじい速さで全然見えなかったわ・・・（汗）で・・・とりあえず動けないように縄で縛ったんだけど・・・なぜ、亀甲縛り？

「私の趣味ですよ（はあと）」  
にっこり

笑顔で答える千里さん。・・・コノヒトにはかなわない・・・色々な意味で・・・（汗）

「・・・しかし困りましたねえ・・・村上君をどうやって連れて行きますようかねえ・・・」

「ええええ！？このわいせつ物を学校に連れて行くんですか！？千里さん！！」

「ええ。その方が面白いですし（はあと）」  
にっこり

「（汗）こ・・・コノヒト・・・く・・・黒い・・・心が・・・」

「・・・やっぱりこうなったのもこの間の『アレ』が原因でしょうかね・・・（もう、仕方ないですね

え・・・麻美にはしつかり『教育』しなきゃあ・・・うふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ）」

（汗）（汗）・・・千里さん・・・ナニか悪い事企んでるわね・・・（汗）顔が般若になってるわ・・・

「・・・？ちーちゃん？『アレ』って何の事なの？ふあああ・・・」  
・・・今頃起きてきたのね・・・夏美・・・あとで、しばいと  
こうかしら・・・

・・・たしかに『アレ』ってナニかしら・・・なんか気になるわね





楽しいですからまあ、よしとしましょうか・・・うふふふ・・・」

そして・・・怒涛の1日が始まった・・・

第12話『シンデレレもいいがシンシンもよい。YESーシンシンー』（後書き）

まだ、続きます（^^）

第13話『ラブコメの主人公はほとんどが不幸体質』（前書き）

今回は恋する女の子、百合ちゃん視点です

### 第13話『ラブコメの主人公はほとんどが不幸体質』

「まったく！……朝からほんとつ！余計な体力消費しちゃったわ・

・  
これもどれもみんなコイツのせいだわっ！！」

ずるずるずるずる……

「あああああ~~~~！！！！イライラするっ！！ムラムラ  
するっ！！！」

ずるずるずるずる……

「………(汗)………(擦れてる……)」

「………(汗)………(ペットプレイ?)」  
ずるずるずるずる……バキっ！！

あ……今、耕司さんの首が変な方向に曲がったんじゃ……(汗)

私は村田百合(17)です。クラスの友達から「高校生にみえないよ」とか「多く見積もっても小学生にしかみえないよね」とか「はあはあ……(汗)ねえねえ……この赤ブルマ着てみてよお・  
・ふぴい」

とかさりげにひどい事言われてますが、れっきとした花の高校生で  
す(はあと)

今私は恋をしています(はあと)私は今まで誰かに告白されたことはあっても(もちろんしつこく迫ってきた人もいましたが、思わずつぶしちゃいました(はあと)えへ(はあと))特定の誰かを好きになったことはありません。これが『初恋』……というものでし

ようか？理由？理由ってないといけないんですか？

「……しいて言うならば……その人といつしよにいと『あたたかい』気持ちになれるから……でしょうか？こんな気持ち初めてです……その人を初めて見たときからこんな気持ちが芽生えたのです……」

「ずっとその人のそばにいたい……！もつとその人といっぱいいっぱいおしゃべりしたい……！……」

「……でも……こんな気持ち……私のわがままですよ？……相手の人がどう思っているのかもわからないのに……こんな気持ち！……こんな気持ち！……でも……止められないんです……この気持ち」

「……こんなわがままな私を許してくれますか？……耕司さん……ごめんなさい……」

今日は私となつちゃん（夏美）とアリスちゃんと……耕司さんの4人で朝の登校をしています。

「……アリスさんは耕司さんの首にペット用の首輪をつけてずる引つ張っていますけど……（汗）」

アリスさんはご機嫌が悪いようです……そうですね……まあ、あんなことがあった後だから……

なつちゃんはまだ寝ぼけているようです。しきりに私の耳元で「たこキムチ食べたいよ」とか唸っています

「……正直ウザイです……（汗）……でも……耕司さん……早く元に戻って欲しいです……」

「……ぶるっ……急になんか寒気がしてきました……これは風邪の寒気じゃないです……」

「……嫌な予感です……ぶるっ……」

「うっ……ん今日は気候も気分もほいもスガスガシイヨネ！！諸君！！すーはあすーはあ……」

・・・ガチッガチッ（何かに掴まれた音）・・・  
・・・ひっ！急に後ろから誰かに羽交い絞めされました！横を  
見ると夏美も羽交い絞めされています！！

「ふむ（はあと）」ところで君たちの体にもほいもスガスガシイヨネ  
！！今夜あいてるかな？うひひ！！」

「き・・・きゃあああああーーーー！！！！！！いやあ！！  
変態っ！！放してくださいっ！！」

「でも今日は天気予報で曇りっていつてたよ？ね、百合ちゃん」  
今はソナナコト、旧来のアナログ放送が地上波デジタル放送になる  
のと同じくらいどうでもいいことですよ！！なっちゃん！！

あっ！そんなこともないですねっ！何年か後に地上波デジタルのテ  
レビ買い換えないといけませんからねっ！

大変ですよ！奥様っ！でもいまこんな事を考えているわたしくらい  
どうでもいいことですっ！！あっ！今、自分の存在を否定しちゃい

ました（泣）やっぱり、どうでもよくないですよ！！（泣）  
「はあああ・・・（はあと）」ところで君はなんのシャンプー使って

いるのかな？このにほい・・・（はあと）  
おじさん、どきどきわくわくしちゃうなあ（はあと）くふうつうつ

~~~~ん！！！！はふはふ！！！！（にやあ）  
い・・・いやですよ！！なんなんですかっ！！？コノヒト~~~~！！！！

（泣）  
「はあああ・・・もう我慢でき~~~~ん！！！！喰っちゃっじょ（は

あと）てへ（はあと）  
ひゃっほーう・・・はなぶじゃぶあああああああああああああ

ああああああああ！！！！！！！！！！  
バッキーンン！！（何かが折れた音）

ぱりーん！！（めがねが割れた音）  
「あああ！！（怒）もっっ！！うるさいっ！！うるさいっ！！うる

さーい！！ただでさえ今イライラしてるってのにあつつくるし  
い奇声あげてんじゃあないわよっ！！（怒）マザコン野郎っ！！あ



用かしら？」

耕司さんのクラスに入ると弁当をつついていたアリスちゃんが声をかけてきました。

「・・・ご機嫌はいいようです・・・つくづく人間って単純ですよね・・・食事の時は機嫌がいいものです・・・」

「・・・もちろん、私も人間ですけど、えへ(笑)・・・につこり(生徒Z)」「(汗)・・・つくづく笑えない冗談だ・・・」

教室を見回しても耕司さんの姿が見当たりません・・・どこにいるのでしょうか？・・・

「アリスちゃん。耕司さんどこにいるんです？」

「さあ・・・？」

さあ・・・って・・・(汗)・・・ん？・・・なんか教室の隅に

赤箱がふたつあるんですけど・・・(汗)・・・なんか・・・こわいです・・・(汗)

でも、思い切って私はアリスちゃんに聞いてみました・・・

「あの・・・？・・・あの教室の隅にある・・・赤箱・・・」

「なんですか・・・？(汗)」

「・・・知りたい？」

「・・・(汗)・・・やっぱり、い

いです(汗)」

「・・・こわくてとてもじゃありませんが聞けません・・・(泣)・・・」

「・・・」

「・・・ん？なんか、後ろの赤箱が弱冠動いているような気がする

んですが・・・(汗)

「ずおおおおおおおお・・・」

「・・・！！！！こ・・・今度は何かあの箱から変なオーラが出ている

ような気がするんですが・・・！！！！(泣)

「ぴき・・・ぴき・・・ぴき・・・」



なんか『ぴきぴき』いつてますよ！? 『ぴきぴき』っ!!

「B..... BEEEEEEEEEBAAA  
AAAAAAA!!!」

ばつきよーん(赤 箱が粉々になった音)

き.....きやあああああー!.....!  
!.....!中からなんか変なのでできましたあああああ  
あ!.....!.....!.....!.....!.....!.....!  
て耕司さんっ!? やっぱりそこにいたん  
ですかっ!?

「.....(汗)まずいわね.....このままだと大惨事に発展す  
るわ.....」

キヤーキヤーキヤーキヤーキヤー!.....!.....!.....!

.....それはまさに地獄絵図でした.....とびかう悲鳴.....とび  
かう奇声.....とびかう制服やら下着.....

.....不運にも私の顔に誰かのふんどしがとんできてかかりま  
した.....(泣)

「夏美っ!!百合っ!!ひとまずココから離れるわよ!.....!.....!.....!  
か逃げるわよっ!.....!.....!.....!.....!.....!.....!.....!.....!

アリスちゃんが指示します.....ええっ!.....?逃げちゃうんですかっ  
!.....?

ぴき.....ぴき.....ぴき.....

えっ? 『ぴきぴき』?

とっさに振り返ってみると.....

「女体大好き!.....!.....!.....!.....!.....!.....!.....!.....!  
おおおおおおおおおお!.....!.....!.....!.....!.....!.....!.....!.....!

ばつきよーん(赤 箱が粉々になった音)

きやあああああああああー!.....!.....!.....!.....!.....!.....!

!.....!.....!.....!.....!.....!.....!.....!.....!  
!.....!.....!.....!.....!.....!.....!.....!.....!  
!.....!.....!.....!.....!.....!.....!.....!.....!

!.....!.....!.....!.....!.....!.....!.....!.....!  
!.....!.....!.....!.....!.....!.....!.....!.....!  
!.....!.....!.....!.....!.....!.....!.....!.....!



「ほああああちよおおおお~~~~~!!!!!!くらえいつ!!!!!!村上っ!!!!!!」

「びEEEEEEEEEBAAAAA AAAAAA AAAAAA AAAAAA AAAAAA AAAAAA!!!!!!」

「……いつの間にか対決が始まっていた……なんですか?この展開?……(汗)」

「びEEEEEEEEEEHAAAAA AAAAAA AAAAAA AAAAAA AAAAAA AAAAAA!!!!!!」

「うきやああ~~~~ん(はあと)」  
「びりびりっ(制服がやぶける音)」

「……しかも一瞬で負けてますし……(汗)」  
「……ふっ……それでこそ僕のライバル……『村上耕司』だ

「……うふふ……なかなかやるな(はあと)次にやるときはこうはいかないぜ(はあと)」  
「にっこり」

「(~~~~ナ~~~~)二満足げな顔してんのよおおおお~~~~~!!!!!!駄目駄目だろおおお!!!!!!」

「お前っ!?!くそっ!?!ム力つくわっ!?!あの幸せそうな顔っ!?!ム力つくっ!?!腹立つっ!?!あの顔腹立つ~~~~~!!!!!!むきいいいいいいいい~~~~~!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「(アリス)」  
「(あ……アリスちゃん……(汗)……抑えて抑えて……邪鬼みたいな顔になっていますう……」

「……本当にその顔怖いですからやめてくださいですう……(汗)」  
「(百合)」

「……あれ(はあと)お~~~~うい……?村上きゅん?どしたの?」

「……」

「お~~~~うい?どしたの~~~~?」  
「はたはた・・・」

あれ?あのメガネが耕司さんの目の前で手を振っても反応しません・  
・どうしたんでしょう・・・?

・・・・だが、次の瞬間・・・

「ボデイがあめえぜっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「ぶびいいいいい~~~~!!!!!!!!!!!!そこは顔ダヨっ!?!ぶぢぢゆ  
じゅっし!!!」

ばき・・・ばたんきゅー・・・

な・・・なんだったんだろっ?今のは?(汗)

「・・・・・・・・あれ?・・・・・・・・俺・・・・・・・・こんなところで  
ナニ・・・・・・・・してんだ・・・・・・・・?」

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

「え・・・・・・・・?あなた・・・・・・・・元に・・・・・・・・戻ったの・・・・・・・・?い・・・・・・・・今  
ので・・・・・・・・嘘・・・・・・・・(汗)」

「あん?ナニいつてんだ?アリス?俺は俺だぞ?『元に戻った』っ  
てのはどういうことだあ?(汗)

俺はスーパーサイ 人じゃねーんだぞ?・・・(汗)」

・・・・!!!!!!・・・・こ・・・・耕司さん・・・・

「なになに?なんかあったの!?!ボクお菓子のお城食べてる夢見て  
たヨ~~~~えへへ~~~~」

「・・・・夏美・・・・あなた・・・・まさか・・・・今起きて・・・・」

「ふにゆ?」

「ぽかつ!」

「ふにゆにゆっ!?!痛いヨ~~~~!!なんで殴るのっ!?!アリスちゃん  
!!!(泣)」

「うるさいっ！ー！」

「……？(汗)俺には今この状況がなにがなにやらさっぱり……」

「……耕司さんっ！ー！！！！！」

だきっ！！！！！！(抱きつく音)

「！？」

「耕司さん……！！！！よかったあ……よかったよう……ふえええ……ん……(泣)」

「……！！！！？？？(汗)ゆ……百合ちゃん？……ど……どーしたの？」

「うわああん！！よかったよお！！よかったよお……(泣)」

「……？(汗)なんで泣いてるのかよくわかんないけど……？……まいっか……役得役得……」

じ~~~~~

「……？(汗)お……お前ら……？ドウシタヨ？(汗)」

じ~~~~~

「お……おい……(汗)」

じ~~~~~

「だあああああああ！！！！！！！！！！！！！！おまいらあああああ！！！！！！！！」

そんな冷たい目で俺を見るなああああ~~~~~！！！！！！！！」

こうして、村上君はしばらくクラスの大半の女子に冷たい目で見られる日が続きましたとさ……

めでたしめでたし……

(耕司)「全然っ！！！！めでたくねええええええええええ~~~~~」





第13話『ラブコメの主人公はほとんどが不幸体質』（後書き）

今回の話は恋愛系の話が多かったように思います・・・  
・・・えっ？そうでもない？



第14話『流されて・・・流されてゆく俺の人生ってどうなのよ?』(前書き)

新キャラ増えてマス・・・

第14話『流されて・・・流されてゆく俺の人生ってどうなのよ?』

「村上君 うちの大学の美術部のモデルになってもらえませんか?

(はあと)」

「嫌ですう」(た ちゃん口調で)

にっこり

千里さんのお誘いを丁重にお断り申し上げました。だって、アノ人がいるもん。アノ人とかアノ人とか。

「村上君 うちの大学の美術部のモデルになってもらえませんか?

(はあと)」

「嫌ですう」(た ちゃん口調で)

にっこり

「村上君 うちの大学の美術部のモデルになってもらえませんか?

(はあと)」

「嫌ですう」(た ちゃん口調で)

にっこり

「村上君 うちの大学の美術部のモデルになつて・・・」

「・・・すみまへん・・・マジで勘弁してください・・・ほんまに

・・・(泣)」

「・・・つうかコノヒトの問答一生続きそう・・・(泣)

「むっ・・・仕方ないですね・・・」

ぶくっ・・・

あ・・・千里さんが頬膨らましてる・・・ちよつと、かわいい・・・

・・・年上ダケドネ!!!

「おおっ!!!女神様!!!では!?!?」

「時給1988円」

「ぶつてくださあい(はあと)」

プライドばーさすマネーの勝負・・・・・・・・マネーの勝利!!! (K・

○勝利!!カウンターばんち)

「おー（はあと）小次郎！！待ってたゼイ！！」

ほーうらやっぱりおばちゃん（麻美）いたヨ。しかも、もう俺の名前、まるつきり別人になっちゃってんじやねーかああああ！！！！！！それっ！！

「お、来たな！！鬼 郎！！」

「そして、貴様は誰だ。おっさん」

いつの間にか新顔発見。無精ひげを生やした爽やかそうなおっさんだ。

「僕の今日の下着は森のクマたんが描かれたブリーフだよ（はあと）」

「

「誰もソナナコト聞いとらん！！」

「えへへへ・・・」

「なぜ、そこで恥ずかしがる（汗）」

「僕のネームはファンシーちゃん！！」

「おめえ、いい加減にしねえとぶん殴るぞ」

「ごめんよ・・・小次郎君・・・僕の本当のネームはまる めくん」

「よっしゃああ！！表でろやっ！！ガリクソン！！」

・・・ちよつとシメてやったら、吐きやがりました（はあと）

前田鉄二（まえだてつじ20）趣味：デイ ニーグズ集めでハアハア

・・・なんか、硬そうな名前だった・・・

なんか、余計なことまで聞いちゃった きもっ

「まあ、モデルをやってもらう前に一応美術部のメンバー紹介ときますね」

どうやら、千里さんと麻美さんとファンシーさん（鉄二）は『BLの会』と掛け持ちでこの『美術部』をやりくりしているらしい・・・

アリアリか？そんなん。んで、両方の部長やってるのが千里さんで副部長が麻美さんだ。・・・美術部のメンバーの人・・・かわいそ  
うに・・・ほろり・・・

「あ・・・あの・・・私、美術部の山下真由美やましたまゆみ（19）です・・・よろしくです」

ペこりん・・・

・・・礼儀正しい女性だ・・・赤毛のロングでヘアバンドをつけている・・・

・・・でも、正直・・・幸薄そう・・・ほろり・・・

「うづうづ・・・（泣）」

「あつー！ー！ー！！！！小次郎が真由美泣かしたー！ー！ー！！！！！！！！」

わーるいんだーわるいんだーせーんせーにいつてやるー」

「やかましい！！近所の悪ガキかつ！！きさまはっ！！しかも小次郎じゃねーつつてんだろがYO！！」

「うえええ・・・ん・・・（泣）」

「す・・・すみません！すみません！ベリーハッピーフェイスですよ！！先輩っ！！」

「うええ・・・？ほ・・・ほんと？・・・」

「ハッピーハッピーよろ くなー」

「わーい！！！！」

ぽよんぽよん（じゃんぶの音）

・・・俺のまわりにはどうしてエスパーがごうも多いんだ？

・・・つつか、コノヒト本当に俺より年上なのか？（汗）

「同じく・・・ボクは・・・杉田健吾すぎたけんご（19）くんだ・・・ヨロシク・・・」

・・・今度はオタクっぽい顔をした男が出てきた・・・  
腹黒オネエサン、変態オネエサン、ファンシーおじさん、不思議幼

女系オネエサン、オタク系オニイサン・

・・・なに？ここは、異種格闘技場か？もう、いつぱいいつぱいだよ・・・ボク・・・

「HA-HA H A H A!! 僕ちゃんもここにいるぞお!!! 耕司きゅん!! きゅん!!」

「・・・なぜ貴様がここにいる・・・オデキ・・・」

「ボクヒデオダヨ!? (泣) もう、忘れちゃったの!? 昨日の夜はあんなに激しかったのに・・・ボクが

受けて君が激攻めで・・・」

「お前も帰れ」

「んじゃあ・・・まあ、まず小次郎君は全部脱ぎなさい(はあと)というか剥いでもいい? ハアハア・・・」

麻美さんがいきなりとんでもないことを要求してきました・・・

「ふざけるなっ!! なぜ脱がなきゃならんのだっ!! というか、後半良い訳ねーだろっ!! R18にする気かっ!! 貴様はっ!!」

「ええー・・・脱いでもらわないと困るんだにや〜・・・だって絵のテーマが・・・

『力強く・・・たくましく・・・』だからあ・・・ブツ見せてもらえないと困るんだにやり(はあと)」

「サイテーなテーマキター!!」

というか、ソレ!! 狙ってただろっ!! あんたっ!!

「・・・うふふふ・・・仕方ないなあ・・・村米君は・・・僕ちやんが手本を見せてやろうっ!!!」

そして・・・僕ちゃんとハッピーエンドを迎えようじゃあないか(はあと)」

「・・・というかお前帰れよ・・・しかも俺は村上だ。バカヤロウ。そんな間違え方初めてだよ。

そして最後にもうひとつ。この世から消えてください。オデキ君」

ぬぎぬぎ・・・

「つて！！本当にぬぐなっ！！コイツ！！」

バキヨン

「あべぼっ！！」

・・・あぶねえ・・・大惨事になるとこだった・・・(汗)

「なんかコイツ(英男)の汚そうでグロそうだったもんねー」(麻美)

「えつと・・・黒そう・・・でしたもんね・・・」(真由美)

「・・・(以下同文)・・・」(健吾)

・・・

この人ら結構めちやくちや言うな・・・

まあ、英男のことだからいいけど・・・

というわけで、全裸はさすがにまずいのでトランクス一丁で我慢してもらった・・・

「うふふふ・・・みんなに見つめられてソコ元気になってるわね

ー・・・ぐふふふ・・・じゅるり」

・・・ぞく・・・さむいぼたつたよ・・・まじで・・・

「だ・・・黙って書いてください・・・麻美さん」

・・・むう・・・さすがみんな美術部員・・・絵を描くときの集中力はさすがにすごいな・・・

・・・

・・・じいじい

嗚呼・・・真由美先輩がすごい真剣な目で僕を描いてらっしゃる・・・

今どこ書いているの！？今どこ書いているの！？DO・KO・NA・N  
O・SA!?

「我慢しなくても濡らしちゃってもかまわないからねー・・・ひやははは・・・私も濡れそう・・・」

「だから黙って書けつつてんだろつがYO！真剣に怖いヨ！！その台詞！！何する気っ！！？」

そして、最後にできた絵発表会！

まずは、麻美さん

「どうだっ！！？」

でんでで〜〜〜ん！！！！

・・・麻美さんの絵は一部分が繊細にかつ大きく描かれていた・・・  
ブツが・・・

「おみやーさんにはそこにしか脳がつまっっていないのかあ！！？」

次は、真由美さんp

「で・・・できました・・・」

・・・！！！！！！！！？？？？？

・・・真由美さんのスケッチブックには全然知らないミツーマ  
スみてーなかつこをした毛深いおっさんが笑顔で描かれておりました  
た・・・これ・・・ナニ？・・・もしかして俺っ！！？俺な  
のかコレっ！！？

次は、健吾さん。

・・・

健吾さんのスケッチブックに描かれていたのは・・・黄昏たそがれているど  
らモン・・・

・・・なんだよ・・・これ・・・(汗)もうすでにひとじゃね

ーじゃねーか・・・(汗)

・・・本当になんだ？この子達・・・わざと？それともまじ？  
もしくはこの閉鎖空間において僕という存在自体が見えていないの  
かな！？この子達は・・・？

・・・モデルの俺意味ねーw・・・

活動終了

「村上君」

「なんすか・・・千里さん・・・」

「今回は『騎士位』というテーマでモデルお願いしますね（はあと）

」

「もう勘弁して下さい!!!（泣）」

・・・ちなみに・・・

鉄二さんは・・・自画像を書いた・・・うつとりしていた・

・・・

・・・ナルシストでもあったのか・・・おっさん・・・

おへえ・・・





第14話『流されて・・・流されてゆく俺の人生ってどうなのよ?』(後書き)

更新遅れてゴメンナサイです・・・

これから忙しくなりそうなので不定期更新になるかもです・・・

第15話『お酒は飲んでも飲まれちゃダメよ!めっ!』(前書き)

二十歳以上の方々、お酒の飲みすぎには注意しましょう・・・

第15話『お酒は飲んでも飲まれちゃダメよ！めっ！』

ひらり・・・ひらり・・・

桜が舞っている。ひらり・・・ひらり・・・

・・・うむ、絶景力ナ、絶景力ナ。

俺たち、千里さんの愉快的仲間たちご一行はいわゆる世間一般で言われる「花見」に

ここ、造幣局の桜の通り抜けまで来ている。なんでも、千里さんが急にナニかを思い出したかのように

「夜桜をみんなで見に行きましょう。綺麗ですよ」と言い出したのだ。正直、俺はだるかったのでお断りさせて頂いたところ・・・はい、然る所無駄でした（はあと）

そしてココまで来たのだが・・・正直感動したっ！！！！おめでとうっ！！！！

本当に雪のように舞い降りる桜の花びらは僕の心が浄化されていくよう・・・ああ・・・アニユハセヨ・・・

今の俺はヨ 様気分・・・ああ・・・きれいだよ、ユン・・・っつて気持ち悪いと言っつなよ、ソコ。

同時にこの雪のようにきらきら舞い降りる花びらちゃんちはまるで俺たち・・・いや、僕たち村上耕司と高宮条一郎の未来への祝福を心から祈っているかのようにだった・・・おしまい。

「・・・っつて！！誰だああああー！！！！！！最後のほうに変なオプシヨン加えたの！？」

・・・っつてひとりしかないジャン！！！！こんなん書くの！！

！条一郎君！？（汗）」

「うふふ・・・照れないで下さいヨ、耕司さん（はあと）僕も恥ず

かしいんですからあ……(はあと)

あ……!!!!いやです!!!!顔見ないで下さい!!!!どきどき……  
……します……」

ぽ……

ぞ……ぞくりん……

「いやいや!!!!照れてないからね僕!!そして何か勝手に自分の都合の良い方向へもつていこうとするのやめてくれるかな!?条一郎君!!はげしくきもいよ!?条一郎君!!」

「耕司さん。春は出会いや別れの時期つていわれますけど……  
ゴールインの時期でもありますよ?」

うひゃひゃひゃひゃ……(はあと)」

「だ……誰と誰がゴールインするのかな?かな?(汗)」

なんか……日に日にレベルアップしてるヨ……この「……」  
(泣)

そして同調するかのようには伊達メガネ野郎が話しかけてきた……  
なんでまたお前……いんのさ?

「うむ……本当にきれいな桜だなあ……だが……今年  
はもつと綺麗な『花びら』も拝みたいものだなあ(はあと)ね、  
ダーリン(はあと)」

「やかましいわ!!!!俺に同意を求めるな!!!!オデキマン!!!!  
そして誰がダーリンだ!!!!いい加減にしねえとその汚ねえツラあ、  
こ……だめに突っ込むぞ!!!!あん!?おんどれあ!!!!!!」

「ああ……い……E……よお……とおおおおつてもEEEE  
E~~~~~ヨ!!!!!!ナイスアイデア!!!!だよおおお  
~~~~~!!!!!!僕……僕をもおおおつといじめ押し倒  
してくれたまええええええええ~~~~~!!!!!!

!!!!!!ひよおおおおおおおおおん!!!!!!」

……(汗)……

……だめだこいつ。まるつきり駄目な方向へ進化している……  
……





誰か僕を助けてください。お願いします(泣)

「おほほほほほほほほほほ~~~~~このほっぺむにむにしててきもちEー」

ほーれーむにむにむにむにむにむにむにむにむにむに~~~~~  
~~~~~」(麻美)

「いやん(はあと)やめて下さいヨ~~~~あへへ・・・やって・・・もつとやってえええ」(百合)

「ああああ~~~~百合たんばつかずるうつついよおお~~~~  
~~~~ボクもボクも~~~~」(夏美)

「むにやむにや・・・こうじしゃああん・・・だ・・・だめ・・・そこは・・・道は舐めちゃあだめでしゅよ~~~~あつあつあふ~~~~あぶあぶ~~~~今度は耕司しゃんの番デスヨおお・・・えへへ・・・

き・・・気持ちよくさせてあげましゅねえええ~~~~  
~~~~ぐ~~~~」(条一郎)

「~~~~ほうら~~~~嫌な予感があつちやつた 皆さん見事につぶれちゃった

「~~~~条一郎君は酔っても言動はそんなに変わらないな・・・  
~~~~  
~~~~というか、条一郎君の夢の中で僕は条一郎君にナニをしているんだ・・・  
~~~~

「~~~~考えるのはよそう(汗)~~~~  
~~~~カーも結局最後は考えるのを止めたからな~~~~

「あら あら みなさんこれくらいで酔うなんて貧弱貧弱~~~~です  
ねえ」

「~~~~  
~~~~  
~~~~ほんまやなーこのくらいでリタイアとかアホやでほんま」









第15話『お酒は飲んでも飲まれちゃダメよ!めっ!』(後書き)

なんか・・・ぐだぐだになってきた・・・

第16話『ウロンちゃんのオールナイトトーキング』(前書き)

今回はギャルゲー的な選択肢で攻めてみました・・・

## 第16話『ウコンちゃんのオールナイトトーキング』

月×日 深夜12時 高宮学園学生寮 444号室 『不眠症

で眠れない』選択肢

・・・むう、眠れん・・・

さて・・・どうするかな・・・？

1．ラジオのFMを聞いてみる そのまま読み続けてYO!!! (第16話)

2．糞ババ・・・おふくろの味が懐かしいなあ・・・1階の台所でコンポタージユを作って喰おう

わーぷしてにやりん(はあと) (第17話へ)

3．・・・夜這い・・・してみる？

んもーこのド変態ちゃん いやーん (第18話へ)

・・・ラジオのFMでも聞くか・・・

おお、そういえば今の時間帯は『ウコンちゃんのオールナイトトーキング』がやっているじゃあないか!!!

うむ、聞こえう。そして、僕は遙かなる大地を駆け巡る・・・はあはあ・・・ウコンたん・・・

では!!!素晴らしい世界へアディオス!!!ぼちつとな・・・

ま〜つりだ 祭りだ 祭りだ  
なんでオーブニング曲さぶちゃんの歌なの!? おかしだろっ!? ぜ  
ったい!!

『ハイ! みなさんこんばんわー元気かな? え? ナニナニ? 違  
ところも元気いっぱい? きもーい!! そんな迷える子羊たちにお  
くる『ウコンちゃんオールナイトトーキング』の始まり!! 始まり  
〜!! じゃあ毎度お馴染みのあたし、ウコンが司会をつとめるヨ  
ン!! ヨロシクね!! てへ(はあと)』

・・・ウコンちゃん・・・一言多いよ・・・(泣)

『んじゃあ、今日は番組宛に寄せられてきた相談に答えていくよ。  
・・・ありがたく思えよこのチンカス共が・・・でもそのまえ  
にい!! 今日ゲストをご紹介するよ〜おい!! おばちゃん!  
』

『はあい(はあと) こんばんわあ!! 私はゲストの八尾麻美よーん  
(はあと) よろしくね〜

んでもって、ウ コちゃんもよろしくねえ〜ん(はあと)  
ぶひゃう!! ま・・・麻美さん!? あんたナニやってんのおおお  
おおおおお〜~~~~~!!??

『えへへ〜~~~~うん!! ヨロシクね!! 年増!!』

『ああ? 今なんつった? こら糞ガキ?』

『はあ? なんもいってねえヨ。年増』

・・・(汗) いきなり剣幕モードかヨ・・・(汗)

『・・・・・・・・・・・・・・・・』  
『・・・・・・・・・・・・・・・・』

・・・・・・・・沈黙・・・・・・・・

（汗）ラジオ越したとなんか怖いよ！！この沈黙！！（泣）

『えへ（はあと）それじゃあ、さっそくみんなから送られてきた質問読むねー 麻美さんが手取り足取り答えてくれるよー』

『よっしゃあーどーんと来なさい！！どーんと！！なんなら下の口できてかまわないわよーん』

うええええええ！？ナニ！？その切り替わりの速さ！？

『まず最初はペンネーム：パパはがんばってるのさんからの相談だよ。苦節40年・・・家族のために必死で働いてきたのになんてこんな・・・こんなことに・・・こんなばんわ・・・聞いてください・・・私は家族を養って一生懸命働いているしがない平凡な中年サラリーマンです・・・といっても・・・』

「元」ですけどね・・・先月・・・リストラ勧告受けました・・・・・・・・（泣）

どうしてこんなことに・・・ゴマすってゴマすりまくったのに・・・どうしてこんなことに・・・

私の何処が悪いんだ！！こんなに会社のために今まで貢献してきたのにつ！！ひどいつ！！ひどすぎるっ！！なぜ私がこんな目に！？私がナニをしたっていうんだよおおおおおお！！！！！！！！！！！！！！

・・・・・・・・ごほん、つい興奮してしまいました・・・ごめんなさい・・・まだそれだけだったら良かったんです・・・

・・・・・・・・家に帰ると妻と息子の部屋もぬけの殻になっていたのです・・・必死に探しましたがどこにもいません・・・ふと、食卓を見ると置手紙が置いてあったのです・・・見ると・・・「もうあなたと







僕は最近ストレスが溜まりに溜まっています！！でも、その解消方法が見当たりません！！

どうしたらいいと思いますか！？教えてください！！」

「うむうむ。人間は常にストレスを抱えて生きている人間だからね

———まあ、あたしにはそんなもんじゃないけどね」

「……………何も考えてなさそうだしな……………あなた

……………

「んじゃあ？どうしたらいいの？」

「そんなのかんちくりんよう！！ストレスが溜まる＝体液が溜まっ

ている＝しれっ！！！！以上よ！！！！」

「おう！！時間がきてしまった！！んじゃあ、みんな！！まったね

———

「ばいばいきーん」

……………ぼち……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………もう寝よう……………



第16話『ウコンちゃんのオールナイトトーキング』（後書き）

ココにたどり着いたあなたは本編（第19話）に続きます・・・お  
めでとうゴザイマス・・・

## 第17話『千里さんの料理』

．．．．．とりあえずなんか腹減ったな．．．．．  
．．．．．そうだ．．．．．1階でなんか作って喰おう．．．．．

深夜12時30分 高宮学園学生寮1階キッチン  
．．．．．とりあえず、ナニを作ろうか．．．．．？  
．．．．．一番は子供を作りたいけどな．．．．．  
．．．．．冗談だからそんな哀れな目で僕を見ないで下さい（汗）  
．．．．．よし．．．．．アレを作ろうかな．  
．．．．．？

「．．．．．あら？村上君？こんな夜遅くにそんなところでナニしているの？夢精の処理？」

「ち．．．．．違いますよっ！？夜食を作ろうとしてたんですよ！！夜食！！！」

「．．．．．そうでしたか．．．．．でもだめですよ？こんな夜遅くに子供が火なんか使っちゃあ．．．．．  
めっ！ですよ？村上君」

．．．．．頭をなでなでもらった．．．．．  
ふあああ．．．．．千里さんの優しさに包まれるよう～～～～  
き．．．．．きもちE．．．．．

「ここもなでなでしてあげましょうか？（はあと）」  
千里さん手を下のほうに伸ばそうとする．．．．．  
「そこはいいです（汗）」

あ．．．あぶねえ．．．もう少して一線を踏み越えるところだった．．．

「お腹がすいたんなら私が今から何か作ってあげますヨ（はあと）  
ナニがいいですか？」

ああ．．．なんて優しい人なんだ．．．お嫁さんにしたいぜ．．．

「そうですね．．．コーンポタージュ．．．お願いできますか？」

「？なぜそんな微妙なものを？」

「いや．．．昔、糞ババ．．．おふくろが良く食わせてくれたんですヨ」

「．．．．．思い出の．．．．．味ってやつですか．．．．．わかりました（はあと）」

できるまでちょっと待っててくださいね（はあと）」

．．．．．でも、そのエピソードには続きがあるんだな、これが。実際、後からおふくろから聞いたんだが．．．．．短時間でできてしかも食費もかからなかったからした

とか抜かしやがった．．．．．なんて親だ．．．．．

．．．．．そういえば毎日食っていたような気がする．．．．．それはそういうことだったのかクソ！！

．．．．．ん？なんか俺、一番肝心なこと忘れているような気が．．．  
．．．  
．．．．．まいつか．．．．．

「はい。お待たせしました（はあと）いっぱい食べてくださいね  
（はあと）」





D  
E  
A  
D  
  
E  
N  
D

第17話『千里さんの料理』（後書き）

攻略のヒント：千里さんは何が苦手だったかな？





!!!!!!

「げばあああああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」  
アリスさんに取り押さえられた……………

カーカーカーカー……………

「……………ほらよ、カツどん食べ……………」

「はい……………(泣)」

……………なんであんなことをしたんだろう……………

……………

……………後悔してももう遅い……………

……………だってここは豚箱だから。

B A D   E N D



第18話『俺の天使が敗れた夜』（後書き）

攻略のヒント：欲望に突っ走りすぎデス・・・抑えましょう（^^）

第19話 『妄想を抱いて萌え死にしろ』 (前書き)

また変態さんが一匹増えました・・・





「やるかつ!!」

「ふふふふふ……遠慮しないでえ……(はあと)」

「く……来るなああああああ……!!」

「!!!!!!!!!!」

す〜りす〜りす〜りす〜りす〜り

「あんぎゃあああああああ……!!!!!!!!!!」

……チュンチュン……

あ……朝か……(汗)……あ……夢でよかった……なんなんだ……今の夢は……(汗)

全裸のおっさんと夢の中でローションプレイとか悪夢以外の何物でもねーぜ……おええええ……

「ん……?」

「ZZZZZZ……(いびきの音)」

「……はい？」

朝だから頭が回らないのだろうか？俺の隣には何故か原田のおっさんが寝ていました。

ガチャ、バターン(ドアを開けて閉める音)

「ハーイ!!お兄ちゃん起きてる!？」

……はい？

「……(夏美)」

「……(汗)」(耕司)

「……(夏美)」

「……(泣)」(耕司)

「……失礼しました」(夏美)

「ま……待ちなサイ!!君!!ち……違うつ!!これは違うつ

!!違うつデスヨ!!ご……ごかいだああああ!!ココは五階

じゃあないけどごかいなんだああああ~~~~~!!!!!! (大泣き)  
「  
バタン  
..... (汗) わーい、どっしよカナ~~~~? (泣)

「おめでとございます 村上」

「..... (泣) ありがとうございます..... (泣)  
クツソ~~~~ (泣) 全然つメデタクねーよ!!!! ちくしょおおおおお  
おお!!!!!!!!!!!!!!!!!!

っていうか!!!! 朝の第一声がそれかよ!!!! 千里さん!!!!

あんのチビ!!!! チクリやがったなああああ~~~~~!!!!!!  
絶対あとでシバく!!!!!!

「今日も朝ごはんをもりもり食べて精をつけておいてくださいね  
はあと」

「はああい!!!! (泣) いっただきま~~~~す!!!! (泣)  
あはははは~~~~もう、食うしかねえべや (泣) うん! 食っ  
て今日の朝の出来事をクソといっしょにトイレに流そう!!!! モグ  
モグパクパクむしゃむしゃガツガツ..... あれれれ~~~~? 今日の  
朝ごはんはなんだかしょっぱいゾ~~~~? なんでかな~~~~? ? ?  
(泣)

すると麗奈ちゃんが好奇心な目でとんでもないことをぶちまけてくれ  
ました。

「なあなあ どうやったん!? 初体験は!? 気持ちよかったん!?  
なあ! ?」

「オウ..... あなたはナニをいつてるんデ~~~~スカ..... (汗)  
..... 今度はさらにすごい目で見つめるOTOKONOKOがさら  
にとんでもないことをぶちまけてくれました。

「耕司さん..... 不倫は許しませんヨ.....?」

「ちょっと待ちなさい(汗) 条一郎君(汗) いつから僕ちゃんと君はそんな関係になったのかな? かな? (汗) そんなのぶちまけちゃったら斗 子さんだつてびっくらこんだヨ・・・? (汗)」

「いつから・・・って・・・ふたりがこの星空の下に舞い降りた瞬間ですよ? (はあと)」

「・・・」

「・・・だみだこりゃ この子もう手遅れだ(はあと)」

「フン・・・女に飽き足らず男にまで手を・・・さいてーね、あんた。変態。野蛮。ケダモノ」

「・・・ずいぶん好き放題いつてくれるなあ・・・アリスさんは・・・」

「・・・(泣)」

「・・・もうだみだ・・・朝からテンション下がりがくりすティだ~~~~」

「・・・(汗)が・・・頑張ってくださいね(はあと)」

「・・・ナニを頑張ればイイノカナ? 百合ちゃん? (泣)」

すると、今回の朝の悲劇を招いた張本人がニコニコしながら現れた・・・

くそう、その顔きもいなあ・・・むかつくなあ・・・2、3発ストリートいれてえなあ・・・

「今日は赤飯炊いちゃったヨ〜あはははははははははは~~~~」

「~~~~~(笑)」

あゝチヨウウゼえ、このOYAZI。

「全然笑えねえよ。はん! てめえの力才は少し笑えるかもナ」

「もう〜ぶんぶん(はあと) つれないなあ耕司きゅんは 折角、特別ゲストをお招きしたのに〜」

「特別ゲスト・・・?」

どうでもいいがその言葉遣いと力才止める。見苦しい。

しかし・・・(汗) なーんか、やな予感がするなあ・・・



すか？（はあと）」  
ちよw・・・千里さん！？なにいつてのおおおおおおお～  
~~~~~!!!???  
「お・・・お持ち帰りにいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい  
!!!!!!!」  
「い・・・いやあああああああ~~~~~!!!!!!」

「はあい（はあと）わたしは村上琴美むらかみことみ！！村上家四人兄妹にして長女！！

ちなみに将来の夢はコー君の夜のおもちやになることよ！！そしてブラコンよ！！ヨロシクね（はあと）」

・・・あれからなんとか解放された・・・もう少しで本当に「お持ち帰りいいい（はあと）」プレイを

強要されるところだった・・・（汗）そんなのはケンタくん人形だけで十分だ・・・ああ恐ろしや～（汗）

『コノヒト今自分でぶらこんどか言ったわよ・・・（汗）』（アリス）

『ブラコンって言いました～・・・（汗）』（百合）

嗚呼・・・みんなの考えていることが手に取るようにわかる・・・じ～・・・

嗚呼・・・そんな哀しいものを見るような目で僕を見ないで・・・カシャ！カシャ！カシャ！カシャ！カシャ！（カメラのシャッター音）

嗚呼・・・千里さん・・・撮らないでください・・・

「ああ、そうそう、これから琴美ちゃんが高宮学園に通うことになるからみんな仲良くね？」

「い・・・イヤ嗚呼嗚呼嗚呼あああああああああああああああ



第19話 『妄想を抱いて萌え死にしろ』 (後書き)

ああ・・・アノ頃に戻りたい・・・  
と最近思つようになってきました・・・



第20話『ニジでちょっとブレイクタイム・・・』（前書き）

今回はキャラの詳しい紹介デス・・・  
・・・作るのに結構時間かかりました・・・

第20話『ここであつとブレイクタイム・・・』

上野夏美うえのなつみ（17）

変態Lv：一般人

身長：140センチメートルcm

体重：40kg

髪型：黄色のツインテール。アメリカンチェリーの髪留めを着けている。

初日に耕司の部屋で裸で爆睡していた少女。元気な女の子。初期は耕司のことを『コーちゃん』と親しげに呼んでいたが、途中から作者の勝手な好みにより『お兄ちゃん』と呼ぶようになった。

一人称も『私』から『ボク』になった。

父親は海外で仕事中。母親は他界。高宮学園学生寮に入るまでは弟と一緒に母方の祖母に預けられていた。

なので、いつも元気な姿を振りまいているのは裏があつて少しでも寂しさを紛らわすためのものだった。

ちなみにいかにも『ボクはおばかさんだよ（はあと）えへ（はあと）

』みたいな顔立ちだが実は学校では

成績優秀。世の中理不尽だ……。好きな食べ物はプリンととろけるチーズ。嫌いな食べ物は納豆。

村田百合むらたゆり（17）

変態Lv：一般人

身長：145cm（同じくミニマム）

体重：内緒ですう（はあと）

髪型：首筋にかかるぐらいの栗色ショートヘア。

表向きは極度の恥ずかしがり屋さんの子猫ちゃん。……だが、  
『裏』は……（汗）

夏美と同じくよくヒトから「小学生みたいだね」とかひどいことを  
言われる。ちなみに作者のイメージ的には

体操服に赤ブルマがよく似合う子だ……え、わかりやすくない？

耕司に人生で最初の恋をする。理由は耕司といっしょにいると『あ  
たたかい』気持ちになるから。

しかし時に度を越えるキツイ言葉が会話の中で飛び出すことがある。  
（過去に男で泣き出す奴も出てきたと言い伝えられている）これは  
単なる性格の問題ではなく幼少の頃の父親の家庭内暴力に原因があ  
ると思われる。

好きな食べ物はフルーツ全般。嫌いな食べ物はキムチ。

アリス・ブランドー（17）

変態Lv：冗談じゃないわよっ！

身長：170cm



まれのなにじえか、関西弁でしゃべる人

。エセ関西人？耕司達のオネエサンの存在。よくしゃべる。ほんとうによくしゃべる。

あと、妄想癖がやたらと激しい。興奮すると目が血走り、鼻の穴が少し大きくなる。根はいい人。

好きな食べ物は野菜炒め。嫌いな食べ物はピーたん。

高宮条一郎（17）  
たかみやじょういちぢろう

変態Lv...超絶

身長：165cm

体重：もう！乙女にソナコト聞いちゃだめでしょ？（はあと）めっ！

（・・・）（汗）君は乙女じゃないだろ・・・？

髪型：短めのストレート。茶髪。

麗奈の弟君。一見しっかり者のような子だが実は・・・

カマさんデス・・・（汗）

耕司さんに惚れちゃう！惚れちゃう！惚れちゃう！！・・・とまあ、色々な意味で危ない子だが

基本的には良い子。しかし、人によってあからさまに態度が違う。

特にひでおとか！ひでおとか！！ひでおとか！！好きな食べ物は耕司さんが好きな食べ物。嫌いな食べ物は耕司さんが嫌いな食べ物。

相田<sup>あいだ</sup>ミント(17)

変態Lv . . . ? ? ? ? ?

身長 : 145cm

体重 : 40kg

髪型 : 緑のショートボブカット。

全てがなぞに包まれているロリたん。めがねっ子。極端に口数が少ないので未だにみんなと馴染めていない。

しかし、百合ちゃんとは度々話すようだ。ちなみに作者はめがねっ子属性ではないです。はい。  
イメージ的には長 さんに近いです。好きな食べ物はコーヒーズリ。嫌いな食べ物はしいたけ。

橋<sup>たかはな</sup>千里<sup>ちさと</sup>(20)

変態Lv . . . 十万ボルト

身長 : 185cm

体重 : 機密事項です

髪型 : 腰まで伸びた黒のロングヘア。赤いリボンをつけている。

高宮学園学生寮の管理人でありながら、なおかつ某大学に通っている大学生。大学での成績はトップクラス。いつもニコニコ笑顔だが実は腹黒。耕司曰く、「笑顔以外の表情見たことねえよ・・・」家族は十年前に事故で失った。その時は涙が枯れるほど泣いたという。それ以来、どんなことがあってもずっと笑顔でいようと心に誓った。大学で『BLの会』と『美術部』の兼部長をやっている。ちなみに耕司の母親はこの大学のOBで千里の大先輩に当たる。好きな食べ物はこの世の全て。嫌いな食べ物など存在しない。

はらだみえはる  
原田見栄春（27）

変態Lv・・・

身長：185cm

体重：79kg

髪型：白髪まじりの少しパーマのかかったロン毛。普段は後ろで紐で結っている。

高宮学園学生寮のお兄さんもとい萌える料理人。初期は千里にベタ惚れだったがだんだん変態系とカマツ気が入ってきた・・・（汗）今狙っている子は耕司君。きもいなちくしょうこんにやろう。料理は顔に似合わずめっさウマイ。好きな食べ物はこってりとしたもの。嫌いな食べ物はあっさりとしたもの。

三上英男みかみひでお（17）

変態Lv：：神

身長：177cm

体重：67kg

髪型：金髪のさらさらヘアでアホ毛。伊達メガネ装着。

変態野郎。以上。

八尾麻美やおまみ（20）

変態Lv：：大人の世界はあと

身長：183cm

体重：ピーkg

髪型：青のロングのボブカット。梨ちゃん見たいな髪形。

千里の大学の同級生。『BLの会』と『美術部』の両方の兼副部長をやっている。最近では耕司君をいぢりまくるのが生きがい。度々、変態的な言動が目立つ。これは本人曰く、「意識して口になっている



のではなく、  
無意識に口に出ているのよん」なお悪いわっ！！しかし本当は優しい面もある。千里のよき理解者でありかつ大親友でもある。好きな食べ物はマンゴー。嫌いな食べ物はきゅうり。

前田鉄二まえただてつじ(20)

変態Lv：：それなりにHENTAI

身長：187cm

体重：75kg

髪型：少し赤みがかかったストレート。前髪は横に流している。無精ひげ。

同じく千里の大学の同級生。ファンシーおじさん。ディ ニーグッズではあはあしている。ちなみにディ ニーランドには今まで50回以上行っているらしい。ドナ ドの声真似が大の得意。というか、何気に気持ち悪いなコノヒト。好きな食べ物はチーズフォンデュ。嫌いな食べ物は味噌汁。この西洋かぶれが。

山下真由美やましたまゆみ(19)

変態Lv：：皆無(純情)

身長：180cm

体重：5・・・「はうふうふうやめてくださいいいい」（泣）

髪型：赤のロングヘアバンドをつけている。

千里の大学の『美術部』の部員のひとり。幸薄そうな力才をしているかわいそうな人。見た目は大人だが精神年齢は結構低い。好きな食べ物はミルクキャンディー。嫌いな食べ物はタン塩。

すぎたけんし  
杉田健吾（19）

変態Lv・・・むつつり助平

身長：165cm

体重：50kg

髪型：おかつぱ。やたらでかいめがね装備。

同じく千里の大学の『美術部』の部員のひとり。オタク系のお兄さん。アキバのことならなんでも知っている。  
。好きな食べ物はオムライス。嫌いな食べ物は梅干。

ウコンちゃん（14）

変態Lv：：まだ人生の色も知らない幼女

身長：130cm

体重：37kg

髪型：ピンクのポニーテール

ネットアイドル。ラジオ番組の『ウコンちゃんのオールナイトトーキング』をはじめ、レギュラー番組を数本もっている。オタクの間では知らない者はいないほど有名かつ大人気である。特に発せられる辛辣な言葉には  
一部のファンから高い支持を得ている。どMか。きさまら。好きな食べ物はチーズケーキ。嫌いな食べ物はピーナッツ。

むらかみことみ  
村上琴美（18）

変態Lv：：ブラコン

身長：180cm

体重：な・い・しよ（はあと）

髪型：ぼさぼさだが適度に整っている。オレンジの腰ぐらいまでのロング。

耕司の実の姉。結構、異性からもてるが弟LOVEなので何人もの

男を撃沈させた。異常な弟への愛を持っている。好きな食べ物は耕司の食べ残し。嫌いな食べ物は耕司の嫌いな食べ物。ココまで来るとある意味、尊敬する。

むらかみこうじ  
村上耕司（17）

変態Lv：普通に変態

身長：177cm

体重：64kg

髪型：首筋にかかる程度の深緑のストレート。目つきが悪い。

この物語の主人公。ツッコミが多い。妄想壁が激しい。目つきが悪いのでよく不良に絡まれたりするがコヤツ自身が喧嘩強いので相手をフルぼっこする。本人は気付いてないが結構もてる。家族構成は父、母、兄、姉、義妹。なお、上京することは兄妹には何も伝えていない。しかし姉の琴美はやって来た。おそろすい人だ・・・（汗）実は上京した理由は一人暮らしに憧れていただけでなく幼馴染との関係からもきている。詳しい話はいずれ物語の中で語られるだろう。口は悪いが実は結構相手のことをよく考えて話すイイ奴。しかし、恋愛のことに關しては鈍感のドンちゃん。好きな食べ物は超激辛カレー。嫌いな食べ物は甘いもの全般とエノキ。



第20話『「じじでちよっとブレイクタイム」・・・』(後書き)

次の話から19話の続きとなります故。

第21話『姉と弟は絡み合うものだ』と知らないおじちゃんが言ってた。まあ、

世の中はなにかと愛に溢れていマス

第21話 『姉と弟は絡み合うものだ』と知らないおじちゃんと言った。まあ、

「……………で？なんで姉さんが僕ちゃんの学校に入ってきてんですか？出てけこんにやるー（はあと）」

「ん？なんでって……………だって私！うる若き花の乙女の18歳だもん！もん！」

「じえん！じえん！答えになってねえ！！」

……………あれから姉さんは俺に付きまとい、しまいには学校のナカまで入ってきちゃったヨ！！

「とうか、部外者なんだから中まで入ってくん。おバカ」

「も……………コー君のバカ 私のナカがそんなに恋しいのね（はあと）そんなことだったらいつでも

どこでもいつまでもさせてあげるのに」

「……………一度お前の頭の中の構造を見てみたい」

「いや〜ん 下調べ？下調べ？ヤル前の儀式？いや〜ん えっちいんぐう（はあと）でもでも調べて調べて！」

！なあああああ〜〜〜〜めえええええまわああああすよおおおおおに調べて」

「誰かこの女を黙らせる」

……………妄想劇場もそこまで行ったらある意味尊敬に値するわな。俺は断じて尊敬などせぬが。

……………ほら〜〜〜周りの庶民（生徒）ひいちゃってるヨ〜〜〜

嗚呼……………キミたち、見ないで……………見ないで……………そんな「ああ〜〜やっちゃったか〜〜」的な目で

僕ちゃんを見つめないで……………なんだヨ。これ？なんで言っ



る本人は平気なフェイスしてて、なじえに

俺だけ恥ずかしい思いしてんだ？ナニコレ？羞恥プレイか？これはだんだんこの目線が快感になってきたりするの？俺？……いやいやそこまで落ち込んだら俺もう人生終わりだヨ……・奈落の底にまっしぐらりんちよ、だよ……・「へえ……・琴みんって、お兄ちゃんのお姉ちゃんだったんだ……へえ……」

……このタイミングでそれを言うな……夏美……（汗）嫌な現実が目の当たりになるだろうが。

……ちよつと待て……・オイコラ？夏美ちゃん？なんだい？その可哀想なものを見るような目は？

ぽかつ……！！

「い……イタイヨ！！なんでいつも殴るの！？お兄ちゃん！？ボク、心がイタイヨ！？（泣）」

「うるさい！！（泣）心がイタイのはこっちのほうだヨ！！ちくしよー！！（泣）」

思わず泣いちゃったヨ僕ちゃん。なんなんだ！？この涙は！？  
ぺろ……

やっぱり、しよっぱいぜ！！コンチキショウ！！！！（大泣）

「ナニやってんのよ……・あんだ……（汗）なに熱血少年野球的なオーラかもしたしてんのヨ……」

あんだ……全然似合わないわよ？あーきもいきもい」

……アリスさん……こんなときになにも追い討ちかけなくても……（泣）

「えい えい えい」

もみもみもみもみ（ナニかを揉んじゃってる音）

「あいだだだだ……！！……イってーよ……もつと優しく揉め……！！

バカ!!もつと優しく!!」

もみもみもみもみもみ

「はあはあ・・・優しく・・・コー君の・・・分身を・・・はあはあ・・・疲れたからコー君の栄養ドリンク貰うね」

「ナニ恐ろしいことをさらりと言ってんだヨ・・・(汗)おめえ・・・(汗)」

はい!変な想像してた人ざーんねん 僕ちゃんの肩をこのおばちゃん(お姉ちゃん)が揉んでただけでした

はい、間違えた方には残念賞としてポケットティッシュ1個進呈。ぱちぱちぱち~~~~・・・とはいえ、今の台詞はやぶあすぎるな・・・

「ったく・・・(汗)ゴリラじゃあるめえし、少しは手加減しやがれ。おバカ」

「だって私!うる若き花の乙女の18歳だもん!もん!」

「黙れ、おばはん」

「えい(はあと)」

ぎゅっがっちがっち(関節技炸裂!!!!)

「ぐえ!」

ぎゃああああ~~~~!!!!!!!!・・・ヘルプ美!へるぷみい~~~~!!!!!!!!!!

「わ・ん・も・あ・ぷ・り・..ず」

ぐぐぐぐぐ~~~~

「ぶぎゃああああ~~~~!!!!!!!!!!ぎぶ!ぎぶ!ぎぶみーチヨコレート!~!!」

ぐぐぐぐぐ~~~~

「わ・ん・も・あ・ぷ・り・..ず」

このアマしつけえええ~~~~!!!!!!!!!!ぎゃああぶあああああ!~!!!!!!!!

「コラあ~~~~(怒)貴様っ!!朝からKARAMEIプレイか



~~~~~!!!!!!3Pはやだつ!!!!

「っ!!!!な・・・なにやってんのっ!!!!このエロ大魔王がああ  
あああ~~~~~!!!!!!」

どぎゃああああ~~~~~んんんん!!!!!!(ひでおちゃん、  
殴・殺・!)

ぱりいいいい~~~~~んんんん!!!!!!(ひでおちゃん、  
華麗にメガネ割れたw)

「とれびあああ~~~~~んんんん!!!!!!」(ひでおちゃん  
の華麗なる断末魔)

ぱりいいいい~~~~~んんんん!!!!!!(ひでおちゃん、  
体ごと吹っ飛ばされて華麗にガラス破壊)

ぐさぐさぐさぐさぐさ!!!!!!(ひでおちゃん、ガラスで華麗な  
る負傷)

ひゅるるるるるるる~~~~~(ひでおちゃん、  
華麗に落下中 111は校舎三階)

ぐしゃり~~~~~(ひでおちゃん・・・華麗にダウト~~~~~  
!!!!!!)

「いやースマンな。アリス。助かったヨ。ありがとうな」

きらりん(村上耕司のスマイル)

「き・・・きも・・・べ・・・別にあんたのためにこんなことした  
んじゃあないんだからねっ!!!

へ・・・変な勘違いしてきもい想像したらぶ・・・ぶっ飛ばすわよ  
っ!?わ・・・わかったわね!?ふん!」

あ・・・アリスさん・・・ついに・・・ついにアリスさんにも『デ  
レ』が・・・

うづうづ~~~~~!!!!!!パパちゃまはうれしいぞおおお  
お~~~~~!!!!!!(大泣)

「~~~~っ!!!!」

ばき!!

「げぼあ!!!!」

「・・・調子乗りすぎました・・・」

「・・・ふくん、アリスちゃんっていうの？今のパンチすごいわね  
ーもしかしてナニか習ってる？」

「は・・・はあ・・・一応、剣道初段持ってますけど・・・？それが何か？」

まぢかよっ!!!!ひいいい!!!!今度から接するとき気をつけよう。

・・・(汗)

真剣とか持つてこられたらしゃれにならんぞい・・・(汗)

「すごい(はあと)わたしもそろばん6級もってるわよ(はあと)」

「いやいや姉さん!?その受け答え方おかすいーよ!?というか、びみよーな級だしな!!それ!!」

「むむむむむ・・・よおおくとナイスボディじゃない(はあと)(デイモールド)(非常に)うらやましいわあ(はあと)」

「あ・・・あの?・・・」

「・・・なんだか雲行きが怪しくなってきたな・・・(汗)

「うくん(はあと)その立派に育った『りんごちゃん』をプリンプリンしてみたいわあ」

「えっ!?えっ!?えっ!?ちよ・・・ちよつと・・・(汗)」

「大丈夫よん(はあと)優しく優しくオネエサンが包み込んであげるわよん」

「何を包み込む気ですか!？」

「え?んーつと・・・夢とか希望とかハートとか？」

「意味がわかりません」

「いいから いいから 琴みんを信じて」

「い・・・いやああああー!!!!!!だれかつ!!!!!!だれかつ!!!!!!だれかつ!!!!!!だれかたすけ・・・」



「あ・・・お兄ちゃん行っちゃったヨ・・・」

「うっうっ(泣)・・・せっかく、『耕司さんLOVELOVEそば  
る弁当』作ったのに・・・」

悔しいですう・・・(泣)」

「・・・(泣)百合ちゃんすごいね・・・(汗)・・・」

・・・ボクも負けられないよ・・・」

「・・・今、何か言いました？なっっ・ちゃ・ん・？」

ひゅっうっうっうっ~~~~(百合ちゃんの殺気)

「え？え？ボクは何もイツテナイヨあは！あはははは~~~~

~~~~(汗)」

「ですよー あはははははははははははは~~~~

~~~~

(生徒Z)「女の子の嫉妬はマジ怖い・・・(汗)」

「やあ！君たち！耕司きゅんの代わりに僕が君たちをエスコー  
トしようじゃあないか(はあと)

ついでに君たちの愛妻弁当を僕が処理してあげようじゃあないか  
(はあと)

ついでに君たちも喰ってもイイかな？かな？はあはあはぶっうっうっ  
う~~~~ん!!! (はあと)」

「絶対嫌です(はあと)あなたにやるぐらいだったらガチャピン  
にやった方がましですう(はあと)」

・・・そのころ屋上では・・・

「さ・・・では、さっそく・・・人気も無いことだし(はあと)」

「うほおおおおー!!!!!!誰かつ・・・!誰かたすけ  
てぞなもしいいいい!.....!」

「げへへへ~~~~~~~~わーたーしーのーおーひーる







第21話『姉と弟は絡み合うものだ』と知らないおじちゃんと言ってた。まあ、嘘

まあ、嘘ですが（^^）

第22話『NOT ONLY HAPPY DAY BUT ALSO BAD』

時間軸とかめちやくちな気がしますがその辺は気にしないってこと  
とでよろしくお願いします



れくらい嬉しいってことなのさっ  
コーちゃんウレピー よっピー ひゅっー

ざわざわがやがやもみもみさわわ・・・

新クラス発表の掲示板前には蟻のように人が群がっている・・・

うふふふふ・・・ようやく、俺の学園天国がここから始まる  
というわけだな・・・

ぐふふふふ・・・まず、新しいクラスのかわゆい女の子たちと  
仲良くなつてえ・・・

げへへへへ・・・そんでもって、メルアドと電話番号聞き出し  
て・・・

うひひひひ・・・んで、ある日仲良くなった女の子から一通の  
メッセージ・・・

2000/9/29 8:50

送信者：さゆり

題名：あなたに会いたい・・・私・・・寂しいの・・・私の全てを  
受け止めて・・・

本文：今夜空いてる？泊まりに言っても・・・いいかな？

さゆり『……ホントに今日泊まっていてもいいの?』

耕司『ああ……いいとも……今日は『偶然』家族が旅行に行つて留守にしているんだ……』

さゆり『コージ……ありがとうございます』

耕司『ふふっ……そんなに気にすんなって……友達だろ?俺ら?友達が困つてのに見てみぬふりなんかしねえよ。だから、俺がもし困つてたりしても助けてくれるよな?さゆり』

さゆり『……友達……か……』

耕司『?どうした?さゆり?』

さゆり『……したい』

耕司『?声小さすぎてよく聞こえねーゾ?もう一回言ってみるよ』

さゆり『……したいの』

耕司『だから聞こえねーつてもう一度アンコール』

さゆり『こ……耕司と友達以上の関係になりたいの!!!!!!』

耕司『!!!!!!』

耕司『う……嘘だろ?……さゆり……お……俺たち……と……とも……友達だよな?……学園一美少女で清楚で可憐で天使のようなお前が俺みたいなのを好きになるわけが……』

さゆり『わたし……耕司と最初に出会った時からずっとずっと……耕司のことが好きだったんだよ?ずっとずっと好きだったんだから……でも耕司つてば鈍感だから全然気付いてくれなかつたし(笑)』

耕司『……さゆり……』

さゆり『あはは……今までやったこともない弁当作りでめっちゃくちゃ失敗したし……』

耕司『……! (あの時の手作り弁当は俺のために作ったものだったのか……)』

さゆり『あはは．．．何気なく誘った遊園地もすつごい楽しかった．．．』

耕司『．．．．．』  
さゆり『あ．．．あれ．．．？なんで．．．なんで．．．わたし．．．  
．涙．．．』

耕司『．．．ほら．．．これで拭け．．．』

さゆり『あ．．．ありがと．．．うつつ．．．ぐす．．．』

耕司『．．．俺も．．．．．』

さゆり『．．．え？．．．』

耕司『．．．多分だいぶ前からお前のことが．．．好きだ  
つたと思っ』

さゆり『．．．え？．．．』

耕司『．．．だからよ．．．その．．．俺と．．．

その．．．付き合ってくれねえかな』

さゆり『．．．うん．．．ありがと．．．私も好きだよ。耕司の  
こと』

耕司『．．．．．』

さゆり『．．．．．』

耕司『．．．なんだか気恥ずかしいな』

さゆり『．．．そうだね』

耕司『と．．．とりあえず．．．俺の部屋でも行くか？』

さゆり『う．．．うん．．．そうだね．．．』

耕司『？どっした？さゆり？』

さゆり『．．．．．』

耕司『おい．．．？』

さゆり『わ．．．わたし．．．耕司の．．．』  
『全て』が．．．

ほしいの』

耕司『．．．さゆり．．．』

さゆり『ああっ！いい！いいの！！来て！！来て！！来て！！』耕司  
『！！！！！！』

耕司『ほ……ほんとうにいいのか？……さゆり……』

さゆり『こ……耕司の……熱いのがほしの！！入れて！！は  
やく！！！！！！！！』

耕司『わ、わかった……い……イクゼ？……』

ずぶぶぶぶぶ……

さゆり『あああああ~~~~こ……耕司の熱いのが……熱い  
のが！！！！』

耕司『わっはははは~~~~くらえ 俺の『64マグナム』

！！！！』

( ) これ以上続けていると本当にR18になりそうなのでここで省  
略)

「な~~~~んってことになっちゃったりしちゃって！！！！げひ  
やひやひやひやひや~~~~」

「……お兄ちゃん？……ナニ考えてるの？……」(夏美)

「……アンタ……それ口に出てるわよ……」(アリス)

「……こ……耕司さん……？」(百合)

「……え？あれ？みんなどしたの？え？俺今考えてたこ  
と口に出てたの？」

「……だから、そー言ってるのよ……果てしなく気持ち悪  
かったけどね。あんた」

「お兄ちゃん……さすがに……それは……引く……」





ざく・・・ざく・・・ざく・・・(足音)

「だ・・・誰だねっ!？」

げげっ!.....! 条一郎君とメガネっ!.....!

「うっふふふふ・・・ウホッ・・・一年間ステキングな毎日  
をよろしくね?」  
「コーちゃん?」  
「」

にっこり

「・・・(汗)・・・い・・・いやだあああああああ!.....!  
!.....!.....! コーちゃんそんなのいやいやよおおおおお  
お!.....!.....! コーちゃんいやあああああああ!.....!  
!.....!.....!」

.....

そして、新クラス3-Aの教室で待機中の耕司君.....

「オレ・・・オレ・・・ばあちゃん・・・オレだよ・・・オレ・

.....」

オレオレ詐欺!?

「.....オレ.....アシタカラドウヤツテイキテイケバイ  
イノダ.....」

.....

「えい」

「ぐえ!」

ぎゅっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっ  
!.....!

「ぎゃぶにゃあああああああ~~~~~!.....!

!.....!.....! だれだあ!?! 何をするっ!?!」

いきなり後ろからピンポイントに首を絞められたっ!.....!.....! う・

・うづつ！！！！！！  
こ．．．．これは．．．．かなり．．．．やぶあい．．．．  
く．．．．くそ．．．．  
こ．．．．こんなところで．．．．ぐつは．．．．ちくじょ  
）．．．．  
もうちょっと、エロゲー最後にやりたかったなあ．．．．ウハウ  
ハしたかったなあ．．．．  
．．．．ああ．．．．だめだ．．．．  
い．．．．意識が．．．．遠のく．．．．  
．．．．

「げほつ．．．．げほつ．．．．いきなり．．．．いきなり  
人の背後から首絞めるとはどういう見なんだっ！！！！てめー  
っ！！！！このアマっ！！！！男だったら確実に病院送りにし  
てたぞ！俺！！」

「おっ やつと生き返った！」  
「生き返ったとかいうなっ！！！！死んでねえっ！！！！」

なんてやつだ．．．この女．．．外見はかわいいけど．．．中身は  
ドツロドロの悪魔天使じゃねーかっ！！！！

「ゴメンゴメン あたし普通にあいさつできないの（はあと）」  
「何だっ！！！！その．．．私には悪くないの」的な台詞はっ！！？  
「だって、あたし悪くないもんもん」

「き．．．貴様っ！！？」

も．．．もう！！！！許さんっ！！！！こいつが女でも許さんっ！！！！  
南無三つ！！！！



あげるから」

にっこり

びっくー!!!!!!

「ひ……ひい!?お……お兄ちゃん!?」

うむ 後で夏美ちゃんにはかわいいこかわいいこしてあげようっ!!!!!!

「あんだ達……はしゃぐのはいいけどそろそろ席に着きなさいよ……新しい先生が来たわよ……」

アリスさん……あんだ……ええ人や……

さて……新しいクラスの先生は……どんな人かな?

美人さんで出るとこ出てるボンツキュッボンツがいいなあ……

頼むから……キュッボンツキュッは止めてくれよ……

がらららら…… (ドアの開く音)

ここに来た先生は……

「グツツモ〜ニーン(はあと)皆の衆!!!!色々と溜まってるかい!!!!!!」

………なんですか?

なんと………新しい先生とは………麻美さんのことだった……

………

オーマイガッ!!!!!!



第22話『NOT ONLY HAPPY DAY BUT ALSO BAD』

次回は赤ブルマ天国デス

第23話『ブルマはね、はみパンがいんだヨ。はみパンが』（前書き）

予告どおり今回は赤ブルマ天国です・・・



第23話『ブルマはね、はみパンがいいんだヨ。はみパンが』

「・・・というわけでえ〜一年間このクラスを受け持つことになった八尾麻美でえすう みんなー

これからヨロシクシコシコ〜 にやはははは〜  
な・・・なじえっ!?なじえっ!?なじえ、奴(麻美)がこの学校の俺のクラスの担任にっ!?

さ・・・最悪っ!!お・・・おかしいよっ!!しかもあんたまだ現役大学生だろうがっ!!なんでだ!?

・・・というか!!しよっぱなから下ネタかヨ!!!コノヒト!!!  
「ん〜・・・じゃあ、まずは一人一人自己紹介してもらおうね〜  
ほいじゃあ、名前と性感帯をイッテネ

とかいって、ほんとうにイッチャわらないようにっ!!!にやははははは〜  
は〜」

・・・なにかとムラムラしすぎだろ・・・コノヒト・・・(汗)  
クラスの女子は赤くなってる奴が多いな・・・まあ、そうだよな・・・

・・・野郎供は股間に手を当ててはあはあと息が荒い奴が多い・・・  
てか、お前らも無駄に興奮しすぎだ。

少し慎め。楽しむ(気持ちよくなる)のは自分の家でだけにしとけ。  
見ているこっちが気持ち悪くなる。おえ

「あ!そうそう!全員赤ブルマ着用っことでヨロシク」  
なんでだっ!?

「・・・出席番号1番・・・アリス・ブランドー・・・  
よ、ヨロシク・・・」



「……(汗)……なんで俺有名になつてんだ……(汗)」  
「……どーせ、悪い噂が立っているんだろうな……絶対……はあ……」

「おい、ところで話変わるけどよお……やっぱイイヨな……ブルマつて……なんとっても！」

ブルマでいいのは、『はみパン』だよな……ぐふえふえ……こう……なんていうかな……

ブルマの隙間から中途半端に出ている純白のレース……嗚呼っ！  
！！そそられるっ！！しびれるっ！！

ソコに憧れるう！！！！

「……ただし使用条件は着用者がメス限定であることだがな……」

野郎供が赤ブルマなんぞ履いた日にゃあ、天罰が下るぞ。そりゃあ、神様だつてんな気持ち悪いもん目の当たりにしたら誰かをぶん殴りたくもなるわ。でも、まさに今俺らがその状態なんだがな……どうしたものかね？これ？このあたり一面に広がる気持ち悪い情景。生足きもいよ。すね毛な生足きもいよー。

「……お……おい……耕司……俺、こついつの初めて着るんだけどさ……な……なんかすーすーするよなあ……んでもつて……なんか……その……大勢の女子に見られてるじやんか？……」

はあはあはあはあはあ……こ……興奮しねえか？」

「しねえよ！！赤くなつてんじゃねえ！！キモい！！そして、ソコをもこもこさせるなあ！！……きもすぎるっ！！……」

すでに貴様のブルマぱんぱんになつてんじゃねーか！！……少し抑えるっ！！ソレっ！！

「アリスた~~~~ん！！！！性感帯はああああ~~~~  
?????」(耕司以外の野郎供)

あゝああ……おまいら……死にたいのか？……



「僕は出席番号15番の高宮条一郎です 趣味はK・M・さんの童貞を奪うことです(はあと)」

「……ん？K・M・？……それ、僕のことじゃあないよね？条一郎君？ね？条一郎君？」

「ねっ！？条一郎君っ！？ね！頼むからそういつておくれよおおおおおおおおおおお(泣)」

「頑張りましょう」「(条一郎君と麻美さん)ぎゅっぎゅっ(手を握る音)」

「……十二っ！？今のほほえましい握手！！！」

「いえい ナンバー27の宮子春美だぜい！あたしのは『ラオウ』って呼んでね た・だ・し(はあと)

「(耕司君！！君は私のことを『ハルヤン』って呼んでね)」

「……宮子ちゃん……君はアニメの見すぎだヨ……  
……そして、おい。ブルマ野郎軍団。なぜ、俺をそんなに睨む？睨んでも何も出てきませんからね！！」

「ええ……ようやく前菜を終えてやっとやってまいりました……」

「本日のメインディッシュのおおおお！！村上耕次郎君だああああ









第23話『ブルマはね、はみパンがいんだヨ。はみパンが』（後書き）

・このあと村上君がどうなったかは読者のご想像におまかせします・・・

第24話 『僕の体は豆腐でできている』 (前書き)

またキャラ増えます。

## 第24話 『僕の体は豆腐でできている』

ばきっばきっばきぽっばきぽっばきぽっばき  
ぶすぶすぶすぐさぐさぐさ

.....

今はちょうど四時間目の麻美さんの授業中だ。麻美さんの専攻は英語らしい。まあ、んなことはどうでもいいことだが。つまり、このちょうど昼時の授業中はものすごく腹が減る訳で.....んでもって、眠いわけで.....

・じゃあ寝ればいいじゃん、だって？ああ！寝たいさ！俺だってものすごく寝たいんだ！けどね？.....  
今僕の席の横にいる悪魔少女が.....  
ばきっばきっばきぽっばきぽっばきぽっばき  
ぶすぶすぶすぐさぐさぐさ

.....

.....このようにシャー芯を僕に飛ばして攻撃してくるわけで.....これ、地味に痛いよね。

ばきっばきっばきぽっばきぽっばきぽっばき  
ぶすぶすぶすぐさぐさぐさ  
あいだ！いでででで！ちよっw.....！痛いって！そろそろやめっ.....！ってちよっ！ナニ笑ってのお

！？この子！その君の無邪気な笑顔の瞳の奥にはナニが隠されているの！？

ばきっばきっばきぽっばきぽっばきぽっばき

ぶすぶすぶすぐさぐさぐさ

.....かっちくん.....

「てめえ!! さつきから地味な嫌がらせしやがって!! ちよつち痛  
いんだYO! やめんか、ボケえ!!」

俺は声のトーンを下げて俺の横の席に座っている悪魔少女もとい宮  
子春美に言い寄った。

「! ええ!! なになに!? 耕司君それ私への求愛行動? いや〜ん  
まいつちんぐう」

だめだああああ!! この子にはまるっきり日本語が通じないア  
ルヨ!!

「いや〜ん どうしよう どうしよう」

ぱきっぱきっぱきっぱきっぱきっぱきっ

ぷすぷすぷすぐさぐさぐさ

ぱきっぱきっぱきっぱきっぱきっ

ぷすぷすぷすぐさぐさぐさ

ぱきっぱきっぱきっぱきっぱきっ

ぷすぷすぷすぐさぐさぐさ

「あいだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだ  
だだだ!!

だああああ〜〜〜!! 増量したっ!?

禿げてるおっちゃんにとってはそれはとても喜ばしいことなんだろ  
うけども俺はちっとも嬉しくない!!!

ってソナナコト考えている場合じゃなかった!! なに毛の話してん  
だ!! 俺!! バカかつ!! もう、我慢できん!!!

「ごらあ!!! ストツピングしろといつとんだろうが!!!

! このアマツ!!!

俺は大声で宮子に怒鳴りつけた。 . . . ? あれ? 俺、な〜んか  
忘れてるような気が . . .

. . . あ(汗) ( ) 授業中デス。しかも麻美さんの( )

「 . . . ( ) 麻美( )

「・・・・・・・・（汗）」  
やべえよおおおお・・・・・・・・（汗）うわああ・・・・・・・・アノ人  
笑顔でめっさこっち見てるよ（汗）コワイヨコワイヨおよよ  
「むふふふふふ」そうね」耕次郎きゅんと保健室という密閉空  
間の中でひとときの『あばんちゅる』というの・・・・・・・・ぐふふふ  
ふふ・・・・・・・・」  
「ゴメンナサイ。モウシマセンカラ、ユルチテ（泣）」  
まちでそのあんたのフェイス怖いからネ！！（汗）

そして、10分後―

・・・・・・・・（汗）  
腹いて・・・・・・・・（汗）・・・・・・・・まさか・・・・・・・・今朝飲んだ賞味期限  
切れの牛乳飲んだのがまずかったかにや  
・・・・・・・・そういえば、あの牛乳なんかどろつとしたチーズみたい  
なのも混ざってたな・・・・・・・・（汗）  
くそっ！くそっ！くそっ！ミルクちゃんのバカ（泣）  
「・・・・・・・・？どうしたの？お兄ちゃん？なんか顔色悪いよ？」  
期限が切れただけにゴキゲンなめ・・・・・・・・  
つてなんでこんな時につまらんギャグ編み出してんだ！？俺！？俺  
のバカっ！！  
あゝくそっ！腹痛くて死にそう・・・・・・・・あゝ！！！！なんか急に腹立っ  
てきた！！！！  
「ふんがああああ！！！！！！ミルクの馬鹿野郎！！！！！！」  
「お・・・・・・・・お兄ちゃん！？本当に大丈夫！？いろんな意味で！？」  
「ん・・・・・・・・？ああ・・・・・・・・ミルクちゃんか・・・・・・・・ああ、大丈夫だ。  
ミルクちゃんは大丈夫と言っている」

「ナニ言つてんの！？すでに手遅れだヨ！？（汗）」

「こりゃあ、重症ね・・・」（アリス）

くそ〜・・・なんか頭まで痛くなってきたよ・・・くう〜・・・

「ナニ！！！！耕司きゅん！？誰だあ！？その・・・！ミルクという女あ！！！！ま・・・まさか・・・！

脳内妊娠！？だ・・・だから顔色悪かったのかっ！！！！いかん！！  
！いかああああん！！！！！！

お・・・お父さんはそんなこと許しませんからねっ！？」（英男ちやん）

・・・あ〜、なんでこのメガネテンションたけーの？ちよ〜、  
うぜ〜（はあと）

「耕司君！！それ病気だヨ！！病気！！！！頭の病気だヨ！！！！病気  
！！！！病気〜！！！！すぐに病院行ったほうがイイヨ〜！！！！」（春美）

「・・・心配されてるみたいだが・・・なんかお前の物言いちよつちム力つくんだけど？」

というか、頭の病気って・・・それはどういう意味だこらあ！！！！！！

「じゃあ、私が先生にそのこと言ってあげるから早く保健室行つて来なよ」

「え・・・まじでか？すまんな・・・」

・・・なんだ、コイツ少しはいいところあんじゃねーかよ・・・  
「センサーセンサー！耕司君が淋病で苦しんでま〜す！保健室に行かせたほうがいいと思いま〜す！」

「てめっ！！！！この、アマっ！！！！！！！！」  
前言撤回！！！！やっぱコイツ悪魔だ！！！！

「な・・・なんですってえ！！！！毎日フラウープで腰を鍛えていたのはそのためだったのね！！！！

こ・・・この・・・！！！！不潔！！！！アンタの 液黒いくせに  
！！！！不潔！！！！！！

「不潔はてめーだっ！！！！！！」  
くそ〜・・・ますます頭が痛くなってきたよ・・・ついでに腹も・・・  
あいたたたた・・・  
「ったく・・・とりあえず、保健室行ってくるよ・・・いててて・・・」  
「お兄ちゃん・・・ちよつと、待って・・・」  
「あん？」  
「この先辛いことが色々あると思うけどみんなで乗り越えていこうね 誰もお兄ちゃんのことを悪くは言わないから安心して」  
「いや違うからね！？お前、宮子の言ったこと信じてたの！？馬鹿じゃねえの！？そんなまぶしい笑顔見せられても！！！！そういうの対応に困るから止めてくれない！？」

・・・そして、保健室にやって来た・・・

コンコンコンコン・・・（ノックの音）

・・・？保健室の先生はお留守か？・・・仕方ねえ・・・中のベッドで少し休ませてもらおう・・・

がちやり（ドアを開く音）

「すーすー・・・」

がちやり（ドアを閉める音）

・・・

なんだっただんだ？今のは？（汗）あきらかに小学生みたいな女の子がベッドで寝ていたゾ？

・・・入っていいのカナ？入っていいんだよね？よし入るぞ！！  
るああああ！！！！！！

がちやり（ドアを開ける音）







「お兄ちゃん、お腹と頭大丈夫？」（夏美）

「心配なので私も来ました。大丈夫ですか？」（百合）

「……別に……来たくて来たわけじゃないんだからね・

・」（アリス）

………うわおう（泣）

「またやろうな 耕司君 『お医者さんではあはあ』（こ）

幼女（18）

………

「あんぎゃあああああああああああああああ………！！！！！！

！！！！！！」（耕司）

・  
・  
・  
・  
・

ちなみにこの幼女（18）の名前は八尾麻里<sup>やおまじ</sup>。  
麻美さんの妹で学園の生徒会会長らしいです。ハイ。

第24話 『僕の体は豆腐でできている』 (後書き)

短編の方も読んでもらえれば嬉しいです。

第25話『うれしはずかし男女脱衣麻雀決定戦！！』（前編）『（前書き）』

麻雀をあまり知らない人はすみません・・・





！……………！！

「おおおおつ！！！！やつたつ！！！！メガネ！！！！お前すげーよ！！！！いくら挑発して乗せようと思ってもあそこまで俺はできねーよ！！！！つておい！！！！メガネ！！！！聞いてんのか！？」

じよぼぼぼぼ~~~~~

「……………？』じよぼぼぼぼ~~~~~』？」

……………つておい……………メガネ……………お前……………もしかして……………漏らして……………

「うええええ~~~~~ん！！！！こわかったよおおおおおおおおお！！！！誰か僕を助けてえええええ~~~~~」

めっさびびつとるジャン！！！！こいつへたれ~~~~~！！！！！！

「さあ！！！！連れて来たわよ！！！！さっそく始めようじゃない！！！！」

は……………はやっ！もの一分ぐらいで帰ってきたよ！！！！うわあああ……………殺気びんびんだよおおお……………

「あ……………ああ、さっそく始めようじゃがないか諸君（汗）」

舌嚙んでるよ……………このメガネ……………めっさ動揺しとるじゃん……………

「もう……………私まで巻き込まないで下さいよ〜アリスちゃん〜」

あつこの子確か……………同じクラスの『村田百合』つて子じゃん。かあいいなあ……………いかん……………

この子の裸を考えると興奮してきた……………はあはあ……………

「百合！！！！本気でやりなさいよ！！！！負けたら素っ裸なのよ！？シヤレになんないわっ！！！！」



「ええ！？そんなの聞いてませんよ〜いやですう（泣）」  
そしていつの間にか俺らの周りにはギャラリー（生徒）がひしめき合っていた・・・

・・・むさい男ばっかだよ・・・つうか、なんか暑苦しいよ！！！君たち！！！！

しかもなんかくさっ！！！！脇の下くさっ！！！！寄るなこらっ！！！！  
「おい！！！！サルっ勝てよ！！！！負けんなよ！！！！誰もオメーらのむさい裸なんぞ見たくねーんだからよ！！！！！！！！」（男子A）

「メガネ〜！！！！びびってんじゃあねえぞ！！！！こらあ！！！！」（男子B）

「アリスちゃん！！！！頑張つて！！！！こんなケダモノ達なんかに負けないで〜！！！！」（女子A）

「そうよ！そうよ！こんな変態供に負けたらしょうちしないんだからあ！！！！」（女子B）

「こらあ！！！！誰だっ！！！！今サルつて言ったの！！！！出てこいの野郎！！！！（泣）」

ああ・・・女子の好感度が下がってゆく・・・

「ふむ、さて。麻雀の基本的なルールは変わらないが、少しルールを付け足そう。読者にもわかりやすく箇条書きにしてみたぞ」（英男ちゃん）

・「東4局 南4局 東4局 南4局・・・」のよつにどちらかが『全脱ぎ』になるまで局は続く。

・基本的に脱衣は直撃ロンで直撃された人が『1枚または一足』脱ぐことになる。

・ツモあがりは男子（サルか英男ちゃん）がツモったら女子（アリスと百合）が脱ぎ、逆に女子（アリスか百合）がツモったら男子（サルと英男ちゃん）が脱ぐことになる。

・満貫未満は1枚(足)脱ぎ、満貫で2枚(足)脱ぎ、ハネ満で4枚(足)脱ぎ、倍満で6枚(足)脱ぎ、さらに役満で全脱ぎ、つまり一回でも『役満』が出ればその時点でゲーム終了ということになる。

・『チョンボ』は責任払いとして『1枚または1足』脱ぎとなる。

「・・・ふう、こんなところでいいかね？諸君？」

「すみません？あのう・・・ちよつと追加ルールいいですか？」

「ん？なんだね？百合たん」

「『満貫未満は1枚(足)脱ぎ、満貫で2枚(足)脱ぎ、ハネ満で4枚(足)脱ぎ、倍満で6枚(足)脱ぎ、さらに役満で全脱ぎ』ってあるじゃないですか？これでもし私達が勝った場合『満貫未満でストレート、満貫でタイキック、ハネ満でアゴにアッパー、倍満で急所に思いつき蹴り、さらに役満で再起不能になるまでたこ殴り』ってことでいいじゃないですか？私達だってあなたがたのような気持ち悪い裸体見たくありませんから。あなた達を痛めつけるほうがよっぽど健康にいいですから。えへっ(はあと)」

「・・・(汗)」(英男ちゃん)

「・・・(汗)」(サル)

「・・・この子・・・」

可愛い顔して・・・黒っ！ドンだけ腹黒いんだよ！！こわっ！！！！

「おっ！百合っ！それナイスアイデア！よし！じゃあ！それで決まりね！」

「あ・・・あのっ・・・？」

「文句あるっ！？」

バキッ！！！！！！(机が割れた音)

「イイエ、アリマセンヨ(汗)」

もう、メガネタジタジダヨ・・・（汗）

「よし！！決まりね！！じゃあ！！私達が勝ったら私達があんたらを『殴る』！！！！んで、あんた達のどちらか一方が『再起不能』になった時点でゲーム終了！！！！んでもって、あんた達が勝ったら私達が『脱ぐ』！！！！んで、私達どちらか一方が『全裸』になった時点でゲーム終了！！！！まあ、これはありえないけど！！！！それでいいかしら！！！！?????」

「ハイ・・・ソレデイイデス・・・（汗）」

「さて、最初は親決めからいこうか」

「サイコロの出た目が一番大きい目を出した奴から『親』だなっ！！！！」

結果・・・

1回戦

アリス・・・・・・・・東局  
百合・・・・・・・・南局  
サル（慎也）・・・・西局  
英男ちゃん・・・・北局

両者・・・絶対負けられない戦いが今始まるっ！！！！（次回へ続  
く）

第25話『うれしはずかし男女脱衣麻雀決定戦!!!』(前編) (後書き)

つづきます) ^ ^ (

第26話『うれしはずかし男女脱衣麻雀決定戦！！』（中編）『（前書き）』

あまり麻雀の細かいルールは考えていません。  
だって僕、初心者ですもの。

第26話『うれしはずかし男女脱衣麻雀決定戦！！』（中編）

・・・皆様、こんにちは。サルです。お元気ですか？

もちろん僕ちゃんも元氣モリモリです。特におつとせいが。

・・・って違うわ！！！赤神慎也だよ！！！！十二言わせてんだ！

！！作者ああああああ！！！！！！！！！！

んじゃあ、前回の続きイツチャウぞごらあ！！！！

東1局ー 親：アリス 哀れな子供達：百合たん、チェリーボーイ  
慎也、メガネマン

・・・って誰が『チェリーボーイ慎也』だっ！！！！こらっ！！！！

それならまだ『さる』の方が数倍ましだったよ！！！！！！！！！！（泣）

・・・いかんいかん・・・ついまた突っ込んだしまった・・・進まね

えな・・・（汗）

・・・それにしても・・・なんだ？この手牌？・・・バツラバラじ

やねえか・・・（汗）

テンパイに程遠いぜ・・・やばいよ！やばいよ！（汗）これはマジ  
やぶあい！！！！

くっ・・・この手じゃあ、この局はあがれんな・・・しかし、まだ  
メガネがいるっ！！！！

（慎也）「おい・・・メガネ！お前はいい手きたのか！？」

ちらっ（ひでおちゃんの方を向く）

「・・・（目が合うひでおちゃん）」

「・・・（目が合うさる）」

ドキドキドキドキドキドキドキドキドキドキドキ









くっそ〜こいつら〜・・・言いたい放題言いやがって〜地獄へ落ちる〜!!!あほっ〜!!!

「や・・・やったあ ツモですう!!!」(百合)

「「なっ・・・なにいいいいいいいい〜」!!!」

「やったじゃない!!!百合!!!しかも満貫よっ!!!」(アリス)

う・・・うおおおおおおお・・・ほ・・・本当に・・・ツモられた・・・(泣)

「きゃあああああああ!!!」やったあ!!!」(女子A)

「すごいよ〜!!!アリスちゃんも百合ちゃんも!!!」(女子B)

「あーあ、またかよ」(男子A)

「ばかじゃねえの?こいつら?」(男子B)

ぐっ・・・くそう・・・これで・・・5連敗・・・(泣)

「じゃあ、私がお二人にタイキックすればいいんですね」

・・・ナンダカモノスゴクウレシソウデスネ、ユリサン(汗)

「(しかし・・・あのアリスよりは・・・ましだろ?」(慎也)

「(・・・まあ、攻撃力はアリスたんより劣る・・・)」(ひでおちゃん)

「じゃあ、ふたりいっぺんにイキマスヨ」

「か・・・かまんっ!!!」

「え〜い」

ぐぎゃ〜!おおおおおおおおおおおおおおおおん!!!!!!

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「のおおおおおおおおのおおのおおのおおのおおのおおの~~~~~」

うぎゃああああああああああああああああああああああああああああ!!  
!!

めっさいてえええええええええええええええええええええええええええええ!!  
!!

「……………」

「……………」

東2局5本場が始まる……………  
……………つまりですね、はい。僕達もう8連敗しちゃ  
つてんですよ。はい。

……………もう、限界かも……………(泣)

「おい……………メガネ……………これ以上のダメージは危険だぞ……………  
……………げふっ……………」

あは……………ちよつと血吐いちゃったてへ

「ふむ……………僕も限界だ…………………………しかし……………」  
「……………『しかし』?」

「き……………気持ちいい……………ふ……………ぷぴぴぴ……………(はあと)……………」  
「……………」

「君もそう思わないかい?」

「思いません」

「残念……………」

『残念』じゃねーよ。ど変態野郎が。

あーあ……………どうすんだよ……………もう……………このままじゃ『脱

衣麻雀』なのにはろりなくなっちまうぞ

「……先に俺らがぼろりとイキソウ……」(汗)

「うふふふふ……だが、しかし……麻雀をやっている最中で僕は絶対勝てる作戦を思いついたのさ

……」

「な……なに……？絶対勝てる『作戦』……だと？」

(次回に続く)

「にゃははははは……！！！！読者の諸君！！！！次回は『ぼろりでいや〜ん(はあと)』だっ……！！！！乞うご期待……！！！！」(麻美さん)

「あの……？一応この小説全年齢対象だからさ……」(汗) 最後まではいかないよ……きつと……」(汗)

(夏美)

「でもでも……！！！！『夢』を持つことはすばらしいでしょう……！！！！ああ……！！！！なんていい響き……！！！！」

「嫌な『夢』だね……」(汗)



第26話『うれしはずかし男女脱衣麻雀決定戦!!!』(中編)『(後書き)』

もうちょっと続きます(^^)(

第27話『うれしはずかし男女脱衣麻雀決定戦！！』（後編その1）『（前書き

だんだんいろんな人が壊れていきます・・・









「（誰が鳴沢君だっ！！！さっさと、よこせ！！馬鹿っ！！！！）」  
よしっ……！これで、三アンコだっ……！し……しかも……  
！三色同ポン！トイトイも狙える！！！！

ついてるぜ！！！やほほ……い！！！！みなさんもお気づきだろうか？  
このイカサマはあくまでも確率的に

いい牌をそろえようとしているだけなのだ。つまり、俺とメガネの  
手がクソ手ならば意味がない。

しかし、同時に十分これは効果があるともいえるのだ。

「ぐへへへ……」（サル）

「ぶぴびび……」（ひでおちゃん）

「……なにあんたら、気色悪い笑い方してんのよ……さっさと  
捨て牌出しなさいよ。バカ」

「ふふふ……そうやって、余裕こいてられるのも今のうちだぜ？  
アリス」

「？……というか、ナニ親しげに呼び捨てしてんのよ。エテ公の  
くせに」

かちゃ……かちゃ……

そして……2巡目……ついに……

「……ふふふふ……ついに……ついにきたぜ、この時を待  
っていた……『リーチ』……」

「なっ……!?!」

「えっ……ええ!?!」

ふふふ……驚いてる、驚いてる……さあ……来いっ！通せる  
もんなら通してみやがれっ！！！！

「……これね」

かちゃ……つち……運がいい女だ……いや……

「……これです」

かちゃ……ふん……なるほど……この二人運がいいだけ  
でなく、確かに『腕』もいい……

俺の捨て牌から危険牌を読み取っている……頭がいい女達だぜっ



調子のいい野郎達だぜ・・・やれやれだぜ・・・

「「「「「きやああああ！！！！この変態！！！！ど鬼畜！！！！  
エテ公！！！！しんじゃえ！！！！」」」」」

「・・・今度は女子の『死ぬ死ぬコール』が響きわたる・・・  
・・・エテ公は真剣に傷ついたヨ・・・うえーん！！！！」

「くうづづづ・・・」(アリス)

「ふ・・・ふえええ・・・」(百合たん)  
ぬぎぬぎ・・・

「・・・ふたりとも悔しそうに一枚一枚脱いでいく・・・  
百合ちゃんなんかもう赤くなつて泣きそうになつてるよ・・・か・・・  
かあいい・・・はあはあ・・・

靴・・・2足・・・そして・・・靴下・・・2足・・・

「・・・なんか、モーレッツに悔しいのは俺の気のせいか？うー  
む・・・しかし・・・メガネは・・・

「はあはあ・・・なまあし・・・はあはあ・・・き・・・きれいな  
あ・・・アリスたん**と**百合たんの生足・・・し・・・白い・・・純潔  
の・・・うひ・・・うひひひひひひひ！！！！！！げひゃひゃ  
ひゃ！！！！！！」

「・・・すでに壊れていましたヨ(^^^^)

「い・・・いつまでも見てんじゃあないわよ！！！！この変態っ！！！！  
」

ばいっ！！！！

「ぶひっ！！！！」

哀れ、メガネ。罰ゲームでもないのにアリスさんに殴られました(^^^^)

そしてっ……！運命を分ける東3局が始まる……！

続くっ……！

「ややつ！やつっといいい展開がきたわねっ！！！」（麻美さん）

「……みんな、鬼畜だヨ……」（夏美）

「鬼畜とかいつちやあ駄目よ！！！鬼畜とは私のように純粋な乙女心を持つ者よ！！！！うっふっふん」

「別に褒め言葉じゃないんですけど……」（汗）

第27話『うれしはずかし男女脱衣麻雀決定戦!!!』（後編その1）』（後書き

役満は男のロマンですよネ!!!



第28話『うれしはずかし男女脱衣麻雀決定戦！！』（後編その2）『（前書き

色々頑張りました・・・（汗）



HA

「・・・なんだ？こいつ？・・・」

「ねえ、ヘナチヨコザル」

「・・・あれ？それ、僕のことですか？僕のことですか？（泣）」

「

「殴つてもいい？」

「よかないですよ！！！！（汗）」

「なんで、俺っ!？」

「じゃあ、あそこにいるハゲメガネは殴つてもいいのよね？」

「ドウゾ、オモウゾンブンカワイガツテアゲテクダサイ」

「てくてくてく・・・（アリスがひでおの方に向かう）」

「A〜HA〜N?どうしたのにかにゃ？アリスたん?・・・その刺激的な瞳・・・はあはあ・・・」

オジサンいろんなところがどきどきわくわくシチャウヨク・・・

げびぶぎゅらっぺー!!!!」

どがすどがすどがす・・・

・・・

てくてくてく・・・（帰還）

「・・・では、今から僕が提案する追加ルールを説明させてい

ただきます・・・」

「・・・」

・・・口調かわつとる・・・

「僕が提案するのは次からは負けたら脱衣だけでなく『オプション』もつけてもらうというものだ」

「『オプション』?」

「ああ……例えば……このネコ耳とかバニ耳とかわんこ耳とか波平ヅラとかマ オのひげとか……」

「……後半の二つはいらね……」

「あと、大人の玩具!!! バイ……ペさああああ!!!」  
「哀れ、メガネまたもや殴られる。」

「私、笑えない冗談って嫌いなよね……」  
「にっこり」

「……アリスさん、目が全然笑っていません(汗)」

しかし……この……『オプション』……やぶあいな……

「まあ……このくらいならいいんじゃないの? ね、百合?」

「はい……まあ……このくらいなら……いいです」

「やっだああああばああああ!!!」

「メガネ、お前回復早すぎ」

「た・だ・し・! あんた達が負けてもコレつけてもらつたよ!」

「……結局そうなりますよね……(汗)」

かちや……かちや……

俺達の作戦はとりあえず役はなんでもいいから早く『あがる』ことだ。だって、満貫以下でも『1枚脱ぎ+オプション』だからな。あと4枚脱ぎでアリス達はGAME OVERだ。無理して満貫やハネ満を狙うことあ無い。まあ、狙えるもんなら狙うけどね。しかし、麻雀っていうもんはそんなにツキが続くモンでもない。(まあ運しだいだと思うが)急に流れが変わるコトだってある。まあ、俺らは正攻法で戦っていないが。

かちや……かちや……





「っ！百合になにしようとしてんのよ！……この……変態！  
！……！」  
ば「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおん！……！！  
！……！！……！！……！！……！！……！！……！！……！！  
「ハッピー」  
！……！！……！！……！！……！！……！！……！！……！！  
ハッピーじゃねえよ

「うう……（泣）」  
かちや……かちや……  
……そして、ネコ耳装・着……！……正直……  
……  
たまりまへん（はあと）……はあはあ……も……萌  
え~~~~  
かちや……かちや……  
「！……それ……ポンです……」  
「ノンノン 百合ちゃん？君は今ネコさんなんだよ？ネコさんは語  
尾に『にゃ〜』とつけないと……」  
ぐふ！ぐふふふふふふふふ……」  
なに！？その特殊ルール！？そんなのあったっけ！？  
「調子乗ってんじゃあないわよ！……！！……！！……！！……！！」  
「ぶひゅううううううう……！！……！！……！！……！！」  
メガネ……お前は何回殴られたら気が済むんだ……（汗）

「ふふふふふ……アリスちゃん……」  
「……ナニよ……というか、ナニ『ちゃん』付けして

んのよ。この上なくきもいわ……………！  
げすっ……………！！

「あう……………！！」

……………なんか、もう飽きてきたな……………

「はあはあ……………アリスちゃん……………！！！！！！次は君に僕のあついのをぶち込んでやるZ E……………！！」

「……………！！！！！！」

そして、ひでおちゃんは星になった。

東4局1本場……………

かちゃ……………かちゃ……………

「（げへへへへ……………次はアリスちゃんを脱がしてやるぜ）

………………………………………そして……………

泣かして……………あんなことや……………こんなことも……………うひひひひひひひ……………！！！！！！」

「お前すんごいわかりやすい奴だよな」

こいつ絶対主人公になれないタイプだよな……………まあ、俺も主人公じゃないけど……………

その頃……………

「……………おい……………俺の出番はまだか……………」（耕









そして……次回、麻雀編決着!!!!!!果たして……どちらが勝つのか!?

( 続く……! )

「やほほほい!!!!!!ついに……!ついに!!!!!!ココまで来たわね!!!!!!」(麻美さん)

「……やれるとこまでやっちゃったって感じだよね……」

(夏美)

「はあはあ……んじゃあ……次はさらなる孤高の高みへ……」(麻美さん)

「……ボクもなんかお腹いっぱいだよ……」(夏美)

第28話『うれしはずかし男女脱衣麻雀決定戦！！』（後編その2）『（後書き

感想とかいただけるとありがたいです。参考になりますから（^^）

第29話『うれしはずかし男女脱衣麻雀決定戦！！！』（後編その3）『（前書き

とりあえず、麻雀編はこれで終了です。



















第29話『うれしはずかし男女脱衣麻雀決定戦！！』（後編その3）（後書き）

次回からはちょっとシリアスになる・・・かも？  
でも、ぜひ見て下さいね（＾＾）

第30話『俺と暴力女とか弱い女と馬鹿男と・・・』(前書き)

主人公の過去編スタートです。だんだん、シリアスになる・・・はず・・・



第30話 『俺と暴力女とか弱い女と馬鹿男と・・・』

・・・夢を見ている・・・

・・・淀んだ空気・・・

・・・息苦しい・・・

・・・薄暗い・・・

・・・冷え切った・・・

・・・廊下に・・・

・・・2人の少女と・・・

・・・俺、村上耕司・・・

・・・ただ、呆然と腰掛イスに座っていたー・・・

夢？いや、違うな・・・夢だけど・・・夢じゃあない。

俺は・・・この夢の状況を知っている・・・これは・・・俺

の・・・過去だ・・・

「・・・」

沈黙ー・・・

いや・・・そんな重苦しい空気の中、2人の少女のうちの1人が俺に向けて言葉を発した・・・

「耕司・・・お前のせいではない。・・・あれは・・・事

故だったんだ・・・

いや・・・避けれない運命だったんだ・・・」

・・・？『避けれない運命』・・・だと？

・・・違う・・・違うんだ・・・そんなじゃあない・・・

・・・

俺の・・・俺の・・・俺のせいだったんだ・・・全部・・・

・・・なにもかも・・・

そして・・・もう1人の少女がその重い口を開いた・・・

「コージ君・・・お願いだから・・・1人でなんでも抱えこま

ないで・・・私達は・・・

コージ君の幼馴染……昔から4人で……頑張ってきたよね？……その苦しみ……私達にも分けてよ……じゃないと……じゃないと……私……コージ君が1人で苦しんでいるところを見るなんて……そんなの耐え切れないよ……ひっく……」

……その少女は泣き始めた……止めてくれ……お願いだから、俺のためになんか泣くのを止めてくれ……

……俺はそんな人間じゃない……俺は……ひどい人間なんだ……

……全部！全部！！全部！！俺のせいなんだ！！！！……昔から4人？……

……もう、その1人はこの世にいないじゃないか……俺の……俺の……せいで……

……少し昔の話をしよう……

……といつても、俺が上京する前の話……俺の故郷の小さな街での話だ……

昔の俺は荒れていた……つまり噛み砕いた言い方をすれば『不良』というやつだ……

日々の生活が喧嘩三昧でいつもボロボロになって夜の街をさまよっていた。

このころの俺はとにかく誰か強い奴と喧嘩したくてたまらなかった。そこいらの不良だけでなく

いくらかの暴走族の総長ともやり合ったなあ……。とにかく、す

んげえ楽しかった。

学校なんぞたま〜に気が向いたら来ているぐらいで授業なんぞもちろんこれっぽっちも聞いてなかったし

聞く気もなかったし（つーか、今もそうだが）、ましてや授業なんぞほとんど出ずにサボりまくっていた。

そんな俺が唯一、学校でお気に入りだった場所は『屋上』だった。

この場所は本当に好きだった。なぜかというと、人の目を気にせず堂々と寝ることもできるし、

ここからの景色はすんげえ良かった。あと、ひなたぼっこもできるしね。

「ふああああ……今日もここでひと眠りするか……あー気持ちいい……」

今は3限目、もちサボった。つーか、あの八ゲづら野郎の話なんぞ聞いてられっかつつーの！

「おやすー」

「何が……『おやすー』だっ……!!起きろっ……!!馬鹿っ……!!」

ばきっ!

「ぐおっ!」

な……なんだ!?!この頭の衝撃は!?!ふと顔をあげるとそこには仁王立ちした鬼……もとい

俺の幼馴染の1人、市本鈴奈いちもとすずながいた……。茶髪ポニー野郎・

・じゃなかった

少女。あとコイツは見た目は女だが心は漢おとこだ。

「やっと目を覚ましたか……。ところで今、貴様失礼なことを考えていただろっ?」

「ソナナコトナイアルネ」

「なぜ、棒読みなんだ……」

「つーか……。どうでもいいが『家庭の医学』の本で殴るのは人としてどうかと思うぞ?」

「うむ、お前だから別にいいじゃないか」

「よかねえよっ!!! どういう理屈だっ!!! それっ!!!」

「……貴様は男のくせにねちねちねちとうるさいな……  
か弱い乙女のちよっとした悪戯ではないか……それぐらい許  
せ。甲斐性なし」

「（お前が弱い乙女だったらお前以外の地球上の女は全員女神様  
だよな……）」

「何か言ったか？耕司」  
にっこり

「ナニモイツテナイアルヨ」

「……この女が来たっつーことは……  
たっ たっ たっ たっ たっ ……」

「はあはあ……やっぱりここにいたんだね、コージ君!!!」

「よう マイフレンドあーんどマイガールフレンド!!!」

「誰が『ガールフレンド』だっ!!!」

どがすっ!!!

「ぶげえ!!!」

「……今、鈴奈に殴られた男は市本勇輝いちもとゆうつき。つまり、鈴奈の兄貴。

ちなみに、この男

俺より1歳年上である。にもかかわらず、俺らと同じ学年。つまり・

……留年している。……

やーい、ばーか、ばああああか。

そして、もう1人の女の子は水本雪美みなもとゆきみ。この子も俺の幼馴染である。

彼女の両親と俺の両親とも古い付き合いで家はお隣さんである……

。ちなみに容姿は身長はごく平均的で青色ツインテール。

「さあ・・・教室に戻るぞ、耕司」

「やだねったら やだね」

「しばくぞ?」

「ご・・・ごめんなちゃい・・・」

あいかわらず、恐ろしい女だ・・・鈴奈・・・(汗)

「ふふふふ・・・耕司、我がシスターから誘われているんだぞ?心の準備はできたか?俺はもうできている」

「へんな言い回しをするなっ!!!馬鹿兄貴!!!!!!」

どげすっ!

「ぶぎっ!!!」

うむ、兄弟仲よしこよし  
「もう、コージ君!授業さぼっちゃだめって言ったでしょ?人の話全然聞かないんだから・・・もう・・・」

「悪い、今なんて言った?ワンモアプリーズ?O.K.?」

「・・・コージ君って人の神経逆撫でするのはほんと得意だね・・・」

「・・・怖い(汗)目が。」

ちよっとしたアメリカカンジョークなのに・・・

「お前が毎回授業サボるもんだから、クラス委員長の私まで怒られる羽目になるんだぞ?分かっているのか?」

少しは感謝しろ」

「ワタシ、ニホンゴワカラナイ」

どぎやすっ!!!

「いでえええええ!!!!!」

「しばくぞ?」

「いや!いや!もう今、君しばいたからね!?!?そういうのはもっと早く言おうね!?(泣)」

「ふふふふ・・・シスターよ・・・自分の気持ちには素直にならなきゃだ・め・だ・ぞ(はあと)」

「っ!余計なことを言うなっ!!!ナルシスト共和国!!!!!!」

げしゅっ！！！

「ふおおおおお！！！！！！」  
・・・・・・・・？

「やだあ・・・また不良の村上が来たわよ・・・」(女子A)

「久々に来たと思つたら・・・ほら・・・見て・・・あの怪我。また誰かと喧嘩したのかしら？」

モンモスこわくい・・・」(女子B)

「そういえば、最近ここいらを占めている暴走族『夜露死苦』の総長を素手でぶん殴つて病院送りにしたつて

聞いたぜ。その総長、歯が10本折れて、骨も10本くらい折れていたそうだぜ？」(男子A)

「あんま、関わらないほうが身のためだな・・・」(男子B)

「・・・同じクラスの誰かが俺の噂話をしている・・・まあ、こんなのは日常だから、そんなのは全然俺は気にしない。むしろ、それが普通の反応だ。

なんせ、俺は今までそれだけのことをやってきたんだからな。そりゃ、当然だ。

「・・・耕司・・・あまり、気にするなよ・・・」

「コージ君・・・」  
「・・・？なんで二人ともそんな悲しそうな顔してんだ？よく分からん・・・」

「それにその村上といつもよくつるんでるあの3人も絶対おかしいよな・・・イカレタ集団だよ、ははははははははは・・・」

「は？ぐえ！！！！」(男子C)  
ぐいっ

「ああん？てめえ、いまなんつた？」  
「コラ？ああ！？」

「ひっ……！」

「もう一回言えって言ってんだろ？がよおおおお……！」  
「耕司……！止める……！」

「コージ君……！」

「……ちっ……」

「ひいひいひい……」

「ばさっ……」

「てくてくてくて……」

「待て……耕司、どこへ行く？もうすぐ授業が始まるぞ？」

「帰る」

「……俺が一番許せねえことは……」

俺といつもからんでいるこいつらまでけなされることだ……  
自分のことは別にいい……けど、俺に関わった奴までけなされるのは本当に虫唾が走る……！！！！

「ま……待てっ！耕司！」

「コージ君……？」

「……あ……気分わりい……」

校外でその辺うろろしとか……別にやることねえけどな……

「あ……あ、本当に暇だねえ……」

俺は一体何をしているんだろ？

「な……んか、面白いもんとかねーのかねえ……」

「へへへ……じゃあ、見せてやるよ……」

・・・前から明らかに柄の悪そうな不良3人組がやってきた。

「・・・お前ら、ズッコ 3人組か・・・」

「「「て・・・てめえ!!!」」」

おうおうおう・・・興奮しとるわ・・・

「ところで面白いもん見せてくれるンだろっ?何だ?」

「はっ!てめえが俺ら3人にぼっこぼ「え?お前らがぼっこぼこになる?そりゃあ、おもしろーw」」

「「「て・・・てめえええええ!!!!!!ぶっ殺す!!!!!!」」」  
いちいちハモルな。きもい。

「はっ・・・やるの?君達?」

はあ、今日も楽しい1日になりそうだなっ・・・

カーカーカーカー・・・

夕方。

はあ・・・またやつちまった・・・また、鈴奈にどやされるわな・・・こりゃ・・・

はあああ・・・明日は学校サボるかな?いや、サボろう・・・

俺は別に用があったというわけではないが、なぜか俺の足は教室に向いていた・・・

「・・・あっ!コージ君!お帰り!!!!」

・・・なぜ、こいつがここにいるんだ?帰ったんじゃないのか?



「……………鈴奈とあの馬鹿はどうした？」

「鈴ちゃんは風紀委員の仕事に行ってるから先に帰っておいてって  
言ってたよ。あと、勇ちゃんは

『らぶらぶはっぴーわーるど』を作るために俺は帰るとかいつて帰  
っちゃったよ」

「……………あいかかわらず、あの馬鹿は訳わかんねーな……………」

「そうか……………」

「あのう……………コージ君？」

「ん？なんだ？」

「一緒に……………その……………」

「もじもじもじもじもじ」

「？」

「あの……………その……………」

「なんでこいつ顔赤くなってるんだ？」

「……………あのう……………」

「ん……………もう、こんな時間か……………雪美、そろそろ俺達も帰らな  
いか？」

「あ……………うん……………!!!!」

「むう、コージ君……………!!また喧嘩したでしょ……………!!」

「な……………なぜ？わかった……………？え……………えすぱー？」

「何言ってるの……………？その怪我みればひと目でわかるよ……………」

「……………結局、鈴奈のかわりに雪美にどやされてしまいました……………  
……………」

「もう……………心配してるのに……………」

「ん？今何か言ったか？」

「何も言っていないです!!!」

・・・(汗)不機嫌になった・・・ああ、女つてのは本当にわからねーな・・・

そして、俺達は帰路に着くのであった・・・

第30話 『俺と暴力女とか弱い女と馬鹿男と・・・』 (後書き)

また〜りしています)^^)

第31話『いじもと変わらぬ朝』(前書き)

今回は割とソフトです。





2・やつちやえ

3・やつちやえ

「……いや！！！！すこぶるダメだろ！？この選択肢  
！！！！」

「……つていうか、『やらない』つていう選択肢はねえのかよ！！！！  
全部同じじゃねえか！！！！しかもなんだよ！！！！その語尾につ  
いている『！？』」

「……なんか意味深なんだヨ！！！！だんだん増えとるし！！！！つ  
てああああ！！！！！！」

「……どうすりゃあいいんだよ！！！！！！」

「……コージ君……（ノノノノノ）」

「……雪美はすでに目を閉じて俺を待っている……」

「……ぐ……か……かわいい……いいにほい

もする……」

「……だが……俺達は……幼馴染なんだぞ……？」

「……」

「……もう、いいや しちやおう 先のことなんて考えちゃあだめだ 楽  
に生きよう 楽に」

「頂きます」

「がちゃり……」（ドアが開く音）

「……おい、耕司、起きろー朝だぞー……」（鈴奈）

「……うひゃあ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「コ・・・・コージクン・・・・大丈夫？」（雪美）

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「耕司、その顔どうしたんだ？グローブみたいになってるぞ？蜂にでも刺されたか？」（勇輝）

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「雪ちゃん？兄さん？早く朝ごはん食べないと冷めるよ？早くたべよう？」（鈴奈）

にっこり

「（おい・・・・耕司・・・・マイシスターいつもと語調違うぞ・・・・？（汗）なんか、めっさ怖いんだが・・・・」

お前、今朝なにかしたか？」

「（・・・・・・・・・・していない・・・・と言えば嘘になるが・・・・）」

「（そーか！そーか！うんうん！ついにピリオドの向こうへ旅立ったか！！お兄ちゃんはうれしいぞ！！！！

しくしく！！！！）」

「（・・・・・・・・・・あなたはナニを言っているんだ・・・・・・・・）」

バキッ！！！！」（箸（金属製）が割れる音）

「・・・・・・・・・・兄さん 早く食べよう」

にっこり

「・・・・・・・・・・はい（汗）」

・・・・・・・・・・・・・・・・



俺達の家はお隣さん同士である。

俺の家の右隣に雪美の家があり、左隣に市本兄妹の家がある。んでもって、俺は別にいいって言っているのに雪美と鈴奈は毎朝俺を起こしにきては俺（＋）の朝食を作ってくれる。ありがたや、ありがたや……。ちなみに……。俺の家族は両親と姉さんと兄貴と義妹がいるが

……。あまり言いたくないが今は別々で暮らしている。つまり『別居』してるってことだ。この家は俺と姉さんと母さんとの3人で暮らしている。親父と兄貴と義妹は別にアパートで暮らしている。……

まあ、義妹……。アルとはたま〜に会ってはいるんだけどな。（ついでに兄貴も）……。？親父？……。あんなクソ親父となんか会いたくもねえ……。血が繋がっているっていうだけでも嫌悪感が沸いてくる。

……。くそ……。あいつのことを考えただけでも気分が悪くなってきたぜ……

「……。コージ君……。どうしたの？怖い顔しちゃって……。大丈夫？」

「……。いや……。なんでもない……」

「それなら……。いいけど……。無理しちゃうだめだよ？」

「ああ……。ありがとな、雪美」

「風邪か？しんどかったら学校で私に遠慮なく言えよ？耕司」

「ああ……。鈴奈もありがとな」

「……。俺は幸せだ……」

こんな、いい幼馴染に2人（＋1匹）恵まれて……

「コージ君……その……ちよつと……いいかな？」

「ん？なんだ？」

今は4人で朝の通学中。くそう……今日はサボるつもりだったのに……

「え〜つと……その……あのね……（／／／）」

「？早く言えよ？」

「えつと……今日は天気がいいね（汗）」

「曇っているが？」

「……（汗）えつと……（／／／）」

「……雪美ちゃん、言いたいことはズバつと言った方がいいぞ？コイツはタダでさえ鈍感の鈍ちゃん

なんだからはつきり言わないとわからないぞ？ね、マイシスター？」

（勇輝）

「……なぜ、私に振る……」

「えと……じゃあ、コージ君……言ってもいいかな……？」

／／／

「あ……ああ、遠慮なく言えよ」

「そつだぞ、言葉では言い表せない関係なんだからな」（勇輝）

「貴様は少し黙ってる」

「えつと……その……（／／／）」

「明日の学園祭……いつしよに……まわらない？（／／／）」



第31話『いつもと変わらぬ朝』(後書き)

平和が一番です(^^)

第32話『たかが占い、されど占い』（前書き）

・・・今回もコメディっぽくなっちゃいました・

・・・シリアスへの道は遠いっ・・・！でももうちよっとなんです

けどね

### 第32話『たかが占い、されど占い』

「ごめんね〜！コージ君！待たせちゃって！」

俺は校門前で雪美を待っていた。というのも、昨日の雪美の誘いに二つ返事で乗ったのだ。

まあ・・・家に居ても暇だったかな。退屈しのぎにはちょうど良い。

・・・正直、日曜の朝はつらいけどな・・・

「ん、そんなに待ってねえぞ。ほんの一時間くらいだけだな」

「・・・コージ君のいじわる・・・（泣）」

「お・・・おいおい・・・泣くなよ・・・あ〜ごめんごめん！嘘だよ！USO！ほんの5分くらいしか

待ってねえからんな泣くなよ。なっ？」

「・・・ホントに？」

「ああ」

・・・どうやら、泣き止んではくれたようだがまさかこれくらいで泣くとは思わなかった・・・

・・・まあ、雪美は昔から何かしら責任感が強い奴だったからな・・・ちよつと悪いことしたかな？

後でなんかおごつてやろう・・・

・・・これが鈴奈だったら、「それがどうした」で終わりそうだな・・・

「ふふふふ・・・女を泣かせるとは・・・君も罪深い男になつたもんだねえ・・・耕司君・・・」

ニヤニヤしながら勇輝が迫ってきた・・・

「・・・なぜ、貴様がここに・・・」

「おいおいおい・・・お友達にそんなに冷たい言い方しなくてもいいだろう？ああ・・・彼女ができた男は友達に冷たくなるっていう話は本当だったんだな・・・僕は悲しいよ・・・妬いちゃうね」

「…………頼むから身の毛のよだつ事言わないでくれ…………」  
「？勇ちゃん、なんでここに？」

「ん…………ああ、僕も2人と一緒に今日の学園祭回ろうかと思ってね」

「故国へ帰れ！！！」

「んふふふ…………耕司君、そんなこと言わないで3人でチョコバナナしゃぶしゃぶ舐めながら楽しもうZ E

」

「気持悪いことを言うなっ！1人でやってろ！おい、行こうぜ！雪美！」

「うん！」

「ああ！待ってくれ！待ってこれないとこの場で俺がズボンとパンツを下ろすぞ！」

「やめんか！！！」

「ボギっ！！！」

「うげぷっ！」

…………いきなり、勇輝のどたまを例によって『家庭の医学』の本の角でぶん殴った鈴奈…………

…………うわあ…………いたそ…………

「ん、2人ともおはよう」

「おはよう」

「…………うっ…………ぼ…………く…………は…………お…………や…………す…………み…………な…………さ…………

…………い…………に…………な…………り…………そ…………う…………だ…………よ…………」

「悪いな2人とも、今日は私は学園祭の風紀委員の仕事で忙しくなりそうなんだ」

「あ、大丈夫だよ、私、コージ君と今日学園祭回るつもりだから」

「……………そうか……………じゃあな」

てくてくてくてくて……………くるっ（振り返る）

ギランっ！

うおっ！いきなり睨まれた！なんだ・・・あいつ？・・・

「・・・とりあえず・・・行くか？」

「うん、そうだね」

「とりあえず、新校舎3階から攻めていこうではないか！耕司君！雪美たん！でも間違ってもアルは攻めるなよお！？はーはっははー！」

「うるさい、黙れ。早漏れ」

結局、勇輝も着いて来た・・・まあ、楽しいから別にいいか・・・

「・・・ん？あんまり、雪美が元気ないな・・・どうしたんだ・・・」

「・・・？」

「おい、どした？雪美？気分悪いのか？保健室行くか？」

「・・・えっ？な・・・なにかな？コージ君？」

「・・・聞いてないのかよ・・・だから、気分悪いのだったら保健室行くかって言ったんだけどさ」

「え・・・ううん！そんなことないよ！あっ！コージ君！あそこに古いコーナーがあるよ！行ってみようよ！」

「！！」

「お・・・おい・・・引っ張るなつての」

「ああ！2人とも！ちよつと待ってくれよお！！！！」

「・・・まあ、元気ありそうだし・・・大丈夫か・・・」



「……………占い1回につき女性は500YEN、男性は1回につき5000YENです……………」

みるからに怪しそうな占い師はそう呟いた。

なんだ！その男女差別！ぼったくりかよ！コノヤロー！

「さ……………先にコージ君、占ってもらいなよ……………わ……………わたし……………ごういうのドキドキするんだ……………」

「……………(汗)」

……………ぐすん……………英世ちゃん(千円札)……………

「では……………まず、あなたの人生を占ってやるわ、はん」

……………あれ？なんでそんな君、上から目線なのかな？こつちは客だよ？コラあ？

すると、占い師の女は目に前の水晶を手でかざした……………

「……………はっ！」

「……………おい、今鼻で笑っただろ？」

「……………あなたの人生占い……………さいあくうく夢も希望もないですね」

……………てめっ！ナニが『さいあくうく』だっ……………こつちが今『さいあくうく』な気分になったよ……………ちくしよう……………(泣)

「……………あなたのチンか でゲロまみれな人生をバラ色で楽しい人生に変える方法が1つだけあります」

「……………あん？」

「あなたの苗字を変える……………」

「はあ？」

「今から言つ3つの中から選んで今の苗字を変えるとハッピーな人生を送れます」

1 鬼畜道耕司

2 ゴールドフィンガー耕司

3 テクニシャン耕司

「さあ、選んでください・・・」

「選べるかつ!!!」

「さらに下半身丸出しで『げひあへ!!!つついちゃうよ〜ん  
うひゃひひひ!!!』と大声で叫びながら町中を走り回ればさらに  
楽しい人生が送れます・・・」

「ただの変態じゃねえか!!!ソレ!!!んなことしたら違つ意味  
で『楽しい』人生になるわっ!!!!!!」

「そうですね、ならとつとと金置いて立ち去れ、愚民」

「占う前に払っただろうが!!!」

「え〜・・・つと、じゃあ、次は私占ってもらってもいいですか？」

「あ、次はかわいいお嬢さんですね。どうぞ、どうぞ、座ってください」

さいね」

「……この女……あからさまに態度ちげえ……  
「えっと……じゃあ『恋占い』やってもらってもいいですか？」

「……へえ……雪美、今学校で好きな奴いるんだな……  
……勇輝か？勇輝の奴は雪美のこと好きみたいだがな……  
・お似合いカップルだよな。

勇輝は変態野郎だが、イケメンだしルックスもいけてるし学校の女子からも人気あるしな。

「……まあ、妹（鈴奈）が言動は男でも顔は結構かわいいからな……」

「ん、ではいきますよ……」  
「はい！……」

「……結構、雪美緊張してるな……占いなのに……」

「……どうですか？」

「……」

「……あのう？」

「……気をつけなさい」

「……え？」

「これから、ひと波乱ありそうだわ……」

第32話『たかが占い、されど占い』(後書き)

過去編はまだまだ続きそうです

第33話『告白』（前書き）

そろそろ過去編が本格的に動き出します

### 第33話『告白』

「……あれから雪美はあまり喋らないようになった……  
……まださっきの占い師の女の言葉を気にしているんだろうか？  
……」

『これから、ひと波乱ありそうだわ……』

「おい……雪美」

「……」

「おい！雪美！」

「……あ……コージ君……？どうしたの？」

「ったく……どうしたのじゃねえよ……さっきからお前どうしたんだ？ひよつとして、さっきの占いの事まだ気にしていたのか？  
占いなんか気にすんなって……自分の運命は自分で切り開いていくもんだろ？な？」

「元気出せって、まだ時間は十分あるんだ、いろんなところ回って楽しもうぜ」

「やべえ……今俺、自分でめっさいイコト言った気がする……」

「あ……うん……そうだね」

「……さっきよりは……少し元気出たかね？んじゃあ、今日

1日楽しむとしますか。

俺達は午前中は主に新校舎のクラスの出し物を見て回った。メイド喫茶・・・お化け屋敷・・・人形劇・・・etc・・・まあ、学園祭の定番の出し物だな。中でもメイド喫茶はすごかったな・・・だってあの・・・

エ ジェル ートのウェイトレスさんが着ているフリフリの制服みたいなそのクラスのみくんが着て、

『いらっしやいませ』ご主人様』とかいって出迎えてくれるんだぜ？でも、まあそのクラスの男子の奴もフリフリの制服着ていてかなりおぞましかったがな。だって色々モロ見えだもん。スネ毛とか！スネ毛とか！！スネ毛とか！！んで・・・今俺は何をしているかというと、昼飯を買いに学園の中庭の来店に来た。

案の定、昼時のせいか出店に並ぶ人の数は多かった。こうして、ようやく昼飯を買い終え雪美が待っている

校門前までダッシュで走った。・・・そして、校門が見え雪美に声をかけようとしたとき・・・ある見知った男が雪美と話をしているようだった・・・その見知った男とは・・・そう、勇輝だった・・・・・・しかし、あいつら・・・本当に仲良いよな・・・いっそのこと付き合ってみればいいのにな。

「おうおうおうおう・・・相変わらずお前らいい夫婦コンビだよな」「こ・・・コージ君！？」(汗)」

「おお・・・耕司・・・やっぱりそう見えるか？いやあ・・・勇ちゃん照れちゃう」

「こ・・・コージ君！！！！こ・・・これは違うの！！！！ううん！！

！ぜつつたい勇ちゃんとはなんでもないの

！！！！ねえ！！！！信じて！！！！コージ君！！！！お願い！！！！」

「お……おう？（汗）」

「そんなに全力で否定されると勇ちゃんがつくしぐつすん……

」

でも、いい絵カップルになると思うけどな……バカップルみたいで

とりあえず午後も適当に雪美と色んな所を回って楽しんだ。

そして、午後7時……

そろそろあたり一面が暗くなってくる頃……

「コージ君……2人で新校舎の屋上行ってみない？」

「？……まあ、いいけど」

……？雪美は何をするつもりなんだろう？

「……うお……」

「……どう？ここから見える景色はすごく綺麗でしょ？」

これはたまげた……

昼間とかは何の変哲も無い街一面がここから見えるわけだが……

・

夜となると別世界。

街灯やらなんやらの光ですごく街が綺麗に見える……

「……すげえ……」



「うふふ……でしょ 私、この場所好きなんだ」

うむ、俺も普段は学校に来ているとき、ずいっとここで昼寝をかましていたからな。

俺もこの場所は結構気に入っている……

「それに……コージ君と……最初に出会った場所だから……」

ちょうど下の運動場では学園祭の夜のイベントの『盆踊り』が行われているようだ……

この歳（この頃まだ耕司達は中学生）でんな恥ずかしいことできるかってーの……

『盆踊り』で定番の曲（曲名は知らないが）が下からガンガン聞こえてくる……

「……ん？雪美？今、なんか言ったか？」

「えっ！？あ……ううん！！べ……別に何も言っていないよ！えへへ……（／／／）」

「？」

なんだ？雪美の奴、熱でもあるのか？やけに顔が赤いような気がするが……

「どうした？風邪でも引いたのか？保健室連れて行ってやるつか？」

「そ……そんなんじゃ……ないもん！！（／／／／）」

？ますます、赤くなつた気がするが……ますます、訳わからん。

「あつ……コージ君！コージ君！見て見て！」

「あ……？」

俺が昼間のように寝そべっていると雪美が突然ジャンプしながらは

しゃぎ出した・・・

「ほらー 見て見てー お星様が綺麗だよー」

「・・・あのな？雪美？俺達はもう子供じゃないんだからよ、そんなみつともないはしゃぎ方するなよ・

・・・」

「ひ・・・ひどいよ！コージ君！私、もう子供じゃないもん！！  
！立派なセクシーな女だよ！！！！！！」

ほう・・・セクシーね・・・

「ほう・・・じゃあ、お前もう生えたのか？立派なセクシー  
ウーマンならもうとっくに生えてるよなあ  
？ちなみに俺はもう、もっさり生えている」

「え・・・（ノノノ）」

ぼんっ！！！！（真っ赤になる）

ははははは・・・予想どおり面白い反応するなあ・・・

「ほら？どうなんだ？生えたか、ツルツルか？どっちなんだ？」

「~~~~~！！！！（ノノノノ）」

「黙秘っつーことはツルツルってことでいいんだな？」

「も・・・もう！！！！！！コージ君のエッチ！！スケベ！！女  
の子にソナナコト聞くななんて最低だよ！！

！！ばかばかばかばか~~~~！！！！」

ばかばかばかばか

「あつ・・・いていていてててて・・・めんごめんご！嘘だ  
よ！冗談だヨ！！まだ俺は生えてないよ！

ツルツルのテカテカだぜ！」

「そんなこと言わなくていいよ~~~~！！！！ばかばかばかばかあ  
（泣）」

あいててててて・・・ちよっといじめすぎたかね？（汗）



「……」  
「でね……もう……どうしたらいいか分かんなくなっちゃって……  
……気がつけば学校の屋上のフェンスの外側で立っていたの……  
……でも、その子はね……そんなことをする勇気もなかったんだ……」

「……」  
「そんなときにね、ひとりの男の子が来たの……」  
「……」  
「その女の子が『来ないで!!!』って言ったの……でもね……  
……その男の子は……その女の子にこう言ったの……」

『生きる!!!俺はお前が必要なんだ!!!お前がいないと俺はダメなんだよ!!!だから……!こっちへ来い!!!俺はお前が必要なんだ!!!』

「あははは……すごいよね?その男の子まだ小学生だったんだよ?そんなませた台詞言える?……  
でもね、その女の子はね、自分を必要としてくれる子がまだいたんだ……ってことにすぐく……すぐく……嬉しくてね……  
……涙が出ちゃって……」

いつの間にか雪美の目尻から涙があふれ出ていた……



番外編その1 『文明の機器って改めてすごいと思う』 (前書き)

番外編です。季節は夏っていう設定ですが。

番外編その1 『文明の機器って改めてすごいと思う』

ミンミンミンミンミンミンミン

「……………あちい……………」

……………今日は雲一つもない太陽かんかんでりの夏真っ盛り……………

……………正直、コノ部屋暑い。つか、なんか寮全体がおっさんの脇の下から漂う熱気みたいに暑い。

くそう、太陽の大馬鹿野郎……………いかん、声を出すと余計暑くなってくる……………逆効果だ。

「くそう、しかしコノ暑さなんとかならんもなかね」

……………扇風機をつけているがじえんじえん効果なし。というか、無駄に部屋の中の熱気をかき回しているだけだから全然役にタタネ……………

……………くそう……………なんか無性に腹が立つてきた……………「こらあ……………扇風機のクソや郎……………少しは冷風を送れ……………冷風を……………ここはサウナ室じゃねーんだぞ……………これでも喰らえ……………」

かかとおとし……………ばきつ……………

……………はっ……………ナニやってんだ……………俺っ……………俺の足元にはバラバラになった扇風機らしきものの残骸が残っていた……………

「だああああ……………唯一の夏のバッチリアイテムがああああああ……………」

くおおお……………どう……………どうする俺……………どうする アイ ル……………

だああああ……………歌っている場合じゃあない……………や……………やばい……………本当にどうしよう……………

……………そうだ……………

いいこと思いついたぞ!!! あっ、ちなみにいいことって別にやら  
しいことじゃないからね。

(夏美の場合)

どンドンどンドンどンドンどンドンどンドン!!!

(ドアをノック!!!)

「おい!!! 夏美!!! 開けるっ!!! 開けないと襲っちゃうぞ  
!!! じゃなくてえ...

おいっ!!! お前の部屋、クーラーあるか!? あったら居座らせる  
!!!」

すると、夏美がのそのそとドアを開けた...

「... お兄ちゃん... ボクモウダメ...」

「... ナニ?」

「もう... ダメ... 我慢できないヨ...」

「... そうか...」

「あ... ああ... も... もう...」

「!!! し、しっかりしろ!!! 夏美!!! 我慢しろよ!? すぐ病  
院に連れて行ってやるからな!!!」

「... う...」

「... 今こんなことを聞くのは不謹慎だが子供の名前は何に  
する?」

「... プー太郎...」

「なんか臭そうな名前だな!!!」

「... じゃあ、平蔵」

「いつの時代の人だよ!!!」

「... メアリー」



「外人かよ!!!」

「……じゃあ、……って違つよ!!!十二言わ  
せてるの!?お兄ちゃん!!!」

「えっ?こつこができたんじゃないのか?」

「ソナナコト一言も言つてないんですけど!」

「ありや?そうだったかね?」

「……知つてたけどネ!

「だ……第一!か……仮に子供ができたとして、今の段階で誰  
の子供かワカンナイよ!!!」

「え?英男の子供?」

「……」

「ご……ゴメンナサイ……」(汗)

「すごいガン見された……」(汗)

「……正直怖い(汗)

「じゃあ、なんでそんなしんどそうな顔してるのだ?君は?」

「……見てわからない?この暑さ……どうにか  
ならないの?」

「えっ?君のお部屋には高級クーラー10台設置されてるんじゃないの?ええとこのお嬢様なんだろお?」

「十二勝手に都合のいい設定付け足してるのかな!?お兄ちゃん  
!?!?ていうか、あやかるつもりだったでしょ!?お兄ちゃん!?結  
構、凶々しいよね!?お兄ちゃん!!!」

「そうだ!!!悪いか!!!えっへん!!!俺を敬え!!!」

「開き直らないでよ!!!全然偉くないよ!!!」

「……あゝ、なんか大声出したから余計暑くなってきたよ……  
……」

「……しゃーねえ……今度は違つ部屋に行つてみるか……」

「あ……あれ?お兄ちゃん、何処行くの!?!」

「……違つ部屋に行つてみんだよ……」

「あ……じゃあ!ボクも行く!!!」

「どこに？絶頂？」

「……！！！！違っよ！！！！えっち！！！！」

ツインテールが仲間になりたいといっけてきやがりました。どうしますか？

1 . 連れて行く

2 . だが断る

3 . 連れ込む(トイレに)

「うーん……」

「お……お兄ちゃん！？『3』の選択肢はなんなの！？そんなとこ行って何する気！？」

「っていうか！！そこで悩まないでよ！！答えは決まってるじゃん！！！！」

「だが断る！！！！！！」

「ひどいよ！！！！お兄ちゃん！！！！」

(百合たん場合)

……結局、ツインテールは俺の後についてきた……

さて、次は百合ちゃんの部屋に行ってみるとするか・・・

「？お兄ちゃん、何処に行くの？」

「トリユフを探しに行く」

「へっ・・・っつて！！見え透いた嘘言わないでよ！！もしかして馬鹿にしてる！？お兄ちゃん！？」

「おい、訂正しろ。『もしかして』じゃ無くて、『もしかすると』だ・・・まったく・・・」

「どうでもいいよ！！！！」

「百合ちゃん！！！！いるー！？」

どんどん(ドアをノックする音)

「ふ・・・普通にスルーしないでくれるかな！？」

どんどん

「・・・あれっ？おかしいな？百合ちゃんっおい！別に取って喰いやあしないからさっここを開けてよ」

んふんふんふん

「・・・いや、お兄ちゃんその呼びかけは逆効果なんじゃあ・・・

・(汗)

がちやり

「はい？」

「うそお！！開いちゃった！！！！なんで！？」

「おー百合ちゃん、さっそくスク水着てくれ」

「いやいやいや・・・お兄ちゃん、さっそく目的が違っからね  
ぬぎぬぎ・・・」

「はい」

「下から着てたー！！！！」

「し・・・『下から』！？はあはあ・・・」

「へんなところで反応しないでよ！！！！お兄ちゃん！！！！」

「い・・・いやあ・・・想像力をかきたてられるというか・・・なんと  
んというか・・・げへへ・・・」

「・・・最低だよ・・・お兄ちゃん・・・(汗)」



「一発いつとく?」  
にっこり

「いつときません(汗)」

「じゃあ、早く答えなさい」

「とりあえず、中に入ってお茶でも……」

「答える」

「……はい……(汗)」

……(説明中)……

「無いわよ」

「はあ……やっぱり……胸が無い人はクーラーも無いって

か……」

「……ああ?」

「ご……ゴメンナサイ……(汗)」

「アリスちゃんもクーラーのある場所探さない?」

「あんた達……よっぽど、暇なのね……まっ!あたしもちようど暑かったし一緒に探してあげるわよ」

たたたた〜ん た〜んたたたた〜ん ツンデレが仲間に加わった  
!!!!

「誰がツンデレよ!!!!」

ボキッ!!!!

「ふっ!!!!」

(高宮姉弟の場合)

「あっ!耕司さん!!!!あと、その他3匹」

「『その他3匹』って何よ!!!!」

「おっ!みんなでないしたん?そろいもそろって」

麗奈さん……出てくるの久々だな……

「……ところで、あんたらは何しとるんですか？」  
「ああ……すごく……大きい……すごく……あつい……  
すごく……おいしい……モノを食べているんですよ」  
「……どうして、コノ子は普通に『お餅』を食べているって  
言えないのかな？(汗)」  
「というか、コノ時期にお餅はおかしいだろ……(汗)  
」で？自分らどないしたん？」  
「いやー……見た感じなさそうなんでやっばいいです」  
「誰が無いチチャー！！！！しまいにぶん殴るで！！！！自分！！！！」  
「んな事一言も言っつてねえええええ！！！！！！」

(ミントの場合)

「……(ミント)」

「……(汗)」「……(耕司、夏美、百合、  
アリス)」

「……」

「……(汗)」「……(耕司、夏美、百合、  
アリス)」

「……どうしろと？(汗)」

「……しかもコノ子なんか鍋焼きうどんとかものすんごいもん  
食っちゃってんですけど？コノ子(汗)」

「……そのせいでなんか部屋の中が熱気で包まれとるし……  
……っていうか、外よりココのが暑いってどゆこと？(汗)」

「……なあ、ミント……」

「……？……食べる？」

「……いらないよ」

「……………そう……………」  
「……………」  
「……………」

はい、言葉のキャッチボール終了！

……………なんか話題ねえのカナあ……………ワダイワダイワダイ  
ワダイワダイマダイマダイ……………

「な……………なあ？ミント？……………それ……………熱くねえの？（汗）」

「……………おいしい」

「うん、確かにおいしいな、うんおいしいよ」

「……………うん」

「……………（汗）」

「……………熱くて歯ごたえが良くて喉ごしが良くてお  
汁がおいしいの」

「あ……………熱くて……………歯ごたえが良くて……………喉ごしが良くて……………」

「お……………お汁がおいしいのか？」

「……………うん」

「そ……………そうか……………はあはあ」

「……………お兄ちゃん？（夏美）」

「……………耕司さん？（百合ちゃん）」

「……………おい、変態？」（アリス）」

……………怖い……………目が……………  
……………（汗）」

（千里さんの場合）

「あとは……………千里さんの部屋しかないわね……………」

「おう、そうだな」

「そうですね」

「あの……？誰か忘れていているような気がするんだけど……」

「「「気のせい」」」だろ」」」でしょ」」」ですよ」」」」

「そ……そうだね」汗」

……

「千里さんいますか？」

「どんだんどんだん」

「いねえな……」

「留守かしら？」

「どうしよう？」

「ん……？ドアが開いてるぞ？」

「お兄ちゃん……？いいの勝手に入っちゃって？」

「いいのいいの。俺と千里さんはそういう仲だから」

「どんな仲よ……」汗」

さすがにずかずか乗り込むのは家宅侵入みたいなのでこっそりドアの隙間から中を覗く……

はああ……着替え中だったりして……げへへ……

・

「おい、あんた鼻の下伸びてるわよ」

「お兄ちゃん……最低……」

「耕司さん……私……本気で悲しいです……」

「あ……あれ？ちよつと？みなさん？なに？この重い空気？

や……やだなあ……冗談にきまってんじゃないですか？」

先輩……あはははは」

「……当たり前よ……もし……本気だったら……

……

どどおおおおおおおおおん」コンクリートの壁に穴が開く音」

「……ね」

「……ね」泣」

……こわあい」泣」





番外編その1 『文明の機器って改めてすごいと思う』 (後書き)

くだくだ・・・ですね)・・・)

番外編その2『コスプレイは好き?』(前書き)

番外編その2です。

番外編その2 『コスプレイはお好き?』

「はあ……」

「……」

「はあ……」

「……」

「はあ……」

「……」

「はあ……」

「……てめっ……さつきからはあはあづるせーぞ。漫画に集中できねえじゃねえか、きもいから止める」

「……違うんだ……耕司君……僕……恋……しちやつたんだ……はあ……」

いきなり何を言い出すんだ?このあほ毛は?

「なんだ……猿人か?宇宙人か?おいおい……いくらもてないからって少しは相手を選べよな」

「ニンゲンデスヨ!？」

「マジで?まあ……お前、女なら誰でもいいもんな。いきなり『げひやげひや』とか言っつて襲っつて飛び掛るなよ?」

「しませんよ!!!あんだ、僕のことを何だと思っているのですか!？」

「イン マン」

「イン マン!!!???」

しかし……このメガネが好きになる相手って気になるなあ……  
「まあ、いいじゃねえか。ところでその好きになった子ってどんな

だ?」

「ふふふ……見て失禁するなよ?……この子だあああああ  
!!!!!!!」

するとメガネは本の表紙らしきものを俺に見せ付けた……そ



あたりまえだ、馬鹿野郎。

「でも……どうおおおおしても……ミ たんに会いた  
んだ……でも、この会えないもどかさ……つらすぎ  
るうづうづう~~~~!!!!うええええ~~~~ん!!  
!!!」

……泣くなよ……(汗)

「でもね……思いついたんだ……ミ たんに会える方  
法を……」

「はあ?(汗)」

「それはね……」

「それは?」

「……コスプレさっ!」

……

なんでこんな目に合うんだろうな……

俺はあれから『幼女体系でツインテールでニーソックスとネクタイ  
が似合いそうな女の子』をこのメガネと一緒に校舎を歩き回って探  
している……つーか、いちいち注文が多いんだヨ……  
「ヘーイ ソコの彼女 僕と一緒にコスプレいしないかい!? 一緒  
に気持ちよくなるうぜ ベイベっ!!!!」

「おい、微妙に目的が違うからな」

「きゃああああ!!!!何!?このメガネ男!!キモイ!!  
!」

「あげぷつちやああああ!!!!」

あーあー……こいつ今日殴られんのこれで何回目だ?で  
も本人はなぜか幸せそうな顔しとる……

「はあはあ．．．いいねえ．．．アノ子の蹴り．．．  
つい勃起しちゃったよ．．．」

「おい、俺はおめえのプレイに付き合っているわけじゃねえぞ」

「ふふふふ．．．でも、僕は諦めないよ．．．ミ たんと  
ひとつになれるその日まで!!!」

「．．．．．(汗)」

うむむ．．．こいつだけに探させるのは本気で危険だな．．．

．(汗)

しかし．．．『幼女体系でツインテールでニーソックスとネク  
タイが似合いそうな女の子』か．．．

そんな奴いるはずが．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．あつ．．．いたな．．．

「?どうしたの?お兄ちゃん?ボクになんか用?」

「ああ．．．」

身近な知り合いに居たじゃねえか!!!夏美だ!!!夏美!!!

．．．．．しかし．．．どう切り出したものかな．．．?

「(おい．．．メガネ．．．間接的に夏美にコスプレして  
もらつよう頼んでみる．．．)」

「(うむ．．．わかったザマス)」

．．．．．正直、不安だ(汗)

「ふたりともどうしたの?」

「ああ！いや！なんでもない！なんでもない！」

「？」

「な・・・夏美ちゃん！」

「えっ・・・っと・・・嵐山君、どーしたの？」

「ダカラボクミカミナンスケドモ！」

「おい、嵐山。早く言えよ」

「だからボク三上なんですけど！？」

「何か用かな？嵐山君」

「・・・もう、嵐山でいいです・・・」(泣)

「おい、泣いてないで言つてやね。へタレ出」

「どんどんどんどん僕の名前変わっていきますよね？」(泣)

「・・・すると、メガネはゆっくり4、5回深呼吸して・・・」

「僕と結婚してください！！！！！」

「おい」

「・・・お兄ちゃん？あのう・・・」

「・・・なんだ？ミたん」

「・・・この格好・・・恥ずかしすぎるんですけど・・・」

「」

「・・・そうだね。」

「あっ、それあんま動き回らない方がいいぜ？パンツみえるから・・・」

「・・・あっ、縞パン」

「えっ！？きゃあ！見ないでええええ！！！！！」

「・・・赤くなって、スカートを上から手で押さえる夏美・・・」

「」

「・・・モエッ・・・」



「はあはあはあはあはあ．．．．．ニ たん．．．．．ニ たん．．．．．」

．．．．．隣でブツブツつぶやく英男．．．．．  
．．．．．いつか、捕まるわな．．．．．  
「う．．．．．ううううう．．．．．はずかしいよ．．．．．」  
／／／／／

．．．．．ちよつとイタズラしてみるか．．．．．

「おっと！手が盛大に滑ったあゝ！」  
むにゅ！

「きゃあ！」

こけるフリして尻をちよつと触った．．．．．か．．．．．感触が．．．  
．．．．．たまらん．．．．．はあはあ．．

．．．．．つて、いかんいかん．．．．．これじゃあ、英男と一  
緒じゃねえか．．．．．

「お．．．お兄ちゃん！？今のわざとでしょ！？へ．．．．．変態！  
！！」

「おいおい．．．．．だから、手が滑ったって言ったたる？わるい  
わるい．．．．．ごめんごめん」

「エッチ！！」

「だからさ．．．．．」

「スケベ！！」

「おいおい．．．．．」

「お下劣！！」

「あいな．．．．．」

「お外道！！」

「ちよつと．．．．．」

「鬼畜！！」

「．．．．．」

．．．．．かっちゃん．．．．．

「おい、へタレ山、ちよつとコイツを抑える」







番外編その2『コスプレイは好き?』(後書き)

初音たんはめっさかわいいと思います(^^)

番外編その3 『メイドさんはお好き?』(前編) 『(前書き)』

番外編その3です。

番外編その3 『メイドさんは好き? (前編)』

「……うむ……やばいな(汗)」

今月の俺の所持金、50円ナリ〜……うまい棒5本しか買えねーじゃねーかつ!!!

うむ、これは真剣にやばい(汗) 食事は寮で困らないからいいけどいくらなんでもこれは心細い。

毎月、決まった日に実家から仕送りがあるんだが……まだ先だしなあ……どうしよう?(笑)

「あれれ〜?どしたの?耕司君?」

いきなり、宮子が声をかけてきた。

「君には関係ない」

「え〜昨日の夜は優しくしてくれたのにい〜ひどい〜耕司君〜」

周りから冷ややかな目線が突き刺さる……

「な……なんだ!!!その意味深な台詞は!?してねえよ!!!んなこと!!!」

「え〜……私、ちよつと痛かったのに……」

何故か涙目で赤くなりながらいきなりワケのわからんことを語りだす宮子さん。

さらに周りからの冷ややかな目線が強くなる……ってこの雰囲気はやばいつて!!!!!!

俺のイメージ的にもこれからの俺の人生的にもやばいつて!!!おいつ!!!

「ちよつとおおおおおお!!!!!!!!!……スト〜〜〜  
〜ッブ!!!!!!!!!!!!」

「むぐぐつ!???」

俺はとっさに宮子の口をふさいで誰にも見つからない屋上へと逃げていった。

教室を出るとき、「学校でもヤルのか……」とか聞かなかつたこ







「でも、時給1000円だよ？」

「なぬっ!？」

時・・・時給1000YENだとおおお・・・!う・・・う  
まい棒100本買えるじゃねえかつ!!!

いやいや!!!じゃなくて!!!今、少しでも金が欲しい俺にとっ  
ては願ってもない金額だつ!!!

「しかも、日給だよ」

「よっしゃあああああああ!!!!!!!!!!!俺に任せな  
さい」

「へ?ほんと!?よかつた〜 じゃあ、今日、放課後校門のところ  
で待ち合わせね!!!じゃあ、ばいばい」

・・・

結局、マナーの力に負けちゃいました・・・

「こ・・・ここか・・・(汗)」

「うん、そだよ」

俺は放課後、宮子に連れられた今日からバイト先となるかもしれぬ  
メイド喫茶はなんと・・・ファンシーな

お店だった・・・大丈夫なのか?俺・・・(汗)

「おい・・・宮子・・・(汗)本当に俺ここで働いて大丈夫なのか  
?おい?」

「大丈夫だよ」 耕司君結構、異性だけでなく同姓からももてそう  
な顔だし・・・それに私も色々と楽しめ・・・んじゃあ、  
早速入ろうよ」

「おい、今なんかぼろっと本音が出たような気がするが・・・

(汗)」

「れっつ〜」

「聞けよ!!!人の話!!!しかも、なんか店の看板よく見ると『冥土喫茶』になつとるんですけど!？」

これは、どういう意味だ!?!ごらあ!?!」

「ああ、多分それは工事現場のおつちゃんが間違えたんだよ」

「ねえよ!!!こんな間違い!!!飯にそうだとしても何かを狙っているようにしか見えねえよ!!!これ!」

なんか……ますます不安になってきた……(汗)

「……この、チンカスがあ!!!」

「うおっ!?何の事かわからないけど、とりあえずごめんなさい!」

いきなり、店を入るとなんか大勢のメイドさん達からの罵声が飛んできた!!!なんだよ!?これ!?

いきなり初日から職場のイジメか!?なんか、思わず正座して誤っちゃったよ!!!僕!!!(泣)

「やつほ〜 みんな〜ちい〜っす」

なにさわやかにあいさつなんぞかましてんだ!!!宮子おおおお!!!

これは、あきらかにいじめだぞ!?!いじめ!!!とりあえず、謝つとけて!!!お金渡しとけばとりあえず

殴られずに済むから!!!あれっ!?俺、ひよっとしてヘタレキャラ!?あれれれ〜〜?~?~?~?

「あつ、宮子先輩ちわっす」(メイドさんA)

「今日は遅かったですね。何かしていたんですか?」(メイドさんB)



な・・・なにっ!?!い・・・今のが挨拶だとお!?あの暴言言つのか!?おかしいだろ!!!絶対!!!

「あつ、ちなみに月曜日〜日曜日で1日ごとに挨拶違うからね 月曜日が『こおの、ド低脳が!!!』 火曜日が『こおのビチクソがあ!!!』 水曜日が『こおのチンカスがあ!!!』 木曜日が『尻の穴に手えつつこむぞわれえ!!!』 金曜日が『こおのロリコンがあ!!!親のスネかじってん生きてんじゃねえぞ!!!少しは働け!!!クズ郎!!!』 で土曜日が・・・」

「もう、いいです(汗)」

「・・・ツッコミどころが満載だがね(汗)」

「あははは、お兄さん面白いね」(メイドさんA)

「この喫茶店もいろんな意味で面白いけどね」

「ところで宮子先輩〜この人先輩の彼氏ですかあ?ちょ〜かつこいい」(メイドさんB)

「うんうん!特にまゆげがいいですよえ〜 まゆげ〜」(メイドさんC)

「・・・まゆげってなんだよ!!!おい!!!まゆげって!!!」

「うん、違つよ〜 耕司君は私の『ひも』だよ〜 えへへ〜」

「おいっ!!!待てコラ!!!てめっ!!!アマ!!!」

こいつはどこまで人を陥れたら気が済むんだ!!!

「お兄さん・・・頑張って・・・」(メイドさんA)

「頼むから真に受けなくてくれ!!!そして、その哀れむような目で見るとのやめてくれ!!!」(泣)

・・・

変な人ばっかだよ・・・(泣)

「お〜し！んじゃあ、さっそくこれに着替えてにやり」

「・・・いきなり、宮子が紙袋を俺に渡す・・・っていうか、なにキヤラ立ってしてんの？この子。」

「つて、おい！！面接はいいのかよ！？面接は！？」

「あつ・・・そっか〜・・・んじゃあ、店長呼んでくるね〜」

そして宮子は店の奥へ入っていく・・・

「・・・で？お兄さん、実のところ宮子さんとどんな関係なんですか？」（メイドさんA）

「・・・もしかして本当に『ひも』？」（メイドさんB）

「ち・・・違うからね！？どんな関係って・・・ただのクラスメイトだよ！！クラスメイト！！！！」

「え〜つままないの〜・・・愛人とかじゃないの？」（メイドさんC）

「あ・・・愛人！？ナニそれええええ〜！！？どっから浮上したの！？そんな話！？」

「えっと・・・宮子先輩が毎日のように言ってたんだヨ」（メイドさんA）

あ の・・・あまあ〜〜なんつーことを言いふらしてんだあああ  
！！！！！！

「え〜〜でも私は宮子先輩とオニイサン、お似合いのカップルになりそうだと思うんだけどな〜・・・」

「（メイドさんB）」

「うんうん！宮子先輩は天真爛漫でかあいいし」（メイドさんA）

「うんうん！お兄さんはまゆげがいけてるし」（メイドさんC）

「・・・だからさ、まゆげってなに？（汗）」

そんな他愛も無い話をしていると宮子が奥から出てきた。

「耕司君！！！！店長連れてきたよ〜」

「やあ 僕はこのメイド喫茶の店長!!! 原田見栄春だよ!!! よろしく!!!」

・・・なんで、おっさんがここに？  
番外編その4へつづく  
・・・(と想ふ)

番外編その3 『メイドさんはお好き?』 (前編) (後書き)

そろそろ本編の続きを書こうかなと思っております。



番外編その4 『メイドさんは好き？（後編）』

「ご氏名は？」

「村上耕司です」

「年齢は？」

「17歳です」

「家族構成は？」

「父、母、兄、姉、義妹、自分を入れて6人家族です。ですが、今は姉と俺は実家から離れてこの街に住んでいます」

「では、この仕事をやりたい理由は？」

「耕司君、新たな道に目覚めちゃったんだよね？」

「んなわけねえだろ！！！」

・・・

あれから俺は原田のおっさんに奥の面接室に案内され今こうして面接している。

おっさんのことだからどうせまともな面接じゃないんだろうな・・・  
と思っっていたら結構まともだった・・・

・・・

ただ、おっさんのフリフリのメイドさんの格好を見ていたら正直吐きそうになった。おえ〜。

あと、なにかと横からいらんこという宮子さんには正直ムカついた。  
「おおまかなことは大体聞いたね・・・んじゃあ、最後にもうひとつ・・・正座から足を崩した状態で上目遣いで赤くなりながら泣きそうな状態で舌を出しながら・・・」はあはあ・・・大好きです・・・  
あなたの二の腕・・・たぶたぶしてて気持ちいいですよね えへへ  
『って言ってみてください』

じえんじえん、まともじゃなかった！

「んな気持悪い台詞言えるかっ！！！！ふざけんな！！！！」

「あれれれ〜？いいのお〜？耕司く〜ん？確かお金ないんだよね〜



「じゃあ、まずお兄さんは練習として、あのお客さんのご注文聞いてきてここで伝えてくださいね。あと、必ずその場でメモとついで下さいね。慣れたら多分覚えると思いますから」(メイドさん

A)

「お……おうよ(汗)」

「……そして、最初の仕事が俺に回ってきた……正直、緊張している……この格好(女装メイドさん)についてはもう何も言うまい……」

もう、吹っ切れた。金貰うんだから少々は我慢することにした。

さあ……！！！！！！頑張るぜ！！！！！！

「お客様、注文お決まりでしょうか？」

「まだだよ！！！！あっち行ってろ！！！！どブス！！！！」

ど……どブっ……？……こいつ……なめやがって……っていかん、いかん。平常心、平常心。ひとやすみ、ひとやすみ。ここで切れたらこの店の印象が悪くなる。最悪、クビななななな……

いかん！！！！それだけはいかああああん！！！！！！

「うーん……どうすつかなあ……昨日はアメリカンにとこ

とん突っ走ったかな……今日はアフリカン気分だな……

・空模様もエジプト並だしな……」

……ナニ言ってるんだ？このモヒカン？ちゃんと左脳は機能しているのか？ニホンゴ喋りやがれ。アホ。

「あの？お客様？ご注文お決まりしだいこちらのボタンを押してください」

「ああん！？んなこたあ、言われなくてもわーってんだよ！！！！こ



も『かつぱ巻きとコーヒー』ってその組み合わせなんだよ!? 相性悪すぎだろ!!!!」

「お兄さん!!!! 取り合わせが悪いのはわかりますが抑えてください!!!!」

「そういう問題じゃあねえ!!!! かつぱ巻きなんて頼むこと事態おかしいだろ!?!」

「.....? なぜですか? かつぱ巻きならうちの喫茶のメニューにありますよ?」

「.....へ? 嘘.....」

.....

気がつけば、俺が手で持っていたモヒカンはすでに泡を吹いて気絶していた.....

「すみませんでしたあ!!!!!!」

俺は何度も何度もテンチョーのおっさんやメイドさん達に謝り続けた。

「いや、もういいよ。済んだことだしね。でも、次からは気をつけてくれよ?」

「あ.....ありがとうございます!!!!!!」

おっさんは結構優しかった。

「お兄さん、アノくらい気にしなくてもいいからね?」(メイドさんA)

「そうそう、あんなこと日常茶飯事だし」(メイドさんB)

「そうそう、まゆげがあるから大丈夫!!!!」(メイドさんC)

まゆげは余計だ。

「しかし、耕司君は短気だねえ.....そんなに早く怒ってたら、本

番もはやくイッチャウぞ」

「お前の頭はすでにイッチャってるけどな」  
・  
・  
・  
・

なんとなくこれからもうまくやれそうな気がした。

番外編その4 『メイドさんは好き?』(後編) 『(後書き)』

とりあえず、今回は本編ということので。

あと、何か要望、質問等ありましたらどうぞ遠慮なく聞いてください。できる範囲でお答えします。

第34話『抱擁と暗転』(前書き)

今回は鈴奈視点です。



第34話『抱擁と暗転』

「……………だから……………私と……………  
……………付き合って……………下さい……………  
……………」

……………え？……………  
これは……………なんだ？……………  
私は……………  
何を……………一体……………見ているんだ？……………

―雪美が耕司に告白する30分前―

「……………おつかれさまですう」、鈴奈先輩 「……………」(風紀委員全員)

「うむ、みんな今日はよくやってくれたな。おかげで今日1日学園の風紀が乱れずに済んだぞ。さあ、今日はみんな疲れただろう？帰ってしっかり疲れをとっておくがいい。」

「え、鈴奈せんぱい！もうちよつとしたら学園祭最後の夜のイベントあるんですよ？楽しみましようよ？ね？みんな？」

「うん！うん！私、彼氏とダンス踊るんだ」

「あつ！私も！私も！すつごく楽しみ」

「そういえば、鈴奈先輩は誰かとダンス踊らないんですか？」

「え……？いや……私は……別に……」

「……ダンス……か……私のガラじゃないが……」

……

「そういえば、鈴奈先輩って彼氏いないんですか？」

「あ、気になります……どうなんです！？先輩……！」

「なっ……なななななななな……！！！！（ノノノノノ）」

か……彼氏！？そ……そんなの……いるはずが……

……！

「あはっ せくんぱい 顔赤くなっちゃってますよ」

「鈴奈先輩、かあいい」

「ハアハア……」

「……ん？（汗）なんだ？今の吐息……」

「……………（ノノノノノ）……………ああ、もう……！散れ……！

！貴様ら……！！！」

「ああん 鈴奈先輩こわ〜イ」

「きゃ〜 きゃ〜」

「……まったく（汗）……」

悪ガキどもめが……（汗）

「……ダンス……か……」

……しかし、暇だ……









・・・そして最初に戻る・・・

「・・・だから・・・私と・・・  
・・・付き合って・・・下さい・・・  
・・・」















ソノサキハイワナイデー

第35話『裏切り者』（前書き）

今回は短いです。あと、ランキングに登録させて頂いたので、この小説を気に入ってくださったら投票、よろしくお願いします。・

ー)











「うるさい！！聞きたくない！！あなたの言い訳なんて！！  
あんた私にどれほどゴージャス君のことを思っていたか知らないわけな  
いくせに！！！！どうして！！！！？？？どうして！！！！？？？ねえ！  
！！？？？  
どうして！！！！？？？？」  
「  
．．．．．雪美．．．．．私は  
．．．．．」

「  
．．．．．裏切り者」  
．．．．．

．．．．．  
もう、すでに最後の花火のイベントは終了していた．．．．．  
．．．．．  
屋上には呆然と立ち尽くした俺と地面に座り込んでいる鈴奈だけが  
いた．．．．．  
．．．．．

あれから、鈴奈は一ミリたりともその場から動かず俺に背を向けた状態ですり込んでいた……

こんなとき……どんな言葉をかけてやればよいのだろうか？

「……鈴奈……」

「……耕司、私は……」

ずるい女……なんだ……」

「……」

「……本当に……ずるい女な

んだ……」

「……」

「……本当に……本当に……」

「……」

……

「……泣けよ……」

「……え？……」



そして……俺は今、気付いた……  
……ああ……俺は……この女のこと  
が……

「好き」なんだというのと「-----」

第36話『俺の痛みとアノ子の痛み』

．．．．．あの日から俺の生活は一変した．．．．．

．．．．．あの日から、鈴奈や雪美に会っていない．．．．．

．．．．．みるみる内に変わっていく俺達．．．．．

．．．．．なんで．．．．．こんなことになったんだろっ？．．．．．

い．．．．．でも．．．．．この場所の景色だけは何も変わっていない．．．．．



．．．．．そう、全てが始まったこの．．．．．屋上の景色は．．．  
．

俺は家で寝転んでいても仕方ないので気分転換に学校の屋上で日向ぼっこしていた（まあ、いつもの事だが）

°．．．．．あいかかわらず、ここは昼寝に最適なスポットだ。ふあああ．．．．．気持ちいいなあ．．．オイ。

「．．．．．俺、こんなとこになんで来たんだろううな」

．．．．．それにしても今日は寒い．．．．．もうすぐ、クリスマスシーズンだもんな．．．．．

「．．．．．何かが変わるわけ無いのにな．．．．．」

．．．．．ああ、暇だ．．．．．

「．．．．．帰るか．．．．．」

．．．．．

いつまでもこんなところに居てもしょうがない．．．．．

今、授業なんざ出ようと思わないからな．．．．．しかし．．．．．

「暇だ……つれえな……」

あの日から俺の生活は変わった……  
その翌日、俺と鈴奈は学校に来たが……雪美の席は空席だった……

正直、つらかった……いや……俺以上につらかったのは……

「……」

……鈴奈だった……  
「……鈴奈……」

俺はどう答えればいいのかわからなかった……いや……  
あんなにつらそうな鈴奈の顔なんか見たくなかった……

「……鈴奈……」

俺はふと少しでも気持ち楽にさせようと鈴奈の手を握ろうと近づいたが……

「来ないでっ！……！！……」

……それは拒絶の反応だった……  
「……頼む……しばらく1人にしてくれ……」

……泣きそうな声だった……  
……そんな声聞きたくなかった……

……どうして？……  
……どうして？……

．．．．．どうしてこんなことになったんだろう？．．．

俺がちょうど家に帰ろうと下駄箱で上履きから靴に履き替えているとき．．．．．

「．．．．．あれ？なんだこれ？」

．．．．．俺の靴箱に一枚の白い封筒が入っていた．．．

．．．．．しかし、封筒にはなにも書かれていなかった．

「．．．．．イタズラか？．．．．．」

とりあえず、中身を拝見すると．．．．．

「．．．．．なにに？．．．．．今日、放課後、待ってる。体育館裏で B y ポン太』．．．．．なんだ？これ？」

．．．．．なんで倒置法を使っているのかわからないが．．．．．

「．．．．．あきらかに怪しい手紙だった．．．．．暇だし行ってやるか．．．．．」

「．．．．．よう、兄弟。久しぶりだな」

．．．．．体育館裏で待っていたのは．．．．．

．．．．．勇輝だった．．．．．

「．．．．．なんだ．．．．．お前か．．．．．」

そして、俺は勇輝の傍に歩み寄ると・・・

「ちい〜つと齒あ食いしばれよ〜?」

「あん?」

バキツッ!.....!

「ぐあ!.....!」

ずざざざざざ!.....!

俺はいきなり勇輝に顔面を殴られてその衝撃で後方に倒れてしまった。

.....いてえ.....

「て.....てめえ.....いきなり何しやがる!.....!」

俺はダメージが浅かったのですぐに立ち上がり勇輝の胸倉をつかんだ。

「ふん、そこ、がら空きだぞ?」

ボスン!.....!

「ぐっ!.....!?」

今度は至近距離から俺の腹に勇輝のこぶしがめり込む。

「ぐは.....」

俺はダメージのせいかもしれないしやがみ込んでしまった。

「ふん.....情けない男だな.....」

俺はその言葉についかつとなり.....

「てめえええええ!.....!ぶん殴ってやる!.....!」

俺はすぐに立ち上がり回転が入ったストレートパンチを勇輝におみまいしたが.....

「ふん、まるでぬるい」

しかし、勇輝は俺の渾身のストレートパンチを余裕で軽く受け流し.....

.....

「ふんっ!.....!」

バキツ!.....!

「ぐああああ!.....!.....!」

俺はモ口に鳩尾に勇輝のパンチをもらい、ついに倒れてしまった.....

・・・

「ふん・・・まるで、弱いな・・・」

勇輝は俺を見下すような目で俺を見ていた・・・

「ごほっ・・・ごほっ・・・て・・・てめえ・・・一体、どうい  
うつもりだ・・・てめえ・・・」

・・・いてえ・・・

多分、口の中が切れてるな・・・これ・・・

「ほお？そんな姿になってもまだお前は減らず口を叩けるんだな」

・・・くそっ・・・なんか、屈辱的だ・・・

「まあ、今のお前の痛みなんざ、今の雪美ちゃんや鈴奈の痛みに比  
べたら屁でもねえわな・・・」

・・・え？なんでコイツがそ  
れを？なんで？

「お前・・・どうして、それを？」

「んなこたあ、どーでもいいですよ　だ！！！！なんでお前、  
あの時！！！！決断しなかった！！！！？」

・・・決断？・・・なんの事だ？

「・・・おい、勇輝・・・決断ってなんの事だ・・・  
？」

「・・・論外だな、お前。逝つてよし」

バキッ！！！！！！

「ぐあああ・・・！」

今度は腹に蹴りを入れられた・・・

「・・・お前は臆病者だ、チキンだ、そして・・・人間の  
クズだ・・・」

くそ・・・くそ・・・くそっ・・・

「・・・心の広い俺様がチキンの耕司君にひとつ忠告しておい  
てやろう・・・ああ、なんて優しいんだろう・・・俺・・・」

くそ・・・くそ・・・くそ・・・くそ・・・くそ・・・くそお・・・

・

「俺は・・・鈴奈が大好きだ・・・ハンバーグの付け合せのぼていとうよりも好きだ・・・」

だから・・・俺はアイツに俺の気持ちは今から伝えるに行く。妹？・・・ああ、義妹だからな、本当の兄妹じゃあないんだぜ？俺達」

「・・・」

「もち、雪美たんのことも大好きだ・・・お前は嫌いだけだな」

「・・・」

「だから、君はそこでいつまでも寝て待っていなさい。俺と鈴奈の結婚式ぐらいには呼んでやるからよ」

「・・・」

「じゃあな、兄弟」

第37話『悪魔の囁き』（前書き）

今回は雪美視点です。そして、非常に短いです。すみません（汗）

第37話 『悪魔の囁き』

．．．．．あの時．．．．．  
．．．．．どうしてあんなひどいことを鈴奈ちゃんに言っちゃったんだろう．．  
．．．．．  
．．．．．あんなこと言っつもりじゃなかったのに．．．．．なのに．．．．．  
．．．．．どうして？．．．．．

『．．．．．  
．．．．．裏切り者』  
．．．．．

！．．．．．ドクン！！！！！！  
あうっ．．．．．胸が．．．．．胸が苦しい．．．．．はあはあ．．  
．．．．．  
．．．．．ダメっ．．．．．ダメっ！

『ギゼンシャブツチャッテエ ソレガホントウノアナタノノゾミデ



シヨウ？』

「…………ドクン、ドクン！！！！！！」

はうっ…………モウ…………ヤメテ…………ヤメテ…………

ヤメテ！！！！！！

チガウ…………チガウ…………チガウノ！！！！！！

『ジブンガアイシテルタイセツナヒトガホカノメスブタニトラレチ  
ヤウ　トラレチャウ』

「…………ドクン、ドクン、ドクン！！！！！！」

ああっ…………チガウ…………ソクナコト…………イチドモ

…………オモッタコトナンカ…………

イチドモ…………オモッタコトナンカ…………

『チガウダロウ？ソレハオマエノタテマエダロウ？ホントウハアノ  
メスブタガニククテニククテシカタガナインダロウ？』

「…………ドクン、ドクン、ドクン、ドクン……！！……ち……ち  
がっ！」

『サア…………トリカエスンダ…………アノメスブタカラ…………  
…………アノメスブタカラジブンノタイセツナヒトヲ…………』

「…………ドクン、ドクン、ドクン、ドクン…………！！……あ…………  
…………あ…………あ…………」

『オマエハレイケツナオンナダ……………ナニヤツテモ……………』



私  
ごめんね、コージ君、鈴奈ちゃん、勇ちゃん  
もう  
私  
ごめんね、コージ君、鈴奈ちゃん、勇ちゃん  
もう

ヒトノカタチヲシタアクマダカラ

### 第38話『決断』

．．．．．俺は何をやっているんだ．．．．．  
．．．．．俺は勇輝のいう『決断』の意味は分かっていた．．．．．  
．．．．．いや、分かっているながら知らないフリをしていただけな  
んだ．．．．．

．．．．．怖かった．．．．．  
．．．．．俺達の今までの関係が崩れてしまいそうで．．．．．

．．．．．選べなかった．．．．．  
．．．．．どちらかが傷つくのを見るのが嫌で．．．．．  
．．．．．それに．．．．．

．．．．．雪美も鈴奈も好き．．．．．だったからだ．．．．．あ

いつが俺を殴る前までは……

「……いててて……あいつ……思いつきり殴りやがって……」

バカは手加減というものを知らないのだろうか？

「……はは……俺もバカじゃねえか……」

……あいつが殴ってくれたから俺は目覚めた……

……あいつが気付かせてくれた……

……あいつに感謝してもし足りねえぐらいだ……

「でも……なんかそれは負けた感あるから嫌だけどな……

……ははは……」

……行こう……

俺は……もう、すでに『決断』した……

あとは……この気持ちを『アイツ』に伝えるだけだ……

俺は立ち上がり後ろを振り返ると、そこには……

「……コージ……君？」

そこには……ひどく弱々しい『アイツ』がいた……

そう、雪美だった……

……何日ぶりだろう……

こいつの顔を見るのは……

……あの日『とは全然違う……

．．．．．ひどく弱っていた．．．．．

．．．．．今にでも倒れそうで．．．．．

．．．．．涙が溢れそうになった．．．．．

．．．．．抱きしめたい．．．．．

．．．．．でも．．．．．でも．．．．．



．．．．．こんな情けない俺でいいんだろっか？．．．．．

．．．．．いや、もう決めたじゃないか．．．．．

．．．．．この気持ちを伝えるって．．．．．

．．．．．雪美に．．．．．

．．．．．この気持ちに嘘偽りなんて無い．．．．．



・  
・  
・  
・  
雪美  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
俺の気持ちを  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
受け取ってくれ  
・  
・  
・

「  
・  
・  
・  
・  
雪美  
・  
・  
・  
・  
俺はお前のことが  
・  
・  
・  
・  
」

雪美は今どんな表情だろう  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
赤くなっているのだろうか  
・

・・・？

俺の胸の中にいるから表情はわからないが・・・

「お前のことが・・・」

「・・・」

「好き・・・だ・・・ぐ・・・？」

・・・？なんだ？・・・

「……………耕司君……………私も愛してるよ……………」

……………なんか……………腹が……………生暖かく……………

「……………愛してるよ……………」

……………アレ？雪美？なんで泣いてるんだ……………？

「……………ん……………」

．．．．俺と雪美の唇が重なる．．．．なんだか違う世界に  
いるみたいだ．．．．

「．．．．」

．．．．すぐに離れる．．．．たった数秒だったが幸せだった．  
．．．．

「．．．．耕司君」

．．．．視界がゆがんできた．．．．ははは．．．．なんだ  
かくらくらしてきたぜ．．．．

．．．．．なんでだ？なんでこんな幸せなのに．．．．．

．．．．．目の前にいる雪美が．．．．．どこか遠くへ行ってしまう  
じつじつで．．．．．

「．．．．．泣かなくていいんだよ？．．．．．耕司君．．．．．」

．．．．．バカ．．．．．お前も泣いているじゃねえか．．．．．  
人のこといえねえ．．．．．

「私は……私は……ずっとずっと耕司君の傍に  
いるから……ね？」

く……ああ……眠たくなってきた……意識が遠

「……だから……」

……待つてくれ雪美……

「……」







### 第39話 『最後の手紙』

耕司君、私ね、ひとつ耕司君に謝らないといけないことがあるんだ。

ごめんなさい。

……許してくれるかな？

こんなバカな私を。

でもね、私ね、あの時、耕司君が最後に私のことを『好き』って言うってくれて……

すっごく嬉しかったんだよ？

だから泣いちゃった。

もう、あの時私はニンゲンじゃなかったのにな。

アクマだった私が………思わず泣いちゃったよ。

………こんな私が泣いちゃあいけないのにな。



2人で・・・遊園地に行ったり・・・映画館に行ったり・・・  
動物園に行ったり・・・

・・・なんで・・・なんで・・・なんで・・・

・・・こんなこと・・・

・・・ねえ？耕司君・・・聞いてくれる？

.....私ね.....嫌な子なの.....

耕司君のことを独占したかったの。

誰にも私の大好きな耕司君を渡したくなかったの。

.....だから鈴奈ちゃんにひどいこと言っちゃったよね.....

あんなこと言うつもりじゃなかったの.....

だから……耕司君。お願いがあるの。

……まず、鈴奈ちゃんに伝えといてくれる？

……『しゅめんね』……って……

……あっ、勇ちゃんにも……ね。

……勇ちゃん、耕司君のこと心配してたよ？



．．．．『思いつきり殴ってスマン』．．．．だって。

ね．．．．あはは．．．．私達って最後まで周りに心配かけてる

．．．．でね．．．．もうひとつ最後のお願いがあるの。

．．．．耕司君、この手紙を読み終えたら．．．．どうか．．．．  
．．．．私のこと．．．．

研わて．．．．

．．．．．忘れて．．．．．お願い．．．．．

．．．．．忘れて．．．．．新しい．．．．．恋をしてください．．  
．．．

て．．．．．わたしなんか目じゃないずーっと素敵な人を見つけ  
．．．

．．．．．間違っても私のこと覚えてちゃダメだよ？

．．．．．あ、ごめんね。もうひとつお願いがあったんだ．．．．．

．．．．．幸せになってください．．．．．

．．．．．自分勝手なお願いでゴメンね？．．．．．

．．．．．私は耕司君のことずっと忘れない．．．．．

．．．．．でも、耕司君は私のことを忘れてこれから前に進んで  
行ってね。

．．．．．大好きだよ、耕司君．．．．．

・・・・・・・・・・・・・・・・

(この手紙は事件未明、母親によって発見された。机の上においてあったという。その手紙は涙の跡でしわしわになっていたと後日、母親は語る。発見された翌日、入院している村上耕司にその手紙が渡されたという)

第40話『永遠に』（前書き）

これで過去編終了です。

第40話『永遠に』

「・・・・・・・・・・・・・・・・ん」

目を覚ますと視界に白い天井が飛び込んできた・・・・・・・・なんだ・・・・・・・・ここは？・・・・・・・・ここは・・・・・・・・どこだ？・・・・・・・・俺は・・・・・・・・いたい・・・・・・・・なにを？・・・・・・・・だめだ・・・・・・・・よく思い出せない・・・・・・・・俺は・・・・・・・・一体何をしていたんだ？・・・・・・・・

「よじやく目覚めたか、耕司」

すると俺の耳に聞き覚えがある奴の音が響く。・・・・・・・・この声は・・・・・・・・

「……勇輝？」

「ああ、お前の勇ちゃんだ」

「きもっ」

「ああ、俺はきもい」

「そこで同意するなよ……（汗）」

「ところでナスさんは萌えるよな」

「あ、そう」

しかし、なぜ勇輝がここに？ていうかここは病室か？

「おい、勇輝……」

「おっと、お前に渡すものがあるんだっ」

すると勇輝は封筒を俺に手渡す。……なぜ、股間から出す……

……

「その手紙をよく読め。そこに答えはすべて詰まっている」

「？何のことだ？」

「お前が知りたかったことだ」

「？」

勇輝は俺に背を向け部屋から出て行った。……とりあえず、

この封筒の中身を開けた。

「……手紙？」

俺はその手紙を読み始めた……

――

――

――

――

――

「・・・・・・・・・・・・・・・・雪美・・・・・・・・・・」  
・・・・・・・・・・そうだ、思い出した。俺が意識を失う前にあ  
っていた人は・・・・・・・・・・

まぎれもなく、雪美だった・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・なんで・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・どうして？どうして？！！！！！！

「・・・・・・・・・・お前がいなんだよおおおお・・・・・・・・・・」  
・・・・・・・・・・

手紙の内容でわかってしまった。この手紙が雪美から俺への『最後  
の手紙』だということに・・・・・・・・・・

「雪美・・・・・・・・雪美・・・・・・・・雪美・・・・・・・・」

俺のせいだ・・・・・・・・俺のせいだ・・・・・・・・俺のせいで・・・・・・・・

雪美は・・・・・・・・

「雪美いいいいいい・・・・・・・・」

俺が・・・・・・・・雪美の気持ちに気付いてやれなかったから・・・・・・・・

雪美は・・・・・・・・

ふと、窓の外を見ると雪が降っていた・・・・・・・・

その雪は・・・・・・・・絶え間なく降り続いていた・・・・・・・・

その雪は・・・・・・・・すごく綺麗だった・・・・・・・・

けど、その雪は・・・・・・・・俺の心を癒してくれない・・・・・・・・

いや、逆に・・・・・・・・見るのがつらかった・・・・・・・・

その雪が・・・・・・・・弱々しくて・・・・・・・・

その雪が・・・・・・・・切なくて・・・・・・・・

その雪が・・・・・・・・悲しくて・・・・・・・・



その雪が・・・・・・・・雪美に見えて・・・・・・・・

『それは違うよ。コージ君』

・・・・・・・・・・・・・・・・えっ!?!?雪美!?!?どこだ!?!?どこにいるんだ!?!?

『私が・・・・・・・・・・のはコージ君のせいじゃないよ?』

・・・・・・・・ち・・・・・・・・違う!俺のせいなんだ!俺のせいで・・・・・・・・雪美は・・・・・・・・

『うっん、違うよ。これは私が望んだこと』

そんなことない!俺が・・・・・・・・俺が!

『コージ君、そんなに自分を責めないで。私、そんな自暴自棄なコージ君、見るの嫌だよ?』

・・・・・・・・そんな・・・・・・・・俺は・・・・・・・・俺は・・・・・・・・聞いて、コージ君。私は・・・・・・・・罪を犯したんだ』

・・・・・・・・それはコージ君もわかってるはず。すごい大きな罪なの』

・・・・・・・・違う・・・・・・・・私・・・・・・・・コージ君のことが好きだった・・・・・・・・

・・・・・・・・雪美いいいい・・・・・・・・

『泣かないでコージ君・・・・・・・・コージ君まで泣いちゃったら余計つらくなっちゃうよ・・・・・・・・』

．．．．雪美いいいい．．．．俺はお前のこと．．．．好き  
なんだ．．．．

『ありがとう、コージ君．．．．えへへ．．．．やっぱり私嬉  
しいな』

．．．．雪美いいいいいい．．．．

『でも．．．．もう、私．．．．『向こうの世界』に行かなくちゃ  
いけないから．．．．』

．．．．待つてくれ．．．．雪美．．．．

『．．．．最後に．．．．』

．．．．待つてくれ．．．．雪美．．．．

『．．．．コージ君．．．．』

．．．．いやだ．．．．俺はお前のことが好きなんだ！俺も！  
一緒に．．．．そっちへ．．．．

『だめだよ、コージ君、来ちゃダメ』

いやだ！いやだ！いやだ！雪美！俺はお前のこと大好きなんだ！愛  
してる！一生愛してる！だから待つてれ！俺もそっちに．．．

『．．．．だめ．．．．だめだよ．．．．コージ君．．．．』

なぜ！？なぜ！？なぜなんだ！？こんなに俺は雪美のことが大好き  
なのに．．．．！なんでだめなんだ！？

『．．．．コージ君は．．．．歩かなきゃいけないから．．．．

』

．．．．『歩く』？．．．．

『そう．．．．コージ君はこれから自分で歩く．．．．前を見  
て歩いて欲しいの』

．．．．いやだ．．．．

『振り返らないで．．．．前を見て歩いて欲しいの』

．．．．

『そして．．．．幸せになつてね．．．．コージ君．．．．』

いやだ．．．．雪美がない世界なんて．．．．幸せになれな

いよ．．．．俺．．．．



．．．．．いつまでも雪は降り続いていた．．．．．

そう．．．．．永遠に――――

「．．．．．ん」

．．．．．夢．．．．．か．．．．．  
．．．．．ああ、俺は過去の夢を見ていたんだな．．．．．  
．．．．．アレがきっかけで俺は．．．．．こっちの街に．．．．．  
来たんだっけ．．．．．  
．．．．．雪美のいう．．．．．

．．．．．『素敵なひとを探しにーーーーー』．．．．．

．．．．．はあ．．．．．  
．．．．．しかし．．．．．あいつら元気かね．．．．．  
勇輝．．．．．エロにさらに磨きがかかってそうだな．．．．．し  
かしのメガネ（英男）には勝てまい．．．  
鈴奈．．．．．あいつ．．．．．俺がこの街に行くっていったとき  
もーーーーー

「うむ、元気だな」

．．．．．つらいだろうに．．．．．  
笑顔で言ってくれた．．．．．  
．．．．．またいつか里帰りつてのもいいかもな．．．．．

「コージ君」

．．．．．えっ！？雪美！？まさか！！！！！！  
俺はすぐ起き上がってみると．．．．．

「．．．．．なんだ、夏美か」

「なんだ、じゃないよ！もう！お兄ちゃん！？こんなところでサボ  
つてたんだね！！！！！！」

「はあ？サボる？なにを？」

「なにを、じゃによ！！！！！！掃除だよ！！！！！！掃除！！！！！！  
今日の掃除当番はボクとお兄ちゃんだったでしょ！？そんなことも  
忘れたの！？」

「．．．．．ああ、そうだったか、すまん、おちびさん」

「むきー！！！！！！」

「まあまあ、そう怒るなって．．．．．ところで夏美。お前、今、

『コージ君』って言わなかったか？」

「……………？言っていないよお？どうかしたの？」

「……………そうか」

「さあ、とつとと行くよ！！！！！！」

ずるずるずるずるずるずる

「あいだだだだだ！！！！！！擦れてる擦れてる！！イタイイタイ！！引  
つ張るな！コラ！」

「コージ君の変態っ！！」

「なんでだよ！！！！！！！！つて……………え？……………雪美……………  
」

「てへ、呼び方を変えてみました。……………つてお兄ちゃん？」

「……………はっ……………」

「どうかしたの？」

「……………ああ、なんでもない」

「？」

……………一瞬……………

夏美と雪美がダブって見えた……………

……………気のせい……………だよな？……………





第40話『永遠に』（後書き）

おつかれさまでした。過去編いかがだったでしょうか？よければ感想 and 評価よろしくお願いします。

次回からはまたコメディが続きます！

第41話『クリスマス・・・もといクルシミマスパーティーはいかが？』(前書き)

もうじきクリスマスですね( ^ - ^ )

第41話『クリスマス……もといクルシミアスパーティはいかが？』

「メリークリスマス!!!!!!」

今日は待ちに待ったクリスマス。そんな聖なる夜を楽しもうと俺達、高宮学園寮メンバー+（セクハラばばあ（麻美）、変態神メガネ（英男）、ふあんしーおじさん（鉄二）、不思議系オネエサン（真由美）、アキバ系オニサン（健吾）、妄想変態シスター（琴美）、サル（慎也）、天然系悪魔っ子（宮子））でクリスマスパーティーを開くことになったというわけだヨ、諸君。……俺にとってはクルシミアスパーティになりそうだがな……。……（汗）。例によって食事のメニューは千里さんが決めた。かに鍋とケーキだ。千里さんが作るうとしたのでさすがにそれはまずいと思い全員で止めにかかったがな。

434

「ねえねえ、お兄ちゃん。このホタテもういけるかな？」

「ばっか、貝類はよく煮込まなきゃいけねえって神山さんが言ってただろうが」

「……誰？その人？（汗）」

「おい、耕司！このカニまだだめなのか？俺、腹が減って仕方がねーんだけど？」



「……はあ、つたく……騒がしくてゆつくりメシが食べんじやないか……まったく……」

「……ん？……って、おい！！！！誰だああああ！！！！鍋にガン普拉入れたのおおおお！！！！！！！！！！食えるか！！！！！！こんなもん！！！！！！！！」

「……僕でござるよ、風流があつていいでござるじや？」  
「健吾さん！！！！ガン普拉に風流もクソも無いから！！！！！！！！なんか不気味だからね！！！！！！！！」

「なんだとう、ボクのマルコニーちゃんをバカにするなにやり！！！！！！ロケットパンチ！！！！！！！！」

びゅん、バキッ

「ぐえ！！！！！！！！」

「んんん……暑いですう……」  
ぬぎぬぎ……

「だあああああああ！！！！！！！！ちよつとおおおおお！！！！！！真由美さん！！！！！！何脱いでんですか！！！！！！止めてください！！！！！！（ノノノノノ）」

「いやあん！はなして〜！誰か助けてえ〜！この男に襲われますううううう！！！！！！！！」

「何とんでもないことぶちまけてんですか！！！！！！いいから止めてください！！！！！！！！」

「こおおおおらああああ！！！！！！村上耕司iiiiiiii！！！！！！な〜にやってんのよおおおお！！！！！！」

「！！！！！！この……ド変態iiiiiiii！！！！！！」  
ばつきこおおおお〜~~~~ん！！！！！！！！

「ぐおおおお！！！！！！……？？？？？」  
いでえええええ！！！！！！アリスの飛び蹴りが俺の大事なところに命中した！！！！！！！！

「なんでだ！！！！！！俺、何もやってねえのにiiiiiiii！！！！！！！！！！  
こんなの理不尽だあああ！！！！！！（泣）」

「村上君……私は悲しいです……あなたのお母様になんて報告したらいいのか……」

「ちよつとお……!!!!千里さん……!!!!あんた一部始終見てたでしょ!?何言ってるんですか!?!」

「ああ……無念です……」

「止めてください……!!!!祈らないで下さい……!!!!なんか本当に俺、悪いことしたみたいで傷つきますから……!!!!」

「えへへへ……耕司さん……今夜、ボクの部屋で共に聖なる夜を過ごしませんか?うふふふ……絶対、今夜は寝かせませんよ」

うげえ!ジヨウイチロウケンキタアアア……!!!!サラニキモチワルイデスヨ!オヨヨヨ?

「丁重にお断り申し上げます」

「え……?ダメでしたか……?え……?もつと中身が見たい?耕司さんだったらあ(はあと)こんな人ごみの中で……いやですよでも……今夜……僕の部屋で……待ってます」

……ぽぽぽ(ノノノノ)

「断つたのにいつの間にか変な約束取り付けられちゃった……!!!!」

「!」  
「つか……!!!!中身って何さ!?ねえ!?!」

……そして、数時間後……

「ぐぐぐ」

「すびすび」

「すやすや」

「むにゃむにゃ」

「ああん！いい！そこ！そこが1番ジャストフィットするう！あああ〜！」

「……みんなお酒を飲みすぎて全滅していました……  
……なんかおかしいな寝言があつたが気にしない……  
しかし、1人だけまだお酒を飲み続けていた人がいた……  
……千里さん、もうその辺にしておいた方がいいのでは？」

(汗)

「……ふふふ、今日ぐらいいっぱいお酒を飲んでもいいでしょう？」

「……あんだ、いつつもいっぱい飲んでるじゃあねえすか……」

(汗)

「……」

それでもまだ飲み続ける千里さん……さすがにお酒の神、千里さんでも顔が赤くなつてらあ。

「……村上君……ここは……楽しいですか？」

「……は？」

いきなり何を言い出すんだ？この人は？

「……まあ、それなりに楽しいですよ」

「……よかった……」

ドキッ(ノノノノ)

うつ……つい赤くなつてしまった……参つたな……  
コノヒトの笑顔は反則だヨ……

「……ココの子達はみんな……いい子でしょう？」

「……ええ」

「……村上君のことはあなたのお母様から全部聞いてますよ……  
……辛かつたでしょう？」

「……」

「……お気持ちはわかります……私も……大切な人を失くしたんですから……」

．．．．．千里さんの．．．．．『大切な人』？．．．．．なんか  
気になるな．．．．．

．．．．．でも．．．．．人の過去を詮索するのはあまりよろしく  
ないからあえて聞かない事にした。

「だから．．．．．私も．．．．．」

．．．．．千里さん．．．．．泣いている？

．．．．．

「．．．．．すーすー」

．．．．．あれれ？いつの間にか寝てらっしゃる．．．．．

．．．．．疲れたんだな．．．．．

「．．．．．メリークリスマス、千里さん」

俺は千里さんにそっと毛布をかけ、自分の部屋へ戻っていった。

こっぴつして、聖なる夜は過ぎていった．．．．．



第41話『クリスマス・・・もといクルシミマスパーティーはいかが？』

(後書き)

クリスマスだからといって特別なことはしませんけどね、僕は・・・  
・・・ああ、なんか切ない気持ちでいっぱいです。

番外編その5 『王様ゲームは好き?』 (前書き)

番外編その5です。時系列的には41話でのお鍋パーティーのすぐ後の出来事です。

番外編その5 『王様ゲームは好き?』

「あ〜んっふん!では!今から!王様ゲームを始めたいと思います  
!!!!!!!!!!げへへへへ!!!!!!!!!!」

「ぎゃははははは!!!!!!!!!!!!!!いぞおおおお〜メガネえええええ  
!!!!!!!!!!やれやれえええええ!!!!!!やりまくれええええ!!!!!!  
!(笑)」（麻美さん）

「ハアハア……………ついに……………ついに……………耕司さんと……………  
……………エへへへ……………」(条一郎君)」

「……………ついに?ついに俺と何する気なのかな?条一郎君?ね  
え?条一郎君?(汗)」

……………

聖夜の夜は会食パーティだけでは終わらなかった。アホ毛メガネが  
「聖夜といえば王様ゲームだろう!!!!!!なあ!?皆の衆!!!!!!」と  
かワケのわからんことを言い出し、なんやかんやで王様ゲームが始  
まった。ちなみに参加メンバーはエロメガネ(英男)、サル(慎也)  
、条一郎君、原田のおっさん、麻美さん、宮子、夏美、百合ちゃん、  
アリス、俺の計10名。……………王様ゲームで半分が男ってどう  
よ?(汗)

「さあ〜では皆の衆!!!!!!さっそく、このクジを引いてくれたまへ  
!!!!!!!!!!端っこがマジックで赤く塗られているクジを引いた人が王様  
だ!!!!!!ちなみに王様じゃあない人は1〜9の番号が書かれている  
!!!!!!王様はその人に好きな命令ができるというシステムさっ!!お  
つと!ただし!自分の番号は伏せておいてくれよお?・

「・・・ハアハア、さあさっそく始めようか・・・ハアハア」  
「・・・さっそく興奮してやがるな、このメガネ君は・・・」

「・・・ん、残念。俺が引いたのは6番だった。

「お兄ちゃんどうだった？」

「俺は王様じゃあねえぞ。お前は？」

「違うよ、アリスちゃんは？」

「・・・私も違うわよ・・・百合、あんたは？」

「・・・残念です、色々命令したかったのに・・・ウフ・・・

ウフフフ」にやあゝ

「・・・ゾクリ・・・百合ちゃん？怖いよ？何命令する気だったの？」

「知りたいですか 耕司さん」にっこり

「イエ、ケツコウデスヨ」

ひい！思考回路読まれてる！！！！

「じゃあ、誰なんだ？王様は？」（サル）

「やた！あつたしだゝ」

げえ！宮子！お前かよ！！！！

「くうううう・・・くそお・・・もうちょっとだったのに・・・」

（汗）

「あのね？メガネ君？君は馬鹿ですか？くじにね？もう少しもクソも無いの。運しだいなの？君が努力したところで世界は救われないの。報われないの？O・K？アンダスタン？」

「・・・耕司、お前も最後のほう言っている意味が分からんぞ？」

汗）「（サル）

「さてと ナニ命令しようかな」  
「…………コイツはナニを命令する気なんだろう…………（汗）  
…………予想が着かないだけに正直怖い…………（汗）頼むか  
ら…………6番だけには命令しないでくれよ…………神様！  
お願い！俺を救ってくれ！！！！」

「ん〜とね じゃあ 『あたし（王様）が6番の人をはぐはぐす  
る』で」

必死の思いも報われなかった。この世に神はいないのか？

「6番の人、かも〜ん」

「……………俺だ」

「あは やた！耕司君だあ 偶然って素晴らしいよね」

「……………何故だろう？お前が言つと必然っぽく聞こえるのは何  
故だろう？」

「じゃあ、剥ぐ剥ぐよ・ろ・し・く」

「字が違つ！！！！それに指をしゃぶるな！！！！なんかエロい！！！！  
！」

「……………まじで、んな恥ずかしいことコイツとすんのかよ…………  
…………（ノノノ）

「おのれえええええ！！！！！！村上いいいい！！！！！！」（サ  
ル）

「ひどいです…………耕司さん…………僕たちはあの夜に誓い  
合つた仲じゃないですか…………それなのに他のメスブタといっ  
しょに……………ひどいです…………」（条一郎君）

「条一郎君？なに？その三角関係みたいな展開？俺望んでないから  
ね？そんな嫌な展開。っていつかあの夜ってナニ？誓い合つてもな  
いよね？僕たち？ナニ勝手なこと言ってるのかな？君は？（汗）」



―――30分後―――

「ほやゝ 気持ちよかった」(宮子)

「はあはあ……やつと……解放された……っ  
つかあいつやりすぎだろ……(汗)」

「……お兄ちゃんの馬鹿……」

ぷいっ!

「……?お前なんで怒ってんの?」

「……??????ワケがわからない……」

「ん?ひい!なんか百合ちゃんから黒いオーラが吹き出てるんですけど  
おおおお!!!!!!」

「……ど、どうしたのかな?百合ちゃん?おゝい?(汗)」

「……」

「……(汗)おゝい?百合ちゃん?(汗)」

「……#\$&%#<>x」

「ひい!なんか唱えだした!!!!!!(汗)ちよっ……  
・怖いからほっとこう……」

「じゃあ、続けるぞ、諸君!!!!!!では、またクジを引いてくれ  
!!!!!!」

……うゝむ、残念。今度は8番だった。さあ、次は誰が王様









「嘘っ！あんた！エロいこと命令したら承知しないわよ！！！！！」  
(アリス)

「耕司さん……………私は準備完了です……………(ノノノノノノ)  
(百合)

「さあ……………耕司さん……………ベッドの用意はできましたよ  
?……………いつでもオツケーです……………」

(条一郎君)

「いやいや、条一郎君はナニを言ってるの？(汗)百合ちゃんも女  
の子なんだからそんなこと言わないの」

「はやく命令しろよ」

「わーったよ……………」

さて、どんな命令にしようかな……………?

「1番と3番が腕立て伏せ50回、スクワット50回、腹筋50回  
しろ」

「お兄ちゃん、ヘタレ」(夏美)

「真性のヘタレ野郎です」(百合)

「チキンね」(アリス)

「チキンっ チキンっ チキンっ」(麻美と宮子)

「な……………なんだよう！せっかく妥協したのになんて言い草なの！  
?君達!?!」

すごいこと命令しても怒られるわ……………妥協してもヘタレやら  
チキンとかいわれるわ……………

どうすりゃいいんだヨ！俺！

……………

ちなみに1番と3番は原田のおっさんとサルでした。

「ん……眠くなってきたわね……もうこれで最後にしない？」

アリスの提案でコレが最後の王様ゲーム!!! ようし!!! 次はやらし……げふんげふん……すごいこと命令してやるぜ!!!!!!  
!……っと思ったら……俺、王様じゃねーし……

(泣)

「ん、私が王様ね」

アリスが王様か……どんな命令が飛び出すやら……

「実は私もう命令あらかじめ考えてるのよね」

「早いな、じゃあ言えよ」

「じゃあ……」

「5番と7番が互いに愛の告白をしなさい……あゝ別に嘘でもないからくささい台詞を言ってもかまわないわよ ふふふ」

俺の番号を見てみると……7番……  
・まじでか(汗)

.....じゃあ、5番って.....誰だ？

「.....俺は7番だ.....5番は.....誰だ？」

そいつは.....

番外編その5 終

番外編その5 『王様ゲームは好き?』 (後書き)

5番が誰なのかは皆様のご想像にお任せします。

第42話『時は金なりって言うけどお金じゃあ時間は買えねえ!!--!』(前書き)

今回は非常に短いです。スイマセン、本当にスイマセン(汗)

第42話 『時は金なりって言うけどお金じゃあ時間は買えねえ!』

冬休みも終わり、年明けの最初の登校日の朝・・・  
なんか・・・こう、年明けって妙にやる気が出るよな、みんな・・・  
・言つとくけどやるってそっちのやる気じゃあないからね? とう・  
・なんツーカー・・・身が引き締まるというか、おい!!! おっさ  
ん!!! 一緒にやっちまおうぜ!!! げへへ!!! みたいな・・・  
・ん? あれ? なんか今の台詞おかしかった?・・・まあ、それはど  
つか彼方に置いて・・・とにかく今年はなんかハッピーで  
ラブラブできゅあきゅあなあまくい日々が過ごせそうだZE!!!  
・あれ?

「だあああああああ!!! 遅刻だあああああ  
ああああ!!!」

現在の時刻、AM 8:20。だああああ!!! 完全に遅刻だ  
!!! 年明けの最初の登校日なのに何やってんだ! 俺! 馬鹿か! 俺  
! ハッピーとかきゅあきゅあとか言ってる場合じゃなかったよ! 俺  
! すぐさま着替えて寮の階段を降りるとリビングで優雅にジャスマ  
ンティをすすっている千里さんがいた。

「ハアハア・・・ち・・・千里さ・・・ハアハア・・・あ  
・ハアハア・・・いつらは・・・ハアハア・・・」

「いやですよ」村上君、朝から私を見るなり興奮して・・・  
ああ・・・やっぱり年頃の男の子って我慢できないんですね・・・  
・・・私も罪深い女です・・・(ノノノ)」



「ち・・・違いますよ!?別に今のは欲情しているわけじゃなくてですね!」

「ガーン!!!・・・私って・・・村上君に欲情してもらえないほど見るに耐えない体系なんですわね

・・・正直シヨツクです、しくしく」(わざとらしい)

「って!!!そういう意味じゃあなくてえ!!!ああ、もう!!!こんなこと言っている場合じゃないのに

!!!千里さん!!!夏美とか百合ちゃんもう学校行っちゃいましたか!？」

「あら、なつちゃんと百合ちゃんなら今、慌てて飛び出して行きましたけど?」

「ありがとうございますっ!!!イッテキマス!!!千里さん!!!」

「はい、気をつけて行ってらっしゃい」

くそく!!!あいつら!!!なんて薄情なやつらだ!!!学校着いたらすごいことしてやるからな!!!

例えば机の中に不幸の手紙大量に入れたり、弁当の大好物だけを食べて元に戻したり、今日の日直書きかえて

あれ!?私じゃないのに!?なんで!?いやああああ!!!!!とかしてやるからな!!!!!

あれ?俺って結構、小心者?

「いやあ!!!久しぶりだねえ!!!耕司キーン!キーン!胸、ドキーン!(はあと)今日も君のハートを射止めてあげるからねっか・く・こ・し・な・きゅん!きゅん!」

いきなり、通学路を走っているとメガネがちょうど曲がり角からい





第42話『時は金なりって言うけどお金じゃあ時間は買えねえ!!!!』

(後書き

ひぐらしに引き続き、うみねこにハマりました……面白いな  
ミステリー。最高デス!!!!

### 第43話『ツンデレちゃんはほとんどが負けず嫌い』

AM7:00 武道館

「はああああ！！！やあ！！！」

「バシーーーーーン！！！！！」

「い．．．1本ーーーーー！！！！」

「お．．．おおおお．．．．．やっぱすげえなあ．．．．．あの  
子（汗）また、1本取りやがったぞ」（男子A）

男子A）  
「ああ、あの速さ．．．あの反射力．．．力強さ．．．女とは思え  
ねえよなあ．．．．（汗）」（男子B）

「はあ．．．はあ．．．あの滴る汗．．．あのほのかに香るにほい  
．．．揺れる乳．．．．最高おおおお  
．．．．ふうふうふう．．．．うひひひひ．．．．」（男子P）

「．．．．．お前は十二を見てるの？（汗）」（男子A）  
武道館では早朝から剣道部が朝練に励んでいた。といてもこの高  
宮学園の剣道部の部員は2人しかいない少人数の部なのだ．．．  
普通は廃部になってもおかしくない。しかし．．．この学園の理事  
長も相当おかしい人で「楽しければそれでいいジャンジャン」みた  
いな感じな人で少人数の部に対しても存続を許している．  
．．確かにそれは幸せなことかもしれない．．．しかし、周り  
の大人数の部はこの少人数の部に対してどう思っているのか？．．  
いい気はしないだろう。なぜなら、そんな少人数の部に部費を持つ

ていかれるくらいなら自分達大人数の部費を上げてほしい……  
という汚い考え方をする部も存在するからだ。なので少人数の部に  
とっては実に肩身の狭いことなのだ。実際、そのせいで廃部になる  
部も少なくない。その中でもこの剣道部は毎朝、絶えず練習を怠ら  
ないまじめな部なのだ。剣道部の部長、高宮麗奈そして副部長、ア  
リス・

ブランドーの2人が所属している。

「……しっかし……おいしいよなあ……あの2人……  
……素人の俺が言える口じゃあないけど

あれだけうまけりゃあ、全国も夢じゃあねえような気がするのにな  
……」(男子A)

「ああ……でも部員の数か2人じゃあなあ……個人戦  
はともかく団体戦にも出られないからなあ」(男子B)

「あれだけのテクを持っているのになえ……. . . . . 実においしいこと  
だ、うひゃひゃひゃ……」(男子P)

「……お前が言ってる『テク』っていうのはなんか違うような気  
がする(汗)」(男子A)

「いやあ……また、1本とられたわ……アリスちゃんほんま強  
いなあ(笑)」

2人で朝の軽い練習試合を終えて談笑する。

「いえ……麗奈さん、いつも私のわがままに付き合ってくださいっ  
てありがとございます」

アリスのわがまま……とは朝練のことだ。

「ええよ！気にかけることあらへん！どーせ、朝はよ起きてもするこ  
とあらへんし、じっとしてるよりまだ体動かしてる方が健康にええ

しな！あはははは！」

「……………」

アリスは心の中でも麗奈さんに深い感謝をしていた。……アリスは負けず嫌いでプライドが山のように高い

。そんなアリスが剣道でめっちゃくちゃ強いのは彼女のそんな性格から来ているものだろう。……それだけではないのかもしれないが……………

「ん……………もう7時45分か……………んじゃあ、今日の朝練はここで切り上げるか？」

「はい」

「ちよつと待つてくれないか？」

2人が後片付けをしようとするところとちよつと武道館の入り口付近から1人の女生徒の声がした。

「？あの〜？どちらさんで？」

麗奈さんがその女生徒に尋ねると……………

「……………ちよつとこの武道館に立ち寄つて今の試合を見ていたんだ……………で、その銀色の長髪の子……………

……………すごいな……………今からぜひ私と一試合付き合つてはいただけないだろうか？」

銀色の長髪の子……………とはアリスのことだろう。

「……………いいわ」

朝練を今ちよつと終わつて疲れているはずなのにアリスは迷いなく勝負を受ける。この辺が「負けず嫌い」の象徴だろう。

「あ……………アリスちゃん？大丈夫なんか？体？」

「ええ、まだ少し動き足りなかったものなので……………勝負にはとことん受けて立ちますよ」

断るつもりははじめからないらしい。

「ところでそのあなたは竹刀は持つているかしら？」

「ああ……………マイ竹刀があるから大丈夫だ」

「そう、じゃあさっそく始めましょうか」

「なんだなんだなんだあ？なんかすごい展開になってきたぞ？（汗）」  
（男子A）

「美少女VS謎の美少女の対決か……どっちかが勝つと思う？お前？」（男子B）

「ん……そりゃあ、アリスさんに1000YEN」（男子A）

「じゃあ、俺は謎の美少女に500YEN」（男子B）

「じゃあ僕はゴッドフィンガー加 鷹さんに1票」（男子P）

「お前だけで違う世界にぶっ飛んでやがんな（汗）」（男子A）

「……さつきから気になったんだけどあなた防具つけなくてもいいのかしら？」

「……この格好で大丈夫だ」

この一言で彼女……アリスに火をつけたかもしれない。

「（この子……防具もつけないなんて……私舐められているのかしら？……いいじゃない

……それなら本気で相手してあげるわ……覚悟しなさいよ……）」

そして……お互い向かい合う……そして……

「は……始めっ！」

麗奈さんの合図で始まった！







「……ところであなた、その格好この学校の制服やないやろ？あんなどっか違うところの学校通ってるの？」

「……ああ、実は私は今日、転校生として初めてこの学校に来たんだ」

「ええ！？そうやったん！？じゃあ！ぜひ、うちの部に入って！入って！」

「ああ、そのつもりだ」

「……ところであなた……名前教えてくれないかしら？私の名前はアリス・ブランドー。あなたは？」

「ああ……言っただけじゃなかったな……私の名前は……」



バキツ！

「い……いつてえ！！あ……アリス！い……いきなりなぜ殴る!?」

「うるさいわね！！なんか今、私の事、馬鹿にしたでしょ!? あんた!!!」

な……なぜ!?なぜ、わかったんだ!? な かタンか!? こいつ!?

「おい……耕司いゝ暇だぜゝしりとりしようぜ」  
横からエテ公（慎也）が喋りかけてきた。

「ああ、いいぜ」

「よっしゃあ!じゃあ、まずは『ああ!ダメです!奥さん!』からな」

「それ、いきなりアウトだからな」

「……ああ!しまった!うゝむ……じゃあ、『今夜付き合っただけませんか?』」

「か……覚悟しなさいよね(ノノノ)」

「ね……寝かせないゾ」

「ぞ……存分に今夜は私を味わって……(ノノノ)」

「て……て……手荒くなるけど大丈夫かな?はあはあ」

「あ……あんまり乱暴にしないで……お願いだから優しくして……優しく……(ノノノ)」

「く……く……くりくりしちゃってもいいかな?くりくり……バキツ!」げぼお!!!」

どぎやす!

「あべぶ!!!」

「いつまでもくだらないこと言ってんじゃあないわよ!あんた達!(ノノノ)」

いてて……なににもぐるこたあないじゃんかよう……  
・(泣)

「ふい〜・・・やつとだりい〜始業式終わったな〜・・・  
つていうわけでお休み〜」

ごろり

「だめだよ！お兄ちゃん！今からロングホームルームLHRあるんだからね！！！今日は昼までなんだし

もうちよつと頑張ろうよ！お兄ちゃん！」

「お前1人でこの地球を救ってくれ。ていうことでお休み」

「何言ってるの！お兄ちゃん〜！お〜き〜て〜！」

「まったく・・・コイツは・・・新年最初の授業くらい真面目に受ける気ないのかしら？」

「仕方がないよ、アリスちゃん。少しの間、冬休みだったからね〜  
体も緩みっぱなしだったんだろう。うん。

ついでに僕は体だけじゃなくてここも・・・「それ以上言ったら  
めがね、かち割って海に捨てるわよ」。

・・・ゴメンナサイ・・・(汗)」

「今年はいいことがありそうな気がします！私のフラグが立ちそうです！」

「百合・・・？あなたは何を言ってるの？・・・(汗)」

「そうだ！！！百合ちゃん！！！今年はイイコトがあるぞ！！！！と  
いうわけでおじさんとイイコトをしようじゃあないかあ！！！ハア  
ハア・・・」

「黙れ クソメガネ 略して、ダメ男」

「だ・・・ダメ男？・・・そ・・・それ全然略してないんじゃないあ・・・  
・・・(汗)」

「あゝまだ、LHR始まらねえのかよ……あゝ暇だな……  
なんか面白いことねえのかよ……」

「ふむ……耕司キュン、面白くはないがとれたてぴっちぴち  
の最新情報があるぞ」

「普通に言え」

「ふむ……実は今日、このクラスに転校生がやってくるらしいぞ  
？」

「な……なぬ？」

「おいおい……この時期に転校生かよ……よくも、まあ物好  
きもいるもんだ。」

「で……？オス？メス？」

「メスだ」

「いよっし……！かわいい子ちゃんカモン……！」

「……で？ボンキュッボンか？それともキュッボンキュッか？」

「……いや、そこまではわからないが……なんせ美少女  
らしい……」

「ふむふむ……」

「……お兄ちゃん達、さっきから何の話しているの……  
？（汗）」

「……どーせ、やらしい話でもしてるんでしょ、あゝもー男  
つてのはどうして……やだよだ」

「えっへん！その通り……！悪いか！？」

「いやいや……そこは一応否定しとけよ……ていうか、開  
き直りとか最悪だからね」

「むう……お兄ちゃんなんか鼻の下伸びてる……」

「耕司さん？詳しい説明をお願いします」

「……百合ちゃん……怒ってる怒ってる……漫画で言う怒りマ

クついてるよ〜わ〜い（泣）

「ひゃっほづつづつづつづつづつづつ！！！！！！！！！！皆の衆、元気にしてか〜い？先生はいつも元気だよ〜ん」

「ほ．．．ほら？2人とも？先生来ちゃったからね？自分の席、戻らなくちゃ？ね？」

た．．．助かった〜（汗）

「ちっ」

．．．．．あれ？何？今の？．．．．．ボクハナニモキイテナイキイテナイ．．．．．（汗）

「じゃあ、さつそくだけど、今年から入ってきた生贄．．．げぶんげぶん転校生を紹介するぜ！！！！」

．．．．．ん？い．．．生贄？（汗）

ガララ．．．．．

「．．．．．」

．．．．．そこに無言で教室に入ってきた美少女の転校生の顔を見ると．．．．．

．．．．．ふいに俺の思考回路は停止した．．．．．







「……嘘だろ……」  
……黒板に書かれた名前は……

『市本鈴奈』

「……」  
「おい？耕司キュン？授業終わったぞお？オジサンと一緒に帰ろうよ？一緒にイコウよ？」

「……」  
「おい？耕司キュン？……んふう……」

「……」  
「……ハアハア……耕司キュン……（ノノノ）」  
「……つて……ふぬうおおお！！！！近けえな！！！！オイ！！！！」

バキッ

「ぎゃほ！！！！」

ハアハア……気がつけば俺の目の前に赤くなって吐息を出すメガネマンがいたのでとりあえず反射的に顔面を殴ってしまった。いや、結果的に殴ってよかった。

……しかし……今俺の脳内には今日のLHRでの出来

事でもみくちやにされていた．．．．べ

、別に誰かを脳内でもみくちやにしたいだなんて思っていないんだからね！！！！．．．．どうでもいいけどツ

ンデレ男ってなんかキモイよね？

．．．．『市川鈴奈』．．．．

．．．．『雪美』と同じく昔の俺の初恋だった人．．．．

．．．．しかし、あの頃の俺は『雪美』を選んだ．．．．

．．．．そういえば『あの日』から鈴奈と会ったのっていつだったっけ．．．．

．．．．俺が向こうの街から出た日が最後だったっけ？．．．．

．．．．でも、あんまり顔合わせられなかったよな．．．．

．．．．だって、あんな悲しそうな顔されたらな．．．．

『耕司！！！！！！』

俺は今まさに電車に乗ろうとしていたところにあいつが来た．．．．  
本当は会いたくなかった．．．．いや、あいつを傷つけた俺が今更会  
う資格などなかったからな．．．．勇輝にも釘を刺されていたか  
らな．．．．

『．．．．．』

『．．．．なんで．．．？なんで私に一言も言わずこの街を出るんだ．

．．．．．？』

『．．．．．』

『．．．．なんで．．．．なんで何も言わない．．．．．』

『．．．．．』

『．．．．！なんで！？なんで！？あの時、ちゃんと返事をしてくれ  
なかったんだ！あの時．．．．！あの時！私をはっきり拒絶してくれ

たら．．．．．こんなことには．．．．．うう．．．．．』

．．．．．鈴奈は．．．．．俯いて泣いていた．．．．．

『．．．．．ごめんな、鈴奈．．．．．』

『．．．．．私には．．．．．何も言ってくれないんだな．．．

．．．．．耕司．．．．．』

『．．．．．ごめん』

俺はあの時、鈴奈に対して謝る事しかできなかった。

『．．．．．』

『．．．．．もう、行くな俺．．．．．』

『．．．．．うむ、元気だな．．．．．』

．．．．．これが鈴奈と会った最後だった．．．．．

そして、あれからちょうど2年．．．．．まさかこの学園で再会するとは思わなかったが．．．．．

久しぶりのアイツは髪型は昔の茶色のポニーテールだったのが今では肩あたりで切りそろえられた茶色のショートになっていたが雰囲気は昔と全然変わっていなかった．．．．．しかし、今日、俺とアイツが交わす言葉は一言もなかった．．．．．気まずい．．．．．とかじゃなくて鈴奈は完全に俺を無視していたからな．．

．．．．．目も合わせてくれなかったかな．．．．．やっぱり、怒ってるよな．．．．．鈴奈．．．．．

あれ？でも、じゃあなんでこの学園に転校してきたんだ？鈴奈は？．．．．．よく、わからん。

「お兄ちゃん!!!!」

「うお!!!!なんだ!!!!……って夏美かよ……びっくり  
させんなよな……」

「もう!!!!早く帰ろうよ!!!でえ 駅の商店街に新しくクレープ  
屋さんが出来たんだ」 食べたいな」

「食べたいですう……(ノノノ)」  
「……舐めたい」

「……夏美ちゃん、百合ちゃん、ミントちゃん……君達  
はしっかりしているね。今日もきっちり僕の財布ちゃんの中身をき  
っちりお掃除してくれそうだ、ワイ(泣)……百合ちゃん、  
ミントちゃん……その赤くなって上目使いで見つめるの反則  
だよ?……それにその台詞すんごく卑猥に聞こえるからね?  
ハアハア……」

「……ん?そーいえばアリスと高宮姉弟は?」

「アリスちゃんと麗奈ちゃんは部活(剣道)だよ ……条君は  
……」

「いや、もういい」

「フフフ……耕司さんのご希望の僕はここにいますよ」

「いや、ご希望していないから。全くご希望していないから」

背後にジヨウイチロウくんが現れた!!!今日はいつもよりなんか  
興奮しているようだ!!!

「クレープで包まれた僕をご賞味してください……ほんのり  
甘くてほっぺたが落ちるくらいおいしいですよ さあ・召し上が  
れ (ノノノ)」

「何を言っているんだ?君は?(汗)」

「……お願いだから誰かこの子止めて……もう、僕には  
手がつけられないよ」

「僕が止まるときは繋がったときだけですよ(ノノノ)……まあ、

そのときには腰振ってますから止まってはいませんね えへへ・  
・・・・(ノノノ)「  
「・・・心を読んだ上に嫌な結末を淡々と語るの止めてくれる？ジ  
ヨウイチロウくん？(汗)「  
・・・・恐ろすい子！

おまけ

「お兄ちゃん！ボク、この『クリームマンゴークレープ』食べたい  
な」

「なに・・・『クリームマンゴークレープ』・・・だと？」

「・・・冗談だ(汗)そんな冷ややかな目で見つめないでくれ・  
・・・・」

「耕司さん！！！私はこの『弁蔵さんクレープ』食べたいです！！  
！」

「・・・何それ？(汗)「

「クレープの間に弁蔵さんがひしめき合・・・」

「もういいです(汗)「

「くい(袖をひっぱる)

「・・・ん？どした？ミント？」

「・・・これ、食べたい」

「ん・・・なになに・・・『豪華！世界3大珍味！特盛クレー  
プ』・・・ダメです」

「・・・ブーブー」

「ブーブー唸ってもだーめ」

「・・・うーうー」

「それは二次元キャラとかぶるからだーめ」

「……なんでもいいから早く選んでくれ……」(泣)  
「(クレープ屋の店員さん)」



第46話『よくある一般設定だよね?』?』(前書き)

まあ、鈴奈ルートってところでしょうか?

第46話 『よくある一般設定だよな?』レ?』

『……ねえ、こんなところでなにしてるの?』

『……ぶらんこ』

キー……キー……

ブランコを動かす音が空しく響く……

『……ねえ、誰かと遊ばないの?』

『……いない』

『……ねえ、だったら僕と遊ばない?』

『……え?』

『僕の名前はむらかみこうじ。君の名前はなに?』

『……いちかわすずな』

『ん、じゃあすずちゃん!向こうで砂遊びしよ!』

『わっ……』

チュンチュン……チュンチュン……

「……」

……現在の時刻、AM7:00……

「……まごうことなき朝だな……」

今日は早く起きすぎたようだ。……しかし、いつもこんな時間で起きられたらどれだけいいことか……

つまり、いつもはギリギリイ!!! (B'Z風)

「……ごうじつとしてるのもなんだし、早速起きてアクションするか……」

余裕こいて二度寝して遅刻とかなったら嫌だかな……さて、

そつと決まったらさつそく1階で朝飯でも食つか……

寮の廊下

「うほ……外はさみくな！」

部屋の中はそこそ暖かかったのに外を出るとめちやくちや寒かった。……ちなみに一軒家よりもこういう

寮やマンションや住宅の方が部屋の中、暖かいらしいぜ？

「……ん？」

廊下の窓から外を覗くと乾布摩擦している原田のおっさんの姿が見えた……

「うわ……めっちゃさむそ……よくやるよ……」

というか、すごい笑顔でやってるよ……というかあのおっさん常に毎日をエンジョイしてやがんな

……どうでもいいが胸毛多っ！きもっ！

「……って、そんなことよりメシ！メシ！」

腹が減りすぎて皮と骨になりそうだ。

「……ん？あれは……」

今度は前に百合ちゃんの姿があった。向こうを向いているため俺には気付いていない様子。

……ちよつとイタズラしてみるか。

1 後ろから胸を鷲づかみ

2 押し倒す

3 剥ぐ剥ぐ

「うん、死亡フラグだ、コレ . . . . . やめよう。」

「百合ちゃん、おはようさん」

「あ . . . . . 耕司さ . . . . . ! ! ! ? ? ? 」

「ん、百合ちゃんは俺を見るやいなや驚愕した顔を見せてきた。 . . . . 焦ってる百合たん、萌え萌ええ . . . . . 」

「?ん、どしたの?百合ちゃん?俺の顔になんかついてる?」

「は . . . . . はわわわ . . . . . え?え?あ . . . . . あの?」

「?」

「 . . . . . 誰ですか?(汗)」

「?何を言ってるんだい?百合ちゃん?朝からイツパイオツパイ元氣イツパイ耕司君だよ?あつ!やつべ!今の俺、絶好調!今、下見ないでね!百合ちゃん!なんとか落ち着かせるから . . . . . 落ち着けえ . . . . . 俺のマグナム!ハア!元気良すぎだぞ!?俺のマグちゃん!」

もぞもぞ

「 . . . . . ?あ . . . . . あれ?俺のマグちゃん?

「 . . . . . はあ?何を言ってるの?『夏ちゃん』」

「 . . . . . はい?」

「ふあああ . . . . . うう . . . . . みなはん、おふあ . . . . . ぐざいま

ふう〜…………むにゃむにゃ……………」

……………  
今度は部屋から誰かが出てきた……………  
……………あれれれれ〜？……………お、『俺』が出てきたよ？ど  
ゆこと？(汗)

「……………で？夏美と耕司の心が入れ替わった……………と？」  
(アリス)

「……………はい(汗)」(夏美(中身は耕司))

「むぐむぐ……………お兄ちゃん！お兄ちゃん！このマンゴーじゃ  
ムおいしいよ」(耕司(中身は夏美))

「そう……………って！そんな漫画みたいな話信じられ  
るわけないでしょうがあああああああ

あ……………ふざけんじゃあないわよおおおおおお  
お……………！

どぎゃああああん……………(ちゃぶ台をひっくり返す音)

「あ……………あ〜せつかくのおいしそうな半熟の目玉焼きが……………  
……………ひどいよ！アリスちゃん！」

「うるさい！和やかなムードで食してんじゃないわよ……………！  
ぽかっ！

「あイタ！ひ……………ひどいよう……………アリスちゃん……………  
ひっく！ひっく！」

……………俺の目の前に赤くなって泣いている『俺』がいた……………

……………マジ、その情けない顔止めてくれ……………夏美……………

……………(泣)

「ああ〜もう！大の男がぴいぴい泣いてんじゃないわよ！ああ〜イライラするう！！！！！」

「……いや、アリスさん？そいつ外見は俺でも心は夏美だからな」  
「……（汗）にわかには信じがたい話だけど……言動から見て間違いなさそうね……」

「……なんの因果でこんな目に……（泣）」

「夏……じゃなくて……耕司さん……私、イケナイ子になっちゃいそうです キヤツ（ノノノ）」

「止めてください……（汗）」

百合ちゃん？本当に名前どおりの行動はしないでね？（汗）

「なんや〜自分らいつつ面白い事すんな〜あんたら見てて飽きひんわ〜あはははは」

「笑い事じゃないです……麗奈サン（泣）」

「フッフ……耕司さんの心が入れ替わろうとも外見は僕の耕司さんですよね……うふふ……」

「……え？ちよっと？今、君なんて言った？ねえ？（汗）」

### 朝の登校

「……正直、学校行きたくないんだが？アリスさん？（汗）」

「あなた、夏美を欠席にさせる気？男なら覚悟を決めなさい、甲斐性無し」

「……足がスースーして気持ち悪いんだが？アリスさん？（汗）」

「スカート着てるからでしょ、それとあなたその口調直しなさいよ？まあ……適当に『もん』とか『わふ〜』とか『だよもん』とかつけてなさい」

「そんなのヤダもんっ！！！！！！」  
「……さっそく適応してるじゃない……アンタ……」  
「……そんな恥ずかしい口調しなきゃーいけないのか！？俺！？」  
「お……お兄ちゃん！？ボク、そんな口調してないよ！？」  
「……それと村上……じゃなくて夏美、あんたも口調治しなさいよ？そのなりでその口調は正直ヒクわよ？」  
「うん！わかったよ！アリスちゃん！」  
「全然、直ってないじゃないの！！！！」  
「ぽかっ！」

「あイタ！」

「おいおい……頼むぜ？俺……じゃなくて、夏美……」

(汗)

「でもでも！お兄ちゃんって普段の言動、こんなじゃない？」

「どこがだよ！？」

「言われてみれば……そうね、コイツ変態じみたわけわかんないこと言うからまあ……そのまま  
でいいか……」

「おい！！！！納得するなよ！！！！おい！！！！」

今日も騒がしい1日が始まる……

第47話『入れ変わっても結局やってることは変わらない』(前書き)

更新遅れてすみません(汗)

なんとかこれから頑張りますのでヨロシクお願いします。あと、できれば感想、批評、辛口コメントなんでもかまいませんのでよろしくお願いします。



第47話『入れ変わっても結局やってることは変わらない』

「……夏美、頼むからそのちよつと内股で歩くの止めてくれない？（汗）男がそんな乙女チックな歩き方してたらおかしいだろ？そつちの気があるんじゃないの〜とか噂されたら俺、マジ泣いちゃうぞ？」

「……お兄ちゃんこそ、がに股で歩くの止めてくれないかな？女の子はそんな下品な歩き方しないよ？」

「……ついに教室の目の前まで来た……うわ〜マジ、入りたくね〜（汗）」

だつて……ココ、危ない人ばっか集まつてんだもん、メガネとか！メガネとか！！メガネとか！！！！

「いい？あんた達？教室に入ったら言葉遣いには十分注意しなさいよ？」

「……はい」

「……はあ……ホント、ヤダア……（泣）」

ガラッ

「ん？よう、耕司」

教室に入るとサル（慎也）がいかにも待ち構えていたかのように俺（中身は夏美）に挨拶をしてきやつた。

「……このエテ公……普段は遅刻ばっかしやがんに……  
・なんでこんな日に限ってはええんだよ  
……ふざけやつて……」

「あつ、おつはよ〜サルちゃん！」

コノバカッ！あれほど言葉遣いには注意しろって言ったのに！

「おお、耕司、たまには放課後付き合えよ。ゲーセンでバイオやる  
ーぜ、バイオ」

あ・・・あれ？

「うん！いいよお！」

「へへ・・・そうこなくつちやな！」

あ・・・あれれ？（汗）なんで？おかしいぞ？コレ？おい、サル、  
ちよつとはツツコメよ？おい？（汗）

「・・・全然、中身が変わってることに気付いてないわね・・・  
あのサル・・・」（汗）

「・・・なんかめつまム力つくんだが・・・」

「AHA～N？耕司キユン、お・は・よ・ちユツ！元気い？僕はチ  
ヨー元気い！ひゃっほう！」

「・・・今度はメガネ（英男）が俺（中身は夏美）に声を掛けて  
きた・・・」

「・・・あゝ、今の俺だったら腹に膝入れてたな。こう・・・  
バキッ・・・と。」

「あ、おはよゝ鷲巢君！」

「・・・夏美もいい加減、メガネの名前覚えてやれよ・・・」

（汗）

「そうそう、耕司キユン！耕司キユン！昨日、僕ちゃんめっさいイ  
コトがあつたんだよ」

「？」

「・・・やばい、めっさ嫌な予感がする・・・」（汗）

「うんうん、耳をよおしくかっぱじいて聞いておくれよお？昨日  
・・・ついに！ついに！ついにいいいいいいいい！！！！！！

！！！！！！ウララたんに告白したんだヨゝ！ひゅっひゅっひゅっひゅっひゅっ  
ひゅっ！！！！！！

！！！！！！！！

「?????」

「とりあえず、シリアスモードに入っただけだよ……まあ、最後のデートスポットを海にしたんだよ！それが！見事にビンゴ！いや、あのシーンは耕司キユンにも見せたかったね、んふふふ」

「??????」

「で、えつ（ピー）シーンに入っただけだよ……んで最初は僕が攻めていたんだけどね……んで

ウララたんがねフェ（ピー！）オをしようとしたとき……なんて言っただけだよ

かね？」

「??????」

……（汗）あのメガネ……思いつきセクハラ発言連発だな……（汗）

まあ、夏美がまだ何も分かっていないのが救いだけだな……

……ちなみにウララたん（幼女）はギャルゲーのヒロインな。

「こつ言っただよ!!!」お兄ちゃん……背中おっきい

ね……お兄ちゃんのこともおっきくしてあげる……は

むはむ」

……ダメだ、アイツ。ちょっと黙らせよう……

てくてく……

「ん……んん……れる……お……おいしよう……

……おにい……ぎゃばああああ!!」

メガネの背後からドロップキックを入れてやった。……キモイ奴

はナニやってもきもいなあ……

「え?え?え?な……夏美ちゃん?な……なにを……

……も、もつとやって?はあはあ」

……ナニ言っただ?この変態メガネ?

「やつほぐ!!! 耕司くん! おつはよ〜!!」

「・・・今度は宮子が俺(中身は夏美)に抱きついてきた・・・  
くっそ〜夏美、うらやましいな〜・・・」

「じゃなくて・・・アイツ・・・ボロださねーだろーなあ・・・  
・・・オイ・・・」

「きやつ! え・・・? え? は、春ちゃん? おはよ?」

「・・・あいつ、もう、自分口調になってるよ! オイ! これはさすがにやばいつて! オイ!

「・・・耕司くん?」

あ・・・ああ〜!!! や・・・やぶあい!!!

「・・・萌え萌え!!!」

ぎゅ〜!!!

「きやつ! は・・・春ちゃん! く・・・苦しいよ〜!!!」

「はぶ〜!!! 萌え萌え〜!!!」

ぎゅ〜!!!

「・・・どつやらばれていないようだ。

「・・・どつでもいいがなんで俺の周りには変な奴ばっか集まっ  
てくるんだろつ?」

きーんこーんかーんこーん

きーんこーんかーんこーん

きーんこーんかーんこーん

「・・・ふあああ・・・よつやく、1、2 限目終了か・・・」

「・・・さて、次の授業はつと・・・」

「次は体育よ。村か・・・じゃなくて夏美、さつさと着替えなさいよ」

「・・・へ?」

気付けば教室の男子はすでにいなく、女子がきゃぴきゃぴ言いながら体操服に着替えているところだった。

「・・・っていうか、アリスさん着替えるの早っ!

「・・・鼻血ブーーーーー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ドバドバドバドバドバ~~~~~!!!!!!

い・・・いかん!いかあん!やばい!やばいぞ!この空間はやばい・・・!

だって・・・俺の周りには半裸・・・じゃくて下着姿の女子がいつぱいおっぱいいるんだぞ!?

や・・・やばい!は・・・鼻血が止まらんばい!

「な・・・夏ちゃん!?鼻血!?だ・・・大丈夫!?!」

百合ちゃんが声を掛けてきた・・・って!百合ちゃん!下着姿だよ!オイ

「・・・ああ(汗)大丈夫だよ・・・『百合ちゃん』・・・

・・・あ(汗)」

「・・・(百合)

「あ・・・あにゅはせよ(汗)」  
にっこり

「こ・・・耕司さんでした!!!!!!!!!!う・・・うわああああああああああん!!!!!!!!!!もう、お嫁にいけません!!!!!!!!!!

!!!!!!!!!!(泣)」

ぺしっぺしっどぎゃああああ~~~~~ん!!!!!!!!!!(往復ビンタ)

「ぎゃほっ!!!!!!!!!!」

．．．．  
はあはあ．．．．さつきは酷い目に合った．．．．  
百合ちゃんに思いつきりぶたれるわ．．．．着替えてたらなんか  
女子がわんさか集まってきた．．．．

「うへへへ．．．．んんんん？ここは成長したカナ？は  
あはあ．．．．（ノノノ）」とか言いながらいるんな所触られる  
し．．．．っていうか発言がセクハラおやじだよな．．．．あ  
と、体育でバレーボールでは揺れるわ揺れる．．．．パイパイが．  
．．．．揺れるたびに噴射したよ．．．．鼻血．．．  
特にアリスさんがすごかったな．．．．視姦してたら  
練習中めっさボール飛んできたけどな．．  
．．．．でだ．．．．やっぱアイツ．．．．鈴奈は昔から運動神  
経は抜群だった．．．．もちろん今もそれは変わっていないくて．  
．．．．バレーボールの試合ではほとんどアイツが点取っていたかん  
な．．．．  
．．．．それにしても、鈴奈．．．．なんで俺のこと無視すん  
だよ．．．．

【耕司（中身は夏美）視点】  
学食

「う～～～～ん デリシヤスう～～～～」  
う～～～～ん やっぱり運動の後のパフェはおいしいね サイコ  
ーだよ んぐんぐ．．．．  
「．．．．おい、耕司．．．．お前ってんな甘ったるいもん好きだ



放課後

「……あれ？なんだろ？コレ？」

下駄箱を開けるとかわい封筒が1枚入ってた……これって  
もしかして……

「……はあ……お兄ちゃんって何気にもてるからね……」

……気になる……誰からだろう……

……

「……百合ちゃんかな？」

……ありえないよね。百合ちゃん、奥手だし……ボク  
もあんまり人の事言えないけど(汗)

「……開けてみようかな……意外とアリスちゃんだっ  
たりして……」

……いや、それは100%無いよね。

「……じゃあ、麗ちゃん？ミンちゃん？……」

「いやいやナイナイ(汗)」

麗ちゃんは完全にお兄ちゃんからかつてるだけだし、……ミ  
ンちゃんはどう思ってるかわかんないけど

そんな積極的な子じゃないし……

「……も、もしかして条君？(汗)」

……いや、多分直接仕掛けるよね、条君は……それ

はそれで危ないけど……(汗)

「……宮ちゃん？」

宮ちゃんは結構お兄ちゃんのこと気に入ってるっぽいし……  
ありえるかも……

うう……！なんかいろいろなこと考えてるとなんか頭の中がこ  
つちやごちやになつてきたよ……！

……えいっ！開けちゃえ！



ベリベリ……

「…………ドキドキ」

封筒の中身を開け、中に入っている手紙の中身を確認すると……

・

『屋上で待っている 鈴奈』

番外編その6 『チョコは好き？（前編）』 （前書き）

番外編その6です。遅くなってしまいましたがバレンタインデーのお話です。



こいつの10年後の未来も見えたな。

「よし……さり気なくアピールして女子からチョコ貰ってくるよ。耕司キユン」

つまり、それは女子からチョコを催促するってことか。メガネ。・  
もう、哀れすぎてなにも言えないな。

「ふむ……あのニーソックスはいているおいしそうな子から貰ってくるとするか」

「『おいしそう』は余計だからな」

そして、英男はその子の席まで行き……って内股で歩くな、  
激しくキモイ。

「ハロー、元気かい？よし子？」

「……なんのお話でしょうか？」

……俺は見た……今、確かに見た……英男を見たあ  
の子の顔が一瞬引きつったのを……

「はははっ、いやあ……なんだか君の顔が急に見たくなってねっ  
いこの胸の辺りがドキドキしちゃった きらりん」

「……」

……英男……その台詞、自分でいけてる台詞だと思つて  
るかもしれないけどよ……かえつてきもさ倍増だからな。・  
うわあ……さらにあの子の顔引きつってるよ……  
「……お話はそれだけでしょうか？」

……英男……確実にお前引かれてるぞ？話を打ち切ろうと  
必死なのは見え見えだからな……

「ははっ……いやあ……ちょっと、待って……うおう  
ズルッ!!!!!!」

どてー！ー！ー！ー！！！！！！

「……盛大にこげやがった……今、自分からわざとこけたように見えたが……」

「だ……大丈夫ですか……？」

「あいててて……はははっ、すまない……つい『ちよこ』つとこけてしまったよ……『ちよこ』つと心配してくれてありがとう！！いやあ……大丈夫だよ！！『ちよこ』つと怪我しただけだからさ……『ちよこ』つと君の顔が見れただけでボクは充分さっ！！あははは！！」

「……お話はそれだけでしょうか？では、さようなら」

「……そしてメガネは俺の所に戻っていき……」

「……ぐすん、大失敗」

「……君があの子に声を掛けた時点で大失敗だと俺は思うね。」

「耕司君！！ちよつとこつち来て来て〜」

「ん……なんだよ……」

「昼休み、飯を食いのんびりしていると宮子が手招きで俺を呼んだ。……なんなんだ……いつたい」

「じゃあ、お口を思いつき開けてごらん 坊や」

「誰が坊やだ……貴様、何する気だ……」

「いいから いいから ほら〜あ〜んって あ、目は閉じてね」

「……あ〜」

断つても無駄だろうしな．．．しゃあねえ．．．余興に付き合  
つてやるとするか．．．

「喰らえ 口からどぼおおおおん!!!!!!!!!!」

じゃらじゃらじゃら~~~~) イメージ効果音です。パチンコの音  
とかじゃないです)

「げぼおっ!!!!!!!!!!」

なんか俺の口に異物が入った!!!!!!!!!!

「げぼっ．．．ごぼっ．．．き．．．貴様あ!!!!!!!!!!い  
きなり何をする!!!!!!!!!! 思いつきりむせたじゃねえデスカ!!!!  
!!!!!!!!!!ん? 甘い．．．?」

「えへへへ ほっぺが落ちるくらいあんまいでしょ? 耕司君」

「．．．これはなんだ? 一体．．．?」

「まだわっかんないですかね~~~~? チ ルチヨコ(x50)だヨ

~~~~)

「へ~~~~．．．だから甘かったのね．．．つて入れす  
ぎだ!!!!!!!!!!ごらあ!!!!!!!!!!」

なんて事しやがる!!!!!!!!!!このアマっ!!!!!!!!!!．．．む

う、まだ口の中が甘い．．．

「えへへ うれしかったカナ?」

「．．．俺には君の悪意しか汲み取れなかったが．．．」

「あははは ごめんごめん 冗談だヨ~~~~ ．．．はい、コ

レ

宮子は鞆から今度はちゃんと包装された箱を俺に手渡す．．．

「．．．え? コレは．．．」

「あげる (ノノノ) 義理．．．だけどね」

「．．．ああ、ありがとうな(ノノノ)」

「．．．ちよっち、恥ずい．．．(ノノノ)

「うん どういたしまして ホワイトデーもヨロシク」

「．．．結局それが目的なのか．．．(汗)」

「．．．でもちよっちコーちゃん感涙．．．」



にも貸しなさい!!!!!!

「コゝ君!!!!!!お姉ちゃんは大好きだぞお~~~~!!!!!!  
!結婚しているんな事しようね あんなこととかこんなことか  
.....えっ!?そんなことまで!?いやん!!!!!!」  
.....姉さんか.....勝手に弟で卑猥な妄想をしないで下さい  
.....

『つていうことでえ~~~~!!!!!!コゝ君!!!!!!!!!!!!』

『耕次郎君!!!!!!!!!!!!』

『今すぐ保健室にきなしゃ~~~~~~~~い!!!!!!ハアハア.....  
.....』

.....シンクロしちゃってるよ.....コノヒトたち.....  
.....(汗)  
.....絶対に行かないけどね!!!!!!!!!!!!

「耕司.....耕司.....」

ゆさゆさゆさゆさゆさゆさゆさゆさゆさゆさ

「.....ん~~~~?」

.....ふあああ.....誰だ.....俺の睡眠学習を妨げ  
る輩は.....?

「.....ん?ミント?」

「.....」

コクッ.....

ミントは軽く頷いた.....

「.....珍しいな、ミントが俺に声かけてくるなんて。どうしたん  
だ?」

「.....もう、放課後.....」



「ん……………あ、そうか……………もうそんな時間が……………」

「どうやら今日もぶつとうし寝てたようだ……………」

「……………あれ？みんなは？」

「ふるふるっ」

「……………先に帰った、用事あるって」

「……………そうか……………じゃあ一緒に

帰るか？ミント？」

「……………うん」

「……………」

「……………」

「……………うむ……………始めてミントと一緒に帰っているわけ

だが……………この空気が辛いな……………」

「……………なあ？ミント？」

「……………なに？」

「あの子……………その……………学校は楽しいか？」

「……………」

「少し考えているようだ……………あ、コノ顔かわいいな……………」

「……………耕司がいるからすごく楽しい……………」

「……………」

「……………」

「ちよつと赤くなってる……………やだ……………コノ子つたら……………」

「……………めっさかわいいじゃない……………」

「……………こいつめ……………嬉しいこと言ってくれるじゃねえ

か……………ほれ！…うりうり……………！」

ぎゅっ~~~~

「……………耕司……………苦しい……………離して……………」

「

「……………はっ！ああ！ごめんな！ミント！」

「……………いいよ、でも嬉しかった……………」

危ない危ない……………危ない人になりそうだったよ……………俺

……………

「……………お前はほんと可愛い子だな……………」

「……………?」

「……………下校する俺とミントだった。」

……………この後、何が起ころうかも知らずに……………

番外編その7 『チヨコは好き? (後編)』

「ういゝ……ただいま」

「………ただいま」

あの後、ミントと色んなことをだべりながら（ほとんど俺の一方的な話だった）寮に帰った。

「あつ、お帰り〜お兄ちゃん、ミンちゃん」

「お帰りなさいですう、耕司さん、ミンちゃん。お風呂にします？

ご飯にします？それとも……私にします？きやつ（ノノノ）」

「……ただいま、とりあえず落ち着いてくれ、百合ちゃん……寮の1階のリビングに入ると夏美と百合ちゃんが何か料理していた。お……気になる……」

「……夏美、百合ちゃん、ナニしてんの？」

「……ああ、えへへ〜〜これはね………はっ！お、お兄ちゃん！！！！で……出て行って！！！！早く！！！！」

「ぐいっぐいっ！！！！！！」

いきなり夏美は俺を追い出すかのように押してきた。

「お……おい！いきなりなんだよ！ちよっ……やめろつて！疲れてんだからよ！な……なあ！

？百合ちゃん！！！！ミント！！！！夏美になんか言つてやってよ!？」

「い……いやあああああああ！！！！！！！！！！ケダモノ！！！！！！ゲテモノ！！！！！！鬼畜！！

！！！！近寄らないで下さい！！！！！！はやくこの部屋から出て行ってください！！！！！！」

「………キモイ、キタナイ、バツチイ、チカン、ヘンシツシャ、メガネ、ブタ、アホゲ、バカ、カイシヨウナシ、ツンデレ、ヤンデレ、ロリ、フェチ、etc……」

「え……えええええ?????なんで!?!?俺なんかした!?!?つて

うわっ！！！！ちよつと！？まっ・・・  
バタン・・・

・・・結局、リビングから追い出されてしまった・・・  
んなんだ・・・いたい・・・（汗）

「フフフ・・・耕司君、女の子から愛想を尽かされてもオジサンがいるから大丈夫だゾ」（原田のおっさん）

「・・・肩に手を乗せるな・・・おっさん、キモスギ」

おっさんに慰められても全然うれしくないからな。むしろ、精神的にダメージ喰らったよ、俺。

「・・・ナンデスカイ？コリハ？」

夕食の時間でございます。例のごとく、寮のメンバーが1階のリビングで食事を摂る・・・のはいいけど

「・・・ナンデスカイ？コリハ？」

「二度も言っな・・・そりゃあ、こっちが聞きたいくらいよ・・・」

「・・・これはえらい激しいなあ~~~~（苦笑）」

「そうですね・・・姉さん・・・僕と耕司さんの関係が激しいのと同じくらい激しいですよね・・・

これは・・・」

激しくない、激しくないよジョウイチロウくん？（汗）

アリスさん、麗奈さん、ジョウイチロウくんもさすがにコレを見た瞬間、顔色が変わった・・・

夏美、百合ちゃん、ミント、千里さんは平気な顔をしている・・・

「・・・おい、おっさん。なんであんた今日、夕食作ってねえ

んデスカ？コラ？」

原田のおっさんはとりあえずキモイが料理はうまい……けど今日の……

「あははは 仕方ないよ、耕司君 だって、百合ちゃんに今日だけ料理当番譲ってくれたら小学生のパンチラ

写真くれるって言うからつい……ね」

「あははは お前、チョーサイデー」

……つまり、夏美と百合ちゃんがこの料理を作ったというわけデスネ。……いや、平気な顔してる千里さんとミントも関わったと見てまず間違いないだろう。……さて、今日のメニューについて説明させて頂く。まず、俺の目の前にある黒い物体（？）と黒い物体と黒い物体と黒い物体と黒い物体と黒い物体と……

……あゝ、つまり全部黒い物体だよ！！！！チクショー！！！！！！（泣）

「……百合ちゃん？コレハナニカナ？」

「チヨココです」

……チヨココか……チヨコね……夕食にチヨコね……へえ、

チヨココ……チヨココ……チヨコね……

……今、チヨココつとシスターが欲しくなったよ……

「お兄ちゃん い〜〜〜っばい食べてね 今日ハバレンタインデー

だからね ボクと百合ちゃんとミンちゃんとちーちゃんが一生懸命作ったんだよ はやく食べてガッツリ食べてマッハで食べて〜」

「どうぞ、耕司さん いっぱい食べてくださいね それはもう、獣のように目を血走らせてはあはあ言いながら『うへへへへ〜この辺を僕のお口でなめなめしちゃうよおおおお〜〜〜いひゃひゃひゃひゃひゃ〜〜〜』とか言いながら食べてください

いね」

……千里さん、そんな変態的な食べ方しませんから……

「……………耕司、食べて」  
うっ……………上目使いで俺を見てくるミント……………  
ハア、しゃあねえ頂くとするか……………  
「……………どう？それ……………ミントが作ったの」  
「……………ん、ほんのり甘くてうまい。ありがとな、ミント」  
「……………そう（ノノノ）」  
……………ほんのり赤くなってるじゃない……………この子。やだ、  
かぁいい……………  
「……………むう……………もう！おにいちゃ……………ん！ボクの作ったチョコも食べてよ……………」  
夏美が頬を膨らませながら俺に自分で作ったチョコの入った皿を渡す……………ナニコレ？  
「……………なにこのピクンみたいな形したチョコ……………」  
「えへへへ……………チョコでお兄ちゃんを作ったんだよ」  
……………これ、俺？俺なのか！？  
「……………おいしい？」  
「……………うまいけどすんげえ複雑……………ピクン喰ってるみたいでなんか複雑……………」  
「もう……………ピクンじゃないよ……………お兄ちゃんだよ……………！」  
……………自分の形したチョコを食べるのもなんだかなあ……………  
「あゝ、耕司さん……………私のも食べてください……………！」  
今度は百合ちゃんが自分で作ったチョコを渡してきた……………  
見、普通な形したチョコだが……………  
ガブツとな。  
「……………」  
「……………」  
「……………耕司さん、おいしいですか」  
「……………ナニコレ？」

「えへへへへへ　おいしいですよ　チョコの中に鯖を加える事  
によってチョコのほんのりした甘みと鯖の

脂身が相乗効果を引き起こしそれはもう、わんだふるべりしゃす  
な感じになりますからね」

「・・・・・・・・いやチョコは単体で食ったほうがいい気がするんです  
が・・・・・・・・」

「・・・・むしろ鯖を加えた事によってチョコの良さと鯖の良さを同時  
に相殺してるよな・・・・・・・・コレ。」

「・・・・・・・・つぶ・・・・・・・・村上・・・・・・・・私もうお腹いっぱいだからコレ  
残りあげるわ」

「・・・・・・・・あははは　今日はバレンタインデーやからあげるさか  
い」

「・・・・・・・・では、僕も愛を込めて・・・・・・・・ちゅっ・・・・・・・・  
はいどうぞ」

「・・・・・・・・ジョウイチロウくん？今、そのチョコにチューしたよ  
ね？愛を込めちゃったよね？ねえ？ジョウイチロウくん？（汗）」

「・・・・・・・・結局、このチョコを全部俺が処理しなきゃあいけないの  
か・・・・・・・・（汗）」

こうして散々(?)なバレンタインデーの夜は過ぎていきましたと  
さ、めでたしめでたし。

.....  
やっぐえ、虫歯になりそう.....



番外編その8 『がんばれ佐々木雅彦(21) 負けるな佐々木雅彦(21)』 (前

久しぶりにウコンちゃんを出して見ました。今回は苦勞人、佐々木  
雅彦(21) 視点です。

彼女はかわいい。

「・・・おい、そのウンコッコ、じつとしてないでコーヒーだせ、コーヒー。あと、苦くしたらクロス」

彼女はかわいい、そしてまだ幼い。

「・・・おい、そのウンコッコ、暇だ、なんか面白い芸見せる。つまねーモン見せたらブチクロス」

彼女はかわいい、そしてまだ幼い、んでもって有名人。

「・・・おい、そのウンコッコ、腹減った、なんかつくれ。まずかつたらもちツブした上、ブチクロス」

彼女はかわいい、そしてまだ幼い、んでもって有名人・・・だけど悪魔っ子。

僕の名前は佐々木雅彦（ささきまはひこ）（21）。容姿はストレートな髪型でメガネを着用している。

僕の仕事はいわゆる「マネージャー」。誰のマネージャだっ？それはもちろん・・・

「おい、ウンコッコ、今日のスケジュールを一秒以内に全部言え、言えなかったら、シメアゲテブチクロス」

このように無茶を平気で堂々と言うこの子、ウコンちゃんのマネージャーだ、僕は。

「無茶言わないでくださいよ・・・あと何遍も言いますけど僕の名前は「ウンコッコ」じゃなくて「佐々木雅彦」です・・・いい加減覚えてくださいよ・・・」

「いいだろ、別に・・・お前だってなんか顔が『僕、ウンコッコしてます ぷりぷり』みたいな顔してんだもん。そう呼ばれてもおかしくないじゃないか」

「いや、おかしいですよ・・・最悪な顔じゃないですか・・・ソレ・・・(汗)『セムしてます』みたいなノリで言うの止めてください・・・(汗)」

「ったく・・・このウンコッコはしかたねえくな・・・よし、じゃあこんなあだ名はどうだ?『我慢限界超絶ウンコッコ!! 1うひっ!!! 1cm出たっ!!!』」

「ますます酷いですからね・・・ソレ。ていうか僕、確実に引かれますね、ソレ(汗)」

「ったく・・・じゃあこれでいいだろ!?『怪奇!!! はみ出しウンコッコ!!! 小さな農村で起こる便意の罠!!! 便意の謎を解け!!!』」

「・・・もうワケがわからないですね・・・(汗)というか、二時間ドラマみたいな台詞になってるし・・・

・あと、いい加減ウンコから離れてください(汗)」

「なんだよ・・・お前からウンコを取ったらなにが残るんだヨ。メガネしかねーじゃん」

「・・・あれ?僕は?メガネは残るんだ?メガネは残るんですね?

(泣)」

・・・というようにまあ、こんな子なんです、ウンコちゃんは(汗)

そして今は『ウンコちゃんのオールナイトトーキング』の放送本番5分前。

普通、リハーサル前というのはどんな有名な有名人でも緊張するもの・・・

「・・・なのに彼女は堂々と佇んでいます。すごいよね、まだ中学生なんだよ？この子。まだちっちゃいんだよ？この子。」

「・・・おい、そのウンコッコ、今『まだちっちゃいんだよ？この子』って考えただろ？」

「う・・・なぜ、それを」

「お前、給料減給な」

「うわああああ」

「あと、今度から『スペシャルThe』ウンコッコ』って呼ぶ」

「うわああああ~~~~~なんか強調されててやだ~~~~~」  
(泣)

「・・・ふん！」

あ・・・あゝあ、すねちゃった・・・僕のせいなのかな・・・

・・・コレ？

・・・でも、ちょっと拗ねているこの子・・・かあいくな  
てへ

「・・・お前、さらに減給な」

「いやああああ!!!!!!」

「がはははは!!!!!!ウコンちゃん!!!!!!今日もいつちよ、きつついの頼むよ~~~~~!!!!!!がつははははは!!!!!!」

この豪快に笑う人はプロデューサーの荒井芳光さん(あらいよしみつ)(37)。あつ、別にコノヒトの名前覚えなくていいからね。多分この先これ以外に登場しないと思うからさ。・・・えっほ、えほ・・・というのも僕はコノヒトがなんか苦手だ・・・だって、タバコ臭いもの・・・むせるよ・・・

せめて香水つけてよ・・・香水臭いのもやだけどさ。

「えへへへへへへ 今日もヨロシクね!!!!泥棒ひげ!!!!!!」  
うわゝ・・・出たよ!猫かぶり!!!!僕と普段喋っているときはこ  
んなんじゃないのに!!!!でも毒舌は変わらないんだね・・・ウコ  
ンちゃん(汗)

「くひゅううううん(ノノノ)ヒイヒイ・・・ハアハアし、しびれ  
るねえ(ノノノ)も、もう一回おじさんに言っつて?ねっ?ねっ?い  
いだろお?ねっ?」

変態だった!!!!!!(汗)

「死ぬ 青ヒゲ三太夫」

「うつひよゝはいい 僕、死にますう ばつたんきゅゝ」

・・・おい、お前の人生そんなんでもいいのか・・・?おっさん  
・・・(汗)

・・・

「~~~~~!!!!!!」

「~~~~~???」

・・・今は本番リハーサル最中・・・違う部屋で放送している  
ためココからじゃあ彼女の声は聞こえない・・・でもガラス越しで  
姿だけは見える・・・楽しそうだな・・・

「・・・(汗)」

・・・うわあ~~~~今回のゲストの人顔青ざめてるな・・・きつ  
とウコンちゃんにひどい事言われたんだろな・・・かわいいそ  
うに・・・(汗)・・・でも、ウコンちゃん・・・君は本当に  
いつも一生懸命だ

。君は笑顔はすんごくいい。かわいい。・・・でも、悪魔的な笑い  
方はちょっと・・・(汗)・・・

でもそんな、彼女の一生懸命さに僕は引かれたのかもしれない。そんな笑顔を見たいから僕は彼女のマネージャーになったのかもしれない。僕は・・・僕は彼女の事がきつと・・・

「何してんのよ、起きなさい、ウンコッコ。とっくに終わったわよ。帰るわよ」

「・・・はっ!ごめんよ、ウコンちゃん。ぼ・・・僕、もしかして今まで寝てたかな? (汗)」

「ったく・・・まあ、今日は特に忙しかったから疲れてるのはわかるけど・・・あんた私のマネージャーなんだからしゃきつとなさい!しゃきつと!!!」

・・・中2の女の子に説教される僕(21)っていたい・・・

(汗)

「・・・罰として焼肉おごれ、ウンコッコ」

「・・・はい(泣)」

「ふう・・・食った 食った ここでいいわよ、今日はありがとう  
ウンコッコ」

・・・ふう、僕の財布の中身も食われた 食われた (泣)

・・・あれから僕はウコンちゃんに焼肉をおごらされて彼女の家まで車で送っていった。・・・ってどうか、







番外編その9 『カップリングは好き?』 (前書き)

今回は『濃い』です。『恋』ではありません、『濃い』です。ご注意ください。

番外編その9 『カップリングは好き?』

「いてて！目になんか入った！」

「じじじじっ！くそくそ目がいてえー！！じじじじじっ」

「待て待て耕司、目をこするな。どれ、ちょっと見てやるからじっち向いてみる」

「お・・・おう」

「・・・サル、お前ってそんな優しい奴だったっけ？」

「・・・ん〜っ？ああ・・・まつ毛が目ん玉に入ったんだな・・・

・・・よし、動くなよ？」

「お・・・おう」

「・・・なんか顔ちけえ・・・いや、そっちの気はねえけど

よ・・・

「・・・

・・・ん？ん？なんか誰かの視線を感じる・・・

ぞくっ、ううなんだ！？この寒気は！？」

「・・・

「・・・(汗)」

・・・誰だ？気になる・・・(汗)

「・・・よし、もう大丈夫だろ！！どっだ！？耕

司！？？」

「・・・おお、ありがとよ、サル」

「おうよ！今度、目玉関係の事ならなんでも相談しろよ！？なっ

どんな相談だよ・・・(汗)っていうか！さっきの視線は誰だっ！

?後ろを振り返ると・・・

「・・・

「・・・

ダッ！！！！

「お、おい！？？」

ダダダダダダダダダダ~~~~~

.....

そいつと目が合うときいきなりそいつ・・・ミントは脱兎のごとく逃げていった。・・・なんだあいつ？（汗）

「おい、耕司。今の幼女誰だよ？」

「幼女っていうな・・・（汗）あいつは俺と同じ寮に住んでいるミントっていう子だよ」

「ほう・・・おいしそうだな」

「どっちの意味でだ（汗）」

しかし・・・あいつ、人の顔を見るなり逃げていきやがるなんて・・・っていうか、なんかあいつ若干嬉しそうな顔してたよな・・・  
・・・なんでだ？

「・・・ん？なんだこの本？」

サルが何か発見したらしい・・・

「おい、耕司なんかあの子、本落としていったぞ？」  
・・・???

『じじい×じよついでさるる』

・・・本の表紙にはそう記されていた・・・

「」

・・・いや、もうなんと言ったらいいのか・・・



・・・そして授業が終わり僕が席でじつと座っているとその人がふいに後ろを振り返り・・・

『条一郎君？今日は顔色が悪いね？大丈夫かい？』

・・・どきゅん・・・ああ・・・僕は今、どんな顔をして  
いるんだろう・・・

『念の為に保健室で休んでおいたほうがいいな。僕が連れて行ってあげるよ』

ひよい・・・

え・・・えええ～～～～（ノノノ）こ・・・これって・・・お・・・

・お・・・お姫様だっこ!?（ノノノ）

『おーっ ひゅっ ひゅっ やるねえっ 村上君やつさしいっ』

（男子J）

『お似合いだよ お二人さん!!!あたし応援してるよ』

女子M)

ああ・・・こんな教室でこんなこと・・・は、恥ずかしい・・・  
・・・（ノノノ）

『こ・・・耕司さん・・・（ノノノ）』

『ん?どうしたい?条一郎君?顔が赤いよ?いけない、風邪かも  
しれないね。どれ・・・』

ぴと・・・

『~~~~~（ノノノ）』

『ん・・・』

僕のおでこに耕司さんのおでこが触れる・・・か、耕司さんの  
顔が目の前に・・・（ノノノ）

『・・・熱あるね・・・さっそく保健室にいこうか』

にこ・・・

・・・ハアハア耕司さん・・・僕、あなたの事が――――

保健室は薄暗かった・・・

『・・・うーん、保健室の先生はどうやら留守のようだね？・・・よし、条一郎君、とりあえずベットで横になっておいた方がいいね』  
『・・・あ』

保健室のベットに寝かされる僕・・・

『先生からは僕が言っておいてあげるからゆっくり休んでおくんだよ？』

にこ・・・

あ、アア・・・もう・・・ダメ・・・ダメです・・・

・・・耕司さん・・・

『こ・・・耕司さん！』

『？なんだい？条一郎君？』

『僕・・・すぐくさみしいです・・・だから・・・傍に・・・傍に・・・傍にいてください・・・』

・・・

耕司さんは僕のすぐ横にいる・・・

・・・あつたかい・・・耕司さんってこんなに体おっきかったんですね・・・

『・・・条一郎君？眠れるかい？』

耕司さんは天使のような笑顔で僕を見つめる・・・

『—————』

僕は幸せすぎて声が出ませんでした・・・

『・・・ん』

え・・・？

『・・・ふ、ふむんぐ!?!?』

こ・・・この感触は・・・

『・・・条一郎君・・・』

『・・・耕司さん・・・』

・・・そうか・・・わかった・・・

耕司さんは僕を求めているんだ・・・僕が耕司さんを求めているように・・・

『・・・条一郎君・・・』

『・・・耕司さん・・・』

もう、2人の間に形だけの言葉なんていらなかった・・・

・・・心が通じ合っているんだから・・・

そう・・・

・・・『好き』なんだということ・・・

・・・

『あ・・・』

耕司さんは僕のシャツに手をかける・・・

・・・シャツのボタンが一個ずつゆっくりと解かれていく・・・

・・・

せかすように……あせらすように……

『あ……あ……あ……こ……耕司さん……』

『……僕に抱かれるのは嫌かい？条一郎君？』

耕司さんは不安そうな……寂しそうな顔で僕を見つめる……

『そ……そんな事ないです！耕司さん！で……でも……その……』

『……あ……そうだね……僕も……』

すると耕司さんは自分のシャツのボタンもゆっくり解いていく……

通じた……やっぱり、僕と耕司さんの心は通じ合っているんだ……

嬉しい……涙が止まらなかった……

『……耕司さん……』

『……条一郎君……』

2人の距離は縮まる……

『……耕司さん……』

『……条一郎君……』

さらに……さらに……そして……

耕司さんは僕のおごを左手で添え、右手は……僕の……

『フッフ……君の蜜……僕にくれるかい？』

『あ、アア……耕司さんの手……ほんのりあつたかい……』

『ああ……その顔いいよ……すごく……いいです……』

『……ジヨウイチロウくん……』

『ああ……耕司さん……耕司さんが僕の中にはいつて……』







( サル視点 )

「といても……なあ」

俺はあの子とは全然喋った事がないからもし見つけたとしても無理やり捕まえたならなんかただの変態みたいになりそうだしなあ……  
・どうしよう？

「うん……」

しかも……西校舎つてあんま来た事ないんだよな……俺。

「……とりあえず、探しますか」

第2の惨劇が起きる前になんとかせねば。

……とりあえず……情報収集が必要だな、おっしあのかわいらしい1年生の子に聞いてみるか……

「おい、ちよつと！そこのかぁいい君！ちよつといいかい？」

「ひっ！なんでしようか……？」

……しまった(汗)いきなり怖がらせてしまった……落ち着け、サル。冷静に冷静に……

「き……君い……あのね……その……ちよつと……」

「

「ひ……ひい……(汗)」

し、しまった！緊張しすぎてなんかめちやくちや低い声になってしまった！

「は……ははちよつと？なんで？なんで君ちよつと引いてるの？べ……別に俺さ？君に下心なんて抱いてないよ？おっぱい柔らかそうだなとか、さわってみてえとか、ふとももすりすりしてえとか、おばんちゅ何色かなとか、脱がせてえとかそんなことこれっぽちも考えてないよ！うん！全然！」

「し……失礼します！」

がしっ(腕を掴む)

「ま……待つてよ！まだ俺、何も聞いてないよ？ははは……」





ようだ

「・・・やだ、この子寝顔・・・かぁいいじゃない・・・」

「・・・」

「・・・」

うむ、これじゃあただの変態だ。・・・ん、横にある本は・・・

『「じじい×はらだみえはる」』

「・・・えー(^^)なんでだっ!? (汗)」

ますます、酷くなっていた!?!?!?!おっさんとか最悪!?!?! (汗)

「・・・」 (汗)

「・・・これは、やばい・・・回収せねば・・・」 (汗)

そして、本を取ろうとすると・・・

「う・・・」

「!」

や、やばい!起きたかつ!?

「・・・」

「・・・」 (汗)

「・・・ほっ」

「・・・」 「じじい」

「・・・」 「はい?」

「・・・」

「……………」  
「……まあ、いつか。  
俺は本の回収はあきらめた。」

……………こうして、結局第2の惨劇は起こったのだ……………

……………久しぶりにかま たちの夜、プレイしようかな……………

第48話『新しい家族』（前書き）

鈴奈視点です。鈴奈の過去編です。これからシリアス調の話が続きます。



## 第48話『新しい家族』

私はただ『強く』なりたかった。  
そう、誰かを守り切れる『強さ』――――  
けれど……

私は『弱かった』

私は幼少の頃、両親を亡くした。  
ひどい交通事故だった……  
けど、その頃の私は――――

「ねえ、おばちゃん、ママとパパはどこにいるの？」

「ううん……ごめんね、ごめんね……鈴奈ちゃん……」

おばちゃん？なんで泣いてるの？あの頃、なにも分からなかった私は夏子おばさん（私の母の姉）に尋ねた。

「鈴奈ちゃん……ママとパパはね……すっごく遠いところへ行ったの……」

とおいところ……？いつかえってくるの？

「ううん……しばらく戻れないの……だから、鈴奈ちゃん。これからはおばちゃんと一緒に暮らそう……ね？」

ママとパパどこに行ったの？おしごと？

「うん……大事な大事な……『お仕事』……」

ふん……そっかあ……

「……鈴奈ちゃんはいいい子だから、待ってられるよね……」

うん！すずな！いい子！ママとパパ帰ってくるのまってる！

「そう……ううん……陽子……」

……？おばちゃん、泣いてるの？

今日からここが鈴奈ちゃんのおうちよ……

玄関の戸を開けると……

「ひゃっほーうー!!!!やあ!ばく、ゆっき!きみのなまえは?」  
いきなり、ウトラマンの仮面をつけた男の子が私に尋ねてきた。  
ちよつとこわかった。

だからとっさにおばちゃんの後ろに隠れた。

「鈴奈ちゃん?怖がらなくていいのよ?今日からあなたのお兄ちゃんになる子よ」

……おにい……ちゃん?……

「そうよ、ちよつと変な子だけど優しい子よ。よろしくね」

「へんつていうな……!!!!あばずればあ……!!!!  
!!!!!」

「まあ……!この子ったら……!!!!どこでそんな汚い言葉を!」

「アディオス!さっ!にげるぞ!」すずな!」  
ぐいっ

「わっ……!」

「あっ!コラ!待ちなさい……!勇輝!……!」

初対面でいきなり呼び捨て……あの頃から兄貴は変わって  
いなかったな……

「どつだあ……!!!!みろっ!……!すずな!……!」

夏子おばちゃんとおにいちゃんと暮らし始めて半年……

慣れ始めたわたしとおにいちゃんは公園で砂遊びをしていた。

「わあ〜〜〜・・・おにいちゃん、なに？これ？すごいね」

「『ぐれい』と『えいりあん』だっ！！！すごいだろっ！？」

「へえ〜〜〜・・・すずな、よくわかんない・・・」

「ある〜ひ もりのなか くまさんに であ〜った」

「あ〜っ！おにいちゃん！すずな、そのうたしってる〜！『もりのくまさん』っていうおうたでしょ〜！」

「ほう・・・すずな！しってるか！このうた！よしっ！じゃあ、いっしょにうたおうぜ！」

「うん！」

「よ〜し、いくぞ〜すずな！さんはいつ！ある〜ひ」

「ある〜ひ」

「もりのなか」

「もりのなか」

「くまさんに」

「くまさんに」

「であ〜った」

「であ〜った」

「じゅるるる・・・がるるる！！！！うるがああああ！！！！ききや  
ぴこぴきやぴい〜ん！！！！ぱくっ！！！！」

「！？」

「ちばしい〜るも〜りのみ〜ちい〜 くまさんに〜 く〜われち  
やっただ〜」

「お・・・おにいちゃん・・・うた・・・かわってる・・・」

「うん？あぁ、だってくまさんにであつたらたべられちゃうんだぜ？  
？すずな？」うん．．．ぱくっ！！」と

「！！！！！うん、うわああああ~~~~ん！！！！！！！」

「すずな、みるっ！このたくましいものを！」

「わぁ！すごい！おつきい！すごいね！おにいちゃん！」

「は、は、は、は、は、！すんげえでかいだろ？もつとちかくでみて  
みっ」

「わぁ．．．すごい．．．おつきくて．．．くろい

．．．さわってみてもいい？」

「．．．ああ、いいぜ」

「うわぁ．．．すごい．．．たくましい．．．」  
さわさわ

「．．．おいおいすずな．．．らんぼつにあつかうなよ．．．  
．．．？でりけーとなんだから．．．」

「．．．わぁ．．．すっごい．．．かたいよ．．．  
おにいちゃん．．．」

「．．．ああ．．．すんげえかたいだろ．．．？おにいち  
やんのなんだぜ？それ」

「．．．わぁ．．．おにいちゃんすごい．．．なんてい  
うの．．．？これ．．．？」

「ああ．．．そいつはなすずな．．．」  
「．．．うん」

「（な．．．なんて．．．会話をしているの．．．？ま、まだ  
．．．よ．．．幼稚園児なのに．．．」

「．．．だ．．．だめよ．．．そんな．．．お．．．大

人のわ・・・わたしが・・・と、とめなきや・・・。「(夏子お  
ばさん)

「オオクワガタっていうんだぜ!!!!!!」

ずで~~~~~~~~ん!!!!!!!!!!!!

「?おにいちゃん?いま、ろうかですごいおとしなかつた?」

「?きのせいだろ?」

わたしは毎日楽しい時間を過ごしていた・・・

けど・・・?パパは?ママは?・・・

・・・どこ行ったの?・・・



第49話『てるてる坊主』（前書き）

今回は諸事情のため短いです。すみません……………



## 第49話『てるてる坊主』

てるてる坊主

日本の風習のひとつで軒先にぶら下げる事によって天気が晴れになるといわれている。

(ちなみに一部の地域では逆さまにすると雨が降るともいわれている)

「雨……やまないね、おにいちゃん……」

「……そうだな」

その日は外を見ると雨がどしゃ降りだった。どうみても、明日までやみそうになかった。

「……おにいちゃん……今日はなにして遊ぶの？」

晴れた日は外でキャッチボールしたり、田んぼでザリガニを捕まえてたりして遊んでいた。

「……そういえばあの頃、兄貴がザリガニ捕まえてその場で食おうとしていたな……止めようとしたら」

『あめりかんざりがにはこーきゅーなんだぞ!!!すずな!!!むしゃびりついて何が悪い!!!貧乏人をなめんなよ!!!』とかいつてむしゃむしゃ食ってたな……今思えばただのアホだった

な。

「そつだな・・・じゃあ、これで遊ぼう、すずな」

「・・・？おにいちゃん？なにこれ？」

「ぷちぷちつぶして遊ぶものだ」

「ぷくん・・・」

ぷちぷち（割れ物とかいろいろなもの包装するときに使われるもの。名前はよく分からないが・・・）

「よっし！いっちょ気合入れてやるぞ！すずな！」

「うん！」

「……おにいちゃん」

「ん？なんだ？ずずな？」

「これ……つまんない……」

「……そうか……そうだよ……」

「おかーさん！おかーさん！」

私はこの頃、自然に夏子おばさんのことを『お母さん』と呼ぶようになつていた。……なぜかはわからないが……子供の本能つて奴だろつか？

「あら？ずずなちゃん、どうしたの？」

「この窓にぶらさがつてるお人形さんなに？」

「ああ……これね、これは『てるてる坊主』っていのよ」

「？……』てるてる坊主『？」

「そうよ、これはね。雨よけのためにぶら下げているのよ。多分……勇輝が作つてぶら下げたんじゃなくないかしら？まあ……雨から守つてくれるおまじないみたいなものよ」

「ぶ〜ん……けど、雨降つてるよ？」

「そ……そうね（汗）あくまでもおまじないみたいなものだから……」

「……」

「ぶ〜ん……」

・・・けど、私はあの頃守りきれなかった・・・

家族を――――

あの日は忘れもしない・・・

そう・・・『あの日』は決して・・・

第50話『忘れた頃にソイツはやってくる』(前書き)

今回は登場人物紹介その2です。サブタイトルに特に意味は無いのです。にぱ〜

## 第50話『忘れた頃にソイツはやってくる』

宮子春美みやこはるみ（17）

変態Lv：ナチュラル

身長：183cm

体重：\$ # & ' \ k g（解読不可能）

髪型：バニラ色。ふわっとしててばさばさとした髪型。

高1の頃、夏美と同じクラスでかつ親友。どこか天然そうな女の子で少し人をからかうのが好きだという困った小悪魔ちゃん。天真爛漫。男子の人気は高いとか。噂では『ふあんくらぶ』なるものまでが存在するとかなんとか。耕司と最初に出会ったとき首を絞めたのはスキンシップだったとか。耕司「どこがだよ!!!天国のじいちゃん顔見えかけたんだぞ!!!ちくしょう!!!ふざけるな!!!こらあ!!!」でも、耕司のことは結構気に入っているらしい。どうやら、彼女は好きな相手に対してからかう回数が多いようだ。好きな食べ物はチョコパフェ、嫌いな食べ物はセロリ。

赤神慎也あかがみしんや（17）

変態Lv：むつつり助平

身長：187cm

体重：60kg

髪型：赤色ツンツンヘッド。氷山みたいな。

ブルマ好きな漢<sup>おとこ</sup>。見た目はかなり危なそうな不良っぽいが実は結構へたれ君。……これ以上別に特別言うことないんでもうこの辺でよろしいでしょうか？慎也「よくねえよ！！もうちよつと自己紹介させやが（省略）好きな食べ物はかんぴょう巻き、嫌いな食べ物レバー。」

八尾麻里<sup>やおまり</sup>（18）

変態Lv：：犯罪的

身長：140cm

体重：45kg

髪型：まーりん先輩とヒナクさんを足して2で割ったような髪型（つまり作者もよくわかってない）

麻美の妹で高宮学園の生徒会会長。見た目はあきらかに小学生だが耕司達よりひとつ上の先輩。姉の麻美に負けじと変態的言動を常に

発する。結構、わがままな性格。ちなみに最近あまり出番がない。というか、出す機会がない。どうしよう。好きな食べ物はちりめんじゃこ、嫌いな食べ物はこんにゃく。

みなもとゆきみ  
水本雪美（過去編当時（15））

変態Lv……（悲劇のヒロイン）

身長：……？

体重：……？

髪型：青色のツインテール

耕司の幼馴染の女の子。耕司の実家の右隣の家に住んでいて、毎朝起こしに来ては朝のラブコメ（？）騒動を引き起こしていた。くあくうらやましいじゃねーか、ちくしょーめ！……（泣）幼稚園の頃からずっと耕司の傍にいたがもう1人の幼馴染、市本鈴奈の耕司に対する気持ちを知り、『もう1人の自分』と葛藤していた。

というものの『もう1人の自分』とは雪美の裏の顔で雪美はいわゆる『二重人格』であった。（第37話参照）表の顔は素直で明るい誰にでも好かれるような女の子であるが、裏の顔はそれとはまったく正反対の性格であった。今風で言えばいわゆる『ヤンデレ』。しかし、勘違いしないでほしいことはこの雪美の本当の性格は『表の顔』。『裏の顔』はあくまで後天的に生まれたもの。きっか



けは鈴奈の耕司に対する気持ちを知ったときに『裏の顔』が生まれた。最後は『表の雪美』が自分の中の『裏の雪美』を封じ込めるために、自殺を図って儂い人生を終えた。耕司の最初の初恋の女の子。耕司が上京したのもこの雪美の影響によるものだった。好きな食べ物に蜜柑、嫌いな食べ物になめこ。

いちもとすずな  
市本鈴奈（17）

変態Lv・・・貴様っ！！！！（／／／）

身長：ぶ・・・無礼者っ！！！！（／／／）

体重：き・・・切り捨てるぞっ！！！！（／／／）

髪型：（過去）茶色のポニーテール（現在）肩にかかるくらいの茶色のショートヘア

耕司の幼馴染の男・・・じゃなくて女の子。耕司の実家の左隣の家に住んでいて、雪美と同様、毎朝耕司を起こしては蹴りを入れたり本（家庭の医学）で殴ったりとおそろしい女の子。幼稚園の頃、公園で耕司と出会い

、一目ぼれをする。両親は交通事故で失い、以来、母親の姉の夏子叔母さんとその息子の勇輝と暮らすようになる。しかし、その母親代わりの夏子も失い（過去編で語られます）以来、誰かを『守る』ということに自分の心の中で誓いを立てた。耕司に一目ぼれした理由は母親代わりの夏子を失ったショックから自分を救ってくれた男

の子だったためである。アリスと剣道で引き分けに持ち込むほどの凄腕、次期ツンデレ候補（？）現在  
、耕司のいる街に移り住み耕司のいる学校に転校してきた。果たして、その心中は……。好きな食べ物はダシ巻き卵、嫌いな食べ物は無い。

市本勇輝いしむとゆうじゆうき（18）

変態Lv……聞きたいか？

身長：180cm

体重：65kg

髪型：茶色のストレートヘア

耕司の幼馴染の男。みんなの兄貴的な存在。鈴奈の義兄。表面はへらへらしていてちゃら男みたいな奴だが、

実際は誰よりも幼馴染の耕司、雪美、そして義妹の鈴奈を愛している馬鹿野郎。もてる顔立ちなのだがあまり浮いた話は無いようだ。

本人は「結婚？はん！心の贅肉だね。独身？上等さ！かかってこいや！コノヤロー！

……アホだ。自分の母親、夏子を失い、悲しみに打ちひしがれていたが耕司に救われて以来、耕司に付きまとう（？）でも、根はいい奴。現在、中退し必死に働いているとかなんとか。好きな食べ物北京ダック、嫌いな食べ物はトマト。

佐々木雅彦ささきまさひこ（21）

変態L V . . . 幼女がお好き？「ち . . . 違いますよっ！？」（汗）「

身長：183cm

体重：70kg

髪型：メガネ着用で黒のストレートな髪型。

みんな（オタク）のアイドルウコンちゃんのマネージャーを勤めている一般ピーポー。ウコンちゃんから『うんこっ』とか悲惨なあだ名をつけられているかわいそうな人。でも、ウコンちゃんに1番信頼されているらしい . . . . 多分。これからも番外編でたびたび登場するかもしれない . . . . 多分。好きな食べ物はひややつこ、嫌いな食べ物は特に無い。

おまけ『50話記念(耕司×サル×メガネ)』

サル(慎也)「やったな!!!! ついに『ぎぶ! あんど!!!! ていく! !!』50周年突破だぜ!!!!」

耕司「それだところち よりなげえよ!!!! 50話だつ!!!! 50話!!!!」

メガネ(英男)「ふむ..... ではとりあえず脱ごうか」

耕司「なんでだ!? (汗)」

サル「おう、そうだな」

耕司「お前も!? (汗)」

メガネ「ふふふ..... まあ、冗談はこのくらいにしてとりあえず喜ぼうではないか、耕司キユン」

耕司「..... 俺には冗談に聞こえなかつたんだが.....」

サル「ああ..... で? とりあえずナニする?」

耕司「『何』をカタカナにするな」

メガネ「では..... 今年の流行語になりそうな台詞を皆で考えようではないか」

耕司「はあ..... 流行語ねえ..... 『だつちゅくの』とか『死刑!』はどうだ?」

サル「..... お前、ソレ既に流行語になったからな..... というか

お前、今何歳?(汗)」

メガネ「『みつくみくにしてあ・げ・る・』」

サル「何言つてんだこのメガネ」

耕司「..... なあ? 止めないか? なんで50話記念なのに俺ら流行語の開発してんだ? イミワカンネエ(汗)」

サル「ああ..... そうだな。脈絡もねえしな」

メガネ「『みつくみくにしてあ・げ・る・』」

耕司「てめえはしつけえな」

サル「なあ..... 俺、気になってたことがあんだけどさあ.....」

耕司「?なんだよ?」



よろしくオネガイします」

メガネ「『みつくみくにしてあ・げ・る・』」

サル「てめえはまだ言うか！！！（汗）」



6月13日

パンパ！パンパパン！

「ひやつほー！ー！ー！う！！！！いええええい！！！！！！すずな

！！！！！！たんじょうびおめでとう！！！！

！！いええええい！！！！！！ひやつほづつづつづつづつづつ！！！！

！！！！！！！！！！」

おにいちゃんはまるでじぶんのたんじょうびのようにはしゃいでいた。うれしいけど・・・なんかちよつとはずかしい・・・

(ノノノ)

パンパ！パンパパン！

「鈴奈ちゃん、5歳の誕生日おめでとうね。1年前、初めてこの家に来たときはあんなにちっちゃかったのに・・・女の子の成長は早いものねえ・・・」

おかーさんはあたまをなでしてくれた・・・うれしい・・・

「なにいいいいい~~~~~~~~！？おい！！！！あばずればあ！！！！ぼくだつて、すずなに、まけないくらいせいちようしたぞ！！！！！！ほ~~~~~~~~ら！！！！！！おっとせい！！！！！！！！」

びろ〜ん

「はあ・・・神様・・・私は息子の育て方をどこでどう間違ったのでしょうか・・・どうか教えてください・・・神様・・・くすん(泣)」

おかあさんはいきなりしくしくと泣きだした。・・・よくわかんないけど、かわいそうだったからおかーさんのあたまをなでなでしてあげた。

「だいじょうぶ？おかーさん？」  
なでなで

「うう・・・ありがとうね、すずなちゃん、くすん(泣)」



あの日の夕食のメニューはいつもと違い豪華な食事だった。

おかーさんがすずなのたんじょうびのためにいっしょうけんめいつくってくれたんだ。

すごくおいしかった。

ごはんを食べるリビングに色々な飾り物があった。

おにいちゃんが用意してくれたらしい……

すっごくうれしかった。

……でもクリスマスツリーって……

おかーさんも……

おにいちゃんも……

まるで自分のことのようにたのしそうだった……

すずなもすぐくたのしかった……

……あつたかい……

『かぞく』なんだ……

……『か』……『ぞ』……『く』……？

おにいちゃんも

おかーさんも

ちがうよ

ちがう

『かぞく』

……ママは……？

……パパは……？

……そついえは……

……『かぞく』じゃない……！

……すずなの……

．．．．．まだ、かえってこないの．．．．．？

．．．．．すずな．．．．．

．．．．．せびこ．．．．．

．．．．．パパッ！ママッ！．．．．．

．．．．．ジュジュの？ねえ？ジュ！．．．．．

．．．．．すずな．．．．．

．．．．．すく．．．．．びしー！

「．．．．．鈴奈．．．．．ちゃん？」

「．．．．．」

「．．．．．どうしたの？気分．．．．．悪いの？」

「．．．．．ママ」

「．．．．．え？」

「．．．．．パパ」

「．．．．．鈴奈．．．．．ちゃん．．．．．？」

「．．．．．おかーさん．．．．．『ママ』と．．．．．

『パパ』は．．．．．どこにいるの？」

「！」

「ねえ．．．．．おかーさん．．．．．『ママ』と．．．．．『パ

パ』は．．．．．どこ．．．．．？」

「．．．．．鈴奈ちゃん．．．．．」

「おしえて．．．．．おかーさん．．．．．『ママ』と『パパ』に

あわせて．．．．．」

「．．．．．な．．．．．何を言ってるの？鈴奈ちゃん？鈴奈ちゃん  
のママは私よ？．．．．．パパはね．．．

．．．今は出張中．．．．．」

「うそだよっ！……！……！……！……！……！」

(勇輝視点)

鈴奈の張り裂けるような大声はその場の空気を変えるものだった。

……

鈴奈……お前……とうとう……

「おかーさんは……すずなの……すずなのほんとうの

『ママ』じゃない……！」

幼い鈴奈の押さえ切れない感情がどんどん吐き出されていく……

・

「……鈴奈……ちゃん……」

「すずなは……すずなは……さびしいのに……」

さびしいのに……」

すでに鈴奈の顔は涙と鼻水でくちやくちやでさっきまでの幸せそう

な顔とはまるで正反対だった……

「……」

お袋は下を向き、ただ鈴奈の罵声を聞いているだけだった……

「かえして！かえして！ママを……パパを……！」

「……」

「かえして……！」



・ ・ ・ ・ ・ 鈴奈 ・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・ 俺達は ・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・ 『家族』 ・ ・ ・ ・ ・ だろ？  
・ ・ ・ ・ ・ 違う ・ ・ ・ ・ ・ のか ・ ・ ・ ・ ・ ？  
・ ・ ・ ・ ・ そう思っていたのは ・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・ 俺とお袋だけだったのか ・ ・ ・ ・ ・ ？  
・ ・ ・ ・ ・ 本当は ・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・ 違う ・ ・ ・ ・ ・ だろ ・ ・ ・ ・ ・ ？  
・ ・ ・ ・ ・ お前が初めて家に来たとき ・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・ 事情は来る前にお袋から聞いていた ・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・ 「今日からあんたはお兄ちゃんになるから ・ ・ ・ ・ ・」  
・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・ 「絶対に ・ ・ ・ ・ ・ 妹を ・ ・ ・ ・ ・」  
・ ・ ・ ・ ・ 「泣かせちゃだめよ？」 ・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・ 俺は ・ ・ ・ ・ ・ そんな鈴奈の顔なんか見たくなかった ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・ 泣いている顔なんか ・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・ 笑って欲しかった ・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・ どんなささいなことでもいい ・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・ 笑ってくれよ ・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・ それが ・ ・ ・ ・ ・



・  
・  
・  
・  
・  
刹那  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
音  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
音がした  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
それは  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
お袋が  
・  
・  
・  
・  
鈴奈を  
・  
・  
・  
・  
・  
・

ぶった……

「ひっく」

「鈴奈ちゃん……」

お袋はしゃがんで鈴奈の目の前に行き、鈴奈を見つめて……

「おかーさんはね……確か

に鈴奈ちゃんに嘘……ついちゃった」

「ひっく、ひっく……」

鈴奈はただただ黙って震えながらお袋を涙目で見つめていた……

「それも……ひとつだけじゃない……いっぱい……

いっぱい嘘……ついちゃった」

「けどね……それは『大切な嘘』……な

の……」

「ひっく」

「大事な……大事な……『嘘』……」

なの

「……すずなちゃんは何にもわからないかもしれないけど……

……」

「絶対に……絶対に……」

「……間違っても……」

「……………『しんじゃえ』なんて言っちゃダメ……………」  
「……………」

お袋は……………静かに……………そう、静かに……………

泣いていた……………

ダツ！ボタン！

「お……………おい！！！！す……………すずな！？」  
ダダダダ……………ボタン！

俺はおもわず声を上げた。

鈴奈は泣きながら走って部屋から出て行きさらに外へ走って出て行ってしまったのだ。

「……………お、おい……………！おふくろ……………！」

「……………行ってあげなさい……………」

「……………おふくろ……………」

「……………母さん、待ってるから……………」

暖かいスープ作って待ってるから・・・

・・・あの子を・・・あの子を迎えにいつてあげなさい・・・

「・・・」

「・・・ああ、わかった。絶対、連れて帰るよ・・・絶対に連れて帰るからな・・・俺達の『家族』の・・・『すずな』を・・・バタン・・・！」

ダツ！・・・バタン・・・

「・・・頼んだわよ・・・勇輝・・・」

「・・・」

・・・俺が・・・



番外編その10『マシユマロは好き?』(前書き)

番外編その10です。遅れましたがホワイトデーのお話です。



番外編その10『マシユマロは好き?』

「はい 耕司君 どうぞ」  
「……あん?」

特にやる事がなかったので教室でぼけ〜と昼休みを満喫していると宮子が唐突になんか渡してきた……

「……なにこれ」  
「じえんが」

「……はあ? いや……そりゃあ、みりゃあわかるけど……  
……なぜにいきなりじえんがを俺に手渡す?」

「えつと……耕司君はジエバン二の方が良かったかな?」  
「それすでにモノじゃねえからな」

「……なんなんだいったい……(汗)  
「……で?なんでいきなりこんなもん渡すんだヨ、意味わかめちやんなんですけど?」

「なんだとう!!!!!!私のジエンガが受け取れないって言うのかあ!!!!!!このメルヘン野郎!!!!!!」

「いきなり逆ギレかよ!!!!!!(汗)とりあえず、ワケを言えよ!!!!!!」

なんなんだっ!!!!!!この女は!!!!!!(汗)  
「だって、今日ホワイトデーじゃん」

ああ……ホワイトデーね……

「いや、なんかおかしいだろソレ(汗)」  
「おかしいのはお前の存在だ」

「……(汗)」  
「……っていうのは冗談かもしれないね」  
「……100パーじゃないんだ。」

「……あのなあ、宮子……(汗)ホワイトデーっていうのはな、男がバレンタインデーのお返しに女にプレゼントを贈るって

いう日なんだぞ？それなのに女のお前が男の俺にプレゼントって・・・  
・おかしいだろ

？それじゃあ、お返しのお返しだぞ」

「・・・あは 私が女の子・・・かあ・・・ふうん、  
今までそういう目で耕司君私のこと見てたんだあ・・・そっ  
か そっか」

「・・・お、お前・・・ま、まさか・・・

お、おと・・・(汗)」

「えへ」

「・・・(汗)」

「・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ささっ(引き)

「・・・やだなあ〜 耕司君、引かないですよ〜 冗  
談 じょくだんだよ 私は真正銘、女の子だよ ビビっときた  
かな」

「ビビッと漏れそうだった(汗)」

「・・・コエエ・・・(汗)・・・なんだったんだ・・・

あの無言の間・・・(汗)

「へえ〜 ホワイトデーってそういう日だったんだ〜 じゃあ、耕  
司君なんかちよーだい」

「貴様っ!!!絶対知ってただろ!?!」

「いいじゃん なんかちよだい」

「・・・仕方ねえ・・・(汗)

がさごそ・・・

「・・・これでいいか・・・

「ほれ、粉々になった鹿せんべいとしわしわのビシ リリマンシール

(使用済み)」

「わーい」

「・・・」

冗談のつもりだったんだがなんか喜ばれた……  
……  
なぜか今ちよっぴりイラつときた俺がここにいる……

「耕司さん 今日ホワイトデーですね」

「……ああ、確かにそうだね、条一郎君。だが、君が僕にソレをわざわざ伝える意味はないと思うのだがジヨウイチロウくん？」

「耕司さん 今日はホワイトデーですね」

「……君はまったく人の話を聞いてないね」

「とういわけで……耕司さん……（／／／）耕司さんの……ハアハア……欲しいです（／／／）」

「なにが『とういわけ』なのかわからないがとりあえず落ち着こう、ジヨウイチロウくん」

「ハアハア……ここまで僕に言わせるなんて……（／

／／）耕司さんは罪な方です……（／／／）

い、いやぁ……（／／／）は、はずかしいです……（／／／）  
「

クリクリ

「……君がなぜ頬を染めているのか全く持つて理解不能なのだがとりあえず僕の乳首を愛撫するのはやめてくれる？ジヨウイチロウくん？ねえ、ジヨウイチロウくん？……ちよっ、ちよっ！？聞いている！？ジヨウイチロウくん！（汗）あ、あうっ！？お願いですからな、舐めるのだけは止めてください！！ジヨウイチロウくん！！（泣）」  
クリクリ

ぺろぺろ

.....

ひ、酷い目にあつた.....(汗)

お、俺の周りにはなんでまともな人間がいなんだ.....(汗)  
壊れキャラばつかじゃねえか.....

某フルアニメーションPCゲーム並みに多いぞ.....(汗)あ  
れはあれで衝撃的でもしれえんだけど。

「しっかし.....やっぱ、チヨコのお返ししねえとな.....

」

なんだかんだ言つても夏美や百合ちゃんやミントには世話になつた  
かな.....

.....よしっ!!!!

そうと決まればさっそく放課後は商店街で武器(?)調達だっ!!  
!!!

そして、夜————高宮学園学生寮

.....まずはアリスさんから攻めてみるか.....あれ?でもよ  
く考えたら俺、アリスさんからチヨコもらったっけ?.....ま  
あ、いいや細かいことは。

ドンドン

「お〜い、アリスさん起きてる〜?」

ガンガン

「起きてるでしょ？ねえ？オニサンとイイコトしようよ」

ピンピン

バタンツ！

ガスツ！ドギヤツ！メキツ！

「夜中に変な台詞大声で言いながら女の子の部屋のドアを叩くなっ  
！！！！この変態っ！！！！ぶん殴るわよ！？」

「もうすでに殴られました(泣)」

「・・・で？こんな夜遅くに私に何の用よ。・・・はっ！ま、まさ  
か・・・あ、あんた・・・私に・

「・・・その・・・！！だ、だめよ！そ、そんなこと！)  
／／／」

「・・・なんで赤くなってるかわかんねんけどよ・・・まあ、  
なんつーかバレンタインのチョコのお返ししようと思ってさ」

「・・・そ、そう(汗)・・・って、まぎらわしい行動をする  
なっ！！！！バカッ！！！！(／／／)」

バキツ！

「いて！！！！な、なぜ殴る！？(汗)」

「うっさい！バカッ！(／／／)」

「?????(泣)」

「・・・で？バレンタインデーのお返し？・・・私、あんたに  
チョコなんか渡してないと思うんだけど？」

「・・・だからそんなのもらえないわよ・・・」

「まあ・・・なんつーか・・・日頃から世話してもらっ  
てるお礼？みたいなもんだから受け取って

くれよ・・・俺の熱い気持ち・・・なあ、アリス・・・

「

「・・・そ、そう(／／／)ならし、仕方ないわね、貰ってあ  
げるわよ(／／／)」

「というわけで俺の熱いキムチあげる！なぐんちやって・・・





まあ、それはいいとして……最後はあのチビ（夏美）だな。部屋に行ってみるか。

ドンドン

「おい！夏美！いるか！」

ドンドン

ガチャ……

「お、お兄ちゃん？どうしたの？こんな時間に？何か用？」

「用があるから来たんだよ……つて！きゃあああああああ

ああ！！！！！服着ろつ！！！！！！なんで下着姿なんだよ！！！！

！（ノノノ）この！痴女！」

夏美の格好は上はTシャツを着て……し、下はお……おパン

（ノノノ）

「ひ……ひどいよお兄ちゃん……強引に押しかけてきたの

はお兄ちゃんなのに……（泣）」

「ぐ、ごめん……あのさ……？た……頼むからその姿で

その台詞言いながら泣かないでくれ……なんかすんごい誤解生み

そうだから……（汗）」

「ぐ、ぐす（泣）う……うん……でお兄ちゃん……？

用ってなにかな？」

マジ泣きされるとは思わなかった……（汗）

「ああ……まあなんだ、コレやるよ」

そして例のごとくマシユマロを渡す俺。

「……これって……」

「ああ、マシユマロだ」

「……？なんで？」



「ああ……なんつーか……その……チヨコ  
のお返しだよ！黙って素直に受け取っとけ！バカッ！」

……あれ？

……なんか……なんか恥ずかしいぞ？俺？なんだ？コ  
レ？（／／／）

「……」

じい〜……

「……（／／／）」

じい〜……

うう……くっ、恥ずい……目え合わすことだねえ……

……

「……」

じい〜……

「……（／／／）」

は、はやく時よ！動き出せ！

「……」

じい〜……

「……（／／／）」

「……お兄ちゃん！」

「は、はえー？」

しまった！ついなんか恥ずかしくて変な声でちゃった！

もにゅ！

……ん？もにゅ？……って……まさか……！

……！

「ありがと……！ボク、すごくうれしいよ……」

……って？お兄ちゃん！？」

ばったんきゅ〜……

・ ・ ・ ・ ・ 抱きつかれた ・ ・ ・ ・ ・ ( / / / )  
・ ・ ・ ・ ・ そして、俺の意識は途絶えた ・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・ 朝目覚めるとなぜか夏美の部屋だった。

・ ・ ・ ・ ・ しかも横には下着姿の夏美が俺に抱きつくように寝てい  
た ・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・ あれ？なんで？ (汗)

番外編その11 『新世界は好き?』 (前書き)

番外編その11です。今回は再びあの人が登場します。

番外編その11 『新世界は好き?』

ようやく勉強という名の地獄から這い出て寮の自分の部屋に生還した俺。

誰もいないが「ただいま」と意味もなく言ってみる俺・・・なんかやっぱ1人暮らしって寂しいよね?

「おっす おつかえり〜耕次郎君!はあはあ言いながら待ってたよ」

・・・生還のち地獄を味わう羽目に・・・

「・・・で?なんで勝手に人の部屋に侵入してんですか?あんたは?」

「ねえねえ、ところで耕次郎君は何フェチ?」

「見事に全然っ!!!人の話聞いてねえなあー!!!!!!  
コノヒト!!!!!!というかいきなり生徒に対してセクハラ発言かよ!!!!!(汗)」

「あたしはうなじフェチい〜 こう・・・後ろからペろペろしたくなっちゃうよね〜 ペろペろ〜 ニヨホホ」

「頼むから会話をしてくださいっ!!!!!!!(泣)」

俺が学校から帰ってくると部屋にいたのは麻美さんだった・・・  
ていうか・・・

「あんたコレ・・・住居侵入だよね?ポリスマンプリーズ?」

「そんなことしたらちよん切っちゃうゾ」

「ゴメンナサイ(汗)」

マジ理不尽だコレ・・・(汗)

「……もういいです……で？なんで俺の部屋にいるんですか？あんたは？（汗）」

「話す前に玉露ちよーだい」

「無駄に厚かましいなー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！あんた！ー！ー！ー！（汗）」

「……で？お話ってナンデスカ？」

玉露なんぞ家には存在しなかったので超苦い緑茶を出して差し上げた。

「……ねえねえ、エロ本とかどこに隠してるの？あつれれ？使用済みのティッシュとかでんこ盛り部屋のあちこちに散らばってると思ったのに……がさこそ」

「どうでもいいから早く話せよ！ー！ー！ー！ー！ー！ー！こらこら！勝手に人の家のゴミ箱をあさるんじゃないやありません！ー！ー！（汗）めっ！」

一体何をしにきたんだ……麻美さん……（汗）

「にははは ごめんね〜耕次郎君〜つい男の子の部屋にいるとオネエサン濡れちゃ……おっ！エロ本発見！

なになに……？『貧乳の貧乳による貧乳のための実用書』？

『小ぶり……だが！それがいい！』？『もみもみ……やらないか？』……」

「や、やめろおおおおおおお！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！見つけ次第、本のタイトルを口にするなああああ！ー！ー！ー！俺の黒歴史いいいいいいいい！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「にははは なんだ それぐらい気にすんなよ〜 オネエサンもおつきいモノよりちっちゃいモノの方が好きだぞ〜……」



はい〜ムシキグ、ギター（泣）

「まあまあ・・・泣くなよ、耕次郎君！バンバン売れたらお金  
がっばがっば オネエサンもがっばがっば

耕次郎君もがっばがっば 頑張ろうぜ！」

「・・・ところでひとつ聞きたいんだけど・・・あんたっ  
て一応、教師兼学生さんですよね？」

「そんなの副業だぜー！！！！！！」  
「それが本業だ。」

「・・・で？具体的にどんなジャンルの同人誌を書く気なんですか  
？」

「なんかかんや言ってもお金の話には弱い俺、村上耕司であったのだ。」

「エロオリジナル系」

「さらりと真顔で言うな（汗）」

「やっぱな・・・（汗）最近の同人誌はエロが多いからな・・・  
むしろコメディ系やシリアス系の同人誌のほうが少ないもんな・・・  
・・・というかコノヒトの人間性を考えれば当たり前か。」

「・・・でも俺、漫画なんて書いたことねえっすよ・・・？」

「ノンノン 別に耕次郎君には漫画は書いてもらわないわよん」

「・・・なに・・・？それって、まさか・・・」

「モデルになってもらうにや〜」

「やっぱこのヤマ降ろさせてもらいますぜ、ボス（汗）」

「だ〜め そんなことしたら校内中に『村上耕次郎（17）、若手  
教師を自分の家に連れ込み乱暴！』という記事のピラをばらまく  
ぜ〜」

「そ、それはひ、ひきょうだぜ、ボス（汗）」

「もう、後戻りはできないのだよ、村上耕次郎君！サイは投げられたのだ！」

「まるで今から死に行くみたいなた台詞言わないでください、ボス（汗）」

「……また、ハメられた……しくしく（泣）」

「ようし〜！わきわき書くぜえ〜」

「……」

「……本当にやるんだな……ってというか、コノヒト、教師として……もう、人間として最低な人なんだけど、やる時は真剣に本気で徹底的にやるみたいなのところがすごいな……俺にはそこまで熱中できる趣味はない……まあ、教師は教師でも反面教師として見るのが妥当だろう。」

「ようし〜同人誌のタイトルは……『僕を掘った責任とつてよね』……つと」

「サイテーなタイトルキター!!!!!!」

「いや〜新しい分野にチャレンジしてみようかな〜っと思ってねにゃははは（ノノノ）」

「いや！あんた照れてますけど全然褒めてませんからねっ！？僕！？（汗）」

ていうか……新しい分野ってなんだ……（汗）

「では……内容を考えるにやり〜……うん、やっぱモデルもう一人欲しいな〜……仕方ない！モデル2号！カモン！」

麻美さんが指をパチン！と鳴らすと……ガラガラ……







「いや〜！耕次郎君のおかげで今日は「良い絵が描けたよ」にやははは」

「……………しくしく」

「また、頼むぜ〜 耕次郎君！にやははは」

「……………しくしく」

「あ、言つの忘れてたけど今度から耕次郎君の部屋、『BLの会』

（第9話参照）の部屋にするね だから

、ドアに会員募集の紙貼り付けとくからヨロシクシヨシヨ」

「お願いですからもう、俺を苦しめないで下さい！！！！！！（泣）」

番外編その11 『新世界は好き?』 (後書き)

本編のシリーズ編の続きは4月頃開始予定です。あくまでも、予定、ですけどね。

## 第52話『迷走』

( 鈴奈視点 )

私は暗闇の中を夢中で駆けていた。

何も考えずにとにかく必死で走っていた。

とにかく、迫り来る『ナニカ』から逃げたかった。

「はぁ……！はぁ！」

目から涙が溢れてもう、私の視界は歪んで見えた。

ああ……失明している人ってこんな感じなんだ……

目の前が真っ暗でどこへ逃げても……闇、闇、闇……

まるで目隠ししながら綱渡りしているようで……

怖い……怖い……怖い……怖い……

ドテッ！

「……！あ……いたっ……！」

アスファルトの道でこけてしまった。

「ッ！」

涙を洋服の袖で拭って、膝を見てみると……傷口から血が  
ふれ出ていた……

「……あ……れ？」

じっとその傷口から出ている血を見つめていると……

……私は……こんな光景を……ずっと昔に見たこと  
がある……

「……ッ！思い出せない……」

とりあえず……逃げなきゃ……！

……

あ……れ……？

そういえば……

……私はなんで……なんで逃げているんだろう……？

逃げる理由なんて……無いはずなのに……

どうして……？どうして……？どうして……？

……あんな、顔……見たくなかった……

……どうして……どうして、あんなこと言っちゃった  
んだろう……？

「……くっ！」

ドクン！

「……どうしてこんなに胸が苦しいんだろう……？」

（勇輝視点）

俺は外に飛び出した鈴奈の後を追うために必死で走っていた。

外はすっかり日が落ちて真っ暗闇だった。

くっそ！まだ、そんなに遠くに行っていないはずだっ！

とりあえず、近所の公園に行ってみるか……！

「すずな！すずな……！！！！！！」

公園に来て見たがどうやらここにはいないようだ……！

くそっ！ここに居ないとしたら……商店街の方が！？

「ちくしょう……！！！！！！」

すずな……！すずな……！！

とにかく、俺は必死で走るしかなかった。

幸い、6月だったので夜の街中は寒くは無かったが……

ポツ……ポツ……

いきなり頬に冷たい何かが落ちてきた……

これは……雨……？

しかし、そんな事を気にしている場合ではなかった……

俺が今、優先すべき事は……！

「すずな……！……すずな……ああああああああ……！！  
……！！……！！……」

鈴奈を探し出して……俺達、『家族』の家に連れ戻す事だ！  
……！！……！！

（ 鈴奈視点 ）

「はぁ……はぁ……はぁ……」

走り疲れた私は足を止めてふと前を見ると……

「はぁ……はぁ……お……寺……？」



今まで来た事も無い、お寺が目の前にあったのでとりあえず屋根の下に座り休む事にした。

ポツ・・・ポツ・・・

・・・あれ？・・・何の音だろう・・・？

・・・雨？

ザー・・・ザー・・・

するとすぐに本降りになった。

・・・

「はあ・・・はあ・・・」

すぐやんでほしいな・・・

雨は大嫌い・・・だって・・・

お外でお兄ちゃんと一緒に遊べないんだもん・・・

雨は・・・私の楽しいものを奪っていく・・・

・・・そういえば・・・

あれは・・・なんだったっけ・・・？

．．．．

思い出した．．．．『てるてる坊主』だ．．．．

雨の日にお兄ちゃんがよく作っていたけ．．．．

全然効果なかったけど．．．．

．．．．

「．．．．お兄ちゃん」

．．．．なんでだろう．．．．？

急に不安になってきた．．．．

．．．．お兄ちゃん．．．．

．．．．お母さん．．．．

．．．．お父さん．．．．

「．．．．すずな．．．．寂しいよ．．．．」

雨も止まず．．．．涙も止まらなかった．．．．

―――雨は大嫌い―――

―――私の大切なものを全て奪っていく―――

―――雨は大嫌い―――

―――私の大切な『おかーさん』も奪っていったのだから―――

### 第53話『母の胸中』

( 夏子視点 )

私は……なんて……事をしてしまったのだろう……？

なんで……あんなに感情的に……

……あの子の言うとおりだ……確かにそうだ……たとえ私とあの子は血が繋がっている親戚であったとしても私はあの子の『実の母親』でないのよ……

そして……

私は……確かにあの子に大切な『嘘』までついてる……

……でも

鈴奈ちゃん……私はね……ただ……

気休めでもなんでもいいから、あなたの『お母さん』になりたかった……

ただ……ただ、それだけなの……

「……」

今……私に出来る事は……このクリームシチュー

を完成させること……

そして……泣きながら帰ってくるあの子にこの  
クリームシチューを出してあげること。

「……………」

……ふと、あの子の笑顔思い出す。

「……………」陽子

だけど……あの子の笑顔を見ているとつい昔の事を思い出  
てしまう……………」

『夏子姉さん……………あの子……………鈴奈の事……………  
よろしくね……………』

「……………」

目を拭つと……………いつの間にか私の目から涙が溢れていた

……………胸が苦しくなる……………

．．．．．なんて似ているんだろう．．．．．

．．．．．なんてつらいんだろう．．．．．

．．．．．なんてかわいそうなんだろう．．．．．

．．．．．こんなの．．．．．こんなのいわよっ．．．．．

！

「．．．．．あっ！っ！」

．．．．．軽い火傷をしてしまった．．．．．

「．．．．．こんな痛み．．．．．あの子の心の痛みに比べた

ら．．．．．これくらい．．．．．」

．．．．．多分．．．．．

多分あの子はなんとなく気付いているのかもしれない．．．．．

でも、その事を私は絶対にあの子に伝えられない．．．．．

．．．．．伝えたら．．．．．あの子はきっと．．．．．きつ

と壊れてしまう．．．．．

．．．．．心も体も．．．．．

「……………ん」

……………うん、完璧っ……………！

私が今まで作ったクリームシチューの中で最高の出来！

「……………ふう、これであの子は喜んでくれるかしら……………」

こんなもの気休めでしかないのかもしれない……………

けど……………

私はただ、あの子の『お母さん』になりたかった……………！それだけなの……………

それが……………あの子の母親、陽子の最後に私に伝えた『意思』  
なんだから……………

「……………」

……………まだ、あの子のためにできる事が今の私にあるのかしら……………

……………勇輝……………

私の大切な『家族』という名の『かけら』を今、探しに行ってくれているのよね……………

．．．．あの子にも私は何もしてやれなかったのかもれない．．．

勇輝は．．．．あの子のために必死で『家族』になろうとしてく  
れた．．．．

『何言つてんだよ!!!お袋!!!俺は鈴奈と『家族』になろうと  
したんじゃあないぜ!!!もう、すでにあの時から『家族』なんだ  
よ!!!』

「．．．．うん．．．うん」

言わなくても．．．．言わなくてもわかってるわよ．．．．  
．勇輝．．．．

私とあなたとあの子は．．．．『家族』．．．．

形だけでもいいじゃない．．．．

他人からなんとわれようとも．．．．私達は．．．．  
『家族』．．．．それだけは事実よ。



「……………私にもできる事……………」  
……………それは……………」

家族という名の『かけら』を繋ぎ合わせる事……………」

家でじっとなんかしてられない……………」

「……………勇輝！鈴奈！……………今……………」  
……………行くからね……………」

そして、私は鍵もかけずに家から外へ飛び出した……………！

「……………陽子、きつと私達、『家族』は大丈夫だから……………」  
……………ね……………」

私は雨の中、あの子を探しに……………迎えに行く……………」

( ??? ? ? 視点 )

だが・・・彼女達はまだ気付いていなかった・・・

その心優しい、『母』の行動が・・・

さらなるその先に待ち構える『悲劇』を招く事を・・・

そして、『絶望』という名の『悲劇』を――――

・・・ ? 僕の名前・・・ ?

ふふっ・・・まだ、知る必要はないですよ。まだ、僕の正体を  
知るにはいささか早すぎます。

ただ・・・読者の皆様に伝えたい事・・・それは、

所詮、この世は『ギブ・アンド・テイク』……

『代償』なしでは『幸せ』なんぞ掴めない……

そんな狂った世界なんですよ。この物語は……ね。



## 第54話『蘇る過去のキオク』

( 鈴奈視点 )

．．．．．お寺で雨宿りを始めてから1時間経った．．．．．  
けれども相変わらず、狂ったように雨は空に浮かぶ暗雲から滝のよ  
うに降り注いでいた．．．．．

．．．．．まるで、私の今の心境を表したかのように．．．．．  
．  
「．．．．．」

．．．．．何を見るのでもなくじっと外を見つめていた．．．．．  
．．．．．寒い．．．．．さっきまではそう思っていたが、もうと  
うにそんな感覚も通り越して私の体は何も感じなくなった．．．．．  
．

．．．．．なんならイメージしてみようか．．．．．  
．．．．．暖かい所でゆつくり．．．．．そうだな．．．．．クリ  
ームシチューなんてどうだろうか．．．．．

．．．．．夏子伯母さんが作るクリームシチューはおいしかったな．  
．．．．．  
．．．．．何を馬鹿な．．．．．なんて都合の良い考え方をしてい  
るんだろうか．．．．．私は．．．．．

．．．．．私はあの人を自分から突き放したじゃないか．．．．．

．．．．．自分の実の『お母さん』じゃないからという理由で．．．．．

．．．．．ああ、分かっていた．．．．．

．．．．．これは単なる八つ当たりだっていうことを．．．．．

．．．．．お母さんやお父さんが帰ってこない．．．．．

．．．．．募る不安．．．．．

．．．．．幼いながらも私に優しく接してくれる夏子伯母さんやお  
兄ちゃんにどこかイライラして．．．．．

．．．．．なんでお母さんやお父さんの話はしないんだろう．．．．．

．．．．．仮にも自分の妹の子供を預かっているんだ．．．．．

．．．．．電話くらいしてもいいじゃないか．．．．．

．．．．．何も無い．．．．．

．．．．．私はなんとなく分かってしまった．．．．．

．．．．．自分の両親に何か大変なことがあったっていうことを．．．．．

．．．．．それにしても．．．．．眠い．．．．．

．．．．．昨日は早く寝たのにな．．．．．

．．．．．少し寝ようか．．．．．？

．．．．．このやけにうるさいハーモニーを奏でる雨音が消えてく  
れるまで．．．．．

．．．．．

．．．．．

地球上に生き残っているのは私一人ぼっち．．．．．

ニンゲンは所詮、一人じゃ生きていけない．．．．．

単に衣食住の問題だけでなく．．．．．なんていうか．．．．．  
そういうのじゃなくて．．．．．

精神面？って言ったほうがいいだろうか……？

寂しい……つらい……苦しい……

いや、違うな……そんな感情を持ち合わせてる方がまだ幸せだ……

……本当に怖いのは……

……『何も感じなくなった自分』……

……まさにそんな感じだった……

……今、その光景を目の当たりにしている……

……過去の自分を……

……私は見ている……

……周りの喧騒や車の音がやかましく聞こえてくる……

…………だけど……

私が立っている領域はなぜかそこだけ台風の目のように……

まるで時が停止したかのように……



『無風』状態だった……

『……』

私はそんな光景をじっと見つめていた……

……眼前……いや、私の領域に広がるのは……

———血の海———

赤い……赤い……鮮やかな色が……私の領域を侵して  
いた……

『……』

……そして……

その鮮やかな赤の中にまるで打ち捨てられた人形のような……

……いや、焦点が合っていない目が……

……一瞬、私を見つめたような気がした……

……お母さん……

……お父さん……

……赤く絵の具で塗られた私の両親は……もう、すで

に息が無かった……

私の領域の外をふと見ると2台の車が互いにペチヤンコになっておりもう、元の外見の形を留めてはいなかった……

『……………』

……………けど……………

私には何も感じられなかった……………

……………だって……………

私の傍にはお母さんやお父さんがいるんだよ？

きつと……………きつと……………ちよつと眠たいだけなんだよ……………？

きつと……………きつと……………

……………本当は泣きたかった……………

……………大声を上げて思いっきり泣きたかった……………

……………だけ……………

……………『何も感じられない』……………

『……………』

．．．．．私は．．．．．見つめるだけ．．．．．単に見つめるだけ．．．．．

．．．．．そこで．．．．．

．．．．．私の記憶は途切れた．．．．．

．．．．．

ザーザーザーザー．．．．．

「．．．．．ん」

．．．．．1時間ほど寝ていたんだろうか．．．．．

．．．．．しかし．．．．．外の雨はまだ降り注いでいた．．．．．

．．．．．かなりうっとおしい．．．．．

．．．．．少しくらい弱まってくれてもいいじゃないか．．．．．

．

．．．．．でも．．．．．今更、愚痴を言ってもしょうがない．．．

．．．．．今はそれより．．．．．

．．．．．完全に思い出した．．．．．

．．．．．まさか、夢で思い出すだなんて思わなかったけど．．．．．

「．．．．．」

．．．．．やっぱり．．．．．

．．．．．お母さんとお父さんは．．．．．

．．．．．

．．．．．あの頃は出なかった涙．．．．．

．．．．．今、ここで．．．．．

．．．．．洗い流しても．．．．．いいだろうか．．．．．

「う．．．．．あ．．．．．う．．．．．あああああああああ

ああああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああああああああああああ  
「！」

．．．．．やかましい雨音に負けず．．．．．

私のあの日に出せなかった感情を．．．．．

今、ようやく出せた．．．．．  
．．．．．外に出さずにはいられなかった．．．  
．．．．．

．．．．．ああ、コレが．．．．．

．．．．．『泣く』っていう感情なんだ．．．．．

．  
．  
．  
．  
．

ようやく落ち着きを取り戻した私はある決意をする――

「――」 『謝る』 「――」

あの人やお兄ちゃんは…… やっぱり、私の『家族』だった。  
……

…… 本当のお母さんじゃない……？

…… そんなの関係ない……

…… ようやく、分かった……

…… たとえ、世間がそれは本当の『家族』じゃないと罵ろつ  
が……

…… 私の中では、夏子伯母さんもお兄ちゃんも家族だ……

…… それで充分じゃないか……

…… それだけでいい……

…… きつと、今頃、お兄ちゃんも夏子伯母さんも私を必死で  
探しているはずだ……

…… 行かなくて……

「……」

．．．．．何より．．．．．

．．．．．謝りたかった．．．．．

．．．．．ただ、それだけ．．．．．

．．．．．受け入れられなくてもそれはそれでしょうがない．．．．．

．

．．．．．それを運命と信じよう．．．．．

．．．．．私がいいた種なんだから．．．．．

「．．．．．もう、私は逃げない」

．．．．．

そして、私は暗い雨の中へ．．．．．走り出していた．．．．．





第55話『その先に見えるもの』

( 鈴奈視点 )

私は雨の中を当ても無く走り続けていた。

謝りたくて。

私の・・・私の・・・もう1人の『お母さん』に……………

謝りたかった……………

ただ……………それだけ……………

ただ、それだけだった……………

大雨のせいですいぶん視界が悪い。

走っている途中、道路で車に轢かれそうにそうになりとつさに避けたが車輪で跳ねた水溜りの泥水が服やら顔やらにかかった。けど……………今はそんな事を気にしている場合じゃない……………早く……………

・早く・・・

早くお母さんに謝らなきゃ・・・しゅめんねって・・・

「はあ！はあ！・・・はあ！はあ！」

お母さんは・・・家に居るんだろうか？だったら早く帰らないと・・・

私はすぐに家に向かった。

） 夏子視点（

・・・あれから走り回り続けて1時間・・・

未だに鈴奈ちゃんの姿を見つけることはできなかった・・・

目ぼしい場所は全て回った・・・

なのに・・・見つからない・・・

・・・まさか・・・

この雨だ・・・川も増水して・・・きっと・・・そっぴとっぴ、流れがきつくなっているはずだ・・・

「・・・っ！」

一瞬、最悪の事態を想像してしまった……

そんなこと……あるはずない……夏子……何  
考えてるの……

あの子は幼いながらも運動神経がいい……

そんな……危ない場所行くはずが無いじゃない……

「……どこか……まだ、どこかに……きつと  
……」

疲れ切った体を無理矢理動かし、再び鈴奈ちゃんを探すために当ても無くどぼとぼと歩いた……

……

ふと目の前を見ると……いつの間にか大きな交差点まで私は  
来ていた……

「……」

信号が赤だったので私はじっと……立ち尽くしていた……

……

私は……これまでの事を考えていた……

．．．．． 思えば、鈴奈ちゃんが私と勇輝と暮らし始めるきっかけとなったあの交通事故．．．．．

．．．．． 酷い交通事故だった。

．．．．． 私の妹、陽子は22歳という若さでこの世を去った．．．．．

相手の夫も陽子と同年齢でこの世を去った．．．．．

陽子は両親から結婚を反対されていた。

18歳という若さで鈴奈ちゃんを生み、その当時から両親に反対されていたがそれを押し切って、逃げるように両親の目の前から姿を消した。

そして、2年後．．．．．

私の前に姿を現した陽子は本当に心から幸せそうだった。

陽子の夫の真樹さんも満面の笑みを浮かべてそれまでであった出来事（ほとんどが鈴奈ちゃんに関する話題だったが）を詳細に私に話していた。

そんな話を私にしていると隣で座っていた陽子はむすっと頬を膨らませ．．．．．

『真樹さんだったら．．．．．さっきから鈴奈のことばかり．．．．．』

．．．．．私はそんな自分の娘に嫉妬する陽子の姿を見てちよっ  
ぱり可愛いなと思ってしまうたり。

真樹さんは苦笑いでタジタジだったけど．．．．．

．．．．．多分、この家族は将来、亭主関白にはならないわね．．．  
．．．．．と思っていた。

その当時の鈴奈ちゃんはまだ陽子の胸の中で寝ていて、もうすごく  
可愛かった．．．．．

いつまでも．．．．．この家族にこんな笑顔が続けばいいな．．．  
．．．．．と思っていた。

けれど．．．．．そんな日も短かった．．．．．

それからちよくちよく私の家に家族3人で訪れていたが．．．．．  
多分、鈴奈ちゃんはその当時のことは覚えていないだろう．．．．．  
まだ、ちっちゃかったし．．．．．

．．．．．しかし．．．．．

．．．．．偶然、来るはずの無い私と陽子の両親が私の家に来てし  
まい鉢合わせになってしまった．．．．．

・・・当然、両親は再び陽子に罵声を浴びせ、たちまち親子喧嘩が始まってしまった・・・

・・・取っ組み合いになるほどの大喧嘩だった・・・

・・・私と真樹さんはその喧嘩を止めようと間に割って入ったが、真樹さんは頬を殴られ、口から血を流していた・・・

幼心にもその事態が響いたのか、鈴奈ちゃんは大声で泣き出した・・・

・・・正直、私も陽子と同じく両親は大嫌いだった・・・

いつも自己中心的・・・子供の頃も両親とも毎日喧嘩ばかりでその八つ当たりで毎日、陽子は両親から酷い暴力を受けていた・・・

その度、私は陽子を庇っていた・・・

そんな酷い事を昔からしていたくせに・・・両親は陽子の結婚が耳に入ったとき猛烈に反対した・・・

・・・そんな両親の姿を見たとき正直、私は憤りを感じた・・・

だから・・・私は両親に言っただけでやった・・・

『・・・あなた達は・・・今まで、陽子に何をしてきたかわかっているんですか・・・？あなた達のエゴのぶつかり合いの



ていった……

……その帰り道で事故が起きた……

酷い事故だった……

ちょうど、交差点のど真ん中で車2台が正面衝突……

車は跡かとも無くグチャグチャに……

……真樹さんは即死だった……

……陽子は……重体……しかし病院で息を引き  
取った……

……鈴奈ちゃんは奇跡的に助かった……

……最後に陽子が私に残した言葉……

『夏子姉さん……あの子……鈴奈の事……  
よろしくね……』





．．．．自然と私の目から温かいものが流れていた．．．．

「．．．．鈴奈ちゃん．．．．」

．．．．鈴奈ちゃんは．．．．これからもずっと．．．．ず  
っと．．．．私が育てる．．．．

陽子の代わりに．．．．

『お母さん』として．．．．

．．．．目を．．．．閉じた．．．．

．．．．

．．．．

．．．．何か．．．．足音が聞こえる．．．．

タン．．．．タン．．．．

タン．．．．タン．．．．

タン．．．．タン．．．．

．．．．

これは．．．．どこから．．．．？

そして……再び目を開くと……

……私の視界に……

向こう側の道路から必死で駆けて来る鈴奈ちゃんの姿がはっきり見えた。

私は躊躇無く、道路に飛び出した。



そして・・・私は・・・

最後に夢を見た。

陽子と真樹さん……そして大きくなった鈴奈ちゃんが笑顔で  
並んでいるの……

私が写真を撮って……けど……陽子に『はやく！  
姉さん！こっち！』と……

……あ……今、行くわ……  
……陽子……



第56話『崩壊』

( 鈴奈視点 )

．．．．．え？コレハ．．．．．ナニ？

ナンデ．．．．．？ナンデ．．．．．？

．．．．．ウソ．．．．．

ナンデ．．．．．？ナンデ．．．．．？

アノヒトオナジコウケイガメノマエニ――？



「うっ……ぶっ」

……目眩がする……

……頭が痛い……

……吐き気がする……

「はぁ……はぁ……うっ……ぶっ」

……気分が悪い……

……胃の中でチクチクチクチクと寄生虫に蝕まれる気分……

……い、痛い……！

「あ……っ！……ああ」

……それに熱い……

……体の内側からバーナーで焼かれている気分……

……熱すぎる……

「……あ……あ……あ」

……世界がグルグルグルと……



「!!!!!!!!!!!!」

その時……私の中の何かが切れた……

（勇輝視点）  
……

鈴奈を見つけるのにそんなに時間はかからなかった……

雨の中、当ても無く街中をさまよっているといつの間にか十字の大きい交差点まで来ていた……

.....

俺が見たものは――――

やけに煩い野次馬と.....

けたたましく鳴り響く車の音と.....

.....

それに負けないほど大声で泣き叫ぶ鈴奈の姿だった.....

「.....鈴奈.....?」

.....ドク.....

嫌な予感がした.....

俺は見てもいいのか.....?

何を言ってる.....

きつと.....きつと.....

.....  
鈴奈はこの雨の中、横断歩道でこけて膝を擦り剥いただけなんだ.....

それで.....泣いてるだけで.....

だ、だから.....

あいつの兄貴の俺が助けてやらなくちゃいけないんだ……  
そうだ……きつと……そうに決まってる……！  
だから……あれ……？俺……？  
なんで……こんな……  
嫌な汗をかいて……？

……

おそるおそると俺はその野次馬の方へと歩き出した……

……あれ？なんで……？だから……？

足が動かないんだ……？

う、動けよ……！俺の足……！

妹を……鈴奈を助けてやらなきゃいけないんだ……！  
俺は……！

あ……ああああ……！！！！！！





．．．．．鈴奈を．．．．．腕で抱きしめてやるんじゃないのか．．．．．？俺．．．．．？

．．．．．なんで．．．．．鈴奈をぶってんだ．．．．．？俺．．．．．？

「．．．．．」

鈴奈は．．．．．ピクリとも動かない．．．．．

俺がぶつた頬は赤く染まっていた．．．．．

「．．．．．す、鈴奈．．．．．」

俺は．．．．．なんて言えばいいんだ．．．．．？

だ、誰か．．．．．誰か．．．．．教えてくれよ．．．．．？

ニコリ．．．．．



「……………え？」

鈴奈は……………その虚ろな目で俺を見つめながら……………

……………笑った……………

……………口元だけ変えて……………

そして……………俺は……………見てしまった……………

鈴奈のすぐ目の前に……………

既に事切れたお袋の姿を……………



## 第57話『虚無』

・・・空は薄暗くなり、日も西の彼方に落ちかけた頃――  
高宮学園の屋上には対面で向き合う制服を着た2人の人間がいた。  
1人は背はそこそこ高く少し筋肉がついた男――でもなぜか  
どこかソワソワしており、その姿からはどちらかという女思わせ  
るような男・・・いや実際、中身は女の子だが。  
そして、もう1人はその男よりも身長が数10cm低い女――  
しかし、風体は堂々としており、しっかり目の前の男の顔を見つ  
めむしろその姿からはどちらかという男を連想させるような・・・  
・・・いや実際、中身は男・・・じゃなくて見たまんまの女だが。

その2人――村上耕司（諸事情で中身は上野夏美）と市本鈴  
奈が向き合って話をしていた・・・

「私はあの日から・・・絶望と後悔という感情を同時に初めて  
味わったんだ・・・」

「あの時、私が逃げ出していなければ・・・」

「あの時、私が母と向き合っていれば・・・」

「あの時、私があとの交差点にいなければ・・・」

「あの時・・・私・・・がっ・・・母の代わりに事故に

遭ってれば……こんなこと……  
……には……っ！」

( 耕司 ( 中身は夏美 ) 視点 )

ボクは下駄箱で転校生の市本鈴奈ちゃん……かな？もうすぐちゃん  
んでいいや そのすぐちゃんからお兄ちゃん宛ての手紙を読んだボ  
クは軽い気持ちで……お兄ちゃんとすぐちゃんの関係が少し  
……ほ、ほんのちよっぴりだよ！？ほんの……ほんのちよ  
っぴり気になつて……自然と屋上へ足を運んだ……けど  
……そこに居たのは……今にも泣き出しそうな顔を  
したすぐちゃんだった……それで……ボクは……  
……ボクはすぐちゃんの過去を聞いてしまった……  
……知ってしまった……『幼馴染の村上耕司』として……  
ボクは……ボクが決して聞いちゃいけない話だった……  
……だって……ボクは何も……『できないから』。ボクは……  
……なんて……なんて取り返しのつかないことを  
ことをしてしまっただろう……軽い気持ちで行くんじゃ  
なかった……なんて……やつぱりボクは……  
バカだな……お兄ちゃんに言っちゃえばよかった……  
分かっていた事なんだけど……でも……  
……？……あれ？……なんで……ボク……  
お兄ちゃんにこの事を……言わなかったんだろう……  
？……わからないけど……とにかくこの話はお兄ちゃん  
に絶対聞いてもらわなきゃいけなかったんだ……！……お  
兄ちゃん……ごめん……ね……けど

「……ボクはこの話に全然無関係なんだけど……だけ  
ど……なんだか……すずちゃんの気持ちか……  
……少し分かった気がするんだ……ぐすっ

「……？耕司？お、おい！耕司！？ど、どうしたんだ！？お前！  
？いきなり泣き出して……？」

「……だって……だって、だって……そんな  
の……そんなの！つらいよ……辛過ぎるよ……  
……そんなの……ひっく……ひっく……」

だからボクは涙を出さずにはいらなかった……

「お前は……昔より随分、女々しくなったな……  
ふふっ、でもどこことなく昔よりひとまわり大きくなった気がするぞ……  
……そうだな……だから私は少し変わったお前にす  
ぐに声をかけられなかったんだ……身長もあつという間に  
私を抜かしおつて……あの頃は同じくらいだったのにな……  
……ふふっ、本当に懐かしいな。こうしてお前と話すのも」

「ごめんね……すずちゃん……ボクはお兄ちゃんであ  
つてお兄ちゃんじゃないんだよ……」

「……けどな、そうやってお前が泣いてくれると……  
……なんだか嬉しいな……」

「それだけじゃない……お前は……私をそのど  
ん底から救い出してくれたんだからな……」

「……え？」

「あの事故の日から私は狂ってしまった．．．．．絶望と後悔と  
いう名の感情に押しつぶされて．．．．．」

当然、兄貴の勇輝も同じだ．．．．．私と同じように狂ってしま  
った．．．．．あれから家に引きこもり．．．．．部屋  
から一步も出なくなった．．．．．私もそうだ．．．．．もう．  
．．．．．何も考えなくなかったんだ．．．．．いつその事．．．  
．．．私は兄貴に責めて欲しかった．．．．．『お前のせいで母  
さんは死んだんだ!』とな．．．．．けれど．．．．．もう、  
兄貴はあれから一言も．．．

何も私に言わなかった．．．．．それはまるで．．．．．人形の  
ように．．．．．ただ、生きていたんだ」

．．．．．ボクには想像もつかない世界．．．．．でもそれはきつ  
と誰かに怒られたり殴られたりするよりも辛いことなのかな．．．  
．．．

「本当に．．．．．あの後は目の前が真っ暗だったんだ．．．  
．．．私も兄貴も．．．．．ただ日々を．．

．．．．．『無意味』な日々を．．．．．無気力に．．．．．虚  
無の日々を送っていたんだ．．．．．」

．．．．．人は．．．．．日々に．．．．．どこかで楽しみを見つけて．  
．．．．．過ごしていく生き物．．．．．けれど．．．．．その楽しみも  
見つけず．．．．．ただ、生きていたら．．．．．行き着く先  
は当然．．．．．

「．．．．．もちろん．．．．．私は何度も自殺を考えたさ．．．  
．．．けれど．．．．．出来なかった」

「．．．．．ある日、カッターで自分の指先を切って見たんだ．．

・・・自傷だ・・・その指先からは・・・血が噴出して  
いたんだ・・・その時、私は・・・ゾツとした・・・  
・・・だって・・・その色は・・・母のあの時の・・・  
・・・あの時の色と一緒にだったんだ・・・私は・・・それ  
から怖くてその色が見れなくなった・・・だから自殺も出来  
なかつたんだ・・・」

それは・・・一種のトラウマ・・・かな・・・  
「・・・私は何もかも怖くなった・・・けれど・・・  
・・・ある日、ある公園に行つたんだ・・・  
・・・その公園は今まで兄貴と遊んでいた場所・・・夕方になつ  
たらいつも母が迎えに来てくれた場所・・・

・・・なぜか・・・その場所に来ていた・・・ずっと  
・・・何をするわけでもなく・・・  
砂場の穴をシャベルで掘っていた・・・何度も何度も同じ場  
所を・・・」

傍から見ていた人はどう感じたんだろう・・・異常な光景に  
見えたに違いない・・・

「・・・そして・・・いつの間にか私は毎日、その公園に来  
ては穴を掘っていた・・・雨の日も風の日も・・・ず  
っと穴を掘り続けていたんだ・・・何度も死にそうになっ  
たよ・・・それを望んでいた私だったが・・・

・・・だって、止めてくれる人はいなかったんだからな・・・  
だからある日からずっと公園にいるようになった・・・朝か  
ら晩までずっと同じ作業を続け・・・お腹がすいたら水でお  
腹を膨らませ・・・

・・・夜は寒い中でベンチで横になって睡眠・・・そんな事  
の繰り返しだったさ・・・」

・・・きつと・・・家に戻りたくなかつたんだよね・・・  
・・・

「・・・それだけじゃない・・・そんな異常な私がある日、

子供連れの親が見ていてな……私がふとそちらに目を向けると……逃げていくんだ……」

「……きつと……自分のお母さんと重ね合わせたんだろうね……」

「……自然と……涙が溢れてきた……感情を持ち合わせていなかった私に涙……」

「は……こんな事……おかしいだろ……？」

「……おかしくなんかない……」

「……もう……これで私もおしまいだと思った……これで……やっと……やっと……」

「……解放される……そう思っていた私の元に……」

「ある日、お前がやって来た……」

「……ねえ、こんなところでなにしてるの？」

「……ぶらんこ」

キー……キー……

ブランコを動かす音が空しく響く……

「……ねえ、誰かと遊ばないの？」

「……いない」

「……ねえ、だったら僕と遊ばない？」

「……え？」



『僕の名前はむらかみこうじ。君の名前はなに？』

『……いちかわすずな』

『ん、じゃあすずちゃん！向こうで砂遊びしよ！』

『わっ……』

それが耕司と鈴奈の最初の出会いだった――

第58話『共有』

「私は最初はそいつ……つまりお前のことが嫌いだった」

「あの頃、何もかも失った私にとってお前から出てくる言葉全てうつとおしかった」

「それだけじゃない……私はあの二度目の事故からこう思うようになった……『私に関わった人は皆、不幸が訪れる……私はずっとただの疫病神だ……』とな……」

「だから、あの頃の私はお前と馴れ合いたくなかったんだ……私に関わったせいでもう……誰かが傷つくのを見たくなかったんだ……血が……あの色はもう、二度と……」

「だから……」

「すずちゃん……ボクは……何も……何もしてあげられないの？」

「お兄ちゃん……私、どうすればいいのかな？……わからないよ……わかんない……」

「……鈴ちゃんの苦しみを分かち合う事ができるのは……お兄ちゃんだけでよ……」

「部外者の……私には何も……何も出来ないよ……」

『びんご』

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
だ、誰？

『だってあなたは今、コージ君と表裏一体なのだから』

．．．．．ボクの頭の中から響いてくるこの声．．．．．  
．聞いた事の無い声．．．．．  
．．．．．そして、目を開けると．．．．．

ザ．．．．．ザザザ．．．．．ザザザ．．．．．  
『．．．．．』

透き通った『青』の海が一面に広がっていた．．．．．

『．．．．．気がついた？夏美ちゃん？』

．．．．．そして、その海をバックにボクの目の前には白いワンピース姿のボクと同じくらいの歳の女の子が立っていた。容姿はボクより身長が少し高く、目の前に広がる海のように透き通った青色のロングの髪形の子だ。

『．．．．．誰？なんでボクの名前．．．．．』  
すると、その微笑み．．．．．

『．．．．．へえ）あなたがコージ君の．．．．．』  
．．．．．？

『．．．．．えつと？』

ボクが少し困ったような顔をするとその女の子は慌てて．．．．．  
『．．．．．あ、ごめんなさいね．．．．．つい、昔の事を思い出してね．．．．．』

．．．．．？意味がわかんないんですけど．．．．．？

『．．．．．えつと、とりあえずここはどこなんですか？』

今、1番気になる事を聞いてみた。

『……この海は』

そしてその女の子は雲ひとつ無い空を見上げ……

『……？今度は砂浜から海の中へ移動し……足首くらいのところまで浸かり……』

『……ねえ、夏美ちゃん。……この海ってなんだと思う？』

『……え？それは……』

『……この海はね、いわゆる……『メモリー』のようなものなの』

『……メモリー？……え？え？え？』

『……『メモリー』は『記憶』、『思い出』のこと……その『入れ物』がこの海なの』

『……今いち、この子の言っている意味がわからない……けど、なにか……』

『……だから、この海に入るとね……その人の『記憶』や『思い出』を共有できるの』

『……その人って……か想像つくよね？夏美ちゃん』

『……お兄ちゃんのこと……』

『……そう、この『海』はコージ君のもの……だから、今私はコージ君の『記憶』や『思い出』を共有する事ができるの。』

『……む。』

『……？……うふふ、あらあら嫉妬しちゃったかしら？』

『ごめんね……そんなに睨まないで。心配しなくても『あなた』のコージ君は取らないわよ。……だって私はもう二度とあの』

人の傍にいられないから……」

……？

「……話を戻すね。今も言ったようにこの『海』には耕司君の『全て』が詰まっているの……だから……」

「……ボクがその『海』に入ればいいんだね？」

「……そう、そうすれば……」

「……お兄ちゃんとボクの心が元どおりになるんだね？」

「……ご名答……やっぱり、あなたはコージ君のことを……」

ボクはとっくにその海に向かって走っていた。

けれど……太陽光で熱くなった砂浜を裸足で走るのはちよ

つと辛い……けれど、今はそんな事を言ってもらえない……

……早く……早く……早く！

「……はあ、はあ……お兄ちゃん……」

っ！

「……けど、なんだろう？……なんでこんなに……胸が苦しいんだろう？……どうして？」

「……お兄ちゃん！」

そして……

ザバアアアアン！！！！！！！！！！

「はあ……はあ……？」

「……あれ？なんで？」

「……夏美ちゃん、ひとつ言い忘れていた事があるんだけど……」

……」

『はあ．．．はあ．．．？．．．え？』

『．．．この広い『海』はね．．．『メモリー』なの．．．』

『．．．それ、さっき言ってたよね？』

『．．．どついう．．．』

『．．．？』

『．．．『メモリー』．．．『記憶』、『思い出』．．．』

『．．．』

『．．．まさか．．．』

『．．．『メモリー』は全ての『記憶』、『思い出』の言つな

れば．．．『器』．．．これがどついう意味分かる？』

『．．．』

『．．．それは．．．この『海』のどこかにある記憶の断

片<sup>1</sup>．．．』

つまり．．．探さなくちゃ．．．！お兄ちゃんとすず

ちゃんの『思い出』を．．．！

『．．．つまり、夏美ちゃんもそのコージ君と鈴ちゃんの大

切な『思い出』を『共有』しなくちゃいけないんだよ？．．．』

夏美ちゃん、あなたにその覚悟が．．．ある？』

『無いわけないよ！！！！！』

バシャ！バシャ！

そして、ボクはこの『海』から必ず探し出す．．．『記憶の

断片』を！！！

『……………コージ君……………』

そして、砂浜に1人残った白いワンピース姿の女の子はかつての思  
い人の『海』をいつまでも見つめていた……………



番外編その12『ロリータは好き?』（前書き）

シリアスな話が続いているので箸休めにコメディ書きました・・・  
・短い上になんか消化不良ですけどね・・・（汗）気軽に読んで頂けると幸いです。

番外編その12 『ロリータは好き?』

「ロロロロロリたん！ロリたん！ロリたん！ロリたん！ロリたん！  
ロリたん！ロリたん！」「」「」  
「……何、この世界?（汗）……」

「……昼休み。いつものようにメシにがつつき、特にする事も無かつたのでスリーピングをしていた。」

「……今日は小春日和か……すんげえ、気持ち良い……  
……と心地よい気分誘われなが夢の世界へ旅立とうとしたその時……悲劇が起きた……」

『3年A組村上耕司君、3年A組村上耕司君、至急連絡したいことがありますので体育館の方に来てください。もう一度繰りか（リピート）』

「……なんで体育館?（汗）  
……そして一行目に戻ろう、諸君。」

「ロロロロロリたん！ロリたん！ロリたん！ロリたん！ロリたん！  
ロリたん！ロリたん！」「」「」  
「俺が体育館に入ると……まさに地獄絵図だった……  
中には……むっさくるしい男！男！男！男！漢！」

放たれる……熱気！熱気！熱気！熱気！  
飛び散る……汗！汗！汗！汗！  
そしてワケのわからない『ロリたん！』『幼女』などという俗語を  
まるでどこかのサポーターのごとく皆、叫んでいる……ど  
うだ？これが地獄絵図と言わずなんと見える？  
……そして、体育館の舞台上でリーダーのごとく指揮をとっ  
ているのは……

「幼女！幼女！幼女！幼女！幼女！幼女！幼女！幼女！幼女！幼女！  
！幼女！幼女！幼女！幼女！幼女！」

「幼女幼女、うるせえよ！！！！メガネマン！！！！」  
バキッ！！！！」

「あびよぼふ！！！！」

舞台の上にいるメガネを思いつきりぶん殴った。

「な、何をするんだ！？耕司キョン！？ちよ、ちよつと気持ちよか  
つたあじゃないか！！（ノノノ）」

……なんでこのメガネちよつと嬉しそうなの？

「……で？なんだ？この集会？……なるほど……そ  
うか、あの呼び出しの放送はお前の仕業だったのか……で  
？吐けや？メガネ？場合によつちやあ、半殺しで許してやらんこと  
も無い」

ちよつと睨みをきかして脅してみた。

「は……はうん……（ノノノ）そ、そんな刺激的な目で  
僕を視姦しないでくれよ……耕司キョン……はあは  
あ……ひいひい……ウフフ（ノノノ）」  
だから、なんでコイツは嬉しそうなんだ。

「それは俺が説明しよう」

そして新たに舞台の上に現れたのは……

「ファンシー野郎!? なんで貴様がここにいる!? (汗)」

前田鉄二、通称ふあんしーお兄さん (第14話参照) だった!!!

「近年、話題となっている少子高齢化社会……ご存知かな、村上君?」

「無視かよ」

「子供の人数が減少し、お年寄りの方々が増加の一步を辿る……  
・なんと嘆かわしい事かな」

「……提督……!!! ファイトおおおおお  
おおおおお!!!」

提督!? (汗)

「そこで……我々はこの由々しき事態に対応するために今!  
ここに誓おう!!! 幼女万歳!!! ロリコン万歳!!! ペチャパイ  
万歳!!!」

あれ!? 途中までまともな話だったのに、途中から己の欲望じみた  
意見みたいになつとる!!! (汗)

「……うおおおおおおお  
おおお!!!」

なんかテンション上がりおった!!!!

「これで分かつただろう!? 我々の目的が!!! さあ!!! 共に歩  
もう!!! 耕司キョン!!!」

「……いや、これっぽっちも分からんが……  
というか、分かりたくない。」

そして集会（？）が終わり、教室に戻った……。

「さて、休んでいる暇はないぞ？耕司キユン？我々の目的には莫大な金と時間がかかる」

「だから、その目的が分からんのだが……」

「ふむ……では作戦開始だっ！！！耕司キユン！！！」

「聞けよ」

「……で？何すんだ？」

「校内の女の子全員にロリロリになってもらおうのさ」

「何言ってるの？お前？」

「ふむ……具体的にはだな……まず、この赤ブルマを着用してもらう」

メガネは俺の目の前に赤ブルマを大量に出した。

「では、さっそく……」

「ちよつと待て。お前、どこでこの数のブルマを手に入れた？」

「ふむ……おっ、ちよつどいい！あそこに見知った顔がいるじゃないか！」

「だから聞けよ」

「アリスた〜くん ちよつと、いいかい？」

「……おい、メガネ……何も初っ端から逝き急ぐ事はないだろ……？」



害を被ったじゃあねえか」

「……ふむ、相手を間違えたようだ……今度から気をつけよう」

今頃、気付くなよ……(汗)」

はあ……なんでこんな目に……(泣)

「よし、耕司キユン。今度はおとなしそうな子を選ぼう……そう、どんな事しても抵抗されないような……ハアハア、やっばい……生まれたままの姿をした少女をイスに縛り付けたシチュエーションを想像すると……なんか立ってきたよ……僕……ウフフ、プピピ(ノノ)」

「思っている事をあんまりそのまんま口にしないほうがいいよ、お前。なんか軽く犯罪っぽいから」

そして……！これから俺達の本当の戦いが始まる！頑張れ！村上耕司！頑張れ！メガネ沢！あの夕日に向かって明日を駆け抜けろ！(つづく)

「(耕司)「(つづくな)……」(汗)」



第59話『届かない声』(前書き)

更新遅れてすみません！(汗)

## 第59話『届かない声』

流れ込むーーーー淀みなく  
流れ込むーーーー溢れ返る  
流れ込むーーーーそして、崩れていく

お兄ちゃんの『記憶』という名の『海』をがむしゃらに泳ぎ続けて  
どのくらい経っただろうか……

泳げば泳ぐほどボクの身体、精神に流れ込むお兄ちゃんの『記憶』

……『過去』……

……ボクは形容しがたい苦しみを味わった……

頭が割れそうに痛い……痛い、痛い、痛い、イタイ、イタイ、イ

タイ……

これが……これがお兄ちゃんが今まで辿ってきた道……

こんな……こんな……

……

無理……ボクが……ボクがお兄ちゃんの『記憶』を『共有』出  
来るわけが無い……

……

……考えてみれば分かりきった事だった……

『過去』に味わったお兄ちゃんの過ち……苦しみ……後悔……そんなお兄  
ちゃんにしか分からない苦痛を赤の他人であるボクが簡単に分かる  
わけが無い……

たとえ、分かった気でいてもそれはお兄ちゃんの心の中に土足でズ  
カズカと踏み込むのと同じ……

最低だ……

いや……すでにボクは最低な事を……お兄ちゃんの『全て』を知ってしまった……

鈴ちゃんの事……雪美ちゃんって言う子の事……

……

『……つまり、夏美ちゃんもそのコージ君と鈴ちゃんの大切な『思い出』を『共有』しなくちゃいけないんだよ？…夏美ちゃん、あなたにその覚悟が……ある？』

……  
やっぱりあの子の言うとおりだった……

ボクには荷が重過ぎる……できない、できないよお兄ちゃん……

ああ、ダメだ……意識が飛びそう……辛い、熱い、苦しい、吐き気がする……

……  
いっぺんにお兄ちゃんの『記憶』が流れてきたから……

……  
でも、ボクにはどうする事もできない……

助けてあげること……一緒に過去の『重荷』を背負っていく事も……

……

ああ、もう……ここにいたくない……

ごめんね……お兄ちゃん…  
ボク……

……  
とうにボクは泳ぐのを止めた。

事実上、お兄ちゃんと鈴ちゃんを救う事を諦めたのだ。

……  
分かってる、自分の中では……

お兄ちゃんを過去の苦しみから解放させてあげる事……

ボクとお兄ちゃんの心が入れ替わっているから……お兄ちゃんと  
鈴ちゃんを本当の意味での『再会』をさせてあげる事……

……  
だけど……

ボクはソレを拒絶している、否定している、受け入れられない。

最初は……この『海』が持つ、苦しみをボクが耐えられないだけ  
だと思っただけ……

……それだけじゃなかった……違う。

ボクは今、はつきりと分かった……別の苦しみがあるっていうこ  
とを。

お兄ちゃんと鈴ちゃん……2人が一緒に笑いあう姿を想像してし  
まう……

『……っ』  
ダメ……ッ！そんなの……嫌っ！

絶えられない……ボクが……そんなの……この今、味わって  
いる苦しみの比にならないくらい辛い……

分かっている……その考えがどれだけ身勝手な事であるか……  
我儘なことであるか……

……  
だけど……分かってしまった自分の気持ちに嘘はつけない……

……  
ああ、早く楽になりたい……

早く解放されたい……この……限りなく広くて深い『海』から

……  
ごめんね……お兄ちゃん、ボク何もできないけど……

……  
お兄ちゃん……大好き……

『……やっぱり、あなたには無理だったみたいね……』

『……本当にあなた2年前の私とそっくりね……』

『……自分では何をするべきか分かってはいるけど、つい自分の気持ちを最優先してしまうところ……』

『……本当にそっくり……まるで双子のよう……』

『……だから、あなたのその気持ちは痛いほど私にもよく分かる……  
……けどね』

『それじゃあ、結局誰も救えない、幸せになれない』

『友人も……家族も……想い人も……』

『自分自身も……ね』

『あなたはもうとっくに分かっているでしょう？私の事』

『コージ君の記憶の『海』を泳いでいたから……過去に私とコージ君の間で何があったかを』

『……私は自分の気持ちを最優先して拳句の果てには……勝手に一人で死んだ馬鹿な子……』

『だからこんなところにいるのもおかしい話なのだけど……』

『……コージ君は記憶の片隅でまだ私の事を忘れていないから  
……』

『……私はこんな事全然、望んでいなかったけれどね……』

『……けど今、こうやってあなたに『忠告』できる……』

『……このままじゃ、あなたは確実に私と同じ末路を辿ることにな  
る……』



『……けど、安心して……コージ君とあなたは……元の身体に戻る』

『コージ君とあなたは……ね』

『これがどういう意味かあなたには分かる？……あなたには分からないでしょっね』

『じゃあ、ひとつコメントをあげる……』

『2年前……死んだのは私1人だけ……本当にそう思う？』

『……話はそれだけ。できればあなたには私と同じ後悔をして欲しくなかったのだけれど』

『……もう、時間ね。バイバイ……夏美ちゃん』

『最後に……せめて私と違う未来でありますように……』

( 耕司視点 )

「……………あれ？」

目を覚ますと……………いつの間にか屋上に俺はいた。

「……………なんで俺こんなところで『1人』でいるんだ？」

……………うゝむ、思い出せん……………つい、気持ちよかったから屋上で寝てしまったとか？

「……………わからん」

ふと空を見上げるとすでに空色は黒かった。

「……………つて、もう夜じゃねえか！！！！やっべ！！！！早く帰らねえとー！！！！」

寮の門限破つたら千里さんこええもんな……………竹刀でケツ100回叩かれるとか情けなくてしゃーねえもんな……………しかも叩いている最中もニコニコ笑顔なんだぜ？千里さん。……………なんか変な気分になつちまうじゃねえか……………はあはあ……………

「……………つて、そんな事言ってる場合じゃなかったな」  
早く帰らねえと。

……………？なんか大切な事を忘れているような気が……………

それに、なんかこの掌に残った『温かみ』はなんだろうな？

……ま、いつか。

( 夏美視点 )

ボクは目を覚ますとなぜか教室にいた。

「…………百合、起きたよ、夏」

「え？本当ですか！？ミンちゃん！？あ！やっと、起きたんですね  
夏ちゃん」

「…………ん、2人とも待つてくれたんだ……………ありがとうね」

「当たり前ですよ！だって私達は『友達』じゃないですか！」

「友達……………うん、そうだね」

何か引つかかる気がするけど……………なんでだろ？

「そのまま、目が覚めると1人真っ暗な教室に……………！ってのも面白  
いかもね」

「アリスちゃん、意地悪ですよ」

「アリスちゃんも残っていてくれたんだね、ありがとね」

「え？いいわよ、それくらい。私、今まで部活してて教室に明かり  
がついていたからたまたま覗きに来ただけなんだから」

アリスちゃんを見ると格好は制服だったけど竹刀を持っていた。

「……………アリスちゃん、剣道部の部員増えたんだよね？」

「……………は？何言ってるのよ？今までどうり私と麗奈さんしかいないわよ？」

……………あれ？ボクなんでそんな事聞いたんだろ？

「部員2人で部活が成立するってのもすごいですよ……………」

「え？だって、麗奈さんのお祖母さんがこの学園の理事長でしょ？なんでもありよ」

「でも……………顧問がないんじゃない？」

「教頭になってもらったわよ」

「……………なんだか激しく暴力の匂いがプンプン漂うんですが（汗）」

「やくね〜別に嫌がる教頭を脅したりとかしてないから」

「したんですねっ！？（汗）」

「失礼ね。嫌そうな顔をした教頭の髪をちよつとむしりとっただけよ。そしたら、素敵な笑顔で顧問になつてくれるのを了承してくれ  
たわよ」

「充分酷いような気がします……………（汗）」

「……………百合、お腹……………すいた」

「あ……………そうですね。夏ちゃんも起きたし皆で帰りましょうか。……………」

……………門限破りは……………千里さんのアレが待ってますからね……………あ、あ……………」

……………思い出したら寒気がしてきました」

「……………ぶるぶる」（ミント）

「……………（汗）」（アリス）

あ、あれ？皆、急に顔が青白くなっちゃったけど……………どうしたんだろう？（汗）

……何か大切な事を忘れていているような気がするけど……

……

『耕司……耕司っ！……耕司い……耕司い……』

「……？みんな今なんか言った？」

「え？何も言っていないわよ？」

「……言っていないよ」

「私も言ってますが……気のせいじゃないですか？」

……そうなのかな？

……

…

( ????)

………そして、1人の少女は永遠にその少年を守る事ができませんでした……と。

フッフ………結末は『届かない声』………ですか。

さて、次はどのようなお話を彼女達は紡いでくれるのでしょうか？

この……狂った世界で。



第59話『届かない声』（後書き）

とりあえず、鈴奈編終了です。いかがだったでしょうか？どんな事でもいいので、できれば感想をお待ちしております。次回からはまたコメディが続きます。……なんか最近シリアスばっか書いているような気がします（汗）

第60話『基本的に時間軸とか無視しちゃってます、この小説』(前書き)

学園祭編スタートです…サブタイでも言ってますが基本的に時間軸無視してます。

第60話『基本的に時間軸とか無視しちゃってます、この小説』

「さて！んじゃあ、そろそろ2週間後に差し迫った毎年恒例の我が校の学園祭について話し合ってもらおうかやあ〜」

いつものHRで我が自称担任である麻美様からそんな発言が飛び出しました。

「学園祭ねえ……………」

普通はそこで誰もがひゃっほー！うー！とか奇声を上げながら悦ぶところなんだが……………どうも、あまり学園祭にはいい思い出がねえんだよな……………俺。

「お兄ちゃん？どうしたの？あんまり浮かない顔してるね？学園祭だよ？ウキウキするねっ……………」

「……………なあ、学園祭って具体的には何すんの？うちの学校？」

「え〜っと……………1クラスにひとつ出し物をするの！それと、部活の人達は学園の中庭で屋台を出してるの！」

へえ……………意外と普通じゃん。

「きゃっほ……………う……………！」

ぬぎぬぎ

するとなぜかいきなり服を脱ぎだすメガネ（バカ）……………

「何……………やってんの……………！」

バキッ

「あへあ……………！」

そしてアリスさんの蹴りを急所に喰らうメガネ……………色々ときめきすぎだろ……………メガネ。

「なんだ耕司、お前テンションあがらねえのか？」

そして、エテ公（慎也）が声を掛けてきた。

「別に……………勝手にやってくれて感じ？」

「なんだよ、お前そんなに消極的な奴だったか？甘ちゃんだなーオイ。そんなこと言う奴には今度から『ストロベリー村上』って呼ぶ

ぞ？コラア？」

「そんなワケの分からないあだ名で呼ぶのは止めてくれ……」

「うるせえ、ストロベリー」

プツン

「黙れ、『パイナップル赤神』」

「なんだと！ストロベリー」

「貴様つ、パイナップル！」

「ストロベリー！」

「パイナップル！」

「ストちゃん」

「パイちゃん」

「ストちゃん……………（／／／）」

「パイちゃん……………（／／／）」

「何キモイ会話してんのよ……………あんたら」

変な気分になりかけた頃、いきなりアリスさんが俺達に声を掛けてきた……………

「まあまあ……………アリスちゃん……………僕はストちゃんもパイちゃんも甘くて好きだがどちらかというと赤く熟れたかわいらしい実がプリツプリとしたストちゃんの方が断然お勧めだなあ……………じゅるり、くひひ（／／／）」

そしてメガネも降臨。なぜかすんげえ寒気がするのは俺の気のせい  
いか？

「私に近づくなキモイ」

ドガス！

「ぐへ」

そしてアリスさんに一蹴されたメガネ君。すげえ……………過去最高に早い攻撃だ……………アリスさん。

「…で？アリスちゃんが俺達に声かけるなんて珍しいな。何か用？」  
サルがアリスさんに尋ねる。すると、アリスさんはなぜかぶすつとした顔で……………

「あんたら、このクラスの学園祭の実行委員になっってもらっわよ」  
「へ？」  
「へ？」  
「なんですと？」

「「なんで？なんでなんで？」」

「いちいち八モらないで。キモイわ」

「「ちよっ……待って？待って待って？」」

「次、それやったらコロナわよ？」

「「ゴミンナサイ……（汗）」」

いや……だからなんでいきなりんなことを？

「私だって……本当はあんたらにも協力してもらっなんて気が滅入っ  
てんのよ……はあ……なんてあの子はこんな社会のゴミみたいな奴らに……はあ……」

いや……すごい言われようだな……俺達（汗）

「……？その言い方だとアリスちゃんも実行委員なのか？」

「そうよ、無理矢理だけどね」

……無理矢理？

「とりあえず、今日の放課後さっそく学園祭の企画会議するからこの教室に2人とも残ってて」

「……本当にいいのか？アリスちゃん？実行委員はお前と俺ら2人の計3人……つまり比率で言えば女：男＝1：2ってわけだ……この密室の教室で……へへ、これが何を意味するかわかってんのかよ」

パチン……！！

「じゃあ、放課後」

そしてアリスさんはそそくさと教室を出て行く……

「……………」  
「お前、命知らずな」  
サルの紅葉形に腫れ上がった頬を見て思う…………… ああ、こいつもあのメガネと同類頂だなあ……………」と。  
「インダヨ……………」これで。いつかこの傷が男の勲章となる日が必ずやってくる俺は……………」そう信じているんだ」  
「いや、言ってる意味わかんねえから」

そして…………… 放課後。

「……………」あれ？なんで君もいるの？めっがーね君？」  
「そうだよ？アリスさんに呼ばれたのは俺とストロベリー君だけだよ？ダヨ？」  
「いやサル君、いい加減そのあだ名やめてヨ」  
教室でじつと獲物を狙うかの用にギラギラした眼（？）で待っているとなぜかメガネ様英男も教室に残っていた。  
「ふむ……………」どうやら君達はアリスさんに呼ばれたみたいだね……………」  
？

「お前、アリスさんじゃくて他の奴に呼ばれたのか？」  
「ああ……………」アレは綺麗な子だったね……………」思わず食べちゃいそうだったよ……………」でも残念……………」僕は12歳以上は対象外なんだよ……………」あれが少女だったら、まずトイレに連れ込んでこよう……………」ガブツと……………」もみもみっと……………」  
「ストト……………」めっがーね君、そろそろ止めよう変態談話」  
危ない危ない……………」  
「じゃあ、実行委員つーのはまだいんのか？」  
「そうみたいだな。とりあえず、めっがーね君の話から推測するに

女の子みたいだな」

「へえ〜…………じゃあ、期待…………してていいんだよな？耕司…………

…（／／／）」

「そこでなぜ俺に熱い視線を送る…………（汗）」

そして俺達は期待と不安と欲望（？）を胸に抱き他の実行委員が来るのを教室でじっと待っていた…………

…………でも、なんで俺達がこのクラスの実行委員に選ばれたんだろうな？

ワケワカメ…………

## 第61話 『性質の悪い妄想はダメ、絶対』

そして、教室という名の密閉空間でソワソワドキドキしながら他の実行委員が来るのを待つ俺とサル（慎也）とメガネ（英男）……なんか嫌な構図だ……（汗）

「……で？その実行委員の女の子ってどんな子だったんだ？メガネ」  
そして、サルはメガネに問う。コイツ……落とす気満々だな。

「ふむ……か、かぁいいぞ（ノノノ）」

なぜ、そこで照れる……（汗）

「イヤ……もつと具体的な特徴とかねえのかよ……例えば胸がでえとか尻がでえとか胸がでえとか胸がでえとか胸がでえとか胸がでえとか胸がでえとか」

サル、てめえは胸フェチか。

「ふむ……そうだな、彼女の事を一言で表すならば『ワオ！ハト豆ズッキューーン！』ってな感じだな」

ますます意味不明だメガネ。

「ほう、なるほどザワールド」

今ので通じたのか……サル。

「うむ、彼女と会えばここもズッキューーン！とくるのも間違い無しだ」

ギョッ

「とか言いながらブツを握るな、メガネ。そして、何、興奮してんだメガネ」

そこをモコモコさせるな、コラ。



「遅いな……」

「忘れてんじゃあねえのか？アリスさん」

もう、すでにあれから1時間待っている俺とサルとメガネ……この状況が続くのは何気に嫌なんだが。

「なあ……耕司？俺達、もしかして気い遣って貰ってんじゃあねえのか？」

「何にだよ」

「いや……ほら？こんなに待たされるとなんか変な気分になるじゃん？」

「ならねえよ」

どんなプレイだそれは。

「ふむ……サル君の言いたい事もよく分かる。何だかついここがズッキュー……ン！と来ちゃうよね、うんうん」

「何故」

「いや……ほら！アリスちゃんって普段ツンツンしてるじゃん？でも、あれがエロゲーの攻略キャラだと仮定して見るよ！そしてアリスちゃんルートのクライマックス……ベットの上でだな……」

……

（これは全てサル君とメガネ君の妄想です。真に受けないでね）  
『アリス……本当に俺なんかで……いいのか？』

『ふん……ふん！いいって言ってるでしょ！？普段、ヘタレのあ、あんななんか心配される謂れなんか無いわよ！そ、その元気なブツを早く私に入れちゃいなさいよ！』(ノノノ)

『アリス……………』

『な、何よ……その顔は……い、良いつて……で……でしょ！？そ、それとも何？あんだここまで来てやっぱり止めるとか言い出すんじゃないでしょうね……………』

『……………』

『……な、何とか言いなさいよ(ノノノ)』

『……………』

『……………』(ノノノ)は、早い、言えよう……………(ノノノ)』

『俺に焦らされ焦って赤くなるアリスかあい(ノノノ)』

『な……………！(ノノノ)』

『ははっ、照れてるアリスは本当にかあいいなあ……………』

『……………！(ノノノ)』

『ははは……………もちろん……………最初はキス……………からだよね？アリス？』

『あ……………うん(ノノノ)』

『……………ん』

(素敵な妄想終了)

「くあ……………！！！！！！………たまんね……………！！！！！！………」

「……お前らの想像力は神並みだよな」  
本当に色んな意味で畏れ入ったよ、サル、メガネ、お前ら天才。  
そして、服を脱ごうとするな、コラ。  
「まあ、ハッピーな気分には浸っているところ悪いんだが、実は本人がお前らの真後ろにいるわけなんだが」  
鬼のような形相をしたアリスさんがメガネとサルの真後ろに仁王立ちしていた。  
な〜む〜

「じゃあ、始めるわよ」  
こうしてようやく始まったクラス実行委員会……おいおい素敵なメイクだな、サル、メガネ。

「こ、今回はマジでし、死ぬかと思ったよ……」  
あれだけポコポコに殴られて死ななかったお前に既に俺はびつくらこんだよ。

「し、しかしだな……色々と得たモンがあったよなあ……なあ？  
メガネ？」

「ああ……そうだな、サル君」

「はあ？何を？」

「……痛みを通り越したその先に素敵な楽園……そう、シスターが我々に『苦痛』という名の喜びを与えてくださったのさ」

「……」  
「……ああ、今、思い出しただけでもゾクゾクするぜえ〜〜〜  
〜〜〜くう〜〜〜はあ〜〜〜」

「……ダメだぜ、コイツラ！ますます変態に磨きがかかっているぜ！  
「そこ〜うるさい〜」

ひゅん！

グサ！

グサ！

グサ！

……額にアリスさんが投げたチョークが突き刺さる………なんで俺まで。

……てか、チョークって突き刺さるものなのか。

「そっいえばアリスタン。もう1人のかぁいい実行委員タンはどこにいるのだ？」

メガネがアリスさんに問う……

「そうだ！そうだー！早くもう1人の実行委員の女の子をだせー！早くしないと喰っちゃうぞ〜コラ〜」

バキッ

「あふう！」

サル……お前だけはまだましな男友達だと思っただが………ついに真正銘メガネと同属に……  
仕方ない、俺が普通に聞いてみるか。

「おい、アリス。そのメガネから聞いた話だがもう1人、うちのクラスに実行委員いるんだろ？」

「………」

……おい、なぜそこで急に不機嫌な顔になる………アリス。

「……さつきからあなたの後ろにいるわよ」

……後ろ？

振り返ろうとすると……

「だーれだ」

いきなり目の前が真っ暗に……「J」の声はまたか……

……って、もう終わりかよ。

## 第62話『コードネームは大切に』

この声は……ま、まさか……

「あ……あなたは……か、会長!？」

「んっふっふっふ……」

……この子供っぽい声……絶対そうだ、間違いない!

「……ふう……」

「おほお!？」

目隠しされた状態でいきなり俺の耳の穴にと、吐息が……(ノノノ)

「ま、麻里さん……(ノノノ)や、やめてください。い、いきなり

こんな……変態プレイ……(ノノノ)」

「……ふうん 何?耕司君はこんなのが好きなのかな?ふう……

……」

「あ、あふう!?(ノノノ)」

や、やばい!……!こ、こんな……いつまでも耐えられへんぞ!?

つてなんで俺、関西弁になつてんだ!?

「ほら……お姉さんの……生暖かい吐息は……気持ち良いかね?

ふう……」

「あ……く……あ……あ(ノノノ)」

も、もう……もう……だ、だめ……

「ふふふ じゃあ、トドメに甘噛……」

「はい、ストップ。そこまで」

バキッ!

「にゃふ!？」

ドガス!……メタア!……!

「ほげ!？」

いきなりアリスさんに会長と俺は殴られた……なんで俺まで。

というか、あきらかに今の擬音からして俺のほづがひとつ多めに殴られてるよね?ね?なんで?

「え〜…なんだ、色々と待たせて悪かったな〜おまいら！ちよつと、アリスちゃんとニヤンニヤンして遅くなってたんだにや〜ま  
私はこのクラスの実行委員長になった八尾麻里だ！よろしくシコシ  
コ  
コノヒト、姉（麻美）と同類だ…（汗）いきなり挨拶が下ネタから入るところ…しかし、あの体系で俺より1つ年上だもんな…  
恐れ入ったぜ、会長。」

「……………耕司君、あとでしばくから  
……………やだ、ウソん。」

「はあはあ……………か、会長とアリスちゃんが真昼間からにや、ニヤンニヤン……………はあはあ（ノノノ）」

「真に受けてんじゃあねえよタコ」

このメガネの主成分のほとんどはエロでできてんじゃあねえのか？  
あと、お塩とみりんと醤油が少々。

「あ〜……………質問は後で受け付けるとしてだな……………まずはこのクラスの実行委員は5人しかいないからさ、とりあえずコードネームとか一人一人つけようかなと思うんだオネエサンは、うん」

……………いきなり何を言い出すんだ……………コノヒトは。

「じゃあ、直々に会長の私、自らコードネームを付けてあげよう！  
じゃあ、まずは……………え〜つと……………あ〜そこの前衛的な髪型してる漢<sup>おたく</sup>

！君の本名を言いたまへ」

「へ？俺すつか？」

麻里さんはサルに本名を求める。

「麻里さん、コイツは赤神サルっていう奴だ。ヨロシクしてやってくれ」

「いや…耕司君？それ本名じゃないんですけど……（汗）」

まあ、細かい事は気にすんな。サル君。

「ふむ……サル……サル……サル……サル……あ！思いついたぞ！これなんてんどうかにゃ？」

「どんなのですか？麻里さん」

「プロゴ ファー猿」

「あんだ、それ、言ってみただけでしょ？」

そして、サルを横目で見ると……

「か、かつこいい……（／＼／）」

なんか悶えてた。

「バカだろお前」

「ぷー なんだよ……文句あるのかよ……耕司君？」

「いや…別にサルが決める事だから良いけどよ……もうちょいひねってみたらどうだ？」

「そうかにゃ？う……ん……それじゃあ……」

「プロゴ ファーになりきれなかった猿」

「あなたの頭がひねくれてますね」

「えへ 誉めるなよ 誉めても何も出てこないもんね あ、ちなみに今日の私のぱんていはウサギね」

「誉めてません。あと、誰も求めてない余計な情報は入りませんか。早く、しまってください。はしたない」

「なんだよ……少しくらいコーフンしろよ……なんか耕司君のためにスカート上げてる私、バカみたいじゃんかよ……」

いや、確実にあなたはバカだと思えますよ。真性の。

そして、また横目でサルを見ると……

「さ、最高だ……コレ（／＼／）」

なんかクネクネしていた。

「バカだろお前バカだろお前」

結局、『やっぱ長すぎるからポーツ』とか言いながら結局『サルサル』になりました。



……一回言う必要性があるのか？

「え〜っと……次はその……あ〜……ゴキブリ君！君の本名教えてくり」

ゴキブリ君……（汗）ああ、そのアホ毛が触覚みたいってか。確かに。

「ご、ゴキブリ……」

さすがにメガネ君もこれにはへこむよな、人間として。

「え、えへへ……ゴキブリ……えへへ（ノノノ）」

全然、へこんでなかった！〜！むしろ、変な属性ついちゃった！

「……はて？むしろもう、ゴキブリでいいんじゃないかと思う今日この頃……いや、待てよ……ちよつとかわいらしく『ゴキちゃん』でいいんじゃないか……よっし！OK！君、『ゴキちゃん』で決定！」

……全然かわいくない……（汗）

「じゃあ、今度はアリスちゃんね」

「私はいいわよ。つーか、止めなさい。たとえ、小さくても許さないわよ」

「ふえ！？」

アリスさんが麻里さんをギロツと睨む……こつ、見てみるとなんか麻里さんは俺達よりひとつ年上には見えんな。

「アリスちゃんがいじめる〜（泣）」

「いじめてないわよ！躡けてんのよ！〜」

聞き様によつちやあ、それはそれで結構ひどいぞ？アリスさん？（汗）

「し、躡ける……はあはあ……S、SM（ノノノ）」

「お前はそんなんばつかだな」

君は溜まっっているのかい？メガネ君。

「じゃ……じゃあ、アリスちゃんはまともなコードネームにするから……殴らない？」

「会長の返答しだいですね」

「うう……じゃあ……『俺の嫁』で」

全然懲りてなかった……！

「か……い……ちよ……？（怒）」  
ぎゅ……

アリスさんに頬を抓られる会長……威厳もクソもあつたもんじやないわな（汗）

「いいいいい……！アヒフはんいいい……！！！！！！（泣）」

……今、少し会長がかわいいと思ってしまった自分はちよつと病んでいるのか？……いや、違つと信じたい。

「はあはあはあ……あ、アリスたんにいじめられている会長……か、かあい（ノノノ）ぼ、僕もいじめられたいなあ……会長とアリスたんに同時に攻められたい……ふーふーふー……うふふふ（ノノノ）」（メガネ）

少なくともこいつとは同類と思われたくない。

ちなみに結局、アリスさんのコードネームはまんまの『アリス』でした。

「んじゃあ、最後は耕司君だけだね 何にしようかな」

マジかよ……（汗）

「あたしゃあ、耕司君には散々、お世話になつたからねえ……主に下の穴」

「してませんから」

頼むから危険な発言しないで下さい……会長。

「じゃあ、耕司君は特別カッコいいコードネームにしてあげるぜ」

「……………もう、なんでもいいですよ（汗）」

「ん〜、じゃあ『仮面ラ ダー耕鬼』で」

「やめてください……………（汗）」

「なんだよう……………じゃあ、これでいいだろ!? 『仮面ラ ダーになりきれなかった耕鬼』」

「もう、それはいいですから」

「だいたい、それなら仮面ラ ダーのくだり全くイラネエじゃねえですか。」

「む……………じゃあ『ロリコン耕司』でいい!?!」

「いいわけないだろチビ」

「ムツキ……………!! 言ったな……………!! 私が1番気にしている事を……………!! んっふふふ……………!! いいだろう、そろそろ私に対して挑戦的な態度をとったらどんな目に合うか耕司君に教えてあげないとね……………」

「既に酷い目に合ってます、会長」

「それは……………」

「ムツシングですか」

「ホモになります。男が欲しくなります」

「それはすごく嫌ですね」  
「ならないですけどね。」

それに近い男が目の前にいますけど。

「質問したい事が山ほどあるんですが」

「うむ、どんと来い。めがつそ来い。プリッと来い」

「まず……なぜうちのクラスの実行委員じゃないあなたがここにいらるんですか？」

他にも聞きたい事があるが……まずこれだろ、やっぱり。

「ふむ……まあ、なんと云うかノリで？」

「ちゃんと答えてください」

「結構、攻めるねえ……耕司君、私や君の未来に不安を感じるよ」

「誤解を招くようなこと言わんでください……で？なんでですか？」

「うん……まあ、なんていうか……このクラスはある意味特殊だつて噂はあちこちから聞いていたわけなのだよ。そこで……え〜つと、ちよつと言いくいんだけど……」

…会長がちよつと気まずい顔をする……こんな会長の表情初めて見たな。

「遠慮なく言ってください」

「うん……まあ、その……なんていうか……学園の教師も耕司君のクラスに目をつけて……」

……なるほど。なんとなく話が見えてきた。

つまり、問題児の多いうちのクラスが学園祭でハメをはずし過ぎない様に釘を刺すためか。

さしずめ、会長は複数の教師……いや、つるつぱげ校長とかに圧力を受けてこのクラスの監視を命じられた、そんなところか。

「会長、もういいですよ」

「うん……ごめんね」

俺もこんな表情の会長を見るのはなんとなく嫌だ。

「かいちよ〜、質問いいすっか？どうしてそんなにチツチャインですか？ちゃんとミルク飲んでます？」

「…サルサル、あとでシメルから」

気まずい空気をサルが一掃してくれたのか……発言には色々と問題が山積みだが。

「ええつと……じゃあ、なぜ俺らを実行委員に？」

それが1番聞きたかったことだ。

「ふむ……………そりゃあ、君らは高宮学園の『3Kトリオ』って言われてるぐらいの存在だからね 色々と学園祭を盛り上げてくれると思っただからさ あっ、ちなみにコレ、他にはナイショにしてるから」

さ、3Kトリオ……………？初耳だぞ、そんなん（汗）

「3トリオって……………なんすか？ソレ？」

「えっと……………なんだったつけな……………あっ、そうそう！思い出した！確か……………『キモイ・汚い・汚らわしい』で3Kだったと思っぜ！」

何…その不名誉な栄光（汗）

「会長……………かぶってます、ソレ」

サル…ツツコムベきところはそこじゃないだろ……………

「うくん？『キモイ・汚い・口臭い』だったっけな？」

口臭いってなんだ……………

「……………『くらえ！俺の豆鉄砲！』だったっけな？」

もう、ワケが分からない……………あと、すでに3Kじゃないし。

「……………会長、もしかして会長が勝手に言っただけなんじゃあ……………

……………

「あ、そうだった てへっ」

「一発、殴ってもいいですか？」

「イヤン」

……………

その上目使いは卑怯だ……………（汗）

「そう言えばなんでアリスさんも実行委員なんだ？」

俺はアリスさんに尋ねてみた。

「……………」

無言……いや、目が言ってる。『そのチビに聞きなさいよ』と…

……

「会長、なんでですか？」

「おっと、だいぶ時間が経ってしまった！皆、今日のところは解散ね！」

「あ、あの……………」

会長はそそくさと教室を出て行く……………逃げられた（汗）

「……………なあ、耕司？」

「…あん？なんだ、サルサル」

「俺ら……………今日、出し物の話全然してねえよな……………」

「……………あ」

第63話『彼女は俺に冷たい、いわゆるツン期？いつかデレ期がくると俺は信』

これからはアリスルートです。当分はコメディになると思いますが。

第63話 『彼女は俺に冷たい、いわゆるツン期？いつかデレ期がくると俺は信』

初日の実行委員の会議は何も決まらず終了……そして俺、サル、メガネ、アリスさんと珍しいメンバーで下校中である。

「しっかし、未だに腑に落ちねえよな……」

「やっぱ、お前もそう思うか、サル」

「どうして会長はあんなにロリロリなんだろうなあ……」

「そこかよ……（汗）」

「だって、あれだろ？会長って俺らより1つ年上なんだろう？マジ、ありえねえだろ？あの体系？あらゆるところがミニمامマキシمامじゃん」

ちっちゃいのかおっきいのかはつきりしろ。

「お前いつか殴り殺されるだろうな、会長に」

「でも、あれはありえねえだろ……？耕司さんよお」

「そうか？身近に俺らと同じ年でチツチャイ奴いるじゃねえか。誰とはいわねえけど」

ツインテールとかツインテールとかツインテールとか。

「ふむ……しかし、僕の幼女像にぴったり当てはまる先輩だったなあ……思わず、裸で押し倒しそうになったよ……」

そして、いつの間にかメガネマンまで会話に参加してきた。今回も変態発言満載だな。

「お前、前といつてる事全然ちげえじゃねえか……年上好きなのか、幼女好きなのかどっちなんだよ」

サル……たぶん、そいつは女だったらなんでもいいんだと思うぞ……

「もちろん、どっちもイケルさ」

キラーンと白い歯とメガネを輝かせながら素敵な笑顔を俺達に送る英男……なんかむかつくな、コイツ。

「ねえ……あんたら、私もここにいてること忘れてない？」

害虫を見るような目で俺等三人を見つめるアリスさん……ある意味、



殴られるよりキツイわな。

そして、サルとメガネとも途中で別れ、アリスさんと2人で下校する俺……

「……………」

「……………(汗)」

「……………」

「……………(汗×2)」

「……………」

「……………(汗×3)」

……………なんか喋りましたよっ!?アリスさん!? (汗) っていうか空気重っ!……!

ある意味、ミントと一緒に下校する時よりもキツイモンがあるぞ!?コレ!? (汗)

ちくしょう!……!いつっちゃうぞ!?俺!?いいんだな!?いつちやっても!?ああん!?いくぞオラオラオラー!……!……!……!

!( 半分ヤケクソ)

「あ……………あ、アリスさん……………?」

「……………あ?」

……………いやいやいやいや……………名前呼んだだけなのになんでそんなどギツイ目で僕を睨むのカナ?アリスさん? (汗) っていうか、呼んどいてなんだけど返し方が『……………あ?』とか次に僕、どう返せばいいか非常に困るんですけど?僕?君、極道出身? (汗)

「……………えっと、あの……………ですねえ……………? (汗)」

く、くそ!あ、焦るな!俺!

「……………言いたい事があるなら早く言いなさいよ」

あ！そうだ！掌に『人』っていう字を書いて飲み込めば……………ってそれはなんか違うだろ！？俺！？

「……………ちよつと何してんのよ」

え、え〜つと……………そうだ！座禅だ！座禅！こつ、焦る気持ちを抑えるためにも心を無にして何も考えなければいいんだ！

「……………ちよつと」

……………

「……………」

……………

「……………」

…

「ぐっ」

「寝るなっ！……………」

ドガスッ！……………」

「いでっ！……………」

な、なんだ！この衝撃は！……………いい、痛いぞ！？

「？あ、アリスさん！？な、なんで殴るんだ！？とても痛いぞ！？」

「……………あんた……………私を呼びつけておいて無視……………拳句の果て

にはおねんねタイム……………？……………いい度胸ね 感心したわ あん

たのその心意気に」

「えへへ」

バッキバッキ

高宮学園学生寮内1階リビングにて夕食。

「……………」



「はい？アリスちゃんに最近、避けられてる……ですか？」  
とりあえず、夏美の機嫌を飴で直し、千里さんにアリスさんの事について聞いてみる事にした。

「はい……なんででしょうか……確かに自分、変態っすけど……  
…どうも納得いなくて」

「あらあら、自分からカミングアウトしてもいいの？村上君」

「フフフ……自分の醜態をよりにもよってドS属性の人に言っちゃってもいいのかい？村上君？君はDM属性に近づきつつあるね、おじさんRPGみたいに仲間が増えたようでも嬉しいよ……  
エヘヘ」

「黙れ喋るなおっさん（原田）普通にキモイわ」

「ウフフ……原田さん？あとで、私のお部屋に来てくださいね  
たっぷりかわいがってあげますから」

……おっさん、死んだな。

「おふう！ありがたきお言葉！」

……長い間、見ないと思ったら随分、属性キャラ変わったなあ……おっさん。

「あらあらごめんなさい、話が脱線してしまいましたね。で？村上君のご相談とはアリスちゃんと仲良くなりたい事ですよね？」

「！………そ、そうです！それです！」

「………そうですか。でも………残念ですがそれは………」

ザー…

「……………」

ザー…

「……………」

……俺はあれから入浴中もずっと考えていた。

……千里さんが言ったあの言葉がずっと頭の中で駆け巡っていたのだ。

「……………」アリスちゃんはね。男性恐怖症なの」

「……………」え？」

「……………」

しかし、俺はちょっと信じられなかった。

だって、あのアリスだぜ？確かにいつつもなんか不機嫌そうな顔してるけどちゃんと俺らに向き合っていたし……なによりちょっとあのパンチちょっと気持ちよか……って、違う違う……でも、俺の中では『男性恐怖症』っーのはなんっーか……男が寄ってきただけでもだめっていうイメージがあんだけどなあ……………」

『…………だからどうか村上君、気を落とさないで下さい。アリスちゃんとは別に村上君『個人』が嫌いなわけではなくて『男の子』が嫌いなんですから……………』

『ちよっ……………待つて下さい！な、なんで……………？』

『…………村上君、お気持ちはよくわかりますが、コレはアリスちゃんの心の問題です。人の過去を詮索するのはあまり感心しませんね』  
『……………す、すみません』

あゝ！も〜！

んなこと言われたって気になって仕方ねえに決まってんじゃん！  
だって、俺決めたんだぜ！？この寮の女の子全員俺の嫁にするって！……………つて、ちよつとどこぞのギャルゲーの主人公にモロカブってんじゃん……………俺。

「あゝ……………どうすっかなー」

…………正直、俺はアリスさんが好きだ。つていうかこの寮の人全員好きだけだね。（忒匹ほど危険物が混じってるけど）

「あゝ……………プクプク」

俺は思わず湯船に潜った。はあ……………どうしよ？

ガラッ……………

「!!!!!!?????」

だ、誰か入ってきた!? ジョウイチロウくんか!? も、もしそうだとしたら……い、嫌なんだな。(汗)  
とりあえず俺は冷静になって湯船の中を潜水移動し、物陰(岩)に隠れる。

「(だ、誰なんだ……一体?)」

そして、岩陰から覗くとそこには……

楽園という名のパラダイスもとい……破滅の予感がヒシヒシと感じつつある光景を目の当たりにした。

番外編その13 『魔法少女はお好き?』 (前書き)

……なんかスイマセン(汗)



番外編その13 『魔法少女は好き?』

「村上君、少しお時間頂けますか?」

寮の1階のリビングで昼のサスペンス(再放送)を鑑賞していると千里さんが声を掛けてきた。くそう…もう少して解決編だったのに

……

「すみません……このドラマ終わってからにしてもらってもいいですか?」

「はい? ……あ、その事件……それ、犯人は谷口ですよ?」

「……」

パチン(テレビを切る音)

「……お話はなんでしょう?」

「はい……実はですね……」

「はい?魔法……少女???」

「はい」

「あの……『ピリカピリララ……』なんかって唱えるアレのことですか?」

「それは魔女ですね」

「それがどうかしたんですか?」

「探して欲しいんです」

…… ( 只今脳内清掃中 ) ……

…… ( 只今脳内清掃中 ) ……

…… ( 只今脳内清掃中 ) ……

「は、はあ?あ、あの……ぜんっぜん!!!話が見えないのです」

が……………(汗)」

「必要なんです……………魔法少女」

「な、なんで?(汗)」

「実は昨日私が買い物物の帰りふと立ち寄った公園です……………」

『おねーちゃん!まほーってなに?おしえて!おしえて!』(少女A)

『マホー!マホー!』(少年A)

『えっと…ね……………例えばね?綺麗な青空を自由に飛べたらすごく素敵じゃないかしら?』(千里)

『うん!美菜とんでみたい!ビューンバビューンズガズガズガーツとんでみたい!!!』(少女A)

『マホー!マホー!』(少年A)

『でしよう?もし…そんな素敵な力あったらどうかしら?』(千里)

『……………でもないよ…そんなの。だってパパが言ってたもん。大空を自由に飛べるのはタケ プターだけだって』(少女A)

『マホー!マホー!』(少年A)

『……………ウフフ どうかしら?』(千里)

『…あるの!?おねーちゃん!!!』(少女A)

『マホー!マホー!』(少年A)

『……………そうね、そんな素敵で不思議な力を持った子の事を『魔法使い』って呼ぶのよ?』(千里さん)

『へ……………まほーつかい……………すごい!!!おねーちゃん!

!!!あってみたいな!!!』(少女A)

『マホー!マホー!』(少年A)



なのでボツ。

麗奈さん 関西風魔法少女 魔法を唱える際にいちいちボケそうなので正直ウザそうなのでボツ。(例：ピリカピリララホテリアーヨ 様ー!!!なんでやねー!!!ん!!!あっははははは!!!  
! (意味不明))

千里さん 年齢的に無理。(本人の前で言ったら殺されます。いやマジで)

麻美さん 魔法唱えるのを理由にいきなり服を脱ぎ出しそうなのでボツ。

真由美さん 作者の都合上ボツ。

ウコンちゃん いや……色々とやばいでしょ?コレ?(汗)

姉さん(琴美) なんか『私に惚れてる?惚れてる?イヤーン』とかうぜえ事を言いつつセクハラを仕掛けてきそうなのでボツ。

宮子ハルっち 魔法使いをM<sup>マ</sup>使いと勘違いしそうなのでボツ。

麻里さん いや……ホントマジで勘弁してくださいよお……色んなところにテントがたちますぜ。

雪美 ……いや、ここでその選択肢はないだろ……? (汗)

鈴奈 ……頼むから空気読んでくれ…… (汗)

勇輝 ……むちゃくちゃキモイのでボツ。(例：ハイ?耕司……)

……俺と……やらないかい?)

サル(慎也) ……想像するだけでも限界なのでボツ。(例：耕

司……(ノノノ)実は俺、前からお前の事…… (ノノノ))

メガネマン(英男) …… K I M O T I W A R U I D E S U Y O

(例：キモチワルイデスヨ)

ジヨウイチロウクン かえって悦びそうなのでボツ。襲われそうなのでボツ。危険なのでボツ。(例：耕司さんのハートを掴んじゃうぞ)

原田のおっさん ……いや、絵的にやばいだろ?色んなところもつまさきしてるよ?コノヒト?(汗)見えちゃうよ?色々?見たらきつとトラウマになるよ?いやマジで。

作者  
……

……

「とうわけで千里さん。俺が魔法少女になりました」  
「一遍、死んで来い」

B A D  
E N D

番外編その14 『三上英男の華麗なる伝説』 (前書き)

伝説の幕開けです……

番外編その14 『三上英男の華麗なる伝説』

【英男おっぱい伝説その1：英男、おっぱいプリン作る】

「……はあはあ、も、もう少し」

「……え、えへへ、ぐひゅひゅ……」

「……ぷぴぴぴぴ……」

「……はあはあ、じゅるり」

ガタツ

ぐしゃり

「……！ああ……ああああ……だめだ、ダメだよ……いけないよ……  
耕司キユンこんな事……僕は……僕は……」

「いきなり読者に誤解を招くような危険な発言をするな、メガネ」  
誤解を解いておきたいから、とりあえず今の状況を説明しておこう。  
偶々、俺がはずみで机を揺らしてしまいその机の上でなにやら怪しい作業をしていたメガネがいきなり怪しい発言をしたという訳だ。

「……ああ……もう少しで完成するところだったのに………どうして  
くれるんだ？耕司キユン？この代償は君の体で払ってもら『バキッ』  
……いや、調子乗ってすみませんでした、マジで」

「……で？お前、さつきから学校で何、怪しい作業してるんだ？」

「ああ……実はね、僕はこう最近考えるようになったんだよ……『オ  
ツパイが揉めたらそれはどれくらい僕の欲求満たしてくれるか』を  
ね……」

「……」  
「いや最近、僕ね、そこいらの普通のエロゲーじゃ出せなくなっちゃ  
ったんだよ、イヤ本気で」

「……」  
「PCの画面の前で自分のキュウリを握り、ピストン運動させながら  
ら思うようになったんだよ……『こんな低レベルな欲求の満たし方  
で本当に僕の本当の意味での欲求を満たしてくれるのか？』『いや、





僕は

「……こいつがリアリティを求めだしたら犯罪に発展しそうな気がするんだが……」

「……お前、何する気だ？」

「……いや、決まっているだろう？ 揉むのさ」

「さようなら」

「ちょ、ちょっと待ってくれよ！？ 耕司キユン！？ 行かないで！？」

「黙れっ！！！！俺に近寄るな！！！！これまで、お前はただの変態だと思っただけでお前を見ていたが、今からお前がやるうとして、僕はただの犯罪者だっ！！！！俺を巻き込むな！！！！1人でやってる！！！！」

「そ、そんなぁ……こ、耕司キユン！！！！僕たちは一心同体だろう！？ 色々なところが繋がった仲じゃあないか！！！！痛みを共有しあつた仲じゃあないか！？ ね？ ね？ ね？ ね？ だから、僕を見捨てないでくれたまへ！！！！！！」

「気持ち悪い事を言うな！！！！とにかく私、1度実家に帰らせていただきます！！！！！！」

「だ、大丈夫ダイジョウブだよ……耕司キユン。も、もういつその事、耕司キユンの胸でもいい！！！！もみもみできたら僕は本望さ！！！！！！」

「余計悪いわっ！？ もう、帰れ！！！！お前！！！！」

【英男おっぱい伝説その2：英男、おっぱい病感染】

「……なァ、耕司キユン」

「……あん？」

「……空っでどうして青いんだろっね……？」

いきなり何を言い出すんだ……このメガネ君は。

「いや、何言ってるんだお前」

「いや……どうしてかな……さつきから僕の頭の中にはオッパイ！最高！オッパイ！最高！オッパイ！最高！ひゃっほー！うー！……！」

「それは既に病気だな」

あと、話全然繋がってないからね。

「やばい………どうしたらいいんだ………耕司キョン。ふ……触れてみたいんだ………おっぱいに、ハアハア（ノノノ）」

「とりあえず病院行けよ、お前」

【英男おっぱい伝説その3：英男、おっぱい見守る】

「耕司さん 一緒にお昼食べましょうです」

「ああ、いいよ。…あれ？百合ちゃん今日のお昼ご飯はそれだけ？」  
「どうやら百合ちゃんの今日のお昼はアンパン1個＋牛乳（紙パック）のようだ。」

「えへへ…最近、ダイエットしてるんですよ……（ノノノ）」

「へえ………でも、あんま食べないのもダメらしいよ。それに……基本はちゃっかりきっかり抑えてるね」

「あああう………（ノノノ）」

…いかん（汗）今の発言はセクハラっぽかったかな？

「あう………その………が、頑張りますから（ノノノ）………私、耕………ガサガサ」

ガサア………！！！！

「やっぱり基本は大事だよな」

いきなり中庭の草むらからメガネが現れた………

「どっから湧き出た、お前」

「うんうん 百合タンいいいいよ そのひたむきな成長を望む姿…… オジチャン思わず感動しちゃったYO」

「うるさいよ、あっちいけお前」

「オジチャンはどちらかというところ小ぶりが好きだが……くう！いや！百合ちゃん！ぜひ、巨乳になってくれたまへ！そして……その時が来たら……揉ませてくれたまへよ？」

「聞けよオイ」

「では、アディオス！」

そして、メガネは再び草むらへと戻っていった……

「……あいつ結局ここへ何しにきたんだ？（汗）」

そして、ふと百合ちゃんの方に顔を向けると……

「……………いつかあのエロメガネブチクロス」

黒い……黒いよ？百合ちゃん（汗）

【英男おっぱい伝説その4：英男、男のおっぱいにも手を出す】

「なあ……耕司キユン。オツパイって形も大事だけど、乳首の大きさも結構重要だよな？」

「お前、さらに進化したな」

ダメな方向に。

「いや……なんというかさ……これは好みの問題なのかもしれないが、僕はオツパイがでかかったら乳首はチツチャイ方が何かさ……」

何か……興奮するんだよねえ……うふふ」

「……………」

「こつ……さ？掴めるじゃん？ねえ？」  
ねえ？じゃねえ。

「ほら、耕司キュンみたまへよ。ちょうどいい例があそこにいるじやあないか」

「あん？」

メガネの指した方向を見ると……………クラスのおでぶさん（愛称：藤P）がのしのしと息をはあはあ上げながら歩いていた。

「いいよねえ……………あのもみごたえのありそうなオツパイ……………ぷひひひ（ノノノ）」

「……………」

ちなみに藤Pはオスだ。

「では、さつそく……………」

「待て……………お前、まさか……………」

そしてメガネは藤Pに声を掛ける。

「やあ！藤P君！元気かい！？いきなりなんだが、君のオツパイ揉ませてくれたまへ！」

「ええ……………（ノノノ）」

なぜそこで頬を染める……………藤P君（汗）

「い……………いいじゃあないか……………おっぱいの1つや2つ……………へ、減るもんじゃあないんだからさあ……………えへ、えへへへ……………ひっ（ノノノ）」

いやね……………もう、色んなものを一気に失うと思うよメガネ君。

「や、やだ……………やだよう、英男君（ノノノ）」

だからなぜ頬を染める……………藤P君（汗）そして、なぜちょっと色つばい声を上げるんだ……………藤P君（汗）

「よいではないかあよいではないかあ（ノノノ）」

そして、英男はまるで悪代官のごとく藤P君の背後に回りこみ……………モミモミモミモミモミモミもみもみもみもみもみ……………

「アフツ！（ノノノ）」

「キモツ！（汗）」

【おっぱい伝説その5：英男、ライバル現る？】

「タイヘンヘンタイだ！！！耕司キュン！！！」

「誰が大変変態だ！！！ゴラア！！！」

バキツ！

「くふう！」

いきなり英男が俺の目の前に現れて失礼な事を言ったのでとりあえず殴っておく。

「いやあ……………キクね！！！耕司キュンの蹴りは！！！じゃあ、次はここも……………」

「やかましいわ。…で？なんだよ？なにがタイヘンヘンタイなんだよ」

「あ、ああ……………実は……………ま、全く効かないんだ！！！」

「お前、しつげえぞ」

「ち、違うんだ！！！ぼ、僕の……………セクハラ攻撃が全然効かないんだ！！！し、しかも女子にだよ！！！」

コイツ……………やっぱり自覚していたのか。

「お前いつか捕まるぞ」

「あ、あんな女子は始めてだよ……………僕が『おっぱいいいよね？』『おっぱいってミルク出るの？』『おっぱい揉ませてYO』と言って

も……………その女子、全然動じないんだ！！！」

「はあ？」

「ふ、普通の女子の反応は頬を染めて恥ずかしくて俯くかあるいは暴力に走るかのどっちかだろう？」

「まあ、そうかもな」

「ま、まだ！暴力に走る方法はいい！なぜならそこには『恥じらい』があるんだからな！顔を見れば恥ずかしくているのがよくわかる」

「お、おう？（汗）」

あまりの英男の剣幕にちょっと引いてしまう。

「しかし……しかしだ……！耕司キユン……！その女子は……全然つ……！動じないんだ……！む、むしろ笑顔で返される始末………  
淡白な返事………そこには『恥じらい』が存在しないんだ……！」

「な、何が言いたいんだよお前（汗）」

「……ふむ、耕司キユン。我々は『おっぱいを揉む事』が目的ではない。あくまでも、『恥じらいを観察する事』が目的なのだ」

「我々っていうな………俺は所属してねえ（汗）」  
コイツ……真性の変態だな。

「くそう！あの女！悔しい！悔しいぞおおおお……！……！あの女の赤く果実のように火照った顔を拝みたいぞおおおおおおおお………！………！………！」

「うん、お前うるさい」

【英男おっぱい伝説その6：英男、問題の女と対峙………そして、敗北】

「ほら……耕司キユン、あの女がそうだ」

「………」

英男が指した方向を見ると………そこには………

「………宮子じゃねえか………」

一人でじえんがに挑戦している宮子の姿があった………ガラガラ………  
………てか崩れるのはええ（汗）

「そう！我が憎き女！宮子春美！Dカップの女！許せん！」

「……いやお前アホだろ？（汗）」

奴にとっては『常識』こそが『常識』なんだからさ。通じるわけ



英男おっぱい伝説 完



番外編その15『はぐれむ(?)はお好き?』(前編)『(前書き)

一応、アリス視点ですが変わります。そして、時期的にはG・W・です。

番外編その15 『はぐれむ(?)はお好き?(前編)』

「いんや〜！遊園地なんて久しぶりだなっ！おいっ！今日は一緒に楽しもうぜ！！ねっ！アリスさん!？」

「なんであんた、んなハイテンションなのよ・・・普段は学校で寝てるくせに・・・」

「ああ〜 見てみて〜 お兄ちゃん！アリスちゃん！あれっ！あれっ！すぐく楽しそう 早く乗ろうよ〜 ボク、昨日の夜から楽しみに全然寝られなかったんだよ〜」

お前は小学生か。<sup>ガキ</sup>

・・・はあ〜・・・なんでこんな事に・・・ (汗)

さかのぼること1時間前――

今日はGWの初日というわけで、せつかくの休日在家でゴロゴロしてるものなんだかあ〜？というわけで寮から少し離れた遊園地に来たってわけ。メンバーは夏美、百合、麗奈さん、宮子さん、

私、で、野郎共は村上、条一郎君、メガネ(英男)、サル(慎也)の計9人。まあ、そこまではいいわよ・・・

・・・メガネが余計な事を言うまでは・・・

『ふむ……ギャルゲーみたいな展開になってきたじゃあないか……そこでどうだろう？作者がご都合主義的にこんな場面を作ってくれたのだ。ちょうど9人いるし3グループに分かれてイイコト……行動しないかい？』

とかいきなり訳のわかんない事を言い出し……

『さあ……皆、このクジを早く引きたまへ……だ、誰がメンバーになっても文句など言わないよ……はあはあ……う、うひっ……え、えへへ……ぷ、ぷぴい』(ノノ)』

『なんでこのメガネはサカッてんだ？(汗)』(耕司)

その結果……

ツンデレチーム アリス、夏美、耕司

和気あいあいチーム 麗奈、百合、宮子

LOVE チーム メガネ、ジョウイチロウクン、サル

(ツンデレチーム)

(アリス) 「誰がツンデレよっ!!!」(怒)「

(耕司) 「まあまあ……アリスさん、そんなに大喜びしなくても……」

(アリス) 「喜んで無いわよっ!!!」  
ドガスッ!!!!!!」

(耕司) 「あでっ!!!!!!」

(夏美) 「じゃあ、アリスちゃんは『ツン』担当でボクは『デレ』担当だねっ!!!!!!」

(アリス) 「そんな特殊設定いらないわっ!!!!!!」

(耕司) 「うむ……じゃあ、必然的に俺は『デレ』担当になるんだな……えへっ おねえちゃん」

(アリス) 「きもっ!!!!」(汗)「

(和気あいあいチーム)

(麗奈)「まあ．．．なんや！とりあえず今日は楽しもうなー2人ともー！」

(宮子)「はあい 宮子 イツキマ〜ス」

(百合)「ブツブツ．．．なんで耕司さんがいないの．．．  
ブツブツ．．．死んでやる．．

．．．ブツブツ．．．呪つてやる．．．ブツブツ．．．  
」

(麗奈)「(．．．なんや．．．このチーム内の温度差は．．  
．．．(汗))」

(LOVE チーム)

(サル)「なんでだあああああああああああああああ！  
!!!!!!????????」(泣)

(メガネ)「ふむ．．．まあ、仕方あるまい。きっとこれは．．  
．．．そう、運命という名の愛、LOVEなのさ」

(サル)「ナニ言ってるんだ、お前は!!!!!!何で冷静なんだお前は  
!!!!!!そして、何でモジモジしてるんだ、おまえはあああああ  
あああああああああ!!!!!!!!!!!!」(泣)

(ジョウイチロウケン)「う〜ん．．．本当に残念です．．  
．．．」

(サル)「おおっ!!!!!!まともな人間がここに!!!!!!」

(ジョウイチロウケン)「筋肉質な方はあまり好みではないんです



どんなごまかし方よ・・・(汗)

「そうなの？でもお兄ちゃん、さっきこれでもかっていうぐらい元気に奇声上げていたじゃん」

「あ、ああ・・・あれはだな・・・ハイになることによって少しでも実が出ないように工夫をだな・・・つ、つまり例えるなら授業中にトイレが行きたくなくても先生に言えないというこのもどかしさ

・・・ま、まあ恋する乙女のような心優しい気持ちに近いと思ってくれたら分かり易いと思うぞ？(汗)」

何言ってるの？この変態？

「全然分かんないよ」

そりゃそうだ。あれで分かるのはメガネかサルぐらいね。コイツと同類だし。

「そ・・・そうか・・・(汗)まあ、というわけで俺、パスなコイツ・・・」

「ええ~~~~~~~~!!?行こうよ~~~~~~~~!!!!!!おにいちゃ~~~~~~~~ん!!!!!!」

「い・・・いや・・・だからだな・・・毎日の日課の瞑想をこれからしなきゃあなんないんだって

・・・(汗)」

さっきと言いつつ変わってるじゃない・・・というか、なんかイライラするわね・・・

「もう!い~~~~~~~~よ~~~~~~~~!!!!!!」

「い~~~~~~~~ですう~~~~~~~~!帰って、積みゲー制覇目指すんだあああああ!~~~~~~~~!!!!!!」

ポキッ.....

「さて、やっと静かになったわね。それじゃあ、夏美行くわよ」

「う、うん... (汗)」

ズルズル.....

その頃、和気あいあいチームは……

『ややつ、トバされましたか……残念です。では、さっそくこの私めの裸体を……』

「よっしやああああ〜〜〜！！！！！！やったたでえ〜〜〜  
〜！！！！！！手塚クリアしたったわ〜！！！！！！いえ〜  
〜！！！！！！どや！見たか！百合！うちの打ち回し！！！！」

「……………はぁ（汗）」

ここは遊園地内にあるゲームセンターの麻雀ゲームコーナー。

百合は麗奈が必死で脱衣麻雀（1回100YEN 対戦キャラは皆）をしている姿をぼ〜と見つめていた。ちなみに、麗奈のいう『手 クリア』とはちょうど麗奈が対戦していたキャラが手 似 だったため。

「まあ、散々DSのア ギで鍛えたからなあ〜……………ウホ コ イツええ身体しとるやん」

「うっわ〜……………で、でか……………（ノノノ）」

百合は少々引いた。というか、こんなゲームを公共の場に置くのは少々…いやめっさ問題があると思った。

「麗ちゃん こっちはマンモスでつか〜〜い」

「な、なんやて！！！！ちよつと見せてみ！！！！春！！！！WOW！ビ ッグサイズキター……………！！！！」

「……………（ノノノ）」

思わず耳を塞ぎたくなる会話……………というか、せめて小声で喋って欲しいと百合は思った。

「……………耕司さん（泣）」

自分の想い人…村上耕司の顔をふと思い浮かべる百合ちゃんでした。

「おお？次の対戦キャラなんかちよつと耕司似やで！！！！」







番外編その16『はるねむ(?)はお好き?(後編)』(前書き)

ぐだぐだです。

番外編その16 『はぐれむ(?) はお好き?(後編)』

「うう……き、きもちわりい……うつぶ……」

「だ、大丈夫?お兄ちゃん……? (汗)」

「通りの絶叫マシーンを乗り終えた村上の表情はまさに今にも吐きだす……」

「うつぶつぶぎゃぶうげろげろげろげろ……!!!」

「!」

「だばだばだばだば……」 (ゲロの効果音)

「うつぶ!ちよ……ちよつと!!!い、いきなりこんな場所で吐かないですよ!?(汗)と、トイレ行ってきなさい!!!トイレ!!!」

「うう……まだ、吐きそ……あ、歩けねえ……つぶ……」

……はあ、しょうがないか。なんか無理矢理乗せたのが私だし……  
少しぐらいは面倒見てやるか……

「し、仕方ないわね……ほ、ほら!肩に手を乗せなさい!トイレまで連れてってあげるから!!!」

「うつぶ……すまない……アリス」

「あつ……あ……!ぼ、ボクも……ボクも手伝うよ!アリスちゃん!」

「アンタは止めときなさい。潰れるのがオチよ」

「ボクそんなにちっちゃくないモン!!!」

「ギャーギャーうるさく喚く夏美を無視してとりあえず村上を便所まで連れていく。」

「……アリス」

「……なによ」

「……今日のお前なんか優しいな……いわゆるアレか?デレモードって奴か?」

「……それ以上余計な事喋ったら腹にキツイの入れるわよ……」

「……ゴメンナサイ」

「ふう〜すつきりした」

「お兄ちゃんごめんね〜！！まさか、お兄ちゃんが絶叫マシン苦手だなんて思ってたから…！」

「まあ…なんとというか…その悪かったわね、無理矢理乗せて…」

「ああ、イイって！まあ、なんつーの？不幸イベントはギャルゲーの主人公の宿命だから気にしてねーよ」  
不幸イベントってなによ…

「それより腹減らねえか？そろそろ昼飯食おうぜ」

「うん！そうだね！ボク、フランクフルトたべたーい」

「私はなんでもいいわよ」

「よっし、じゃあフランクフルト3人分買ってくるな」

……………10分後……………

「ほい、お待たせ」

「ありがとう お兄ちゃん」

「……………ありがとう」

……………よく見ると村上が買ってきたフランクフルトのうち1本はマスタードがフランクフルトの表面の色が見えくらいたつぷり塗られていた。ソレを何事もなく平気でパクパク頬張る村上……………こいつ、味覚トチ狂ってんじゃないのかしら？（汗）

「ん？どうしたよ？食べなよ？モグモグ……………」

「……………」

パクパク

「おいしいよ〜」

パクパク



ながら……って……!!なんかそつちのボタン若干ヒビ入ってませんか!? (汗)」

「ん……? ああ……また、やっちった てへ」

「『やっちった てへ』じゃないですよ!?! はあ……コレで何度目ですか……勝負に熱中しすぎですよ……驚巢ですか貴方は…… (汗)」

〈ちなみに麗奈サン粉碎機器リスト〉

・麻雀ゲーム ラスボスで大石似のキャラが登場するも攻略ならず  
「このハゲええええ!!!!!!」とか言いながら粉碎。

・UFOキャッチャー 大石似のヌイグルミ発見するも獲得ならず  
「このハゲええええ!!!!!!」とか言いながらやっぱり粉碎。

・恋愛シュミレーションゲーム (BL) 途中までいい感じでゲームを進めるもまたもや大石似のキャラ登場 しかも攻略キャラ  
「このハゲまたかああああ!!!!!!」とか言いながら懲りもせず粉碎。

(以下略 百合談)

(その頃、LOVE チームは……)

「……………」

「……………」

「…………… 今度はプリクラですか」

「ウフフ…………… いいじゃないですか 今日の三人の『おもひで』を写真に残しておきましょうよ ね?」

「フム…プリキュアか…………… 僕も一時期見ていたぞ? ハマツてコスプレイをして街中で歩いていると青い人達が声を掛けてきたよ。 ああ…………… なつかしいねえ…………… うまかったなあ…………… あのカツ丼」

「プリクラな。っていうかお前、その当時から伝説作ってたのかよ……色んな意味ですげえな（汗）」

「まあ、いいじゃないか。とりあえず、そのクロワッサンとやらをプレイしてみようじゃないか、ハアハア（ノノノ）」

「だからプリクラな、全然違うから。あと、お前なんか絶対勘違いしてるだろ？」

そしてフレーム設定……

「フレームどれにします？あ、この画面がバナナのフレームにします？」

「……なぜバナナを選ぶ……（汗）しかもバナナ多すぎて俺とメガネの顔全然うつらねえと思うんですけど？（汗）」

「ふむ……では、このメガネのフレームはどうかね？」

「……お前、趣味悪すぎ……（汗）」

「じゃあ、サルさんはどんなのがいいんですか？」

「……このモンキーのフレームはどうだ？かわいいじゃん」

「趣味悪っ」

（ツンデレチーム）

「よっし！お次は遊園地お決まりのアトラクション……！お化け屋敷としゃれ込もうではないか……！」

「うん、いいよ」

「別に私はなんでもいいわよ」

「……あ、あれ？（汗）あの……そこは『いや〜ん お兄ちゃん〜』とか『ふ、ふん！（ノノノ）お、お化けなんて怖くないんだからね……！ほ、本当よ……？（ノノノ）だ、だから……手……は、離すんじゃないわよ（ノノノ）ぜ、絶対だからね……？（ノノノ）わ



「かった!?(ノノノ)』とかそんなむふふな台詞が返ってくるはずじゃあ……………」(汗)「  
……………」コイツ何言ってるの?  
「……………」何考えてるか知らないけど……………」お化け屋敷の中で変な事したら目ん玉くり抜いてサイコロ詰めるわよ  
「……………」すいまへん(汗)「

20分後……………」

「なんかつまんなかったわね。あのお化け屋敷」  
「そうだね……………」なんというか、パンチが足りない感じだよね。パンチ」  
「……………」いや、パンチは足りていただろう?アリスさんのパンチはだって、お化け役の人が出現するたんびに殴りかかるとか迷惑極まりないだろ?(汗)アリスさんなんかアクションゲームと勘違いしてない?」  
「え?違うの?」  
「違うよ!?(汗)「

空を見上げるとすでに日は落ち薄暗くなっていた。そろそろ潮時かしらね……

「じゃあ、最後の締め観覧車に乗るとしますか」

「そうだね」

「なんでもいいわよ」

「よし……夏美、アリスさん今日は楽しかったか？」

「うん」

「ま、まあまあね……」

「うんうん よっし！今日は最後まで楽しもうな！二人とも！」

「うん！そうだね！」

そして、夏美と村上ははしゃぎながら観覧車のほうへ走っていった

……

「……はあ、まったく仕方ないわね……」

……あいつらなんていい笑顔してんのよ……

……私はいつら……村上や夏美は正直うらやましい

……だって、私は今のあいつらみたいに心の奥底から笑えない。

もう、笑えない。

……あの日からずっと……ずっと……ずっと……今まで。

……いつか、私も昔みたいにあんな顔で笑えるときがくるのだから

……うか

……そうあの、頃のように……

「……無理……ね」

侵食は収まらない――――

『アイツ』は今も私の『世界』にいる――――

絶えず……絶えず……動き回っている――――

アイツは狂わせる……私の心を蝕む……――――

そして……目が合う――――

見下すように……蔑むように……嘗め回すように……――――

その視線が現実になった時――――

再び私は蘇るだろう――――

アリスという名の復讐鬼に――――

でもその日が来るまで今は楽しんでおろじろじ――――

偽りの日常でみんなと一緒に――

番外編その16『はぐれむ(?) はお好き?(後編)』(後書き)

次回から本編再開です。

第64話 『口が軽い女は嫌われる、でもそんなの気にしない。だってこれ小説だ』

岩陰から覗くとそこにいた人物は……

「……………つて、お前かい！！おっさん！！！」

大浴場に入ってきたのは原田のおっさんだった！！！！！！

「おや？そこにいるのは……………耕司君じゃあないか……………奇遇だね」  
つていうか前回（第63話参照）の話の流れからしてここはいや  
んばかんあふうくん 的な展開が来るんじゃないのか！？なんで  
！？

「なんで貴様がここにいる！？（汗）」

「なんでつて……………体中に溜まった汚れを落とすために風呂に入り  
来るのはおかしな事なのかい？」

……………確かに。

「ところで……………ここで会ったのも何かの縁だし、今日は久しぶりに  
オジサンと流し合いっこしないかい」

「全力で断るッ！！！！つていうか、前した事あるみたいない方す  
るなっ！！！！あと、少し赤くなつてんじやあねえよ！！！！！！すげ  
えきもいからな！！！！！！！！」

「……………いいじゃあないか……………お、おじさんどれくらい耕司君が成長







俺に向けて親指を立てた。それはど、どういう意味かな？カナ？（汗）

「……………」  
「……………」  
「……………」

千里さんも俺に向けて親指を立てた……………なんだコレ？（汗）

「……………」  
「……………」

「……………」  
「……………」

百合ちゃんは俺の顔を見ると赤くなった……………ナンデ？発情期なのか？百合ちゃん？（汗）

「こ、耕司さん！わ、わたし……………耕司さんが特殊な性癖をお、お持ちでも……………わ、私！が、ががが頑張りますから！！！！！！（ノノノノ）」

……………ワオ。

「あ、あんの……………ちびいいいいいいいいいいいいいいいいいい……………ちくりやがったなあああああああああ……………」

そして学校……………。

「よう！耕司！お前ついに男にまで手を出したんだって？すごいな……………！！！！オイ……………！！さすがの俺でもちよつと引いちゃうぜ 今度からお前の事、ゲイ村上って呼ぶな！！いや……………ハードゲイ村上って呼ぶな……………」

サルがいきなりとんでもない事をぶちまけてくれました。

「誰がハードゲイだゴラァ……………！！押し倒してねえ……………！！……………！！つかなんでんな事でめえが知ってンダヨ……………！！……………」

「いや……………今朝、上野が泣きそうな声で『お兄ちゃんがホモになっ

ちゃった!どうしよう!サル君!どうしよう!~~~~(泣)『って俺に電話してきたんだけどよ……………』

……………あのチビ絶対いつか泣かす。

『それよりお前アレか?……………え〜っと……………』お前のケツにゲイボ  
ルグ!〜!』って奴やったのか!?……………うまつ!俺うまつ!やば  
くねえ!?』

「全然うまくねえんだよ!……………!しょうもない事をぬかすな!!

!……………キモイ!……………!」

あ~~~~なんかイライラすんなあ~~~~……………あ~~~~……………

バキツ!……………!

パリーン!……………! (メガネ粉碎)

「あぶぶツ!」

メガネがにやにやしながら俺に近づいてきたのでとりあえず殴って  
おいた。

そして放課後……………実行委員会活動二日目。そろそろ学園祭で何をす  
べきか決めなくてはならない。

「さ〜て!今日も張り切っていくかにや~~~~ なっ ヤ マン」

「誰がヤ マンだっ!?」

っていつかなんで会長までそのことを……………どこまで変な噂広がって  
んだ?(汗) もう〜最悪……………(泣)

「っていつか……………なんで今日は俺と会長しかいないんすか……………」

「んふふ……………あちしと耕司でこの密閉空間で2人きり……………コー  
フンするかい?」

「さようなら」

「コーコーあ〜帰るなよう~~~~!……………!夜はまだ長いんだぞお〜



こうして今日も何も決まらず終了……学園祭まで後13日……本当に大丈夫か？オイ？（汗）

第65話 『ストレスが溜まりやすい人はハゲやすい。ヘアケアーには注意しま

高宮学園生徒会会長、八尾麻里の手によって急遽勝手に学園祭クラ  
ス実行委員会なるものが結成されて早3日……とりあえず、先日ボ  
イコットをかましたエテ公とメガネを捕まえようとしたが、メガネ  
は『12人の妹がボクを待っている!!!ひゃほーひゃほー!!!  
!!!』とかワケのわからん奇声を放ちながら全力疾走で逃げられ  
たので捕まえられなかった。しかしサルは捕獲。捕まえた際、『俺  
に惚れてんのか?キャツ 村キャミ君のえっち すけっち ワンタ  
ツチ』とか気持ち悪い台詞を吐いたのでとりあえず殴っておいた。  
そして、第3回目学園祭クラス実行委員会が始まった……

「ああ~~~~~……暇だねえ……ねえねえ?耕司君、サルサ  
ル、マジカ バナナやんない?」

教卓で横になりながらいきなり会長らしからぬ発言をする麻里さん。  
変な所で器用な人だな……

「あのね……あんたんな事してる場合じゃねえでしょ?早くうちの  
クラスの出し物決めなきゃまずいでしょ?学園祭まで今日いれて後  
12日しかねえんですよ?そこんところ分かってんのかな?この口  
リロリ娘は?」

さすがの俺でも不安になる……出し物って言っても様々あるが用意  
するのに結構手間もかかるし時間もかかる。大掛かりなものをやる  
のならばおさらだ。しょぼい出し物をやって全然お客さんが入らん  
のも悲しすぎる……ってなんで俺が一人でんなめんどい事を考え  
にやならんのだ?っていうかよく考えたらこんな真面目な俺、キャ

ラ的におかしいよね？おかしいよね？ね？

「なつかしいっすねえ〜やりましょ！やりましょ！じゃあ、俺からいきますね！！マジカ バナナ！バナナといたら！？」

「おい……」

「遅しい！！遅しいといたら！？」

「息子！！息子といたら！？」

「おち「やめろっ！！！」」

ポカッ！！！！

「あイタ！！お、女の子の頭をどつくなんて！耕司君！野蛮！ケダモノ！ゲテモノ！パイ ン！（泣）」

パイ ンってなんだ……（汗）

「何言ってるんですか……ハナから俺は貴方の事を『女の子』なんて認識はしていませんからね」

「な、なにに！？そ、それじゃあ……あちしの事……ダッ ワイ  
って思ってたのかあ！？」

なぜ、そうなる……（汗）

「とりあえず、ちやちやっとなら……」

ガラッ……

「その会議、ちょっと待ちたまへ」

「……誰？」

教室にいきなり入ってきた人物は俺より背が高くメガネを着用し金髪のさらさらヘアの好青年的な印象を持たせる男だった。ああ、漫画でこんな奴が出てきたら『キラキラ……』みたいな擬音が出てくるんだろうな……

「まったく……こんな所で油を売っていたのですか八尾会長。しっか







ナレーション：金島さん（CV：花岡さん）

20XX年……世界はある危機に直面していた。

そう……大気圏上空にあるアルホールがついには覚醒してしまったのだ……！

10年前のアルホール形成から徐々に広がり……そしてついには半径約1万Km（当社比）のアルホールが形成されてしまったのだ……！これによって世界各国各地でオニをせずには入れられないという恐ろしい怪現象が多発してしまっただ……！ちなみにその症状を『オニ症候群』と考古学者スルメ・タベターナさんが名付けた……！ちなみに症状はなぜか男限定だ……！ひゃっほー……！……！……！……！

これはそんな荒れる世の中……そんな世を生きた2人の男を描いた壮絶かつ筆舌に尽くしがたいめくるめくふるいでかつ生々しい魚のような物語……！……！

『だ、だめだ……！も、もう！俺、我慢できねえ……！はあはあ……！……！』

『だ、ダメだ……！サル吉……！僕達はその日あの夜あの場所で誓ったじゃないか……！例え、地球が滅亡しようとも才二一は絶対しないと約束したじゃないか……！あの約束は忘れたのか？サル吉……！』

『ああ……忘れてないぜ……マルメ……でもな……だめなんだ……もう……俺……溢れそうなんだ……お前の愛で……あはは……はは……なんて様だ……こんなこと……』

『ああ……止めてくれ……やめてくれえええ……約束したじゃないか……もしこの世界の危機が去ったらいつか僕の中で尽きてくれるって約束したじゃないかああ……あ……うああ……』

『ああ……泣かないでくれ……マルメ……お、俺は……最期にお前の顔を見て嬉しいんだぜ……？だから……そんな顔を俺に向けなくてくれ……萎えちゃうよ俺……』

『サル吉……』  
『ああはあ……そんな俺の最期の頼み……聞いてくれるか？マルメ……？』

『……ああ！なんでもするよ僕……竿をしゃぶるのか？それともなでなでムニムニじゅるじゅるするのか？』

『……手を……手を握ってくれ……俺のさっきトイレ行って洗っていない薄汚い手を握ってくれるか……？』

『も、もちろん！お安い御用だわさ……！』

ギョ……

『あ……ああ……お前の温かみが俺に伝わって……』

ガクッ！

『……………サル吉？』

『……………』

『……………』

『……………』

『エンドウマメ……………』

『アル大作戦』END』

「エンドウマメ……………」（泣）

「いきなり何言ってるの！？コノヒト……………」（汗）

「いや、ね、もう、あちし感動しちゃってさ、アルホール……………」



「……………」  
急に副会長は苦しみだす……………お茶のせいか？てかそのお茶なんなんだ？

「プツ……………アハハハハ……………」 マル メの足、めっさプルプルしてる……………」 面白っ！」

悪魔か……………コノヒトは。

「くっ……………きよ、きよはコレくらいにしておいてあげるんだからね……………」

ボタン……………」

捨て台詞を残して教室を去る副会長……………なんでちょっとツンデレ入ってるんだ……………(汗)

キィ……………」

いきなり教室のドアが半分くらい開きそして……………」

「こ、コレで勝ったと思うなよ……………」

ボタン……………」  
どこかで聞いた事あるような台詞を残して去る副会長……………言いたかったのだろうか？

そして数分後、廊下から『アツ……………ちょっと漏れた……………」

「……………」という声が聞こえてきた。  
「……………さて、今日はのんびり寝るとしますか にゃふふ……………」  
そして3日目も何も決まらず会議終了……………本当にいいのかコレで)

汗)

おまけ

「ところで麻里さん。あのお茶って一体なんだったんすか？ま、まさか本当に……あ、アバ……（汗）」

「もう～ サルサルのえつちい 違うよ」

「じゃ、じゃあなんなんすか……あれ？（汗）」

「いや～、ね？なんか生徒会室のロッカーにさあ、ペットボトルがあつてさあ、なんかその中に入っていたお茶が何か変色しててさあ～」

……やっぱり悪魔だコノ人（汗）

番外編その17 『流留ちゃんの日課』 (前書き)

流留ちゃん視点です。あと、超短いです。





「ほづ？どこの同好会かね？」

「『生ゴミと親しむ会』と『牛乳を拭いた雑巾と親しむ会』の二組です」

「なんだ…そのできれば一生近寄りたくない連中は………（汗）」  
「両方の同好会ともに『学園祭費をもっと増やせ』といった内容の抗議です」

「いらんだろっ！？（汗）っていつかその連中は学園祭費を一体何に使ってるのだね！？むしろ0円でもいいだろ！？なんかすごく気になるんだが！？」

「はあ、なんかその連中から副会長と同じ匂いがプンプンしたので断りました」

「……美亜君？それはどういう意味かね？（汗）」

「……副会長、ひとつ気になることがあるのですが」

今日は珍しくも美亜君から僕に話を振ってきたではないか。

「なんだね？美亜君？愛の告白かね？」

「次、ふざけた事ぬかすと本気でムツコロシますよ  
にっこり」

「……怖いぞ、美亜君。目が本気だ（汗）」

「ああ……な、なんだね？」

「なぜ、いつも朝早くから登校しているんですか？この時期ならまだしも普段は特に仕事無いじゃないですか」

「……そりゃあ、美しき朝日を浴びながら生徒会室でコーヒーを啜る男………かっこいいではないか？」

「正直キモイです」

「ふん、惚れるなよ？」

「ごめんなさい」

「即行、振られた！？（汗）」

「ではそろそろ授業が始まりますので、これで」

「まあ、今日も1日勉強に励みたまへ」

「うるさい、黙れ童貞」

ボタン……………

「……………せめて、独身貴族って言って欲しかったな……………（泣）」

第66話『オトギリソウ』（前書き）

アリス視点です。時間軸は64話の後のお話です。

## 第66話 『オトギリソウ』

私は今日再び墓前に立つ。

そして近くの蛇口で樽に水を汲み、その墓に静かに上から水を流す。さらに綺麗な雑巾で水をふき取り墓を綺麗にしておく。

今は夏真っ盛りなので昼間は太陽がかんかんでり。そのせいで私の体の水分を見境なく奪って汗となって出ていく。暑い、けど私にはそれが苦痛には感じない。『この子』の事を考えれば……

『何もしない』方がよっぽど苦痛なのだから。

「ふう……」

ようやく、墓を綺麗にし一息つく。そして、ふと目の前の墓を見つめる。

「……もう今年で何年目かしらね……」

誰に聞くわけでもなく自問自答する私。…もう今となってはそんなことどうだっていいのに。

「……」

さて、一息ついたし最後の仕上げといきますか。

霊園に行く前にあらかじめ用意した『オトギリソウ』を枯れた花と交換する。

太陽に照らされるオトギリソウの綺麗な黄色とそれと対照的な不気味な褐色の油点が私の中の黒い、どす黒い『感情』に火をつける。

「……………」  
じっと…………じっとと墓を見つめる。その映像が記憶に留まるように、じっと。もう二度と忘れぬように、忘れないように。私の脳に上書きされてゆく。

「……………」  
ふと指で自分の唇を触って見てみると血が指についていた。どうやら知らぬ間に私は自分の下唇を歯で噛んでいたようだ。

「……………あは…はは……………」  
私は静かに笑った。だって、私の血は黒かったのよ？…フフ…フフフ…アハハ……………」

「あは……………はは……………」  
気付けば私は泣いていた。自分でもどうして泣いているのか分からなかった、笑いたいのに。

「あはは……………で、でもだ、大丈夫……………も、もう大丈夫なんだから……………」  
そう、もう『大丈夫』。いや正確にはもうすぐ『大丈夫』になる。

あの男を——あの男に『復讐』という名の鉄槌を叩き落す。

その日まで……………もうすぐ……………そうもうすぐそこ……………そこまで来てい

るんだから……

……だから、安心して良いんだよ？

——夢の中で——

……

……



無言で……私の顔を見つめていた。いや、正確には見つめているよ  
うだった。暗がりでは表情はよく覗えない。

「……………何で……………ここにいますか？」

私は恐る恐る先輩に近づく。そして視界に飛び込んできたのは……  
「……………何で……………貴方がその……………そのオトギリソウを……………その花……………私  
の花を持っているんです？」

「……………」

私はこの人の性格はよく知っている。この人は昔からおっせかいな  
人。普段はふざけた言動や行動をしているが、それ以上にこの人は  
おっせかいなのだ。その姉も然り。姉妹共々おっせかい。それが逆  
に私を逆撫でしている。……………イライラする。なんでこのタイミン  
グで……………この人が!？」

「……………何とか言ったらどうなんです？先輩？」

私はどす黒い『殺意』を抑えてできるだけ平常を装った。

「……………フツ」

そして、鼻で笑った。……………それだけで私の感情は収まらなくなった。  
……………なんだその笑みは!？なんだその顔は!？何がおかしい!？何が  
おかしい!？何がおかしい!？何がおかしい!？

ガツ

「何が……………おかしいっ!？」

私は先輩の胸倉を掴み大声を上げた。そして、先輩をじっと睨みつ  
ける。射抜くように、じつと。

「……………これは」

ようやく口を開くとあるう事が先輩は笑いながら……………

「……………これは、罰ゲームなんだよアリスちゃん、にやはは」

「……………はあ？」

何を言ってるんだ？この人は？逆に笑いたくなってくる。

「ぶっ……………ははははは!?!?!?!?!」

盛大に笑ってやった。どうだ？さっきの仕返しだ。さあ、怒れ。怒  
りなさいよ!?!?!ああ!?!?





「……」

私は力任せに何度も先輩をぶった。何度も。何度も。何度も。何度も。何度も。

「う、うう……ああ……あ、あ」

そして地面に先輩を投げ落とした。ついには泣き出したか。

「言えないなら……私のやる事にいちいち口を出すんじゃないわよ  
倒れている先輩から私の花……オトギリソウをとる。」

「だ、ダメえ……あ、アリスちゃ……」

先輩の弱々しい声を無視して私は再び歩き出した。

「ふふふ……もうすぐ……もうすぐだからね」

「……………オトギリソウの花言葉は『恨み』……………」



第67話 『知らぬが仏と会長は僕に警告する、言って無いけどね実際』

クラス学園祭実行委員会4日目放課後。

俺達、クラス全員が体育館に集まった。というのも会長が校内放送でクラス全員を体育館に放課後集まるよう呼び出したからだ。そして……

「……で？なんで俺達は犬笛を持たされてるんだ？」

体育館に入るとこれ見よがしに床にクラス全員分の犬笛が置かれていた。規則正しく置かれていたものだからなんか少し不気味だった。「さあな？犬でも呼ぶんじゃないかねえのか？まあ、俺がピーピー拭いたらかあいチワワがキャピキャピ集まってくるだろうがな、うへへへ」

サル、てめえにはブルドッグで充分だ。

「ん~~~~っ！ん~~~~っ！！！」

夏美は俺の隣で顔を真っ赤にしながら犬笛を吹く練習をしていた。

お前どうでもいいことに頑張りすぎ。

「にははは……ユリユリ、犬笛はね？こうやって持ってね……そいで穴に……ゴニョゴニョ……」

「あ、穴……ですか？（ノノノ）」

我がクラス担任、麻美さんは百合ちゃんに怪しい犬笛の使い方を教えていた。

「きゃははは メガネ、討ち取ったりい~~~~」

カポ~~~~ン!!!!

「あぴゅん!!!!」

宮子はどこから持ってきたのか先に球の付いた木琴を叩く棒を振り回し、偶然近くにいたメガネの股間にそれが直撃した。あれは痛い。「う、うへへへえ……い、痛いですう（ノノノ）」

股間を手で押さえながらなぜか悦んでいた。キモイとしか言いようが無いな。

それにしても……肝心の会長が来ないな……麻美さんに聞いてみつか。

「おい、変態教師。あんたの妹の呼び出しでここに来たのにその本人がこの場に居ないのはどういうことだよ」

「あたしは知らないわよう、麻里ちゃんが勝手に呼び出したんでしょ？」

……それもそうか、結局待つしかないのか……

1時間後。

「やーやーやー、待ったかね？諸君？」

なぜかえらそうな顔で体育館に入ってくる麻里さん。

「あんたいい加減にしろよ……なんか他に言う事あんじゃねえのか」

「ああ、言い方が悪かったかな？諸君オマター」

「スラングになつてるじゃねえか！！！」

「じゃあ……諸君！！アディオス！！！」

「コラコラ、帰るな」

「もう！耕司君はわがままだにや~~~~！！！！」

「わがままはてめえだっ！！！！！！」

くそ……なんかどうでもよくなってきた……

「……で？なんなんですか？この犬笛？」

「何って……学園祭のクラスの出し物」

「はい？わんもあぶりーず？」

「だから学園祭のクラス出し物なの？」

いや……聞かれても……（汗）

「いや……コレをクラスに展示するって……ちょっと不気味だぞ、おい（汗）」

教室に入ると犬笛が意味なく綺麗に床に並べてある光景を想像する

……不気味だ(汗)

「……何言ってるの？耕司君？犬笛は吹くためにあるものだぞ？」

「いや…わかってるけど…どこで？」

「ここで」

「はい？」

「だからあ、こ・こ」

ここって……体育館？(汗)

「何言ってるんですかアンタ。ここは演劇部とかブラスバンド部が学園祭当日発表する場でしょ？できるわけないじゃん」

「ウフフ……それは会長特権で使えるようになったのだ。あ、けど学園祭の2日目の午前中だけだね。さすがに2日連続1日中は使用許可下りなかったからさ、にやはは」

横暴だコレ……(汗)

「んで、その出し物だけでも当日までにクラス全員が白目むき出しで犬笛を吹けるようになるまで練習ってことで、ヨロシコ にやはは」

「ヨロシコ じゃねえよ!!!ふざけんなっ!!!んな出し物不気味すぎるわっ!!!怖いわっ!!!客、引くわっ!!!ってというか勝手に一人で決めんじゃねえよ!!!!!!!」

犬笛の空しい音が体育館に木霊する……ちよつとしたホラーだ。

「にやはは 真に受けるなよー、冗談冗談 今日クラス全員に集まってもらったのはこの体育館の舞台で何をするか決めてもらうかなのだ」

「あなたの発言は冗談に聞こえないんですけど……」  
ってというか今更だけどこの人やつぱ自分勝手だー

「なあなあ、耕司。こういうのはどうだ？舞台の上で全員が大太鼓ガンガン叩くんだ、かっこよくねえか？」

大太鼓を叩くジェスチャーをするサル。

「どの辺がかっこいいのかまるつきり分からないがとりあえず煩いからな」

「いいじゃん、大太鼓を使ってだな……ホ モンの曲、熱唱しようぜ!!! 熱いじゃねえか!!! なあ!？」

「とりあえず喧しすぎるからやめてくれ」

んなもん体育館でやったら耳が潰れるわ。

「じゃあさ! じゃあさ! あたしの飼ってるウーパールーパーのかわいさについて3時間くらい語るのはどう!？」

宮子がキラキラした目で俺に言う。

「意味わかんねえし、それすでにクラスの出し物じゃねえし、無駄になげえし、あとウーパールーパーかわいいし」

「なんだよう~~~~ドサンピン~~~~オロスぞ、こらあ?」

「ドサンピンって…… (汗) いやあのな? 仮にそれやってお前がウーパールーパーについて熱く語ったとしてもその間、他の奴は何すりゃあいいんだよ? クラスの出し物じゃねえじゃん。あと、ウーパールーパーはかわいいけどな」

「ええ~~~~? いいじゃん~~~~ なんなら私の横で皆が『ウーパールーパーサイコー、ヒヤッホー~~~~ウ!!!!!!』とか叫んどけば済む話じゃん」

「いやいやいや…… (汗) んな奇声発してたらキチガイとか思われるじゃん? 何度も言うけどウーパールーパーサイコーキャッホー~~~~ウ」

「ふむ… ならこんなのはどうかね? 村上キユン?」

「却下」

「マダナンニモイツテナイデスヨ!? (汗)」

さらに1時間後

「決らねえな……」

「むむう……じゃあ、仕方ないにや……続きはまた明日ってことで皆何するかオウチで考えといてね……んじゃあ、解散!……」  
ゾロゾロ……

会長が解散宣言をするとクラスの皆は帰っていく……

「お兄ちゃん 帰ろっ!」

「耕司さん、帰りましょう」

「………帰る」

すると、夏美と百合ちゃん……おっ、珍しくミントが声を掛けてきた。  
しかし……俺は会長に聞いておきたい事があった。

「スマン……悪いけど先に帰っておいてくれるか?ちょっと用事あるから!」

「あっ!?!お兄ちゃん!?!」

ダッシュで会長を追いかける俺。

「麻里さん、ちょっと待ってください!……!……!」  
中庭で歩いていた会長に声を掛ける。

「……?耕司君?なに?もしかして……愛の告白!?!いやん」  
「ちよつと聞きたい事があるんですけどいいですか?」

「華麗にスルーされちゃった……にやはは……(汗)いいよ、何かな?」



「アリスさん……2日前から見ないんですけど……麻里さん、何か知っていますか？」

「……………」

麻里さんは俺の言葉を聞いた途端、無表情で……俺の顔を見つめた。  
……やっぱり何か知っているのか？今回の学園祭の実行委員会を見ている限り会長とアリスさんは結構前から親しそうな感じだったし……。それに気になって千里さんや夏美にその事を聞いてもなぜかはぐらかされるし……皆、何か隠しているみたいだった。…俺があまり立ち入っていい話ではないかもしれないが……だからこそ気になる。千里さんが前言った『男性恐怖症』……これに関わりがあると思うが……。けど、別にそれは『興味』から来るものではない。昔の俺がしたように……アリスさんを……『救いたい』だけ……？あれ？『救いたい』って……『何』から？俺は……

「……………知らないっ！」

「あ！？ちよっ……………会長！？」  
気付いたときにはすでに会長は走り去った後だった……  
「……………帰るか」

「俺の知らないところで何が起こってるんだ……………なあ、アリスさん……………」  
雲一つ無い夕暮れの空を見上げて俺はそう呟いた。

第68話『ウロロちゃんのおルナイトトーキング第2回目』(前書き)

今回は……まあ、とりあえず本編ドウゾ。

## 第68話『ウコンちゃんのオールナイトトーキング第2回目』

今日は色々な事が立て続けにあつてかなり疲れた……

目先の学園祭のクラス出し物の事……（まともに話し合つてすらないような気が……）

突如、俺達の目の前から姿を消したアリスさんの事……（千里さん達は何か隠しているようだったが……）

そしてアリスさんの事を聞いた時の麻里さんのあの反応……（やっぱり麻里さんも俺に何か隠している……）

「はあ……」

何かもう肉体的にも精神的にも疲れた……皆も話してくれたいのにな……隠し事なんて……いやいや、俺が知るべきでないことかもしれないな……それに……冷静になつて考えたら仮にソレを知つたとして俺に何が出来る？何をすべき？……簡単に『答え』が見つかる訳が無い……その人にとって明確な『答え』などそれが正しい道かどうかも分からないしましてや他人から教えられるものでもないだろう（アドバイスはできるかもしれないが）……それほど『答え』とは未知の選択……つまり、人が都合の良い様に解釈した『言い包め』の単語なのだ。だから正確な『答え』など存在しない。（数学的な観点から見れば存在するかもしれないが……）だから人生は楽しいのだ。あらゆるフラグ……じゃなくて『選択肢』があつてこそ人は迷う、考える、悩む、そして生きていく。あらかじめ決められたレールを走るより先が見えない暗闇のレールを走ることの意味があると思う。だから……生きるのが楽しいと思う。その先にどんな『結末』が待ち構えようとも……一生後悔しないように今を精一杯生きていけばいい……と俺は思う。

「ふあああ……」

とりあえず、明日も学校だし寝るとするか……そして俺は布団に潜り込む……はずだった。





な

何言ってるんだ……この男は（汗）

『どうすればいいと思います？ホモの勇輝様？つーか、死ねバーカ』

『ずばり……泣き落としが効果的だな、童顔の君をからかう女子達は飢えているんだ、美少年に。ああ、けれどそれは男に飢えているとは意味合いが違うからそこは注意な。つまり……彼女らは求めているんだ。美を汚れを花園を……その先に見えるのは一つ、『カツプリング』さ。つまり彼女らは『腐女子』なんだ。良い響きだろう？そんな彼女らからいじりがいのある君を取るのは残酷だろう？きつとそれは結果的に君を破滅に追い込む……だからここはあえて『泣き落とし』。君を弄っているのはきつと女装させたりとかだろう？それはまだ第一段階だ、そしてそこから第二段階へと進める必要があるわけだが……その触媒作用となるのが『泣き落とし』だ。君の抵抗ではまだ第二段階へのエネルギーが足りない。だがそのエネルギーを超えるのはS音様 M音様になるのと同じくらい至難な事だ。そこでエネルギーを超えるのではなくて彼女らからそのエネルギーを減らす……つまり俺が言いたい事は『泣き落とし』による精神的攻撃の弄られ緩和をしてみてもどうだつとということさ。わかっただかね？S音様サイコー！！くん？』（この間約5秒）

お願いだから日本語を喋ってくれ勇輝……（汗）

『へえ……つまり、『泣き落とし』が効果的なわけですねっ！！ホモの勇輝様ありがとございました！！つーか、死ねバーカ』

『ウコンちゃん……さっきから『死ねバーカ』しか言ってる無いような気がするの俺の気のせいかな？』（汗）

『じゃあ、二通目つくよぉ〜！ペンネーム：死んじやうツモ さんからです。こんばんは、僕は某高校に通うしがない高校1年生です。最近、彼女ができました。でも……その僕の彼女は……『ツンデレ属性』と『ヤンデレ属性』の両方を持ち合わせた『ツンデレヤン属性』なんです……これから先の事が心配です。どうやって付き合っていけばいいと思いますか？P・S・なんか最近彼女の蹴りが快感になってきています。やっぱり『ツンデレ』は最高ですね、うへへへへ、痛いです（ノノノ）』

相談を受ける前にまずコイツの頭を治療してやった方がいいんじゃないのか……？（汗）

『ほう……『ツンデレヤン属性』か……珍しいな。そういえば先月、俺の近所の知り合いのお姉さんの妹さんの婿さんの従兄弟の弟の嫁さんの祖母の妹の息子の友達のお父の経営している喫茶店のアルバイトの女性の彼氏の元彼の中学生時代のイジメ相手の二つ下の妹と同じそろばん教室に通う少年のお母さんの生き別れの二つ上の兄のヒモの女の通うエステのキム ク似のイケメンのお兄さんの客のばあ（70）の愛人のキム ク似のリーマンの正式な妻と実は浮気相手のぽっちゃり社長の知り合いのイケメン外人のボスのアラブの大金持ちと敵対するサウジアラビアの大金持ちの雇っている側近のじじいのゲイビトのやっぱり油ギツシュのじじいの所有する別荘を1億円で買い取ったけど実は騙された悲劇のヒロインを演じる声優のセクハラ上司の被害となった実は昔、整形していた事がばれてクビになってサーカス団の一員になろうと志したが半ばで諦めソレをみかねた御曹司の家庭教師の裏切りにより潰れた塾長の後継者の生徒……じゃくて未だに親離れが出来ない塾長のママのプリンを食べた次男はお腹を下し、搬送先の病院で恋仲となった医師（ ）の娘がそれにかかったな。いや……あれはなんとも形容しがたい症状だったな……だってあれだぜ？ツンデレモード化と思いきやいきなり誰かの名前を叫びながらわらわら人形を打ち付けているんだぜ？その直後』



み、見ないでよね！！ば、バカ！！（ノノノ）』とか言い出すんだぜ……あれにはさすがに付いていけなかったな、俺は。そこで俺は彼女をじつと観察していた。するとある事実を知ったんだ。定期的にモードが変わるのではなくある法則にしたがってモードが変化していくんだ。そう、もう気付いたよな。なんと……彼女は1度見た男を忘れ、その後またまるで初めて出逢ったかのような振る舞いをするんだ。つまり………忘れた頃にヤンデレ発動、思い出す頃にツンデレ発動するわけだ。すごいだろう？まるで恋心をしらない悲劇の乙女みたいだろう？まさに彼女はそのお通りだった。見た目はおしとやかで清楚な女性だ。けど中身はそんな闇を抱えているわけなんだな………そこで彼女の性格を社会的窮地から視点を変えて説明

………』

ピ  
………

………もう、寝よう。



「……………あれ？」

『ハイ おはようございます 村上君 良い夢見れました？ウフフ……………さあ、今日も1日張り切って頑張りましょうね……………』  
(千里目覚ましVoice)

『やつほー 耕司君、グッモーニング きやははは コーファンした！？コーファンした！？ちなみに今の喘ぎ声は私がかつちやったのでした ぷぷぷ…………… 耕司君のエロエロガッパー きやはははははは』  
(宮子Voice)  
ポチ……………

「……………なんて屈辱的な嫌がらせだ……………(ノノノ)」  
青少年の夢を返せ、バカヤロー……………(泣)

「はあ……………とりあえず起きるか」

今日は……………(携帯で確認)……………って土曜日かよ(汗)じゃあ、昼まで寝よう、オヤスミー

「……………」

ミーンミーンミーン

「……………」

ミーンミーンミーン

「……………」

ミーンミーンミーン

「……………寝れるかポケエ……………ガバツ……………!!」

「くっ……………暑くて寝れるか……………扇風機もエアコンも壊れとるし……………あ……………もう……………これじゃあまるでサウナ室で寝てるみたいじゃねえかよ……………!!」

というか、よく今まで扇風機もエアコンも無しにアホみたいにグー  
スカグースカ寝れたな……俺（汗）

「……………ん？これは……………」  
ふと自分の部屋の床を見る。そういえばこの寮の部屋の床、フロー  
リングだったっけ……………よし、今いい事思いついたぞ。とりあえず  
服を脱いでつと……………そして俺はトランクス1枚となった。人様に  
見られたら恥ずかしい格好だがお生憎様、ここは俺の部屋なのでお  
構いなし、ぐひゃぐひゃひゃぐげげ

「フローリングキャットホ……………ウ……………！！！！！！」  
そして、トランクス1枚姿の俺はフローリングの床にうつ伏せで寝  
転ぶ。冷えたフローリングが俺の身体から急激に熱を奪い取ってい  
く……………ああ、気持ち良い……………う……………ん、今のこの幸せな気持ち  
を声に出して言うなら……………

ガラ……………  
「お兄ちゃん、入るよ……………」

「フローリング最高……………！！！！！！イヤツホホホホ……………  
……………イ……………！！！！！！キヤキヤキヤキヤホホホホ……………イ  
……………！！！！！！」

「……………つて、うえ……………うわっ……………！！お、おおお兄ちゃん？な、何や  
つてんの……………！（汗）」

「……………ん？夏……………つて、うきやああああああああああああああ  
ああん……………！！！！！！……………！！！！！！」  
み、見られた……………！？夏美さんに見られたぜよ……………！（汗）

「あ……………あの？ナツミサン？違うのですよ……………コレはその海よりも  
深いわけがあつてデスネ…………………………（汗）」

「あ……………だ、大丈夫だよ、お兄ちゃん。お、男の人ってそうやつ  
て……………その……………モニヨモニヨ……………を……………ゆ、床でスリスリして……………そ、  
その……………お、おつきくして……………う、うん！ボクは……………わ、わかってる  
から大丈夫だよ

、お兄ちゃん、えへへ……………だ、だから続けていいよ…………………………ぼ、ボク

はし、失礼して……（ノノノ）  
「ちつがーーーーーう!!!!!!全然、分かってないよおーーーー  
ー!?君いーーーーー!?（泣）」  
てか、そんなオ ニー、変態過ぎるじゃねえかあーーーーー!!!  
!!!（泣）

とりあえず、普段着用。

部屋を出ると夏美は顔を赤くして部屋の前で体育座りして待っていた。……ぬう、今日は赤か。情熱的だな、オイ。  
「あ、あれ?も、もついいの?お兄ちゃん?そ、その……お、オナ  
「するかあ!!!んなもん!!!どうせならカップめんで……」  
「か、カップめんで?（ノノノ）」  
「……って違う!!!違うぞ!?!……ってんなことはどうでもいい!  
!?!……で?夏美?俺に何か用か?」  
「あ……うん、お兄ちゃんに電話だって……ちーちゃんが……」  
「ん?誰から?」  
「『Mr.ビン』さんって人からだよ」  
「……」  
「なんだか激しく嫌な悪寒がするんだが……」  
「とりあえず、電話待たせてるから早く1階のリビングに行った方が  
がいいと思うよ」

「あ、ああ……そうだな……（汗）」

とりあえず、リビングに到着し千里さんから電話の親機を受け取る。  
「もしもし……」

「ハアハア……き、君の今日履いているパンツ……ハアハア……な、何色かな……？うひっ！ヒイヒイ！うげぎゃげぎゃげぎゃげぎゃげぎゃぎゃ……！」

パタン……ツ……ツ……ツ……  
ブルルルルルルルルルル……  
ガチャ

「もしもし……」  
「何だよお……！……いきなり電話切るなよお……！……ぷっ……！……！」

「自分、冗談通じないタイプなので」  
「なにイ！？そんなんじゃダメダメだぞお！？耕司君！？せつかく総受け顔してんのに……！しっかり自分を磨かなきゃあ……！！！」  
「そんな自分は磨きたくないですから……（汗）って、その声は麻里ですね。何の用っすか」

「にやふふふふ……あちしのヴォイスだけであちしと分かるとは……あちし達、『意図不明』？」  
『意思疎通』の事だろうな、きつと。

「俺が意図不明です」  
『にやははは まあ、んな事はどうでもよくてえ……耕司君、明日暇？』

「……忙しいくて会長に構ってられません」  
あえて嘘をついてみた。









## 第70話『そんなのぶつちやけありえない』

200X / / 6:09

From: ロリっ子ロリロリかいちょ〜 (麻里さん)

Subject: 無題

〜明日のあちしと耕司君のラブラブデート 大作戦 決行日時

決行日: 明日

集合時間: AM5:00

集合場所: とらのアール前

### 注意事項

- ・おやつは300YENまで (あつ、でも例外としてチョコバナナとウインナーはおやつとしてカウントしないのでヨロシコ〜)
  - ・お昼の用意は無しって方向で
  - ・当日までに出すもの出してから出席する事 (あつ、意味分かるよね? よね? にゃふふふ……)
  - ・当日はぜ〜〜ったい! 1人で来る事!
- 以上!

「……………はあ……………」

昨日、麻里さんから送られてきた携帯のメールを眺める俺。というのも少し早めに来てしまったので単に手持ち無沙汰になったからだ。

「ふあ……………ねむっ……………ていうか、さむっ!」

現在の時刻、AM4:45。

いくら夏といえどこの時間帯はまだ少し肌寒い。ていうか、嫌がらせにも程があるぞ麻里さん…………… (汗)

…てか律儀に早めに来る俺って一体……（汗）まあ、でもそのおかげで夏美や百合ちゃん目の盗んで外出できたわけだが。

「集合場所……とらのアル……」

とらのあ の間違いだ馬鹿野郎。

「おやつは300YENまで……チョコバナナとウインナーはおやつにカウントしない……」

わざわざ注意事項に挙げるな馬鹿野郎。

「お昼は用意不要……？ 外食でもすんのか？ いや……まさ……かな……」

手作り弁当……

『ハイ 耕司君 あ~~~~んってして あ~~~~ん にゃふふ』

『うん あ~~~~ん』

ぱくっ

『どう……？ 耕司君？ おいちいかにゃ？（ノノノ）』  
もっきゅもっきゅ……

『……うん めっさおいちいぜっ！ 会長！ 主にこのポークピッツがサイコーー！ うっはあー！ ……おいち過ぎて僕ちゃん手が止まらないぜえ~~~~！ ひゃっほ~~~~う~~~~！ ……！』

ガツガツガツガツ！！！！

『にゃはは もう、そんな焦らなくてもいっぱいつくってきたからどんだん食べて』

ガツガツガツがツ！！！！

『……ふう、ご馳走様でした。 弁当おいちかったぜ、会長。 主にポークピッツ』

『にゃふふ オネエサンも耕司君がこんなに喜んで食べてくれます



( 昨夜の回想 )

ピーンポーン

『……………?こんな夜遅くに誰だ……………?』

夏美か……………?また、寝れないから来たのか?

百合ちゃん……………?なんか開けたら色んな意味で危ないような気が…

……………(汗)

ミント……………ありえないな。

アリス……………はいないんだっとな。

麗奈さん……………?てか最近登場回数少ないから出ないよね、多分。

千里さん……………?いやいや……………あの人も一応もう大人だしそんな非常

識な……………夜に美男子の部屋にこっそりと忍び込む熟女……………なん

かエロイ。

……………あとは……………

……………あ……………なんか今頃になって嫌な予感がヒシヒシとしてきた

……………(汗)

そしてドアノブに手をかけ……………

ガチャリ( そろりとドアを開ける )

『 ……はい?どなたさ……………』

『 こんばんわ 耕司さん 』

ボタン( 咄嗟にドアを閉める )

……………

今なんか……………ネグリジエを纏ったジョウイチロウクンのすがた……………

『 うん 見なかったことにしよう 』 (まきい みさん声で)

「 ……それにしてもやっぱり会長遅いな……………」

まあ、ある程度、予想してただけ。

「てか、もう7時だぞ……………（汗）」  
あれから2時間以上待っていたことになる。てか、そろそろいい加減しばきたくなってきた。  
もう……………切れても……………いいんだよね……………？  
「さて……………パーでいくか？グーでいくか？」  
そんなしょうも無いことを考えながらふと顔を上げると俺の目の前にいた人物は……………

「……………村……………上？」

「……………へ？」

ちよっと寝起き感、丸出しのアリスだった。

番外編その18 『キャラクターはお好き? (前編)』 (前書き)

人格崩壊した人って怖いですね、主に言葉様とか言葉様とか言葉様とか。

番外編その18『キャラクターは好き? (前編)』

「おっす！耕司君！」

「……………もぐ……………あん？」

昼休み。学食でカツサンドとコーヒー牛乳を購入し、食いながら教室に戻る途中で廊下でバツタリ宮子と出会ってしまった。

「……………お前……………なにその格好……………(汗)」

宮子はなぜか魔法少女……………というよりまるで今から悪魔でも呼び出すかのような怪しい格好をしていた。

「ん？耕司君今からお昼ごはん？ラッキー　ちようどよかった」

「？」

「あなたのお昼のお供にプレゼントフォーユー」

ドロドロドロドロドロ……………

宮子はなにやら怪しい液体の入った瓶を取り出し、栓を開け……………その液体を俺のカツサンドにぶっかけて……………

「うおっ！？て、てめえ！？いきなり俺のカツサンドに何しやがる……………」

「まあ　まあ　いいじゃん　それかけたら君のカツサンドがもつとおいしくなっちゃう　きゃは」

「ざけんなっ！いきなりこんな赤黒くて粘々した液体なんぞぶっかけられたら食欲うせるわ！！返せ！！俺のカツサンド！！…まだ一口しか食ってなかつたんだぞ！！！」

「『ご　んですよ』みたいなもんだって　きつとおいしいよ……………」

……………多分……………

「多分ってなんだよ！多分って！？(汗)」

ていつかこないかにも怪しそうな液体口にしたくないわ！！！！

「もぉ……………いちいち煩いなぁ……………甲斐性無し……………」

「ご、このアマ……………てめえ、男だったらぶん殴ってるところだぞ……………」

……………」



「しゃあねえ、このカツサンド（？）は捨てるか……さよなら、俺のカツサンドちゃん（享年一口）（泣）」

「ありり？耕司君、そのカツサンド食べないの？」

「食べるか！……こんなもん！……！」

そして、捨てようと宮子に背を向け歩き出すと……

「ん？よう、耕司」

サルと廊下で出会いました。……コレ、捨てるのもなんだしな……

……

「ちょうどいいところに来たな、サル。コレ……食う？」

「マジで！？いいのか！？ラッキー 俺、今日昼飯ねえんだよ！ありがとな！いったただきま……す……！」

ひよい、パクッ

「あ……」

俺の手からカツサンド（？）は消え、次の瞬間にはサルの口の中に納まっていた。

「もつきゅ……もつきゅ……ん……ゴックン。ぶは……！サンキ

ユー！耕司！これで少しは腹の足しになったぜ……！」

「あ、ああ……（汗）」

……ところであの怪しい液体はなんだ？サルは平気な顔してるし……というより幸せそうな顔をしている……実に扱いやすい男だ。

「おい、宮子」

「ん？なに？耕司君？」

「あの……サルがカツサンドと一緒に食っちゃったけど、さっきの怪しい液体はなんだ？」

「ああ……んと、あれはね……」

「……うう……ぐあ……あ……ああ……」

「……ん？おい、どうしたサル？」

サルを見るといきなりお腹を押さえてうずくまっていた。

「おい！？大丈夫か！？しっかりしろ！？おい！？」

「あ…………あ…………うあ……………」

「おい！？返事をしろ！？」

「……………」

「おい…………サル？」

「う」

「『う』？」

「う、ウキヤ……………」

「ぬおっ！？」

いきなりサルはサルのごとく……………ってわかりにくいな……………じゃなく  
て慎也はサルのごとく飛び上がり奇声を上げ始めた。

「ウキヤ！ウキヤ！ウキヤキヤキヤキヤ……………」

「……………」

パリーン！パリーン！パリパリーン！

するとサルはなぜかいきなり裏拳で廊下の窓を割り始めた！！！！

「おい！？何やってんだ！？やめろ！！！！」

「ウキヤ、ウキヤツキ！ウキヤ！ウキヤ！ウキヤキヤキヤキヤ……………」

「……………」

パリーン！パリーン！パリパリーン！

「おいコラ……………やめろって……………ていうか、てめえ人の話を聞き

やがれ……………」

「ウキヤウキヤウツキヤツキヤキヤメキヤキヤ……………ウツキヤ

……………」

パリーン！パリーン！パリパリーン！

「ウキヤツキヤメキヤツキヤキヤ……………ウキヤツキヤ！キ

ヤキヤ！ウツキ！ウツキヤキヤキヤ……………」

「何言ってるのかさっぱりだわボケ……………日本語を喋れ……………」

「ウツキヤ……………」

……………

……………

そして、充分楽しんだのかサルはまるでサル……………じゃなくて慎也は

まるでサルのごとく走り去ってしまった。

「……………何だ、アイツ……………(汗)」

いきなり慎也がおかしくなったのもあのカツサンド(?)を口にしていたからだよね……………つまり……………

「……………ちよっとこっちに来なさい 春ちゃん」  
ガシ!

「うっ……………あ、あは はははは……………(汗)」

「……………何? 『人の暗黒面を前面的に出す薬』……………?意味わかめちゃうんなんだけど?」

「えっと……………分かりやすく言えば、その人の……………う……………ん……………なんて言えばいいかな? 『個性』を出させる薬かな?面白いでしょ」

「……………じゃあなんだ、あいつ(慎也)の個性は野生的なバカザルってことなのか……………(汗)」

強烈的な個性だな……………オイ(汗)

「……………そうなるねえ……………まあ、サルモドキがモノホンのサルになっちゃったってとこかな?」

「……………そんなものを俺に飲ませようとしたのか……………お前は……………(汗)」

「あ、あり……………?怒っちゃったカナ?カナ?(汗)あっ!でも、大丈夫。効果は1日だから!多分、明日の今頃にはサル君、真人間に戻ってるよ!……………きつと」

「ねえ?きつとってなに?きつとって何かな?かな?(汗)」

サル……………かわいそうに。今日一日、本能のみで遅しく生きていけよ

……………

「ていうことで、面白いから他の人にも飲ませてみようよ 耕司君」  
「お前は全然反省して無いな!!!!」

教室に入ると……

「おお、耕司キョンちょうどよかった。さっそくコレを着たまへいきなりメガネが赤フンを渡してきた。

「……お前、何やってんの? (汗) ていうか赤フン一丁で教室徘徊してんじゃねえよ、少しは自重しろ変態メツガー……ネ」

「ふむ……この夏を乗り切るバツチリアイテム……その名も『赤フンドシ』! 通気性もよし! 機動性もよし! 実用性もよし! その君! 今年の夏は赤フンで決まりだ! 赤フンフィーバーバアアアアア!!!!!! ヒャッホー……ウ!!!!!!」

「聞いちゃいないね」

「君の夏のお供に赤フンプレゼントフォーユー」

「いらねえっての」

ていうか、暑くなったからそろそろ頭がイっちゃったのかね、コイツは。

「女子にも勧めているのだがなかなかうまくいなくてね」

「それは犯罪行為だからやめとけ」

今更だがマジでコイツの将来が心配になってきた。

「耕司君、耕司君、次はメガネ君に飲ませてみようよ。この液体」

「……はあ? (汗) 何言ってるの? お前?」

「いいからやってみようよ! さっそくこのワイングラスに入れて……と」

トクトクトクトク……





番外編その19『キャラクターはお好き?』(後編) (前書き)

更新遅くなってすみません(汗)短い夏休みを堪能していました。  
次回から本編再開です。

番外編その19 『キャラクターはお好き? (後編)』

当てもなく校舎内を彷徨う俺と宮子……

「つてかさあ……宮子、いい加減お前その格好やめてくれない? さつきから周りの連中の好奇心な視線が俺のピュアハートに突き刺さんだけど」

「ええ……でも、服の下に白スク履いてるよ? ほらあ  
チラリ

「見せんでいい!!!」

「ええ……でも、耕司君の間『ハアハア……やっぱスク水の足の付け根の食い込みはたまりまへんなあ……ぐげげっ、うぎやぎやぎやつぐげっ!!!』とか嬉しそうに語ってたじゃん」

「そんなオヤジ見たいな危ない台詞は言つてねえ!!!」  
でも、いいよね!!! スク水!!! 身体のラインが見えるあのフィツト感がさ!!! ねっ!!!? みんな!!!

「ん……? ありや? 耕司君と宮っちじゃん。どしたの? 次はあたしの講議だから遅れんなよ」

廊下で麻美さんに出会った……てか

「あんたからまともな発言聞いたのこれが初めてな気がする……(汗)」

「なによ、失礼な子ね! そんな事言う子は罰として私がここで公開オ ニー」おつ始めちやうわよ!」

お前がやるんかい!!!

「お願いですからどうかお止めください……(汗)」

「んふふふ……よし! じゃあ、あたし喉乾いたから悪いけど……」

「ハイハイ……コ・ヒーでいいですか?」

「耕司君のミルクちよーだい」

「やっぱ全然変わってねえな!!! あんた!!! (汗)」

「ねえねえ、耕司君」



宮子が俺の肩に手をかけ声を掛けてきた。てか、何気に近い、近いよ宮子さん（汗）いいシャンプーの香りしまくり、しまくりだよ宮子さん、今頃気付いたけど何気にかわいい、かわいいよ宮子さん（ノノノ）

「?どしたの?耕司君?」

「い、いや……!なんでもねえ!（汗）で!?!なんだ!?!（汗）」

「?……うっん、えつとね……」

な、なんだ…ま、ましゃか今の俺の何を考えていた気付いたのか! ?考えていた事を知らぬ間に口に出してたとかいうギャルゲーの主人公にありがちな行為してたか! ?俺! ?（汗）

「麻里先生ってバツイチだよな?」

「いきなり本人を目の前にして何普通に言っちゃってんの! ?この子! ?（汗）」

てか君、麻里さん何歳か知ってる! ?三十路超えて無いよ! ?この人! ?まだ、二十歳だよ! ?二十歳! ?その発言は死亡フラグだよ! ?（汗）

「う、うそ……な、なんでばれてんの……まだ誰にも言ってるに……」

「マジかよっ! ?（汗）」

「うっん、嘘じゃないわよう……そう、あれは30分前の出来事…

……ぼわんぼわん（回想シーン突入時の擬音）」

「ついさっきじゃねえかつ! !……え! ?ちよっ……嘘! ?ここ  
で回想シーン入んの! ?いらぬよ! ?そんなシーン! ?（汗）」

そう、それはあたしが学校に登校中の自宅のすぐ近くの公園での出来事……





ツプだよ！？この子、オヤ　口さまみたいに張り付いてきたの！？

コワッ！（汗）怖すぎるぞ！？コレ！？（汗）

「うふふふ……もう少してボクと耕司さんとで接吻を交わすところでしたね……　なんだか照れちゃいますね　えへへ……（ノノノ）」

「君はそんな悪魔的なハプニングを企んでいたのかい……　ジヨウ  
イチロウクン？（汗）」

「よっし！決めた！」

すると急に宮子が大声を出し……

「高宮君、コレ飲んで……！」

「ちよつと何やってんの！？お前！？」

それはやばい！やばすぎるってやつだぁあああああああ……！！！！！！！！！！

「む……それは僕に対する挑戦……　ってやつですね？宮子さん？いいでしょう……　貴方のようなメス豚に僕の愛する耕司さんを譲るわけにはいかないですね……　『汚される前に僕が汚す』……！耕司さん！見ていてください……！僕がこのメス豚に勝った暁には僕の処女を謙譲しますから……！楽しみにしててください……！」

「そして君は何訳の分からない事を熱く語ってるの！？」

「すみません耕司さん……　相手がこのメス豚でもこれは一応『一対一の女同士』の戦いですから……　静かに見守ってください……」

「……」  
「いや君、男だよな？一応？（汗）」



## 第71話『俺と彼女の選択』

「…なんであんたがここにいんのよ……」  
恐ろしい形相で俺を睨むアリスさん……

「う、ごめんなさい（汗）」

あ、あれ！？ここで謝るのはなんかおかしいだろ！？俺、超へたれ  
~~~~~!!!

「…まあいいわ。…で？なんでここにいんのよあんた」

俺の反応を察してかアリスは少し顔を緩め、俺に問う……女の子に  
気を遣ってもらう俺って一体……（泣）

「い、いや…なんか麻里さんが俺をここに呼び出して……」

デートの事は伏せた。なんか言ったら殺されそうだから。

「……………やってくれたわね。あの子……………」

そう言うとアリスさんは俺に背を向け歩き出す。

「……………え？ちょ、ちよつとアリスさん……………？あ、あの……………どこ  
へ赴かれるのでしょうか？」

俺の声に反応したアリスは振り向き……

「ついて来ないで」

それ以上は話すことは無いとばかりにこの場から離れようとするア  
リス……………だが俺は……

「ちよつと待てよ……アリス……!!!」

なぜか身体が自然にアリスの方向へ動いた。自分でもよく分からな  
い。

今から俺がしようとしている事ははっきり言ってお節介かもしれな

い。  
けど……………今、ここで俺がアリスを止めなければ……………

もう二度とアリスと会えないような……………そんな気がしたから。

「!？」

だから俺は……………いつの間にか俺の左手はアリスの右手を握っていた。

……………  
手は柔らかくて温かった。ああ……………アリスはやっぱり女の子なんだ……………これが女の子の手なんだ……………

……………  
ふと、アリスの顔を見ると……………怒っていると思ったが驚きの表情をしていた。

……………  
そしてふとある記憶が俺の脳内を駆け巡った……………

『…………アリスちゃんはね。男性恐怖症なの』

「…………っ！」

パチン

俺の手がアリスによって払われた。

「あ……ご、ごめん……………」

俺は…………バカだ。なんで…………なんで俺はあんな大事な事を忘れていたんだろう…………

こんな俺が…………俺が何が出来るってんだ…………これじゃあ、ただの変態じゃねえか…………

…………でも。さっき感じた違和感はなんだ…………？俺から離れていくに



連れてこの世界から消えていくような……

そんな不思議な……俺の感じた感覚は……

「……………」

アリスは……震えていた。なんだ……その弱々しい瞳は。こんなアリス……今まで見たことがない。

……………」

そっか……俺は禁忌を犯したんだな……俺は取り返しの無い事を

……………」

ははっ、なんだ……俺、何やってんだよ……助けるとか勝手なこと考えておいて拳句の果てにはその機会を自分で潰すって……というより何を助けるのかも未だにわかんねえのに……俺は何やってんだ……は、ははは……もう、やめよう。俺にその資格は無い……………」

「……………」もう、帰るよ。俺……………」

「……………」

最後に俺はちらっとアリスを見た。その瞳はすでに光を失っていた

……………」

俺は……結局、何も出来なかった。……いや、何も始まっちゃいなかった。

けど……今となっては……もういい。考えるのはよそっ……………」

結局、俺は何がしたかったのか？

俺は……俺自身が分からない。けど……何かおかしい。

これで本当によかったのだろうか？いや、これでよかったとそう信じたい。

これがたとえ、それが『逃げ』の選択肢であったとしても……

もう、俺に選択肢は無い。俺が決められない。全てはアリスに委ねられた。

もう、俺は……俺は……

「……ちょっと、待ちなさいよ……」

アリスが俺の『選択』を覆した。

第72話『永遠の闇と奇跡の光、それは決して交わることの無い事象』

「じゃあ私は『ジャンボトロピカルフルーツさわやかマンゴープリンとベネチアの潮風にそそられて』（5000円）で」

「じゃあ、俺は『アイスコーヒー』（300円）で……」

「はい ではご注文繰り返させて頂きます 『ジャンボトロピカルフルーツさわやかマンゴープリンとベネチアの潮風にそそられて』（5000円）』と『アイスコーヒー』（300円）』ですね かしこまりました 少々お待ちください」

フリフリのスカートを纏ったお姉さんが去っていく。……パンチラ、サイコー。

「……………」  
そして、訪れる沈黙モード……………さて、どうしてこんな状況になっただんだろう？

30分前——

「…………… ちよつと、待ちなさいよ……………」  
何かいたたまれない気持ちになったこの場から去ろうとする俺にアリスは小さな……………いや何かに耐えるかのような弱々しい声で俺を制した。

「……………」  
俺は振り返り無言でアリスを見つめる。

「……………」  
「……………」







「『助ける』……ね……もうすでに『終わって』しまっているのにね……あんた人からおせっかいな奴とか言われた事無い？」  
自分でも分かっている。人の抱える『闇』を簡単に消し去ることなんて出来ない。むしろ、『出来ない』と言った方がいいだろう。だからこそ『闇』。でも、放っておくことなんて出来ないじゃないか。その深い『闇』を『共有』して少しでも……少しでもいいからその人の『闇』にひとすじの『光』を照らしたい……そう考えるのはやつぱりおせっかいなのだろうか？  
「……やつぱり、ダメか……？」  
「話するのは別にいいわよ……でも」  
「……でも？」

「……私の『過去』を聞き終えたら今後、二度と私の目の前に現れない事ね」

『もう、私は私でいられなくなるから』

……そんな心の声が聞こえたような気がした。



アリスの何か決意した……あの時の違和感を彷彿させるような瞳  
は俺に何か求めているような……俺はそんな気がしてならなかつ  
た……

第73話『私の半身』（前書き）

アリス視点です。

### 第73話『私の半身』

私の半身――

それは私であって私でない私に最も近い存在――

私の半身――

近すぎる存在、故にあらゆる異変に勘づきやすい存在――

私の半身――

それは同時に似た思考を持ち、時には傷つける存在――

私の半身――

でも……どこか、根っこの深い……深い所で繋がっている存在――

私の半身――

それは――……この世界でたった一つの私の……

『生きがい』といえる存在――『だった』

あの男と出会うまでは――

4年前――……

私は今の学生寮から遠く離れたとある田舎町で暮らしていた。

両親は私が幼い頃に私と双子の妹を父方の祖母に預けて渡米したの  
で日本にはいない。顔もよく覚えていない。そういつた経緯があつ  
てその田舎町に住んでいたのだが、実質の育ての親である祖母も既  
に他界してしまい、その頃は私と双子の妹の2人で田舎町の家屋で  
暮らしていた。無論、まともな生活ができるはずもなく私は生活費  
のために毎日学校に通いつつ、朝夕の新聞配達のアルバイトに勤し  
んでいた。私の双子の妹もやりたそうにしていたがさすがに妹まで  
にさせるわけにもいかず、代わりに家事の手伝いをしてもらって  
いた。

「……はあ、きつついわ……」

朝の新聞配達が終わればポロチャリをキーコキーコと鳴らしなが  
ら家に向かって走らせていた。

「ていうか、上がり坂でこのポロチャリは本当に辛いわね……は

あ……はあ……」

辛い事はこれだけじゃない。家計も本当に辛い。新聞配達のアルバイトなんてたかがしれているし、光熱費、ガス代、水道代、食費ですぐに吹っ飛ぶ。やっつけられない……

「せめて、仕送りとかあつたらねえ……………」  
両親は外国にいたので催促などできやしない。恨みたくもなる、この境遇に。

「ああ……………!!もう!!もう!!さっむいわねっ!!……………」  
朝のやけに涼しい風が汗が染み付いたシャツに当たり私の体温をドンドン下げていく。あー、早く帰ってシャワー浴びたい……………

そんな苦しい中でも私はその頃の生活に充分満足していた。

「たっただいまあ……………」  
ようやく我が家に到着した私は古いガタついた戸を開き、中へと踏み込む……………」

「……………なによ、この匂い……………」  
我が家に入ると、鼻を突くような匂い……………あれだ、プールの殺菌剤に近い匂いが立ち込めていた。

「うっ……………気分悪っ……………」  
この先の状況を目の当たりにしたくないがそうも言ってもらえない。早く朝食を作って学校に行く準備をしなくては……………そして、私は覚悟を決め、我が家に踏み込む……………グニ……………?『グニ』……………?

「……………つて、うわっ!?!せ、先輩っ!?!」

床を見るとうつ伏せで先輩もとい八尾麻里先輩が倒れていた。

「ちよっ……………どうしたんですか!?!すっかりしてください先輩!?!」

「うう……………この声は……………アリスちゃんかい……………?」

私を虚ろな目で見つめる先輩はなぜか瀕死状態だった。

「あちしは……………あちしはもう……………もう、だめだしえ……………」

「一体何があつたんです!?!」

「……………にはは……………最後は……………アリスちゃんの胸の中で死ねるのは……………あちしの本望だしぎゃばっ!」

ダバダバダバダバ……………!?!?!?!?!

「うつわっ!?!?」

いきなり先輩は吐血(?)し、その場で力尽きた……………何よ、この

超展開……………(汗)

「この先に一体何があるっていうのよ……………」

……………いや、知っている。正確には私はこの先の状況が予想できるけど……………その予想は当たって欲しくないというのが本音だ。……………

……………そしてそんな複雑な気持ちを抱いたまま私は問題の匂いの源がある台所に踏踏み込んだ……………

「あつ お姉ちゃん、おつかえり…………… お姉ちゃんが新聞配達

行ってる間に私が朝食作っておいたよ……………」

爽やかな笑顔を振りまく我が妹、エリスがフリフリのエプロンを身に付け料理という名の悪行を行っていた。

「……………で？エリス？何か言う事は？」

「……………うう、ごめんなさいだよ……………」

「ええー！ー！ー！？ちよっ！？アリスちゃん！？今日は朝ごはん食パン1枚だけえー！ー！ー！？ひどいひどいひどいよおー！ー！ー！……………！こんな幼児虐待！幼児虐待！！幼児虐待いー！ー！……………！訴えてやる訴えてやる訴えてやるうー！ー！……………！！うえ~~~~ん！！！！麻里ちゃんしんぢやうー！ー！……………！！……………」

「先輩はちよつと黙ってて下さい、いや黙りやがれクソガキ」  
「てかあなたは幼児じゃないだろ。」

「で、でもでも！！！！お姉ちゃん！！！！私、努力はしたんだよ！？前よりはちよつぴりおいしくできたかな~~~~？？？つて自分で思うんだよ！？（汗）」

「……………で 努力して味噌汁を学校のプールに変えちゃうんだ〜」  
すっごおい、エリスちゃん

「えへ」

「うふ」

バン！！！！！！

「って、褒めて無いわよ！！！！！！反省しなさい！！！！！！って言う意味よっ！！！！！！」

「ひっ！お姉ちゃん！！！！鬼畜！！！！」

「どこがよ！？その家事を少しでも手伝いたっていうあなたの気持ちは分かるわよ！けどね！！結果が伴わなくちゃ結局意味なんて無いのよ！！！！周りが迷惑を被るだけっ！！！！！！分かった！？」

「……………ごめんなさい」

エリスはシュンと顔を伏せた……………しまった、また言いすぎちゃった……………はあ、やっぱりイライラしてるのかしら？私？ついエリスにきつく当たってしまった……………エリスの気持ちは嬉しいんだけどね。今のやり取りから分かるように我が双子の妹、エリスは料理が壊滅的に下手だ。というより家事全般が苦手だ。なんていうか……………要領が悪いのよね、この子は。けれど、少しでも私の負担を減らすと積極的に進んで家事をしようとするので私も断るに断れない。

はあ……………仕事之余計に増えるのは正直言っ辛（汗）

「……………はあ、もう済んだ事は仕方ないわね……………さあ、さっさと食べるわよ」

エリスの料理（？）を後片付けしていたおかげで朝食を作る時間がなくなったので今日は食パンと牛乳といういたってシンプルなメニューになってしまったのだ。

「……………うん」

しかし、私に怒鳴られたエリスはまだ気にしているのか顔を伏せたままだ……………はあ、仕方ないわね。

ワシヤワシヤ

「……………え？お、お姉……………ちゃん……………？」



私はエリスの頭を撫で……………

「はあ、もう気にして無いわよ……………だから元気だしなさい」

「……………！う、うん！……！」

さっきまでと違いパーっと明るい笑顔になるエリス……………やっぱ  
りこの子は笑顔が一番ね。容姿は私と同じ銀色の髪で髪の長さは私  
とは違いショートヘアだ。

「ぶー！ぶー！」

エリスの隣でぶー垂れているのは1つ年上の麻里先輩で私と同じ中  
学校に通っている。なぜか毎朝私の家に来て図々しく朝食を食べる。  
かなり厄介者だがいつの間にかそれが習慣になってしまった。1番  
最初に餌付けしたのが間違だったか……………

「先輩にはジャムもバターも恵んであげませんから」

「アリスちゃんひどいっ！！！！！！（泣）」

最後の食パンのかけらを口の中に放り込んだ私は学校へ行く準備を  
するために一旦自分の部屋に戻った。

番外編その20『ヒロはお好き?』

「なあ〜〜耕司い〜〜」

「なんだよ」

サルが弁当のから揚げを頬張りながら言う。ていうか、それ俺のから揚げ……

「男同士が机をくつつけて昼飯食うのってなんか空しくねえか?」

「嫌なら一人で食え」

「ちつげえよ!?!?!そういう意味じゃなくてさ〜〜なんていうか

……ほら、女気が足りねえというかなんとかさあ」

「なら屋上で食え、あそこなら夏美や百合ちゃんがいるぞ。俺は行かねえけどな」

「なんでだよ、お前女の子嫌いなのか?」

「んなこたあねえけど……正直あんな甘い空間で飯は食えん」

前、夏美達と一緒に食ったとき、ラブコメお決まりの『あんあん』

攻撃(そこは察してください)されたからだなんて死んでも言えねえけどな。

「い、いいじゃねえか……女の子のあんま〜〜いお花畑のような匂い……犬のようにクンクンハアハアペロペロしたいぜ!!!クンクンハアハアペロペロサイコー!!!!!!」

「落ち着けな」

こんな妄想馬鹿は放っておいてランチタイムを再開しよう……

「はあはあ……だ、だめだよ百合ちゃん……そ、そんなとこ舐めちゃあ……うっ!あ、アリスちゃん……」

パイリなんてそんな大胆……くぁー!?!?!赤くなってるアリスちゃんモエモエ……!?!?!」

「……」

「はあはあ……うっ……!れ、麗奈さん……て、テクニシャンなその指の動き……な、慣れてますね……」



「……………ピエロ？」

なぜかピエロがそこにいた……………あれ？なんかあのピエロどこかで見たことあるような……………え〜っと……………ほら、なんか某ファーストフードの店のマスコットのな……………

「お…おい、耕司、なんかあのピエロこっちに向かって来るぞ？」  
そのピエロは俺らの席までやって来た……………そして……………

「……………」  
「……………(汗)」  
ピエロと対峙する俺達……………そして……………

「今や時代はポテトだよな？」

「……………はあ？」

「ナゲットも捨てがたいがやはり今はポテトがあるからなんでも乗り越えられると思うんだ」

「……………」  
「しかし今の若者どもは軽々しく『ポテトポテト』と連呼するが正しくは『ポウティトウ』とハイカラっぽく発音しなきゃあならないんだな。さあ！君も一緒に言ってみよう！！！！さん！はい！！『ポウーティートウー』」

「……………！！！！」

「……………」

「……………なあ？耕司？俺……………全然っ、この展開について行けないんだけど？(汗)」

「俺もだよ……………」

しかし……………この声はきつと……………

「おい、お前メガネだろ」

「我が名はメガネでは無い！！！！『メガナルド』と呼ぶがいいっ！！！！！！」

「お前、ネーミングセンス皆無な」

「というわけで君の未来にポテトプレゼントフォーユー」

「いらねえよ！一本かよ！しかもフツニヤフニヤじゃねえかつ！！

「あーあー！……しかも素手で思いつき握っちゃって……油でべつとべとじゃねえかつ！……きつたねえなあ！……もう！！！」  
「ふむ、耕司キュン……ポテトをおいしく頂く時のコツを伝授しよう……まずは側転をするんだ。あ、危ないからお子様は真似しないでね。そして、我々が生きているこの大地の恵みに大いに心の中で感謝し、口でポウティトウをくわえ……そして大声で『ドルドマジイイイ……』と叫びながら食べるんだ……これがうまい！まさに『ドルドマジイイイ……』と叫びながら食べるんだ……ツク……！……ヒヤッホ……！……！」  
「聞いていないね」  
「では耕司キュン……もう一本この『キュウリ』を食べるといい……」  
「ポテトの話はどこに行った！？」

「……で？メガナルドさんよ……結局お前は何しに来たんだ？」  
とりあえず、サルが理由を聞く。  
「ふむ……じゃあ、聞くが君は息を吸うとき何か理由が合って吸うかい？」  
「……」  
「それと同じだよ……ドルドは今、ダンスに夢中なんだ。ほらね、自然に腰が動いちゃうんだ……」  
腰を前後に振るメガナルド……なんか動きがキモエロイ……  
「お前はドルドじゃなくてメガナルドだろ」  
「まあ、差し入れがあるんだ。あれ？僕の未来の嫁達はどこに居るんだい？耕司キュン？」  
誰が未来の嫁だ……

「いねえよ……屋上だ」

「ふむ……では一緒にイツチャおうじゃないか……耕司キユン、サル君」

「イツチャおうとか言うな」

……え？その格好で行くの？君……

「……で？誰よソイツ」

俺、サル、メガナルド（？）が屋上に行くとき夏美、百合ちゃん、アリスさんがビニールシートを敷いてお弁当をつつき合っていた。アリスさんは俺らに鋭い視線を向ける……うっ、ちよっぴり殺気が

……（汗）

「どうもメガナルドです」

そしてメガナルドは挨拶といわんばかりにアリスさんの胸に手をのば……

パチー……ン！！！！！！

「うっぽあ……！！！！！！」

……す前に思いっきり頬をぶたれた。

「い、いきなり何をするんだね！？君い！？ぼ、僕は！子供の夢を運ぶ仕事をしているんだぞ！？そんな僕に手を上げるとは……何てことをおおお！！！！（泣）」

「今、その手をどこに運ぼうとしたのよ！！！！！！この変態ピエロ……！！！！」

メガナルドはアリスさんに頬をぶたれて普通に泣いていた。……てか、涙のせいでメイクがなんか大変なことになって……うわ……、不気味だ（汗）

「わあ、ピエロだ……」







……え？なに？これ今、流行ってんの？（汗）

番外編その21 『夜景は好き?』

高宮学園学生寮、AM4:00

「ふあ〜〜〜……………ねみい〜〜〜……………」

やつべえ……………もう、こんな時間か……………相　ファーストシーズン  
制覇しちゃったよ……………

「だって仕方ねえじゃん……………右京さんセクスイーすぎなんだから  
さあ〜〜〜……………」

やつべ、右京さんに抱かれてえなあ……………つて、お、俺にそっちの趣  
味なんて無いんだからねっ!!! (ノノノ)

「……………アホな事考えてる場合か……………もう、寝よう……………」  
トン……………トン……………

……………?今、廊下のほうで足音が……………?

「……………」  
トン……………トン……………

足音が近づいてくる……………

「……………こ、怖くなんてないんだからねっ!!!!!!!!!!」  
トン……………トン……………

しかし、不気味な足音は俺の部屋を通り過ぎていった……………

「ブルブル……………ふ、ふん!ど、どうよ?ま、参ったかしら!？」

……………アホか、俺。と、とりあえず、ドアを開けて確認してみよう  
……………人間は気になりだしたら確かめなくちゃ気がすまない生き物  
……………ホラーものの主人公にありがちだね?

キィィィ……………

「ゴクッ!」

ドアをゆっくり開け……………そして暗闇の廊下にごっそり出る……………

トン……………トン……………

「……………向こうから?」

とりあえず足音がする方へ向かった。

「……………これは」

足音がする方へ辿って行くと、屋根の上に通じる階段に着いた。

「扉開いてる……………」

誰かがこの階段を上ったのだろう、扉は開いており綺麗な星空が見えた。

「……………誰だ？まあ、上ってみるか……………」

恐る恐る階段を一段一段上っていった。

「……………っ、っ」

……………予想外だった。

「これ……………はっ」

……………すでに街灯もほとんど消えていたが……………この夜景は『あの時』の屋上の夜景に匹敵するほど綺麗……………いや、そんな一言では片付けられないほど幻想的な『絵』だった。そして……………

「うおお……………」

星がはつきりと一つ一つが彩りを見せてくれた。

普段はこんなにくつきり見えないのにな……………とりあえず、屋根の上で寝転ぶか……………

「……………すっげえ」

あまりあの頃の事は思い出さなくなったのだが、こつこつあの屋上の夜景と似ているなんて……………

「……………」  
もう、ここで寝ちまおうかな……………そんな事を考えているとふと誰かの気配を感じ、さらに上を見ると……………」

「……………」  
「……………」

……………白色だった……………じゃなくて!!!

「ミント……………何やってんだ……………? (汗)」

「……………サービス」

そこにいたのはミニスカートの裾を上げて俺にパンティを公開していたミントだった……………」

「……………」

「……………やっぱり、白は嫌い?」

「……………はっ! え?」

しまった! つい、見とれてしまった! 主にパンティ!

「……………白はコーフンしないんだ」

「え? え? え? いや!!! そんな事は無いぞ!!! 白は白でなんかそそられるし!!! それになんかシミとか

はつきり見やすいし!!!」

「……………耕司のえっち」

「ぐあああああああ—————!!!」

「!」

「……………で? さっきからミントは何の本を読んでんだ?」

俺の寝ている隣で座って静かに本を読んでいるミントに声を掛けた。

「……………読む?」

「ん? ああ、どれどれ……………?」

ミントから本を受け取り、タイトルを見る。

『そこに穴があったら入りたい』

……官能小説だった。

「……………読む？」

「結構です……………（汗）」

「……………そう」

……………とりあえず、することが無くなったので眠ることにする。

「……………」

……………それは心地よい空間だった……………

「……………」

……………ミントが見守ってくれている……………

「……………」

……………それだけで俺はもう……………

「…………………………百合のイヤホンつけてね」

そして俺は深い眠りについた。



## 第74話『出会い』

「あ、アリふたん、ま、待って遅れよお〜……ゼーハー……ゼーハー……」

「お、お姉ちゃん〜は、走るの早すぎだよ〜……」

現在、AM8:25。本鈴がAM8:30に鳴るのもう時間的に余裕が無い私達は現在、学校の正門へと続く坂道を走っている。急な上がり坂でしかも距離的に長いのでその正門の事を地獄門ヘルス・ゲートと呼ぶ者が絶えない……別にどうでもいいけどね。

「あんた達、体力無さ過ぎよ!!!もっと運動しなさい!!!運動!!!!」

私から少し離れた後方にエリス、そしてさらに離れた所で麻里先輩が息を切らしながら走ってくる。

「あ〜!お姉ちゃんひつど〜い!それじゃあまるで私達が太っちよだみたいな言い方だよ〜!!!」

「くっくく……相当気にしてんだろうにや〜………体重」

……うん、あとあのクソガキはしばいておこう。

「げっ………あれはゴリ沢……」

遠くに見える正門の傍に立っていたのは岩のようにゴツイ身体をしており、やたらイカツイ顔つきのかにも体育教師っぽい……というかまんまの体育教師の五里沢ごりさわ五里男だった。頑固者で融通が利かず、男女差別が激しい教師なので当然、生徒に嫌われている。あいつが正門の傍に立っているという事は………今日はいつが正門の番か………あ〜、最悪。うちの学校の朝の正門は毎日、必ず1人の教

師が立っている。本鈴が鳴ると同時に正門を閉めるのでそれがタイムリミット。つまり、AM8:30までに学校に入れないと晴れ晴れ、遅刻者としてカウントされる。遅刻の回数が3回溜まつたら、トイレ掃除という最悪な罰ゲーム(?)を強いられる。ちなみに、エリスと麻里先輩は既に2回遅刻しているのでトイレ掃除にリーチがかかっている。今回の正門の番がああゴリ沢だから……1秒でも遅れたらきつち遅刻扱いになるわね……

そういう意味では今日は運が悪い。教師によっては少し多めに見してくれる心優しい人もいるのだからある意味ああゴリ沢は大ハズレね。「おらおらおらおらああああ~~~~~お前らあと1分だぞお!!残り1分つ!!!59、58、57……」

あーやって、わざと焦らすために時間をカウントするところもある意味嫌らしい。

といつても、私はもうすぐ目の前が正門なので余裕で間に合うけどね。余裕じゃないけど。

問題は……私はふと、後ろ振り返る。

「ハア……ハア……」

「コーホー……コーホー……」

さつきより息を切らせながら、フラフラしながらゆっくりだが走っている我が妹と……コーホー?……アホチビ先輩の姿があった。やばいわね……

「あと20秒~~~~~!!!19、18……」

「エリス!!!あともう少しよっ!!!がんばなさいっ!!!」

！先輩は……どうでもいいわっ!!!」

「アリスちゃんひどいっ!? (泣)」

残り20秒で正門にゴールした私はエリスに大きな声で声を掛けた。

「う、うん~~~~~!!!ハア……ハア……」

といつてもエリスの正門までの距離はさほど遠くない。先輩はもう絶望的だけど。エリスの正門までの目分量で50mといったところでも時間が……





「……………」  
私はゆっくり目を開けて目の前の光景を見る……………どんな未来が待  
つていようと……………その目の前の出来事に目を背いたら私が私じゃ  
いられなくなるような気がして……………だから私は見た。

「……………え？」

「ふう、危なかったね……………大丈夫かい？」

閉まりそうになった鉄の門を足で抑えている男子がいた。その隙間  
でエリスは尻餅をついていた。

「あ……………ハイ……………ありがとうございます……………」  
／＼

エリスはその男子生徒をあきらかな『女の目』で見つめていた……………

そのエリスと男子生徒との出会いが悲劇の始まりだった……………



## 第75話 『境界線』

「おいっ！！！その3人っ！！！遅刻だぞっ！！！職員室で遅刻届出していくんだな！！！！いいな！？………ったく、最近のクソガキは教師を馬鹿にしとる………ブツブツ」

五里沢は遅刻した3人（エリス、麻里先輩、謎の男）に向かって馬鹿でかい声で罵った。

………え、ちよつと………今のエリスに対して謝罪も無し………？………上等じゃない。

「……………」  
「……………」  
「……………」

私が一言文句でも言ってるやろうと五里沢の前に出ようとした所で謎の男に手で制される。

「おい、ゴリラ」  
「……………」  
「……………」

ドスッ……………」  
「があっ！？」  
「……………」

謎の男は五里沢を呼び止め……………五里沢が振り向いた瞬間、鳩尾に己の拳をめり込ませていた。

そして、うずくまった五里沢の背中に足を乗せ、踏みつけていた……………まるで蟻でも潰すかのように……………

「ちよ、ちよつと！あんた！いくらなんでもそれはやりすぎよ！！！！止め……………っ！？」  
「……………」

私はその男の顔を覗き込んでゾツとした。

……………奴の顔は表情1つ無い……………真顔だった。

「……………ねえ、あんたさあ……………遅刻で俺達を注意する前に言う事があるんじゃないの？」



……朝の校門で乾いた音が響き渡った。もう、既に授業が始まっていたせいかわけにここだけ静かな気がする。まるでここだけ温度差が違うような錯覚だった。

「……はあ、ハア」

……エリスが謎の男の頬を引つ叩いた。

「……」

その男は倒れはしなかったが、下を向いているようで表情は読み取れない。

「え、エリス……」

私は機転を利かしてエリスを庇うように謎の男の目の前に立った。

「……」

その男はじつとしていた。……くっ……何で私、こんなに……振るえてんのよ……し、しっかりしないと……私は……エリスの姉なのだから……

「……」

まだ、その場から動かなかった。……五里沢は奴の傍でうつ伏せで倒れている。どうやら、気絶しているだけのようだ。

「……な、なんとか言いなさいよ……」

私は終に痺れを切らしてその男に声を掛けた……奴の動きによつてはここからせめてエリスだけでも逃がすという選択肢も考えなくてはならない。

「……」

そして奴は顔をゆっくりと上げ……

「……」



「へえ、麻里ちゃんか。ヨロシク」

「うん、ヨロシク モグモグ……………」

謎の男から差し出されたドラ焼きを受け取りいきなり上機嫌になる

麻里先輩……………この人は子供ガキか……………（汗）

「あ、そうそう……………俺の名前まだ言っていなかったね」

……………今思えば、私はこの時に気付くべきだった。

「俺、小田原浩二おだわらこうじね ヨロシク」

……………この男の『裏の顔』が垣間見えたこの瞬間が最後のチャンス  
だったのかもしれない。



第76話 『first kiss』

「いや〜〜しかし、派手にやっちゃったもんだね〜」

校門の傍で気絶している巨漢の五里沢を見ながら頭を掻きながら言う小田原。やったのはお前だ。

「お、お姉ちゃん……ど、どうしよう……?」

エリスは不安そうな顔でオロオロしながら私に尋ねる。この出来事が他の教師に伝われば……。停学……いや、最悪、退学ということも考えられる……

「エリス、あなたは先に教室に行つてなさい」

だから私はほとんど巻き込まれた形になったエリス（と麻里先輩）を教室に行かせることにした。

「えっ……?だ、だめだよ!!!お姉ちゃん!!!私も一緒に……!!!」

「いいからっ!あなたは麻里先輩と……」

「ん?あ、いいよいよ、この件は俺がちゃんと処理しとくからさ。3人とも教室行きなよ」

「……はあ?」

私がエリスを説得しようとしていると小田原は淡々とそんな事を言ってきた。

「……あなた、一体何を……」

「まあ、いいじゃん。この事は全部俺が悪かったってことで。ていうか、俺が悪いんだけどね、ハハハ」

……つまり、なんだ。この場合は全て任せて私達は見て見ぬフリをしると?……エリスと先輩はそれでいい、けど……

「ふざけないで。冗談じゃないわ、あなたに借りを作るなんて溜まっただもんじゃないわ」

少なくとも、目の前の男と同じような事を私もしようとしていたのだから私も罪に問われてもおかしくない。

……個人的にこの男を信用できないのもある。

「ふん……まっ、俺はいいけど。そういうちよつと強気な所も俺好みだし」

「うるさい、とつと職員室に行くわよ」

そして私と小田原はエリスと先輩に背を向け、職員室に向かった。

「お、お姉ちゃん！！わ、私も行くっ……！！」

「あゝあゝ、エリスちゃん、落ち着きにやさいつて。ああ言ったら最後、アリスちゃんは頑固だからねえ」

「……行っても無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄……！！！！！！！！！！」

……少しは役に立つわね、麻里先輩。遠くから聞こえるエリスの不満そうな声を聞き流して私と小田原は職員室に向かった。

「いや〜俺、草抜きなんて地味な天罰、幼稚園以来だよ！！！！いや〜しかし、身体を動かすっていいよねえ。俺、ヘビースモーカーだから久しぶりに身体動かすのってしんどいんだよねー」

職員室でこつてり絞られた私と小田原は学園の裏庭の草抜きと停学1週間という素敵なプレゼントを頂いた。

そして、現在、その草抜きをやっている。無論、奴とは話すことなどこれっぽちも無いので黙々と作業に没頭していた私だが、その間何かやたら絡んでくるので私は正直イライラしていた。

「……あなた、なんでそんなに嬉しそうなのよ。何？それはアンタ流の私へのあてつけ？嫌がらせ？私に喧嘩売ってんの？」

「んー？だつて、アリスみたいな綺麗な女の子と草抜きできるなんてすんげえ嬉しいもん。カンドーもんだよ。男だったら誰でも願うシチュエーションじゃん」

何だ……この軟派男。

「……………ぶん殴るわよ？」

「ふ〜ん？この細い腕で？無理だと思っけどなあ〜」

「っ！？」

小田原はいつの間にか私の背後に回り、私の右腕を掴んでいた。

「な、何すんのよっ！……！！」

ドスッ！！！！

「うぐっ！？」

私は小田原の鳩尾に左腕の肘を思いつきり入れた。小田原はその場で蹲った。

「いててて……………へへっ、結構いいもん持ってんじゃん、アリス

……………」

ゆらりと起き上がる小田原……………結構、ダメージあると思ったのに

……………この男……………

「うるさいっ！……！こ、これ以上こっちに来るんじゃないわよ！！

！」

私は少し間合いを空けようと奴から離れようとした……………が

ガシッ

「キヤッ……………！？」

ワケも分からぬまま奴に押し倒されていた。それは一瞬の出来事で

……………私には何が何だか分からなかった。

「……………」

そして私を押し倒した奴は……………真顔で口元だけ歪めていた。それは何か獲物を見つけたときの……………人間であって人間でない生き物……………何かに取り付かれた曰く形容しがたい化け物……………そ

の顔を見た私は血の気が引く感覚を覚えた。

「……………」

「っや、……………」

奴の顔が私にゆっくり近づいていく……………ぬらり……………と、私の身体に絡みつくような奇妙な感覚に寒気を覚えた……………何、よ……………コレ……………う、動けない……………

「……………」

「っ……………あ……………ああ……………」

怖い……………悲鳴を上げたいのに……………声すら出ない……………誰か……………誰か……………助け……………て……………

ぬるっ……………

「っん！？」

……………この少し湿った肉の感覚は……………奴の……………唇……………？

「……………」

ぬるっ……………ぬるっ……………

「い……………っ……………」

い……………っ……………や、め……………て……………

声が出ない……………出ない……………目から……………温かい……………あれ？私、泣いて……………

「……………ぶっ……………」

……  
「……「ちそうさまでした」と」

……  
「んじゃあ、またねっ アリス」  
…… タタタ……

…… あれ？…… そっか、私……

奪われたんだ……

私は日が暮れるまで草の上で仰向けで静かに泣いた。

## 番外編その22 『それは死亡フラグだよ！佐々木くん』

皆様、おはようございます、こんにちは、こんばんは、あなたの背後からこっそり見つめるあなたの愛の肉奴隷、その名も佐々木雅……  
「って！ウコンちゃん！？何、妙なナレーション入れてるんですか！？（汗）」

「いや、キャラ的に映えるかなーと思って」

「これじゃあ間違った方向に映えますよ！？（汗）」

全く…あ、どうも、ウコンちゃんのマネージャーやらせてもらっている佐々木雅彦（21）と申します。今はウコンちゃんのラジオの収録が終わり、控え室でのほほんと休憩しているところです。まあ、とは言っても本日のスケジュールは終了したんで後は帰宅するだけなんですけどね。ちなみにこの後、僕は友達から女子大生との合コンに誘われているのでとつてもとつてもとつてもとつてもとつてもとつてもだ〜いすきよ〜 じゃなくて楽しみです。

「ん？何、ニヤニヤしてんの？ウコンッ……ゲリピー」

「進化したっ！？（汗）」

「うるさい、ベンピー」

なんか……もう、ほんとお食事の方々すみませんねえ……（汗）でも、この件に関して苦情は一切受け付けませんのであしからず。

「何度も言ってますが僕の名前は『ウコンッコ』でも『ゲリピー』

でも『ベンピー』でもありません…… 『佐々木雅彦』です（汗）」

「じゃあ、インパクトがあって覚えやすくて親しみやすい『アルシヨーーーック!!!』でどうだ？ちよつとかっこいいだろ？」

「……『ベンピー』をお願いします……（汗）」

「ふーん、地味な選んだな、まっ、いいや。で、話戻ってなんで今日はベンピーは機嫌良さそうなんだ？」

「よくぞ聞いてくれました!!!実は僕、高校時代の友達に女子大生との合コンに誘われたんですよ!!!いや〜〜これは独り身の







「あゝ面白かったね おに〜ちゃん」

「はは……そ、そうかい……ははっ、ははは……」

……うぶっ、もどしてしまえうだ……

「特にラストシーンは猟奇的だったねえ〜」 主人公のお腹の中から……

「ソノサキハイワナイデ!?(泣)」

「ところでおに〜ちゃん、お腹空いたね?この近くにおいしいもんじゃ焼きあるんだ 食べにいこっ」

「よく食えるねっ!?(汗)」

「……………」

「……………ん?」

再び街中をウコンちゃんと歩いているとウコンちゃんは店の前で立ち止まりシヨーケーヌの方をじっと見つめていた。視線を辿ると……

……ミノムシ? 巨大なミノムシの又イグルミがあった。……お世辞にもあまりいい趣味とは言えなかった。しかし……あのウコンちゃんかねえ…… やっぱり女の子なんだな、フツーじゃないけど。

「……………」

財布の中を確認。今の僕の所持金3500YEN。巨大なミノムシの又イグルミ、3500YEN(消費税込み)。わーお、なんて素敵な偶然。

「……………よし」  
食い入るように人形を見つめるウコンちゃんに気付かれぬよう、僕はその店の中に入った。

「……………」  
買ってしまった。ミノムシくん。

「……………」しかし、まあ……………」  
遠くからじゃ細部までは分からないけど、近くから見るとこのミノムシの又イグルミやけにリアルだな。リアルすぎて気持ち悪い、こ  
だわりすぎだろ。

「……………」うわぁ  
見れば見るほど気持ち悪いな、何か呪いをかけられているみたいで。  
「ま、いいか」

これで少しは僕に対する悪言の数々が減るだろう。ちょっとアクがぬける？みたいな。  
そして、店から出ると……………

複数の男に絡まれているウコンちゃんの姿がそこにあった。





そして、無駄に消費した体力と精神力と……あ、アイテムとして  
ミノムシのヌイグルミが残りました……いらねー……

そして……泥沼だ、はぁ……



ない……………」

「今日！僕は生まれ変わったんだ！いや……………違うな、正確には生まれただんだ！！！そう……………それはまるで繭から飛び出す美しき蝶……………まさに！それが今の僕！ひ・で・ヨン！！！！！！」

見るもおぞましき汚い蝶だと思っが。毛ぐらい剃れ。

「う、うん……………？（汗）」

夏美はタジタジだ。汚いものを見過ぎて感覚が鈍ってしまったのだろつか？……………そして夏美は俺の方に向き『助けて！！！お兄ちゃん！！！！』的な視線を送る……………じゃあねえな……………

「さあ……………君も一緒にいいい……………ひ・で・ヨン！！！！！！」

！」

ドスッ

「うっ！」

ちよつど奴のケツが俺の方へ突き出すように向いていたのでとりあえずカンチョーしておいた。自分の素手でやるのは少々引けたが夏美を魔の手から救い出すためだ。仕方ない。

「はあはあ……………」

「どうだ？少しは落ち着いたか？」

「……………ふふふ、まさか僕のア　ルにそんな細い指を挿入するとは……………」

「ア　ルとか挿入とか言うな、ただのカンチョーだろうが。お前が言うとなんか生々しいんだよきもちわりい」

「……………気持ち……………良かったよ……………（ノノノ）」

「感想はいらん」

「そうか……………耕司キユン……………そう、だったんだね……………（ノノノ）」

」

「何がだっ！？（汗）頬を染めるな！！！すげえきもいよっ！！！！」

「あは、あははは……………」

ナツミサンは遠い目をしておりました。

「……………何？ラブレター……………だと？」

とりあえず、さっきのメガネの格好は倫理的に……………やばかったの  
とりあえず普通の学校の制服に（無理矢理）着替えさせた。そし  
て、奴の口からトンデモない言葉が発せられた。

「むふっ」

「妄想も大概にしとけ、なんかそろそろ本格的にイタイぞお前」

「ふふふ……………耕司キュン、嫉妬したい気持ちは分かるが、ウひゃ  
あんっ！これが本当なのだよ」

なんかムカつくな……………コイツ。

「ほれ、コレをみたまへ」

「あん？」

キチガイ君は俺に手紙を手渡した……………なんだ、この可愛らしい外装  
の封筒は……………そして中に入っている一枚の手紙を開くと……………

『放課後、ちよつと、裏、来てください』

「……………」

「どうかね？紛うことなきラブレターだろう？」



「…………俺には挑戦状にしか見えないんだが……………」  
「馬鹿な、よく見たまへ。この1文で素直な彼女の気持ちが見え隠れしているじゃあないか…………このちつちやい可愛らしいマル字…………恐らくこの手紙を書いた彼女は比較のおとなしいタイプで小柄で胸はぺったんこで年下の後輩で想い人のためならなんでもこなす子に違いないね。『せ、先輩!!! (ノノノ) 私の家のお風呂が壊れちゃったので今日一晩でいいですからかかかか、貸して下さい(ノノノ)!!!』』…え?せ、先輩今日はお、お一人なのですか…………?あ…………(ノノノ)』』せ、先輩…………お風呂…………覗かないで下さい…………ね?(ノノノ)』』先輩…………先輩の背中…………大きいです…ね…………あつ、も、もお…………せ、先輩…………こんな所も大きくしちやうなんて…………ムード台無しですっ(ノノノ)』』は…………む(ノノノ)せ、しえんぱい…………はむ(ノノノ)』』  
『アツ!アツ!先輩!先輩!先輩!も、もう!私!壊れちゃうれすう…………!!! (ノノノ)』』ぬああああ…………!!!  
僕も壊れちゃうれすう…………!!!  
「…………この一文だけでそこまで素敵な妄想を仰られるお前はある意味神だな。しかし、俺には暴力の匂いが見え隠れしているように見えるが……………」  
コレ、なんてエロゲ?

そして放課後……………

「…………で?そのお手紙通りに校舎裏に来たわけだが」

「……………」

「…………で?メガネ君?何か弁解の余地はありますか?」

「……………」

俺とメガネが校舎裏の草むらから隠れていると確かに来ました、人間、それもメス。おそらくメガネ君に素敵な手紙を送った方でしよう。やったね、メガネ君。でもね？メガネ君。あれは本当に恋文だったのかなって疑問が沸くんだよ僕。だってね、あの女の子ね？……… どちらからどう見てもクリーチャーじゃん。

「…………… ふ、ふむ。げ、元気がある女の子は僕は好きだな…………… っ、腰の動きも早そうだしね、ははっ、ははははは……………」

「アレを元気のある子の一言で片付けられるお前の許容量に俺は無量だよ」

あきらかにメガネ君は動揺しておりました。

「あ、アイタタタタ…………… ボク、オナカイタイナ！ソウダ！ホケンシツニイカナクチャ！」

がしっ

「待て」

「な、ナンダイ？コウジキユン？ボ、ボクジユクニイカナクチャ！

(汗)

「アノ子の所へ言っ来て来い」

「ダ、ダカラボクジユク……………」

「嘘をつけ、それにお前は約束をすっぱかすのか？もしかしたらあの子は恥ずかしがり屋でお前に手紙を出すのも必死だったかもしれねえんだぞ？それなのに約束を破る男だったのか？お前は？せめて話だけは聞いてやってほしいんじゃないのか？」

「…………… じゃあせめて僕の傍にいてください、お願いします耕司キユン……………」

「お前はホント色んな意味で逞しいな」

土下座までされちゃあな…………… コイツはプライドと言うものが欠如しているようだ。



「……………」  
追ってきた。

「……………」  
追ってきた。

「……………」  
追ってきた。

「……………」  
追ってきた。

……………  
……………  
……………

後日

「むやみに女の子に手を出すべきじゃないよね？耕司キュン」

「ああ、そうだな」

メガネ君は変態から真人間に進化した！！！！

「遠くからじつと見つめるのもアリだよね？耕司キュン」

メガネ君は真人間からストーカーに退化した！！！！

通算100話記念『ホモ・ゲイ・バイ・百合についての考察』（前書き）

これからもギリギリで頑張ります。

通算100話記念『ホモ・ゲイ・バイ・百合についての考察』

ある昼食でのこと。いつものように教室でサルとメガネと一緒に昼飯を食っている……

「なあ？ホモとゲイとバイって何が違うんだろうな？」

サルがトチ狂った事を言い出した。

「ぶっ！」

「うおっ！？汚ねえ！？何してんだ！？耕司！！！」

「けほっ！けほっ！……お、お前がいきなりトチ狂った事を言い出すからだろ……！！」

「ふむ……サル君、耕司キュン？君達は違いが分かるかね？」

「知らねえよ、ていうか知りたくない」

「僕は違いが分かる男……その名も三上英男なのだよ」  
なぜ偉ぶる……

「うるせえよ」

「ほめてよ、ひでおちゃんをほめてよ！」

「やかましい！！！」

「ほめられてのびるひでおぴーぴー」

殺したい、今すぐ殺したい。あと、のるちゃんとPんに謝れ。

「ま、マジでか！？め、メガネ！？お前分かるのか！？」

なぜ、そんなに嬉しそうな顔をする……サル。

「もちろんだとも……なぜなら僕は違いが分かる男……その名も三上英男なのだよ」

「それはさつき聞いた」

「ふむ……では……おーい、その君！ちょっとこっちに来てくれないかい？」

「……はい？」

メガネは近くで昼食を摂っていたクラスの女子Cに声を掛けた……  
……なんか激しく嫌な予感が……

「ホモとゲイとバイの違いを教えてくださいませんか？」

聞いていたっ！！！！

「……………」

メガネに声を掛けられた女子Cは絶句していた……………

「そ、その……………なんだ。き、君もそんな男同士の行為を見て……………

…ぬ、濡れちゃうのかい？ハア…ハア…」

それはセクハラだっ！！！！

「ひっ！」

そして女子Cは怯えていた。今にも失禁しそうな勢いで。いや、実際にいけないね。

「ぼ、僕も……………な、なんだかね……………君のその……………姿を見ていると

ね……………なんだか……………ぬ、濡れちゃって……………ね……………ハアハア」

彼女の頭から足のつま先まで嘗め回すように視姦するメガネ……………

もう、手を出さないだけでいつ捕まってもおかしくない状況だ。

「いやあ！！！！近寄らないで！！！！このっ……………ホモっ！！！！」

そしてその場から駆け足で逃げ出す女子C……………

「おーい、君！待ってくれたまへよ！誤解だ！僕はホモじゃない！

バイだ！おーい！くそっ！逃げられたか！」

「今すぐ死んでくれ」

「なあ？なんでホモとかゲイとかバイとか何かと敬遠されがちだが、逆の百合はそうじゃないんだろうな？」

あれからなぜか話が盛り上がっていた……………本当になぜ？

「知るか」

「ふむ……………それはいわゆる『醜さ』にあるんじゃないかね……………？サ  
ル君？」

「『醜さ』?」

「ふむ……例えばまず、『百合』の方から考えてみたまへよ」

……

(アリス×百合)

『あ、アリスちゃん……こ、こんな事っ……耕司さんに見られ  
たら……きゃっん!』

『ウフフフ……だあーいじょーぶ 奴は裸にして縛り付けておいた  
から 一生奴には邪魔されないわよ ウフフ……』

『そ、そんなっ……! ひ、ひどっ……あん!』

『ウフフフ……敏感ね、百合は……ここが弱いのかしら?こ  
こ・か・し・ら?』

『あ、あん! やっ! やっ! ああん!』

『あらあら随分可愛い声で泣いてくれるじゃない ウフフ……』

『こ、こんなの……! いけないコトです! 女の子同士で……!』

『あら? そんなの誰が決めたの? 私はこんなにあんたの事、溺愛し  
ているのに……んっ』

『あっ! やだ! そんな! とこ! なめっ……な、い、でえ……』  
『嬉しい?』

『……』

『嬉しくないのね……じゃあ、やめる』

『……あ』

『……あら? 何? その物欲しそうな顔? もうアンタにはやらないっ  
ていったじゃない』

『……ください』

『よく聞こえないわね、はっきり言いなさいよ』



『やって………くだ………さい………』  
『んふ〜 やーっぱり百合ちゃんがかあいいわねえ………自分からや  
つて欲しいだなんて えっちなメス犬ねえ〜 ふん！ほら！犬は犬  
らしく私の足の裏をペロペロペロペロ舐めなさいよ！』  
『はううう………私はえっちなメス犬ですう………』  
(キリが無いのでここで中断)

「どうだね？サル君？美しいだろう？」

「ふおおお………う、美しい………（ノノノ）」

「お前らの脳内が醜いわ」

ていうか、なんで俺は囚われている設定なんだ。シチュエーション  
がよく分らん。

「で、だ？サル君。大体これで分かったと思うが彼女らの行為は美  
しいんだ………しかしその逆は………」

「………」

激しく嫌な予感がした。

「よし、実演してみるかサル君」  
ほら、来た。

「よ、よし………（ノノノ）」

やし、じゃねえよ。あと、頬を染めるな。

(英男×サル) 実演です



何の話をしているんだコイツラは。

「う、うおっ!?!ひい!なんだコイツラは!?!裸で抱き合ってるぞ

!?!」(男子A)

「き、気持ち悪っ!おい!村上!なんだよ!どうしたんだよ!コイツラ!」(男子B)

聞かないでほしい。

「あんたらねえ~~~~~」

そしてメガネとサルの背後に邪鬼<sup>アリス</sup>登場。

そこで彼らの伝説はひとまず幕を下ろした。

おまけ『生徒会室にて』

「僕はゲイだっ!!!」

「……………はぁ」

「……………いや、美亜君?そこはナチュラルに返事してもらったら逆に僕、傷つくのだが……………」(汗)

「嫌い黙れチンカステめえの口臭なんかウンコみたいな匂いして臭いんだようじ虫」

「……………」(汗)

「……………とでも言ってもらいたかったのでしょうか?副会長はMマですね、この変態っ」

「いや!?!違うよ!?!」(汗)

「副会長はマゾっ子マゾちゃんっ」と……」

「メモらないで下さい(汗)」

「ほう？ではなぜ急にそんなトチ狂った事を言い出しやがりましたのですか？副会長？」

「副会長と書いてハードゲイと読むのは止めてくれないかね！？美亜君！？(汗)」

「じゃあ、理由を言ってください副会長」

「(汗)あ、ああ……それはね、実は美亜君の反応を見たかったんだよ」

「……？私の……？なぜ……？」

「『きい〜！副会長！相手は誰ですか！？』」

「……」

「『そ、ん、な……副会長！私の身体じゃ満足できないんですか！？確かに私、出るところも出てないし口リ顔だし……で、でもでも！それでも私、会長をこの胸で気持ちよくさせてあげる自信はあります！……』」

「……」

「『ご奉仕……させて……ください(ノノノ)』」

「……」

「……というふうに君の嫉妬心を煽りたかったんだ」

「今すぐ死んでください」

## 第77話『矛盾』

「はあ……………」

こんな溜息をつくのも何度目だろうか。あれから脱力した私は夕方の新聞配達も行かず、近所の公園のベンチで座っていた。別に公園に用事があったわけではないが偶々、フラフラ歩いていると視界に公園のベンチが入ったので何も考えず腰を下ろしたのだが……

「はあ……………」

…………… ああ……………！！もう！！何なの！？この脱力感……………別に体力的とか精神的に疲れたわけではないのだが……………

「やっぱり、あれ……………よ、ね……………（／＼／）」

……………

「って！何、赤くなってんのよ！！私！！！」

うわあああ……………何て顔してたんだ私……………あんな、あんな……………最低な事されたの……………に……………

「……………結構、濃厚だったわね（／＼／）」

……………

「って！今の反応はおかしい！！私！！！」

ていつか私がおかしい！！普通あんな事されて……………あんな……………

「……………キス（／＼／）」

……………

「って！言っちゃった！私！言っちゃったよ！！！！私！！！！」

ああ……………！！！！！！！！！！こんな変な気分になるのもあいつのせいよ……………！！！！とはいえ。

「矛盾……………してるわね、私……………」

矛盾……………そう、これは矛盾。

あんな軽そうな男は私はいっ嫌いだ。嫌悪感しか沸かない。それなのに……………なぜか胸がドキドキしている。これはおかしい……………誰であるうとそう言うだろう……………でも。

「なによ……」

その抱いた感情を認めてしまっているもう一人の自分アリスがいる。

「なんなのよ……これ」

胸がギョツと締め付けられるように痛い……

『恋情』そんな感情が自分の中に流れってくる。

『嫌悪』という名の感情の流れとせめぎ合っている。

言うまでもないが本来、『嫌悪』と『恋情』は対極を為す感情である。

なので形式的に『恋情』という感情を正、『嫌悪』という感情を負とここで考える。

当然、二つの感情がぶつかり合えば相反する感情なのでどちらかの感情に偏る可能性が高い。

というよりも、それが当然であると言っても過言ではないであろう。なぜならば、実際私達が生きている世界ではある人に対しては好意、またある人に対しては嫌悪、またまたある人に対しては家族愛といった感情が少なからず存在する。

つまり、人と人には相性が存在する。(例外的に誰とでも合わせられる人もいるだろうが)

正と負——正が勝れば『恋情』、負が勝れば『嫌悪』といった分類に分けられるだろう。

なので、この二つの相反する感情を抱いていたとしても相殺されてプラマイゼロは実質的にはありえないと言えるだろう。なぜならば『恋情』と『嫌悪』が釣り合いの状態にある感情とは……何？

プラマイゼロの感情だからその人に対して関心が無い……？

それは無いだろう。なぜならば『恋情』と『嫌悪』が少なくとも存

在するから。

人の感情は量や数で表せるようなそんな単純なものでは無い。  
例えるなら雲のような掴みきれないものである。境目が存在しないのだ。

だから前述を覆すような理論になるがそこには二つの相反する感情を現す数とか量といったゲームのような概念（好感度 e t c）は存在しない。

だから、プラマイゼロの感情は『ありえない』。

『恋情』と『嫌悪』——どちらか一方の感情が勝っているのが普通だろう。

今、アリスという一人の少女はそんな『ありえない』感情に近いものを抱いているかもしれない。

そんな感情は普通存在しないのだからあくまでも……かも……だが。

「お姉ちゃん」

私が公園のベンチで頭を抱えて唸っていると普段から聞きなれた声が耳に入ってきた。

「エリス……」

「ん、しょ」

自分でも分かるくらい暗いトーンでエリスに声を掛けるとエリスは私の隣に座った。その……エリスの様子は私と正反対だった。ああ

……やだ、今、誰とも話したくない気分なのに……

「えっと、お姉ちゃんどうしたの？こんなところ？」

エリスは少しよそよそしく私に聞いてくる。

「……………」

私はエリスに対して何も返せなかった。

だって、何て言えばいいのか自分の中でも分からなかったから。

「……………えっと、お姉ちゃん？」

「……………」  
誤魔化そうとも思わなかった。

嘘を吐けば済む話なのかもしれないが、今はそんな気力もない。脱力感、それだけしかなかった。

仮に嘘を吐いたとしても鋭いエリスの事だ。たちまち簡単に見抜かれるだろう。

「……………」

私の返答がないせいかわそれっきりエリスも喋らなくなった。

それでも私はいいと思う。だって、今は誰とも会いたくなかったから。誰とも喋りたくなかったから。

むしろ、帰って欲しい……………そんな薄情な感情を抱きつつあった。

最低ね私……………前までは愛しい妹だったのに。

あの男が目の前に現れてから……………こんな……………

ああ、でもそれって完全に言い訳よね。それも最悪最低な。あは、

あはは……………

「……………お姉ちゃん」

数十分、沈黙を保ち続けていたエリスはついに小さな弱々しい声で喋り始めた。

「……………」

当然、私はそれに対して相槌を打たない。

今、自分に流れ込んでくる情報に対してただ受身になるだけだ。



「……お姉ちゃん、お姉ちゃん……私……私、あの人の事……  
……好きになっちゃったみたい……」

……え？

## 第78話 『魔力』

以心伝心って言葉がある。

考えている事が、言葉を使わないでも互いにわかるって意味。

学校のクラスメイトの一人にこんな事を言われた事がある。

『アリスとエリスちゃんって……電波？テレパシー的なものを享受し合ってる感じ？』

……何か馬鹿にされている感が否めないが。

とにかく、私が言いたい事は『私とエリスがよく似ている』ってこと。

容姿だけでなく、趣味から好きな食べ物、服装 e t c ……

双子なんだから当たり前といっちゃあ当たり前なだけ。

でも、そう見えるのは周りだけであって。

実際、私達の場合はエリスが私に合わせている……というより、エリスは私の見よう見まねで合わせていることが多い。

私が喫茶店でエスプレッソを頼んだ事があった。

すると、エリスは『う〜ん、じゃあ私もそれにするよ』と。

…しかし、エリスは実際、苦い飲み物は苦手なのだ。（案の定、一口飲んだだけでギブアップだった）

デパートで私がジーパンを買ったとき。

すると、エリスは『お姉ちゃんのジーパンかわいいね』と元々、自分が選んでいたワンピースを元の場所に戻して私と同じジーパンを買った。

…はつきり言ってワンピースのほうが可愛らしい服装だと思う。（私はボーイッシュ系の服装が好きだ）

この他に挙げるとキリが無いから止めておくが、ともかくエリスはよく私の真似をする。

そんな所も可愛らし気があっていいと思うが、私は時々そんなエリスの姿を見て切なくなる。

無理に私に合わせようとするエリスを見て……胸が締め付けられるというかなんというか……そんな気持ちになるのだ。

だから、私はエリスに対してよく『もつと自分の意思を持ちなさい』と思うだけで口には出さないが。

でも、エリスの無邪気な笑顔を見てなんだかどうでもいいような……

……何だか気恥ずかしいが幸せな気持ちになるのだ。

だから、私は嬉しかった。

初めて、エリスがその……自分の意思で私に打ち明けてくれた台詞。

「……お姉ちゃん、お姉ちゃん……私……私、あの人の事……  
……好きになっちゃったみたい……」

……はずなのに。

嬉しかった、はず……なのに。

その反面、私は素直に喜べなかった。

嫉妬……そんなものではない。

だって、私はあの男がだいつ嫌いだもの。

そう、だいつ嫌い……なはず、自分でそう言い聞かせている。

でも……なんでだろう……？

その真逆な感情も私の中で芽生え始めているのは……？

怖い……

怖い……

怖い……

自分が自分でなくなるようで……

アリスという人格が『別のアリス』という人格で埋め尽くされるよ  
うで……

それが怖い……

これは……あの男の『魔力』……なのだろうか？

……

今の私の胸の内にあるのは不安だけだ。

エリスもあの男の『魔力』にやられてしまったのだろうか……？  
それとも……

もしかして、いつもと同じように自分の意思でなく、私の真似を……

……？

ゾク……

そんな事を考えていると急に寒気が走った……

私の考え過ぎ……なのだろうか？

ああ、もう……何が何だか分からなくなってきた。

「……………」

ふと気付くといつの間にか家の前に居た。

……ああ、あれからエリスと公園で会って……それで結局、無言で  
帰ってきたんだ……いや、多分エリスが一方的に話をしていただ  
けで私はそれに対して適当な相槌を打っていただけだ。

「ただいま」

エリスは誰も居ないのに挨拶をした。

「おかえりでちゅ」

いた。ちびっ子先輩（麻里先輩）が。

「あ、今日もうちで晩御飯食べていくんだ？麻里ちゃん？」

「うん！うん！アリスちゃんの料理はコンビニ弁当とまではいかないけどおいちーからねえ〜にゃふふ」

「なんだか殴りたくなってきた。」

「……………」

「あつ、嘘だよ！（汗）嘘びよ〜ん…………あ〜〜！！！！その目は信じてないなあ〜！！？アリスちゃん！？…………いや、ホントだよ？アリスちゃん？信じて？お願い？麻里ちゃん信じてくれないと泣いちゃう、えぐっ」

…………あからさまな嘘泣きだった。

「……………ふん」

そんないつもと変わらない麻里先輩を見てちよつと和んだ。

……………気……………使ってくれたのだろうか？

まさか……………麻里先輩に限って……………ね。

しかし、この時、まだ私には分からなかった。

エリスが口にしたあの台詞の真意が……………





おいしくなっちゃう きゃは」

「ざけんなっ！いきなりこんな赤黒くて粘々した液体なんぞぶち撒けられたら飲む気うせるわ！！返せ！！俺のジュース！！！！まだ一口しか飲んでなかつたんだぞ！！！！」

「クリープみたいなものだつて」

「いや！？さすがに無理があるだろ！？それは！？（汗）」

ていうかこないかにも怪しそうな液体口にしたくないわ！！！！

「もお～～～100円そこそこでごちゃごちゃ嫌いぞお～～～すけこましい～～～」

「ねえ？もう殴つてもいい？殴つても良いんだよね？宮子さん？（怒）」

「じゃあねえ、このジュース（？）は捨てるか……………さよなら、俺のジュースちゃん（享年一口）（泣）」

「ありり？耕司君、そのじゅーちゅ飲まないの？」

「飲めるか！！！！こんなもん！！！！罰としてめえが飲めつ！！！！」

「え、ええ……………か、間接キスだなんてそんな……………え、えっち／＼／＼」

ドキッ！

「……………いやいやいや！？ちよつと待ちなさい？今そんな桃色場面引き起こすような流れじゃなかっただろ！？そして、一瞬ドキッとした俺の気持ちを返せっ！！！！コラッ！！！！」

「えーなにこの童貞チョーキもいんですけど、ていうかなにいつてるかわかんないんですけど今すぐ死んでほしいんですけどー」

「……………ごめんなさい」

「あははははー！ーよし、ゆるすー！ー！ー」

……………あれ？なんで俺、謝ってんだ？おかしいよね？これ？

「ん？よう、耕司、……………お、いいもん持ってんじゃんお前」

ひよい

「……………あ」

気がつくと、俺が持っていたジュース（？）の入った紙コップはサ



ルが持っていた。

「ちょうどよかったぜー、俺、喉乾いていたんだよありがとな耕司」  
「……俺は一言もお前にやるとは言っていないんだが……」  
「けち臭いこというなよ、いいじゃん、俺達、結構危ない仲間なんだからさ」

危ない仲間ってなんだ……

「仲間……ナカを知り合った仲間……き、キモイ」

「誰がうまいこと言えと言ったのかな？宮子さん？」

「ぷはー、うまかったぜー！」

「飲むのはやつ！？しかも全部飲んどるし……！」

目を離れた際にサルは謎の液体を飲み干していた。

「おい、宮子……」

「ん？なあに？」

「あの液体もしかして……」

「……うう……ぐあ……あ……ああ……」

「……ん？おい、どうしたサル？」

サルを見るといきなりお腹を押さえてうずくまっていた。……何か前にもこんな展開があったような……

「おい！？大丈夫か！？しっかりしろ！？おい！？」

「あ……あ……あ……うあ……」

「おい！？返事をしろ！？」

「……」

「おい……サル？」

「う」

「『う』？」

「う、ウキヤ……」

「またかよ……」

そして例のごとく裏拳で窓ガラスを割った後、サルはまた何処かへ行ってしまった。

「……で？今度は何なんだよあの薬……またあれか？暗黒面をなんたらかんらとかいうやつ」

「んーん、違うよ、今度はもっと地球に優しいエコノミーなお薬」

「はあ？」

「『ロリ薬』」

「ぶっ……！」

思わず拭いてしまった。

「汚いなー耕司君」

「うるせえよ……それよりなんだよその薬？」

「何って……字の通り飲んだ人をロリっ子にする薬だよ」

「……どこがエコノミーなんだ……（汗）」

アホ毛でメガネの人が好きそうな薬だな。

「てか、あいつ（サル）飲んだらまたバカザルなったじゃねえか」

「んー？だから幼児化ロリしたんだと思うよ」

あんなロリ嫌だ……

「あつ、お兄ちゃん、宮っちー、……って宮っちどうしたのその格

好？（汗）」

「耕司さん、宮子さん、こんなところで何を……ま、まさか私に隠れて夜逃げのみ、密会！？うう……！！ひどいですう……！！耕司さん……！！浮気者……！！……！！」

廊下でロリっ子コンビ、夏美と百合ちゃんが声を掛けてきた。

「とりあえず、百合ちゃんは落ち着こうね」

「お、落ち着けるわけ無いですっ……あ、ああ……耕司さんのモ

ノが宮子さんの……あ、穴に……入れたり抜いたり……ズッ

コンバッコン……ズッコンバッコン……ズッコンバッコン……

……キュ……」

ボタン

「ゆ、百合っち大丈夫!？」

突然、倒れた百合ちゃんを介抱する夏美……

……あれ？百合ちゃんってこんな妄想キアラだったっけ？とりあえず可愛い顔してズッコンバツコンとか言わないでほしい……

「ん、とりあえずモルモットで試しに飲ませてみようか？このロリ薬」

「モルモットって……(汗)」

「あれ？宮っちそのジューズ何？」

百合ちゃんを介抱し終えた夏美が宮子に問う。……それがジューズに見えるのか。いいように見ても『ごんですよ』にしか見えないこの液をジューズ、と？

「飲んでみる？夏っち？」

「おい、やめとけよ。ロリをこれ以上、ロリにするなんて酷すぎるだろうが」

「何かよく分からないけど酷いこと言われてるような気がする!？」

そして、俺の言い分を無視し、宮子はどこから持ってきたのかワイングラスにロリ薬を入れ、夏美に手渡す。

「わー、おいしそうだね」

「ググつといつちやいなよー、ユー」

お前がいつちやいなよ。

「んく……んく……」

そしてロリ薬を飲みだす夏美……はあく、どうなって知らねえぞ

……  
「……なんだか不思議な味だね……… なんだかとってもご飯が欲しくなりそうな」

……「ごんですよ?」

「……」

とりあえず、夏美の様子を見守る俺と宮子……

「……」

「「……………」

「……………」

「……………」

「……………」  
「おい、宮子さん。何も起きねえぞ。まあ、その方がいいんだけど」

「ロリ薬を飲んでからの夏美は無言で俺達の顔を上目使いで見ているだけだった……………」

「……………」  
「耕司君。何だか夏つちの様子がおかしいよ？声……………掛けてみなよ」

「はあ……………」

「……………」

「とりあえず、宮子の言っている意味がよく分からないが声を掛けてみるか……………」

「おい、夏美……………」

「……………」

「俺が声を掛けると不思議そうに首をちよつと傾げる夏美……………うっ、ちよつと仕草がかわいいいじゃねえか……………」

「あゝ耕司君、今『ちよつと仕草がかわいいいじゃねえツラ……………ぐべっ！うひひひひひ！』とか思ったでしょ……………この鬼畜っ」

「ち、違っつ！……………って、夏美……………お前少しはツツコメよ……………！びくっ……………」

「……………ふるふる」

「……………あれ？なんでそんな怯えた小動物みたいな目で俺を見るのかな……………？」

「……………夏美？」

「……………そして、もう一度、夏美声を掛ける俺……………おにいちゃん達……………だれ？」



「よし、じゃあとりあえず帰ろうな、夏美」

「……………ん」

幼女化した夏美の手を引いて俺達は寮へ帰ることにした。

番外編その25 『知らないあの子の一面は好き？（後編）』

寮への帰り道。

あれから宮子はすぐさまどこかへ逃げていった……………くそ、逃げ足だけは速い奴だ……………

昼からの授業は出れねえがまあ、出てもひたすら睡眠学習に徹するだけだし、出席日数も充分足りているからまあそれはいいとして……………なんで俺は子守りをしなきゃあなんねえんだ……………主夫じゃねえんだぞ……………

「はあ……………なんでこんな……………なあ？」

隣にいる夏美を見る……………俺の意図は伝わっただろうか？

「……………？」

夏美は不思議そうな瞳で俺をじっと上目使いで見つめる。まあ……………わかるわけねえよな……………ロリだし……………

「……………はあ」

そんな顔で見られると何か……………これまでの事がどうでもよくなってくる。これがロリパワーってやつか……………

ク……………

かわいらしい腹の音が隣から聞こえてきた。

「……………ははっ、お前昼飯まだ食ってなかったのな」

「……………（ノノノ）」

頬を紅潮させる夏美……………やっぱりロリでも恥ずかしいのだろうか？

「何か食いたいものあるか？」

「……………くれーぶ」

「クレープ……………ねえ、ちょっと遠回りになるが公園に行ってみるか」

「……………うん」





「耕次郎君」

「……なんかどこかで聞いたことがあるような嫌な声が聞こえてきたが……錯覚か？錯覚であると信じたい……」

嫌な予感がしたが俺がその声の主の方に振り返るとそこにいたのは

……

「……お前こそこんなところでナニしているんだ（汗）」

さっきの男と同じような格好をした前田鉄二、通称『ファンシー前田』がいた。

ついでに格好もファンシーだった……上半身にはマジックでミツ

ーの絵が描かれており、吹き出しの台詞で『幼女大好き』と書かれていた……

「僕かい？この格好を見れば分かるだろう？」

「わかんねえよ。わかるのはお前がロリコンという事実。その１点だけだ」

「最近、この公園には幼女を狙う変質者が多発していてね。そんな由々しき事態を打開するために我々、『幼女を遠くからじっと見守る会』が発足されたというわけだよ」

「変質者はお前だ」

「ところで耕次郎君はこんな所でナニをしているんだい？学校はいけないじゃないか……学生の身分でこんな所で遊んじゃいけないよ？親に高いお金を払ってもらって学校に通っているんだらう？恥を知りなさい、恥を」

「お前が恥を知れ」

「というわけで、そこにいるかわいい幼女は僕が預かるよ」

「何が『というわけ』だ。断る」

「なっ……耕次郎君、悪い事は言わない……今、自首すれば軽い罪で済む……さあ、僕にその子を渡すんだ、はあはあ」

「今、『はあはあ』って言ったよな？お前」

「……」

俺の服をギュッと掴んで俺の後ろで隠れる夏美……怯えているの

か。

「なあ？そろそろあっち行ってくんねえかな？なつ……じゃなくてこの子怖がつてるからさあ……」

「ふうーふうー……そ、そんなこと言って……自分だけシツポリガツチリいつちゃって『アツー！スネ夫さんイっちゃうー！』とか木馬でウハウハレロレロするつもりだろう！？」

「頼むから日本語を喋ってくれ」

「許すまじ！！断じて許さんっ！！！！『はじめて』を奪うのは村上耕司ではない！！この、前田鉄二、この僕だああああー！！！！！！！！！！」

「お前、1回死んだ方がいいと思うよ」

そろそろ本気で切れそうになり、手を出そうとした時……  
ポン……

「あの、君、ちよつといいかな？」

数人の青い人達が現れ、ファンシー前田を取り囲んだ。

「……何だね？君達は……」

青い人達に取り囲まれても堂々とした態度をとるファンシー前田……

……

「この公園で不審な連中が幼女を狙って徘徊しているとの情報を聞いて駆けつけたのだが……君、何だね？その格好？」

あきらかにファンシー前田の事だった。ていうか、ファンシー前田って打つのめんどくせえな。

今度から略してファンシーMと呼ぶことにしよう……あんま、略されてねえな……

「はんっ……そんなもの……」

ファンシーMは鼻で笑い、そして……

「僕は無関係です、ハイ」

逃げたっ！！！！カッコ悪っ！！！！

ガシッ！ガシッ！！

「な、何をするっ！？この手はなんだっ！？ぼ、僕をどこへ連れて



が、そんな未知の味に望むほど俺の胃は頑丈にできていなかったの  
で比較的スタンダードなものを選んだ。

「……………」  
もぐもぐ……………」

……………」  
「……しかし、会話ねえな……………」夏美って昔は口数少なかったんだな

……………」  
意外だ……………」昔からピヨピヨ飛び回っているイメージあんのにな

……………」  
こんなしおらしい夏美なんて……………」

「……………」  
「……………」?」  
……………」  
「かわいいじゃねえか……………」って、俺はロリコンじゃねえんだぞ

……………」  
お、落ちケツ（汗）

「……………」  
お?」

夏美の小さい口の周りにクリー……………」じゃなくておこげがついていた。  
ああ……………」俺、こういうの気になるタイプなんだよな……………」

「夏美、ほら、こっち向いてみる」

「……………」?」

フキフキ

たまたま持っていたポケットティッシュで口の周りを拭いてやる。

「……………」

「……………」  
……………」（／／／）

カシャ

…………カシャ？

「…………あ（汗）」

「…………」  
カメラのシャッター音がする方を見てみると…………そこにはとつても笑顔な千里さんがカメラを構えて俺と夏美のフキフキシーンを見つめていた…………

「あ、あの…………千里さん…………？これはデスネ…………？（汗）」

「激写っ 激写っ 激写っ 激写っ 激写っ」

カシャカシャカシャカシャカシャカシャ！！！！！！

ああ…………俺の明日は何処に…………（泣）

## 第79話『寄生虫』

ジリリリリリリ……………カチッ

「……………」

私は耳元でいつまでも鳴り響く喧しい時計のスイッチを押した。

実は結構前から鳴っていたのだが私はあえて無視……………というより本当はスイッチを押す気は無かった。

このまま二度寝でもしてやるうか……………そんな事まで思ったくらいだ、しかし別に眠たいわけではない。

押す気力が無い……………気だるい……………というより、また新たな1日が始まるのが鬱だったから。

「……………寒い」

冬の朝は容赦なく凍てつくように寒い。

こんなにも晴れているのに……………私への当て付けだろうか？そんな馬鹿な事まで考えてしまう。

とにもかくにも、ようやく目が冴えて来た私はふと枕もとの時計に目をやる。

「……………7時30分、完全なる遅刻ね」

学校じゃない、新聞配達のアルバイトだ。

……………まあ、やってしまったのは仕方が無い。

今から行った所で既に配達は終わっているだろう……………そもそも生徒の身分で早朝のバイトは無理がある。

それに……………私は家事もしている。

ろくに家事も出来ないエリスのために……………いや、何も出来ないエリ……………

「っ！な、何考えてんの……………私……………」

決めたじゃないか、約束したじゃないか、祖母が亡くなったあの日

—————

『アリスちゃん……………最後に……………最後に1つだけおばあちゃんのがまま……………聞いてくれるかい?』

「……………ハハ」

馬鹿だ、私は。

すっかりあの日の約束を忘れて。

自分の事ばかり考えて。

「ごめんね……………おばあちゃん」

祖母の遺影を見つめながら私はふと思う……………

でも今はもうあの日のおばあちゃんの『わがまま』、忘れちゃったよ……………

「……………」





……そこに、『虫』がいた。

——それは、まるで——

——私達の日常を覆すがごとく……日常と非日常が混純し……

——

——非日常こそが日常——

——そう、それが当たり前なのだ……——

——この男に諭されているようで……——

——私は一瞬、ほんの一瞬、安心してしまった……——

——でも、ほんの一瞬の後、暗転……——

——安心を奪われた……この男の手によって……——

——ああ、眩暈がする……——

——この男に侵されていく……——

「あつ、お姉ちゃん！おはよう！」

エリスの声で我に返る。……小田原の傍にエリスがいた。

「……エリス、あんた……なに、してるの？」

私が台所で見えた光景は目にもしたくない……エリスと小田原が互いに寄り添って、その……仲むつましく朝食を作っていた……そ

れは傍から見ればまるで……恋人同士……ああ、何だこれは。

……嫌だ、この場から逃げ出したい……どこか遠くへ……

「何って……見れば分かるよね？浩二君と一緒に朝ご飯作ってるんだよ」

「いやはや……エリスちゃんって言わせてもらったら悪いけど……ぶつきようだね……包丁使わせたら見ているこつちが怖い怖い……俺が何度止めたか……俺が止めなかったらこのまな板血まみれだよ？」

「もっ、もお……（ノノノ）浩二君っ……！それはお姉ちゃんの前で言わない約束だよお！？」

「あはは……！ごめんごめん……いやあ、でもそんなおつちよこちよいのエリスちゃんはおかしいなあ……っつてっつい思ってしまうわけですよ！俺ちゃんは……！」

……浩二君？この男の名前……いつの間に……そんな、……

「もお……！そんな恥ずかしいこと言わないでよ……！浩二君……！（ノノノ）」

「あははっ……！俺っち、つい好きな人にいじわるしちゃっただけどねえ……ほら、赤くなってるエリスちゃんかぁいいし」

「……（ノノノ）」

「耳まで赤くなってる……ほんと……かぁいいなあ」

「……エリスちゃん」

「もっ、もお……（ノノノ）」

エリスは小田原の言葉に恥ずかしがって入るものの満更でもない様子……これではまるで……

「あっ、お姉ちゃん、朝ご飯もう少ししたらできるから待ってて！」

「そうそう、待っててね 俺がほとんどやってんだけどね」

「も、もお……！浩二君は余計な事、言わないでえ……！（ノノノ）」

「……」

私は……イスに座り、じっと……じっと幸せそうなエリスと小

田原を眺めていた……今、私はどんな顔をしているのだろう……  
……ただ、私はその光景を、じっと、見つめていた。……

その後、食卓には色とりどりの、朝食とは思えないほどの、豪華な料理が並べられたが、味は覚えていない。

「そういえば、もうすぐうちの学園祭だね？ エリスちゃんのクラスの出し物は何やんの？」

私、エリス、そして小田原が朝の通学路を歩いていた……その時、エリスに学園祭の話振ってきた。そうか……もう、学園祭……そんな時期。日々、忙しかったからその存在もすっかり忘れていた……

……  
「え？ 私のクラス？ メイド喫茶だよ？」

「へえ、えらい学園祭の定番所をやるんだね。まあ、俺っち、覗きに行くからさ エリスちゃんのメイド姿とスカートの中」

「も、もお！ 恥ずかしいなあ……！ 最後のはセクハラだよ！！！！（  
／／／）」

恥ずかしそうに俯くエリス……朝から何度この反応を見たか。

「ははっ……まあ、それは冗談として……アリスちゃんは何やんの？」

「……」

「……お姉ちゃん？」

エリスが私の顔を覗く……仕方ない。

「……ふ、普通の喫茶店……よ」

嘘をついた……実のところ知らない。だって、私はクラスから浮いていたから……

「……ふん」

小田原は私をじっと見つめる……嘘、ばれた……？いや、そんな、訳、無い……でも、何？その……目？まるで、見透かされているような……やだ……寒気がする……

「おっ、今日は余裕で学校到着だね」

小田原は私から目を離すとそう言っただけで校門の中をくぐり、エリスはそれに続いて校門をくぐって行った……

………今日も、私の、日常が、始まる………

## 第80話『そこにいる存在』

部屋と部屋を繋ぐ扉。

それはある空間と他方の空間を隔てるいわゆる『ついたて』のような役割をしている。

各個の部屋に他者の思想が反映されない『自分の空間』の形態を常に保つ、いや人はソレを保とうと日々努力している。まあ、例外的に自分からソレを崩す者もいるが。

つまり、扉を開く事で初めて人と人は交流を交えて人から人へまたある人から人へ……人間関係を築き上げていく。しかしその交流関係は前述で述べたように扉が開く事で初めて発揮するもので扉が開かれぬ場合はそこで滞る。だからと言って人から人への交流が止まることはなく専ら別ルートで人は人へと交流を築き上げていく。

従って、その交流を止めた人は特殊な人——浮いた人となる、それは人間社会で既に暗黙の了解となっている。そうになったら、もう他者の介入、関係を失ってしまう。そこには他者の意思や思想は一生反映されない『開かずの部屋』ができてしまう。

そして、鍵。

それは部屋と部屋を繋ぐ扉を施錠する際に必要な道具。

扉は基本的に扉だけで機能しているわけではなく鍵とセットで機能している。(便宜上、ここでは鍵なしの扉は考えない事とする)さっき言った交流はこの鍵で制御できる。鍵をかけることで他人との交流を遮断する。

もつとも、それは人の意思により行われることで通常、施錠しない

のが普通ではあるが。

つまり、人と人の関係が崩れてしまえばそこで鍵が掛けられる……  
…かもしれない。

どちらかのアプローチで鍵で開けられ、また部屋と部屋が、人と人が繋がっていく……かもしれない。

いずれにせよそれは当人同士の問題で部屋が遠い、つまり繋がりが浅い者が簡単に介入できる問題ではない。

それと、鍵は単独で存在しない。

なぜならば、鍵を持つとは他者と関わりあう意と同様、そこには2人の所有物となり、複数存在する事になる。アメーバのように鍵が分裂するとは奇妙な話だが。つまり、その鍵の所有者が多くなる事で一種の『グループ』が形成されていく。人間関係でもよくある好きなもの同士のグループ分け、あれだ。

確固たる鍵が形成されてしまう事です。『開かずの部屋』の住人は『あぶれた存在』化してしまう。

このように……鍵は人間関係を築いていく上で重要な道具となりうると同時に人間関係を壊しうる道具ともなりうるわけである。

アリスという少女は『開かずの部屋』の住人であった。

しかし、別に自らソレを望んだわけでは無い。周りの環境が徐々に彼女そのような住人に変えてしまった。

最初は髪の色だった。彼女の髪の色は銀色。人によってはそれは美しいと称し、またある人によっては珍しい、またある人によっては好意を抱き、またある人によっては嫌悪を抱く者、そのように人は様々な感情を抱くであろう。少なからず、それは特別視されているわけで……

『あんださあ？最近調子乗ってない？』

そんな突拍子も無いことを罵られた事もしばしば。それは、まあ、ある種の妬みからくるものだが……まあ、妬みは厄介。なんせ、羨望、嫉妬の中でも最上級のもの、ワーストだ。ねちねちと……最初は言葉で吐かれ、責め続ける。これは正直苦痛である。しかし、こんな根拠も無い台詞に対して正義感の強い彼女は……

『調子なんか乗ってないんだけど』

馬鹿正直に答えてしまうのがアリスだった。しかし、彼女は気付いていなかった。この台詞に対して馬鹿正直に答えてしまうことが彼女にとってマイナスにかなりえないことを。

ある日、アリスが教室に入るとどこか……いつもと違う空気が教室中に漂っていた。

同棲から発せられる視線という視線、視線、視線、視線……なんだろう……？アリスは不思議になり、近くのある女子達の会話を聞き耳を立てると……

『あいつ……アリスって絶対、調子に乗っているよね』

……アリスは心臓を捕まれるような気持ちになった。別にその言葉に対して不快を抱いたわけではない。なんせ、その台詞は昨日、嫌な女子に言われたのだから……そこまで気にしていない。それが問題ではなく……その、その会話を、よりによってその会話を……昨日まで仲良く話していた女子がしていた。

これだけで、頭がクラツとくる……そして、アリスは気になった。自分は……何か嫌な事を相手にしたのだろうか？何か、何か……そう頭の中でグルグル考えて、考えて、考えている内に……彼女はついにある行動に出た。





頭の中でグルグルグルグル……  
こうして、彼女、アリスという少女は狂った壊れた崩れた……  
いつの間にか何人もの人という人に囲まれて罵倒されることで……  
…彼女の何かが壊れた、壊された。  
悪い事、悪いもの、悪い人……それは自分なんだと、そう、自分  
なんだと。  
勝手に自分の頭の中で肯定してしまった……そこに否定するもの  
はもう誰一人としていない。  
最後の牙城……『自分』でさえも肯定してしまった……  
そうだったら、もう歯車は止まらない……  
グルグルグルグル……  
そんな悪い人はこの世の中から消えなくてはならない、そうアリス  
は悟った。  
この世に未練もクソも何も無い……そんなものとうに捨てた。  
グルグルグルグル……  
あるのは……この肉体、この汚れきった、いや汚れきった肉体……  
……こんな肉体があるから。  
こんなわけもわからぬ、汁……涙があふれ出る……何故だろう？  
同時にそんな下らぬ自分の存在におかしく笑みがこぼれた。  
何故？何故、こんな……わけがわからない、何故、自分はこの世  
に生れ落ちたのだろうか？  
苦痛、後悔、自虐、懺悔……彼女の中で何か、大切なもの  
が欠落した。

プシューーーーーー………

教室中に奇声と涙と血と狂気がーーーーー舞った

それは、全て彼女のもので、美しく、まるで芸術のようーーーーー

狂いながら意識が徐々に落ちていく彼女はそう思った。

## 第81話『優しい拒絶』

キーンコーンカーンコーン……………

「……………ん」

校舎の鐘が鳴り響く音で私は今まで机に伏せていた顔をゆっくり上げた。

周囲を見ると教科書や携帯ゲーム、その他諸々を鞆にしまう者、痴話をする者、愚痴を吐く者等でひしめき合っていた。そうか……………もう、放課後……………結局今日も1日中寝てしまった。まあ、今に始まった事じゃないし……………最初の内は教師があれこれ煩くのたまわっていたが、疲れたのかももう最近では何も言わなくなつた。

「……………」

もう、ここに長居する理由が無い。

そう思った私は何時までも騒がしい放課後の教室を後にした。

夕日に染まる廊下を意味なく徘徊する。

そんな、他人から見れば不審な行動が私にとっては唯一の癒しに値するものだった。

それも、クラスメイトに見つかってはオジャン。1人で行動するからいい……………ううん、そうじゃないと意味が無い。何より、これは少しでもあいつらと距離を置きたかったからだ。

距離を置きたかった……………いや、それだと私から離れていったみたいで癪ね。

距離を置きざるを得なかった……………うん、こっちの方がしっくりくる。別にあいつらの事が嫌いなわけではない。あいつらは私の事をどう

思っているか知らないけれど。

興味が無い、関心が無い……………まあ、そんな所か。

あの事件以来、クラスメイト達は何も言わなくなった。

病院で生死を彷徨った私の脳裏にはつきりと残っていたものは妹の泣きじゃくる声、ただそれだけ。

後は曖昧、事件の存在は残っていたが自分が何をしたのか、何をされたのか、忘れたわけでは無いけれど何かもやで薄れかけていた。

回復後、クラスメイトの反応は一貫していた。

何も言わないから直接聞き出したわけではないけれど、明らかに私を見るソレは……………恐怖と畏怖がひしひしと表れていた。狂人、狂人、狂人……………授業中にぼそつとそんな声が聞こえた。それは私に向けられた言葉なのか、空耳なのか、それは分からないがとにかくそれから私とクラスメイト達は距離を置く関係となった。

苦痛ではない、むしろ疲れないし、私はこの現状を変えようと思わなかった。

以前の私ならこんな現状は絶対許せなかった、何よりこんなひねた自分が許せなかっただろう……………きつと。

でも、今はどうだ。そんな綺麗な考え方ができない。

なんで奴らのために自分が変わらなくちゃならないの？

なんで奴らのために自分から歩み寄らなきゃならないの？

なんで奴らのために自分が必死にならなきゃならないの？

別に答えが欲しいわけではない。むしろ、真面目に返答されたら困る。(我が妹ならしそうだが)  
自分にそう言い聞かせる事で納得したかっただけだ。ほら、これならどうだ。これなら今まで胸の中に溜まっていたカアッとした熱さが冷めてくる。冷めると…… クラスの事等どうでもよくなってくる、いや何もかもどうでもよくなってくる。1つを除いて。  
でも、これは単なる己の逃げ道。ひねた考え方以外の何物でもないけど、そんなことは分かりきっている。フフ…… ますます性質が悪いわね。

人間は1人では生きていけない。

そんな事、誰が最初に言ったのか知らないけれど今の私には胸にグサツとくる。  
それを否定できない自分に対して…… 否定したいけれど否定しきれない自分に。  
衣食住…… そういう現実的な面に対して否定できない、そういうわけではない。  
ひねた自分の拠り所、開かずの部屋に差し込む唯一の光…… それ  
が自分の中で存在するからだ。

エリスというたった1人の妹であり家族……そして、唯一の私の開かずの部屋の『鍵』。

「そんなんじゃない、ゼーんぜん誤魔化せないよ」

廊下を歩いていると聞き覚えのある声が私の耳に届いた。

聞き覚えのある声……いや、聞いたくなかった、少なくとも今の私は……でも、聞こえてしまった。

無視すればいいものを……どこかまだ人と繋がりがかったのか、馬鹿な私は気持ちとは裏腹に声の震源地の方に振り向いてしまった。とある教室、誰もいなくなったはずの教室。

未だ消されず、前の黒板に残る数字の板書。

日直は2人指名されている……サボリ、ね、さらにあることだ。

全然整理整頓できていない机、机の引き出しに教科書やプリント類がぐっちやくちやくに詰められている。

それだけではない、コンビニで買ったのか、紙パックに入ったジュース（中身は残っていないだろうが）や雑誌類が無造作に机の上に置かれている。ゴミ箱はゴミで溢れかえっている。

言い方が悪いだろうがこれだけでこのクラスの生徒の質が知れる、第一印象は大事だなとつくづく考えさせられる光景である。教師は何をしているのだろうか？……いや、今そんなことはどうでもいいことか。

冷静にどうでもいいことを分析し終わった………というよりもそんなどうでもいいことを考える事で自分を落ち着かせた、心を冷やした、が………それでもこの………熱さは振り切れない。

誰もいないはずの妹の教室でエリスと………あの男、いや寄生虫――小田原浩二が対面していた。

「……………っ！」

2人から見える位置にいた私は慌てて教室の廊下側の窓の下に隠れた。

「……………ん？今、誰かいた……………？」

不快な小田原の声が聞こえる……………

「気のせいだよ……………それより、返事、聞かせて浩二君」

エリスの声が聞こえる。

「どうやら見つかっていない模様…… ああ良かった、と安心はできない。」

「それより、この状況は何だ…… さっきの小田原の……」

『そんなんじや、ぜーんぜん誤魔化せないよ』

「…… どういう意味？ 全然、分からないが…… 私はこの今の状況にただ苛立ちを感じていた……」

「だからさあ…… そんなんじや全然、誤魔化せてないって、あはは」  
エリスの言葉に小田原は薄ら笑いを浮かべていた…… そんな小田原の様子にますます苛立ちを覚える……

「今にも飛び出して殴りかけたいところだが…… とりあえず状況がよく分からないので様子を見る。」

「……………」

「黙つても俺にはぜーんぶわかつているんだよーん。君がそんな必死になっていることも、急に君が俺に接近してきたことも、君のお姉さん、アリスちゃんの状態がおかしいのも、ぜーんぶ、ね」  
小田原はちゃらけた様子で答える…… が、何だ…… 言葉の節々に伝わる確信めいた何か…… まずは、私の中の熱さが込み上げてくる…… 何だろう？ 苛立ちとは別に何か不安が募ってくる……

「お姉ちゃんは…… 関係ない」

エリスの…… 冷たい言葉が聞こえてくる……

「普段とは違うエリスの…… まるで何か、私の…… 私を、まさか私を拒絶している…… 嘘、でしょ？」

私は…… 私は……

「ありゃ〜？ お姉ちゃんは関係ないの？ てつきり俺は、いや絶対……」

……

「とにかく…… お姉ちゃんは貴方とは無関係、私はお姉ちゃんとは血は繋がっているだけで…… ただそれだけ、この件に関して何も関係ない。それより私は貴方の返事が聞きたい。私は真剣だから……」

……



血が繋がっているだけ……私とエリスは……そんな……  
「んー……そっか、まっ……いいでしょ。エリスちゃんの質問に対する俺の答えは決まっているわけだし」  
「そう、なら……返事、聞かせて」

……

いたたまれなくなった私はその場から、誰にも気付かれぬよう逃げ出した……

## 第82話『生贄』

( エリス視点 )

「……………で？これでいいの？エリスちゃん？」

「……………」

私の目の前でやれやれといった様子で机に腰を掛ける彼……………小田原浩一。

「はあ……………返事くらいしてくれよ、やれやれ……………そんなに俺は信用ないかね？」

彼はぎこちない笑顔で私に返事を求める。が、私には彼のその態度に何か裏があるように見えて……………敢えて返事をしなかった。そこで仕方なく私は軽く首を横に振った。

「……………へえ、やつぱり、ね。そんな事だろうと思ったよ」

彼は私に下卑な笑みを向け意味深な台詞を吐いた。一瞬、胸がドキツとする……………まさか、そんな……………だ、大丈夫……………そんなはずはない、そんなはずは……………ない……………

「な、何を……………っ」

思わず私は彼に問おうとしたが……………口を閉ざした。しまった……………少し動揺してしまった。しかし、この程度の事……………取り繕うまでもない。落ち着け……………落ち着くんだ私……………ここで……………ここで、失敗は許されないんだ……………ここで私が一步謝れば……………多分、その先は底なし沼ならぬ地獄が待ち構えている……………地雷を踏むわけにはいかない。そのために私はこれまで『仮面』で取り繕っていたのだから……………

私はその場でふと目を閉じた……………目を閉じればそこは闇、今まさに私は彼という闇の中、無我夢中でもがいているのだ……………闇に飲み込まれぬよう必死にもがいてもがいて……………一筋の光を探し出す。でも、前後を見ても左右を見ても上下を見ても闇、闇……………四方八方に闇、闇、闇、この世界は永遠の闇で包まれていた……………感覚が無い、感触が無い、足場も無い、あるのは『恐怖』という感情だけ、それだけで耐えている。怖い、目の前……いや、私の全てを包む闇が怖い……………この感情さえも無くなってしまえば私はどうなってしまうのだろうか……………想像もしたくない……………闇に飲み込まれる私は間違いなく人間としての機能を失うだろう。その前に……………そのため早く、早く光を探さなければ……………

お姉ちゃんは私にとって光のような存在だった。

だから……………今、目の前にいる彼、闇に飲み込まれるわけにはいかないのだ……………

でも、もし。

私が闇に飲み込まれたとしても。

その時は喜んで犠牲、いや生贄となるじ……………

光を遮る闇の生贄と……………

「君、俺の事、正直嫌いでしょ？」  
「……………」

彼の一言で脳に断続的なノイズが流れる……………やっぱり、こ

の人は——……——……

「な、何を……言ってるんですか……私は——」

「嘘だねえ……」

……にいつと、なぜか愉快に……嫌味つたらしく口の端を歪める彼……  
……まるで目の前の私を辱めるように……そんな寒気を覚える一言であつた。

「ホント君分かりやすい子だねえ。君、ギャンブルとか絶対苦手でしょう？ほら、ババ抜きとかポーカーとか」

「……話の腰を折らないでください。どこに……どこにそんな証拠があるって言うんですか……」

落ち着け私——多分、目の前の彼、いやこの男は私の反応を見ているんだ。いや、見ながら楽しんでいる……だから、私が少しでも動揺すれば……勘繰る……だから、悟られる……私は自分にそう言い聞かせていた……言い聞かせていた、が。

「それが全てだよん」

にっ……今度はさっきと違ってかわって爽やかに笑う……私はそのギャップに一瞬背筋にゾツとしたものが走った……そして同時に……私の中の何かが崩れた……それはもう、あっけなく「どういう意味……ですか」

そう問いつつも私はすでに確信していた……彼が、闇が蠢く、私の意図に勘付いて。

「さて……悪いけど俺もう帰らなくちゃ」

彼は机から離れ、私に背を向け教室を出て行くこととする……私は咄嗟に彼を追いかけ、いや止めようと……

「……っ！」

「おっと、俺に近づかない方がいいよ。俺はまだ君の告白『もどきに返事をしたつもりはないからね』」

「う、嘘っ！さっき、私の事……」

「俺に近づくなって言うてんだよ？小娘」

ゾゾゾゾ

「……………」

……な、なに？今の悪寒……………虫が……………虫が私の身体を這うような感覚は……………？

い、い、や……………な、何で……………？何で……………私……………動けない……………？

「まっ……………そんなところだとは思ってたけどさ……………まあ、こつもあからさまにやられるとは思いもしなかったけどね」

全身から汗という汗が流れてくる……………彼が喋るにつれ、眩暈・頭痛・吐き気も催してきた……………

「はっ……………はあはあ……………くっ、はっはあ……………」

くっ……………声が出ない……………それどころか息切れが激しい……………く、苦しい……………私は堪らずその場でうずくまってしまった。

「おや？どうしたの？顔……………辛そうだね……………保健室……………行く？」

彼の平坦な声が頭上から聞こえてくる……………私の目の前で突っ立っている……………が、今の私には上を見る余裕は無かった。それでも私はお腹に力を入れ……………

「はっ、はあーはあー……………なっ、ん、で……………」

「ん？」

「なんで……………私……………私、貴方のこ……………んっ！？」

パチーン…………

左頬に鋭い痛みが走った…………

「そんな自分を偽るのはもうよそうよ？いい加減イライラして来るんだよね？そういうの」

「……………っ」

笑っている……………見ていないけど……………彼は今、私を……………嗤っているんだ……………

「痛み……………って分かる？エリスちゃん？今俺が君に手を上げたのも分かってほしいから……………痛みを、ね？痛いでしょ？すっごく痛かったでしょ？うん、俺にも分かるよその気持ち……………まあ、俺の痛みはそんなじゃあ治まりきれないけどね……………と、まあ言ってみたものの……………俺はそんなセンチメンタルな人間じゃないんだけどね」  
彼は突然ワケが分からないことを語りだす……………

「ああ、分からないさ。俺はこんな痛みも！こんな痛みも！！こんな痛みも！！！！」

パチンパチンパチン

続け様に彼は私の頬を打つ……………私は必死で彼の暴力に耐えていた

……………

「……………っ、あ」

「あ、痛い？痛いでしょ？でも、俺にはそれが分からない！知らない！！誰も教えてくれなかった！！！！」

パチンパチンパチン

私は……ただ耐えるしかなかった……ただひたすら耐えて、耐えて、耐えて……彼の視線が『他』に走らぬように……

「は、ははっ、やっぱり。やっぱり……君は、いや……君もそうやって、ずっと……ずっと……僕の前で我慢し続けるんだね……残念だよ……」

「……」

彼はふと振り上げた手を止め……

「そう、君がその気なら……俺は……」

「僕は君の全てを受け入れるとしよう」



第83話『混沌とした純黒の中で』（前書き）

今回は前話の小田原浩二視点となります。

### 第83話『混沌とした純黒の中で』

混色。

世界を構成する物質の飾り付けを為す色は一つ一つ意味があつて、ソレを特徴とする色を採用している。

情熱の赤。

冷静の青。

恋情のピンク……などなど。

といったように、確かにひとつひとつ何かしらの意味がそこには存在する。

そのように色を誇示する事でそのものに質感を与える。

それだけではない、同時にこれらの色は何かを暗示している。

前に挙げた赤は情熱、青は冷静……といったように。

混色。

世界を構成する物質の飾り付けを為す色は一つ一つ意味があつて、ソレを特徴とする色を採用している。

ただし、色の意義は三つ。

1・色のひとつひとつは何かしらの意味が存在する、そのものに質感を与える。

2・暗示する、しかしそれは人それぞれ感じ方が違う。

3・混色は世界が許さない、だってそれは混沌を意味するのだから。

混色は単色では無い、という意味ではない。

例えば、白。

これは光の三原色である赤、緑、青を混ぜれば出来上がる。

白は混色ではない、混色で出来上がるものではあるがここで意味する混色とは意味が違う。

ここでの混色とはカオス、混沌を意味するところにある。

なので……………それとは正反対の色、黒をイメージすると良い。

黒は全ての波長の光を吸収する。

この意味するところは常に黒が黒であり続けるところにある。

つまり……………黒に何色を混ぜても黒なのだ、赤、緑、青、黄、白、紫……………何を混ぜても黒、黒でしかない。

しかし、逆に黒を作ることは出来る、色の三原色である緑青<sup>シアン</sup>、赤紫<sup>マゼンタ</sup>、黄<sup>イエロー</sup>を減法混色すれば良い。先ほど述べたとおり黒を分解、黒を失くすことはできない。

黒に可逆はない、一方通行。

ここで言う混色とはそういうもの。何を、いくら混ぜても黒は黒でしかない、だから混色。

一度、黒に染まったモノは黒でしかない。

小田原浩二という人間はすでに黒に染まっていた。

「浩二君……………私、あなたの事、好きっ、好きなの……………」  
目の前にいる小娘は俺にそう告げていた。

俺の目の前にいる小娘は確か、エリスと言ったか……………ふうん、容

姿は逸品だね。

しかしまさかこうも早い段階で仕掛けてくるとは……………これが本心で言ってるのならちよっぴりときめいちゃうのかも。

「……………それで？何？」

だが、俺は知っている。この小娘は嘘をついている、と。

「それでって……………」

俺がとぼけたフリをすると目の前の小娘の顔は少し困惑した表情に変わる。

さっきまでは恥ずかしそうに頬を染めていたのにコロコロと表情が切り替わるものなのだ、見ていて実に面白い。

「……………」

俺は敢えて返事をせず、小娘の次の言葉を待った。

「好き……………浩二君の事が好きなのっ！！！！！！」

すると今度は大声で目の前の小娘は俺に叫んだ。もしかして外に漏れてるんじゃないか、コレ？

「……………」

目の前の小娘は射抜くように無言で俺を見つめる……………これで分かった？とでも言いたいのか？

まさか、ラブコメの主人公でもさっきの言葉で気付かぬほど鈍感じやあるまいし……………気付かぬわけがない。

……………返事待ちか、小娘？強気なその瞳には今にも透明な液体がこぼれてしまえそう……………慣れていないの丸出しだよ。俺は頭を掻いてこう呟いた……………

「好き……………俺もお前のことが好きだ」

「……………っ！」

驚きの表情、あらら。これ、君が求めていた台詞なんじゃないの？

「……………で？これでいいの？エリスちゃん？」

「……………」

返事もなしに、小娘。

「はぁ……………返事くらいしてくれよ、やれやれ……………そんなに俺は信用

ないかね？」

痺れを切らした俺はついそう呟いてしまった。

いつけね、ちよつと先走りすぎたかな？……まっ、いつか。俺は無  
理矢理な笑顔を小娘に向けた。

すると目の前の小娘は首を横に振った……すでにそれが拒絶の意  
味なんだけどねえ……

「……へえ、やっぱり、ね。そんな事だろうと思ったよ」  
もう限界、か。

このまま俺が俺であることを隠し続けても無意味なようだし、彼女  
は彼女で気付いているだろうし……

「な、何を……っ」  
今頃、焦る？焦るの？

もしかして、気付いていない？まさか。

俺は分かってるんだよ、エリスちゃん。君がそう……俺に好意を向  
けるのを。

それは嫌悪の裏返し、ってね。

「君、俺の事、正直嫌いでしょ？」

「……………」

彼女の顔が蒼白になる。……気付いていなかったのか。この俺を  
騙し通せるとでも？

「な、何を……言ってるんですか……私は……」

だから俺は言っちゃった、敬意を込めて、嫌らしく。

「嘘だねえ……」

ますます彼女の顔は蒼白になる。

俺はそんな小娘の様子を見て背筋がゾクゾクしてきた……楽しい、

なつと。

最初は引いて引いてひたすら引き伸ばして最後に楽しもうかと思っただけけど……………もうその必要も無い。

ここで楽しもうー………

「ホント君分かりやすい子だねえ。君、ギャンブルとか絶対苦手でしょう？ほら、ババ抜きとかポーカーとか」

だけど、目の前にいる小娘、いや玩具をそのまま壊してしまうのは実に勿体無い。

少し、心の余裕？って奴を持たせておいて少しずつ……………じわりじわり……………じっくりと楽しもう、この状況を。

ああ！なんて楽しいんだろう！ワクワクする……………この玩具が壊れていく様を想像できよう。

「……………話の腰を折らないでください。どこに……………どこにそんな証拠があるって言うんですか……………」

すると目の前の玩具は心に少し余裕が出来たのかもっともらしい事を口にする。

証拠なんて無いんだよ、証拠なんていらぬ。だって俺は、いや俺そのものが混沌なのだから。

だから、目の前の玩具が困惑する様が好き。俺の遊び心がますます心を掻きたててゆく。

「それが全てだよん」

ほら、玩具よ、悩め！悩め！悩め！

そうやって、俺にそういう弱いところを全て晒し出せ！ほら！ほら！ほら！

ただし受け止めてやれるかどうかは別だがな、くひひ！

「どういう意味……………ですか」

ほう、まだ冷静でいられるか。

意外とこの玩具、もつな。あの弱い姉……………いや、メスブタに比べてくひひ！

だけど、そんな猶予は与えてやらぬ。俺の目の前で苦しめ！苦し

め！もつと苦しめ！くひひ！

「さて……………悪いけど俺も帰らなくちゃ」

もちろん嘘だ、逆だ、帰りたくない、この場から。

帰してやるものか、玩具、お前は選択を誤った。そのまま引いていればいいものを。

姉のために俺から遠ざけようと嘘の告白をしたお前の罪だ、コレは、ほおら抗え！抗え！もつと抗え！俺を楽しませろ！！！！！！くひひひひひひひ！！！！！！

「……………っ！」

「おつと、俺に近づかない方がいいよ。俺はまだ君の告白『もどきに返事をしたつもりはないからね』」

「う、嘘っ！さっき、私の事……………」

「俺に近づくなっって言ってんだよ？小娘」

玩具はその場から動かなくなった。

ほおら、来た、これだ、待っていた、待ち続けていたこの時を。

もう逃がさない、ここからだ、おたのしみは。玩具にひびが入った。くひひ。

「……………っ」

そうだ、その表情だ、もつと俺に向けるその表情を、楽しい、楽しい、たのしい、タノシイ！くひひ！

「まつ……そんなところだとは思ってたけどさ……まあ、二つもあからさまにやられるとは思いましなかったけどね」  
ねちねちと目の前の玩具に台詞をくれてやる。

今、俺の口から練りだされている台詞はあくまで目の前の玩具を少しずつ……少しずつ痛めつけてやるもの。

こんな台詞に意味なんてあるものか、くひひ。

「はっ……はあはあ……くっ、はっはあ……」

あはっ、なんだその吐息は……俺を誘っているのか？くひひ。

「おや？どうしたの？顔……辛そうだね……保健室……行く？」

こんなものもうつそ！嘘！うつそ！誰が行かせてやるものか！くひひ！

「はっ、はあーはあー……なっ、ん、で……」

「ん？」

「なんで……私……私、貴方のこ……んっ！？」

パチーン……

「そんな自分を偽るのはもうよそうよ？いい加減イライラしてくるんだよね？そっいうの」

イライラなんかしない、むしろワクワクしてくる。

目の前の玩具は思った通りの働きをしてくれる、なんて優秀な作品なんだ！くひひ！



「……………」  
怯えてる怯えてる……………玩具がドンドン壊れていく……………く、ひひっ！

「痛み……………って分かる？エリスちゃん？今俺が君に手を上げたのも分かってほしいから……………痛みを、ね？痛いでしょ？すっごく痛かったでしょ？うん、俺にも分かるよその気持ち……………まあ、俺の痛みはそんなじゃあ治まりきれないけどね……………と、まあ言ってみたものの……………俺はそんなセンチメンタルな人間じゃないんだけどね」  
何で俺はこんな口からでまかせが次々とでてくるんだろう……………くっくっひひっひひ！！！！！！

玩具、玩具、玩具、俺はただお前の表情が見たいだけなんだよっ！  
くひひひひひひ！！！！！！

「ああ、分からないさ。俺はこんな痛みも！こんな痛みも！！こんな痛みも！！！！」

パチンパチンパチン  
ああ！楽しい！楽しい！楽しすぎて！止まらない！止まらない！止まらない！！くひひひひひ！！！！！！

「……………っ、あ」  
「あ、痛い？痛いでしょ？でも、俺にはそれが分からない！知らない！！誰も教えてくれなかった！！！！」

パチンパチンパチン  
なんて可愛い玩具なんだろう！玩具！玩具！お前は一生僕が壊してあげるからねっ！くひひひひひ！！！！！！

時間も忘れてしまっっ！くひひひひひははははは！！！！！！くひひひひ！！！！！！

「は、ははっ、やっぱり。やっぱり……………君は、いや……………君もそうやって、ずっと……………ずっと……………僕の前で我慢し続けるんだね……………残念だよ……………」

何が残念なのか、自分でも分からない。満足だ、でも足りない。  
壊してしまいたい、玩具を。目の前にいる玩具を。徹底的に、ボロ

ボロに、何もかも。

「……………」

「そう、君がその気なら……………俺は……………」

「僕は君の全てを受け入れるでしょう」「

そう、この混沌の中で。

玩具を壊す。

僕はただ、それに身を委ねるのみ。

番外編その26 『同好会はお好き?』

桜が咲き始め、少し過ぎやすい気温になってきた頃。

高宮学園の中庭で新入生歓迎会（を装ってはいるが実はただの同好会歓迎会）が行われていた。

俺は帰宅部なので別に途中で入るつもりは無いのだが……夏美が面白そうだから行こうよ、と無理矢理連れて行かれた……。うちの学園の部活は文武両道にたけているようで、どの部もそれなりの成果を上げているらしい……。その分、変な同好会もあるとかないとか、麗奈さんから聞いた話だが。夏美と見学しているとどこかで聞いた事がある……。というか、聞きたくない声が聞こえてきた。

「ねっ? ねっ? いいだろう? ちよつとオツパイの先つちよ、チヨーンってつつくだけだからさ? 大丈夫! 最初はちよつち恥ずかしいかもしれないけど段々、僕も君も癖になるからさ、だから止められない止まらない」

「ばっかじゃない、何が大丈夫なのよ。警察呼ぶわよ」

新入生らしき女子高生にセクハラを働くメガネがいた。

「ちよつ……ポリスメンは勘弁。じゃあ、こちらからも妥協案を出そう。僕がオツパイをつつくだけなら君しか気持ちよくなれない……僕は気持ちよくなれない、と。つまりこれは言わばつゆのない牛丼と同意っ!!! 君はこれがご不満なんだね? うんうん、僕も分かるなその気持ち、エへへ」

「は、はあ? 意味わかんないんですけど、てゆーか何かキモいんですけどこのメガネ」

「ならば!!! こんなプレイはご存知かな? その名もパイリ!!! 僕のおんを君のオツパイの谷間に挟み込み僕はハアハア、君もハアハア。最後はズッコンバッコン、ああ! らめえ! いっつちやうのですう~~~~いえず! うい~~~~きゃ~~~~ん!!!!」

「な、何なのこのメガネ!? き、キモイっ!!!! 死ねっ!!!!」

バキッ

「おばまつー!!!」

「お前は相変わらず懲りないな……」

「む…… おお、これはこれは耕司キユンと夏美タンではないか、入るかい？ 僕のナカに」

「それは笑えない冗談だな」

「あ、あはは…… 三上君、こんにちは」

「……で？ お前こんなところで何やってんの？」

「もちろん同好会の勧誘さ、良かったら2人とも見学していくかい？」

「悪いから帰る、行くぞ夏美」

「う、うん……」

ガチッ

「見学してくださいよお、グスッ」

「……」  
メガネは腕を掴み、ポンコツ娘っぽい声で俺を制する……

「ま、まあまあお兄ちゃん…… ちよつと見ていくぐらいならいいんじゃない…… かな？ あはは……」

「おお！ 夏美タン！ 聞いてくれるかい！？ やっぱりロリたんは良い子だね…… 英男ちゃんうれちい！ そんな良い子にはペロペロキャンディをあげよう…… 存分に舐め舐めするがいい」

「い、いらないよ…… え、えつと？ 三上君はどんな同好会しているのかな？」

「ふむ…… よく聞いてくれた、夏美タン…… 我々の同好会はずばりっ…… 『清纯同好会』 だっ……!!!」

「せ、清纯……？」

「そう、清纯とは…… 世の中の汚れに染まっていないの意……」

「お前は染まりに染まっているがな」

「そんな清纯的な活動を行うことが我々の目的なのですう……!!!」

「我々つて…… お前1人じゃねえか。まさか、俺達を頭数に入れて

ないよな？」

「そんな……寂しいこというなよ、耕ちゃん」

「帰るぞ夏美」

「ま、まあまあお兄ちゃん………（汗）三上君？でもそれじゃあ、同好会成立しないよね……？確か同好会は3人以上必要じゃあ……」

「だって、今僕が作ったんだもん」

鼻を弄くりながら明日の方向に向くひでおくん………えっと、殺していいかな？

「そ、それはまずいんじゃないかな………？」

「ちよつとそこの君達い………」

「……あ、アバ茶の人」

「お、お前は……あのサル顔の男と一緒にいたっ………！って、アバ茶の人とか言うなあ！？（汗）」

俺達に声を掛けてきたのは……確か生徒会の副会長………えっと、何だっけ？アバ・アビル（45）だっけな？

「覚えとけよっ！？（汗）新城流留だっ………流留ちゃんだっ………！！」

「落ち着いてください、アバ茶。キモイです」

「君も乗っかってんじゃあないよっ！？（汗）」

副会長の後ろには紫色のロングヘアの女生徒が澄ました顔で立っていた。副会長の御付きか？

「ご冗談を。気持ち悪い事考えないでください」

「そっか、そっだよな」

「……何か今馬鹿にされたような気がするのだが（汗）」

「気のせいですよ、クズ」

「気のせいか……って、今は気のせいじゃないよねっ！？美亜君！？（汗）」

「お、お兄ちゃん……この人達と知り合いなの？」

「んあ？まあ、その……えっと……アビルさんは知ってるけど……」

「新城流留だよっ！！！！30秒前の出来事を忘れてんじゃあないよっ！？（汗）」

すると、御付き……じゃなかった、後ろにいた女子は何故か俺の方へ近寄ってきて……

「失礼しました、私は生徒会会計を務めている渡辺美亜と申します。ええ、自己紹介は無用です。貴方は村上耕司、そちらの隣のロリは上野夏美、さらにそこにいるただの変態は三上英男ですね、以後、アビル共々よろしくお願いします」

「美亜君！？君、それ絶対わざとやっているよね！？ねえ！？」

俺と夏美は目の前で繰り広げられる夫婦漫才（？）にただただ呆然と立ちつくしていた……

「ところで……生徒会のチミ達、はっ、いや、生徒会の飼犬と言った方がいいかね？その犬共が何用かね？」

ひでおくんはソファアで足を組み、何故か偉そうな態度で生徒会の連中に問う。……その高そうなソファアはどこから持ってきたんだ。

「ふん、美亜君、あれを」

我ら副会長殿は後ろにいる渡辺さんに手で何か合図を送る。

「はい」

プスッ

副会長の親指の肉と爪の間にマチ針が突き刺さった、というより渡辺さんが突き刺した。

「いったー！……！？ちよっ……なっ、何してんのぉ！？み、美亜君！？」

「あ、すいません。書類を渡そうと思ってつい……マチ針を、プ

ブッ

「つい……………マチ針を……………何っ!? ねえ、マチ針が何なの!? そして何故笑うの!? (汗)」  
ピュピュルピュル……………

「ちよっ……………血っ! 血っ! 血い……………!! めっさ血い出とるんですけどっ!? ば、絆創膏! 美亜君! 血を止めるものなら何でもいい! 持っていないかね!? プリイイーーーーズ!!!!!!!!!!」

「紙ヤスリならココにありますか」

「おお! 美亜君! ありがとう!……………って、このちよつとザラザラつとした摩擦が傷口に染みて、僕ちよつと痛気持ちEEEEEEEE!!!!!!!!!! (泣)」

副会長はビクビクしながらその場で倒れた……………その姿は傍から見ればエレクトロしているみたいで何か気持ち悪かった。

「……………皆様、うちの変態が大変お見苦しい姿を晒してしまい真に申し訳ありませんでした。では、これで失礼いたします」

渡辺さんは俺達に頭を下げこの場から去っていった……………って、おい、1人で去るのかよ。ついでにこの気持ち悪い肢体も回収していい。

「……………耕司キョン、僕……………完全に喰われちゃったよね?」

「何の話だ」

「メ……………服を ぬ……………ないで」

「メ……………服を ぬ……………ないで」

「……………」

スタスタ……………ガチッ

「おいおい僕らの耕司くん？マブダチを無視して通り過ぎようとするとはどんな鬼畜だお前は？」

「俺のマブダチに女装趣味でスネ毛の生えたちよつとヤバめな人はいません」

目の前をサツと通り過ぎようとしたが、変態サレに捕まった。

まあ、あれだ。遠くから『メイド同好会』という看板が見えた時点で引き返しておけば良かった。今となってはもう遅いのだが。

「女装？違うな、メイドだ………メイドなるメイド、メイドインチヤイナという奴だな」

「最後の意味違うぞ」

「そんなことはどうでもいい………どうだ？耕司？メイドなるメイドを極めたくなっただろう？」

「極めたくありません」

「じゃあ、まずお手本を見せるとしよう、おい藤P！ご奉仕スタンバイ！」

「うふっ」

サルは後ろにいる………何、あのキモイ生き物。じゃなくて、メイド仕様の藤P君に声を掛ける。

みんな、よかつたね、これ小説で。漫画にしてたらこれ、発禁モノだよ、発禁。もうね、キモ過ぎて目の前にいる奴らをファツキン！したくなってきたよ。

「『ごちゅじんタマ！おじょうタマ！こちらのお席に着いてくださいニヤンにゃん』」

しばらく待っていると、俺と夏美はメイド野郎Aにテーブル席に案内された。狙ってんのかどうか分からんがダミ声の野郎が無理して出す！オクターブ高い声を聞かされるこっちの身にもなってほしい………嫌過ぎる………

「『みゆ、みゆんミュンみゆるるる〜ん………こちらがメニューですよにゃん』」

何、今の鳴き声。どうでもいいが、無理して語尾に『にゃん』とか



つけなくてもいいから。全っ然かわいらしくないから。

「おまたせニヤン ミルクちゃん2杯でえ〜〜すっ」

メイド野郎Aが立ち去った後、今度は別のメイド野郎Bもといメイドサルがやってきた。

「ミルクなんて注文した覚えはないんだが……」

「『当店自慢のミルクちゃんは特製の絞りたてなのですニヤン……はっ！嫌ですう！ごちゅじんたまあ！ど、どこみてるんですかっ！えっちいのはめーっですう！めっ！ごちゅじんたまはえっちいのですう！プンプンですう！（ノノノ）』

頬を染め、胸元を隠すメイドサル……すごく……すごく殺したいデス……

「『では ごゆっくりどう……キャン』」

カラン、バツシャー……

「うおっ!?!」

「きゃっ!?!」

メイドサルは去り際に牛乳の入ったグラスを肘に当て、丁度目の前にいる俺と夏美に牛乳がぶっかかった。

「何のつもりだテメエ！」

「うっつ〜〜……服にかかつちゃったよお」

夏美は上着に牛乳がかかっていたが……って、俺、1番いけないプレイス（下腹部）にかかるとる!!!なんでこんなピンポイントな位置に!?!

「『ご、ごめんなさい!ごちゅじんたま!おじょうたま!い、いけないですう、しかられるのですう……そうなのですう!ごちゅじんたま!おじょうたま!今から私、サるルがフッキフキしてさしあげますのですう!』

サるル……?キモイなってそんな事言っている場合じゃないっ!フツキフキだあ!?!フツキフキだと!?!

「『はあ……はあ……ごちゅじんたまの……ごちゅじんたまの……

……はあ……はあ……（ノノノ）』

「ごちゅじんたまの……？なんだあ！？気になるっ！……っ、違  
う！……！」

「いい加減にしやがれ！この野郎！」

同好会歓迎会終了後、帰宅中……

「お兄ちゃん………どうだった？」

「萎えたな」

「お兄ちゃんは何を言ってるの………？（汗）」

## 第84話 『消えた心』

『アリスちゃん……………最後に……………最後に1つだけおばあちゃんのがまま……………聞いてくれるかい?』

六畳間の殺風景な部屋。

静かに揺れる風鈴。

庭で蝶を追いかけるエリス。

中央に床につく祖母。

その傍に、私。

『……………』

私はその時何も答えられなかった、いや答えたくなかった。

その祖母の言葉の意味は子供ながらに想像はついた。

ある感情が胸を締め付けられる、我慢……………我慢しないと、耐えないと。

祖母のお願いを聞いてちゃったら……………それは祖母の死を認めてしまうことになるから。

『……………やだ』

答えたくなかった……………なのについ声が出てしまう。

『やだ、やだ、やだよ……………聞きたくない、聞きたくない、聞きたくないよ……………』

自然と瞳から涙が溢れ出る。とめどもなく出てしまう……………どうしよう、我慢……………するって決めたのに。

『……………』

『……………あ』

祖母は……………何も言わずにしばらく私の頭を優しく撫でてくれた。

その時見せた祖母の顔は……………笑顔、優しい笑顔だった。

祖母は布団から出て、陽の当たる縁側に腰をかけた。

そして、祖母の視線の先にあるのは庭に植えられた桜……心なしか元気がない。

時期的には満開になっていてもおかしくないのに……

『おばあちゃんねえ……』

祖母はゆっくり……口を開き始める。

かろうじて隣にいる私に聞こえるか聞こえないか、そのくらい唇の動きは弱々しく、衰えていた。

『エリスちゃん……』

祖母は庭で無邪気に蝶を追いかけるエリスの方を向く。

そのエリスを見つめる瞳は優しさで溢れていたはず。なのに……どうして、どうしてそんな哀しそうな顔をしているの……おばあちゃん？

……ねえ、笑って……笑ってよ……おばあちゃん……

『アリスちゃん……』

祖母は今度は私の方を向き、エリスに向けていたのと同じ、優しさで溢れた、哀しい顔を見せた。

その表情には一体どんな意味が込められているのだろう……

『貴方達がいてくれる……貴方達2人が、元気で、笑顔で……おばあちゃんの傍にいてくれる……それだけ、それだけで充分、もう充分なんだよ……充分満足なんだよ……』

『……』  
違う……違う、私は……おばあちゃんに何も、何もお返しできていない……

充分満足なんかさせてあげてなんかいない……でも、私は……それを否定できなかった。

おばあちゃんの……おばあちゃんのその言葉を、言葉を否定できなかった。

何より、おばあちゃんのその言葉が嬉しかったから、おばあちゃん

が大好きだったから。

「うう……うえ……えええ」

庭の方に視線を向けるとエリスは倒れて泣いていた……おそらく、蝶を無我夢中で追いかけている最中に転んだのだろう……私がエリスの傍に寄ろうと立った。

「ほ、ほ、ほ……エリスちゃん、お前は本当におつちよこちよいさんねえ」

祖母は既に縁側から離れ、私より先にエリスの元にいた。

「うん……すん」

頭を撫でられ、未だに涙を流すエリスに少し嫉妬心が芽生えてしまった。

「……………」

「……………」

それは突然の出来事だった。

「……おばあ……ちゃん……？」

動かない、おばあちゃんが動かない……

桜が散った……

「……………」

目が覚めた。

枕元にあるアナログの時計にふと目をやる。

部屋のカーテンを閉めているので薄暗くてよく見えない、が時計の短針と長針の為す角180°。カーテンを開ける。もう一度時計に目をやると、12時30分を指していた。完全なる遅刻、それも大遅刻。とりあえず、気だるいけれど……学校に行く、か。義務教育に従って学校に行くわけではない、学校に行くことを口実として外に出たいだけだった。きつと、空気の悪いここ……私の部屋よりは過ごしやすい場所だと思っただから。そうと決まれば気持ちが変わらないうちに早く着替えて外に出てしまおう。

「……………はあ」

全然、過ごしやしくない。暑い、暑い、どうしてこう、暑いのだ。

それに何で休日じゃないのに人がこうも多いの。人の集団は苦手……………何でああも人は人として群れで過ごせるのだろうか。私が変わなのか。

群れには必ず、群れを統率するリーダーが存在する。すぐには気付かない、よく観察しなければ気付かないが、常に話の中心にいる奴。

だからといって、周りの人間の話の話題を合わせているわけではない。

そいつが周りの人間を牛耳っているのだ、知らず知らずのうちに……………周りの人間は気付かない。

何て嫌らしい人間なのだろう、だから私は群れが嫌い。

「……………嫌ね」

本当に嫌、今の自分を殺してしまいたいくらい嫌。こんな嫌らしい事ばかりしか考えられない自分が本当に嫌だ。でも、これが本当の私。

他人にあたることでしか自分を保ってられない私。

誰か、誰か、誰でもいい。誰でもいいからこんな今の私を嘲笑ってほしい。

「……………ハハ」

失笑、本当にどうしようもない。

通行人に変な目で見られる、でもそれは私が変な子だから。

だから私の事を嘲笑ってほしい。

そしたら私も貴方の事を嘲笑ってやるわ。

地獄門の前に到着した。

何でここまで歩いてきたのか自分でも分からない。

とにもかくにもここまで歩いたのだから入ってやるわ、戻るなんて損じゃない。

門をくぐると四方八方からあるゆる音という音が聞こえてくる。

トンチンカン、トンチンカンと周期的に何か聞き覚えのある音が耳に入ってくる。

金槌の叩く音、か……………ふと門の傍に目をやると看板が立て掛けられていた。

『学園祭』

そう表記してあった。

そうか……………もうそんな時期か、すっかり忘れていた。そういえば確か誰かさんがそんなことを言ってたような。しかし、正直どうで

もいい、私にとってはどうでもいい。いや、どうでもよくないか。授業が潰れる、それだけが私にとってのメリットだ。多分今日は前夜祭でもやるつもりなのだろう、ここまで大規模な作業を生徒諸君が必死でやっているのだから。最も私には無関係なのだけだ。

「なんでやねん！」

夕刻、既に大方の作業が終わった頃、中庭では舞台が組まれた上で漫才トーナメントなるものが開催されていた。参加者は老若男女問わず、コンビ、トリオ、登録人数も問わない。『勇気あるものだけが舞台の上を踏んでよしッ！』それがスローガンらしい。何だか格好悪いスローガンだ。何となく眺めていたが……何が、何が面白いのコレ？今は校長と教頭がコンビで漫才をしている。さっきからツラネタばかり。挙句の果てには『ツラあー』とか言いながら奇声を上げる始末。そんなにこの学園の品位を落としたいのか。それでも周りは爆笑している。意味が分からない、全くもって意味が分からない。そして、何で自分がここにいいのかさえ分からない。空を仰ぐ。

「……………綺麗」

夕刻を示す、快晴の空に染まった茜色。

ビッグバンにより今日の宇宙ができ、そして幾重にも渡って積み重ねられてきた嘘。

それは今も昔も変わらない、強者が弱者をひねり潰すという構図。それが繰り返し繰り返し……そのお陰で今の平穏無事な時代が到来したと言っても過言ではないが。

そんな中でも空だけはいつも正直、そして何事にも交じり合わない。



「だから、嫌い」

反映しないから、今の私の心情と。

でもそれは仕方の無い事、だって空は正直だから。

ネコの様に気ままに赴くままに空は流れていく、誰の心にも交じり合わないまま。

いや、誰かの心には届いているのだろう、こんな綺麗な空なのだから。

でも、今の私の心情とシンクロしないから……好きじゃないけど見ていて落ち着く。

けれどなんだろう、この虚無感は。

いつまで経っても満たされないこの心は、いったい私の心はどこにあるの……

数時間後。

辺りは茜色の空はとうに消え、夜がやって来る。

先ほどの馬鹿げた漫才トーナメントはとつくに終え、今度は中庭の中央にキャンプファイアーが用意されていた。どうやらダンスでもやるらしい、いつの時代だ。まあ、私は遠くから傍観しているだけだ。

「ねえねえ、君、今1人？」

ロン毛の男もといチャラ男が声を掛けてきた。

この学園の制服を着ている、だが顔は見たこともない。

「よかつたら俺と一緒に踊らない？」

案の定、お誘いがやってきた。

その『よかつたら』には果たしてどれほどの強制力があるのか。

「嫌」

私はその一言で片付けた。こんな男と構っているとロクな事がないのは目に見えている。

「嫌って……ははっ、そんな事と言わずにさあ、君1人だろ？ だったら、俺と踊る方がぜってえ楽しいって！ いや、マジで！ ほら、行こうぜ！」

チャラ男に腕を掴まれた、腕にかすかな痛みが走った。

「痛っ、離して!!」

パチン!

チャラ男から腕を引き離そうと力んだせいか、チャラ男の左頬に私の平手が入った。

我ながらいいのが入ったわ、なんて思っていると、体勢を整えた男は私を睨み……

「っ、やってくれんじゃねえかよっ！ このメスブタがあ!!!」

私に襲い掛かってきた……反射で私は目を閉じた。もういつそのまま楽になれたら……

「はいはい、もうその辺にしようね。お兄さん」

……

忘れかけていた心に灯がともった、それはほんの今まで忘れかけていた私の心に灯を、灯をともした。

「な、なんだよ！ てめえは!!」

「ボク、ドラ もん」

「なめてんのかっ! ? てんめえ……!!!」

バギツ、ドガツ、がスツ

「かっ、は……」

チャラ男はその場で崩れ落ちた、が。

「僕は舐めてないよお〜の 太くん〜」

崩れ落ちたチャラ男の胸元を掴み、

バキッ

また一発、

ガスッ

小田原浩二は何度も殴りつつけていた。

チャラ男は三発目の鳩尾へのストレートで嘔吐した。

「あっちゃあ〜きつたないなあ〜……」

Yシャツに嘔吐物が付いた。

小田原浩二はにいつとほくそ笑み……

「弁償してもらわなくちゃあねえ」

とうに気絶しているチャラ男に自らの拳を振り下ろした。

グギッ、クキッ、クキ……

何かの、何か折れた嫌な音が響いた。

私は、私は……その場から動けなくなった、かろうじて立っている状態。

目の前に立つ悪魔は心底楽しそうな表情をしていた。

そして、チャラ男に興味を失せた悪魔もとい小田原は私に顔を向け

……

「汚れちゃったなあ、コレ……」

チャラ男の嘔吐物と血で汚れたYシャツを私に見せるように寄ってきた。

「綺麗にしなくちゃね」

私は、動けなかった。

抵抗する間も与えず、小田原は私との距離を詰め……

「んう……っ、んっ?!」  
2度目のキスを奪われた……

## 第85話『誘惑』

彼の唇の味。

それは甘い甘い、ただ雌を引きつけるためのフェロモン。

そして、鉄の味、すなわち血。

甘い、本当に甘い、甘さが勝っている。

息が苦しい、あれからどれほど経っているのだろうか。

そんな時間を忘れるほど彼の2回目のキスは甘く、そしてどこか切ない味だった。

「……………」

彼と私の両者に言葉はなかった、あるのは今という時。

私はもう抵抗する気力もなかった、むしろこの彼の唇の甘さに惹かれていた。

すぐく、甘い。意識が薄れてしまいそう。

だから、私はさらに彼を求めた、ディープ。

殻の心が満たされてゆく、何者かの手によって。

もう、それが何者でも良かった。私には今を受け入れるしかない。それだけが私を動かす力ではなかった。

「……………アリス」

すっと、彼の唇が離れていく。

口元から離れた瞬間、寂しさがこみ上げてきた……………私は、私はこんなに弱い女だったのだろうか。

もう、私の目は彼から離す事ができなかった。

ああ、もう私は……………

しかし、ほんの一瞬、それはほんの一瞬。  
私は見てしまった、奴の目、奴の私を見る目が同情の色を帯びていたのを。

パチンッ！

「……………っ」

私は右手を振りぬいた、奴の頬をめぐらして。目からとめどもない涙が溢れてきた。

「痛いなあ……………」

私は悔しかった、目の前の男に一瞬でも心に隙を見せてしまったことを。

「馬鹿にしてんのっ!?!」

だから堪らず私は奴に罵声を浴びせた。

「……………」

奴は何も言わず、ただただ次の私の言葉を待っていた。

「私は……………！私はっ！あんたのこと、大っ嫌い……………！今まで、そう感じていた」

そう、私は目の前にいるこの男が嫌い……………その気持ちに偽りはなかった。

「今でもあんたの顔を殴ってやりたい気分……………！なのにつ、なのにあんたは……………!」

「……………」  
「……………」

その先の言葉が出てこない。

目の前にいる男の瞳がさっきのような哀れんだような瞳ではなく、真摯に、それはもう純粹で真剣な、思わず今の私が目を逸らしたくなるような瞳で見つめていたから。

「……………」  
「……………」

ヒュー……………」

奴と私の間に夜の風が通り抜ける。

無言の間、それを崩したのは奴の方からだった。

「とりあえず……………」踊ろうか？」

「……………」  
「……………」

ステップ、ステップ、ステップ。

それは周期的に華麗に踊りることが出来れば最高のダンスが生まれる。

最も、それはパートナー同士との相性が絡んでくる。

技術が良ければいいってもんじゃない。

臭い台詞かもしれないけれど、ダンスは技術を超えたパートナー同士の意思疎通が重要となってくる。

支えあつ。

1人が1人を先導する。

他人から見ればその姿は単に人任せのように見えるけれど。

足並みを揃える、体の動きを合わせる、そして軽やかに。

ステップ、ステップ、ステップ。  
それは意思疎通なしでは語れない動作。  
それを目の前の男は当たり前のようにこなす。  
私が右にぶれようものなら、わずかに左に体重をかけて。  
私が左にぶれようものなら、わずかに右に体重をかけて。  
ダンス等、経験した事もない私にとって奴の動きは繊細で華麗で美しく、同時に当てつけの様な。  
でも、今の私のはソレが不快ではなくむしろ空いた心が少しずつ満たされていくように。  
先ほどのようなわけの分からぬ何か不純物で満たされていくような感覚ではなかった。

「……………アリスちゃん」

私の耳元で奴の私を呼ぶ声が聞こえた。

「……………何」

私は無愛想な声で返事をした。

「もいつかい、キスしてもいい？」

にっと、無邪気な笑顔で奴はそう言った。

「……………馬鹿っ」

私は何故か奴から顔をそらしてしまった。

徐々に自分の顔に熱が帯びていくのが分かる……………不覚、一生の不覚。

死んでしまいたい……………この世の塵となってしまう……………

「んー？どうしたの？アリスちゃん？」

ニコニコ

……………とびっきりの素敵な笑顔。



……ム力つくつ、本当にム力つく奴っ！顔面に思いつきりキツイの一発入れたい！！！」

「……………」  
「黙秘…………。つと。それは肯定の意味でとっていいんだよね？」

奴はニヤニヤしながら私に尋ねる。

いけない、感覚が麻痺しているのかもしれない。

この男の人を喰ったような性格に振り回されっぱなしの私って一体

……………  
「じゃあ、お言葉に甘えて……………」

「……………んう」

奴の唇と私の唇が重なる。

甘い、やっぱり甘い。3度目のキスは濃厚で、ほんの少し、ほんの少し苦いものであった。

切なくて、寂しくて、辛くて。

でも、そんな暗い暗い感情しか残されていなかった『開かずの部屋』の少女に初めて光が灯された。

それは『恋情』という名の感情が『嫌悪』という名の感情に押し勝った瞬間であった。

でも、彼女は気付いていなかった。

遠くから2人を見つめる自分と瓜二つの少女を――



番外編その27 『スパッツは好き?』

「た、大変だっ!!! 耕司キュン!!!」

昼休み、サルと教室で昼飯を食っているとただならぬ形相をしたメガネが俺に助けを求めてきた。

「大変なのはお前の格好だ」

メガネ君はなぜかブルマ姿で上半身は乳首にニップレスという素敵なセンスで教室にご入場してきた。

オプシオンにチラツと見えるブリーフ、スネ毛な生足を携えて。

あまりのキモさに吐きそうになった、というか半分吐いた。

「ギャー! 何、あのメガネ! キモイっ!」(腐女子A)

「変態っ! ロリコン!」(腐女子B)

「いやあああーーーー!!! 犯されるう!!!」(おカマA)

「死ねー! 死ね死ね団!」(手塚好きスキーさん)

バキッ! ドガッ! ガスッ!

もちのロン、それを見たクラスの女子の皆様はメガネ君を素敵な拳で歓迎しました。

そして、ひとしきり手厚い歓迎をされた女子の皆様はブツブツと不満をたらしながら各々の席へ帰還していく……

「お前は勇者だな」

「エへっ(ノノノ)」

「ほめてないからな」

「で? 大変って何がだよ」

サルがメガネ君に問う。

「ブルマがブルマでぶるぶるになってブルマっ子がぶるぶるになっちゃうのおーーーー!!!」

「落ち着け」

タダでさえ最近のコイツの奇行ぶりについていけないのに……メ



「聞いてねえよ」

「「乳酸菌サイコー」」

思いっきり殴りてえ……………」

「で、その……………スパッチョさんらが俺らのクラスに何用ですか？」

「スパッツだ。ブルマの時代はとうに過ぎた、これからはスパッツの時代が到来する……………当然、君もそれはご存知だろう？」

「ご存知じゃない……………」

「この学園をスパッツ色に染める、一言で言えばそれが我々の目的だ。幼女はスパッツ、ゴスロリもスパッツ、オタクもスパッツ、女子高生もスパッツ、腐女子もスパッツ、レズもスパッツ、ホモもスパッツ、バイもスパッツ、ゲイもスパッツ、フタ リもスパッツ、早漏れもスパッツ、遅漏れもスパッツ、ツンデレもスパッツ、ヤンデレもスパッツ、サドもスパッツ、エムもスパッツ、金髪美女もスパッツ、痴女もスパッツ、言葉様もスパッツ、誠氏ねっ、ロリコンもスパッツ、ブラコンもスパッツ、シスコンもスパッツ、マザコンもスパッツ、ファザコンもスパッツ、リアルシスターもスパッツ、ママもスパッツ、パパもスパッツ、じいちゃんばあちゃんもスパッツ、幼馴染もスパッツ、先輩もスパッツ、後輩もスパッツ、生徒会長もスパッツ、恋人もスパッツ、愛人もスパッツ、バツイチもスパッツ、OLもスパッツ、お嬢様もスパッツ、シヨタもスパッツ、熟女もスパッツ、メイドさんもスパッツ、オカマもスパッツ、おなべもスパッツ、プ キュアもスパッツ、加 鷹さんもスパッツ、ウコンちゃんもスパッツ、わふゝもスパッツ、筋肉もスパッツ、マーボー神父もスパッツ、ぶるまもスパッツ、だよもん星人もスパッツ、S音様もスパッツ、M音様もスパッツ、世界もスパッツ、誠氏ねっ、狂人もスパッツ、手塚もスパッツ、鷺巣様もスパッツ、俺もスパッツ、貴方もスパッツ、みーんなスパッツ！いつでもどこでもスパッツなしでは過ごせない世界を築き上げてやるぞっ！わーーーーーはっはっはっ！！！！！！」

「「スパッツサイコー」」

正真正銘のアホだコイツら（汗）ていうか怖っ、何か怖っ！！！！

「さあ、君達もスパッツを履きなさい」

「イヤダ」

「さあ、そのサル顔の君もスパッツを履きなさい」

「ウキーーー」

サルはスパッツ軍団を威嚇していた。

「そんな我儘が通ると思っっているのか！？君達い？！いいから着なさいっ！！！！はあはあ……んふぁ（ノノノ）」

怖っ！（汗）

「さあ、ぶるまあ！きさまも今すぐソレを脱いで今すぐスパッツを履きなさいっ！」

「あっ、あっ、ああ……だめだめえ……！そんなとこ触っちゃだめなの……やっ、やめっ、らめえ……！ああ……」

アツーーー」

そしてメガネ君はブルマを剥ぎ取られまいとじたばたじたばた連中ともみ合っている……あ、悪夢だ。夢に出そう……（汗）

「あんたら何やってんの……」

何かもう收拾がつかなくなったところもとい最悪なタイミングでヒ

ロイン's 登場。

「スパッツはけえ……（ノノノ）」

「らめえ……らめなのおおお……（ノノノ）」

「……………（ノノノ）」

メガネ君とスパッツ手下はまだ床でもみ合っている。ミントはしゃがんでそのおぞましき光景を黙って見つめていた……心なしか何だか嬉しそうなのは俺の気のせいかな？

「お兄ちゃん……」

「耕司さん……」

夏美と百合ちゃんが何故か切ない目で俺を見てくる……な、何で？俺、何もしてねえのに……（汗）

「あ、あのな……夏美、百合ちゃん……俺は何も……」

「おお、同士よ。そのロリロリコンビは君の知り合いかね？さっそく、スパッツを履かせたまえ」

前髪カールが後ろから俺の肩を叩く……

「同士じゃねえ！？」

「何を言っているんだ……『僕、女の子のお汁がたっぷり染みたスパッツをクンクンハアハアペロペロするのが夢なんです、テヘヘ（ノノノ）』と恥ずかしそうに言ってたじゃあないか……あの時の素直な君はどこへ行ったんだ……僕は本当に寂しいよ」

「うおおおおー！……キモッ！？それ、お前の願望だろっ

！？」

「……」

ささっ

ひ、引かれたっ？！

「またまたそんなこといつちゃつてえ……『さらにこのスパッツ使ってオナつてやるんです、へへっ。陵辱しているみたいで何か興奮しますね、三次元のメス豚共を俺色に染めてやるんです、うひひっ』とまるでこの汚れた世の中から解き放たれた青少年のような微笑を浮かべて語っていたじゃないか」

「うおおおおー！……？！てめえやめろおおおおー！……！！！！！！俺は言っていない！！！！言っていないぞそんな事！！！！」

必死に目の前にいる夏美と百合ちゃんに弁解するが……

「お兄ちゃん……今までそんなこと考えていたの……？」

「き、鬼畜っ！耕司さんは人の皮を被ったケダモノですう！！！！ううう……ミンちゃ……ん！！！！」

な、泣かれたっ！？

百合ちゃんは傍にいるミントに抱きつく……………あ、あの目は本気で怯えている目だ……………何だか俺が泣きたくなってきた……………

「そついうのも……………キャラ的にアリだと思う（ノノノ）」

何故かミントは俺に期待の眼差しを向け、グッと親指を立てる……………

…俺に何を期待しているんだミント……………（汗）

「違うね、耕司キユンはブルマに興味があるんだ」

「ねえよっ！！！！」

またややこしい奴が出てきた！！！！

「ていうかてめえ！床でスパッツ野郎ともみ合っていたじゃねえかつ！？」

「ああ、奴なら僕のブルマ真剣で瞬殺したよ」

ブルマ真剣っ！？

さつきもみ合っていた方を見るとブルマまみれでスパッツ野郎が倒れていた……………シユールな光景だ……………（汗）

「貴様あ……………耕ちゃんはスパッツを愛しているんだ、ぶるまあてめえは黙ってる、な？耕ちゃん？」

愛してねえ！！！！

「なに……………耕司キユンはブルマが大好物なんだ、君こそ帰りたいまえ、ねえ？耕司キユン？」

大好物じゃねえ！！！！

「俺はスパッツもブルマも好きじゃねえ！！！！！！！！」

「なっ、じゃあ耕司キユンは……………その、何も履いてないのがいいのか、そうかパイパンがお好みなのか……………」

「このっ、このおっ！耕ちゃんのむっつりさん」

「違っつ！？それとメガネえ！！！！パイパンは意味が違っつ！！！！！！！！」

ポン……………

誰かが俺の肩を優しく叩く……………振り向くと

「そついうのも……………キャラ的にアリだと思う（ノノノ）」

ミント……………お前は本当に俺に何を求めているんだ……………（汗）



「うむ、耕司キユンがそう言うなら……今度から僕も何も履かない」

「な、我々も耕司キユンの意思に従い今日から『下は何も履かない』をモットーに日々を生きていくぞっ!」

「パイパンサイコー!」

センサー、ここに犯罪者がいます。誰でもいいので捕まえてください。

「あんたらねえ……」

ポキッ、ポキ……

うっ、すっかり忘れていた……アリスさんの殺気が(汗)

「むっ、何だ……君い!その姿は!?スカートなんぞ言語道断!

!!今すぐ脱ぎなさいっ!!!!」

「そうだ!アリスたん!脱げっ!今すぐ脱ぐんだっ!スカートだけじゃないっ!パンティも脱ぎなさいっ!」

……

こいつらは今、自分が何を言っているのか分かっているのだろうか?うん分かっているんだらうね、きつと。

「……スパッツサイコおおおおおおおお……」

「……」

俺が最後に見た、窓を突き破って落ちてゆく変態どもの顔は生き生

きとしたそれはもう素敵な笑顔だった。

第86話『Happy Birthday To You』

ハッピーバースデートゥーユー  
ハッピーバースデートゥーユー

ハッピーバースデー、ディア……

……

ハッピーバースデートゥーユー……

『僕は君の全てを受け入れるとしよう』

そう言うと彼は私の頬を軽くさすり、私に向けて笑みを見せた。

『っ……………』

その笑みに私は背筋に嫌な寒気が走った……………い、一体この人……………何を、何を考えているの……………

『ごめんねえ……………痛かっただろう?』

『ひっ……………?!』

彼はそう言いながら引き続き先ほど打った私の頬をさすり始めた……………

『い、嫌っ!』

その不気味な行為に私は思わず彼の手を強く叩いた。

『……………』

『あ、貴方っ……………い、一体……………何を考えているんですっ!』

私はそう言いながら一歩、また一歩……………すぐ逃げ出せる教室のドア付近まで後退した。

『……………何、考えてる……………?それはこっちの台詞だよ、エリスちゃ

ん』

『……………なっ、何を』

『君は僕にこう言った。好きだ、と。それに対して僕は受け入れた。なのに今は君は逆に僕を拒絶している。おかしいのは君の方だろう?』

『……………?』

『……………っ』

確かに、私は私は……………好き、と言った。

でも、それは……お姉ちゃんからこの目の前の彼を遠ざけるため。  
私が本心で口にしたわけじゃない……でも、私は……  
『いいじゃないか、君の算段はこれで大成功。これで大好きなお姉ちゃんも安全モーマンタイ。何も心配する事ない。これで君と僕は  
彼氏彼女の関係、それが全て。それが全てなんだよエリスちゃん』  
一歩、また一歩……彼はゆっくり私に近づき、私との距離を詰めて  
くる……  
『い、嫌っ！こ、来ないでっ！』  
怖い！怖い！怖い！  
今の私にはそれだけしか考えられなかった。

『……………』  
『ひっ?!』

彼はついに私の目の前まで近づき、そして私の顎をすつと触り……

『だから僕は今から君の彼氏、だ』

嫌……やっぱり、嫌……でも私は……拒絶できない……  
『言わない……………で』

もう、私は……私は引き返せない……この底なし沼から……

『だから、僕は……君の言う事は何でもする、いや……してあげたいんだ』

真剣な瞳で私に尋ねる彼……………

『……………』

『なんだい？言っつてごらん？』

『……………誕生日』

『……………誕生日?』

私が今、脳裏に思い浮かべる光景は毎年、お祖母ちゃんと、お姉ち

やんと、私が3人でケーキを囲みながら静かながら……でも楽しかったそんな光景。何故かそれだけが、脳裏に印象強く残っていた。でも、それは思い出であって到底、お祖母ちゃんが亡くなった今では考えられない小さな催し。

『……………祝ってあげたいんだね、お姉ちゃんを』

お姉ちゃんと私は二卵性双生児。

同じ日に生まれ、同じ場所で、同じ一時を生きてきた。

『……………それはいつ?』

私は今までお姉ちゃんに苦勞をかけてきた、私がどんくさいから。いじめを受けていた私を庇い、そのせいで友達から目の敵にされたり……………拳句の果てに家事から面倒ごとはは任せっきり。貰うだけ貰っておいて、私自身は何も返せていない……………

『……………』

『……………いつ?』

私は……………私は返せるのだろうか……………?

この、この……………想いを、返しても返し足りないこのありったけの想いを……………

『……………10月、13日』

『……………それはちょうど前夜祭の日だね、うん!分かった!僕、いい事思いついちゃったよエリスちゃん』

彼はそう言いながら、笑顔で……………汚れない笑顔で話を続けた。

『エリスちゃんの家でエリスちゃんとエリスちゃんの誕生日を僕が祝ってあげるよ!』

『……………え』

『あつ、でもそれじゃあ意味ないよね。エリスちゃん、お姉ちゃんを祝ってあげたいんだよね?うん……………それじゃあ、こういうのはどうかな?僕とエリスちゃん、エリスちゃんを祝ってあげるとか、どう?でも、もちろんこれはエリスちゃんの誕生日でもあるからね!プレゼントも用意しておくよ!あつ、でも当日まで本人には内緒ね?そっちのが面白いというかいいでしょ?ね?エリスちゃん』

『……………は、はいっ』  
信じられない……………この人がここまで考えていたなんて……………私が考えていた計画とほぼ同じ。  
思わず、私は彼の提案を呑んだ……………  
『ははっ、喜んでもらえて嬉しいよ！当日が楽しみだね！あっ、もちケーキも用意しておくからね！』  
『は、はいっ！あ、ありがとうございます！』

でも、それが、それが！……………こんな、こんな！……………こんなことになるなんて！…！

「んっ、んむ……………んむう、んちゅ……………んむ」  
「はむっ……………ん、んくっ、んむっ……………んくっ」  
今私の目の前に広がる光景は何……………？何なの……………？何なのコレ……………？  
…？ねえ、誰か教えて……………教えて、よ……………  
「はあ、はあ……………」  
「ぷはあ……………アリスちゃんの唇……………おいしいよ」  
「は、恥ずかしい事言わないでっ（ノノノ）」  
ああああ……………！！！！！！  
嘘っ、嘘っ、嘘っ……………！！！！！！絶対嘘っ……………！！！！ありえない……………！！！！こんなの……………！！！！  
だって、だって……………お姉ちゃんは、お姉ちゃんは、彼のこと大嫌

いで、それでそれで……………私も大嫌いで……………ははっ、嘘、嘘だよ  
こんなの……………茶番、茶番、茶番だよっ！！！！こんなのっ！！！！  
「ははっ……………」

乾いた笑みが零れた。  
嘘、嘘、嘘、絶対嘘……………お姉ちゃんは……………お姉ちゃんは忘れて  
いないはず。

今日がどんな日か絶対忘れていないはず、だって去年は……………去年  
は覚えていたんだもん、私が家に帰ると豪華なご馳走が用意してあ  
って、それでそれで……………麻里ちゃん騒いで、楽しくて、でも、ち  
よっとお祖母ちゃんがいなくて寂しくて……………でもでも！楽しかつ  
たんだから！嬉しかったんだから！忘れてはいけないはずない！うん！絶  
対ない！ないないないないないないないないない！！！！！！！！  
！！！！！！ないんだからっ！！！！！！！！

「もう一回……………やる？」

「……………ん」  
ははっ、ねえ……………？

お姉ちゃん、それ私を驚かそうとしているだけなんだよね？

わ、私は分かっているんだよ……………じ、実は知ってて、それであの…  
…その、冗談言って……………

あははっ、はは……………も、もう！お姉ちゃんったら、悪趣味だな  
なんて……………ねえ。

「んちゅ」

「ん、んう……………」

そ、そんな迫真の演技見せられても、わ、私は驚かないんだからね  
っ！

い、いつまでも子供扱いしないでよねっ！全然、ビックリしないん  
だから！そんなの……………

「んちゅ……………好き、浩二好き……………大好き……………」

「俺も……………んちゅ、好き……………だよ、アリス……………」

あ、あ、ああ……………あああ……………あああ……………



聞きたくない、聞きたくない……演技でもそんなの……聞きたくない、聞きたくないよ……

何故か、何故かいつの間にか私の頬に暖かい何か、何か暖かい液が流れ落ちていくのが分かった……

ポタツ、ポタツ……

それが地面に落ちて楕円状の印をつけていく。周期的に、いや時間が経つごとにそれは増えていった。

苦しい、苦しいよお姉ちゃん……

痛い、痛いよお姉ちゃん……

ひどい、ひどいよお姉ちゃん……

こんな、こんな、いくらなんでもこんな性質の悪い冗談……私本気にしちゃうじゃない……

私は、私はどんな顔して飛び出せばいいの？

笑って？怒って？泣いて？

本当に酷いよお姉ちゃん……私、こんな冗談……受け入れられないよ……

「……………」

何故か、居たたまれなくなった私はじつとその光景を眺めていた……

……

「んちゅ、んむう……………」

「ん……………つ、んむ……………つ！」

目が合った、お姉ちゃんとじゃない。彼と。

お姉ちゃんは私に背を向けているので必然的に彼が私の方に向いていることになる。

私は二人の見えないような位置にいたけど……彼にはばれてしまったようだ。

でも、それならそれでいい。彼なら目の合図で飛び出せーとかしてくれるだろう……

でもそれは、次の瞬間……………

にい………

笑った、彼は笑った。

あきらかに私に向けて。

でも、それは合図でもなんでもなく。

私に伝えていた。

いや、私は分かってしまった、その意味を。

『馬鹿だな、お前』

私はその瞬間駆け出した。

足に力という力を加えて、駆け出した。

全体重を足にかけて、全力疾走。

誰の力も借りることなく、誰の力も借りずに。

駆け抜ける。

夜の校門という名の地獄門を通り抜けて。

坂道も、こけてもまた立ち上がって、コンクリートだから擦り剥いたら痛いけれど。

でも、そんなの気にしてられない。

だって、痛くないもん。

こんなの、あの痛みに比べれば。

ふと自分の膝を見ると血で滲んでいた、でも痛くない、痛くない。

もう少し、もう少しで我が家に着く、着くんだ。

それでそれで、今日はご馳走いっぱい用意したの。

去年よりもずっと豪華、豪華なの。

それに、ケーキ、お姉ちゃんの大好きなケーキ。

もちろん私も好きだよ、チョコケーキ。

おいしい、本当においしいの。

頬が腫れちゃうくらい、おいしいの。

切り分けてあげるね、お姉ちゃんの方。

一切れじゃ足りないよね？、じゃあ二人でこのケーキ丸々半分こしちゃおうか。

えっ、そんなに食べきれない？

じゃあ、私が食べちゃうねっ

いいの？ほんとうにいいの？後で後悔しても知らないんだからっ

そう？じゃあ、私がたべちゃうね、いただきまーす。

もぐもぐ……………

おいしいのおー

もぐもぐ……………

おいしい、おいしいのおー

えっ、食べたい？でも、もう遅いもん、エリスが全部食べちゃう、

食べちゃうもん。

……………

……………

おいしいね、本当においしいねこのチョコケーキ

もぐもぐ……………

あっ、お姉ちゃん、いつものあれ歌ってなかったよね。

あれだよほら、あれ……………

ハッピーバースデートゥーユー

ハッピーバースデートゥーユー

ハッピーバースデー、ディア……………

ハッピーバースデートゥーユー……………

ハッピーバースデートゥーユー

ハッピーバースデートゥーユー

ハッピーバースデー、ディア……………

ハッピーバースデートゥーユー……………

……………

ハッピーバースデートゥーユー………

第87話『罪は罪に終わり、善は善に終わる』(前書き)

ダークっぽい仕様になっております。ご注意ください。

## 第87話 『罪は罪に終わり、善は善に終わる』

( ??? 視点 )

罪は罪に終わり、善は善に終わる。

そんな一連の世界の成り立ちはいとも簡単にある一点で崩れ去る。

罪は善に終わり、善は罪に終わる。

矛盾、非常に矛盾している。

罪が何をどうして、善になり得るのか。

善が何をどうして、罪になり得るのか。

奴らは考える、どうしてそんな矛盾が許せるのか、と。

じゃあ、逆に考えてみる。

罪が何をどうして、罪になり得るのか。

善が何をどうして、善になり得るのか。

愉快愉快。痛快、愉快。片腹痛くなる。

矛盾、そんなものも矛盾だ。何故なら、それは為しえた者が決める

事じゃなからうて。

結局、起因と結果は結びつかない、と。

じゃあ、何が正しい？何が間違っている？

そんなもの知りえるわけがない。僕に聞くのが間違っている、人間

よ。

そんなどうでもよい事にいちいち人間は悩み、苦しみ、憎しみ合う。

だから人間は実に面白い、他の動物とは実に違ったアクションを起

こしてくれる。

罪、善、罪、善、罪、善、罪、善、罪、善。

そんな標識はいらぬし、むしろ邪魔だ。

その人間にとって、犬っコ口の糞を踏む事は罪か、罪なのか？そ

うか、貴様にとっては確かに『罪』だな。お気に入りのおニユーの

スニーカーが糞で汚れてしまったのだからな。けけっ。

じゃあ、もう1人のその人間、お前にとっては罪か、罪なのか？

違う？面白い？ははっ、お前も残酷な事を言うの、ならそれはお前にとつては『善』だな。面白いものを見て得したの。かかっ。ほら、見る。『罪』や『善』等、所詮、そいつ、人間ひとりの認識で成り立つもの。

外部には一切関係ない、勝手にしてくれって。

だから、そんなもの僕には関係ない、関係ないって。

関係ないが、面白い人間がある。

それは、『罪』や『善』等といった範疇を超えて、支配する者。

すなわち『罪』、『善』を両方含むもの、聞こえはそう悪くないと思うだろ？

違う、その認識は甘い、甘ちゃんだよ。

そうじゃないんだ、その人間の真に恐ろしいところ、それは『区別』がつかない』こと。

今、自分が何をやっているのか、それが『罪』『善』にどう繋がるかと僕にとつてはどうでもいい事だが。

分からないんだ、いや分かるうとしていないんだ、他人を、自分を、

これほど怖い者はいない、だってミエテイナインダヨ、タニンモ、

ジブンモ、ヒトミニウツルケシキモ、ナニモカモ……………

だから、そやつの行動には一貫性がない。

狂人、そやつにはそんな言葉が良く似合う。

名前？知りたいのか？そんなキ　ガイの名前を……………？

うーん、そうか……………

……………

……………

……………

…………… あっ、待ってた？

…………… いやあ、そのなんていうか……………

……………

…………… すまんっ、忘れたっ！！！！なははははは……………



この狂った世界は所詮、ギブ・アンド・テイク、僕が言いたいの  
はただそれだけだ。

学園祭前夜祭終了後、私と浩二は家に帰ってきた。

浩二を我が家に泊まらせてあげようと、私から浩二に提案した。

浩二は笑顔で『いいのっ?! ラッキー』と騒いでいた。私はそ  
んな浩二の反応を眺めて何だか嬉しい気分になった。何だろう、す  
ごく……すごく、気分がいい。いつの間にか私の中では既に浩二は  
傍にいなければならない存在になっていた。それは、それは多分、  
前の私では想像もつかなかったことだろう。でも、もういい。決め  
たんだ、私はこの人の後について行くって。そんな、恋する乙女の  
ような、ていうかそうなんだけどっ! 口にするのも恥ずかしいけれ

どっ！そんな気持ちで浩二と一緒に夜の帰り道を歩いていた。

「……………」  
「……………」  
しかし、私達は帰り道で会話を交わす事はなかった。

けれど、それは決して気分の悪いものではなくて、その証拠に私はじっと横目で彼の様子を見る。

「……」  
ふいっと、彼は頬を人差し指で掻きながら私とは反対方向に顔を背けた。何、この初々しい反応。

何てかわい、何てかわいのかしら…………… ちょっと見つめただけで、赤面。

中学生みたい、って中学生よね私達。

「……………」  
今度は浩二がお返しとばかりに私を見つめきた。

むっ、むう…………… やるじゃない、じよ、上等じゃない。  
わっ、私は！私はあんたみたいなマセ子<sup>ガキ</sup>供じゃないんだからっ！

「……………」  
「……………」  
…………… じっと、じっと見つめられる。

…………… な、何コレ。な、何なのよコレ！だ、だめっ！こ、こんなもの、こんなもの、恥ずかしすぎるっ！

もう、無理っ！降参！降参！ギブギブギブ……………！

「……」  
私はついに恥ずかしさの余り、浩二から目を離してしまった。

そして、チラッと横目で浩二を見ると……………

「……………」  
顔が笑っていた、それはもう飛びつきりの素敵な笑顔で。くっ……………  
むかつく。

もういい、開き直ろう。そう思いながら私は浩二に顔を向けた。

「……………んっ?!」

振り向いた瞬間、私の視界に現れたのは浩二の顔。  
そして、湿り気を帯びた唇が私の唇を塞いでいた。幾度となく繰り返される濃厚なキス、忘れられない味、でもそれは決して不快なものではなくて、求めてしまう。何度も、何度も、何度も…… 忘れないように、二度とこの味を忘れぬように。息苦しい、でも何故か求めてしまう、繰り返し繰り返し…… 確かめるように。

この想いが壊れぬように、そこにある愛を忘れぬように…… 二度と忘れぬように。

私と浩二はあのキスから無言のまま、歩いているといつの間にか家の前に着いていた。  
何だろう、まるで時間が飛んだみたい…… それは不思議な感覚だった。

意識が浩二に向いていたからだろうか？歩いているという感覚がほとんど無かった。そうしてようやく、意識を我が家に向ける、電気は…… 消えている。そして、腕時計を見る。アナログ時計は既に24:00を示していた。もう、そんな時間…… おそらく、時間的にエリスは部屋で眠っているのだろう。そして、私はまた意識を浩二に向けた。

「……もう、家だね」

「……ええ」

浩二の顔は何か名残惜しいかのような……そんな顔だった。

「今日は……本当に楽しかったよ、アリスちゃん」

浩二は笑顔でそう言った、それは何の混じりけの無い純粋な少年の笑顔だった。

「そんな、私だって……」

言葉が続かない、そんな純粋に嬉しそうな顔を向けられては。

頬が次第に熱くなっていくのが分かる……うっ、うっ……何で私ってばこんな、こんな……

「何年ぶりだろう、こんな楽しい日々は……何だか救われたような気分だよ」

浩二は夜空を仰ぎながらそう言う。

「お、大げさよ……！そんな、私、たいしたことしてないし……」

「いいや、僕にとってはたいしたものなんだよ、アリスちゃん」

「……えっ」

一瞬、ドキツとする。変わった……？声色が今までとは別ものだったから。

「言ってなかったっけ？僕の両親ね、昔殺されたんだよ」

「……っ」

淡々と、無表情で浩二はそんな事を口走った……

「う、嘘……ごめん、私……」

何故か私は謝ってしまった、別に謝る必要は無かったけれど……何か、いたたまれない気持ちになった私はとにかく謝った。

「あははっ、別にそんな事アリスちゃんが謝る必要ないじゃない。

僕の家事情なんだからさ」

「そ、そうね……でも、ごめん」

「あははっ……でさ、無かったんだよね、こういうの」

「……」

「僕は……僕は、そんな君の笑顔を忘れない」

「えっ……（／／／）」

また、頬が熱くなるのが分かる……

「そう、今の表情。僕は君のそんな表情が好きなんだ、君の怒っている顔、笑っている顔、悲しんでいる顔、みんな、みんなひっくりめて全部好きだ」

「っ（／＼／）」

これは、これが浩二なりの……告白なんだろうか？うっ、うう、そんなはつきり言われたら……黙っているわけにもいかないじゃない……わ、私も返事を……

「わ、私はっ、あんたのこと……っ！」

「でも、俺にはそんな顔ができない、作れない」

「っ？！」

私は言いかけた言葉を飲み込んだ。

「わからないんだ、人の表情が」

……？何を……言っているの……？浩二……？

「顔が無い、と言った方が良いのかな。俺の横を通り過ぎる人間、俺の周りでだべる雄雌、教壇でひたすらお経を唱える教師の馬鹿共、そんなやつらの顔が無いんだ、いや俺からみたら無いように見えるんだ。無機質、そうそれは無機質。耳から入る情報は声、鼻から感じ取る情報は匂い、肌から感じる情報は触感、でも唯一、俺に無いもの、それは目から入る情報、視界は認識できても顔の表情は認識できないんだ」

無機質な、無表情で語り始める浩二……その姿に私は寒気を感じた……

「全部が欠落していたらこんな不快感は覚えなかっただろうね。だから、笑っちゃうんだ、俺。もう、諦めようって。笑うことに関しては小さい頃に覚えた、というより両親から学んだ。困ったことがあったら何でも笑っちゃえ。子供ながらにそんな事を考えたんだよね、俺。ははっ」

「……」

私は、私は……呆然と立ち尽くしていた、というより怖かった、彼が。

濁った目で私を見つめながら意味不明な事を語る彼が、とてつもなく怖くなった。

「だから、俺は知りたかった、表情が。君のような、いや、『君達』かな？感謝しているんだ！……はつきり、表情が現れるような子を探していた、でも見つけた、救われたんだ、俺は！俺は！オレハオレハオレハオレハ……！ハハツ！ハハハハハハハハハハ……」

私は、もうその場から逃げたかった。でも、動けなかった。

「ダカラ、こんな笑い、ワライ、ワライ……こんな唾いだけを与えてくださった両親に今でも感謝しているんだ」

「オレハ両親をコロシタ」

第88話『血の涙』（前書き）

これでアリスの過去編はひとまず終了です。

## 第88話『血の涙』

「オレ八両親をコロシタ」

……こいつは、何を言っているの。

「ど、どんな顔をするか見たかったっ、だけっ！くひひっ……なのにあいつらときたらさあ、く、くくっ！！泣き出すんだよっ、必死に俺に、俺にしがみつきながら！『助けてっ！お願い助けてえ！』って！！ひたすらそればかり！！泣いて泣いて泣いてっ！涙っ！鼻水っ！その他諸々、汁という汁を床にだらだらぶちまけちゃってさあ！くくっ、余りの奴らのおぞましさに笑っちゃったよ！何一つ感情という感情を知らなかった僕がっ！ハハッ、ハハハハハハハハハハ」

奴の感情の無い不快な笑いが耳に信号として入ってくる。

どこを見ているのか、その顔は私に向いていながらも目の焦点は明らかに他、というよりも目まぐるしく移りに移って、ある一点に定まっていなかった。その奴の言動はもちろんの事、奴の様子は既に常人のソレでは無かった。壊れた人形、今の奴にはそれが最もお似合いの言葉だった。

「だから、殺したんだよ。だって、いくら面白いからって言ったって、ずっとずっと同じリアクションしか取らない玩具なんて楽しくないでしょ？そう思わない？だから、殺した、いや捨てたんだよ。くひひ」

奴の言動は一見、落ち着いたように見えたが言っている事は狂人そのものだった。





「……………」

「……何よ、今の……確か、確かに私の目から血の……けれど、違う。普通の涙……幻覚、幻覚……なの？」

「くっ、くくく……………」

そして、もう一度、奴を見ると何がおかしいのか愉快そうに笑っていた……

「な、何がおかしいっ?!」

ギリギリ、ギリギリ……………」

私は首を絞める力をだらに強めた……………死んでしまいかもしれない、でももう自分を制御できなかった。

「ぐ、く、ぎ……ぐひひっ!そ、りゃ……………くびっ、くひ……おかしい、ねえ……………くひひっ」

「あぁっ?!」

「君達、姉妹は、ぐきぎっ、似過ぎ、なんだよ、くび、ぐきぎ……………」

「……………?どういう意味っ?!アンタ……………まさかっ!エリスに何かしたのっ?!」

ドンッ!

私は奴の首を絞めていた手を離し、そのまま地面に叩き落とした。

「はぁ、ハッ、は……………ハハ、僕は、何も、してないよ……………クククッ、それでも、それでも心配なら入るといいじゃないか、そこに、

くくっ」

奴は未だに不愉快な笑みを浮かべて、私の家を指差しそう言った。

「……………」

私は一目散に我が家の玄関に向かった、何故かは分からない。奴の言葉を信用している訳じゃないが、自然と私の足はそこに向かつて動いた。

「……………くひひっ」

「もう既に遅いかも、だけどね……………くひひっ」

「……………」

玄関に入ると、電気は消えていた。

……………誰も、いない？

「……………エリス？」

……………

返答は無い、暗闇に向かった私の言葉に対しての返答は無かった。

……………誰もいない……………？

「……………エリス、いるの？」

靴を脱いで家にかかる。

ミシ、ミシ……………

もう随分古いこの家の廊下を歩いていると今のようにミシミシと音が鳴る。

その軋る音以外、一切、音という音は聞こえてこなかった。

「エリス……………エリス、どこにいるの？」

でもいる、エリスはこの家のどこかにいる、私は確信していた、いや感じていた。

この先に見える左側の扉は……………リビングだ。

「……………？」

そのリビングの扉は半開きになっていた……………おかしい、朝はちゃんと閉めたはずなのに。

不審に感じた私はその半開きのドアに近づいて行った。

「……………暗くて、よく見えないわね」

半開きとは言えどリビングの電気は消えているので中の様子までは見えない……………

……………見てみますか、と私は半開きのドアに手を掛けたその瞬間……………

『……………』

かすかな音が聞こえた。

何かの音……………物音？いや、違う……………風？風の音にしてはやけにリアルのような……………

「……………エリス、入るわよ」

ドアノブを握る手の力を強めた。

「……………」

ゆっくり、ゆっくり……………扉を開く。

何故か、ドアノブを握る手から汗がにじみ出てくる……………何だろっ、

この、緊張感は。

キィ、キィィィ……………

電気のスイッチは丁度リビングに入りすぐ右側にある。

私は暗闇の中、手探りでそのスイッチを探す。

……………左手にスイッチの凹凸の感触があった、これ。

そして、私はそのスイッチを押した。

部屋に電気がつき、私の視界に現れた光景は――

装飾された壁、テーブル、イス、その他諸々……らしき跡――

テーブルにはイチゴケーキ、七面鳥、その他諸々……それらしき跡――

そして、床一面にぶちまけられたケチャップ――

さらによく見てみると、ケチャップに異物が混じり合っている――  
――血、真っ赤な、新鮮な、鮮血。

その、血の元を辿ってみると――

手首からパツサリ、大量の血を流した少女エリスが床で仰向けに倒れていた。

「エ、エ、リ、ス……………」

な、んで……………なんで、こんな事。嘘、嘘、嘘、何コレ……………夢、悪夢を見ているみたい……………

「ヒュー……………ヒュー……………」

……………エリスは肩で息をしていた、まだ息はある……………

「エリスッ！！！」

誰か、誰か、誰かッ！！！！

叫びたくなる気持ちを必死に抑えて私はエリスの元に駆け寄った。

「ヒュー……………ヒュー……………お、ねえ、ちゃん……………」

「エリスッ！エリスッ！エリスッ！エリスうー！！！！！！」



「ビュー、ビュー……………おねえ、ちゃん……………」

そして、おそらく最後であろうエリスが力尽きる前に残した言葉、それは――

「あイツモ、おマエモ、ユルサナイ、ゼツタイ、ウフ、うフフフフ、  
ウフフふふフフふふフフふふフフふふフフ」

ドサ……………  
私と浩二に対する恨み詞<sup>コトバ</sup>だった。



――あれから一ヶ月。

エリスの両親のいないひっそりとした葬儀が終わり、私は自分の部屋の荷物をまとめていた。

身寄りのいない私を遠い親戚の……橘家の人が引き取ってくれるらしい。

何故、そんな会ったこともない親戚の人が私を引き取ってくれるのかは分からない。

でも、私は断る気は無かった、いや断る気力が無かった、というより何もする気力が無かった。

今、片付けている私の部屋の荷物もほとんど無い……ほとんど引越しの業者さんがやってくれた。

そして私はというと残った思い出の品を漁っていた。別に……何となく、漁っていた。

昔のアルバム、小学校の頃に使っていたリコーダー、成績表、卒業作文等……懐かしい品々が出てくる。

中でもアルバムの写真にはほとんど私と妹が写っている写真で占めていた。

私の思い出の中にはあの子しかいなかったのね……そんな感慨にふけながら私は両手にそれらの思い出の品々を抱えて表に出た。

パチ、パチツ、パチ、パチ…………

思い出は灰の中、私はそれら全ての思い出の品々を燃やした。

決別するために、自分と、奴と、エリスに。

真っ赤な炎、メラメラと燃え上がるその様は私の中にある黒い感情を増殖させる、それは憎悪という名の感情。

それは小田原浩二、……………そして自分に対して。

………ただ、私は大切な人を失うと同時に………

『S県S市、飛び降り自殺。男子中学生、1人死亡………あまりの異常な死に周囲の住民は戸惑いの色を隠せない模様。しかし、詳しい死についての情報は住民に問いただしても恐怖のせいか誰も答えようとしな。警察もこの事件については大まかな情報のみで詳しい情報については非公開………謎の男子中学生の死』

新聞の記事にそう書かれてあった、そしてその記事に写真つきで「  
くなくなった男子中学生の顔も載せられていた――」

――亡くなった男子中学生、小田原浩二（13）――

復讐の相手も失ってしまった――

――なら、私は、この押さえきれない感情を誰に、誰に向ければ  
いいの……？

――ああでも、あと1人残っていたな……復讐の相手。

――私、自身だ――

ポタツ、ポタ……

――血の涙、真つ赤な、赤、新鮮な、鮮血の、赤。

ポタ、ポタツ、ポタ、ポタ……

今でも、絶えず、私の中でソレは滴っている。

## 第89話 『貴方が好きだった』

空に浮かぶ黒い雲、それはこの後の天候が芳しくないことを意味していた。

そして俺とアリスはそんな空の下、とある霊園の墓の前にいた。

「あの子は、ここに……眠っているの」

アリスは重くたどたどしい口調で俺に語りかける。

「……………」

そして、その墓の前には一輪の花が供えられていた。

その花は既に力なく折れ、地面に花びらが落ちていた。

黄色に褐色の油点が特徴の花だ。俺にはその花が今のアリスそのものに見えて……何故か儂く感じた。

「……………この墓に眠っている子がアリスの妹か」

「そうよ、私の……私の世界で一番の宝物、エリス……………」

そして、アリスは何かから守るような格好で墓を抱きしめた。

エリス……アリスが守りたかった家族、己の半身。けれども、ある不純物によってそれが汚されてしまった。男、アリスの男嫌いはそこから始まった。そして、俺は初めてアリスに出会った頃のことを思い出した。

『アリス・ブランドー』

ぶつきらぼつな、面倒臭そうな声でアリスは俺に第一声を放った。

それはまるで男というより『世界』を拒んでいるように俺は見えた。

『あなたのその汚らしいツラ見てたら考えていることなんてすぐ分かるわよ……』

アリスには見える全てが敵に見えたのだろうか、俺には想像できない世界だ。拒絶、拒絶、拒絶、妹を失ったアリスの気持ちは負の感情で日々満たされていたに違いない。自分を考える余裕さえない、常に死んだ妹の事を考える日々、後悔、無念、挫折、憎悪、そんな感情がごちゃ混ぜに……信じられない、俺は、そんなアリスの壮絶な過去を知ってしまった。俺はそんなアリスの『部屋』に土足で踏み込んだ。知ってしまったからには背負わなければならない、当然だ。俺に……何が出来るだろうか。少なくとも、安易な言葉で励ます事などあつてはならない。……くそっ！くそっ！くそっ！俺に何が出来る……！？アリスは……アリスは……！自分自身で自分の過去に決着<sup>ケリ</sup>をつけようとしているっ！！だからっ！あの時！アリスは……！！

『もう、私は私でいられなくなるから』

アリスは……自らの死で決着を着けようとしている。過去に残してきた妹の無念を取り去るために……それが絶対間違っていることとは言うまでも無い。きっと、アリスは囚われているんだ……過去の産物に。だから……本当の視界が見えないんだ。もう、目先に見えるのは闇、闇、闇、真つ暗な闇。もう、周りが見えない、自分がある世界は……もう、自分と妹でしかない。きっと、今のアリスには俺が見えていない。

「アリスっ……！！！」

俺は溜まらず声を荒げた。

「ここには、あの子が眠っているの。ぐっすり眠っているの。だから……私を」

それでも、アリスは俺の声に反応せず、墓をギュッと抱きしめてい



何も言い返せない。正論だから、分かっていた……俺が無力な事、そんな事は始めから分かっていた。……くそっ！くそっ！くそお……

「ぐう……じゃあ、じゃあ何で？！何で俺に聞かせてくれたんだ？！お前の過去っ？！何で？！何で……」

ほんの僅かな抵抗……それはできれば口にしたくなかった。分かっている！それが、どれだけ卑屈な抵抗であるか……！……ただ……もう、俺に手段は無いっ！感情的になるしか……それしか、もう無いっ！

「……はっ、どれだけ自信過剰なのあんた……私があんたに頼っているとも思った？あはははは……！馬っ鹿ねっ……！頼るわけ無いじゃない……！大っ嫌いな男のあんたに……！何であんたに話したと思う？！それはね！あんたが、あいつ！小田原に見えたのよ……！……これは復讐よっ！復讐っ！ささやかな復讐っ！あの男はもうこの世にいないけど、あの男をあんたに見立てて！何もできないあんたは私がこの世から消えていく様をそこで眺めているといいわっ……！……あはははは……！あんたはこの先一生、永遠に後悔を背負って生きていくのっ……！あははははははは……！……」

アリスは狂ったような声で俺に罵声を浴びせる。俺は、俺は……やっぱり、何も、何も、何もできないのか……？無力な、無力な、無力な人間……最低だ、俺は。何も、やっぱり何もできないじゃないか……目に熱を感じる、そして、いつの間にか目から自然と涙が流れた。

「うああああああ……」

静かに、静かに地面に伏せながら俺は泣いた。そして、いつの間にか空から水が降り注ぐ。雨だ、その雨に打たれて俺は泣いていた。体中に寒気を感じながら、そして自分の不甲斐無さを感じながら、そして俺は……結局何もできない、救えない、誰も、誰も、誰も……



「……………ねえ、村上」

……………アリスの声が聞こえた。

「……………」  
俺は、顔を上げアリスを見た。アリスはびしょ濡れで墓の前にじつと立ち尽くしていた。

「私……………もう、限界みたい……………」  
アリスの瞳はすでに輝きを失っており、意気消沈した姿がそこにあった。けれども、彼女はすでに覚悟を決めた……………そんな気配が俺には感じた。

「……………アリス」  
俺は、もうアリスを説得する気力は無い……………そんな自分が情けなくて情けなくて……………このまま死んでしまいたいくらい情けなくて……………また、自然と涙が零れた。

「ははっ、涙つて枯れないもんなんだよな……………」  
俺はアリスに向けて無意味な言葉を漏らした。

「……………ごめんね」

……………  
「……………何で、何で謝るんだアリス」

「……………私、結構、あんたの事好きだったみたい……………あはは、こんな事を今更言っても仕方がないのにな」

アリスはゆっくり俺の元に歩みより、俺と背中を合わせてその場で

座った。

「……………俺は人に好かれる人間じゃない」

「……………何で、そう思うのかしら？」

「……………俺は過去に大切な人を失った。それも俺のせいで。全部、俺のせいで……………」

また、涙が零れた。あの頃の自分の不甲斐無さに……………結局、あの時も俺は雪美の事も、鈴奈の事も、何一つ分かってやれなかったんだよな……………」

「……………似ているのかもね、私達」

……………

「……………違う、お前と俺は全然違う。俺の過去は……………俺自身が引き起こした過去だ。お前の過去はお前が悪いんじゃない……………」

もう、こんな台詞で説得してもアリスには届かないのは分かっている。でも……………何で、何でアリス、お前は。

「……………フフ、結局あんたは何も分かってないじゃない」

そう言うとアリスは立ち上がり、雨降る空を見上げた。

「……………止まない、わね」

「……………ああ」

二人で空を見上げた、雨降る空、最後の空……………アリスの瞳にはそんな空が映っているのか。

「……………耕司、最後に1つだけお願いがあるの」

「……………なに？」

アリスは名前で俺を呼んでくれた。でも、俺にはそれに対して嬉しさのカケラも無かった。あるのは、後悔、ただ、それだけだった。

「……………私を、殺してくれる？」



番外編その28 『佐々木雅彦(21)の一存』

「はぁ……………」

……………はっ、初っ端から辛気臭い溜息ついてすみません。皆さんお久しぶりです。

一家に一台、佐々木雅彦です、飼って……………下さい、って何言ってるんだ僕は(汗)

「どうしたの？佐々木君、溜息なんかついちゃって」

たかなしえり

隣で心配そうな様子で僕の顔を覗き込む彼女は高梨恵梨、現在独身まっしぐらで僕の1つ年上の22歳。容姿は長めの黒髪にメガネをかけているスタイル抜群なお方です。年がら年中、年頃の男性スタッフの目の前で『ああ、吸いたい、あなたの甘あいの吸いたいわぁ……………』とか言いながら誘惑しているちよつとヤバめな方だが、基本はいい人…なのかな？(汗)現在、僕と同じ、新米声優のマネージャーを勤めています。ちなみに彼女、元ヤンらしいです……………に、逃げたい！今すぐこの場から逃げ出したいですっ！（泣）

「まっ、元気出さないよっ！包茎っ！」

「それ、慰めてるのが貶しているのかどっちですか……………」

「あっ、それとも……………コ・コ 出してあげようか？ぬふふ……………」

「ちよつ、ちよつと！？高梨さん！？どこ触っているんですか!?!？」

冗談は止めて下さい!?!！」

僕は高梨さんの行動に寒気を覚え、後ずさった。

「ちっ……………」

舌打ちされた……………

シュボツ……………

「フウ……………で？何？何であんたはそんなに落ち込んでいるわけ？」

「あの……………高梨さん、ここ禁煙なんですけど……………」

「うるさいわね、あなたのチン もぎ取るわよ!！」

「ひい!?!？」

「まったく……あんたねえ、ただでさえ普段からナヨナヨした顔して  
んのに、さらに落ち込んだ顔を見せられるこっちの身にもなってみ  
なさいっての……ちっ、今日こそあの男声優喰えるチャンスだっ  
たのに……あのハゲP、プロテューサー今度会ったら陰毛全部引っこ抜いてやる  
わ……」

お、怒られた……それに何か不穏なこと口走ってますよコノヒト  
!?!?……(汗)こ、怖いからとりあえず逃げよう………そっつと  
………そっつと、ね。

「お待ち……!」

ガシッ

「きゃあ!?!」

「あの小生意気な娘はね、ツンデレだと思っの」

「あの……」

「ああんっ!?!」

「ひっ!」

「何だ、言ってみな」

「いや、その………何で僕は裸になっているんですか……? (汗)」  
何故か僕は服を剥かれてトランクス1枚の姿でさらに手には手錠、  
首輪をつけられ………足を組んで座る彼女の足元で正座をさせられ  
ていた………そして彼女の姿はなぜかボンテージだった………

「あたしゃあね、こうやってアンタみたいな無防備なオス犬を上か  
ら眺めているだけでゾクゾクすんの、そして立場は私が上。あんた  
は下。そんな奴に服なんかいらないだろ? トランクス履かせてやつ  
てるだけでもありがたく思いな、このチン スがっ!」

「あ、悪魔っ!ひとでなしっ! (泣)」





えっ、何？今、何が起きたの………？！

えっ、えっ、えっ、どうして？どうしてこんな事態に？！

えっ、えっ、えっ？理解できないっ？！なんで？なんで？  
なんで、僕はコンクリの壁にめり込んでいるんだっ？！意味わかん  
ないっ！？

………はっ？！殺気っ！？

「ベーンピーー………」

こ、この………1オクターブ低めの声、んでもっていかにも機嫌が悪  
そうな………少女の声っ！！！ウコンちゃんだっ！間違いないっ…  
………！え、なのに何で？何で、ものすごい目で睨まれてるの？僕？  
この場の状況が理解できないっ！

「おっとお、ちよつと待ちなさいよ、その幼女。その犬はあたし  
のモノよ。手を出したら容赦しないよっ！」  
ピシッ

………この声は、キ ガイサティスト！警告のつもりなのか床に鞭を  
打っているっ！色んな意味で怖ええー………

「うるさい、黙れ年増。コイツは私のジャーマネだ、連れて帰る」  
ギロツ

ひい！ま、またっ………睨まれたっ！僕、何か悪い事しました？！

「ほらっ、行くぞ！ベンピーー！」

「あ、あああ………ウコンちゃん」

ウコンちゃんに腕を引っ張られて、立ち上がる僕………ああ、何て  
情けない。

「待ちなっ！逃がしやあしないよっ！」

目の前にキチ イサティストが立ちふさがった！ひい！怖いっ！恐  
るべしっ、年増っ！

「そこをどけ、ババア」

「どかないねえ………その犬をあたしのトロピカルワールドへ導く



までねえ!!!クエ!クエ!クエ!」

不気味な笑顔で僕を見つめるサディスト……この人怖いっ!ねえ、笑っているんですか?!それっ!?魔女かよっ!そしてトロピカルワールドってなんだあ!甘美な響きがかえって怖いっ!早くココから逃げたいっ!

「どけて言っただらうがよお!年増あ!!!」  
バキッ

イライラしているのかウコンちゃんは近くにあったゴミ箱を思いっきり蹴りました……怖いっ!この子も怖いっ!そして、その台詞はもう女の子の台詞じゃないっ!!!

「クッ、クッ、クッ……やだねえ、いくらあんたがその犬の事が大だだだあ~~~~い好きでもあたしやあどかないねえ~~~~クヒッ!クエ!クエ!クエ!じゅるりっ!」

「なっ……?!(ノノノ)」  
ひいひいひい……!!!僕を見ながら舌なめずりしているっ!ほ、掘られるっ!汚されるっ!もうコノヒト人間じゃないよっ!!!誰か助けてえ……!!!

「ギャハハハハハ!!!!!!そう!それっ!メス犬っ!あんなのその顔が見たかったっ!!!!!!その恥辱にまみれた困惑の表情、火照るフェイス……ああ、最高だねえ……クヒヒヒ、じゅるりっ!」

ウコンちゃんの頭の上に手をのせ、奇妙な表情で笑うサディスト……ああ、ウコンちゃん……めっさプルプルしてる……めっさプルプルしてますよお……!!! (泣)

「………コロス殺すコロス殺すコロス殺す殺す、プチ殺す」  
ギリギリギリギリ………メキツメキツメキツ………

ギヤアアアアア………!!!痛いイタイ痛いイタイ………!!!腕折れる折れる折れる折れちゃっ………!!!僕が殺されちゃっ………!!!

「はんっ?あたしを殺す?やってみなよっ!メス犬!!!!」



突然、右の頬にヒヤツとした感触が走った……………振り返るとそこにいた人物は。

「……………君も大変だなあ。まあこの缶コーヒー飲めよ。それは俺からのおごりだ」

ハゲP（おそらく高梨さんが言っていたであろう）さんが立っていた。そして彼は、僕の隣に座った。

「俺も君ぐらいの頃には君みたいに二人の女に悩まされたさ……………」  
哀愁を帯びた目で何やら語り始めるハゲPさん。

「それで何度挫折したことか……………三次元の女には苦労したよ。そこであの頃の俺は二次元に走ったさ……………ああ、そりゃあ最初は楽しかったさ。三次元の女のように文句も言わない、甘えてくれる、かあいい……………でもさ、ある時気付いたんだ……………自分の過ちを。

例えばそれが自分好みの女であったとしても、画面に映し出されている女の子は近くにいて、決して近くなかったんだってことを。絶望したさ、そりゃあもう絶望したさ。ああ、結局、女なんて……………そんなもんなんだとな」

「あの、ハゲPさん……………僕には貴方が何を言っているのか全然分からないんですが」

「つまりだ、佐々木君。女なんて信用しちゃいけないよ、甘い言葉で誘惑、ああそれもあるさ。でもな、それは罠なんだよ。ところで佐々木君、ハゲPって何？それ俺の事？」

「ハゲPさん……………だから、何を言っているか」

「今、いいこと言っただろう？俺。だから、俺、君みたいなすごく一生懸命頑張っている子、あの女共に立ち向かう君の姿、うん大好きだよ。ところでハゲPって何？」

「は、ハゲPさん？（汗）」  
何だろう……………何か、何かものすごく雲行きが怪しくなってきたよ  
うな……………

「それに君、近くでみたら結構可愛い顔しているし……………それに、何？その格好。もしかして……………僕を……………誘っているのかい？あと、



## 第90話 『虹と太陽と大切な人』

「……………私を、殺してくれる？」

……………アリスの濁った目が俺に向けられた。その瞳はまるでこの世の全てを拒絶しているかのような、全てを受け入れ悟りきったような……………そんな瞳だった。

「……………アリス」

でも、そんな瞳に俺は射抜かれたんだ。

アリスの覚悟、それは自らの死をもってピリオドを打つこと。そんなことは間違っている……………そんなことは分かりきっている。でも……………俺はそれを止めることができなくて、いや止める権利すらなくて……………

「……………お願い、私を、殺して……………」

アリスの抑揚の無い、低くて重い声が俺の耳に届いた。

……………俺は、アリスにとっては所詮、蚊帳の外にいる人間だ。だからアリスを止める権利はないし……………多分、本当ならアリスの声を傾けることすら許されていないはずだ……………

「……………」

俺は立ち上がろうと右足に力を入れて、重い腰を上げた。

そして、アリスの方に向き、ゆっくりと雨でぬかるんだ柔らかい土壌を踏みしめ、歩を進めた。

「……………耕司、お願い、私を……………殺して」

再びあのアリスの瞳が俺に向けられる。だが、俺は構わずゆっくりとアリスとの距離を詰めていく。

「……………」

もう俺の耳には周囲の雨音は届いていなかった。  
霊園独特の芳香も、雨でぬかるんだ地面の感触も、雨で濡れた身体も何もかも……感じない。  
あるのは……俺とアリスという人間のみ。前へ前へ……ひたすら前へ、足を止めることなく徐々にゆっくりと確実に俺はアリスに近づいていった。

そして、ほどなく俺とアリスの距離は詰まり、手の届く位置、一人分の距離で俺は立ち止まった。

「……………アリス」

「……………」  
何を悟ったのか、俺がアリスを呼ぶとアリスは俺から目を逸らし、俯いた。

「……………耕司、早く、私を殺して……………」

アリスは小さな、届くか届かないか分からないくらいの声でそう呟いた。

「……………俺は」

……………アリスの覚悟、過去の過ち、それを自らの死をもって妹に償うこと。

……………そして、俺の覚悟、それは……………

「……………すまない、アリス。俺には……………できない」

失った過去の産物をこれからの未来を断つことで等価にしようとするなんてそれは間違っている。いや、そんなもの等価になりえない……………そこに『ギブアンドテイク』の法則は無い。

「……………耕司」

アリスはゆっくりと顔を上げ……………その目には涙を流していた。

「……それに俺はお前を死なせない、死なせるものか……」

俺の言葉はアリスにとって残酷かもしれない。けど……俺の覚悟はまさにそれだ。殻をブチ破る。俺は……アリスの過去に過去に関係ない人間……だから、どうした？それが、それが何だって言うんだっ……！

「俺は……俺はお前を全力で止める。そして……その腐った因果の鎖を解く。……アリス、それが俺の覚悟、だ」

「……っ」

俺の覚悟、それは身勝手な覚悟だ。

だって、俺の覚悟はアリスと対照的なもの、アリスの覚悟を完全に潰すことを意味するのだから。もう……俺は後には引けない。一対一の……一種の殴り合いだ。

「……どうしてよ」

「……っ」

「……どうして、どうしてどうして……どうしてよ……」

アリスは俺の前で顔を両手で覆った。

この反応は……正直、胸にグさつとくるものがある……けれど、もう俺は逃げない。……もう、逃げないっ！

「……苦しいのよ。もう……私は死にたいの」

「……っ」

「……どうして……わかってくれないの……？……麻里先輩も、あんたも」

「……っ」

「……私……！ここに、この世界に……生きてはいけない存在なの……！妹を、妹を殺したも同然……そんな最低な姉よ？フ、フフ、

フフ……」

「……………」

「もうっ……もう限界なのっ！生きることですらっ！苦しいのっ！何もかもっ！皆と同じ寮で生活するのもっ！男の子に恋するのもっ！もう、嫌っ！嫌嫌嫌っ……！何もかも……！もう、もう、私を殺してよお！殺してよお……！！」

「……………アリス」

「嫌っ！こっちに来ないでっ！」

俺はさらにアリスに近づき……アリスは少し引いたが、俺はそれでも歩くことをやめない。

「こっちに来ないでっって言ってるでしょっ！？そ、それ以上………近寄ったら……！！」

「近寄ったら……？何だ、何をやる気だ？死ぬのか？それとも……俺を殺すのか？」

「うっ、うるさい！うるさい！うるさい！うるさい！私は……私はもう覚悟はできているのよっ？！私は！私は……！！」

「覚悟……？死ぬことの……か？じゃあ、何で俺に『殺してくれ』なんて言っただんだ？……それとも、それを告げることがお前の覚悟なのか？」

「……っ、ち、違うっ！私は……私は……」

「……………アリス、もういいだろう……？お前はこれまでよく頑張ったよ」

「うっ、うるさい！うるさい！うるさい！うるさい！ど、同情してんじゃないわよっ！同情なんて……同情なんてして欲しくなかった！……結局、あんたはあの人……麻里先輩と同じじゃないっ！あんたは、あんたは……結局、あんたは……！！」

「……………」

「もう、いいっ！こんな……！こんな世の中に未練なんて毛ほどもないっ！もうあんたに頼らないっ！私は……私はっ……！！」

アリスは懐に隠していたのか、包丁を取り出し、右腕でそれを振り





手でアリスを抱きしめていた……よかった、間に合った……

「あつ……こ、耕司……」

アリスは心配と不安と戸惑いの入り混じった表情に少し頬を赤らめていた……

「……アリス、もう、いいだろ……?」

「……っ」

「……アリス、俺はここにいる。それで……お前もここにいる。……

……それで充分じゃないか」

「……」

「お前は……本当によく頑張ったよ……お前は、俺より強い。俺は……負けたよ。これは同情じゃない……もう、もう充分じゃないか……」

「……」

「……うん」

「アリス、俺はお前に何もしてやれねえが……こつやつて、お前を抱きしめることはできる……これは俺とお前がこの世界で生きているっていう何よりの証拠だ」

「……うんっ、うん」

「……アリス、お前の……お前の妹も頑張ったんだよ、お前と同じくらい」

「……うん、うん、うん……」

「……なあ、アリス……今度、お前の手料理……食わせてくれよ……何が、得意なんだ?」

「肉……じゃが」

「そうか、肉じゃがが……うん、いいじゃん。家庭的で……俺、こつ見えても味にはうるさいからさ……お前の手料理、俺が採点してやるよ……」

「……うん、まずいって言ったら……承知しないんだからあ……!」

「……ははっ、それは……参ったな……じゃあ、麻里さんやメガネやサル達も……巻き添えにしてやるからな……」

「……な、なによっ! なによお……すん」

「……おっ、見るよ……あれ」  
「……あ」

空を見上げると、とくに雨は止み、視界は太陽を映し出していた。  
そして、雨の後……七色の美しい虹が現れた。  
俺達二人は抱き合いながら、そんな秋空をしばらく眺めていた。

第90話 『虹と太陽と大切な人』 (後書き)

次回から再び学園祭編となります。

## 第91話『リアルツンデレは天然記念物なのです』

週明けの月曜日。

何とかアリスさんを高宮学園学生寮に連れて帰り、もとの平穏な日常に戻ったが……

「そう簡単にいかないわなあ……」

昼飯のから揚げを口に頬張りながら俺は自然とそんな事を呟いていた。

「んあ？何が簡単にいかないんだ？耕司」

そんな俺の独り言を目ざとく、サルは俺に尋ねる。

「何でもねえよ」

「ふーん、まあいつか。あ、それはそうと簡単にいかないといったら学園祭……一週間後だよな。俺達のクラス……まだ、出し物も何にも決まってるねえよな……どうする？」

「どうするも何も……どうしようもねえよ。あと一週間、いや実質六日間……絶望的だろ。無理だよ、ムチャだよ。ブツチしようぜ」

ていうか、俺達のクラスは何で誰もつつこまねえんだろ……呑気すぎるだろ（汗）

「ポツチ……だと？お前は揉むよりしゃぶる派か、もみもみ……」

より、ぺろぺろぺろぺろ……か？お前、エロイな、ハアハア」

「……何を言ってるんだお前は」

サルは両手をワキワキと動かしながら舌の先端を出して上下に動かしている……こいつ、AVの見すぎだろ。

「やだ、何こいつ、きもーい」（女子A）

そんな醜いサルの姿をたまたま目撃した近くに居合わせたクラスの女子に見事に引かれていた。

ガラガラガラガラー

引き続き飯を食っていると、突然教室の前のドアが開いた。

「やあやあ、皆の衆、元気にしとるかね〜」

アホチビロリっ子先輩、八尾麻里先輩が教室に入ってきた。あの呑気そうな、何ていうか何も考えてなさそうな顔はいつ見てもイラッとくるなあ………何だかいぢめたくなってくる。

「……………っ(ノノノ)」

そして、麻里先輩の後ろに女子生徒………っ、誰？何かでも何処かを見たことあるような………紫色のツインテール、そして白と赤地の制服………どうやら高宮学園の生徒ではないようだ。

「うおっ！耕司見るよ！かがみんだっ！かがみんだよっ！実物大のかがみんが俺達の学園にやってきたー！ーキャッホー！ー！ウー！！！！！」

その女子生徒を見たサルは何故か興奮しながら小躍りし始めた………か、かがみん？

「あれ？ナニナニ？知らないの？たかりやん？この子、らの柀かがみちゃんだよ〜、おっくれてるう〜〜」

俺が不思議そうな顔でその女生徒を眺めていると麻里先輩が小馬鹿にしたような顔で俺に声を掛けてきた。

「知らねえよ………あと、その『たかりやん』ってのは何だ」

「何だ、耕司キュン？知らないのかね、会長のコスプレはT o e a r t 2のまーりゃん先輩だぞ」

そして、今度は………誰？金髪オールバックの男………頭にはハートマークのバンドを装着している………何か、黄色い………とりあえず、上着も下も黄色い。何か黄色い人が俺に声を掛けてきた。でも、この声はどこかで聞いたことある………まさか。

「おい、お前………メガネだろ」

「おれは人間をやめるぞ！ジョジョーっ！！おれは人間を超越す

るッ！」

「聞けよオイ。それにメガネ、安心しろ、お前は既に人間という範疇を軽く超越している」

「UREYYYYYーいやかましいっ、このきたならしい阿呆がアーンッ！ふんッ、おまえは今まで食ったパンの枚数をおぼえているのか？」

「会話しろ、おい」

何だコイツは……そして、サルを見ると……さっきの……かがみんとか言っただか、その子にまだ話しかけ……いや、セクハラを働いていた。

「ね、ねえねえ？かがみん？きよ、今日のお、おばんちゅ……の色、お、おおお教えてくれないか？プひひ」

サルは頬を染めかがみんに下着の色を聞いていた……何だアイツはあんなキヤラだったっけ？完全なるオタクじゃねえか。

「……………」  
かがみんはじつと、その場で顔を伏せていた……震える？伏せているので表情は覗えない。

「お、お……い？か、かがみ……ん？あ、あれ？す、拗ねちゃった？あ、あははッ！いきなりおばんちゅは失礼だったかな？じゃ、じゃあ、さ……その、小ぶりのおっぱい揉ませ……」

バキッ

「アウチョー！！！」

「こ、小ぶりで悪かったわねえー……！！！！！！（泣）」

バキッドガッガスツバコツポキッ

……一瞬の出来事、それは一瞬の出来事だった。まず、サルの顎にアッパーが一発。さらに教室の床に倒れたサルに足蹴り一発二発三発……あとは言わずもなが、フルボッコ。振り下ろされる雨のような鉄拳、当然サルはそれに抵抗できず、ただただ防戦一方。数十秒後、サルは床で大の字で倒れていた。その表情は……なぜか、ムカつくほどの清々しい笑顔で満ちていた。

「この声……ま、まさか……お前、あ、アリス………か？」

俺の声に反応したかがみん……いや、アリス（？）は俺に顔を向け、キツと睨んできた。

「そ、そうよっ！！！私はアリスよっ！！！わ、悪いッ？！も、文句あるの！？」

アリスは真つ赤な顔で俺を睨んできた………恥ずかしさの余りその瞳には涙が溢れていた。

「い、いや………悪くは無いが、むしろ………」

「な、何よお………」

「………」

「………」

「………な、何か言いなさいよっ！な、何よっ！『むしろ………』何よっ！！！！い、いいわよっ！！！！ど、どうせこ、こんな………こんなフアンシーな制服私には似合わないわよおーーーー！！！！」

ガラガラガラガラガラー………

「あっ………（汗）」

アリスはそのまま逃げるように教室を飛び出していた。隣にいたメガネ（ver・DIO様）は『おお………リアルツンデレの到来だ………』とか何とかブツブツ呟いていた。

「あゝあ、アリスちゃん逃げちゃったじゃん………たかりゃん！何で止めなかったのっ！」

俺とアリスさんの光景を傍から眺めていた麻里先輩はぷくぷくと頬を膨らませながら俺に突っかかっていた。

「知りませんよ………どうせ、麻里先輩、あんたがアリスに無理矢理あんな格好させたんだろ？それに俺はたかりゃんじゃねえ」



しかし……アリス、元気になったんだな。ちよつと最初は驚いたが良かった。

「にゃふふ、それはどうかにゃ……？まったく……たかりゃんはちつとも女心を分かってないねえ……そんなだから永遠のヘタレキヤラってよばれるんだぞ！」

「……何だそれは。だから、俺はたかりゃんじゃねえつつつてんだろ、誰がヘタレだコラ」

グリグリグリグリ……

ちよつとさつきから調子に乗っている麻里先輩にグリグリ攻撃をかましてやった。

「にゃあ！にゃ……やめろお！暴力反対い……鬼畜う……」

グリグリ攻撃をかましていると、麻里先輩は少し涙目になってきた。……クラスの女子の視線が少し痛い。仕方なくやめることにした。

「……ところで一体、あんたは何しにきたんだ？」

「……にゃふふ……聞いて驚くなよ耕司君！このクラスの学園祭の出し物が決まったんだよ！」

無い胸を張って会長は威張っていた。……ほんと、こりねえな……

コノヒトは。

「決まったつて……あんたが勝手に決めたんでしょう？俺達の総意を無視する気がよ」

「その出し物とは……これだつ……！」

「URYYYYY……」

「聞けよ、お前ら」

メガネ（ver・DIO様）はどこから持ってきたのかホワイトボードを裏返し……そこに書かれていたものは……

『参加型大規模コスプレ喫茶！！！』

……ちなみに、字がさかさまになっていた。

第92話 『過程や方法なんぞどうでも良いのだァー！結果が大事なんだよ、うん』

高宮学園生徒会会長、八尾麻里が提案した一週間後の学園祭の出し物、それは……

『参加型大規模コスプレ喫茶』なるものであった。

「何ですか……それ」

「うむっ！耕司君よく聞いてくれたっ！んじゃあ、メガネ君説明よろ」

麻里先輩、あんたが説明しろよ……

「ふむ、『参加型大規模コスプレ喫茶』とは……皆で気持ち良くなる喫茶店のことさ」

「……ごめん、君の言っている意味が何一つ理解できない」

「……モグモグ、つまり何だ？普通のコスプレ喫茶は店員がアニメや漫画のキャラクターのコスプレをすることで客に夢と希望と愛と欲望を提供するのに対して、その参加型大規模コスプレ喫茶は店員だけでなく客にもそのコスプレを楽しんでもらおうという画期的な喫茶店のことか？」

サルは口をモゴモゴさせながらそんなことを口走った。

「その通りっ！」

麻里先輩とメガネはグツと親指を立てた。

「……どうでもいいけど、サル。あのメガネの説明からそんな詳しいヒント読み取れたか？」

「見事大正解を果たしたサル君には、会長直筆サインをプレゼントしちゃう！世界に1つしか存在しないからねえ、大切にしろよ！色男」

麻里先輩はサルに色紙を手渡した……色紙にはミミズみたいな、ひよろひよろつとした、つまりはとてつもなく汚い字で『やおまりちゃん』と書かれていた……うん、色々と突っ込みたい事はあるのだが、とりあえず自分のフルネームくらい漢字で書けよ。

「いらね」

ヒュー

サルは色紙を手にした瞬間、色紙を放り投げた。色紙はブーメランのように回転しながら偶然にも教室のゴミ箱に吸い込まれていった

……

「にゃあああああああー……あちしの直筆サインー」

「……！！！！！！」

ちよつと面白かった。

「で、麻里先輩……その、参加型大規模コスプレ喫茶のことで質問があるんですが」

「にゃ〜……なんだい」

麻里先輩は気落ちしたような様子で俺の声に耳を傾けた。

「それ、わざわざ体育館使ってやることなんですか？」

「フフ、耕司キョン。このイベントは体育館を使ってこそ真価を發揮すると、そうは思わないかね？」

メガネは俺と麻里先輩の会話に横から割り込むようにそう答えてきた。

「何でだよ、こんなもん教室でもできんだろ」

「ふむ、しかし……耕司キョン、体育館は広い。しかも、この学園の体育館はよその学園と違って特別広い。そんな広い場所で……大勢でコスプレ、開放的な気分になるだろう？」

「……なるのか」

なったとしてもその開放的な気分とやらとコスプレがどう関係しているんだ。

「なるさ、そして……開放的になった女の子が最終的に行き着く地

点は……胸の高鳴り。『あ、あれ……わ、私、ど、どうしちゃったんだろ……？』」

……ん？あれ？何かおかしくない？あとなんで女子限定なんだ？

「最初の内は気付かない……だが、それもほんのひととき。周りにいる欲望に満ちた男子生徒らが自分のあられもない姿を凝視している……『い、嫌っ……は、恥ずかしいよお……うう、で、でもっでもでも！何なの……？この……胸の高鳴り……』彼女は気付き始めている、己の羞恥の感情と奥に潜むもう一つの顔……そう、それは……『そ、それに……あ、あついよお……身体中が、火照っているみたい……あッ（ノノノ）』そして、ある局部に違和感。それは……そう彼女の愛……」

「コラコラ待て待て！何かものすっごい180度方向に話が脱線しているからな！途中からただの官能小説の序章みたいになってんじやねえか！」

「ムッ……人の話は最後まで聞くものだよ、耕司キユン。せっかくこれから面白くなっていくのに……」

「……ちなみに、そっから先はどうなっていくんだよ」

「体育館で乱交パーティーって最高だよな？な話」

「最低だよっ！お前もう死ねよっ！」

コイツの話を真面目に聞いた俺がバカだった！！ここは麻里さんに……

「ん、ポロリやすいしね」

「アンタもかっ！！お前らは欲求不満かっ！！！！」

「ほら、看板のすみっこにちっちゃい文字で『ポロリもあるヨ』とか書いてけばいっぱい男の客くるし。入場料も取るし、もうクラス

ガツポリしつぱり儲かつちゃうねっ！あちしつてもしかして天才っ？！」

「学園の風紀を取り締まる立場にいるはずの人間が風紀を乱すようなこととしていいのかよっ！しかも入場料までとんのかよっ！アンタはこの学園を風俗か何かにする気が！」

「おあつらえ向きに、このクラスには幼女に、ツンデレに、天然系に、美少年に、クール系の女の子でより取り見取りだしねっ！色々な種類を楽しめるねっ！にやははっ！」

「あんたは地獄に落ちろっ！」  
本当に何トチ狂ったこと言い出すんだこの人は……………どうでもいいけどその中に美少年を入れるのはどうかと思う……………誰の事が言いたくもないけど。

「まあ、嘘だけど。ホントのこと言っちゃうと、ぶっちゃけ適当に決めたことだし」

「ぶっちゃけるなよ……………」  
そういえばこの人……………本来、演劇部とかブラスバンド部が使用するはずの体育館を会長特権（という名のわがまま）を駆使して2日目の午前中まるまる確保したんだよ……………こんな台詞、連中が聞いたらどうなることやら……………地獄絵図、まさに地獄絵図……………考えただけでも恐ろしい（汗）

「なあ、耕司？いいんじゃないかねえか」

今までほとんど口を出さず聞いていたサルは俺にそう言った。

「何でだよ……………」  
「いや、実際もう俺達に残された時間はねえし……………大掛かりなことはできねえじゃん？」

「コスプレ喫茶とやらも充分大掛かりと思うんだが……………」  
「コスプレの衣装も用意しなきゃいけないし、何より喫茶店に必要なものをそろえにやららんしな……………」

「コスプレの衣装は僕が用意するから安心してくれたまへ」  
メガネがそう言った……………むしろお前だと安心できないのだが……………

…それに、皆の意見は聞かなくていいのかよ……

「あちしの意志はクラス全員の意志なのさっ！」

ジコチュー……

「んじゃあ、今日の放課後に体育館集合ねっ！誰が何のコスプレやるか決めるからっ！じゃっ、そゆことで 耕司君とサル君とメガネ君はクラスの皆に伝令よろしくにや〜〜」

そう言うと、麻里先輩はスキップしながら教室を立ち去っていった………いいのか？こんなんで？（汗）

おまけ

流留ちゃん「……と、奴らのクラスは参加型大規模コスプレ喫茶とかワケのわからん出し物をするらしいぞ？美亜君」

美亜「……何でいちいち私にそんな事を報告するんですか副会長……

…キモイですね。ストーリーですか貴方は？」

流留ちゃん「す、ストーリーって……ひどいなあ、美亜君（汗）いや、何、特に奴らのクラスは問題児が多いからね……生徒会の一員として見逃すわけにはいかないだろう？美亜君」

美亜「その生徒会のトップが問題のクラスに加担していますけどね」  
流留ちゃん「う、うぐっ……そ、それを言われると……でも美亜君！流留ちゃんちょっとポンポン！なのですう〜」

美亜「キモツ、死んでください。それと、さっきからとかいつも副会長は私の事を下の名前で呼んでいますが、止めてくれませんか？それ？親しくも無い人に下の名前で呼ばれるなんて気持ち悪いです。それとも、副会長は私が貴方の事を気にしているとでも……？ますますキモイですね。そんな自信過剰な副会長にちよっぴり殺意が湧いてきました、ちよっとザックリやっちゃってもいいですか

？」

流留ちゃん「そ、それはちょっと、り、理不尽じゃないかな？美亜君？（汗）」

美亜「まあ、冗談はそれくらいにしておいて早く仕事を進めましょう副会長……………」  
「冗談は副会長の存在だけで充分ですから」

流留ちゃん「えっ……………」  
「僕、冗談でここに存在しているの？（汗）」  
美亜「副会長は空気のような、居ても居なくても別に支障をきたさない、すつきりとした裏表の無い人ですから」

流留ちゃん「……………」  
「美亜君？僕の事……………」  
「嫌いなのか？ぐっすん（泣）」

美亜「別に……………」  
「敢えて言うなら、『嫌いではない』かと……………」

流留ちゃん「またまたあ……………」  
「このっ！このお……………」  
「美亜君は素直になれないツンデレさんだなあ……………」

美亜「……………」

流留ちゃん「……………」  
「調子乗ってますみません（汗）……………」  
「ははっ、と、所でもしコスプレをやるとしたら美亜君はどんなのがいいかな？」

美亜「特にありませんが。私、アニメや漫画は見ませんし」

流留ちゃん「う……………」  
「露出の多いキャラと言えば……………」  
「ラちゃん、みるちゃん、ユア100式ちゃんetc……………」  
「この中だとどれがいい？美亜君？」

美亜「……………」

流留ちゃん「……………」  
「いや、マジ調子乗ってますいませんでした……………」  
「あはは、じゃ、じゃあ、僕がコスプレやるとしたらどんなキャラクタ―がいいかな？アニメや漫画に拘らず、何でもいいよっ！」

美亜「……………」  
「ガチャ……………」  
「ですかね」

流留ちゃん「それ、コスプレじゃないよねっ？！（汗）」



第93話 『生徒会長、八尾麻里の陰謀（前編）』

放課後の体育館、予想を斜め上に行く展開がそこに待ち受けていた。体育館に行くと、そこにはとてつもない数の生徒が集まっていた……数百人にはいる。てつきり、うちのクラスの連中だけだと思ったが………半端ねえ（汗）

「この衣装に着替えて体育館に入ってくださいね」

体育館の入り口で『生徒会』と書かれた腕章をした女生徒に何やら衣装の入った青のポリ袋を渡された。……生徒会の連中が絡んでいるということはこのイベント……絶対麻里先輩が中心になって絡んでいるな。とりあえず、面倒だがとっと着替えて中に入るか……

「……何だ、このコスプレは」

俺が手にしたポリ袋の中に入っていた衣装……それはちょうど顔の部分だけが円状に空いている緑の全身タイツだった……えっ、ちよつと本当に何これ？すんげえ恥ずかしいんですけど。それにポリ袋の中には衣装と一緒に『指令』と書かれた封筒が入っていた。その封筒の中身の内容は『会話する時は語尾に『クルリンパ』をつけなさい byかいちよー』だった。ふざけんな、誰が従うか。

「ギャハハハハハ！！！！！！お前、何それっ！？チョーカツコわりの姿だなっ！オイッ！ばいばいきーん！」

指を差しながら俺のコスプレを見てげらげら笑うサル。

「うるせえ、お前なんかバイキ マンじゃねえか」

サルの姿は黒の全身タイツに頭にはバ キンマン特有のオプションがついていた（触覚(?)のアレな)。つまりは俺のコスプレとキ

ヤラは違うが衣装のタイプは同じだった。だから、コイツに俺の姿を笑われるのはめっさムカつくんだが。

「バツカ、お前なんかチンルじゃん。ただのおっさんじゃんっ！妖精に憧れるただの中年じゃん！ばいばいきーん！」

「うるせえ！バイキン！お前はクラスのバイキンみたいな存在なんだよっ！お前なんかバイで菌なんだよ！バイ菌！あつ、俺今うまいこと言った」

「なにい！お前何かただの中年のくせにメルヘンに走ってんじゃねえよっ！現実をみるっ！現実を！ばいばいきーん！」

「お前もその『ばいばいきーん！』ってのは何だ！！いい年してそんな幼稚なこと言っつて恥ずかしくないのかっ！」

「こいつうゝ、ばいばいきーん！」

「しにやがれえゝ、クルリンパっ！」

揉み合う俺とサル……そんな中、俺の背中をチョンチョンと指で誰かが突いてきた。振り向くとそこにいたのは……

「オニイチャン、ケンカハダメ、ダメダヨ」

「……」

「ケンカハダメダヨ、ジャナイト、ミクナイチャウ」

……青緑色のツインテール、そしてこの機械みたいな声……

「……上野じゃん。それ、初音クのコス？なんでそんな機械みたいな声なんだ？」

「知らないよゝゝここに来たら、いつの間にかこんな格好に……」

「……っ、ううゝゝゝ」

夏美は目に涙を溜め頬を染めて、その場でモジモジしていた。

「おい、お前素に戻っているぞ」

「あッ、アウ、アウ、ト、トニカク、ケンカハダメダヨオニイチャン」

……律儀な奴。夏美はそのまま人混みに消えていった。



寄ってくる……スネ毛が、スネ毛な化物がこちらに迫ってくるよー

……

「エへへ、耕司さん。僕のキュアホワイト似合っていますか？」

頬をほんのり染め、その場でクルクルと一回転するジヨウイチロウ君……なんだろう、お兄さん何だかすごく悲しくなってきたよ。

君がオスという運命に。

「に、似合っているんじゃないかと……（汗）」

「エへ、そうですね？何なら触ってもいいですよ」

……どこを？ねえ、ジヨウイチロウくん？どこを触ればいいのかな？君は一体俺に何を望んでるのかな？（汗）

「いやあ……やっぱりコスプレはいいね、耕司君。この汚い世の中から解放された気分になるよ」

原田のおっさんは渋々とそんな事を語っていた。……お前は色んな物を解放しすぎだよ。スネ毛とか胸毛とかその他諸々。

「どうだい、二人とも楽しんでるかい？」

今度は後ろからメガネの声がしたので振り向くと……ああ、これは俺でも知ってるドラ もんだ。しかしながら、よく見ると奴の姿はブリーフ一丁で全身の殆どは青と白のペンキで塗られており、首には鈴付きの赤色の首輪を装着し、鼻は赤のマジック、六本のヒゲは黒のマジックで書かれている。……これは果たしてコスプレといえるのだろうか……分かんが、一つだけ言える事。それは、奴の姿がリアルにキモイと言う事だ。

「……英男、それはもしかしてもしかなくてもド えもんのコスプレか？」

サルがメガネに問う。



は普段と違う一面を魅せるアリスに困惑していた。……ツンデレっ  
ているんだね、現実リアルにも……

「だ、黙ってないで何とか言いなさいよお……（ノノノ）」  
「うっ……」

胸を腕で隠し俺を下から覗き込むような体勢でモジモジするアリス  
……ああ、俺、今まで生きてて良かったデス……じゃなくて何か言  
わねえと……こ、ここは無難に……

「あ、ああ……可愛……」

「特に羞恥の表情に加え、貧乳つてところがポイント高いよなっ！  
耕司っ！貧乳ツンデレサイコー……！！！！（笑）」

サルは俺が無難な台詞をアリスにメガネがでかい声でそんなことを  
言う。……余計な単語を……

「……ウフフ」

「……へへっ、貧乳サイコー」  
ガシッ

アリスは無言でサルのバイキンマンのコスプレの触覚を（？）掴み、  
そのままどこかへ引きずっていく……

「あっ、痛っ、ちよっ、アリスちゃん、そんなに乱暴にしないでく  
れよお……へへっ、でもそんな貧乳ツンデレっ子にランボーされる  
俺、サイコー、ばいばいきーん」

サルはワケの分からん事を言いながらそのままアリスさんに引きず  
られどこかへ連れて行かれた……あいつ、終始笑顔だったな……気  
の毒に。生きて帰って来いよ。

「あっ、耕司君いたいた お〜い！こっちに来てよー」

……この声は宮子。俺は不安な面持ちで宮子の声のした方向へ移動

する。

「あははは〜何、その耕司君のカッコー！ちよーウケルー（笑）」

「にやはははーリーチン ルじゃん、それっ！」

「あつうう……………（ノノノ）」

「……………」

宮子に呼ばれてくると、そこには不思議なメンバーが集結していた。俺に指を指しながら、爆笑する宮子と麻美先生。

頬を赤く染め、俯いている百合ちゃん、普段と変わらぬ沈黙を保つミント。

「あたしはセーラー ーンの月野うさぎのコスしてるんだあ〜〜えへへ」

……………そういえば、そのコスプレ前にもしていたなお前。

「『月に代わって、お仕置きよ！』」

ピシッ！

宮子の持つ鞭が俺の背中を打つ。って、何故鞭っ!?

「いてえ!!!てめえ!このアマっ!何しやがるっ!!!」

「いやあーん、犯されるうー」

「『女の敵、女の敵ー!!!』」

宮子&麻美先生コンビが大声で俺に非難を浴びせる……………こ、こいつら……………い、いかん。ここで俺が怒ればコイツラの思う壺……………冷静に、冷静に対処せねば……………俺はコーヒーの違いが分かるアダルトなんだ。アダルティでジェントルメンなんだ。

「……………こ、こほんっ……………で？麻美先生の……………その怪しげなコスプレは何ですか？」

麻美先生の格好は何故か黒のボンテージ姿に右手に鞭、左手に蝋燭、両手両足に鎖付の手錠を装備している……………どこからどう見てもSMの女王にしか見えないのだが……………こんなファッキンの姿のキャラいたっけ?ていうか教師がこんな格好していいのか?さらに何でコノヒトがこんなところにいるんだ?





がいいらしいのです……うう、耕司さん、あんまりマジマジと見  
ないで下さい……恥ずかしいです……（ノノノ）

百合ちゃんは恥ずかしそうに顔を真っ赤に染め、瞳に涙を溜めなが  
らそんな事を言う。……いや、何も書いてあったからってそこまで  
実践しなくても……（汗）し、しかし……あの華麗なスカートに下  
は……な、何も身に着けていない百合ちゃんのし、肢体が……ハア  
ハア、って何考えてんだ俺はっ！（汗）

「そ、そうなの。と、とここで……ミントは何のコスプレしてんの  
？（汗）」

俺は誤魔化すため、ミントに別の話を振った。

「……知らない」

「……ミンちゃんは長 さんらしいです……うう」

ミントの代わりに百合ちゃんがそう答えた。何故か居たたまれない  
気持ちになった俺は百合ちゃんとミントに軽く挨拶をしてその場を  
去った。それにしても……ノパンか。麻里先輩……グツジョブ。

……それから数十分後。

体育館の電灯は消え、前のステージに明りが灯った。今まで、ガヤ  
ガヤワイワイ騒いでいた連中は突然の出来事に会話を止め、ステー  
ジに目を向けた。そしていきなりメタル系の曲が流れ始めた。うる  
せえ……何で音の響く体育館でそんな激しい曲流してんの？麻里先  
輩の悪意が感じられる……あのチビ、今度会ったら絶対しばらく。そ  
んな事を考えていると数十分後、メタル系のオンパレードが終わっ  
た。な、長かった……そして、舞台の上について……

「やつほー 皆、注目ー」

麻里先輩の陽気な声が響いた。カオスな格好をした麻里先輩が舞台

に立っていた……

第93話『生徒会長、八尾麻里の陰謀（前編）』（後書き）

チクル（ゼダの伝説）……耕司  
バイキン（アンパン）……サル（慎也）  
初ミク（VOCALOID2）……ツインテール幼女（夏美）  
キュアホワイト（ふたりはプリキュア）……ジョウイチロウクン  
キュアブラック（ふたりはリキュア）……原田のオッサン  
ヒデえもん（？）……メガネ（英男様）  
かがみん（らきすた）……貧乳ツンデレっ子（アリス）  
月野うさぎ（セーラー）……天然系燃焼系（宮子）  
SMの女王（？）……麻美先生  
宮咲（咲 - Sakii）……幼女その2（百合）  
長有希（涼宮ハヒの憂鬱）……幼女その3（ミント）  
????……幼女その4（麻里先輩）

……まだ、増えるかもしれません。

番外編その29 『私の居場所』（前書き）

高宮学園生徒会会計、渡辺美亜の視点です。

## 番外編その29 『私の居場所』

『生徒会』——私にとって無縁のものだと、あの頃はそう思っていた。

半年前の昼休み、私はいつものようにある場所に向かっていた。第二図書室、そこは多数の学園の生徒が頻繁に用いる第一図書室の隣に位置し、普段はほとんど古書の物置場所となっていて、ひっそりとした狭い部屋です。でも私はそんなちょっとした静かで、こじんまりとしたその空間が大好きでした。他人の目から離れ、一人で落ち着いて読書できるその部屋はまるで自分の部屋のようにでした。いつものように私は職員室から第二図書室の鍵を借りてその部屋に向かいました。その部屋の前まで行き、ドアに手を掛けると……

「……あれ？ ドア……開いてます……おかしいですね」

誰かが鍵を掛け忘れたのでしょうか？ そんな事を思いながら私は再びドアに手をやり、部屋の中に入りました……最初に私の視界に飛び込んできたものは。

「むしゃもしゃもしゃもしゃ……にゃにゃ？ お客しゃん？ ポリポリ……」

私がいつも座って本を読んでいる場所、そこに小学生みたいな容姿の女子がポテチやらポツ——やらう——い棒等といったジャンクフードを頬張りながら、だるそうな表情で寝そべっていました。制服を着ているのでこの学園の生徒であるということは一発で分かりましたが……

「会長っ！ そんなところで寝そべってないでこっちの書類整理の仕事を手伝って下さいよ……全く、何でこんな人が生徒会長に選ばれたのか未だに理解できんっ……クソッ！ ブツブツ」

どうやらそこで寝そべっている幼女は新しい生徒会長らしい。部屋の奥、1台のデスクトップのパソコンが設置されていました。そのパソコンのディスプレイの前でメガネをかけたちよつとBL系の同



さらに続け様に美男子メガネは顔をタコのように真つ赤にし、幼女に罵声を浴びせました。どうやらこの人は副会長らしいですね。私にとつてはどうでもいいことですが。

「にやう〜……あー、じゃりこ切れた。流留ちゃん買ってきて、サラダ味ねー……むしゃむしゃ」

しかし、当の会長は中身が無くなったじゃがこを確認した後、また他の菓子に手を付け始めました。つまりは全然聞いていなかったということですよ。

「き、貴様ああああ………」

案の定、まるつきりスルーされた副会長は椅子から立ち上がり、拳をブルブルさせ、今にも目の前の会長を殴りかかろうとした様子。

……でも、そんなことより私は彼に聞きたい事があります。

「あの、憤慨しているところ申し訳ないのですが」

「ふっーはあーふううふう………ん？何だね？ラブレターかね？それなら、僕の下駄箱に入れておいてくれたまへ。それがラブコメの王道ってやつだろう？」

「貴方は何をワケの分からない事を言ってるんですか。私が聞いたことはここ……この部屋のそのこの棚にあった古書はどこに行ったのか、ということですよ」

私のお気に入りのこの部屋をワケのわからない生徒会に占拠されているということだけでも正直むかつ腹が立つのですが、ここは冷静に、穏便に、この人達にはこの部屋から退場して頂きましょう。とりあえず、消えた古書がどこに行ったのか？あの古書も私が何遍もここで読み漁った古書ですから……妙な愛着があります。わが子とでも言っていていいでしょうか……私が唯一、拠り所に使っていた場所の一部なのでありますから。

「……古書？会長、この場所に古書などありましたか？」

「えー？ナニナニ？コシヨウ？チャーハンにかけるとおいしいよねアレー………あっ、何だかあちしお腹すいてきたよ」

「貴方には聞いていません、少し黙っていてください」

私はこの独特の軽い空気にイライラして、目の前の少女をキツと睨みました。真剣な話をしているのに、どうでもいい話で水を差されると気分が悪いです。

「ひっ、クーデレちゃんに睨まれちゃったよお〜〜助けてえロリコン〜〜（泣）」

少女は泣きながら美男子メガネの傍へ駆け寄って行く……お生憎様、私はクールがあってもデレはありませんと心の中で呟いておく。

「誰がロリコンだっ！！まあ、100%は否めないがね」

そこは否めよと思いましたが、そんな事より……今は彼から古書の在り処を聞くことが先決です。

「……本当に知りませんか？その棚にあつた古い本です？」

「古い本……ああ、あの古臭い錆びた本の事かね？パラパラと捲つたが、あんな物誰も読まないと思つて、全部ゴミに出したよ、ふむそのお陰でこんな広い空間ばべぶっ！？」

「……っ」  
「パリーン！」

私はすぐさま、美男子メガネの顔面にストレートを決めました。

「わわっ、流留ちゃんのメガネが粉々につ！？ああー！？メガネがなくなつたらただの胡散臭い小姑になつちゃうよっ！？」

慌てた様子の少女を尻目に私はそのまま、第二図書室から出て行きました……

もう、私には居場所が無い。

古書をゴミ扱いされ、あの男に捨てられた事は腸が煮えくり返る気持ちでした。あの男に面向かって会つたらまた手が出そうなくらい。でも、本当は古書自体が問題ではないのです。『居場所』、私が求



めていたものがまた失った事、それが辛かったのです。

「……はあ、次はどこへ行きましょうか」

今私は窓際で雲ひとつ無い空を眺めながら一人で今後の活動について考えています。否、活動とは大それたものです。趣味……何か自分が興味を持てる事について考えます。何かあるでしょう、さつきまでは古書を読み漁っていました。さて、今度は趣向を変えて牛乳瓶のキャップ集めをやってみましょうか……否、否、特殊過ぎますね。一ヶ月毎に爪の長さを測ってみる、ザ 爪コレクション。……キモイですね、やめましょう……さて、なら……そんなくならない事を考えていると廊下の向こうから男子の声が聞こえてきました。

「耕司キユン、これならどうだ？ 『おっぱい大作戦』……これは僕のお勧めだよ」

「何を作戦するんだよ、いらねえっての、いや欲しいけど。だからって学校でんなもん出してんじえねえ、ハゲ男」

アホ毛の金髪メガネの男子が新緑のストレートの男子……世はあれをイケメンというのでしょうか、とにかくそのイケメンにDVDを渡していましたが、イケメンは微妙にそれを拒んでいました。『おっぱい大作戦』……何を作戦するのでしょうか。

「何を恥ずかしがっているんだい、チエリーボーイ。堂々としたまへ、そして堂々とコレを受け取るんだ、勇者よ……」

そして、アホ毛の金髪メガネの男子はDVDをイケメン男子の頬にグイグイ押し付けました……

「うおっ、やめろてめえコラッ！？ てか、臭っ！ イカ臭っ！？ 何だこのDVD！？ 何か変なスメルするんだけどっ！？」

「……ああ、実はね。それ神レベルの作品でね、僕何回もエレクトボンバーしちゃったんだ。だから終わった後も興奮が冷めなくてね……それでそのDVDにもエレクトボンバーあああああああ……しちゃったんです、

ごめんなさい」

「そおいつ……いつ……」

ヴァキツ!!!

「へあつ!!!」

目にも見えぬ手刀、それがイケメンの手によってアホ毛の金髪メガネの脳天に直撃、そのまま床に倒れました。……くだらない、何てくだらない。けれど、そのくだらなさが今の私にとっては羨ましかった。今の私はそれを感じることもできない。だって、『居場所』が無いから。私も、あの会話の中に入りたかった。自分が居場所と思える場所に……それがどこか分からないけれど。

「……あつ（汗）」

私がつつと二人を眺めていることに気付いたイケメンの方はどこか気まずそうに私の顔を見ながらその場を去っていった。……そんなに気にする事ないでしょうに。女の子だってそういうのに多少は興味あると思いますよ。私は特に興味ありませんが。

「……ふう」

どうやらここは私の『居場所』じゃないようです。

心地よい風が吹いてくる、そんな場所に私はいました。

屋上、ここはいいです。頭を冷やしてくれる。何も考えずにいられる場所、『居場所』には最適です。

ここからなら綺麗な町並みも眺める事ができますし、何より静かです。混沌とは無縁の純粹な感じ。

「……………」

でも、逆に言えばそれだけ。それ以上でもそれ以下でもない。ただ、それだけ。私の心は満たしてくれない。爽快過ぎるからでしょうか……逆のベクトルに私に孤独感を与えます。ここは世界の果て、私だけの。でも、そんな場所には私しかない、一人、一人だけ……

……この世界の住民は私一人。外部からの干渉も内部からの誕生も何も無い。あるのは私だけ、私という一個の固体だけ。

「それは呼吸をしているだけで生きていないのと同じなのでしょうか……」

違う、私が求めていたものはこれではない。孤独は嫌です、『居場所』が欲しいです。でも、答えが見つからない、見つけれない……どうすればいいのでしょうか……

「……はあ」

私は他人には到底理解しがたいであろう悩みを自分の心の中で唱えながら、また一步、一步ずつ進み、別の場所へ行こうとしました……が。

ギイイイ……

「はっふうー、あ……かったるい……」

突然、屋上の鉄の扉が開きました。青のロングヘアの大人の女性がタバコを口にくわえながらその扉から屋上へ入ってきました。私は突然の事で少々驚きましたが、平然を保ち、黙ってその女性を見ていました。

「……げっ（汗）」

私の姿を認識した女性はあからさまに嫌そうな顔をして私を見ました。……むっ、人の顔を見ていきなり嫌そうな顔をするなんて……失礼な人ですね。ですが、それも当然。私はこの人を知っている、英語の教師……確か、八尾麻美先生だったと思います。担任ではないのによく覚えているな、ですか？違います、正確には覚えられていのです。何故か分かりませんが、何故かよく私に絡んできます。不思議です。

「……美亜うち！ごめんっ！校長ハゲには黙っててくれないっ！？一生のお願いっ！！！」

八尾先生は私の肩を掴み、必死な形相で私に許し請いました……いきなりの第一声がそれですか先生。

「それはいいですが……ダメですよ、先生。タバコのやりすぎは肺

を痛めます」

タバコは依存性もあり、一度やり始めると止まりが効かないとはよく言います。まさにその通りで、私のお父さんも酒、タバコに溺れていました……何でもやり過ぎはいけないということですね。

「ラッキー 美亜ちゃん愛してるう」

先生は子供ような笑顔を私に向けてきました。ですが、そうは問屋が卸しません。ペナルティを執行します。

「ですが、これはとりあえず没収です」

私は先生のタバコを取り上げ、何故か偶々持っていた携帯灰皿にそのタバコを処分しました。

「あ、あああああああー！ー！ー！ー！！！！な、何てことすんのよう！？返しなさいよう！（泣）」

「ペナルティです。私が先生の今の行為を許したらまた味を締めて繰り返すでしょう？」

「うっ、うっうっうっうっ………美亜っちの英語の成績、1にしてみるからっ！！ふんっ！！」

「子供ですか貴方は。私情で生徒の成績を上げ下げするとか教師としてどうなんですか」

「うっ、うっうっ………」

先生は涙目で私を睨んできました。そんな事しても無駄ですよ先生。何も出ませんから。

「……先生、先生にとってタバコは『居場所』ですか？」

私と先生は屋上の鉄柵に背をもたれながらのほほんとしていましたが、ふと私はそんな事を先生に聞きました。

「……ん？タバコが居場所とな？妙な事を聞くねえ、美亜ちゃん」

先生は新しいタバコを吹かしながらそんな事を言いました。……もう、言うだけ無駄です。私はタバコの事にはつつこまないことにしました。

「あの、その美亜ちゃんというのはやめて欲しいのですが……」

「そうなの？じゃあ……『美亜ちゃん』はどう？」

「殺しますよ」

「んじゃあ、『美亜はおちん』が欲しいのですう」はどう？」

「殺しますよ」

「同じリアクションしか取れない美亜ちゃんはノリが悪いの……」

先生はシヨボーンとした様子で落ち込む。今、本気でこの人に殺意が沸きました。

「それより、どうなんです？先生」

「……んー、タバコが居場所とな……美亜ちゃんらしい考えだねえ。どう意味が分からないけど、でもタバコを居場所と考えた事はないよ」

「……そうですか」

タバコ「居場所かタバコ 居場所か。」

不思議に思われるのも無理ないだろう。でも私は先生に聞いていた。答えが知りたかったわけではない、居場所が欲しかった……何でも良かった。

「……まあ、せいぜい一種のストレスの解消ってとこかな。美亜ちゃんには分からないだろうけど、教師っていう職業もストレスの毎日なんだよね」

「……それは仕事の疲れや親御さんの対応ですか」

「ふうー……まっ、そういうのもあるけどねえ。そう単純なもんでもないのよ、これが。ああー……ムカつくっ！あのハゲッ！ハゲハゲハゲハゲハゲハゲハゲハゲハゲハゲハゲハゲハゲハゲハゲハゲハゲハゲッ！！！！」

すごい単純じゃないですか、ストレスの原因は大部分は校長ハゲです、先生。

「……………で？何で美亜ちゃんはそんな事を私に聞いてきたの？」  
タバコをさらに吹かしながら不思議そうに先生は私に聞いてきました。

「……………居場所が無いんです、私には」

「……………もしかして、虐められてんの？」

先生は『おいおい、マジで勘弁してくれよ……………（汗）』みたいな顔して私に聞いてきました。それが、教師の取る態度ですか。

「違います、別に虐められているわけではありません」

「なーんだっ、ツマンネ」

先生は地面にタバコを捨て、足でグリグリ火を消しました。少しイラツとききましたがここは我慢です。でないと話が進みません。

「……………」  
でも、私は言えなかった……………他人に『アレ』を知られるのが怖かった……………

「……………何だか余程の事情があるみたいだから無理に聞かないけどね……………私ができる事は、そうね。ちよっち待ってな」

先生は一枚のメモ用紙にペンで何やら筆記し始め……………そして、先生は私にそのメモ用紙を渡しました。

「……………『第二図書室』」

「そっ、そこ行ってみな」

そう言うと先生は私に背を向け、そのまま屋上から姿を消した。

「……………どうすればいいんでしょう」

私はどうしていいか分からずそのまま呆然と十数分その場で。気付いた時には空は夕刻を示す茜色に変わっていた……………

……………数日後。

私はまたあの忌々しい記憶の残る第二図書室の前まで来ていた。本当は来たくも無かったけれど……何故か私の足は自然とその場所に赴いていた。

「……無理です、帰りましょう……」

やっぱり……無理です。あの人達とは根本的に私とは何かが違います。特にあのメガネの人はウザイです。古書を捨てた張本人ですから。相容れない存在です。そして私は第二図書室から離れようと歩き出しましたが……

クイツ、クイ……

私の制服の裾を引っ張る感覚。振り向くとそこにいたのは……

「……………」

私を上目使いで見つめる子供……もとい生徒会長がいた。うっ……不覚にも少し可愛いと思ってしまう。何だか負けた気分だ。相容れない存在のはずなのに……ああ、萌えてしまった。

「……生徒会、入る？」

でも、そのロリっ子会長は私にいきなりそんな事を聞いてきた……あまりの脈絡の無さに私は呆然としてしまいました……

「……………」

「ワイイ！生徒会に仲っ間入り……」

私の沈黙を肯定と取ったのか、会長は笑顔で私の手を引きました……  
……呆然としていた私は為す術も無くそのまま第二図書室に連れ込まれました。

……今でも、私は『生徒会』は嫌いです。特に副会長コウジがウザ過ぎます。

……けれど、それでもどこかあの会長の笑顔が今でも心に残ってい

て忘れられなくて。

……私は会長の傍で情性でこの仕事を続けています。

渡辺美亜、十七歳——今だ居場所見つけられず。



番外編その30 『いぢめるほど仲が良い?』

上質のほっぺを弄くり回したいっ！欲望に忠実な私は上質のほっぺを求めてすぐさま行動に移した。

朝の教室に入ると、ツインテール一匹発見っ！そして、教室には誰も居ないっ！チャンス！私に気付いたツインテール幼女は一瞬ギョツとしたが、時、既に遅し。私は目的の幼女に勢いよく飛びつき、後ろから幼女を羽交い絞めにした。わっふー！準備完了 幼女はバタバタ足や手を動かして必死に逃れようとするが、一度掴んだ獲物は逃がさないもんねー

「えへへへへ〜」 おっはよー 夏っち ほれ、ほれ、ほれえぶにぶに。」

私は両手を駆使して、夏っちの両頬を余すところなく万遍なく、もふもふと解していく……ほわわ〜、ああ、何て幸せなんだろう。夏っちのほっぺはヒーリング効果抜群なのだっ！

「う、うう……や、やめてよお、宮っちい……」  
ぶにぶに。

夏っちのほっぺは白くてほわほわしてて綺麗。でも、それは夏っちがふくよかだっって意味じゃなくて、触り心地いいってことね。（それ言ったら前、夏っちに『ボク、太ってないもん！（泣）』とか言われて怒られたからねー）

「やめなーい、よー」  
ぶにぶに。

でも、夏っちは私のソレを嫌がる。すごく嫌がる、すごぶる嫌がる、たいへん嫌がる。でも、そんな嫌がる夏っちの表情を見て私はまた癒されるのだ……あうー、かぁーいいぞおー！！夏っちいいいいいいいいいい……

「う、うう……宮っち、いじわるだよ……」

「いいじゃん いいじゃん 嫌がる顔する夏つち、かあいいし」  
「うう……理不尽だよ、横暴だよ……」

顔を真つ赤に染め、瞳に涙を浮かべる夏つち……そんな表情を浮かべる夏つちに心を痛めた私は仕方なく適度に動かしていた両手を止め……ませーんっ！！そんな夏つちの姿にますます興奮した私はさらに両手をワキワキと動かしていく……うーん、これだけじゃ何だか物足りない。快感に味を覚えた私はさらに夏つちの味を味わおうと、今度は両手をほっぺから離し、夏つちの小ぶりのちよつと残念な感じの胸に持っていく。

「ちよ、ちよつと……宮つち！そこはダメえ……あう！？」  
ぺったんぺったん

私は問答無用で両手をワキワキ動かした。むふー、やっぱり夏つちのおっぱいは物足りんですな……でも、そんな控えめな感じがまた素敵 幼女は日本の宝物だよ……むっふん。

「えへへへー……夏つちのおっぱいは小ぶりだねえー……」

「うわああああー……ん！！！！！！」  
とうとう、本気で泣き出す夏つち。ありやりや……やりすぎつちつたかな？でも、でもでも……私は夏つちが大好きなんだよ？愛しているんだよ？あ、言っとくけど百合とかソツチ系じゃないからね？あくまでも、友達として愛しているのだ！友情と愛情は紙一重だよね？そうっ！これは愛情表現なのだっ！だから、私は夏つちのほっぺをもふもふしたり、おっぱいをまふまふしたりしてもいいのだった……とは言え、ほんのちよっぴり罪悪感を覚えた私は夏つちを母親のように包み込むように抱きしめた。

「ごめんね、夏つち」  
私が優しく抱きしめてあげると夏つちはスンスンと泣き止み、私の身体に抱きついてきた。ほふほふ、役得役得……でも、私は懲りないだろう。だって、夏つち大好きだし

「……………お前らは何をやっているんだ(汗)」

「うおおー！？ブツブツブツブツ！！！！！！！何だこの女の魅惑の麗うつくしき楽園たのしみは！？俺、俺も！俺たちも是非参加を！そして我は3Pを所望したのでありますですつ！？ハアハア！！！！(ノノノノ)」

「そしてサル、お前は落ち着けな」

教室のドアが開いたかと思うと耕司君とサル君が教室入ってきた。

耕司君は呆れ顔で、サル君は何故か興奮し、鼻血を出していた。

「……………あつ、きゃっ！お、お兄ちゃん！？(ノノノノ)」

耕司君に気付いた夏つちは慌てて私から離れた。うーん、この一度夏つちを掴んだ手はどこにやればいいのだ……………宮つちはちよっぴりシヨックだよ、クスン。

「な、何だよ……………そんなに慌てて。何だ？お前ら何か怪しい活動でもしていたのか？(汗)」

「う、うううん！ち、違うよっ！お兄ちゃん！ボク、そんなことしてな……………」

「うん 夏つちにえっちい事してたよ」

「宮つちいいいいいいいいいい……………！！？(泣)」

夏つちは私がそう言うと、また涙目になって私に掴みかかり「嘘だよねっ！？ねっ！？そんな事してないよねボク達！？(泣)」とか、耕司君が私達を少し引いた目で見ると「うわん！うわん！酷い酷いヒドイよ、宮つちい！(泣)」とか言い出す。そんな必死で否定されるのと宮つちホントにシヨックだよおー……………まー、でも夏つちの気持ちは分かるけどね。でも、そんなちよっぴり焦っている夏つちモエモエ……………、むっふん。

ガラッ……………

「ニンニン、ふむ……………確かに。僕は見たよ……………夏美さんと春さんが





「SMプレイっ!?何で!?いつの間になんか関係になつたのボクと宮っち!?ていうか、おかしいよっ!宮っち!納得しないでよっ!ボク、変態さんじゃないよっ!?!」

「そして、メガネ。お前は相変わらず回復能力が尋常じゃないな」

「お兄ちゃんもっ!そんなどうでもいいツッコミより、ボクの問題をさらっと流す流れを作らないでよっ!?!」

「すまない……実は単に春たんが夏美たんのおっぱいをペロペロ舐め舐めと……」

「してないよっ!?!さっきと変わらないじゃない!むしろさっきより直球になつた分、もっと酷くなつたよそれ!」

「おかげさまでオカズになりました、ありがとうございます」キリッ  
「お前は今すぐ天に召されるよ」

「……何なんだ、こんな所に呼び出して」

放課後、私は耕司君を屋上に呼び出した。うーん、ここからの景色は綺麗だなー

「えへへっ」

「……何なんだニヤニヤして。あれか?何かまた悪魔的なイタズラを思いついたのか?」

そんなんじゃないよ耕司君。

「えへへー」

私は何故か耕司君を前にして笑っていた。ううん、今日は違う。何か違うんだよ、イタズラとか……そんな事がしたいわけじゃなくて……うんっ、やっぱりあたしにシリアスは似合わないなー

「……気味悪いな。何だよ、早く言えよ」

耕司君は何か警戒した様子で私を見る。そんな顔しちゃって……い

ぢめたくなつちやうじゃない。

「うーん、もうちょっと近くに來て」

「……………」

そして、耕司君はゆっくり私の方に近寄ってくる。

「えーい」

パチーン

私は耕司君の左頬に思いつきりビンタをかました。

「いてえ！い、いきなり何しやがるっ!？」

「えへへー、おしおき」

耕司君は気付いてないのかも知れないけれど。ほんの少し、ほんの少しだけあの子に歩み寄って欲しいんだ。

それは私の口からは直接言えないけどね。だから、打ったの。言葉では伝えられないけれど、コレならいいよね？夏うち？

「あー、今日も私は良い事したなー」

「何がだっ！お前、男だったら確実に殴って殴ってるところだぞ!？」

「耕司君は心が狭いよー」

「こ、このアマ……………」

私の大好きなあの子の気持ちがいつか届くといいなあ……………うーん、明日はどんなイタズラをしよっかなー

宮子春美、十七歳ーいぢめるほど仲が良い？

番外編その31『離れていく心』

「えへへへー！ミンちゃん！ミンちゃん！コレどうかなあ？」  
百合は鏡の前でくるっと一回転して私に意見を求めてきた。百合は薄青色のキャミソール姿だった。全体的にこじんまりとした体格の百合にはちょうどいい大きさで、可愛い格好だった。

「百合……キャミは下着、服じゃないよ……」

「そ、それくらい分かってますっ！ミンちゃんは失礼な子ですねっ！（ノノノ）」

「どうだか……キャミ選ぶだけで30分も時間掛けてたし……キャミ選ぶのに必死で肝心の服の事を忘れてたんじゃないかなあ……」

「じゃあ……服、何着て行くかも決めているの？」

「……もっ、もちろんですう！ま、待っててください！いいの選んできますからっ！」

……百合、墓穴掘ってるよ。選んでくるって言うてる時点で服のこと考えていなかったの丸出し。何故か慌てた表情で百合は洋服タンスを漁り始めた。……本当に何も考えていなかったんだね百合。

「ううー、こっちのワンピースも捨てがたいですし……でもお、ちよっとラフすぎるかなあ……？こっちのジーパンは……うう、論外です。男の子っぽいですう……」

百合が必死で着て行く服を選んでいる理由、それは今日商店街の方へ買い物に行くから。でも、百合がこんなに張り切っている大きな理由は別にあって、それは耕司と一緒に来てくれるからだ。新しくデパートが出来たので百合が勇気を振り絞って耕司を誘った。その結果、耕司は快く了解してくれて……それで、何故か私と夏美ちゃんまで着いていく事に……私の心境としては、耕司と百合の二人で買い物に行ってくれた方が嬉しかったんだけど……でも、仕方ないよね。夏美ちゃんも百合と同じような感情を耕司に対して抱いているから。





意味無いと思う。耕司は優しいけれど、こつこつ細かな気配りが足りないと思う……

「うわぁーおつきいーね！お兄ちゃん！」

夏美ちゃんはデパートに入ると大きな声で叫ぶ。……子供みたいだ、ある意味、百合に似ているかも。夏美ちゃんの服装は白のワンピースに麦藁帽という、田舎の美少女を思わせるような服装だった。そして、肝心の百合の服装は……

「……あう、あう（／＼／）」

あれから散々、悩みに悩んでようやく選び出した百合の服は赤のパーカーに黒のスカートという結構、女の子にしては地味な感じの服装だった。でも、百合は何を着てもそれなりに似合うと思う……親友だから、鼻負しているとかそんなんじゃないよ。

「うおおおお……この一階のフロアの広さ半端ねえなあ。それが五階かよ、でっけえなあ」

それに対して、耕司の今日の服装は前に『永遠の童貞』、後ろに『5000ペリカ』と白地でプリントされた黒のTシャツに、下はジーパンという服のセンスを疑いたくなる格好だった。

「じゃあ、どこ行く？」

耕司は私達に聞いてきた。そういうのは普通、引つ張っていくのが男の子だと思うけれど……耕司は多分、素で聞いていると思うし……仕方ないのかな。

「あ……あのっ、もうそろそろお昼ですし……お昼ごはん食べませんか？（／＼／）」

百合は恥ずかしいのか、モジモジしながらそう言った。偉い偉い……もう少し、恥ずかしがるのを抑えると完璧だけど自分からそうい

うことを言うのは耕司にも百合にもプラスになると思うな。

「よっし、そうだな。じゃあ昼飯にするか」

「でも、お兄ちゃん……どこでお昼ごはん食べるの？このデパートの案内には書いてないよ？」

デパートの中は雑貨屋、レディース、メンズ、子供物の服、靴屋、時計屋、装飾屋等様々な店が入っていることは案内に書いてあったが、肝心の食事コーナーは触れられていなかった。

「んー……そうだな、あそこにいるサービスカウンターの綺麗で美人なお姉さんに聞いてくるよ」

そう言つと、耕司はそのままサービスカウンターに小走りで向かった。

「……むっ」

「……うっ」

残された百合と夏美ちゃんは耕司をジッと睨みつけていた。……嫉妬、そんな色を帯びた目で。あの程度で嫉妬される耕司は幸せ者なのか不幸なのか分からない。

「すいませーん、この辺で食事コーナーとかありませんか？」

「ハイ このデパートの五階に少しですが食事コーナーをご用意しております」

「ありがとうございます」

「いえいえ……私達、従業員はお客様に気持ち良くなって帰ってもらうことが目的……セヤアアア！」

パチーン

「うがぁ!？」

耕司はサービスカウンターのお姉さんに何故か、突然思いっきり頬を打たれていた。

「幼女三匹に囲まれてハーレムうっはうはーか？調子乗ってんじやねえぞ この……ブタ野郎が」

そして、耕司はそのまま私達の元へとぼとぼと帰って来た。心なしかその姿は元気が無いように思える。

「…………え、俺何かした？」

…………それは百合と夏美ちゃんの嫉妬という名の怨念だと思うの。

私は人の事は言えないけど、百合は引つ込み思案だと思う。

例えば、そう。今、私達はデパートの五階で食事している。百合はエビドリヤ、私はハンバーグセット、夏美ちゃんは何故かチョコパフェ、耕司はナポリタンを食べている。いや、料理のことはどうでもいいけれど。

「あつ、お兄ちゃん。唇の横、ついてるよ」

耕司の口の辺りにナポリタンのあとがついていた。それにいち早く気付いた夏美ちゃんがそれを耕司に伝えた。

「ん…あ、ああ…サンキュー」

耕司少し慌ててティッシュで拭こうとする…………けど。

「あ、お兄ちゃん待って」

夏美ちゃんは耕司の口元に自分が用意したティッシュを持っていく。

「お、おい…………」

フキフキ…………

漫画や小説やアニメでよく見るけれどこれがあの『口元フキフキ』。ご飯粒を取ってソレを食べるっていう展開の方がラブコメ展開に多そうだけど。けれどお生憎様、耕司はナポリタンを食べていたので仕方ない。

「す、すまん…………（ノノノノ）」

「えへへ、いいよ（ノノノノ）」

何だろう、この空気を読まない人達は。耕司の向かって正面にいる百合はそのイチャラブ（？）光景に『うっ~~~~』と恨めしそうに耕司を見つめていた。百合もチャンスはあったのに…………私は確かに





ら耕司も気付いてくれるだろう。

「ん？百合ちゃんもやりたいの？」

「えっ……………は、はい」

百合は一瞬、ビククリしたような表情を浮かべるが急に振られたからか勢いで了解した感じだった。でも、それでもいい。チャンスは増えたのだから。

「じゃあ、やろうか」

「は、ハイ……………」

百合は戸惑っている様子……………百合、自信を持って。貴方はやれば出来る子。頑張れば出来る子。

「あーお兄ちゃん！アレとってー！」

……………また、まただ。また、夏美ちゃんに先を越された。また、流される……………そこに入れない。百合も私も。介入できない……………今になって思う。自分の性格が恨めしい、と。もっと、自分が夏美ちゃんや宮子さんのような明るい子だったならもっと百合のサポート役に徹せるのに。

「ん……………？何だアレ？芋虫じゃねえか……………気持ち悪いな……………あんなのがいいのかお前は」

「むうー！いいのっ！お兄ちゃん！アレ早くとって！」

……………またさつきと同じだ。耕司と夏美ちゃん、私と百合。そこで断絶される。それはきつと、色々な要素がかみ合って悪循環を生んでいる。引っ込み思案な私と百合、それとは対照的に元気で積極的な夏美ちゃん、なかなかその境界線に気付けない耕司……………どれもこれも百合にとってはマイナス要素。

「おっ……………！丁度いい具合に掴めたぞ！」

「あ、そのまま……………そのままー！」

「……………」

夏美ちゃんが指定したヌイグルミは間もなく取れそうだった。その二人の姿を百合は後ろから唇をかみながらジッと見つめていた……………

「おお！やったぜっ！ほらっ、夏美ー！」

ポンポン

「えへへーありがと、お兄ちゃん」

耕司は又イグルミを手に入れると夏美ちゃんにそれを渡し、頭を撫でた。それに対して夏美ちゃんは嬉しそうに、幸せそうな顔で笑っていた。

「……………っ」

ダッ！

その場の空気に耐え切れなくなったのか、百合はそのままこの場から逃げ出してしまった。

「百合っ……………！」

私は百合の後を追った。そして、百合が逃げ出したことに気付いた耕司と夏美ちゃんは慌てた表情を浮かべた。

「百合ちゃん！？」「」

二人も百合の後を追おうとしていたが……………

「耕司と夏美ちゃんは来ないで」

「えっ！？」

「で、でも……………」

「来ないで」

私は二人にそう言つと百合の後を追った。

「はあはあ……………うっ」

百合は化粧室に入って、鏡の前で苦しそうに伏せていた。

「百合っ！」

私はすぐに百合の元へ駆けつけ、百合の背中をさすった。

「……………はあ、はあ……………ミン、ちゃん……………？」

「百合……………大丈夫？」



「……う、ん。大丈夫……大丈夫だから」

百合はまるで自分に言い聞かせるようにそう言った。

「百合……」

「ミンちゃん……私、すごく嫌な事考えちゃった」

……嫌な事、容易に想像はできる。耕司も夏美ちゃんも、別にわざとあややって見せ付けているわけでは無い。あれがいつもの二人なのだ。自然な二人なのだ。でも……それが分かっているだけでも百合には

……

「ミンちゃん……私、笑えているかな？私、私……もう、もうどうしたらいいか……うっ、うっう……」

百合は手で顔を隠し、そのまま静かに泣き続けた。私はその姿にどうする事もできず、ただただ背中をさすっているだけしかなかった。

耕司……お願い、気付いてあげて。百合の闇……

第94話 『生徒会長、八尾麻里の陰謀（後編）』

麻里さんが出てくると同時に大勢の生徒がいる体育館に電波なソングが流れ始めた。何だ……この思わず頭が痛くなるようなメルヘンな歌は……そして会長のコスプレ姿も電波だった。ハートマークの入った幼稚園児の服装に背中から作りもんの白い羽が見える。オプシオンに頭には天使のワツカが乗っかっていた……しばらくその痛い会長のコスプレ姿を眺めていると電波ソングに混じって『毎日元気にぶ　んて　んしてますかー!?』とか色々仰るオバサンの地声も同時に流れ始めた……会場の子供達は突然の電波ソング&おばさんの地声に驚くどころか、静まりかえり会場には異様な空気が漂っていた。うん、率直に言おう。そろそろ帰っていいかな？

「やあやあーみんなあー！元気力ナァ？ぷりんぷりん」

会長はそんな明らかにドン引きの会場の空気を気にもせず、一人で笑顔で喋っていた。

「ぬう、まさか……愛の妖精ぶ　んて　んのコスプレで登場するとは……ま、負けた」

いつの間にか俺の隣にいたヒデエモンは会長のコスプレを見て、頭を抱えその場でうずくまっていた。あん？負けた？何？負けたって？痛さでか？それなら君も似たようなもんだよ英男君。

「さてっ、さっそくあちしは脳内がコスプレイ色に染まった君たちに言いたい事があるのだよ、うん」

脳内まで侵されたつもりはありませんが。

「見かけだけのコスプレイはコスプレイじゃないっ、ただの変質者だっ！そして皆っ！身も心もコスプレイ色に染まるのだ……！だっ……！」

会長は右手に持っていたマイクを天に掲げ、何か宣言していた。うん、早く誰かあの娘止めてやって。

「とゆーわけでえ　一週間後のコスプレイ大会はみんなの団結力で

盛り上げようぜっ 今風に言つとみんなでやるうぜー！にやははは  
「  
この空気でよくその台詞が言えるな。あとコスプレイ大会じゃなく  
てコスプレ喫茶な。」

「ちよつと待ちたまへー！！！」

会長が引き続きほとんどの方々に伝わりそうも無い力説を語り始め  
ようとした時、舞台のサイドから男の大きな声が聞こえてきた。声  
のする方向を見るとメガネの美少年が立っていた……えーつと、確  
かあれは……

「あれー？こんなところまで来てどうしたのまごごつことなきつるっ  
パゲ？」

「つるっパゲじゃないっ、ふっさふさのもっさもさだっ！違つっ！  
そんなデリケートな部分の話はどうでもいいっ、会長！今日こそ貴  
様の悪事は副会長のこの僕っ！新城流留が止めてやるぞっ！フハハ  
ハハハアーーーーー！！」

ああ、アバ茶の人か。どうでもいいけど出だしからテンションだけ  
えなあ……………

「むう！？あちしの野望を邪魔する気か！？円形脱毛マン！」

「誰が円形脱毛だっ、いい加減髪の話から離れたまへ！ふんっ、そ  
んな舐めた態度を取れるのも今の内だっ！よし、君達カマン！」パ

チン

アバ茶が指を鳴らすと、舞台の黒幕の右側からスパッツ軍団、左側からブリーフ軍団が現れた。両軍の野郎共は上半身は裸でニツプレスを着用していた。え？何このカオスな展開？また変なのゾクゾクと現れたぞ。

「にやつ、にやう！？な、何だこのイカレポンチな連中は！？」

麻里さんは突然の変質者集団の来訪に驚きの表情を隠せなかった。

「会長！電波な格好をしている貴方には言われたくないですね！我々はブリーフ！誇り高き気高きブリーフ！股間を包んでくれる優しくてほんのり暖かいおばあちゃんのブリーフ！いつでも心にブリーフを抱きながら我々は活動しているのですっ！」

前髪が七三分けのインテリ風の白のブリーフ一丁の男が麻里さんに指を指し叫ぶ。真面目な顔して何を言っているんだ七三ブリーフ。

「同じく我はスパッツ！誇り高きスパッツの戦士だっ！会長！今日こそ貴方の野望を潰してブリーフとスパッツ……セットで穿かせて動画で撮って二二にうpしてやるぞっ！ふはははははー！ー！ー！」

ただの性質の悪いセクハラじゃねえか。

「にや、にやにい！？そ、そんな……ブリーフとスパッツだなんて……と、取り合わせが悪すぎるっ！せ、せめて、ボクサーパンツとスパッツにしてほしいにやあ……」

麻里さんはそう言うと、床に伏せた。麻里さん、そのリアクションは色々とおかしいぞ。

「ふんっ、会長！貴方にその権利は無いっ！今すぐこのようなふざけた集会はお開きにして、この体育館は我々『スパッツ愛の会』のさらなる有志を募る場として学園祭丸二日は乗っ取れることを今ここで宣誓するっ！」

「……スパッツバンザイ！バンザイ！」「……」（スパッツ軍団）

スパッツ軍団とそれを取り仕切る前髪カールは高らかにそう宣言す



もそろそろ帰るかな。

翌日の放課後。

もう何度目か分からぬ学園祭クラス実行委員会が始まった。今日は夏美、百合ちゃん、アリスの3人娘も参加していた。オプシヨンとしてサルとメガネもいた。

「にやうう……昨日は見事に失敗してしまった」

麻里さんという我がクラスの教卓で伏せ、意気消沈していた。

昨日、散々酷い目に会ったっばいからな。

「会長つ、大丈夫つすよ！元気を出してくださいっ！さあ、歌いましょうっ！あしゝたがある明日がある」

サルは会長の頭を撫で撫でし、励ましていた。このエテ公はもしかするともしかしなくてもロリコンなのか？

「明日もクソもねえよ、学園祭までもう一週間切ったぞ。どうすんだ」

「耕司い！そこは空気を読めよっ！」

サルが俺の胸倉を掴んでくる。

「そっだよお兄ちゃん！まだ時間はあるんだから今からでも考えて……」

サルが俺にそう言うのと夏美まで俺に抗議してくる。むう、確かに今のは空気読んで無かったか……

「ちょっと励ましたらおっぱいくらい揉ませてくれるかしんないだろお！ハアハア！ウエヘヘ！」

「え……」

「空気を読めって、そういう意味でか。とことん最低だなお前」

「そのサカッているサルは放っておいて本当にクラスの出し物ど

うするのよ耕司」

アリスが俺に問う。

「それは俺が聞きたいんだが」

「ほんつと情けない男ね、一遍、死になさいよヘタレ」

「……………」

アリスさんは俺を少し睨みそう言う。…………あるえー？何で俺こんな責められてるの？

「…………？今、何か違和感があったような……………」

「そうですね…………何か耕司さんとアリスさんの雰囲気がいつもと違う感じがします……………」

俺とアリスのやりとりを見ていた夏美と百合ちゃんは俺とアリスを交互に見ながらそう口を漏らした。

「な、なによ……………」

アリスは夏美と百合ちゃんにジツと見られてたじたじだった。何か俺とアリスさんの会話でおかしな所あったか？うーむ、分からん。

「あ…………分かった。違和感の原因！アリスちゃん、今お兄ちゃんのこと名前で呼んだでしょ！？」

「あつ、そ、そうですねっ！なっちゃん！確かにアリスさんは耕司さんのこと『耕司』って言いましたっ！」

「…………あつ、なっ（ノノノ）」

アリスは夏美と百合ちゃんにそう指摘されみるみる内に顔が真っ赤になった。…………呼び捨てでそんなに反応するところか？確かにあの件の前はアリスさんに名前で呼ばれた記憶は無いが。

「ふむ、それはつまりずっこんばっこぶうん！」ポキッ、バビューン

メガネの鼻にアリスの拳が的確に命中し、メガネは漫画の如く回転しながら教室の窓ガラスに頭から突っ込みそのまま外に投げ出されていった…………おいおい、激しいな。

「なっ、名前でなんか呼んでないわよ！だ、誰がこんなヘタレ蛆虫野郎の名前なんか…………！」

「にゃふふ、まあそれだけアリスちゃんと耕司君の距離が縮まった





そつだ、俺は結局のところ何もしていない。あの頃から俺は何も変わってない……変わったのは世界だけ。

俺は与えられるものを享受しているに過ぎないのだ。アリスさんが自殺を思い留まったのも、結局のところアリスさん自身の力だ。俺は……何も、できない。きっと俺は自分の運命に抗えぬままこれから生きていくのだろう……あの頃からずっと、ずっと……

「……耕司、さん？」

百合ちゃんは俺の顔を不安そうな表情で見つめていた。俺……変な顔していただろうか。百合ちゃんの瞳はみずみずしく輝いており、今にもその中の液が零れそうになっていた。

「お兄ちゃんごめんなさい……」

空気を察したのか夏美はしおらしく俺に謝った。まいったな……ん？　そう言えばあのサルが見当たらないな。逃げやがったなあのエテ公……

「……気にするな」ポンポン

俺は夏美の頭を軽く撫で、そう言った。

「……うん」

夏美は上目使いで俺の様子を覗っている。……お前は気を使いすぎなんだよ、その内壊れるぞ。俺は感謝の意を込めてさっきより強めに夏美の頭を撫でた。

「いつ、痛いよお兄ちゃん……」グリグリ

「ははっ……」

夏美から笑みが零れる、やっぱりコイツは笑っている時の方がいいよな。

「……あ、あのっ、耕司さんっ」

夏美を撫でていると百合ちゃんが少し大きめの声で俺を呼んだので振り向くと、少し俯き加減の百合ちゃんがいた。顔の表情はよく覗えないが、沈んでいるように見える。

「……どうしたの？」

「……何でもないです」

「……そう、じゃあ今日は3人で帰るか」

「うん」

「……はい」

百合ちゃんの様子が気になったが、何故か気落ちした面持ちの俺にはそれを考える余裕は無かった。今日を入れて学園祭まであと六日。俺はこのときまだ気付かなかった。この学園祭がある転機になるとも知らずに……

第95話『反省してまゝす。ちっ、うるせーな byかいちよ〜』(前書き)

大変更新に間が空いてしまいました、申し訳ございません(汗)

これからももう少し学園祭前の話が続きますが宜しくお願いします。

第95話『反省してまゝす。ちっ、うるせーな byかいちよ』

学園祭が間近に迫った3日前。

俺、アリス、サル、メガネの4人は生徒会室に呼び出された。何でも前のあの体育館でのコスプレ大会がまずかつたらしい。あのせいで体育館は蒸れ……いや、群れる男共がハプニングを起こし秩序を乱した事が生徒指導のおっさんの逆鱗に触れ、主催者の麻里さんはもちろん、それに関わった人間、すなわち学園祭クラス実行委員会の俺、アリス、サル、メガネまで反省文を書かされる羽目となった。クソ、何でこんな目に……とは思いつつも自分も委員会に参加していたので文句は言えず渋々了承した。

「あゝあ、バツカだにやあゝだあからブータン王国で豚足とつとけば十万ペリカもらえて地下帝国に亡命できたのに。まったく、そんなだからサル君は脳内までおサルさんでひしめき合ってるとか言われるんだよ、ポリポリ」

「くそう、あそこで変態紳士から赤fondシを奪つときゃあ少なくともこんな悲惨な事態にやあならんかったのになあ。会長！俺を男にしてください！性的な意味で！」

「うむ！その君の性根の曲がったクソ生意気な根性気に入った！こんなにゆーするがよい！ポリポリ、あーじゃりこ切れた。その薄いのが、カルスの原液とじゃが このサラダ味買ってきてー」

「う、薄いのがと言うなつ！気にしているんですよ！？」

麻里さんとサルは既に反省文を書く集中力が切れたのか、開始わずか1分で携帯ゲームをし始めた。全然反省していないどころか……うん、完全に調子に乗っていやがるね、コイツらは。そして微妙に気の毒なのは副会長のアビル三世さんだ。ほとんど麻里さんに巻き込まれた形となったのと同じように反省文を書かされる羽目になった。生徒指導の教員の前で『無実だあー！それでも僕はやってないのれすう！』とか言いながら悲壮な表情で土下座までしていたのに

な。

「つてこらあ！そのアホ毛え！何勝手に僕のマイパソを弄ってるんだね!？」

メガネは副会長のパソコンを指でいじいじしていた。指の動きが少しやらしかった。

「いや、フォルダにエロゲーでもないか探っていたんですよ。しかし、副会長……デスクトップの壁紙がまじかるぷりんのミミ様の全裸のM字開脚絵とはなかなかやりますねえ……貴方とは酒が飲みそうです。あと、この自作おっぱいマウスパッドもなかなか……この右左のクリックの中央にあるポッチが実にリアルで……ウフフ」

「やつ、やめるおおおおおー！……！！！！！！次々に僕の赤裸々な私生活を暴くなああああー！……！！！！！！」

俺の隣で同じく反省文を書いているアリスとお茶を淹れている生徒会会計の渡辺さんは副会長に向けて「うわあ……」的な表情を向ける。この人もメガネと同じ穴の貉か。

「スーパの特価で買った129円のクソ不味いインスタントコーヒーですがどうぞ」

渡辺さんが俺やアリスの目の前に紙コップに入ったコーヒーを置く。うん、一言多いと思うんだ渡辺さん。

「副会長もどうぞ」コトン

「……み、美亜君？何で僕だけバスコンなんだい？（汗）ぼ、僕は普通の飲み物が欲しいなあ……（汗）」

「200mlの水にその中身を全部入れてよくかき混ぜてお飲み下さい」スタスタ

「いやっ！そんな昔ながらの粉末ジュースじゃないんだからさ!？ねえっ!？ちよっ!？美亜君!？」

……ひよっとして副会長つて渡辺さんに嫌われてるんじゃないか？

「……しっかし、何て書けばいいのかね」

ペンと紙を前に俺は考えていた。こんなもん俺が不良だった頃も書いた記憶ねえからなんて書けばいいのかよく分からん。

「なんでよ、あんた反省文なんか書くの日常茶飯事でしょ？」

アリスさんが隣で呆れたような表情で俺を見ながらそう言う。

「……アリスが俺を普段どういう目で見ているのかよく分かった。まあいいや、アリスはどう書いたんだ？」

「あつ、ちよつと！見るな！（ノノノ）」

俺が覗こうとするとアリスは咄嗟に身体全体で紙を隠し、うつろと少し頬を染め睨んでくる。いや、そんな乙女の秘密の交換日記じゃないんだからさ……俺は仕方なく、会長の方に顔を向け……

「会長は何て書いたんですか」

「ポリポリ、うにゃ？あー……それ？ほいつ」

会長は俺に紙を手渡す。その紙にはミミズみたいな文字で『反省してまゝす。かしこ』とだけ書かれていた。

「あんた生徒指導のおっさんに殺されるぞ（汗）」

「いいじゃん、反省文なんだから。ちつ、耕司君はうるせーな」

この人に聞いた俺が馬鹿だった。しゃあねえ、気が進まねえがここはサルやメガネに聞いてみよう。

「おい、サル、メガネ、お前らは何て書いた？」

「ん？俺か？これ」

「……何このホモセクシャルな絵」

サルと生徒指導のおっさんが裸で至近距離で向かい合って見つめ合っている素敵な絵が描かれていた。

「俺の猛省を絵で表現してみた。あと、俺と生徒指導のおっさんが仲良くなれるようにと願いを込めて」

「反省『文』だからな。あと願いの込め方が圧倒的に間違ってるよ貴様」  
「ビリビリ」

「ああ！耕司い！何しやがる！俺のナイスな絵！」

こんなもん破棄だ、破棄。さて、次はメガネ。

「僕はとりあえず、ラヴレターを書いてみたよ」

「反省文って言うてんだろ、なんだお前らは？そんなに生徒指導のおっさんにフラグ立てたいのか？」

「何だか分からないけど、僕はこのラヴレターを書いている最中ドキドキして勃っちゃったよ」

「死んでくれよお前」

本当にコイツラが最近、マジ両刃に見えて仕方ない。ちょっと距離置こうかな……いつ俺のケツの穴が狙われるのか分からんし。

「……ごめん、渡辺さん。こういう時の反省文の書き方教えてくれないか？君しかもう頼りがいないんだ」

渡辺さん以外の奴らはほぼ壊滅状態なので最終段階として渡辺さんに聞いてみた。

「まあ、私しか頼りがいないだなんて。それは新種の告白……と捉えて良いのですね？」

「新種の告白って、病原菌じゃないんだから。いや捉えないで下さい。俺は反省文の書き方を聞いているだけです」

「冗談です」

渡辺さんはアリスとは反対側の空いている席に着く。

「ちょっとまって！村上君！僕はどうした僕は！？まだ、僕には聞いてないでおじやる！？」

副会長は慌てた様子でそう言う。

「副会長、村上さんに嫉妬ですか。キモイですね、近寄らないで下さい。ここから飛び降りて死んでください」

渡辺さんは窓に指差し、そう言う。ばつさり酷い事言うなこの娘（汗）

「ちよつ……そうじゃなくて、ぼ、僕はだなあ……村上君に」

「今度はお尻丸ですか、ふう〜！アル最高！ですか。このバイ、黒人に掘られて萌死にしてください」

「orz」

副会長はそれ以上何も言えずその場に突っ伏した。可哀想に、こつやつて毎日いぢられてんだな。

「さあ村上さん、両刃使いの副会長は放っておいてさっそく進めましょう。どこから説明しましょうか」

それから俺は渡辺さんにあれこれ反省文について教えてもらった。

終始、横のアリスから異様な何とも言いがたい目に見えぬ圧力が掛かっていた。……何で？何かした？俺？（汗）



番外編その32 『腐女子はお好き?』

「というわけで、耕司キユン。このエロ本を少しの間預かっておいて欲しいんだ」

「いきなりだなオイ、何がどうして俺がお前の性欲処理本を預からないといけない展開になった」

休日のうらかな午後、自分の部屋でゴロゴロしていると来訪のチャムが鳴り、ドアをあけると待っていたのは美人なお姉さんでも美少年でもロリでもツンデレでもなく、両手に大量のエロ本を抱えたメガネだった。

「実は……妹にこのエロティックでヘビイな本が見つかってしまつてね、」

「お前今、さらつとトンデモ発言吐いたな。お前に妹がいたことに驚きだよ」

「13人の妹のうちの一人の末っ子のマアサに見つかったね」  
「何だお前の妄想か」

「『うう、おにいちゃまのばかばかばかあ!こんなので一人で気持ちよくなるくらいなら私で気持ちよくなるのですう!』と嫉妬心むき出して僕に掴みかかってくる始末……見てくれたまへよ、この頬に残った引つ掻き傷。ヤレヤレ、マツタクコマツタチャングダゼ」

「痛い、激しく痛い。お前も、俺の心もな。あとコマツタチャンはお前だ」

あー、何で休日なのにこんなアウチでイタタなお方に絡まれてんだろ俺。そろそろゴールしてもいいかな?

「お願いだよう、耕司キユン!ちよつと使いすぎてシワシワになつちやつてるかもだけど、その上からまた使ってもいいから!この本が耕司キユンと僕を繋ぐ絆の証となるのだよ!」

「想像するとすげえ嫌だなその絆、ていうか使用済みの本を俺に寄越すんじゃないねえ」

「ちなみにサル君もご賞味済みの一品です、耕司キユンを含めて3人でぶっかけです」

「なあ、そのメガネかち割ってもいいかな」ポキッ、パリーンッ

「あプっ、割った！耕司キユン言う前に片方のレンズ割ったよ！」

「うるせえ、帰れ」ボタンッ

「ああ！そんな……………」

『お願いだっ！耕司キユン、一緒にイコウヨ！イツチャオウヨ！ピリオドの向こうへ！！！！』

「入れ、馬鹿野郎！」バキッ

「フヒヒッ、耕司キユン激しいっ（ノノノ）」

「気持ち悪いこと言ってんじゃねえよ！さっさと入れ！」

全開なホモ らんぐれっちをかましてくれやがったメガネをとりあえず無理矢理部屋に連れ込んだ。…………いや、別に変な意味じゃねえぞ。只、あのままオタツキーメガネを部屋の外に出してたら寮生に変な誤解を受ける可能性があるからだ。

「…………と、冗談はこれくらいにして本題に入ろうか耕司キユン」ギョツギョツ

「おい、どうでもいいがその大量の工口本をドアのポストに詰め込むな。女子に変な誤解受けるだろうが」

メガネは急に真面目な顔して俺にそう言う。…………何だコイツ。まあ、

暇だし聞いてやってもいいがどうせ口くさな事じゃないんだろうな。

「真剣な、話なんだ……」

「……なんだよ」

メガネは急にシリアスな表情で語り始める。

…… 本当になんなんだコイツ。まさか、本当にそういう系の話なのか？

「耕司、キユン……」

メガネは顔を上げ、壊れそうな右手でそつと俺のこめかみにゆっくり触れる。

俺はその吸い込まれそうなメガネの奥に光る瞳にその場から動けなくなり、ゆっくりと彼にこの肢体を預け

「オウフ！」バキッ

思わずメガネの顔面に思いつきり拳を入れた。

き、きめえー！何だコイツ！全身に鳥肌がたつたじゃねえか！

「お前、死にたいんだな。おし、殺す」ポキポキ

「やつ、ま、待ってくれ！耕司キユン！今のは僕が悪かったニダ！」

「うっせえよ、とにかく蹴るからそこでたつてろ」

「い、いや！僕の説明が悪かった！ま、まずは彼女を紹介しよう」

「彼女……？」

彼女って何だ。って、それで反応する俺もどうなんだ。

「デユッフ、こんにちは」

「うおっ！？」ビクッ

突然、部屋の押入れが開いたかと思うとそこから女が登場した。

「なっ何だよ、これ！誰だよこいつ！っーか、どっから出てきてんだよ！」

「うん、耕司キユン。突然、不躰で悪いが紹介するよ。彼女は腐女子連合第三支部经理部長に所属する腐女子扶助子だよ」

「ウオフｗｗｗｗはずめますてｗｗｗｗ扶助子でふｗｗｗｗうえｗｗｗｗうえｗｗｗｗ」

「いや、はじめましてとかじゃなくて……ていうか完全にネタキャ

ラだろコレ」

「親がないと生きていけないお年頃 W W デュフ W W テラワロ  
ス W W W」

そこは笑えるところじゃねえだろ……

「彼女は昨年のアブノーマル腐女子賞を受賞した猛者でね。まさに、  
腐女子中の腐女子といったところだ」

「かれこれ、拙者一ヶ月風呂に入っていないでござる W W W うえ W W  
W うえ W W W」

腐女子ってそういう意味じゃねえよ。ていつか、さつきから変なご  
飯が腐ったような臭いがすると思ったらお前かよ！きたねえなもう！  
「で？扶助子さんが……何？何なの？俺に何の用なんですか？てい  
うか、ほんと健康衛生上に（主に嗅覚的に）キツいんで帰ってく  
れませんか？」

「まあまあ、そうおっしやらずに W W W 実は某、村上殿に調査して  
もらいたいことがあるのでふよ W W W」

「あん？」

扶助子は俺に一冊の薄い冊子を手渡す。

何か、この薄いの……どこかで見たことあるような……嫌な予感を  
肌で感じながらも拍子に視線をやる。

『ずっとおホモ達でいようね』

俺は両手で本を引き裂いた。

番外編その33 『スカート捲りは好き？（前編）』

「なあ、耕司……スカート捲りって男のロマンだよなあ……」

「……はあ？」

昼休み。

いつもながら机を向かい合わせて昼食を摂っていると、サルは人生に疲れ切ったバーコードおやぢのような表情でそんなことを呟いた。何だ？また、何かのビョーキを患ったのかコイツ。

「……ふむ、スカート捲りとな。しかしサル君、今の時代よもやそのような悪戯は時代遅れの象徴だと思うね」

俺の隣にいるメガネはサルのついつたーに対し、メガネをクイツと直し、真面目な顔してそんなことを言う。

「うるせえ馬鹿野郎……俺はなあ、あの娘の布きれの中をこの邪気眼で堪能したいんだよお……はふう」

ビョーキじゃなくて只のいつもの変態発言だった。

「しかし、解せんなサル君。スカート捲りなど、只の女生徒の下着を拝むだけではないか。我々はそろそろ、一段階上のレヴェルを指しても良いと思うのだがね。そう、例えば……『パンツ捲り』とか」

「それは一段階を優に飛び越えて、犯罪レヴェルに達するな。あと、我々って言うな。俺はお前らの仲間じゃねえからな」

「メガネ、お前は何にも分かってねえな。スカート捲りはな、素直な女の子を演出してくれる一種のアクシデントなんだよ。パンツを拝む事によって、素直になった女の子は自然と目の前で綺麗な桜色の花びらを拝ませてくれるようになるんだよ馬鹿野郎」

「お前も全然分かってないからな。あと、お前の発言ギリギリアウト」

はあ……本当に何時まで経っても成長しないなこいつらは。

俺もあまり人の事を言えたものではないが、そろそろそういつエロ

関係の話は卒業するべきだと思っただ。

特にこういう衆人環視の中ではない。ほら、見るよ……クラスの女子がものつそい眼力で此方を凝視しているじゃねえか。つまりは俺が言いたいことはお前らのエロ発言で俺まで巻き込むな、ということだ。

「おい、耕司。何だそのふてぶてしい顔は……コノヤロウ、リア獣の余裕ってやつか？」

サルは俺が黙々と飯を食っているのが気に入らないのか、俺を睨み、そう言っ。

「リア獣ちゃうわ。別に……俺は関係ねえし」

「カンケーあるだろ！？オマエトオレ、ナカマ！オレトオマエ、ドウテイ！イツシヨニ、タノシンダ！」

「童貞っていう括りで仲間扱いするな。だいたいそれを言っちゃうとこのクラスの殆どの男子が当てはまるだろうが」

「そんな事は無いぞ、耕司キユン。我々のクラスの藤P君と隣のクラスのホモ子デラックスさんが付き合っているという情報がある」

「ああ、あの巨漢バカップルか……今朝、藤Pと喋ったけど、以前感じていた童貞フェロモンのにほいがしなくなったから、絶対もうナニをナニしちゃっているなアイツ。かあ〜！悔しいと思わねえのか耕司！同じ童貞族として、情けないと思わないのか耕司！！」

「もう、お前からで勝手にしてくれ……」

俺はもう疲れたよ。コイツラを相手にするのも、されるのも。

途中から論点が微妙にずれて、スカート捲りと童貞喪失とどういう関係があるのかとか、ツッコむ気力もなくなった……。とにもかくにも黙々と目の前のエサを食うとしよう……。

「耕司君、ちよつと良いカナ？」

キャンキャン騒ぐサルとメガネを無視して、黙々とひたすらエサを食っている宮子が俺の席に駆け寄ってきた。

「何だ宮子が……」

「何だとは何だよ耕司君！こーんな美少女が話しかけてきたのにそ

んな態度は無いんじゃないかなー？」

「自分で言うか……それより、俺に何か用か？」

「うん……えつとね、次の授業のノートを貸してほしいんだよ」

「……何だ、ノートって……お前、もしかして宿題やってないのか？」

「ど、どきっ」

「……その顔は凶星だな」

「いつ、び、美少女にそんな事言うなんて耕司君のケダモノ！ゲテモノ！ひ、人でなし！（ノノノ）」

「何で、宿題の事でそこまで言われなはいけないんだよ……いいよ、貸してやる。ちょっと待ってる」

「は、早くしてよねっフンッ（ノノノ）」

……まあ、別に良いけどな。

しかし、次の授業のノートは……机の中をゴソゴソ漁っていると、俺の反対側、つまりはサルが何やら目配せしてきた。……何か嫌な予感が。

「（ユー！ヤツチャイナヨ！）」

サルは視線を宮子のチェックのスカートに送り、次にパントマイムのような動作で何かをずり下ろすような動作をする。……何がヤツチャイナヨだ。もうそれはスカート捲りじゃねえじゃねえか。誰がやるかそんなもん。俺は否定の意味でしかめっ面で首を横に振る。

「（ユーノ、ヒミツ、ミー、ニギッテル！）」

……何だ、俺の秘密って。

「（オマエ、ロリ！ロリコンネ！ワタシ、シッテル！）」

「誰がロリコンだてめえ……！」ガバッ

「わっ、い、いきなり、どうしたの耕司君！？ろ、ロリコン？そ、それは前から知っていたけど……」

し、しまった。カツとなつて……つい。

って、前から知っていた？そうか……宮子の中では俺はそんなキャラになつていたのか。

……  
そう考えると何か段々とむかつ腹が立つてきたぞ。

「(トニカク、ヤレ！ヤルンダ！オマエハ、コノタメニ、イママデ、ソシキニイカサレテキタンダカラナ！)」

……別に、俺がこれからやることはコイツラの協力をするためではない。

単に、俺がムシヤクシヤしているから……それだけだ、それだけだからな……。

「ねー、耕司君ノートまだあ？」

……変に手が滑ったとか、神風タイフンだとか、言い訳はするつもりはない。

堂々と、真正面からやった方が男らしいからな……って、やる時点で男らしくは無いか。

とにかく……特攻あるのみ、だな。

「……宮子、最初に謝っておく。……ゴメン」

「えっ？」

俺の言葉に何の事か分からないのかキョトンとしている宮子に隙を突いた俺は素早く両手を宮子のスカートにやり、ギュッと掴んで上げる。……さすがにサルがジェスチャーしていたスカートズリ下ろしは途中で引っ掛かるだろうし、一瞬の間をつくとはいえ、無理がある……ていうか、やる勇気がない。要はスカートの中身を拝めればいいんだろ……？スケベボーイズ。

「「お、おおおお……！！！！」」

正面にいたサルとメガネは声を上げる。

……もう一度言っておくが、こいつらのためにやった訳ではないからな。……あくまで、俺の意思だ。

さて、俺も……せっかくだし拝むとしよう。

……  
別に俺はスカート捲りに何て興味は無いんだからな。……あくまで



も、参考に拝むだけだ。

そして俺は視線を宮子のスカートの中身にやった。

紺色の、パツンパツンの、下……着……？

……ああ、これはもしかして、あれだ、あれ……。

「……ナイスブルマ……！」

「……くそお、あの天然女、まさか下にブルマを装着していたとはな」

「ふむ、予想範囲内では合ったが……。しかし、サル君はいいじゃないか……宮子君のブルマからはみ出た柔らかな尻肉を拝めたのだろう？」

「バカヤロー……耕司なんか真正面から股の食い込みを拝めたんだぞ……それに俺は下着もどきなんぞ興味ないんだ。下着……！下着なんだよ……！見える肌の部分は同じでもブルマや水着と下着とは全然訳が違うんだよ……！！」

「……それより俺は後が怖い（汗）」  
殴られはしなかったが……。

宮子が俺に向けて、笑顔で『……貸し、だね』とか言った瞬間、思わず背筋に寒気が走った……。

俺はもしかしたらとんでもない事をしでかしたのかも知れない……

(汗)

「まあ、これもそれも耕司のおかげだな。この調子で他の女生徒にも任務を遂行するぜ」

「ふざけんな、俺はもうやらんぞ。テメーらでやれ」

「そんなこと言うなよー、お前は見るだけで良いからさ」

「そうそう、我々のゴッドハンドをその眼に焼き付けておくが良い」

……見てるだけでも俺も同犯になるような気がするんだが。

「じゃあ、次は誰にするメガネ？俺はなるべく、純情な子の方が良いと思うんだが……そういう子の方が見えパンとか穿いていないと思うし。なあ、耕司もそう思うよな？」

「俺に話を振るな」

「……ふむ、しかしサル君。一つ大事な事を忘れてないか？」

「なんだよ？」

「我々は単に下着を視姦するだけが目的ではない……女子の羞恥心に彩られた、あのトマトのように真っ赤に染まった表情を観察するのが最終目的ではないのかね!？」

「……ああ!？」

……確かコイツ、前にもそんな事言っていたよな。

すこぶる変態の極みだなコイツラは。

「よし……では、耕司キョン……まず君から次のターゲットは誰が良いか答えてもらおう」

「だから俺に話を振るなと……」

「耕司い！そこは男らしくズバツと答えるよ!!」

サルが俺にすごい剣幕でそう言うってくる。

……むしろ、答える方が男らしくないような……いや、そこは価値観の違いか。

うーむ、次のターゲット、ねえ……。

「……百合ちゃん、とか？」

「あらやだ、この人ロリコンですわ奥さん」ひそひそ

「ほんと、もうこんな変質者が近所で生息しているだけでも恥さらしですわね奥さん」ひそひそ

サルとメガネは俺から少し距離をとって、ひそひそ話している。

こ、こいつら……思いつきり、しばきてえ……。べ、別に俺はロリコンなどではない……。

単にふと脳内に思い浮かんだのが、笑顔の百合ちゃん……って、いかな俺。これじゃあ只の変態だぞ。

「しかし、確かに百合さんの羞恥に染まった表情はそそられる物があるかもしれないね。しかし……ロリコン」

「ああ……ロリ……コン……」

「うるせえよお前ら！！俺を見ながらロリコンロリコン言ってるんじやあねえよ！！！」

クソ、ロリコンにロリコンとか言われるのはめっちゃくちや腹が立つぞ……。

だいたい、百合ちゃんは俺達と同級生なんだからロリコンとか言われるのはおかしいだろ……！見た目は……アレだけど。

「じゃあ、次は俺ね。麻美さんとかはどうだ？熟女のかほりって奴？すげえコーフンしないか？はあはあ」

「お前、それ本人の目の前で言ったら本気で殺されるからな」

「ハアハア……た、確かに。サル君の言うとおり……顔的に普通に出会い系の人妻っぽい顔しているしね、はあはあ」

「お前、それ本人の目の前で言ったら本気で殺されるからな」

「な？アリだろ？もしかしたらあの人の事だからスカートの下はとんでもない下着を身につけているかもしれないぞ……例えば、ガーター付きのショーツとかTバックとかフンドシとかノーパンの可能性も！……はあはあ、うつやバイトイレに行ってもいいですか？」

「す、素晴らしい……実に素晴らしいよサル君！今すぐやろう！」

「おい、お前ら……一つ、いいか」

俺はコーフンしているサルとメガネに声を掛ける。

「な、何だね……耕司君。僕らのイケナイ行為を邪魔する気かね？」

「そつだ！もう、お前には頼らねえぞ！俺達だけで……ヤル！」

「どうでもいいが、あの人だったら悦んで、いや喜んでやると思うぞ……」

「「えっ？」」

「むしろ、スカートだけでは済まないかもな……もしかしたら自分で下着を脱いで、笑顔で渡すくらいの事はするかもしれんぞ……いいのかもしれない？」

「えっ……それは、ちょっと……」

「さ、さすがに変態の僕でもドン引き……」

「……するからな、あの人ならそれくらい……いやそれ以上……」

「「……」」

……どうやら分かってくれたようだな。

あの人はお前らが思っているような純情さんかーミクロンもないからな。痴女、むしろ逆レイプしてくるようなヤバ目の女だぞ……。前にちよつとした事で、自分で公開オニーしようとした女だからな……。

「こ、今回は見送ろうかな……？」

「そ、そつだねサル君……ふはは」

……怖くなつたなコイツラ。

まあ、しかし正直それが正解だと思う。俺もまだ貞操は失いたくないからな……。

「し、しかし……じゃあ、それ以外なら」

「夏美たん、ミントたんは百合ちゃんと同じだし……。じよ、ジョウイチロウくんは……」

「おい！メガネ！気でも狂ったか！？それは肉棒持っている奴だぞ！」

いや、もう止めようぜ……？

俺、さっきの宮子で怖くなったし……な？いいだろ？もうその辺で？

「……いや、一人忘れていないかサル君。飛びっきりの……肉壺を持った女の子」

「飛びつきりの……肉壺だと!？」

……

さっきからこいつらは……。肉棒とか肉壺とか……。本当にギリギリアウトだぞお前ら。

ちよっとはこの小説がR15であることを考えるよな。あと、都知事さんのことか。

「ああ……その女の子とは……!」

「「アリス(たん)!!!!」」

べじぢぢら、今日は平穩無事に帰れないよじぢですお父さんお母さん。

番外編その34 『スカート捲りは好き? (後編)』

「それでは行動開始といこうではないかね、耕司キユン、サル君」  
「おっしゃー、やるぜ!」

「……………」  
何だろうな、こいつらのエロに対するビクバンのような爆発的な原動力は。

分かり切っているだろうに、どんな結末を迎えるか……

「耕司キユン、当然我々はどのような結末を迎えるかは分かっている。……………しかし、バッドエンドに直行するのが心苦しくも彼女のCG回収のためにやむを得ず選択肢を選ぶ……………そんな気持ちと同じようなものだよ」

「……………いや、そんなエロゲーと比較されてもな。全然同情できねえし」

「うるへー、耕司!ここまできて、お前は逃げるのかええおい!?やるったらやるのー!!皆でやらないと寂しいのー!」

「はいはい……………わかったよ」

今更、俺が何を言ってもこいつ等が止まるとは思えないしな……………。

……………。  
おい、言っておくが別に俺はアリスさんのパンツが見たいからこいつらと絡んでいるわけではないからな。

そりゃあ、人並みにエロは好きだが同級生のパンツを何が何でも拝みたいとか、そこまでのエロ願望はないぞ。

……………。  
ほんとだよ?

「さて、耕司キユンも納得したことだし、どうやってアリスさんのパンツを見るか作戦会議といこうじゃあないか」

「おいコラ、納得はしていないぞ」

「そうだな……………とてもじゃないが、真っ向から堂々とアリスさんの

スカートを捲る勇氣はねえよな。おそらく、性少年の俺らが近づいてきた瞬間、ぬっ殺されるのは見えていることだし。うーん……」  
「と、なるとやはりここは何か策を練らないとならないね。それもできれば自然にスカートが捲れるような流れになるような……そんな策があるとベストだね」

……自然にスカートが捲れるような流れってなんだよ。  
ていうか、よくこいつらはそんなしょうもないことを真剣に語るな。アイタタタ……だめだ、何か頭痛がしてきた。

「……おい、耕司い。何、自分だけ我関せずみたな立ち振る舞いしてんだよ。お前も考えるよな……俺の考えではもしかするとお前がキーパーソンになるかもしれないからな」

「……はあ？何だ、俺がキーパーソンってどういう意味……」

「あれ？お兄ちゃんたちこんなところで何やってるの？」

「……ギョギョ！？」

背後から見知った声が聞こえてきたので、ものっそい勢いで振り向くとジューズの紙パックを持ち、ストローを啜えた夏美がいた。

し、しまった……怪しい会話をしている所にいきなり女子が声をかけてくるものだから、三人して素っ頓狂な声を上げてしまった……。つて、くそう、これじゃあ俺もこいつらと同じようなもんじゃあねえか。

「ヤ、ヤア……ナツミサン、ド、ドウシタノデスカ？コ、コンナトコロデ」

「何でそんなボーカロイドみたいな声になっているのお兄ちゃん？  
く、くう……」

何で俺が夏美に対してこんなに慌てなきゃいけないんだよ……！  
う、後ろめたさなんか……いや、あるな。クソツ、タイミングが悪いぞ！

「（お、おい！メガネ！もしかして俺らの今の会話、上野に聞かれていたか！？）」

「（サル君……。いやあの夏美ちゃんのアへ顔からして我々のイケ

ナイ会話は聞かれてはいないようだ……」

「（いやアへ顔じゃねえだろ。本人聞いたら本気で泣くぞ）」

「……？三人とも、何かよそよそしいよ……。ボク、何かタイミン  
グ悪かったかな？」

夏美はどこか気まずいような表情で俺らに言う。

「気まずいのは俺だよ！し、しかし……メガネの言うとおり、俺ら……  
正確にはメガネとサルのエロ会話は聞かれていないようだ。もし、  
こいつが聞き耳立てていたら、真っ赤な顔して「お、お兄ちゃん  
の  
ばか！（／＼／＼）」とかいつて喰いかかってくるだろうからな……。  
……。」

「やれやれ……俺も遅しいアフォな妄想スキルを身に着けたもんだ。」

「……お兄ちゃん？」

「は、ハイ」プイツ

「……三上君？」

「へ、へあっ」プイツ

「……赤神君？」

「う、うっす」プイツ

「……何でみんなボクと目を合わせようとしないの……？」

俺らが夏美に対して沈黙しているからか、夏美は俺ら一人一人の顔  
を真剣な顔してジッと見つめてくる。

「や、やばい……。こいつはタマに妙なところで勘が鋭い時があるか  
らな……。何か、探られとるぞ……。」

「……おかしい」

「な、何がだよ夏美……おかしくなんてないぞ」

「……おかしいよ、お兄ちゃん達。だって何かボクに対して妙によ  
そよそしいというか、他人行儀というか……。」

「ふ、普通の男子は女子に声をかけられたらよそよそしくなるだろ  
……。」

「お兄ちゃんたちは普通の男子じゃないでしょ」

普通の男子じゃないって、どんな男子だと認識されているんだよ俺



は……。

「だいたい、何かお兄ちゃんたちから妙な妖気が漂ってくるんだよね……。何かこれから悪さしようとしているみたいな……」

「……どうしてこいつはアフオっぽい顔してこんなに勘が鋭いんだよ。」  
「(ど、どうするよ……。上野は何か俺らを疑心に満ちた瞳で見ているぞ……)」

「(アッ、何か幼女に疑心の目で見られるのもゾクゾクするね……」  
ノノノ)」「ゾクゾク

「(ばっかやろう！何、感じてやがんだよド変態！ど、どうする……おい、耕司！どうするよ！)」

「(どうするもなにも……とぼけた顔してる。どーせ、こいつは疑っているだけで分かってないんだ。変な反応すると余計に疑われるぞ)」

「……そうだ、こいつはメガネとサルの会話を聞いていない。」

俺らがとぼけた顔して、しらを切ればそれ以上突っ込んでこない。というより、できないだろ。

そうと決まれば、早めに退散した方がいいな。

「おい、夏美。俺らはもう行くから……」

「あつ、ま、待って！お兄ちゃん！ボクに何か隠しているでしょ！？」

「(……待ちたまへ、耕司キュン)」  
メガネが俺の制服の袖を軽く引つ張る。

### 【トリオの脳内作戦会議】

「(……はあ？何だよ……アイツは何も分かってないぞ。早く逃げた方がいいと思うんだが)」

「……違うね。これは、チャンスだと思わないかね」  
「(はあ？何のだよ……)」  
「……チャンス。そう、か……耕司、予行演習だよ！予行演習！」  
「(……予行演習？お前らは何が言いたんだよ……)」  
「(予行演習……そうっ、夏美ちゃんのスカートを捲る……これが、我々の課せられた宿命だっ)」  
「(は、はあ！？お、お前……な、何を言っ)」  
「(耕司キユン、何事もメインディッシュの前には前菜やスイーツがセオリーだろう?)」  
「(スイーツは後だ。ていうか、回りくどいこと言っでないで、さっさとほつきり言え！つまんねえツツコミいれてしまったじゃねえか！)」  
「(……ふむ、つまりアリスさんのスカートを捲る前にここいらで夏美ちゃんのスカートを捲って自信をつけるのはどうかね、と言いたいのだ。ホップ！ステップ！！ジャンプ！！みたいな)」  
「(はあ……あ、あのな。だいたい、お前らさっきロリがどーたらこーたらで対象外とか言っただらうが)」  
「(はあ……ったく、お前はいつからそんな臆病な女々しい野郎になっちまったんだよ耕司い……思い出せよ、あの頃のふんどし一丁で校内を徘徊していた頃をよ！あの頃のお前は八三毛がイカシテいたよ！ココイラデアツクナレヨオ！コーズイー！)」  
「(記憶を改ざんするな。あのなあ……お前ら単に見たいだけだろ、下着)」  
「(……見たくないのかね耕司キユン?)」  
「(……見たいだろ耕司?)」  
「(……あ、あのな)」  
「(……(みーたーいーでーしょー!?)」  
「(何だよその連携は……ああ、見たくないと言えば嘘になるが……)」

「(ダツタラ、ヤツチャエ)」  
「(ふっふざけんなっ！俺はもうやらんと言った……)」  
「(ヤルンダ)」  
「(お、お前らがや……)」  
「(ヤツレエ……)」  
「(ああ！もうチクシヨウ！分かったよ！やりやあ、いいんだろ！  
？やりやあ……！男らしくやってやるよ！)」  
「(耕司キユン、素敵！)」  
【おわり】

「……………」  
「お、お兄ちゃん！？だ、黙ってないで何とか言っつてよ……！ぼ、ボ  
クに隠し事は……！」

……………  
ああ、分かっていたよ。何となくこんな展開になることは。  
ああもっ……さっきの宮子で懲りるよお前ら……。何で、俺がこん  
なこつ……。

……………  
だいたい、あれだよな。今どきのガングロ女子高生って羞恥心って  
もんが欠けているよな。  
平気で駅の階段の前でスカートをおおぴらに広げて中を見せるわ、  
コンビニの前でヤンキー座りして見せてくるわ。

……………  
別に意識して見せてるってわけじゃあないよな。

「……………はあ」  
……………何か落ち着いた。

……………もう脳内でぐだぐだ愚痴っついてもしやあねえ。男がやるといった

んだ。今更、やめるわけにはいかない……。

あれだ、宮子は下からブルマを装着していた。女子高生の大半はあのスタイルが普通だろ。

だったら、夏美も例外じゃあないよな……？

「……………」

「な、何？お兄ちゃん……その何かを決心したような顔……………」

…………… うん、大丈夫だ。俺はやれる…………… やれます十七歳の男子高校生。

「……………なあ、夏美」

「な、何？ようやくボクに隠し事を話してくれる……………」

「あつ、後ろに加藤鷹がいる」

「えっ」

うん、我ながらすっげえ単純なありふれた方法だと思う。

でも、いいだろ？捲れば……………そんな方法でも。そんな単純な罠に引っかけた夏美も夏美だ。

つて、何責任転嫁してんだ俺は。まあ、とにかくこの隙について俺は素早くスカートと裾を持ち、捲った。

「「おおおおお……………おお？」」

……………。

……………。

「お兄ちゃん、誰もいな……………っ!？」

うん、ごめんな夏美。

でも許してくれよ、これは奴らの身体をはったギャグみたいなもんだよ。

うん、本当にこれは……………うん、色々予想外だった。うん、予想がい過ぎるよ。

まあ、あれだ……………うん、色々アレすぎるよお前。予想斜め上をゆくあれだよあれ、ほんとお前あれだよあれ。

まあ、その……………なんだ。あーげふんげふん。

何で、お前ノーパンなの……？

「……あー、その……えつと、だな」

「「……」」

さすがに、普段散々下ネタをかましていた野郎共はこの展開は予想外だったのか、はたまた気まずさのせいかその場でじっと押し黙っていた。……ていうか、やっちゃった俺が一番気まずいのだが。

「……転んだの」

「えっ……？」

夏美は俯き、小さな声でつぶやく。

俯いているせいか、表情は何えない……。うっ、お、重苦しい空気だ……。

「……下着、濡れて……」

「……」

……色々と分からないが。

どっかで転んで下着が濡れて……つまり、その、なんだ。替えがなかったからそのまま……ってことか。

この重苦しい空気の中、俺から色々聞くことはできない……。ていうか、聞けない……。

と、とりあえず、俺は色々ともに見てしまった……。あ、謝らねえと……。

「そ、その……な、夏美……「う、ごめん、な……っ！？」」

「どっつてこんなことするの……？」

……じつと俯いていた夏美が顔を上げた。俺はその表情にギョツとした。

……泣いていた。夏美は子供の様に、両の瞳からポロポロと涙を零していた。

「嫌……だよ。こんなの……どうして、こんな……恥ずかしくて、いじわる……」

正直、この反応も予想外だった。

……いや、それだけではない。これでは、まるで……。

『耕司君のいじわる……やだ、こんなの……どうしてこんないじわるするの……？』

……っ。

馬鹿野郎……こんな時に何を思い出しているんだ俺は。あいつは……もういないんだ。

いつまで引きずってんだよ……馬鹿野郎。

「ひっく……ひっく……」

……まずい、な。色々な意味で。

しかも何か注目を集めているぞ俺ら……って、あいつらないじゃねえか……逃げやがった。

「な、夏美……」

……くそ、俺はとんでもないことをしちまったな。

どうすれば……どうすれば……。

「……ひっく……お兄ちゃん……」

「あ、な、なんだ……？」

「……罰として、ボクの言うこと聞いてくれる……？」

「……あ、ああ。いいぞ、何でも……聞いてやる」

そりゃそうだ……。

何せ俺は一つ間違えればとんでもないことをしでかしたし……大事な女の子の部分も見……あーあー思い出すな俺。

今はそんなエロエロな想像してる場合じゃねえだろ？泣いているん

だぞ……今は反省しよう。

「……………クレープ」

「は？」

「クレープ……………今日の放課後……………」

「……………」

……………はは。

何だそんなことが。

「いいよ、そのくらい。いつものとこでいいか？」

「……………っ、うん！えへへ」

……………。

まったく、俺はアホだな。やっぱりこいつの笑顔は……………。

「……………」

「……………どうしたの？お兄ちゃん？」

……………よそう。

俺は過去に囚われすぎだ……………。それは、自分でも分かっている。

「いや、何でもない」

「……………？変なお兄ちゃん、それよりキャビア乗せね」

「……………おいおい、珍味は勘弁してくれよ。今月は金欠寸前なんだよ」  
それでも俺は……………こいつと、いや皆と今を生きる。

番外編その35 『男の娘はお好き?』

「おい、耕司い。男の娘って知っているか?」ジヨロロ……  
休み時間。

男子便所で小便を嗜んでいると、隣にいたツレシヨシ野郎のサルがそんなことを俺に聞いてきた。

「はあ?男の……ナニ?」チヨロロ……

「チン の話じゃあねえよ。男の娘だよ、娘」ジヨロロ……

「男の娘……?ますます、意味分からん。お前はよく唐突に変な話を吹っかけてくるよな」

男の娘だか何だか知らんが、どうせまたコイツのシモ話たる。

小便を済ませた俺は愚息をしまい、ズボンのチャックを上げ、手洗いに便所の出口に向かう。

「お、おいっ……!耕司い、お前は気にならねえのかよっ、男の娘!」ジヨロロ……

「別に。どーせ、またお前の下らないシモ系の話だろ?じゃあ先に教室に帰っとくぞ」

「こ、こらあ……!待ちやがれ、耕司!お前は、ダチの小便も待つてられないのかあ!?あれかつ、出すだけ出しといて、俺が気持ちよくなつたから後は勝手に気持ちよくなつてくださいビッチ、とか……そういうタイプの先走り人間かお前っ!」ジヨロロウ!

「何の話をしてんだよ。あと、お前小便長すぎ。どんだけ溜めに溜めてんだよ」

「し、しかたねえだろうがよう……俺は放尿プレイが好きなんだ(ノノノ)」「ジヨロロ……

「頬を染めるな。つたくしやあねえな。さっさと済ませろよ」

「……お前、案外優しいね(ノノノ)」「チヨロ……

「だから、頬を染めるな」

「つたく、仕方ねえな……まあ、ダチのツレシヨシンくらい待つてやる



か。

何だかんだ言っても、こいつとかメガネに付き合う俺の性格はこれからも変わらねえんだろうな。

『素直になれないツンデレ乙！』』』

……………。

おい、誰だ今ツンデレとか言った奴。表に出ろ、こらあ。

「で……………さっきの話に戻るけど。男の娘ってのはだなあ……………」

「まだその話続けるのかよ」

「簡単に言つとだなあ、『やだ奥さん！山田さんのお子さん、女の子だと思つたけれど実は……………男の子なんですつて！』『ええ……………？

おほつ、おほほほ……………やだわあ噂は噂でしょう？ねえ、安田さん？』

『何言つてるのよう、三木谷さん。こうやって、私たちがごみ捨て場の前で集つて、おしゃべりしているのはそういうトンデモガセネタを楽しむためでもあるでしょう？おほほほ』『おほほつ、言うわね長谷円さん。だったらこの間のお宅の旦那さんのワイシャツのキスマーク……………あれ、私の買った口紅と同じものなの』『あらあ、別にかまわないわよう。だって私、主人の女癖が悪いことは前から知ってるし……………おほほほ』『そうねえ』『そうだわ』『おほほほほほ』』』『んなわけねえだろこのババア！てめえか、あたいの主人をくだいたのはああん！？』『んだあ、やんのかくららあー！？』……………てな、感じた」

「……………」

「まあ、もちつと掻い摘んで簡単に言つと、女の子みたいな男の子……………女装してるの君？みたいな感じた」

「だったら最初からそう言え」

コイツ何か面倒くせえな。

ていうか、いつまでこんなくっさい便所で男と立ち話してなきゃならねえんだよ。

女とならともかく……………って、それはどんなシチュなんだよ、変態か俺は。



「ふっけつつっ！ふっけつつっ！おっむつつっ！耕司君は不潔イェ  
〜イ！」  
メガネの近くにいた夏美とアリスさんはしかめっ面で俺から距離を  
取る。さらには、宮子が応援団員みたいな格好で大声で言う。

「ちゃうわっ、ウン でもねえし！あと、何で俺は手を洗っていない  
い前提で話が進んでいるんだよ！やめろっ、宮子！クラス中に俺を  
不潔キャラとかあることないことぶちまけるなっ！」

「あらそう、別にあんたが不潔であろうと何であろうとどうでもい  
いけれど……ふあ、じゃあ私は寝るから邪魔したら細切れにするわ  
よ」

「お兄ちゃん、手はちゃんと洗うんだよ？汚いんだからねっ」

「ええ〜、そんなのツマンネー、耕司君はツマラン！君はヒツジヨ  
ーにツマラン人間だっ」

アリスは自分の机に戻り、夏美や宮子もどこかに散って行った。

な、なんちゅーやつらだ……。その主人公をス トロ野郎にする気  
飯にも俺は主人公なんだぞ……。かこいつら……。泣いちゃうぞ、こらあ……。泣い  
ちやうんだぞこらあ……。

「大丈夫です、耕司さん……僕は耕司さんのウン まみれの手……  
大好きですよノノノ」

「あの、ジヨウイチロウくん……？何で俺の手を触って……えっ、  
可愛らしく舌先を出して……えっえっえっ？ジヨウイチロウくん？  
な、何をしようとしているのかな君は……？」

脳内で泣きそうになっていると、俺の右手を両手で優しくつかみ、  
うつとりしているジヨウイチロウくんが傍にいた。こわっ……全然  
気配を感じなかったんですけど……！？こわっ……！

「耕司さん……この耕司さんのウン まみれのこの手……舐めても  
……いいですか？」

「いやっ、だめだよ！ウ コまみれでもねえし！ていうか……！！？」

何か君、ものすごく怖いんですよ！？ジヨウイチロウケン！？ねえ、ジヨウイチロウケン！？」

「さて、ウ コの話は置いておいて……男の娘を知ってるかい耕司 キュン？」

「お前はサルの回し者か何かか」

危うく、ジヨウイチロウケンのペロペロ攻撃から解放された俺にメガネは話を振ってきた。また、男のなんたらかよ……あれだろ？女の子みたいなのに実は……とか、そういうやつだろ？明らかに俺を二重の意味でホの字に連れ込むつもりだろ……何か今、うまいこといっちゃったが。

「そこで今日は何も知らない耕司キュンのために講師をお呼びしたよ」

「いいよもう。さっき、トイレでサルに聞いたし。大体、それを俺に教えて何になる？」

「ご紹介しよう！こちらが、その道百年の男の娘同愛会第十三支部 連合副総長……！」  
ガラッ

「ブヒッ W W W 腐女子扶助子でふ W W W よ W W W ろ W W W し W W W こ W W W ナマステ W W W」

「また おまえか」

教室のドアが突如開くとそこにいたのは不潔人間、扶助子だった。前と変わらず、いや前以上に不快なスメルを醸し出しているなこの怪物は……。

「耕司キュン、我々の業界用語をすっかり押さえておけば世界が変わると思うんだ」

「そいつが入ってきた時点で色んな意味で世界が変わったけれどな」  
「うえwwwうえwwwてれるwww扶助子てれますwwwうえwwwうえwww」

「ほめてねえよ」

もう、ちよつとホントきつい……。

同じ空間で息を吸いたくないほど臭い奴っていたんだね……。こんな奴、再登場させんなよな……。

「今日は村上殿にとっておきの『あいてむ』を持ってきたのでござるよwwwぶふつwwwギガワロスwww」

「何で終始笑ってんだよ」

扶助子は汚い鞆をこそこそ漁り何かを出そうとしている……。逃げるか、逃げるべきなのか俺。何だか嫌な予感がする。

「おふつwwwこれwwwこwwwれwwwれwwwこれでふよwwwぶぶつwww」

「何だこれ……うわっ、くさっ……」

扶助子は俺にキノコ型のオブジェを渡す。何だよこの何かを思い出すようなオブジェは……。

「男の娘www欲しいwww記念おなにいあいてむ『等身大タイムタイム』でふwww」

俺は口でオブジェを食い干切った。

番外編その36 『ルーズソックスはお好き?』

「なあ、耕司……だぼだぼのルーズソックするときめきメモリアルだよな?」

今日も今日とて小学生ヨロシク、机を引っ付けて昼飯を食っていると、サルが唐突に猿顔でそんなことを呟いた。

「またお前は変なことを……よく分からんが、お前の頭の中が年から年中ときめいていることは周知の事実だな」

「ふむ……僕はサル君の言いたいことはよく分かるね。オニヤノコの香しい足裏臭が染みついたルーズでしこしここと手淫するのは気持ち良いね」

メガネは少し鼻息を荒くして、まるでしたことあるかのように堂々と語る。

「食事中に食欲を著しく低下させるようなことを言うな……。思わず、手が出そうになったじゃねえか。」

……。別に、手が出そうになったって、性的な意味じゃないぞ。メガネを割っちゃうゾツ的な意味だ。

「だよな、メガネ。耕司、お前は童貞ちゃんのかせに男子のロマンって奴がまるでわかったらん。いい加減、童貞とはなんたるものか……童貞帝王学を学習しろよ」

「童貞帝王学ってなんだ。あと、お前らも学習しろ……恋は盲目的な意味で」

サルとメガネのエロストークはクラスメイトの女子の耳に例外なく聞こえていた。

その証拠に、ものつそい眼でこちらを睨んでいる女子がいるからな。だが、メガネとサルはその強烈な視線にまるで気付いていない。まさに、変態は盲目って奴だ。

確かに、その男子のロマンって奴がどういうものか分からんが、こ

いつらの言うソレを学習したら二度と後戻りできなくなるような気がするな。黄泉の世界に。

「でもな、あれだよな……何でルーソを履いている女ってのはあも山姥の化身みたいな連中ばっかなんだよ……俺のルーソを汚すなって感じになるんだよな。ちくしょう、全国津々浦々のビッチ及びどきゅん氏になさい、って感じだよな」

サルは只でさえ赤い頬をさらに真っ赤にさせて、ご飯粒を口から口ケットのよう発射させながらのたまう。

「俺のルーソって……お前、愛用しているのか？あと、コーフンし過ぎて気付いていないだろうが、お前、何気に多方面の連中を敵に回しているからな」

「うんうん、それは世の全ての男が疑問に思っていることだと思うねサル君」

メガネもサルの意見に同意の方向なのか、うんうんと頷く。

どうでもいいが、こいつらはどんどんどんどん周囲に敵を作っている。ちなみに今のところ第一候補は俺だ。

誰が何と言おうとも俺だ。

「そうだよな、じゃあさ、メガネはどんな娘にルーソを愛着して欲しいんだ？」

「そうだね、まず思いつくのがロリタンのようなとつとこハムスターだね。涙目でサイズの合わないルーソを履いている光景を思い浮かべると……ああ、たまらないね」

ロリタンのようなとつとこハムスター……………。

逆だろ、それ。

とつとこハムスターのようなロリタン……………。

いや、逆でも駄目なことに変わりはないが。

「ほほう、メガネはそう来るか、さすがだな」

「何がさすがなんだよ。前から思っていたが、お前ら頭おかしいんじゃないか？」

「ふふん、そうやって常識人を装っちゃって、白馬の耕司様ったら。

ちなみに俺は全裸の女に着てほしいね。裸ルース……さいごうじやねえか、おい」

「誰が白馬の耕司様だ。そんなに全裸の雌がいいのなら、雌のウミガメやライオンにルースソックスを履いてもらえよ」

「まあまあ、耕司キユン。ちなみに耕司キユンはどんな娘にルースを来てほしいかね？」

「……どんなつて、別に指定はしねえよ。履きたい奴が履けばいいと思うし」

「何でもござれ、と。よし、僕達三人の意見をまとめると『ロリタンのようなハムスターで全裸の女の何でもござれ』」

「ニホンゴになってないからな」

「要するにだ……俺達の総意としては全裸の幼女こごめにルースを履いて欲しいってことだろう？」

……うーん。

残念ながら合っているな、合っているんだけど、普通に色んな意味でアウトだなソレは。

……ん？あれ？もしかして、俺、体よく犯罪の片棒を担がされてる？何だこのトラップは。

「よし、そうと決まれば該当者にルースを履いてもらうとするか」  
サルは片手にルースを握り、クラスメイトに聞こえるような大声でそう言う。

……何でこいつはいちいち目立つようなことするんだ。そういっつレイが好きなのか？

友達やめようかな……前からこんなことずっと言っているような気がするが。



「ええ、何デイスかア？ コレ、なんデイスかあ？ W W」(ガングロ女子高生A)

「ちよつ W W W この部屋、何かイカ臭いんDisけど W W W ぐつ、ぐはあ W W W 氏ぬる W W」(ガングロ女子高生B)

「ぶふつ W W W 拙者の自宅の厠と同じにほい W W W うえ W W W うえ W W W」(扶助手)

放課後、メガネは三人の女子高生らしきケバイ輩を引き連れて、教室にやって来た。

…… 本当に連れてきやがった。いや、それ以前に色々とツツコミどころが満載なのだが。

「…… おーい、色メガネさんよ、お前のメガネは腐っているのか？ というか、全然幼女じゃねえじゃん。幼女じゃねえじゃん、幼女いねえじゃん！」

サルはメガネが連れてきた妖怪共に不満なのか、明らかに不服そうな顔して抗議する。

「いや、校内に該当する幼女がいなかったから仕方なく残っていた連中を連れてきたんだ」

全裸の幼女なんて校内にいるわけねえだろ。いたら色々と終わってるよ、この学校。

「だからってこんなクリーチャー共を連れてくるなよ……心臓発作で明日の朝日を拝めなくなったらどうしてくれるんだよ」

サルは椅子に踏ん反り返って、愚痴愚痴と文句を言う。

サル、お前の言いたいことは分かるが、鏡見ながら言え。つまりは、人の振り見て我が振り直せってことだ。

「ちよつ W W W なんデイスかこのエテ公？ チョーム力つくって感じなんデイケイド W W W」(ガングロA)

「ヤツチャオウヨ W W W このサルミンナデヤツチャオウヨ W W W ミツクミクニシテアゲユ W W W シテアゲユ W W W」(ガングロB)

「オフウ W W W 扶助手、チヨー憤慨 W W W ふ W W W ん W W W が W W W い W W W」(扶助手)

サルの愚痴が耳に入ったケダモノの三人は、サルのソレが気に入らなかつたのか、サルを取り囲む。

何か絡まれてるし……ていうか、何だこのシニールな光景……。

「う、うるせえ！ モブのくせに俺達、高貴な童貞三兄妹の崇高なる会話に口出しするんじゃないやねえよっ！！ ばあー！」

「ちよつ、包茎のくせに高貴とか崇高とか自分でイッチャウンデイスか？ W W W 意味不 W W W タラコ W W W」(ガンA)

「チュツチュしてやるよ W W W 濃厚なチュツチュ W W W チュツチュ W W W ぶふつ、ほらっ W W W 嬉しいデイスかホーケー猿君 W W W」(ガンB)

「チュツチュ W W W 腐女子である拙者としましては、是非に我が禿げ校長おやぢとホーケー殿とホモせつくるが見たいでゴワ……げふげふん W W W でゆふ W W W ファツ禁 W W W アウトアウトー W W W ゲツツー W W W」(扶助なんたら子)

サルが言い返すと、怪物の三人は何倍にも返してくる。

……えつと、何の話をしていたんだっけか。ていうか、そろそろお家に帰っていいかな？

何かこいつらの毒会話を聞いていると、軽く吐き気及び頭痛がしてきた……。

「うつつうるせえやい！！ 包茎は童貞の誇りなんだよっ！！ なめんなや包茎！！ おいつ、耕司にメガネっ、お前らも黙っていないで何とか言えよ！！ 友達のピンチだぞ！！」

サルはザク口のように真つ赤な顔して、必死に静観していた俺とメガネに助けを請う。

「えつ、何デイス化？ W W W お前らもこのエテ公の仲間？ W W W」  
「いえ、全然知らない方です、さようなら」

俺とメガネはそう言って、すぐさま、教室から飛び出していた。

『ウツウツキヤー』  
『うっ、うわーん、キュッ、きゅっぴー！』  
『ピッ、ピカチュ』  
『オウフｗｗｗｗおうふｗｗｗｗ』  
『ミツクミクニシテアゲユ ミツクミクニシテヤンヨ』  
『あばばばばばｗｗｗｗｗｗｗｗおふうｗｗｗｗ』  
教室を出た瞬間、何やら中から悲鳴やら嬌声が聞こえてきたが、この際無視することにした。

おまけ。

耕司「……夏美」

夏美「な、何かなお兄ちゃん……？」

耕司「……なんでお前、ルーソなんか履いてんの？ いつもはハイソックスだったろ」

夏美「なっ、何でお兄ちゃんは女の子のそんなところを観察しているのかな？ め、眼つきがい、いやらしいよ」

耕司「普遍的な日常に、少しの変化が出たらそれだけで目立つもんなんだよ。だいたい、お前はさっきからこれ見よがしにやけに足首をちらちら見せてきてるだろ……なんだ？ お前はそういうのが好きな娘だったのか？」

夏美「……／／／」もじもじ

耕司「……」

夏美「……」ちらっ

耕司「……」

夏美「…………… / / / 「もじもじ

耕司「……………」

夏美「……………」ちらっ

耕司「……………」

夏美「…………… / / / 「もじもじ

耕司「何で照れるんだよ……………何か言ってくれないと色んな意味でこれからの俺のお前を見る眼が変わるんだが」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5070c/>

---

ぎぶ！あんど！！ていく！！！！

2011年12月11日10時51分発行